公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（27）

東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT）建設に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

永吉天神段（ながよしてんじんだん）遺跡５
第２地点-３

（曽於郡大崎町）

縄文晩期・弥生・古墳時代編

第 ２ 分 冊

２０２０年２月

鹿 児 島 県 教 育 委 員 会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 セ ン タ ー

総目次

【第１分冊】
巻頭図版（カラー）
序文
報告書抄録
例言
目次
第１章　発掘調査の経過
第１節　調査に至るまでの経緯
第２節　確認調査
第３節　本調査
第４節　調査の経過
第５節　整理・報告書作成
第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理・地質的環境
第２節　歴史的環境
第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡
第３章　調査の方法と層序
第１節　調査の方法
第２節　層序
第４章　調査の成果
第１節　縄文時代晩期の調査
第２節　弥生時代の調査（～竪穴住居跡）
【第２分冊】
第２節　弥生時代の調査（土坑～）
第３節　古墳時代の調査
第４節　時期不明の掘立柱建物跡の調査
第５章　自然科学分析
第１節　自然科学分析の種類と目的
第２節　テフラ分析
第３節　放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測定）
第４節　種実同定
第５節　植物珪酸体分析
第６節　樹種同定
第７節　土器圧痕調査
第６章　総括
第１節　縄文時代晩期の調査
第２節　弥生時代の調査
第３節　古墳時代の調査
【第３分冊】
図版目次
図版

本文目次

【第２分冊】
第４章　調査の成果
第２節　弥生時代の調査（土坑～）… 1
第３節　古墳時代の調査……146
第４節　時期不明の掘立柱建物跡の調査……188
第５章　自然科学分析……200
第１節　自然科学分析の種類と目的‥200
第２節　テフラ分析……200
第３節　放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測定）……209
第４節　種実同定……215
第５節　植物珪酸体分析……216
第６節　樹種同定……220
第７節　土器圧痕調査……223
第６章　総括……230
第１節　縄文時代晩期の調査……230
第２節　弥生時代の調査……230
第３節　古墳時代の調査……234

挿図目次

【第１分冊】

第１図　遺跡位置図
第２図　周辺遺跡位置図……12
第３図　東九州自動車道関連遺跡位置図……19
第４図　基本土層図……23
第５図　土層断面図（１）……23
第６図　土層断面図（２）……24
第７図　土層断面図（３）……25
第８図　縄文時代晩期遺構配置図……26
第９図　縄文時代晩期西部遺構配置図……27
第10図　縄文時代晩期東部遺構配置図……28
第11図　縄文時代晩期竪穴住居跡（１）……29
第12図　縄文時代晩期竪穴住居跡（２）……30
第13図　縄文時代晩期竪穴住居跡（３）……31
第14図　縄文時代晩期竪穴住居跡（４）……32
第15図　縄文時代晩期竪穴住居跡（５）……33
第16図　縄文時代晩期土坑（１）……34
第17図　縄文時代晩期土坑（２）……35
第18図　縄文時代晩期～弥生時代前期
　　西部出土土器分布図……36
第19図　縄文時代晩期～弥生時代前期
　　東部出土土器分布図……37
第20図　縄文時代晩期土器（１）入佐式……38
第21図　縄文時代晩期土器（２）入佐式……39
第22図　縄文時代晩期土器（３）入佐式……40
第23図　縄文時代晩期土器（４）入佐式……41
第24図　縄文時代晩期土器（５）入佐式……42
第25図　縄文時代晩期土器（６）入佐式……43
第26図　縄文時代晩期土器（７）黒川式……44
第27図　縄文時代晩期土器（８）黒川式……45
第28図　縄文時代晩期土器（９）黒川式……46
第29図　縄文時代晩期土器（10）黒川式……47
第30図　縄文時代晩期土器（11）黒川式……48
第31図　縄文時代晩期土器（12）黒川式……49
第32図　縄文時代晩期土器（13）黒川式……50
第33図　縄文時代晩期土器（14）黒川式……51
第34図　突帯文土器（１）……57
第35図　突帯文土器（２）……58
第36図　突帯文土器（３）……59
第37図　突帯文土器（４）……60
第38図　突帯文土器（５）……61
第39図　突帯文土器（６）……62
第40図　突帯文土器（７）……63
第41図　突帯文土器（８）……64
第42図　突帯文土器（９）……65
第43図　突帯文土器（10）……66
第44図　突帯文土器（11）……67
第45図　突帯文土器（12）……68
第46図　突帯文土器（13）……69
第47図　突帯文土器（14）……70
第48図　突帯文土器（15）……71
第49図　突帯文土器（16）……72
第50図　突帯文土器（17）……73
第51図　突帯文土器（18）……74
第52図　突帯文土器（19）……75
第53図　突帯文土器（20）……76
第54図　突帯文土器（21）……77
第55図　突帯文土器（22）……78
第56図　突帯文土器（23）……79
第57図　突帯文土器（24）……80
第58図　突帯文土器（25）……81
第59図　突帯文土器（26）……82
第60図　突帯文土器（27）……83
第61図　突帯文土器（28）……84
第62図　弥生時代前期土器……85
第63図　弥生時代東部遺構配置図……94
第64図　弥生時代西部遺構配置図……95
第65図　弥生時代竪穴住居跡１号……96
第66図　弥生時代竪穴住居跡２号（１）……97
第67図　弥生時代竪穴住居跡２号（２）……98
第68図　弥生時代竪穴住居跡２号（３）……99
第69図　弥生時代竪穴住居跡２号（４）……100
第70図　弥生時代竪穴住居跡２号（５）……101
第71図　弥生時代竪穴住居跡２号（６）……102

第 72 図　弥生時代竪穴住居跡２号（７）……103
第 73 図　弥生時代竪穴住居跡３号（１）……104
第 74 図　弥生時代竪穴住居跡３号（２）……105
第 75 図　弥生時代竪穴住居跡３号（３）……106
第 76 図　弥生時代竪穴住居跡４号（１）……107
第 77 図　弥生時代竪穴住居跡４号（２）……108
第 78 図　弥生時代竪穴住居跡５号（１）……109
第 79 図　弥生時代竪穴住居跡５号（２）……110
第 80 図　弥生時代竪穴住居跡５号（３）……111
第 81 図　弥生時代竪穴住居跡６号（１）……112
第 82 図　弥生時代竪穴住居跡６号（２）……113
第 83 図　弥生時代竪穴住居跡６号（３）……114
第 84 図　弥生時代竪穴住居跡７号（１）……115
第 85 図　弥生時代竪穴住居跡７号（２）……116
第 86 図　弥生時代竪穴住居跡７号（３）……117
第 87 図　弥生時代竪穴住居跡８号（１）……118
第 88 図　弥生時代竪穴住居跡８号（２）……119
第 89 図　弥生時代竪穴住居跡８号（３）……120
第 90 図　弥生時代竪穴住居跡９号（１）……121
第 91 図　弥生時代竪穴住居跡９号（２）……122
第 92 図　弥生時代竪穴住居跡９号（３）……123
第 93 図　弥生時代竪穴住居跡 10 号（１）……124
第 94 図　弥生時代竪穴住居跡 10 号（２）……125
第 95 図　弥生時代竪穴住居跡 10 号（３）……126
第 96 図　弥生時代竪穴住居跡 10 号（４）……127
第 97 図　弥生時代竪穴住居跡 10 号（５）……128
第 98 図　弥生時代竪穴住居跡 11 号……129
第 99 図　弥生時代竪穴住居跡 12 号（１）……130
第 100 図　弥生時代竪穴住居跡 12 号（２）……131
第 101 図　弥生時代竪穴住居跡 12 号（３）……132
第 102 図　弥生時代竪穴住居跡 13 号（１）……134
第 103 図　弥生時代竪穴住居跡 13 号（２）……135
第 104 図　弥生時代竪穴住居跡 14 号（１）……136
第 105 図　弥生時代竪穴住居跡 14 号（２）……137
第 106 図　弥生時代竪穴住居跡 14 号（３）……138
第 107 図　弥生時代竪穴住居跡 15 号（１）……139
第 108 図　弥生時代竪穴住居跡 15 号（２）……140
第 109 図　弥生時代竪穴住居跡 16 号（１）……141
第 110 図　弥生時代竪穴住居跡 16 号（２）……142
第 111 図　弥生時代竪穴住居跡 16 号（３）……143
第 112 図　弥生時代竪穴住居跡 17 号（１）……144
第 113 図　弥生時代竪穴住居跡 17 号（２）……145
第 114 図　弥生時代竪穴住居跡 17 号（３）……146
第 115 図　弥生時代竪穴住居跡 18 号（１）……147
第 116 図　弥生時代竪穴住居跡 18 号（２）……148
第 117 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（１）……149
第 118 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（２）……150
第 119 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（３）……151
第 120 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（４）……152
第 121 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（５）……153
第 122 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（６）……154
第 123 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（７）……155
第 124 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（８）……157
第 125 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（９）……158
第 126 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（10）……159
第 127 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（11）……160
第 128 図　弥生時代竪穴住居跡 19 号（12）……162
第 129 図　弥生時代竪穴住居跡 20 号（１）……163
第 130 図　弥生時代竪穴住居跡 20 号（２）……164
第 131 図　弥生時代竪穴住居跡 21 号（１）……165
第 132 図　弥生時代竪穴住居跡 21 号（２）……166
第 133 図　弥生時代竪穴住居跡 21 号（３）……167
第 134 図　弥生時代竪穴住居跡 21 号（４）……168
第 135 図　弥生時代竪穴住居跡 21 号（５）……169
第 136 図　弥生時代竪穴住居跡 22 号……170
第 137 図　弥生時代竪穴住居跡 23 号……171
第 138 図　弥生時代竪穴住居跡 24 号……172
第 139 図　弥生時代竪穴住居跡 25 号（１）……173
第 140 図　弥生時代竪穴住居跡 25 号（２）……174
第 141 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（１）……176
第 142 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（２）……177
第 143 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（３）……178
第 144 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（４）……179
第 145 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（５）……181
第 146 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（６）……182
第 147 図　弥生時代竪穴住居跡 26 号（７）……184
第 148 図　弥生時代竪穴住居跡 27 号……185
第 149 図　弥生時代竪穴住居跡 28 号（１）……186

第 150 図　弥生時代竪穴住居跡 28 号（２）……187
第 151 図　弥生時代竪穴住居跡 29 号（１）……188
第 152 図　弥生時代竪穴住居跡 29 号（２）……189
第 153 図　弥生時代竪穴住居跡 30 号（１）……190
第 154 図　弥生時代竪穴住居跡 30 号（２）……192
第 155 図　弥生時代竪穴住居跡 30 号（３）……193
第 156 図　弥生時代竪穴住居跡 31 号（１）……194
第 157 図　弥生時代竪穴住居跡 31 号（２）……195
第 158 図　弥生時代竪穴住居跡 31 号（３）……196
第 159 図　弥生時代竪穴住居跡 32 号……197
第 160 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（１）……199
第 161 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（２）……200
第 162 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（３）……201
第 163 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（４）……202
第 164 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（５）……203
第 165 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（６）……204
第 166 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（７）……205
第 167 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（８）……207
第 168 図　弥生時代竪穴住居跡 33 号（９）……209
第 169 図　弥生時代竪穴住居跡 34 号……210
第 170 図　弥生時代竪穴住居跡 35 号……211
第 171 図　弥生時代竪穴住居跡 36 号……212
第 172 図　弥生時代竪穴住居跡 37 号……213
第 173 図　弥生時代竪穴住居跡 38 号（１）……215
第 174 図　弥生時代竪穴住居跡 38 号（２）……216
第 175 図　弥生時代竪穴住居跡 39 号（１）……217
第 176 図　弥生時代竪穴住居跡 39 号（２）……218
第 177 図　弥生時代竪穴住居跡 40 号（１）……219
第 178 図　弥生時代竪穴住居跡 40 号（２）……220
第 179 図　弥生時代竪穴住居跡 40 号（３）……221
第 180 図　弥生時代竪穴住居跡 41 号（１）……223
第 181 図　弥生時代竪穴住居跡 41 号（２）……224
第 182 図　弥生時代竪穴住居跡 41 号（３）……225
第 183 図　弥生時代竪穴住居跡 42 号（１）……226
第 184 図　弥生時代竪穴住居跡 42 号（２）……227
第 185 図　弥生時代竪穴住居跡 43 号（１）……228
第 186 図　弥生時代竪穴住居跡 43 号（２）……229
第 187 図　弥生時代竪穴住居跡 43 号（３）……230
第 188 図　弥生時代竪穴住居跡 43 号（４）……231
第 189 図　弥生時代竪穴住居跡 44 号（１）……232
第 190 図　弥生時代竪穴住居跡 44 号（２）……233
第 191 図　弥生時代竪穴住居跡 45 号（１）……235
第 192 図　弥生時代竪穴住居跡 45 号（２）……236
第 193 図　弥生時代竪穴住居跡 45 号（３）……237
第 194 図　弥生時代竪穴住居跡 45 号（４）……238

【第２分冊】

第 195 図　弥生時代土坑１号……１
第 196 図　弥生時代土坑２～４号……２
第 197 図　弥生時代土坑５～８号……３
第 198 図　弥生時代土坑９～13 号……４
第 199 図　弥生時代土坑 14～19 号……５
第 200 図　弥生時代土坑 20～24 号……６
第 201 図　弥生時代土坑 25～29 号……７
第 202 図　弥生時代土坑 30～34 号……８
第 203 図　弥生時代土坑 35～40 号……９
第 204 図　弥生時代土坑 41・42 号……10
第 205 図　弥生時代土坑 43～47 号……11
第 206 図　弥生時代土坑 48～50 号・溝状遺構……12
第 207 図　弥生時代周溝墓１号……13
第 208 図　弥生時代周溝墓２号……14
第 209 図　弥生時代周溝墓３号（１）……15
第 210 図　弥生時代周溝墓３号（２）……16
第 211 図　弥生時代周溝墓３号（３）……18
第 212 図　弥生時代周溝墓４号（１）……19
第 213 図　弥生時代周溝墓４号（２）……20
第 214 図　弥生時代周溝墓４号（３）……22
第 215 図　弥生時代周溝墓５号……23
第 216 図　Ｆ-27 区土器集中図……24
第 217 図　Ｆ-27 区周辺遺物出土分布図……25
第 218 図　Ｆ-27 区周辺出土土器（１）……26
第 219 図　Ｆ-27 区周辺出土土器（２）……28
第 220 図　Ｆ-27 区周辺出土土器（３）……29
第 221 図　Ｆ-27 区周辺出土土器（４）……30
第 222 図　Ｆ-27 区周辺出土土器（５）……31
第 223 図　弥生時代土坑墓１号……32
第 224 図　弥生時代土坑墓２・３号……33
第 225 図　弥生時代土坑墓４～６号……35

第 226 図　弥生時代土坑墓７・８号……36
第 227 図　弥生時代土坑墓９号（１）……37
第 228 図　弥生時代土坑墓９号（２）……38
第 229 図　弥生時代土坑墓 10～13 号……39
第 230 図　弥生時代土坑墓 14・15 号……40
第 231 図　弥生時代土坑墓 16～18 号……41
第 232 図　弥生時代土坑墓 19 号（１）……43
第 233 図　弥生時代土坑墓 19 号（２）……44
第 234 図　弥生時代土坑墓 20 号（１）……45
第 235 図　弥生時代土坑墓 20 号（２）……46
第 236 図　弥生時代中期　西部出土土器（１）……47
第 237 図　弥生時代中期　西部出土土器分布図……48
第 238 図　弥生時代中期　西部出土土器（２）……49
第 239 図　弥生時代中期　西部出土土器（３）……50
第 240 図　弥生時代中期　西部出土土器（４）……51
第 241 図　弥生時代中期　西部出土土器（５）……52
第 242 図　弥生時代中期　西部出土土器（６）……53
第 243 図　弥生時代中期　西部出土土器（７）……54
第 244 図　弥生時代中期　西部出土土器（８）……55
第 245 図　弥生時代中期　西部出土土器（９）……56
第 246 図　弥生時代中期　西部出土土器（10）……57
第 247 図　弥生時代中期　西部出土土器（11）……58
第 248 図　弥生時代中期　西部出土土器（12）……59
第 249 図　弥生時代中期　西部出土土器（13）……60
第 250 図　弥生時代中期　西部出土土器（14）……61
第 251 図　弥生時代中期　西部出土土器（15）……62
第 252 図　弥生時代中期　西部出土土器（16）……63
第 253 図　弥生時代中期　東部出土土器（１）……64
第 254 図　弥生時代中期　東部出土土器分布図……65
第 255 図　弥生時代中期　東部出土土器（２）……66
第 256 図　弥生時代中期　東部出土土器（３）……67
第 257 図　弥生時代中期　東部出土土器（４）……68
第 258 図　弥生時代中期　東部出土土器（５）……69
第 259 図　弥生時代中期　東部出土土器（６）……70
第 260 図　弥生時代中期　東部出土土器（７）……71
第 261 図　弥生時代中期　東部出土土器（８）……72
第 262 図　弥生時代中期　東部出土土器（９）……73
第 263 図　弥生時代中期　東部出土土器（10）……74
第 264 図　弥生時代中期　東部出土土器（11）……75
第 265 図　弥生時代中期　東部出土土器（12）……76
第 266 図　弥生時代中期　東部出土土器（13）……77
第 267 図　弥生時代中期　東部出土土器（14）……78
第 268 図　西部出土石器分布図……80
第 269 図　西部出土石器（１）……81
第 270 図　西部出土石器（２）……83
第 271 図　西部出土石器（３）……84
第 272 図　西部出土石器（４）……85
第 273 図　西部出土石器（５）……86
第 274 図　西部出土石器（６）……88
第 275 図　西部出土石器（７）……89
第 276 図　西部出土石器（８）……91
第 277 図　西部出土石器（９）……92
第 278 図　西部出土石器（10）……93
第 279 図　西部出土石器（11）……94
第 280 図　西部出土石器（12）……95
第 281 図　西部出土石器（13）……96
第 282 図　西部出土石器（14）……97
第 283 図　西部出土石器（15）……98
第 284 図　西部出土石器（16）……99
第 285 図　西部出土石器（17）……101
第 286 図　西部出土石器（18）……102
第 287 図　西部出土石器（19）……103
第 288 図　西部出土石器（20）……104
第 289 図　西部出土石器（21）……105
第 290 図　東部出土石器分布図……107
第 291 図　東部出土石器（１）……108
第 292 図　東部出土石器（２）……109
第 293 図　東部出土石器（３）……111
第 294 図　東部出土石器（４）……112
第 295 図　東部出土石器（５）……113
第 296 図　東部出土石器（６）……114
第 297 図　東部出土石器（７）……116
第 298 図　東部出土石器（８）……117
第 299 図　東部出土石器（９）……118
第 300 図　東部出土石器（10）……119
第 301 図　東部出土石器（11）……120
第 302 図　古墳時代遺構配置図……146
第 303 図　古墳時代竪穴住居跡１号（１）……147

第 304 図　古墳時代竪穴住居跡１号（２）……148
第 305 図　古墳時代竪穴住居跡１号（３）……149
第 306 図　古墳時代竪穴住居跡１号（４）……150
第 307 図　古墳時代竪穴住居跡２号（１）……151
第 308 図　古墳時代竪穴住居跡２号（２）……152
第 309 図　古墳時代竪穴住居跡３号（１）……153
第 310 図　古墳時代竪穴住居跡３号（２）……154
第 311 図　古墳時代竪穴住居跡３号（３）……156
第 312 図　古墳時代竪穴住居跡３号（４）……157
第 313 図　古墳時代竪穴住居跡４号（１）……158
第 314 図　古墳時代竪穴住居跡４号（２）……159
第 315 図　古墳時代竪穴住居跡４号（３）……160
第 316 図　古墳時代竪穴住居跡４号（４）……161
第 317 図　古墳時代竪穴住居跡５号（１）……163
第 318 図　古墳時代竪穴住居跡５号（２）……164
第 319 図　古墳時代竪穴住居跡５号（３）……165
第 320 図　古墳時代竪穴住居跡５号（４）……166
第 321 図　古墳時代竪穴住居跡５号（５）……167
第 322 図　古墳時代土坑１号……168
第 323 図　古墳時代土坑２～４号……169
第 324 図　古墳時代土坑５・６号……170
第 325 図　古墳時代土坑７・８号……171
第 326 図　古墳時代土坑９・10 号……172
第 327 図　古墳時代西部出土土器分布図……173
第 328 図　古墳時代西部出土土器（１）……174
第 329 図　古墳時代西部出土土器（２）……175
第 330 図　古墳時代西部出土土器（３）……176
第 331 図　古墳時代西部出土土器（４）……177
第 332 図　古墳時代東部出土土器（１）……178
第 333 図　古墳時代東部出土土器分布図……179
第 334 図　古墳時代東部出土土器（２）……180
第 335 図　古墳時代東部出土土器（３）……181
第 336 図　古墳時代東部出土土器（４）……182
第 337 図　古墳時代須恵器……183
第 338 図　掘立柱建物跡配置図……188
第 339 図　掘立柱建物跡１号……189
第 340 図　掘立柱建物跡２号……190
第 341 図　掘立柱建物跡３号……191
第 342 図　掘立柱建物跡４号……192
第 343 図　掘立柱建物跡５号……193
第 344 図　掘立柱建物跡６号……194
第 345 図　掘立柱建物跡７号……195
第 346 図　掘立柱建物跡８号……196
第 347 図　掘立柱建物跡９号……197
第 348 図　掘立柱建物跡 10 号……198
第 349 図　掘立柱建物跡 11 号……199
第 350 図　重鉱物組成および火山ガラス比……201
第 351 図　火山ガラスの屈折率……203
第 352 図　斜方輝石の屈折率……203
第 353 図　重鉱物……203
第 354 図　軽鉱物……203
第 355 図　重鉱物組成および火山ガラス比……208
第 356 図　火山ガラス屈折率……208
第 357 図　斜方輝石の屈折率……208
第 358 図　重鉱物……209
第 359 図　軽鉱物……209
第 360 図　暦年較正年代……210
第 361 図　マルチプロット図……212
第 362 図　暦年較正年代……213
第 363 図　暦年較正結果……215
第 364 図　種実実体……216
第 365 図　Ｆ-44 地点における植物珪酸体分析結果……220
第 366 図　SI-22・26・27・28 における植物珪酸体分析結果……220
第 367 図　永吉天神段遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）……220
第 368 図　石包丁（拡大写真）……220
第 369 図　永吉天神段遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真……222
第 370 図　永吉天神段遺跡の土器圧痕（１）～（６）……226
第 371 図　永吉天神段遺跡の土器圧痕（７）～（15）……227
第 372 図　永吉天神段遺跡の土器圧痕（16）～（24）……228
第 373 図　永吉天神段遺跡の土器圧痕（25）～（29）……229

表目次

【第１分冊】

第１表　周辺遺跡一覧表……13
第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡……15
第３表　縄文晩期遺構内出土土器観察表……52
第４表　縄文晩期遺構出土石器観察表……52
第５表　入佐式土器観察表……52
第６表　黒川式土器観察表……53
第７表　突帯文土器観察表……86
第８表　弥生時代前期土器観察表……92
第９表　縄文時代晩期遺構番号新旧比較表……93
第 10 表　弥生時代遺構番号新旧比較表……93
第 11 表　古墳時代遺構番号新旧比較表……93
第 12 表　掘立柱建物跡番号新旧比較表……93

【第２分冊】

第 13 表　弥生時代住居跡・土坑・周溝墓出土土器観察表……121
第 14 表　弥生時代住居跡・土坑・周溝墓出土石器観察表……131
第 15 表　Ｆ-27 区周辺出土土器観察表……133
第 16 表　弥生時代土坑墓出土土器観察表……134
第 17 表　弥生時代土坑墓出土石器観察表……134
第 18 表　弥生時代土坑墓出土鉄製品観察表……135
第 19 表　弥生時代中期西部出土土器観察表……135
第 20 表　弥生時代中期東部出土土器観察表……138
第 21 表　縄文時代晩期～弥生時代西部石器観察表……141
第 22 表　縄文時代晩期～弥生時代東部出土石器観察表……144
第 23 表　古墳時代住居跡・土坑出土土器観察表……184
第 24 表　古墳時代住居跡・土坑出土石器観察表……185
第 25 表　古墳時代西部土器観察表……186
第 26 表　古墳時代東部土器観察表……186
第 27 表　古墳時代須恵器観察表……187
第 28 表　テフラ組成分析結果……201
第 29 表　重鉱物・火山ガラス比分析結果……208
第 30 表　放射性炭素年代測定結果（σ^{13}C 補正値）……210
第 31 表　放射性炭素年代測定結果（σ^{13}C 未補正値，暦年較正用^{14}C 年代，較正年代）……210
第 32 表　測定試料および処理……212
第 33 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果……212
第 34 表　放射性炭素年代測定・暦年較正結果……215
第 35 表　種実同定結果……216
第 36 表　永吉天神段遺跡における植物珪酸体分析結果……219
第 37 表　永吉天神段遺跡出土炭化材の樹種同定結果……221
第 38 表　土器圧痕同定結果……226
第 39 表　土器圧痕調査結果……229

②土坑

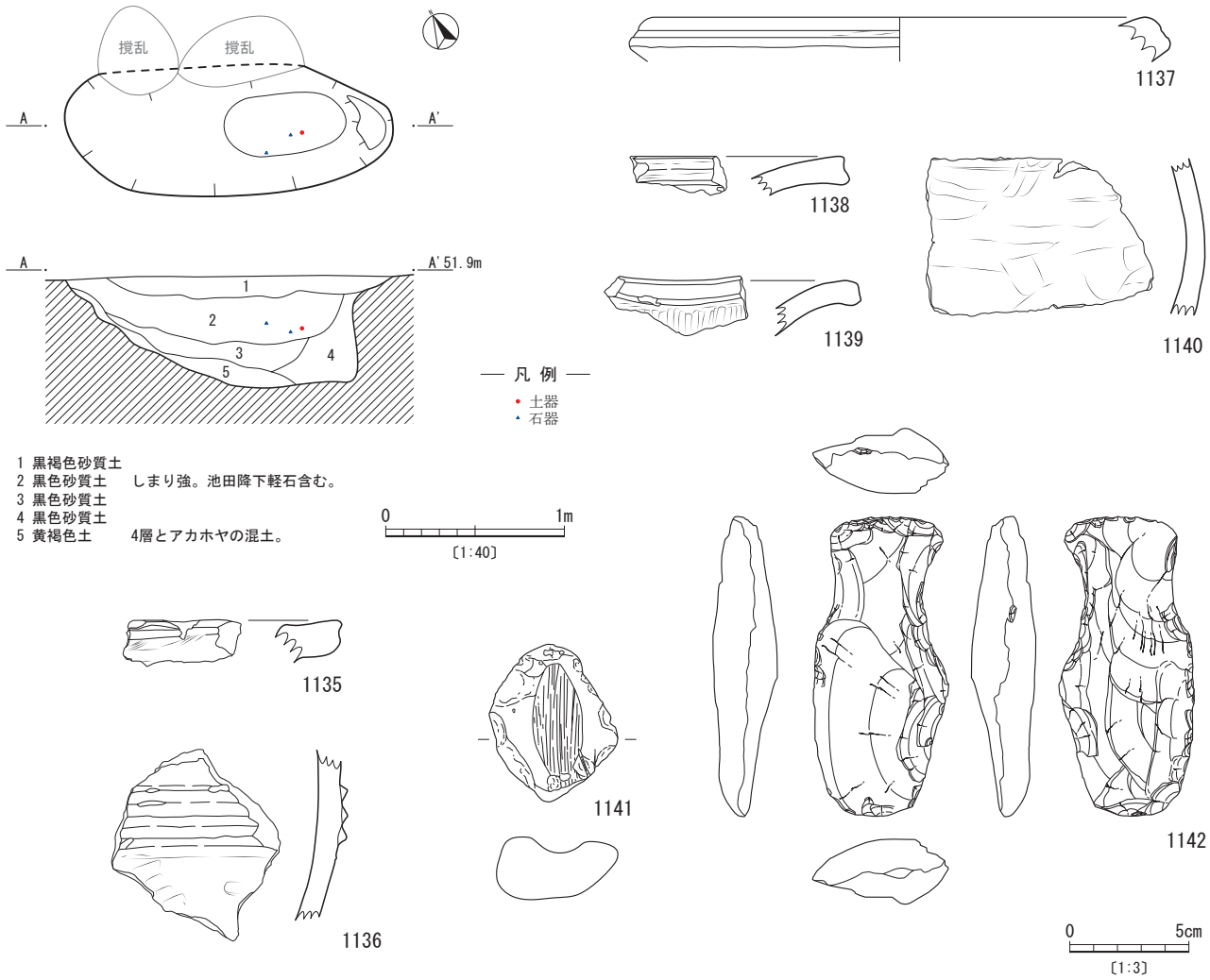
調査区内で多様な土坑が 50 基検出された。東側丘陵では，北側の斜面に１基，南西下がりの緩斜面に５基，南側の斜面に１基のあわせて７基がある。中央丘陵では，稜線付近に２基，南東側の斜面に５基ある。谷部では，北から南にかけて４基，西側斜面の削平部に１基のあわせて５基がある。西側丘陵では，頂部付近の周溝墓４号から南西にかけて緩斜面に広がる土坑墓群の中に９基，北側の緩斜面に竪穴住居跡 43・44・45 号にはさまれる形で 23 基のあわせて 32 基ある。

形状・規模など様々であるが，特に平面形が楕円形を呈するものには，長軸方向の一端の床面にピット状の狭い掘り込みを伴う特徴的な構造をもつ例が多かった。

帰属時期については，埋土中を含めて出土遺物が少なく判断に苦慮したが，その少ない出土例では弥生時代中期以前の遺物しかなかったことから，遺物が出土した土坑と特徴が類似する土坑を弥生時代中期頃とした。

土坑１号（第 195 図 1135～1142）

Ｆ－ 49 区のⅢ層で検出された。Ｎ 64° Ｗに軸をもち，平面形は楕円形を呈するが，一部撹乱を受けている。長径 186cm，短径は想定で 75cmほど，検出面からの深さは 64cmである。底面は東側へ偏って掘られ，東壁には１段テラスがある。埋土は５層に分かれる。最下層は埋土４とアカホヤの混ざった黄褐色土だが，他は黒色砂質土を主とする。遺物は，埋土２・３から土器片が１点ずつ出土し，他は埋土１で出土している。土器は小破片のみで，甕（1135・1136）は口縁部上面が凹むものと肩部に３条の三角突帯のあるものとがある。壺（1137～1140）は口縁端が幅広く，口唇部に浅い凹線のあるものと，外反度の強い薄い口縁のものとがある。胴部は丸みを帯びている。1141 は小さい軽石製品で，表面中央に縦方向の溝状の凹みがある。1142 は基部近くに抉りのあるホルンフェルス製の打製石斧である。刃部は摩耗している。



第 195 図　弥生時代土坑１号

土坑２号（第 196 図 1143・1144）

Ｆ－ 50 区のⅢ層で検出された。Ｎ 82° Ｅに軸をもち，平面形は不整楕円形を呈する。長径 113cm，短径 88cm，検出面からの深さは 21cmである。埋土は３層に分かれ，埋土２から土器片が出土している。1143 は口縁部のやや下に無刻目突帯のある，波状口縁の突帯文土器の甕形土器である。1144 は口縁端部に台形状の貼付突帯のある蓋形土器である。端部が広く欠損し，外にススが付着している。

土坑３号（第 196 図）

Ｆ－ 50 区のⅢ層で検出された。Ｎ 86° Ｗに軸をもち，平面形は不定形だが，略円形を呈する。径は約 92cm，検出面からの深さは 26cmである。遺物は，埋土１・２から弥生土器小破片が２点，埋土１から石器が１点出土しているが，流れ込みと考えられる。

土坑４号（第 196 図）

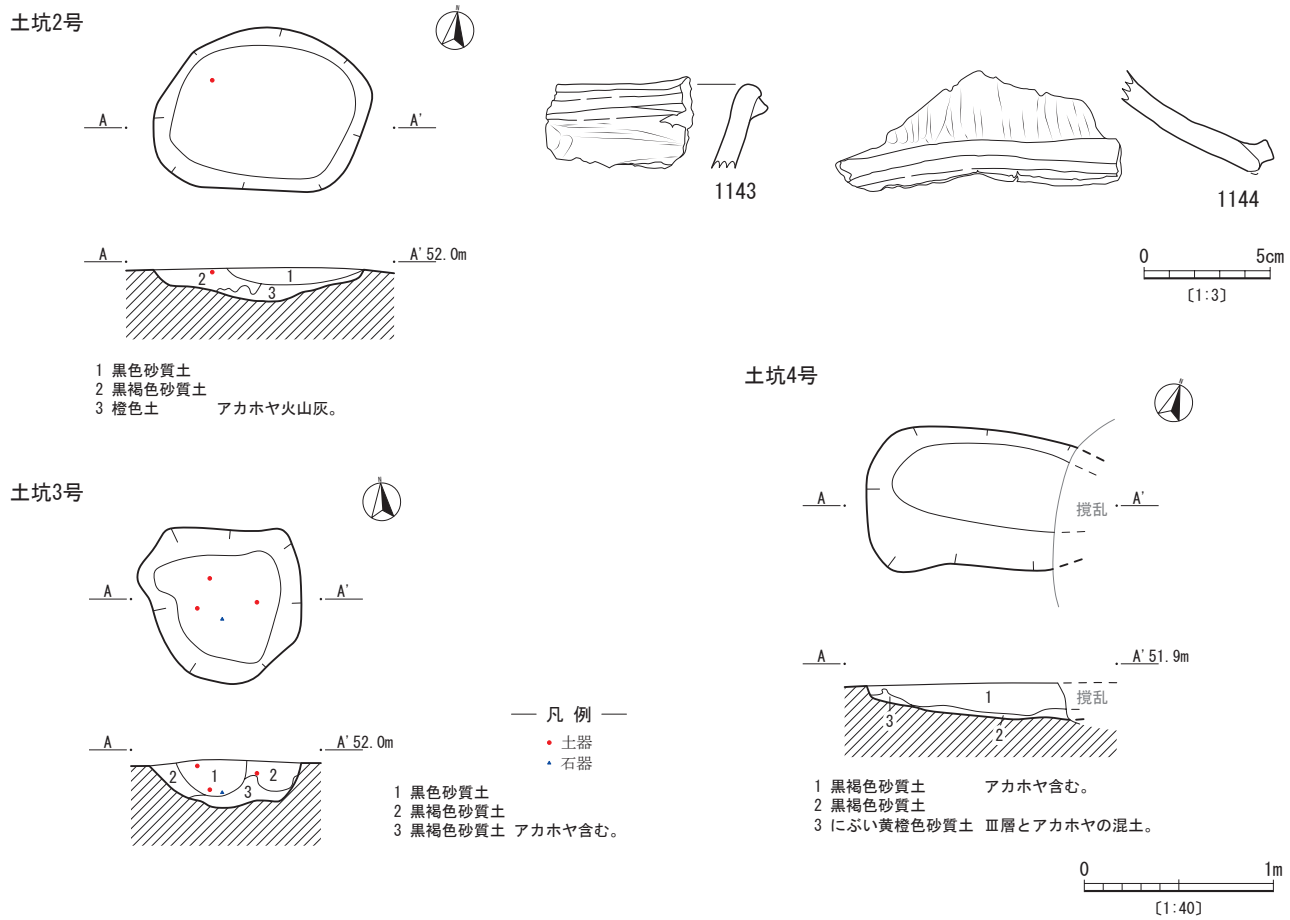
Ｅ・Ｆ－ 49 区のⅢ層で検出された。Ｎ 70° Ｅに軸をもち，平面形は隅丸長方形を呈すると推測されるが，東側の撹乱により判断できない。長軸は残っている部分で 103cm，短軸 73cm，検出面からの深さは 19cmである。埋土は３層に分かれるが，主として黒褐色砂質土である。

土坑５号（第 197 図 1145・1146）

Ｅ－ 49 区のⅢ層で検出された。Ｎ２° Ｅに軸をもち，平面形はおおよそ隅丸方形を呈するが，北側はやや丸みを帯びている。長軸 178cm，短軸 90cm，検出面からの深さは 40cmである。底面は凸凹しながら最深部の南側に至る。埋土は４層に分かれ，自然堆積である。土坑内からは多くの弥生土器や石片が出土したが，ほとんど小片であり，流れ込みである。図化できたのはいずれも甕形土器である。1145 は口縁直径が 24.5cm，口縁端部は水平で，内側にも張り出している。口唇部は内外とも丸みを帯びている。器面調整は内外ともハケナデで，内面は横方向，外面は斜方向である。外面はのちにヘラでもナデている。1146 も内外に水平に張り出す口縁部だが，口唇部外端には凹線が巡る。

土坑６号（第 197 図）

Ｄ－ 48・49 区のⅢ層で検出された。Ｎ 81° Ｅに軸をもち，平面形はおおよそ隅丸長方形を呈する。長軸 164cm，短軸 104cm，検出面からの深さは 32cmである。埋土は２層に分かれ，上層の埋土から土器の小片が２点出土しているが，流れ込みと考えられる。



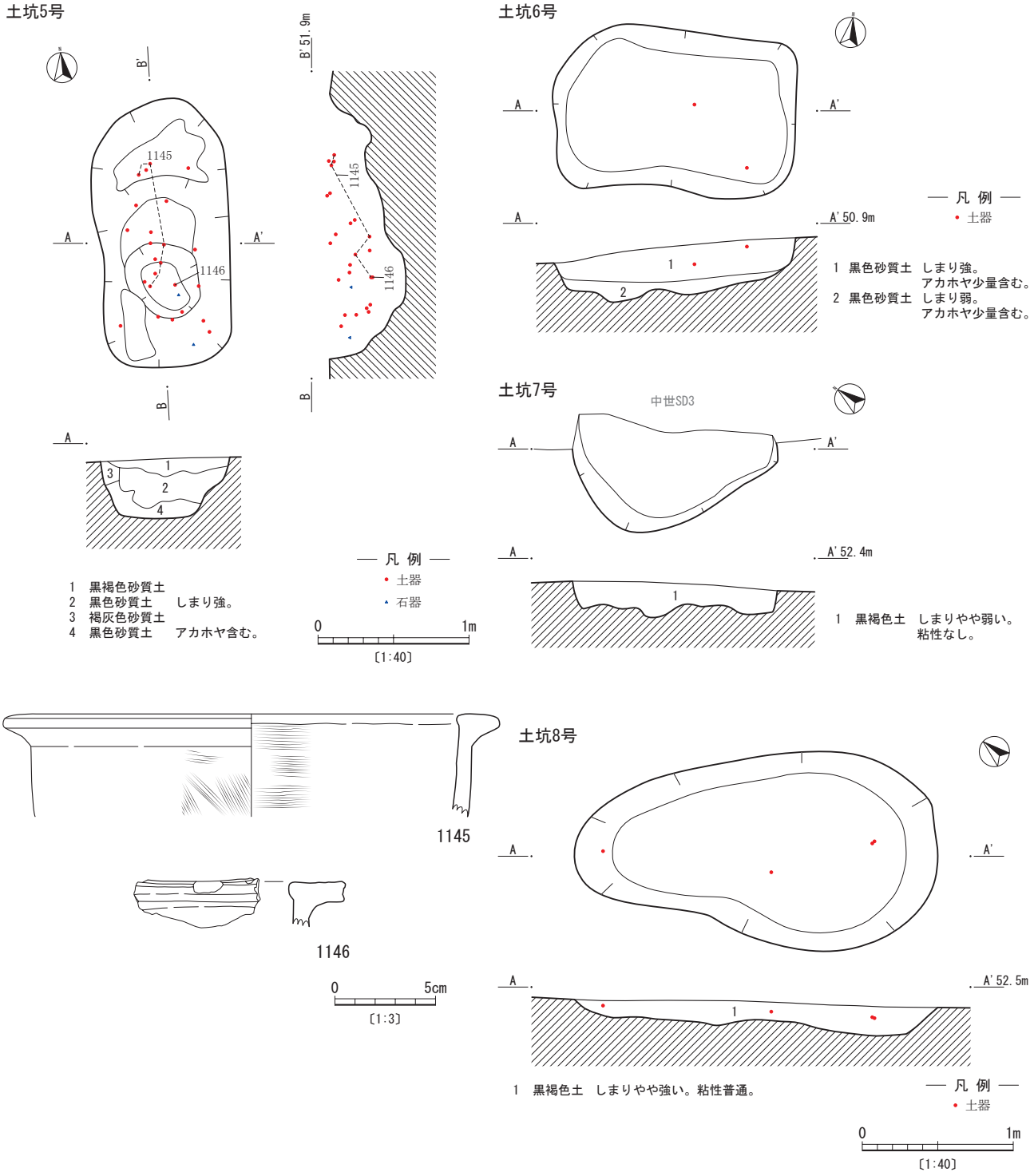
第 196 図　弥生時代土坑２～４号

土坑７号（第 197 図）

K － 37 区のⅢｂ層で検出された。N 38° Wに軸をもち，平面形は楕円形と推測されるが，中世の溝状遺構に切られているため確証はない。長径 136cm，残存短軸約 70cm，検出面からの深さは 23cmである。底面には凹凸があるが傾斜はしていない。埋土は単一層である。遺物は出土しなかった。

土坑８号（第 197 図）

J － 38 区のⅢｂ層で検出された。N 41° Wに軸をもち，平面形は略楕円形である。長径 240cm，短径90～135cm，検出面からの深さは 15～20cmである。底面は緩やかに波打ち，埋土は黒褐色土の単一層である。埋土中から胎土に雲母を含む弥生土器と考えられる小片が４点出土している。



第 197 図　弥生時代土坑５～８号

土坑９号（第 198 図）

Ｊ－ 38 区のⅢｂ層で検出された。平面形は，おおよそ円形を呈する。径は 112 × 105cm，検出面からの深さは 10cmである。土坑中央部の床面から安山岩製の自然礫が出土しているが，流れ込みと判断される。

土坑 10 号（第 198 図）

Ｊ－ 38 区のⅢｂ層で検出された。平面形は円形を呈する。径は約 110cm，検出面からの深さは 41cmである。埋土は３層に分けられ，出土遺物はない。

土坑 11 号（第 198 図 1147・1148）

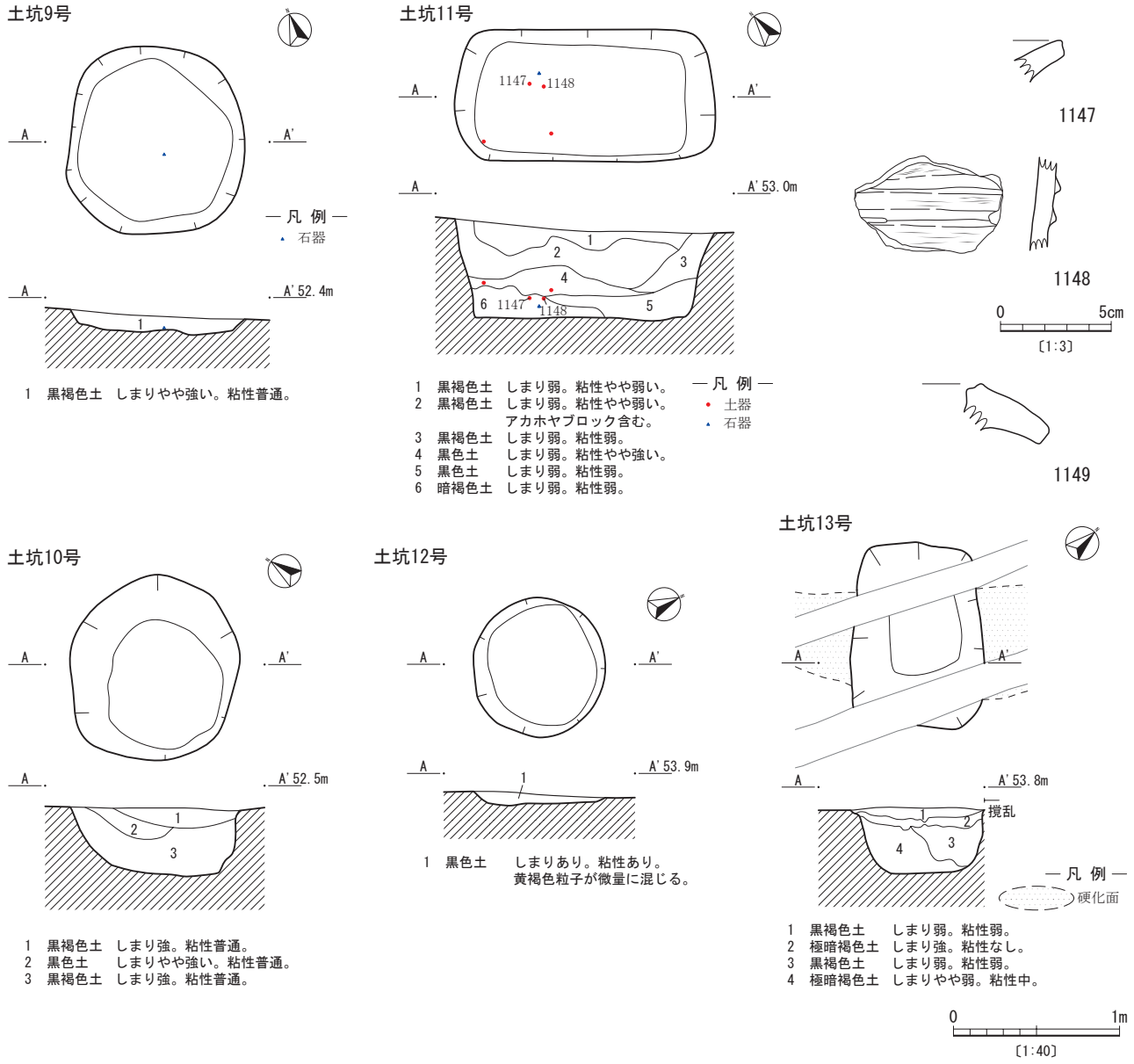
Ｋ－ 37 区のⅢｂ層で検出された。Ｎ 52° Ｗに軸をもち，平面形は隅丸長方形を呈する。長軸 156cm，短軸 79cm，検出面からの深さは 54cmである。底面はほぼ平坦で断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色を主体とし，東西交互に埋められ，６層に分かれる。遺物は，弥生土器と自然礫１点が出土している。土器は金雲母を含み，口縁部が「く」の字に屈曲し２条の三角突帯をもつことから，山ノ口Ⅱ式土器と思われる。

土坑 12 号（第 198 図）

Ｉ－ 33 区のⅣ層で検出された。平面形は円形を呈する。径は約 80cmで，検出面からの深さは７cmである。埋土は黒色土の単層で，遺物は出土していない。

土坑 13 号（第 198 図 149）

Ｌ－ 32 区のⅣａ層で検出された。Ｎ 45° Ｗに軸をもち，一部ゴボウ耕作による撹乱を受けているが，平面形は長さ 110cm，幅 80cmの隅丸長方形と想定される。底面はほぼ平坦で壁面は弯曲しつつほぼ直立する。検出面からの深さは 32cmである。１層は硬化面で，埋土は４層に分かれる。1149 は口縁部が長く延び外反する壺形土器で，内面に三角突帯が貼り付けられている。



第 198 図　弥生時代土坑９～13 号

土坑 14 号（第 199 図）

Ｊ－ 30 区のⅢｂ層で検出された。平面形はおおよそ円形を呈する。長径 65cm，短径 58cm，検出面からの深さは 23cmである。断面「Ｕ」字形に掘り込まれ，類似する 15～17 号に比べて立ち上がりがしっかりしている。遺物は出土していない。

土坑 15 号（第 199 図）

Ｊ－ 30 区のⅢｂ層で検出された。Ｎ 44° Ｅに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 70cm，短径 55cm，検出面からの深さは 15cmである。遺物は出土していない。

土坑 16 号（第 199 図）

Ｈ－ 30 区のⅢｂ層で検出された。平面形は楕円形を呈する。長径 80cm，短径 75cm，検出面からの深さは 28cmである。逆台形の断面を呈し，埋土は黒色土と黒褐色土に分かれる。遺物は出土していない。

土坑 17 号（第 199 図）

Ｊ－ 29 区のⅢｂ層で検出された。平面形は円形を呈する。径は 69 × 65cm，検出面からの深さは 11cmである。遺物は出土していない。

土坑 18 号（第 199 図）

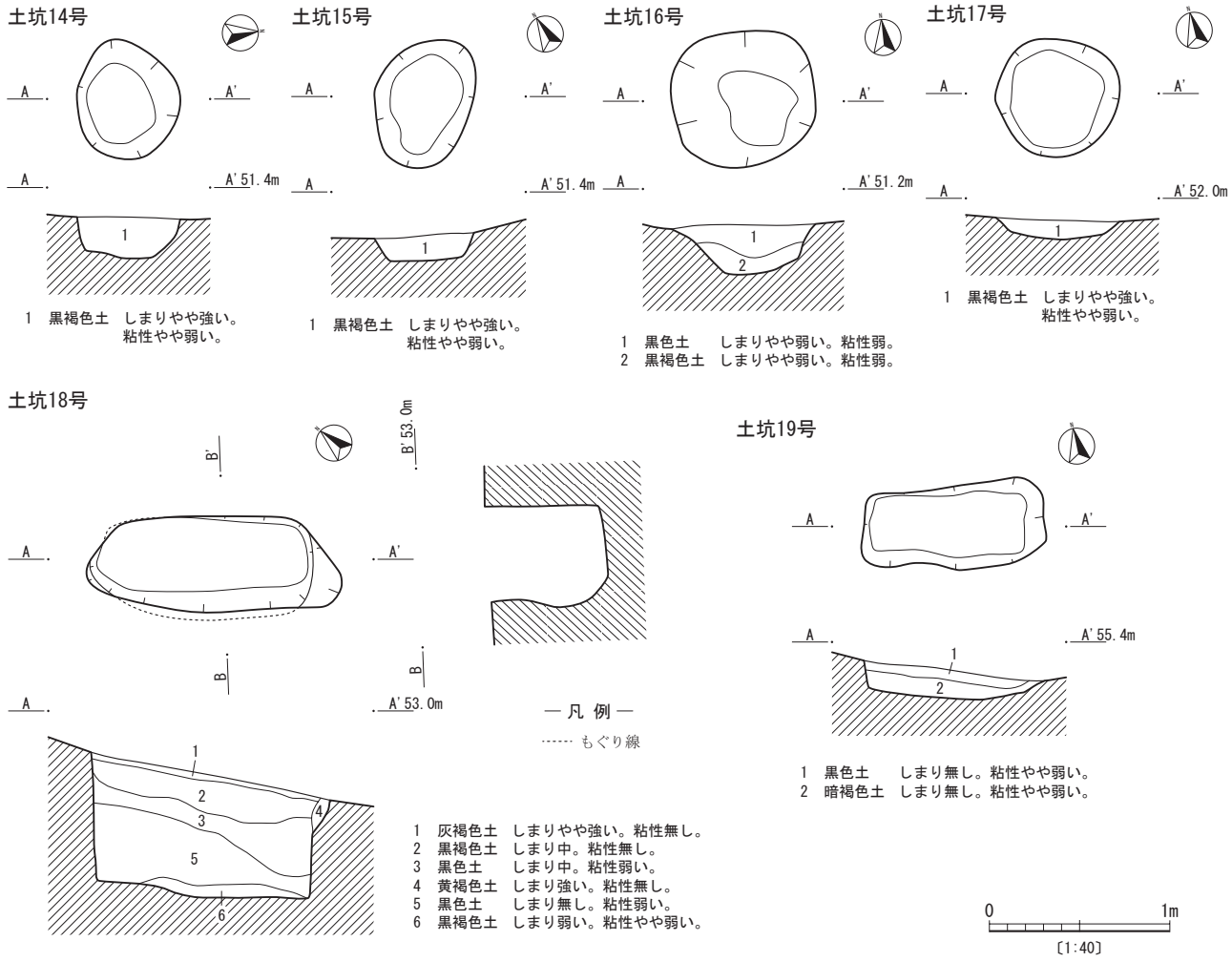
Ｊ－ 27 区のⅢｂ層で検出された。Ｎ 49° Ｗに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 132cm，短径 54cm，検出面からの深さは 68cmである。壁面は北側から南西側にかけてオーバーハングしているが，ほぼ垂直に掘り込んでいる。埋土は，１層の灰褐色土に暗紫コラと推測される堆積物がみられた。埋土４は壁面が崩れたものと考えられる。遺物は出土していない。

土坑 19 号（第 199 図）

Ｊ－ 26 区のⅢｂ層で検出された。Ｎ 78° Ｗに軸をもち，平面形は隅丸長方形を呈する。長軸 100cm，短軸 47cm，検出面からの深さは 16cmである。埋土は２層に分かれ，上層が黒色土，下層が暗褐色土である。遺物は出土していない。

土坑 20 号（第 200 図）

Ｊ－ 25 区のⅢｂ層で検出された。Ｎ 72° Ｗに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 306cm，短径 122cm，検出面からの深さは 32cmである。遺構の東側に径 81 × 74cmのピットがあり，底面からの深さは 26cmである。埋



第 199 図　弥生時代土坑 14～19 号

土５はしまりが強くアカホヤ火山灰が不均等だが多量に混じっており，人為的に床面を形成したものと考えられる。埋土１～４はレンズ状の堆積状況を呈することから自然に流れ込んだものと考えられる。ピットに柱痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

土坑 21 号（第 200 図）

Ⅰ－ 25 区のⅢｂ層で検出された。中世の溝状遺構 1 号によって切られている。N 67° Wに軸をもち，平面形は楕円形で断面形は逆台形を呈する。長径 122cm，短径 76cm，検出面からの深さは 38cmである。埋土は水平な堆積状況を呈し，黒褐色土と褐色土の２層に分かれる。遺物は出土していない。

土坑 22 号（第 200 図）

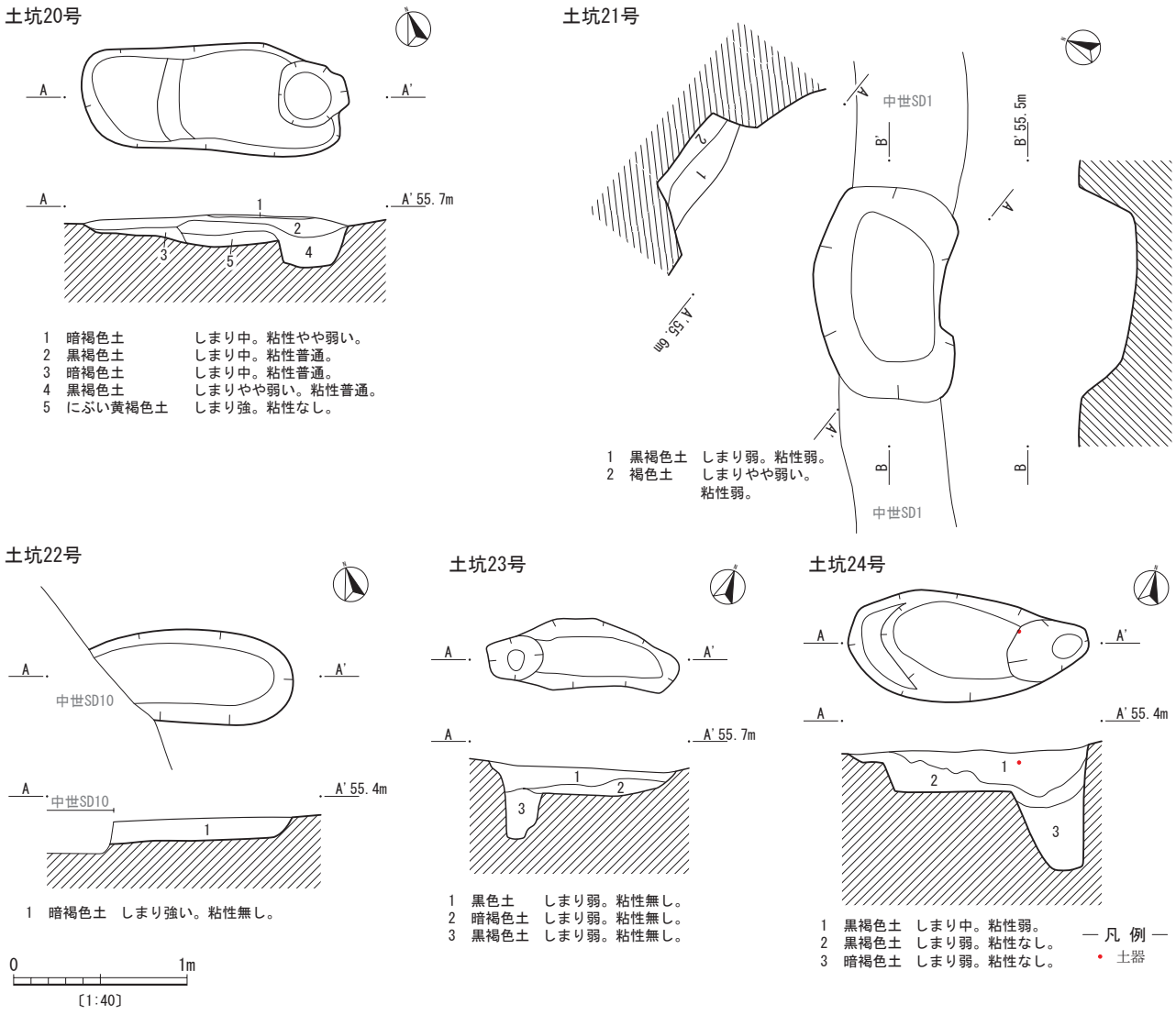
H－ 25・26 区のⅢｂ層で検出された。N 73° Wに軸をもち，中世の溝状遺構 10 号に１/４ほど切られているが，平面形は楕円形と想定される。長軸は残存部で 105cm，短軸 54cm，検出面からの深さは 13cmである。埋土は暗褐色土で，微量にアカホヤの細かい粒を含む。遺物は出土していない。

土坑 23 号（第 200 図）

H－ 26 区のⅢｂ層で検出された。N 68° Eに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 108cm，短径 40cm，検出面からの深さは 16cmである。西端に径 32 × 25cmのピットがあり，底面からの深さは 28cmである。ピットが埋まってから土坑本体が埋まっている。遺物は出土していない。

土坑 24 号（第 200 図）

H－ 25 区のⅢｂ層で検出された。軸はN 76° Eに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 139cm，短径 64cm，検出面からの深さは 24cmである。土坑の東端には径 48 × 38cmのピットがあり，底面からの深さは 46cmである。埋土は黒褐色土が大部分を占め，レンズ状に堆積していた。埋土３は，しまりが弱くアカホヤの混入が他の埋土と比べて多くみられ，柱痕跡はみられない。遺物は埋土１から土器片が１点出土している。



第 200 図　弥生時代土坑 20～24 号

土坑 25 号（第 201 図）

G － 26 区のⅢｂ層で検出された。N 68° Wに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 111cm，短径 54cm，検出面からの深さは 25cmである。底面は地形の傾斜と異なりほぼ水平である。埋土は黒褐色土で，埋土３は遺構の側面が崩れたときに入ったものと考えられる。埋土１・２はしまりが強い。

土坑 26 号（第 201 図）

G － 25 区のⅢｂ層で検出された。N 74° Eに軸をもち，平面形は隅丸方形を呈する。長軸 111cm，短軸 51cm，検出面からの深さは 23cmである。南壁際に径 35 × 23cmのピットがあり，底面からの深さは 37cmである。土坑底面は，西端のみ一段高いが全体的にピットに向かって緩やかに傾斜している。埋土は黒褐色土の単層で，遺物は出土していない。

土坑 27 号（第 201 図）

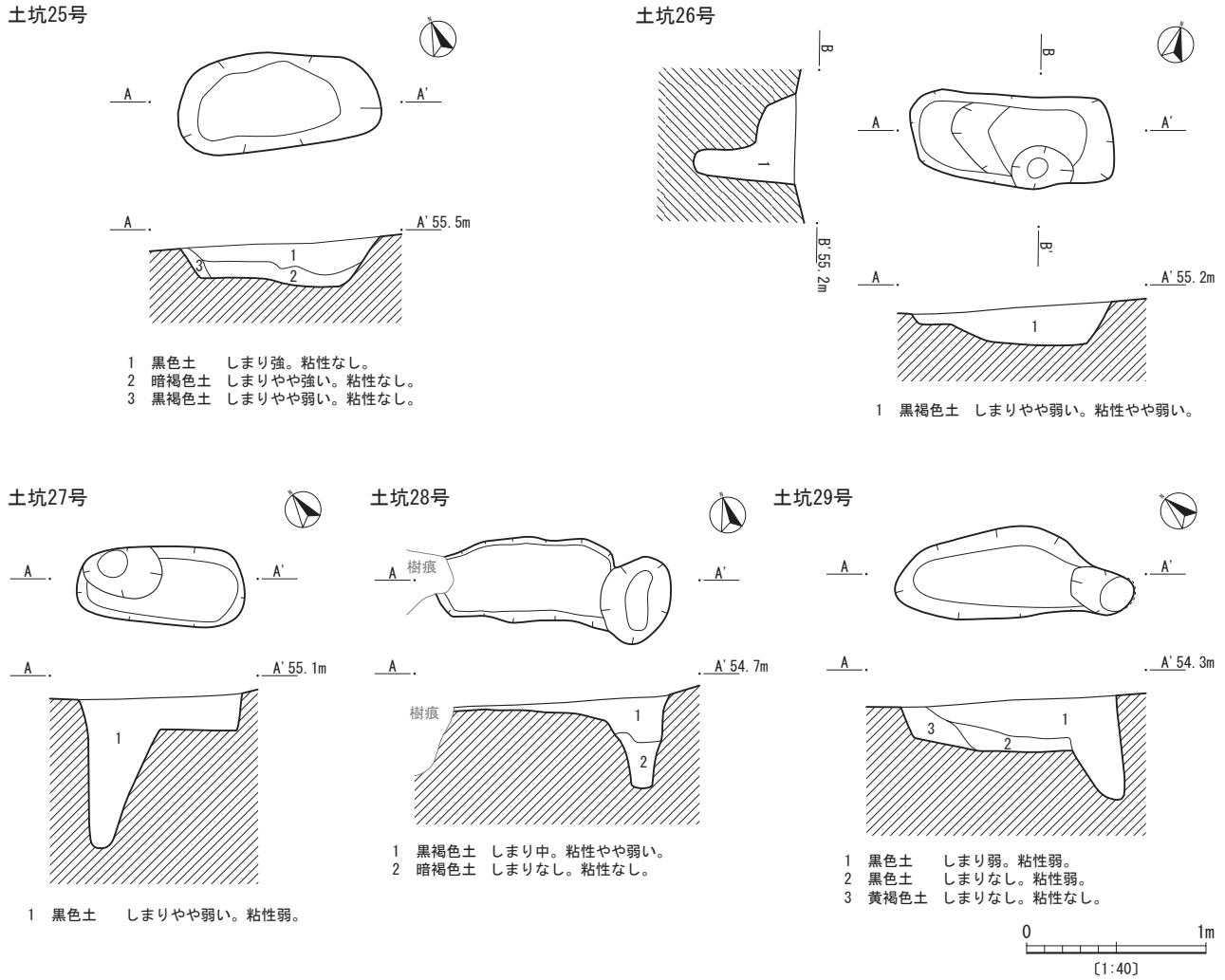
G － 25 区のⅢｂ層で検出された。N 54° Wに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 92cm，短径 43cm，検出面からの深さは 20cmである。北東隅に径 44 × 29cmのピットがあり，底面からの深さは 64cmである。埋土は黒色土の単層で，遺物は出土していない。

土坑 28 号（第 201 図）

F － 25 区のⅢｂ層で検出された。N 74° Wに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 132cm，短径 47cm，検出面からの深さは 12cmである。遺構の東側に径 49 × 39cmのピットがあり，底面からの深さは 39cmである。ピット下部の埋土２はアカホヤが多量にあることから，ピット上部側面が崩れたものと考えられ，本来の径は若干小さかった可能性がある。遺物は出土していない。

土坑 29 号（第 201 図）

F － 23 区のⅢｂ層で検出された。N 39° Wに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 132cm，短径 51cm，検出面からの深さは 32cmである。遺構の南側には径 36 × 24cmのピットがあり，底面からの深さは 30cmである。堆積状況から想定すると，埋土２・３と埋土１では堆積時期が異なっていた可能性もある。遺物は出土しなかった。



第 201 図　弥生時代土坑 25～29 号

土坑 30 号（第 202 図）

E － 24・25 区のⅢｂ層で検出された。ほぼ東西に軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 145cm，短径 61cm，検出面からの深さは 35cmである。東端に径 30cm のピットがあり，底面からの深さは 28cmである。このピットは，土坑中央に向かってやや斜めに掘られていた。遺物は出土しなかった。

土坑 31 号（第 202 図）

E － 25 区のⅢｂ層で検出された。N 43° Wに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 136cm，短径 44cm，検出面からの深さは約 10cmである。遺構の北東側に径 27 × 25cmのピットがあり，底面からの深さは 55cmである。埋土は黒褐色土で，遺物は出土しなかった。

土坑 32 号（第 202 図）

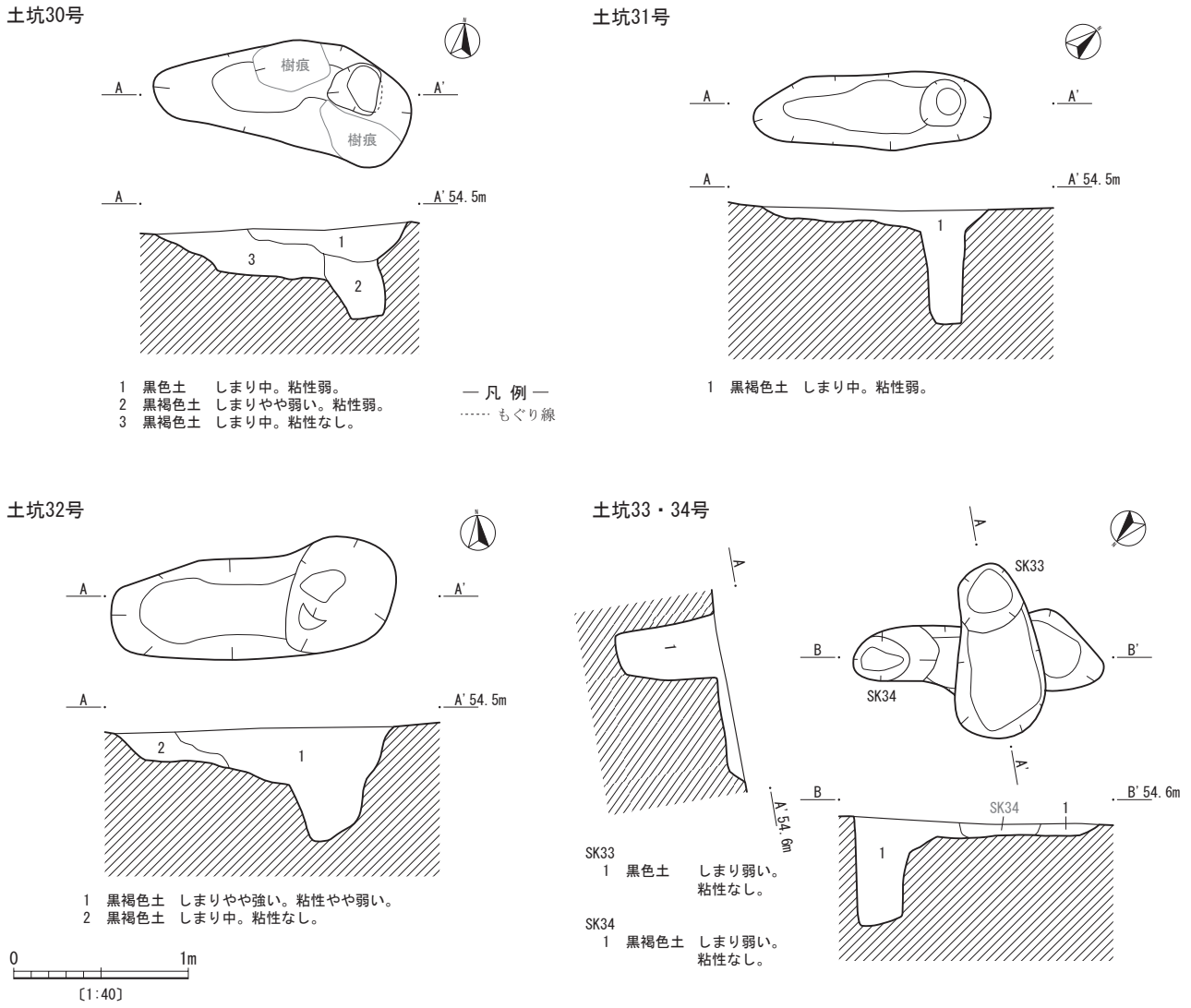
E － 25 区のⅢｂ層で検出された。ほぼ東西に軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 160cm，短径 58cm，検出面からの深さは 16～30cmで，底面は東へ向かって下降している。遺構の東側に径 75 × 59cmのピットがあり，底面からの深さは 35cmである。他のピット付土坑と比較してピットの径が大きい。遺物は出土しなかった。

土坑 33 号（第 202 図）

E － 25 区のⅢｂ層で検出された。N 54° Wに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 100cm，短径 52cm，検出面からの深さは 12cmである。遺構の南側に径 38 × 35cmのピットがあり，底面からの深さは 50cmである。切り合いから土坑 34 号より新しい。埋土は黒色土の単層で，遺物は出土しなかった。

土坑 34 号（第 202 図）

E － 25 区のⅢｂ層で検出された。N 49° Eに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 141cm，短径 39cm，検出面からの深さは 10cmである。遺構の東側に径 32 × 25cmのピットがあり，底面からの深さは 51cmである。33 号により中央部を破壊されている。33 号と比較して，長径がやや異なる以外は，付属するピットを含めて平面・断面形状や深さがほぼ同じである。遺物は出土しなかった。



第 202 図　弥生時代土坑 30～34 号

土坑 35 号（第 203 図）

E － 25 区のⅢｂ層で検出された。N 44° Wに軸をもち，平面形は整った楕円形を呈する。長径 115cm，短径 62cm，検出面からの深さは 24cmである。遺構の南東側に径 38 × 36cmのピットがあり，底面からの深さは 58cmである。底面は，わずかに凸凹しながらピットに向けて下降している。遺物は出土していない。

土坑 36 号（第 203 図）

E － 25 区のⅢｂ層で検出された。N 12° Wに軸をもち，平面形は隅丸方形を呈する。長軸想定 109cm，短軸 53cm，検出面からの深さは 40cmである。遺構の南側に径 45 × 33cmのピットがあり，底面からの深さは 37cmである。遺物は，胎土に黒雲母を含む弥生土器の小片が数点出土している。

土坑 37 号（第 203 図）

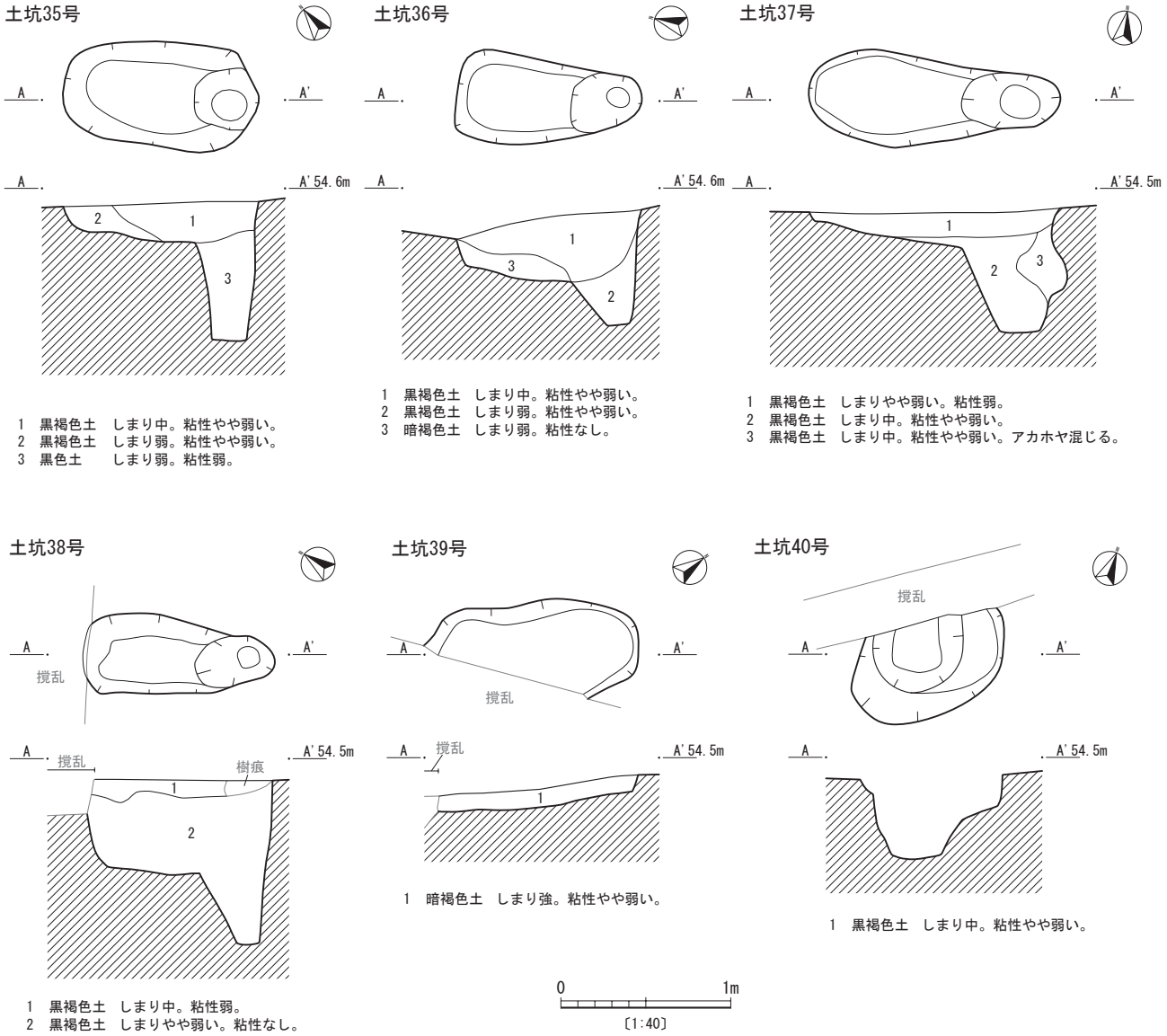
D － 25 区のⅢｂ層で検出された。N 86° Eに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 150cm，短径 56cm，検出面からの深さは 21cmである。遺構の東側に径 58 × 32cmのピットがあり，底面からの深さは 50cmである。土坑とピットは，長軸方向が一致する。柱穴内にアカホヤの堆積層があったが，樹痕の影響と考えられる。遺物は出土しなかった。

土坑 38 号（第 203 図）

D － 25 区のⅢｂ層で検出された。N 33° Wに軸をもち，平面形は隅丸方形を呈する。長軸 110cm，短軸 47cm，検出面からの深さは 56cmである。遺構の南側に径 47 × 29cmのピットがあり，底面からの深さは 41cmである。他の同型の土坑と比べて著しく深い。遺物は出土しなかった。

土坑 39 号（第 203 図）

D － 25 区のⅢｂ層で検出された。N 21° Eに軸をもち，平面形は楕円形が想定されるが，遺構の南側が現代の溝で削平を受けているため判断できない。残存部分に



第 203 図　弥生時代土坑 35～40 号

おける長径は 127cm，短径 46cm，検出面からの深さは 17cmである。埋土は暗褐色土の単一層で，遺物は出土していない。

土坑 40 号（第 203 図）

D － 25 区のⅢｂ層で検出された。N 45° E に軸をもち，平面形は円形が想定されるが，遺構の北西側がゴボウ耕作による撹乱を受けているため判断できない。残存部分における長径は 98cm，短径 55cm，検出面からの深さは 25cmであるが，底面は，西半がさらに 20cmほど掘り込まれている。このような形状は 40 号のみである。埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

土坑 41 号（第 204 図）

D － 24 区のⅢｂ層で検出された。N 76° E に軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 136cm，短径 51cm，検出面からの深さは 34cmである。遺構の東側に径 51 × 32cmのピットがあり，底面からの深さは 41cmである。遺物は出土しなかった。

土坑 42 号（第 204 図）

D － 24 区のⅢｂ層で検出された。N 24° W に軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 131cm，短径 50cm，検出面からの深さは 38cmである。遺構の東側に径 39 × 37cmのピットがあり，底面からの深さは 39cmである。この土坑も，38 号ほどではないが比較的深い。

土坑 43 号（第 250 図）

E － 24 区のⅢｂ層で検出された。N 58° E に軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 101cm，短径 62cm，検出面からの深さは 33cmである。遺構の東側に径 48 × 41cmのピットがあり，底面からの深さは 40cmである。土坑 44 号と切り合っているが，前後関係は把握できなかった。遺物は出土しなかった。

土坑 44 号（第 250 図）

E － 24 区のⅢｂ層で検出された。N 63° W に軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 96cm，短径 42cm，検出面からの深さは 15cmである。遺構の東側にピットをもつが，撹乱により下端のみ検出した。土坑 43 号と切り合っており，遺物は出土しなかった。

土坑 45 号（第 250 図）

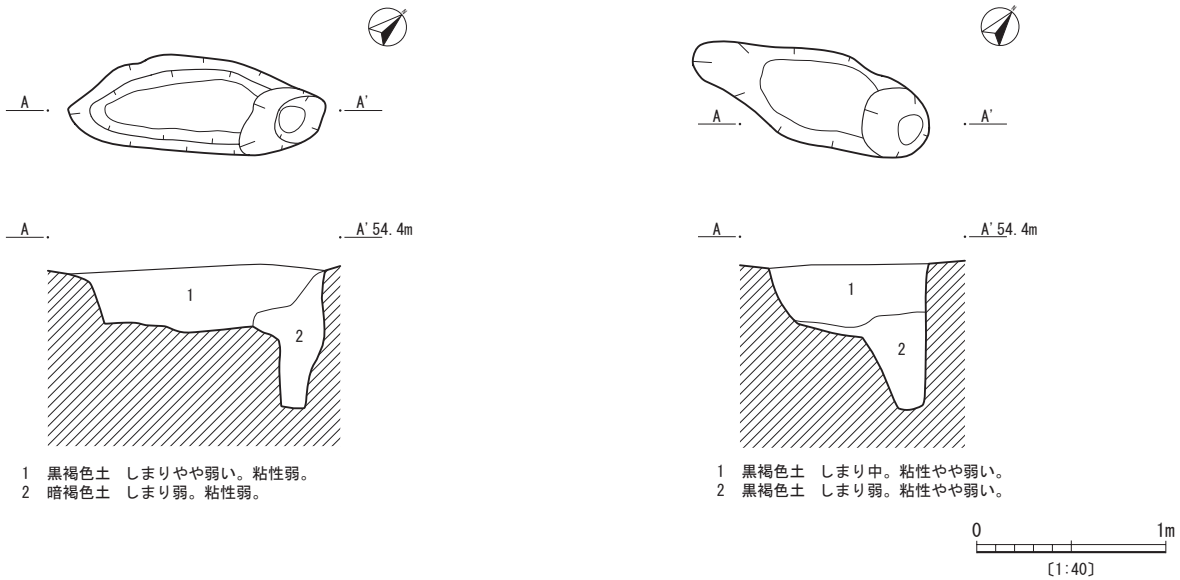
E － 25 区のⅢｂ層で検出された。N 29° E に軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 120cm，短径 55cm，検出面からの深さは 38cmである。西側が土坑 46 号により 1 / 4 程度切られている。遺構の北側にピットがあるが，現代の撹乱による削平を受けており 1 / 3 程度しか残っていない。残存部の径は 29cm，底面からの深さは 18cmである。遺物は出土しなかった。

土坑 46 号（第 250 図）

E － 24 区のⅢｂ層で検出された。遺構北西部上端を現代の溝に切られている。N 56° E に軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 121cm，短径 50cm，検出面からの深さは 30cmである。遺構の西側に径 45 × 36cmのピットがあり，底面からの深さは 40cmである。遺物は出土しなかった。

土坑 47 号（第 250 図）

E － 25 区のⅢｂ層で検出された。N 82° E に軸をもち，遺構の北側は現代の撹乱による削平を受けているが，平面形は楕円形状を呈していると想定される。長径 87cm，短径 45cm，検出面からの深さは 22cmである。土坑の両端にピットがある特徴的な構造をしており，西側の径は残存部で 30 × 24cm，底面からの深さは 30cmであり，



第 204 図　弥生時代土坑 41・42 号

東側は径が 35 × 26cm，底面からの深さは 46cmである。遺物は出土しなかった。

土坑 48 号（第 251 図）

Ｅ－ 25 区のⅢｂ層で検出された。Ｎ 27° Ｅに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 159cm，短径 58cm，検出面からの深さは 26cmである。南側に径 62 × 50cmのピットがあり，底面からの深さは 70cmである。他のピット付土坑と比して，柱穴の大きさや深さが大きいのが特徴で，さらに北端には浅いが明瞭な段も設ける。柱穴の埋土は土坑の埋土より新しい。

遺物は，埋土１上部から胎土に黒雲母を含む弥生土器と考えられる土器片が１点出土している。

土坑 49 号（第 251 図）

Ｅ－ 24 区のⅢｂ層で検出された。Ｎ 65° Ｅに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 122cm，短径 48cm，検出面からの深さは約 21cmである。遺構の東側に径 45cmのピットがあり，底面からの深さは 19cmである。床面は凸凹している。遺物は出土しなかった。

土坑 50 号（第 251 図）

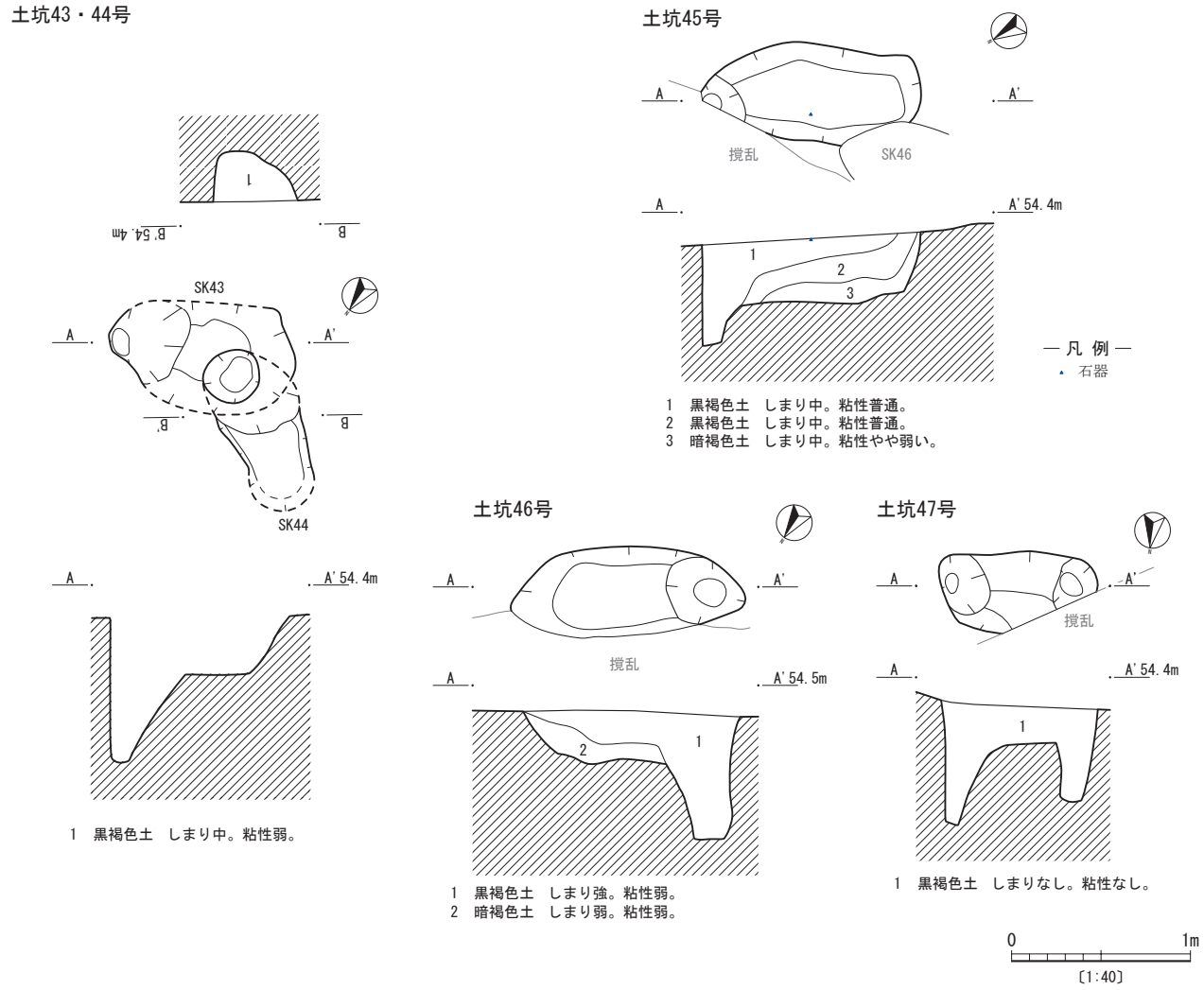
Ｅ－ 24 区のⅢｂ層で検出された。Ｎ 9° Ｗに軸をもち，平面形は隅丸方形を呈する。長軸 109cm，短軸 46cm，検出面からの深さは 16cmである。遺構の南側に径 22 × 15cmのピットがあり，底面からの深さは 25cmである。他のピット付土坑と比べてピットが小さい。埋土は４層に分かれるが，遺物は出土しなかった。

③溝状遺構（第 206 図）

Ｈ－ 44 区のⅢａ層で検出された。

規模は，検出範囲で長さ約 4.8ｍ，幅約 0.5ｍ，検出面からの深さは約 17cmである。中央丘陵東側の弥生の集落跡から傾斜面を南東方向に走り，調査区外へと下っている。上端のライン全体に１枚目の硬化面がみられ，面を剥いだところ埋土があり，それを 10～15cm程度掘り下げたところで２枚目の硬化面が検出された。２枚目硬化面の範囲は，平面図下端ラインがほぼ符合する。埋土は黒褐色土単層で，しまりが強い。

遺物は，１枚目の硬化面から弥生土器片が２点出土し



第 205 図　弥生時代土坑 43～47 号

たが，小片のため図化できなかった。

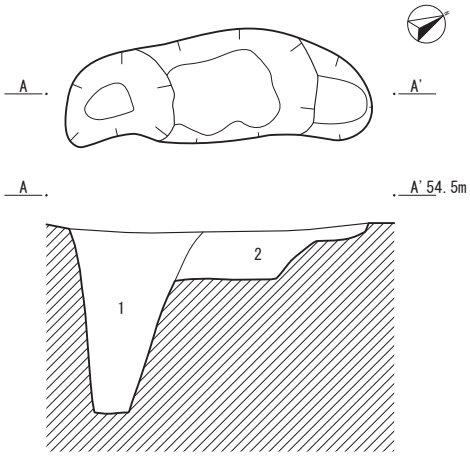
④周溝墓

周溝墓１号（第 207 図 1050）

Ｈ－ 53 区Ⅳ層で検出された。南東に下る緩傾斜面に立地しており，周溝の南端部分は撹乱により消失している。竪穴住居跡２号が隣接している。

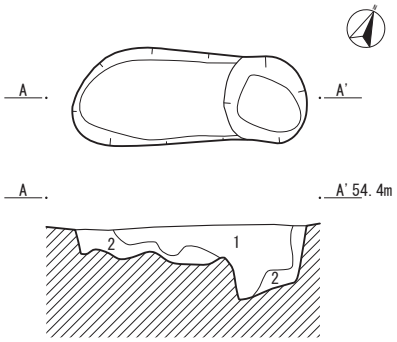
周溝の外径は長径 4.5 m（推定），短径 4.0 mほどで，検出面での溝幅は 0.4 m弱である。平面形状は，北半が隅丸方形，南半が楕円形を呈する。周溝の内側で，遺構や遺物集中域などは発見されなかった。

土坑48号



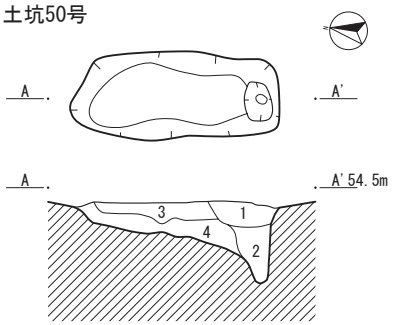
1　黒褐色土　しまり中。粘性やや弱い。
2　黒褐色土　しまり弱。粘性弱。

土坑49号



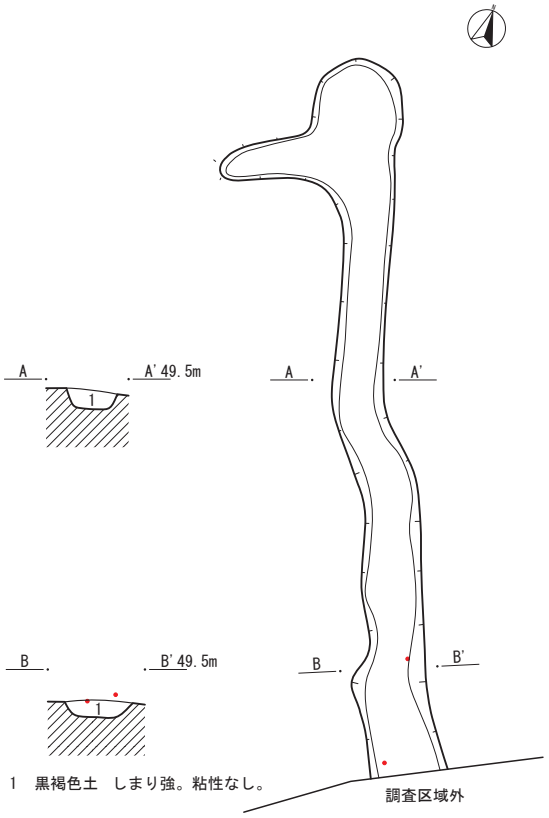
1　黒褐色土　しまり中。粘性やや弱い。
2　黄褐色土　しまりやや弱い。粘性やや弱い。

土坑50号



1　黒褐色土　しまり中。粘性弱。
2　黒褐色土　しまり中。粘性弱。
3　黄褐色土　しまりやや弱い。
　　粘性やや弱い。
4　黒褐色土　しまり弱。粘性弱。

溝状遺構



1　黒褐色土　しまり強。粘性なし。

— 凡 例 —
• 土器

0　1m
〔1:40〕

0　2m
〔1:60〕

第 206 図　弥生時代土坑 48～50 号・溝状遺構

溝の断面は，残存状況の良好な西側でみると，逆台形状あるいは「箱堀」に近い形状をしている。周溝の残存状況は，傾斜の上方にある西側及び北側が良好で東側は悪い。

埋土は，残存状況の良好な範囲では２枚に分層できた。いずれも周溝内側からの土砂流入を示している。

遺物は，周溝西側の埋土１から土器片が出土している。

1150 は，山ノ口式土器の甕の口縁部と考えられる。口径 36㎝で，胴部の丸味が強い器形と想定される。口縁端部は，「Ｖ」字状の凹みが巡っている。肩部には，三角突帯が貼付されている。

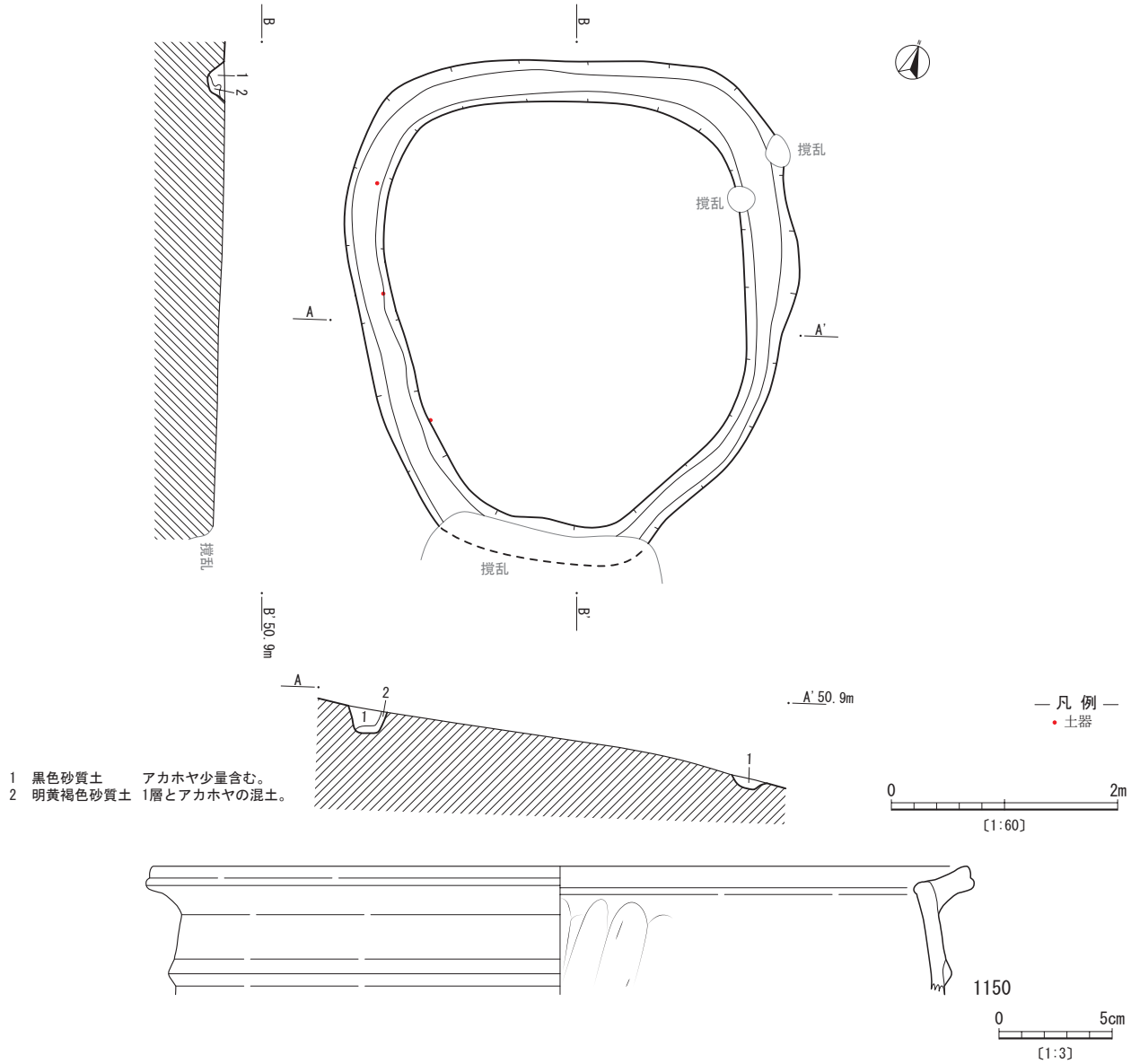
周溝墓２号（第 208 図 1151～1153）

Ｊ－ 42 区のⅢｂ層で検出された。長さ 4.9ｍ，検出面での溝幅は 0.3ｍ程度で，弧状の平面形状を呈する。断面は逆台形の形状である。環状の周溝を想定して周辺を精査したが，地層の残存状況に特段問題はみられず，切り合う他の遺構も検出されなかったため，当初からこの形状であったと考えられる。

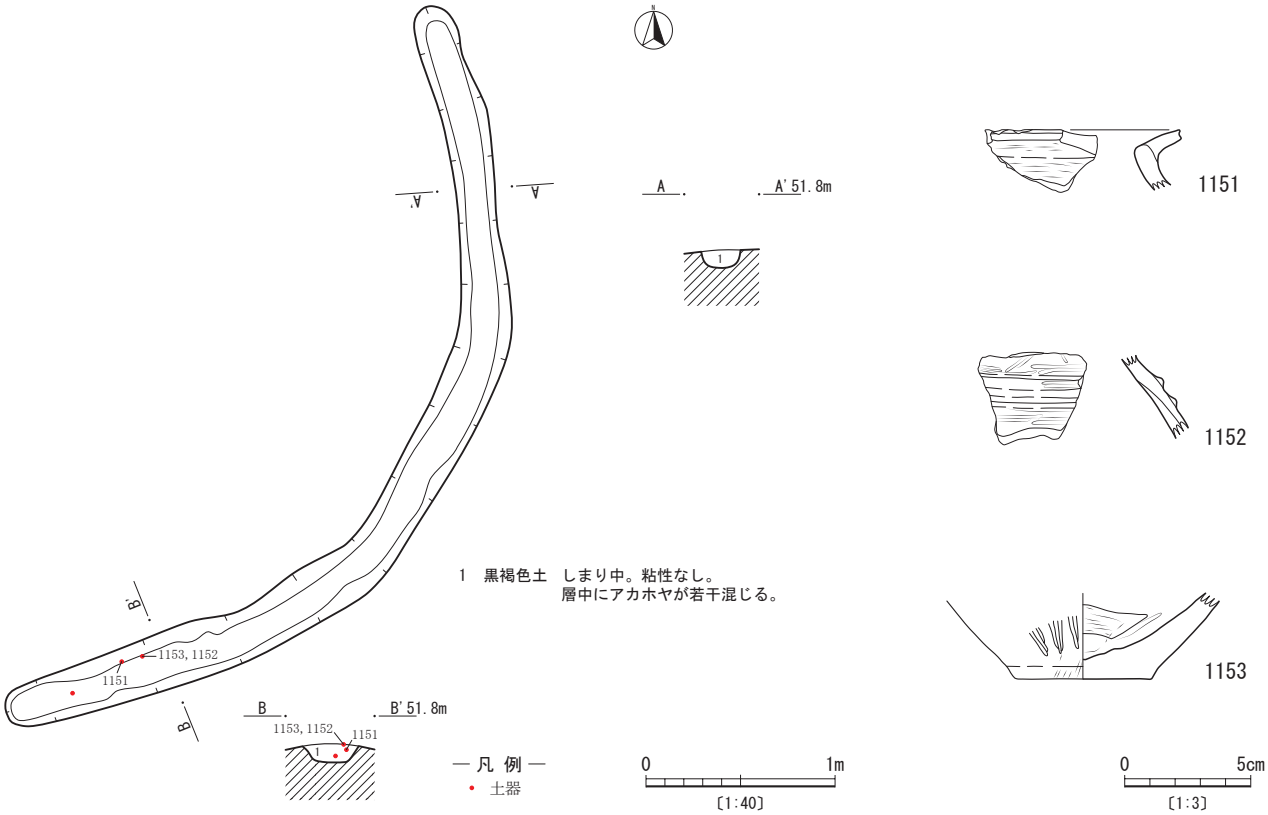
埋土は単層だが，遺物は埋土の中位～上位にかけて，弧の中心に近い側から出土した。

1151 は小型壺の口縁部と考えられる。口縁部は，端部付近でわずかながら水平方向に角度を変えている。口縁端部は薄いが，凹線状の凹みが明瞭に施される。1152 は小型壺の頸～肩部と考えられる。外面は，突帯まで含めて横位のミガキ調整で仕上げられる。内面は布状の工具による横ナデが施されている。1153 は小型壺の底部である。底径 5.5㎝で，外面は縦位のミガキ調整が施されるが，暗文のような仕上げの部分が散見される。内面はヘラナデである。

なお，1151～1153 は，出土地点が近接していること，



第 207 図　弥生時代周溝墓１号



第 208 図　弥生時代周溝墓２号

個々の胎土，焼成や色調が似通っていることから同一個体の可能性もある。

周溝墓３号（第 209～211 図 1154～1164）

Ｊ－ 42 区のⅢｂ層上面で検出された。周溝の外径で 6.0～6.3ｍ，検出面での溝幅は 0.8ｍ程度で，全体的には環状の平面形を呈するが，北端のみ角張っている。断面は逆台形或いは「箱堀」に近い形状であるが，場所によって差異があり統一されていない。

Ⅱｂ層掘り下げ中に，斜長石を含む土（分析の結果，開聞岳起源の暗紫コラ）が５～10㎝程度の厚さで環状にまわるような状況を発見した。そのため，周溝墓の可能性を想定して環状の中心部一帯を精査したが，土坑や遺物集中域などは発見できなかった。また，当初確認した斜長石を含む土だけでは周溝の平面形の特定には至らず，やむなくⅢａ層（池田降下軽石を含む）まで掘り下げたところ，プランを明確に捉えることができた。地形の現状はほぼ平坦だが，検出面からの溝の深さは，西側が東側よりも浅い傾向が看取された。

埋土は，斜長石を含む土を埋土１として最大３枚に分層できた。おおむねレンズ状の堆積状況を示していること，埋土１の残存状況が安定したものでなかったことから自然堆積により埋没したものと考えられるが（埋土１は，周溝が埋まる過程で生じた断続的な窪地部分に堆積したか），土砂の流入方向等まで推定することはできなかった。

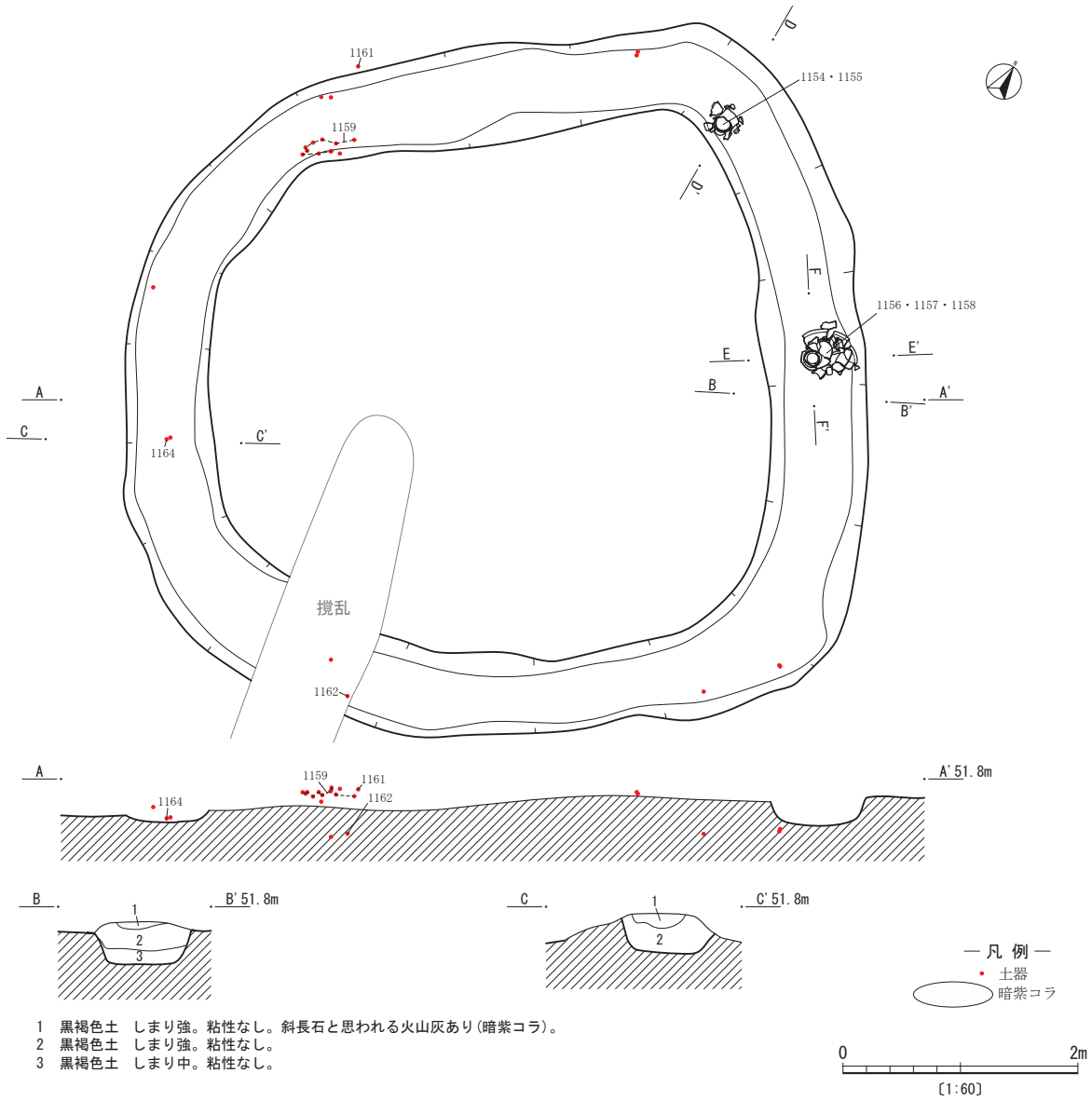
周溝内から多くの土器片が出土したが，周溝北東部で，土器集中箇所を２か所検出した。

北側のものは，周溝が角張る部分の底面近くで，大小１つずつの二叉状口縁の鉢形土器が合わせ口（または入れ子）が外れたような状態で重なり合っていた（第 210 図上）。大きい鉢形土器は，割れていたが下側で周溝中心に向けて傾いており，小さい鉢形土器は，割れずに大きい方の内部で周溝外側に向けて傾いていた。大きい鉢形土器が割れた原因は不明である。

南側の集中箇所は，上記の集中箇所から２ｍほど離れた位置で検出され，周溝内の検出面から（埋土上位から），割れていない短頸壺，割れた壺下半部，割れた甕形土器の順に入れ子のようにきれいに重なっていた（第 210 図下）。こちらの割れた土器は放射状に割れ，部位の位置関係を保っていることから，意図的に割られた可能性が高い。

なお，周溝周辺で柱穴を検出したが，主に配置状況から周溝墓３号に関連するものとは判断できなかった。

1154 は，1155 とともに北側の土器集中箇所で出土した二叉状口縁の鉢形土器である。口径 15㎝，底径７㎝，器高 11.5㎝の完形品で，円盤状に整形した平底から直線的に開いて，胴部は張らずそのまま口縁部に至る器形である。口縁部は，胴部からの角度を変化させずに納めて



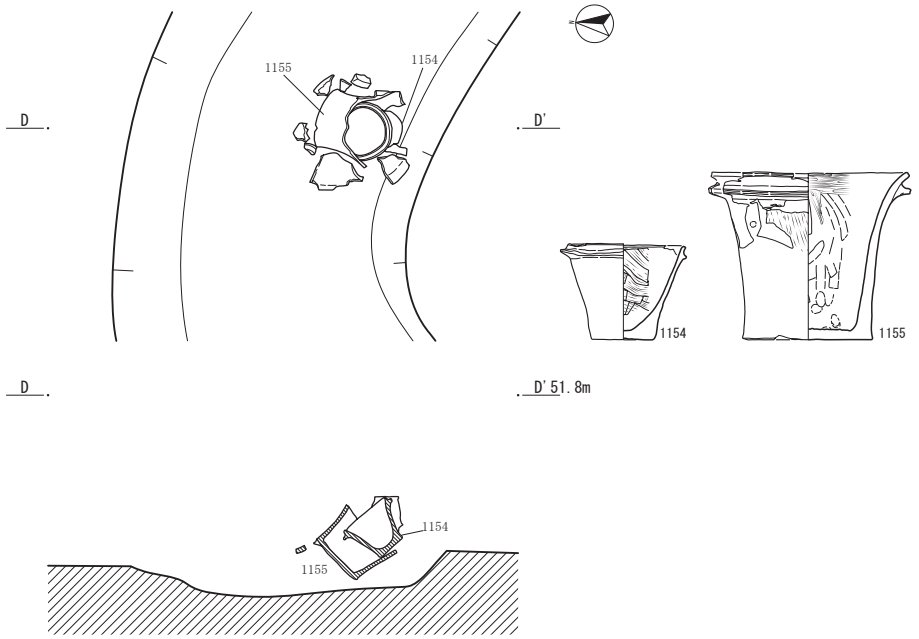
1　黒褐色土　しまり強。粘性なし。斜長石と思われる火山灰あり（暗紫コラ）。
2　黒褐色土　しまり強。粘性なし。
3　黒褐色土　しまり中。粘性なし。

第 209 図　弥生時代周溝墓３号（１）

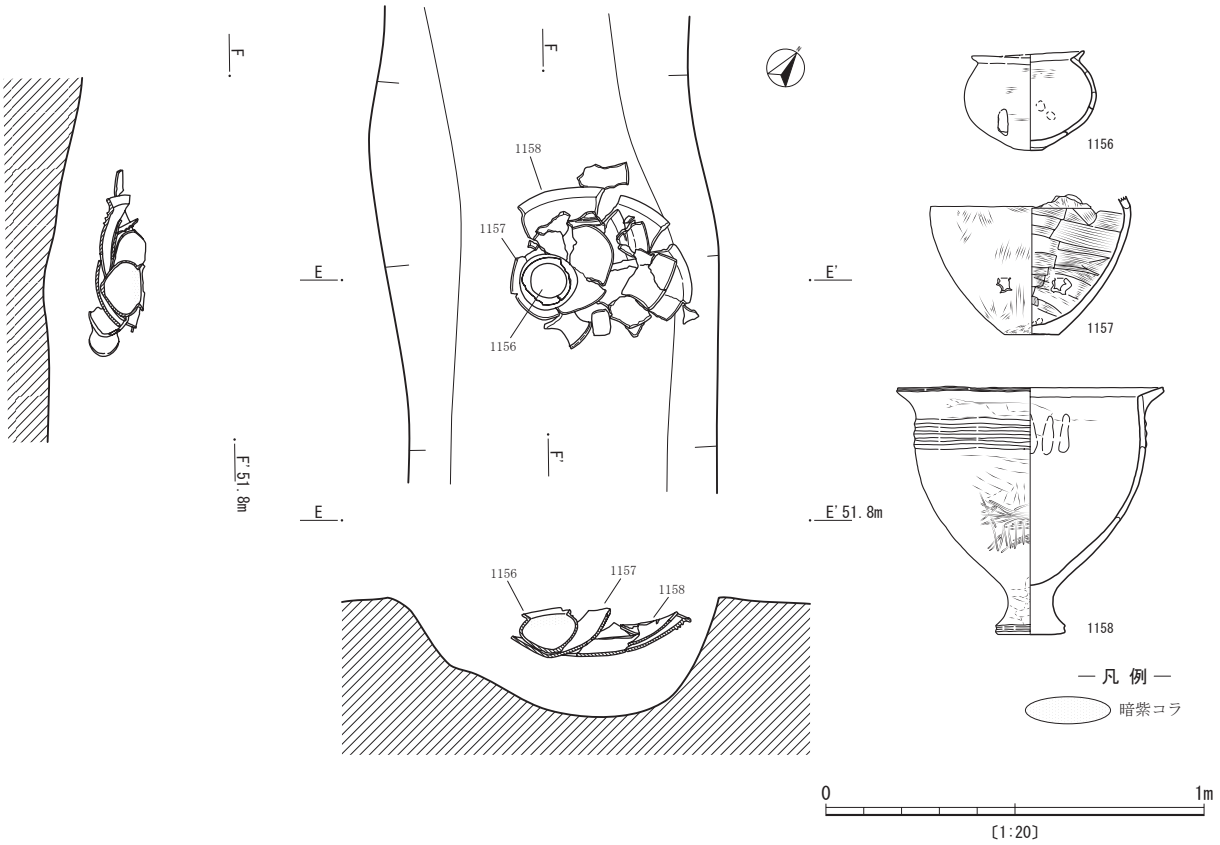
いるが，内面端部にヘラを強く当てて横ナデして外反しているような仕上げとし，やや下位に突出の強い三角突帯を貼付している。従って，二叉状口縁とはいえ直口口縁に三角突帯を貼付した口縁部形状である。法量に比して胴部下端の器壁が厚い一方で，胴部から口縁部までは薄い。外面は，突帯下面から底部接地面まで含めて広く薄く剥落しており，調整の詳細が不明である。わずかに残る部分では縦位のハケナデが明瞭に見え，ススが付着している。突帯上面から口唇部にかけては剥落していない。内面は，底部は指頭押圧，胴部から口縁部下までは斜位のハケナデを明瞭に施す。この内面調整の工具は，法量の割に規格が大きいように見える。口縁端部は，器壁に合わせて細いが，凹線状の凹みを観察できる。上記した口縁内面の強い横ナデのあとに施されている。三角突帯は波打っており，全体の仕上がり具合と比べやや粗い整形である。また，口縁上端が欠けている箇所が２か所あるが，ちょうど向かい合わせの位置にあり，欠損の程度も似通っている上，欠損部の形状からどちらも外面側からの加撃によって欠けている。意図的に欠いた可能性が想定される。

1155 は，1154 の下側にあった二叉状口縁の鉢形土器である。口径 23.5cm，底径 16cm，器高 20cmの完形品だが，口縁部の破片が少なかった。端部がやや張る平底から一旦軽く窄まって，口縁部に向けて緩く曲線的に外反していく器形である。胴部がわずかに張る場所もあるが，全体的には大型の二叉状口縁壺の頸部から口縁部の形状を想起させる形状である。口縁部はラッパ状に外反し，その下位に水平に長く伸びる三角突帯が貼付される。器壁は，胴部下端が分厚く口縁部に向けて緩やかに薄くなっているが，厚さの変化の度合いは 1154 よりも穏や

1154・1155 出土状況図



1156・1157・1158 出土状況図



第 210 図　弥生時代周溝墓３号（２）

かである。ただし，見た目の割に持ち重りがする土器である。器面は，二叉状口縁部付近は横位のミガキ調整が施され，それより下位は外面が縦位のヘラナデで（部分的にミガキの様になっている），内面が指オサエと外面と同じ工具による縦位のヘラナデで仕上げている。また，外面は突帯下部と胴部下半に表面が薄く剥落している範囲がみられるが，1154 ほど著しくはない。口縁端部は，断面略方形に整形して細沈線を施し，突帯端部には，凹線状の凹みが浅く巡る。両者同じモチーフながら見た目を違えている。なお，残っている口縁部には，1154 にあったような欠損部は確認されなかった。

1156 は，1157･1158 とともに南側の土器集中箇所で出土した短頸壺である。３点のうちもっとも上位にあった。経年変化によって器形にひずみが生じており，完全に接合しない。口径 13.5cm，底径３cm，胴径 16cm，器高 12cmで，底部から胴部に向けて丸く張り出し，頸部に向けて張りを保ちながら窄まり，口縁部は断面三角形状を呈し，わずかにしゃくれながら斜め上方に伸びる器形である。端部は薄く断面舌状に整えている。器壁は全体的に薄い。底部は，粘土を貼り足して平底となるよう整形している。外面は，横基調のミガキ調整を全体に施す。なお，胴部最大径辺りから頸部付近（上方から見て口縁部によって隠れる部分を除く）までは，器面の風化がそれ以外の部分より進んでいる。内面は，横方向のナデ調整であるが，下半は指頭押圧の痕跡をわずかに残す。胴部下半に，平面長楕円形の穿孔が１か所ある。内面に破損部が拡大していることから，焼成後に外側からの加撃により穿たれたものとわかる。また，内面の色調が口縁部上面まで黒色を呈している。色調にほぼ変化がみられないことから，意図的に着色した可能性が想定される。

1157 は，壺の下半部である。３点のうち中位にあった。胴部最大径部分の接合面で破断面を揃えており，意図的に現状に加工している。胴径 24cm，底径 6.5cm，現器高 16.5cmで，やや上げ底の底部からわずかに外張りをしつつ胴部に至る。胴部の張りは丸くというより緩く屈曲するという表現のほうが当てはまるような形状と想定される。底部は胴部よりも薄く，細長く突出させるような整形はない。器面は，外面が丁寧なナデ調整で，その上に縦位のミガキを不規則に（暗文風に？）加えており，内面は底部近辺に指オサエで他は斜位のハケナデを丁寧に施している。胴部下半に，平面略円形の穿孔が１か所ある。内面に破損部が拡大していることから，焼成後に外側からの加撃により穿たれたものとわかる。また，胴部最大径部分にはススの付着範囲があるが，破断面には付着が確認されない。

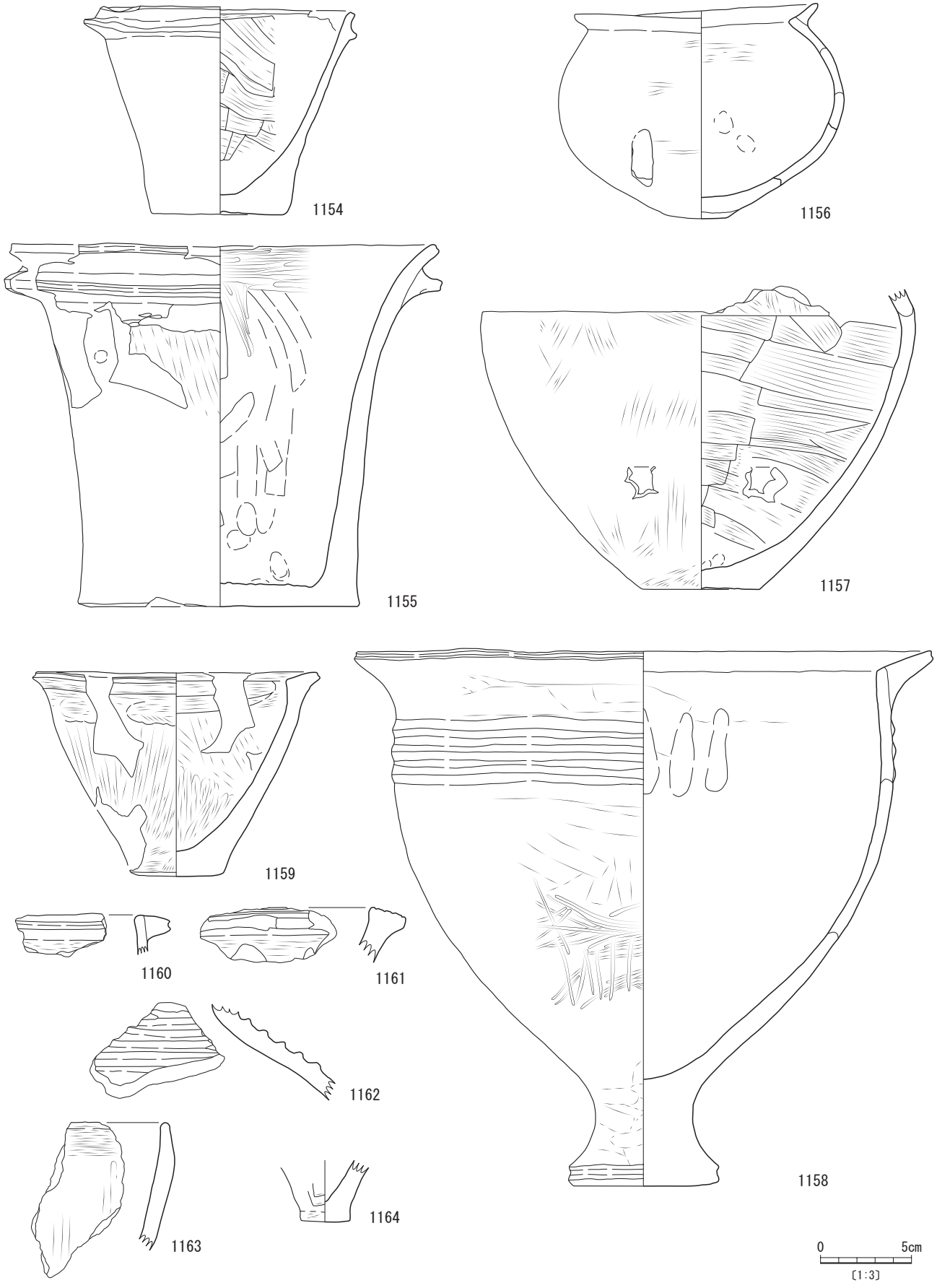
1158 は甕である。最も下位にあった。口径 31.5cm，底径８cm，器高 29.5cm，脚高６cmの完形品である。器高に比してやや低めの脚部からわずかに張りつつ丸みの強い胴部に向かい，わずかに内傾して口縁部にいたる，全体的に丸みの強い印象を受ける器形である。口縁部は斜め上方に長く伸びる。屈曲部は，内面の稜が丸みを帯び，外面は曲線的に整形される。器壁は比較的薄く，底部から口縁部までほぼ均一の厚さである。底部接地面は，わずかに丸みを帯びる。外面は，横位のナデ調整を主体に，胴部下半には横位のミガキ調整を加え，さらに部分的に縦位のミガキ調整も加える。内面は，横位のナデ調整を丁寧に施しているが，接合面付近は指オサエの痕跡が残る。口縁端部並びに脚端部には，断面「Ｖ」字状の凹みがそれぞれ１条施されている（脚端部の方はやや粗い）。口縁部下に貼付される三角突帯は，貼り付けた粘土紐の接合部を均すための整形で終了しており，そのためあまり隆起せず頂部も丸みを帯びている。また，２条目と３条目の突帯は，頂部がやや下向きである。外面は胴部から口縁部にかけてススの付着が観察される。

1159 は，北側土器集中箇所から南西に３ｍほど離れた溝内埋土２上位で，割れていたがまとまって（大半は周溝内壁沿いで，数点が周溝外壁近くから）出土した。口径 15.5cm，底径５cm，器高 11cmで，底部に脚があれば小型の甕形土器と言える器形である。「丸平底」的な底部から胴部に向けて直線的に開き，口縁部下位でやや上向きに角度を変えて口縁部に至る。口縁部は内面のみわずかに内弯してから稜を形成して屈曲し斜め上方に短く伸びる。外面は曲線的に開いて端部にいたる。口縁上面は軽く凸レンズ状に整形され，端部は幅いっぱいに凹線状の凹みが浅く巡る。器壁は，法量に比して分厚いがほぼ一定で，胴部下端のみ厚みが増す。器面は，口縁部周辺のみ丁寧な横ナデで調整される。口縁部外面には，横ナデ調整の際についた工具の段差が残る。口縁部より下位は，外面が縦位のやや軽いヘラナデで，内面は底部付近が縦位のヘラナデが放射状に施され，胴部～口縁部下位付近は斜位のハケナデを明瞭に施す。内面の方が丁寧に調整されている。また，内面のハケナデに用いた工具は，法量と比べて規格が大きい。なお，口縁部に 1154 と類似した欠損部はみられなかったが，1156 や 1157 にみられた穿孔の有無については，胴部に接合資料がなかった部分があり，不明である。

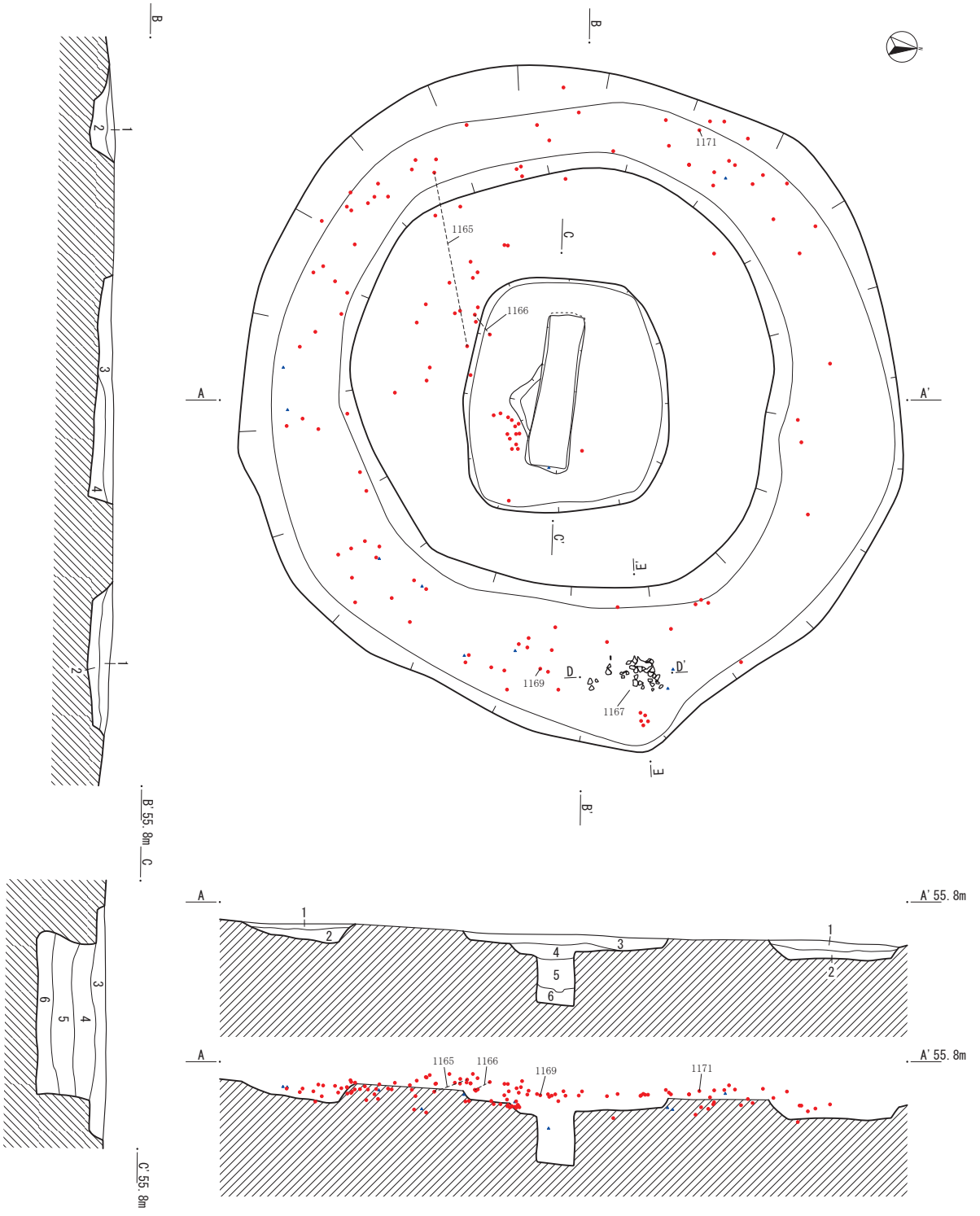
1160 は入来Ⅱ式土器の甕と想定される。口縁部は水平に伸び，端部に凹線状の凹みを施す。

1161 は壺の口縁部と想定される。上面に４条の平行する細沈線が施文されている。1159 の近くで出土した。1162 は壺の肩部で，明瞭に突出する三角突帯が６条残っている。溝南側の底面近くで出土した。

1163 は鉢形土器の口縁部である。口縁部をヨコナデし，それより下位は内外面ともナデ調整のあと縦位のミガキを不規則に施す。胎土に雲母が見られない。1164 は鉢形土器の底部と想定される。底径３cmで，想定され



第 211 図　弥生時代周溝墓３号（３）



1　黒褐色土　しまり強。粘性なし。層中に暗紫コラが多量に混じる。
2　暗褐色土　しまりやや強い。粘性なし。
3　黒色土　　しまり弱。粘性弱。
4　黒褐色土　しまり中。粘性弱。
5　黒色土　　しまりやや弱い。粘性なし。
6　黒褐色土　しまりやや弱い。粘性なし。

第 212 図　弥生時代周溝墓４号（１）

る器形に比して器壁が厚いが，残存部の器面調整は内外面ともに丁寧である。外面の半分ほどの面積に黒班が広がる。溝南西部の底面付近で出土した。

周溝墓４号（第 212～214 図 1165～1173）

Ｆ・Ｇ－ 26･27 区のⅢａ層上面で検出された。調査区内における微高地（Ｅ～Ｊ－ 25～27 区一帯）のほぼ頂部に位置しており，４号から南西の方向に土坑墓群がおおむね列状に連なっている。また，周辺には，Ⅱｂ層中で山ノ口式土器の集中出土箇所（第 216･217 図）があった。

Ⅲａ層（黒色土）の掘り下げ中，アカホヤ混じりの土（主体部の埋土３）の広がりを発見するとともに，その周辺に包含層が乾燥した時にのみ，灰白色の暗紫コラと考えられる土（周溝の埋土１）が環状に巡っているのを発見した。この状況を踏まえて，一帯の掘り下げを精査に切り替え，色調の変化等をもとに掘り進めたところ，灰白色の土の部分については周溝状の遺構となった。アカホヤ混じりの土については，除去したところ浅い掘り込みとなったが，その掘り込みの床面中央に，Ⅱｂ層に類似するしまりの弱い土が長方形に残る部分（主体部の埋土４）を新たに確認した。この土を除去した結果，断面長方形の深い土坑を検出し，最終的に２段掘り構造を持った主体部であることが判明した。

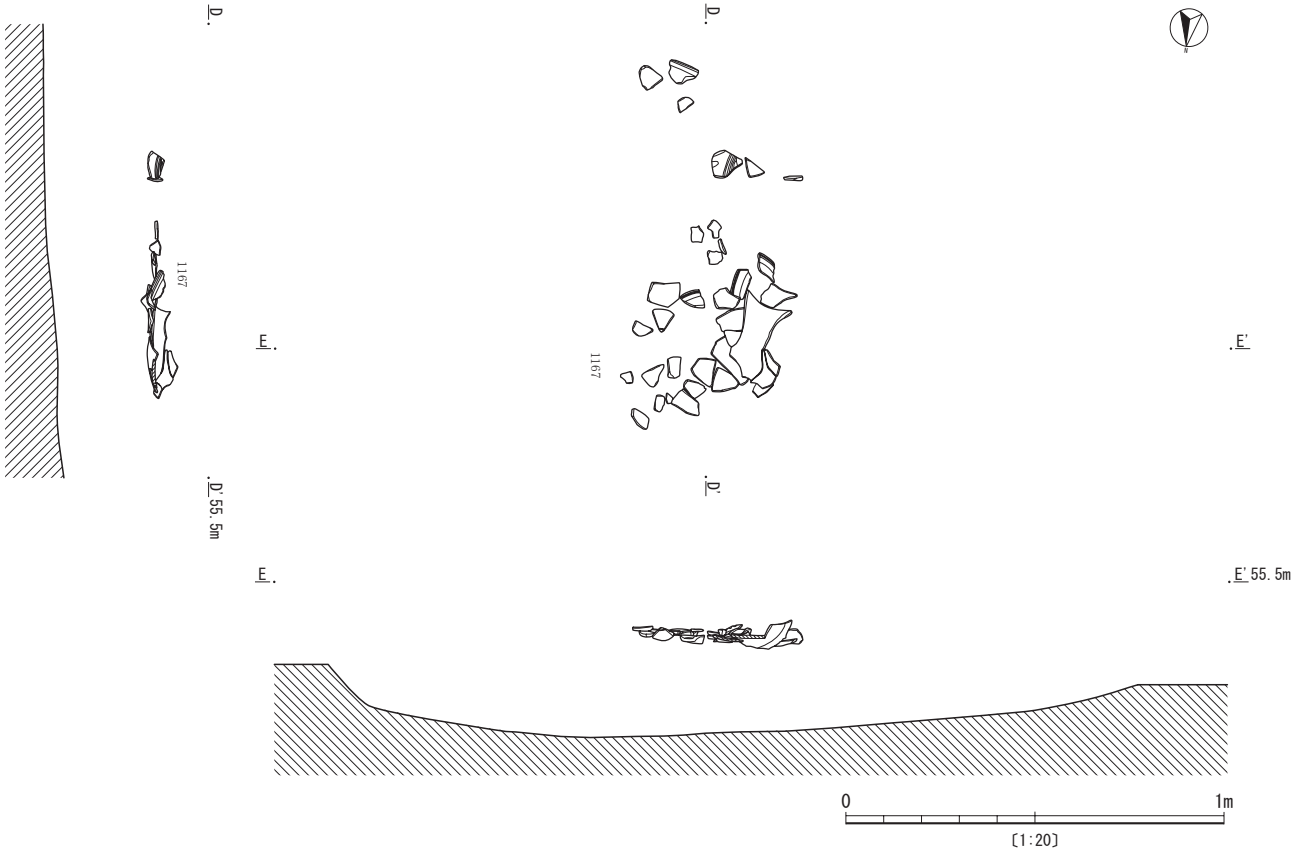
周溝は，外径で約 8.5 m，検出面での溝幅 1.2～2.0 m，検出面からの深さは約 0.3 mであり，平面形は環状で断面は逆台形状を呈する。規模の割には浅く，Ⅲｂ層中の池田降下軽石層を若干掘り込む程度だった。

２段掘り構造である主体部の規模は，浅くて広い１段目が長軸約３m，短軸約 2.5 m，検出面からの深さ約 0.3 mの平面隅丸長方形で断面皿状を呈し，狭くて深い２段目は長軸約２m，短軸約 0.5 m，検出面からの深さ約 0.9 mの，平面が長方形で断面は長軸面が略袋状と短軸面が長方形を呈する。

また，周溝と主体部の間にはⅢ層に該当する黒色土が堆積していた。墳丘等の検出も視野に精査したが，暗紫コラの検出といった不自然な土の堆積状況，硬化面の検出や遺物の一括出土状況など墳丘等の証明につながる発見には至らなかった。

周溝内の埋土は２枚に分層できた。上位の埋土１は，上部に暗紫コラが見える。埋土２は，Ⅱｂ層該当層と考える。おおむねレンズ状に堆積していた。

主体部の埋土は４枚に分層できた。そのうち，埋土４は１段目の一部にも堆積している。その下位の埋土５，６は分層されているが，特徴はほぼ同じで，各埋土ともおおよそ水平に堆積している。



第 213 図　弥生時代周溝墓４号（２）

遺物は，周溝東側で埋土１上位から横倒しになった二叉状口縁壺を中心とする一括出土域が検出された（第213図）ほかは，主体部を含めて，特殊な遺物や個体復元可能な遺物などは出土せず，図化した破片資料についても，上位からの出土で包含層出土遺物と接合する例もあるといった状況であった。全体として，遺構の時期特定や遺構の構造から想定される用途を補強するような出土状況には恵まれなかった。ただし，おおまかな傾向として下位では入来Ⅱ式土器が多く，上位では山ノ口Ⅱ式土器が多い点をあげることはできる。また，周構内から朝鮮半島系無文土器との関連を想起させる口縁部（第214図1170）の口縁部も出土した。

1167は，周溝東側で１層上位から倒れた状態で割れていた壺である。口径22㎝，胴径32.5㎝で，底部は欠損しており不明である。胴部は最大径付近を境に下半は丸く張り，上半はやや直線的に頸部に向けて窄まる。頸部は伸びずにすぐに口縁部に向けて外反する入来Ⅱ式土器の壺に一般的な器形である。一方，口縁部はやや特徴的な形状で，頸部の曲線を維持してさらにほぼ水平に伸びて，端部のみやや下向する。器壁は頸部～口縁部がわずかに厚みを増すものの全体的に一定で，法量に比して薄い。外面は全体に縦位のミガキ調整で仕上げられ，内面は胴部下半が斜位のヘラナデで上半は指オサエで調整している。口縁部はヨコナデである。口縁端部には凹線状の凹みが浅く広く施されるほか，口縁部上端（端部が下向し始める辺り）に三角突帯が横位に１条貼付される。そのため，口縁部を横からみると凹線状の凹みが上下に２条巡っているかのように見える。胴部外面には，下半に黒班がある。

1166は，1167の近隣で出土した，入来Ⅱ式土器の甕と考えられる。口径19㎝で，器壁はやや厚い。器面は摩耗しており不明瞭だが，ナデ調整は施されているようである。口縁部は短くて丸みが強く，上面は平坦に整形するが下面は接合部の隙間を消し切れていない。1170も，1167の近隣で出土した。器壁は薄く，小型の甕と想定される。内外面ともヨコナデで調整しているが，器面各所に成形時の凹凸が残る。口縁部は，頸部粘土帯の端部を外側に折り曲げて断面三角形に整形しているが，下面は接合部が明瞭に残っておりナデ消し等の作業をしていない。また，色調はにぶい黄橙色を呈し，胎土に雲母を含まない。朝鮮系無文土器の製作情報が入り込んでいる可能性を想像させる。1171は入来Ⅱ式土器の甕の脚台と考えられる。周溝西側の埋土２で出土した。底径８㎝，脚台高５㎝で，低めである。接地面は，平底に整える意図があったようだがわずかに凸レンズ状を呈し，脚端部は面取り整形で仕上げている。

1165は，壺の口縁部と考えられる。周溝埋土の他，土坑墓２号の埋土や周溝墓４号周辺に散乱していた。口径は50㎝程度に及ぶと想定され，大型である。口縁内面は鋭く屈曲し，下向する口縁部上面は平坦に整えている。器面は内外ともに横基調のナデ調整だが，一部ミガキ状になっている部分もある。口縁端部には凹線状の凹みが巡るほか，口縁部上面には，整形のやや雑な縦位の短い三角突帯が３条１組で貼付されている箇所がある。1168は小振りな壺の口縁部と考えられる。主体部１段目南西角付近の埋土１及び４から出土した。口径20㎝で，器壁は口縁部が頸部より厚い。器面は，口縁部及び頸部内面はヨコナデ，頸部外面は縦位のハケナデで調整されているが，口縁部上面にはケズリ状の仕上げで終わっている部分がある。色調に特徴があり，口縁部上面から頸部外面は特徴的な濃茶褐色，頸部内面は橙色を呈しており，双方の色調は屈曲部内面で漸移的に変化している。1169は壺の底部である。1167の出土域から１ｍほど南に離れた埋土２から出土した（包含層出土資料と接合）。底径６㎝だが，漏斗状に広がる器形と厚さ約４㎝に及ぶ底部の厚さから，ある程度の法量がある壺の底部と想定される。器面は内外ともに剥落が著しく詳細不明である。接地面も平底と考えられるが，剥落のため現状は凸凹している。

1172は打製石鏃である。周溝埋土１層から出土した。緻密な安山岩を素材とし，両方の脚端部を欠損する。長さ2.5㎝，幅２㎝，厚さ0.5㎝である。

1173は打製石斧の基部である。埋土上層で出土した。

ホルンフェルス製で，両側辺は浅く抉りが入る。再利用されたような痕跡はみられない。長さ６㎝，幅７㎝，厚さ2.5㎝，重さ92.5ｇである。

周溝墓５号（第215図1174）

Ｆ－22・23区のⅢｂ層上面で検出された。一部が近世の溝で削平されているほか，中心部で検出した土坑も樹痕で撹乱されているが，かろうじて全形の把握だけはすることができた遺構である。

周溝は，規模が外形で長軸約4.5ｍ，短軸約４ｍ，検出面（削平部除く）からの深さ0.2ｍで，平面形は方形である。断面は「U」字状を呈する。

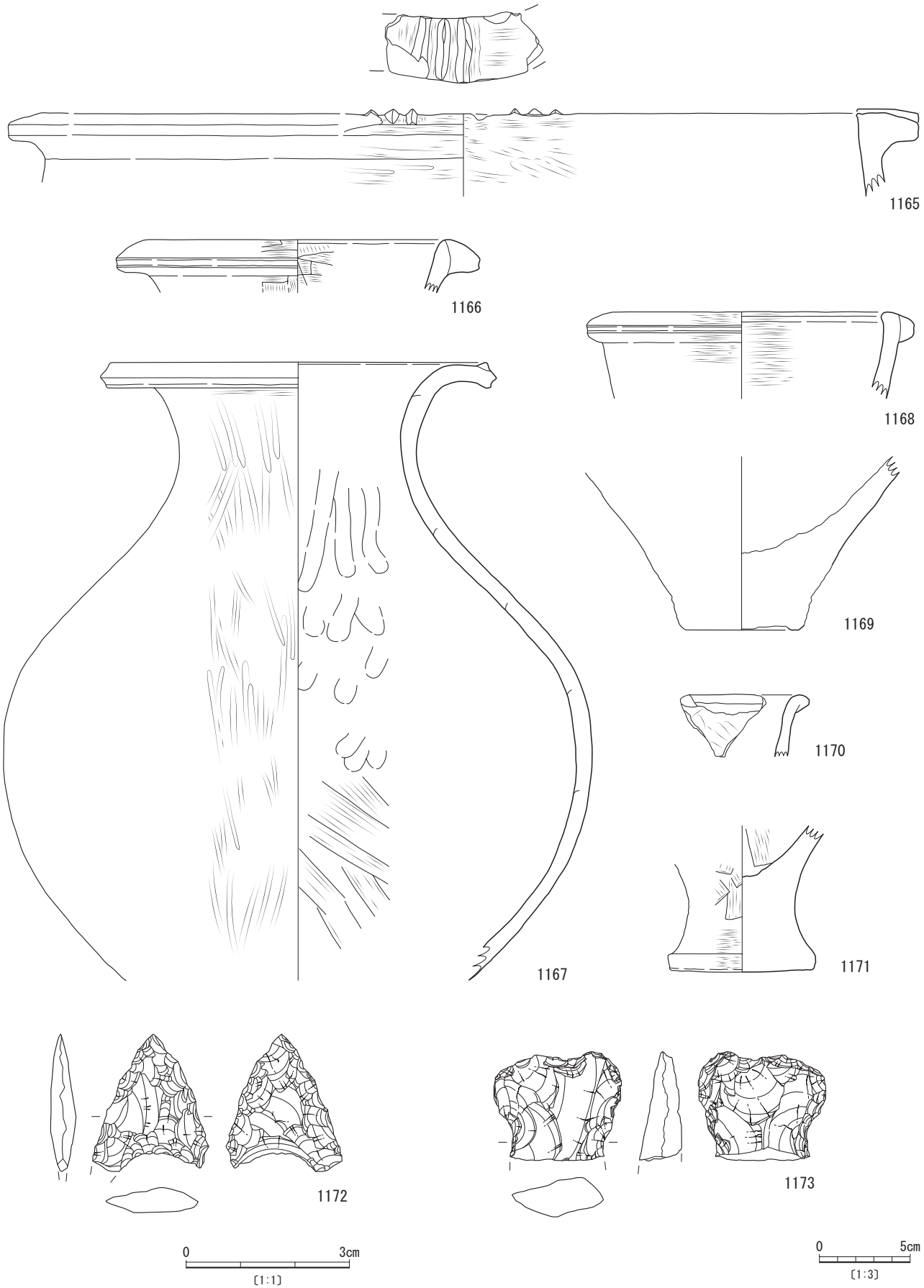
埋土は，３層に分けることができた。各層は斜交葉理状の堆積状況を示していることから，自然堆積により埋没したものと想定される。ただし，堆積方向の推定ができないため，墳丘の存在等も想定できない。

遺物は，埋土中から土器片（1174）が出土した。

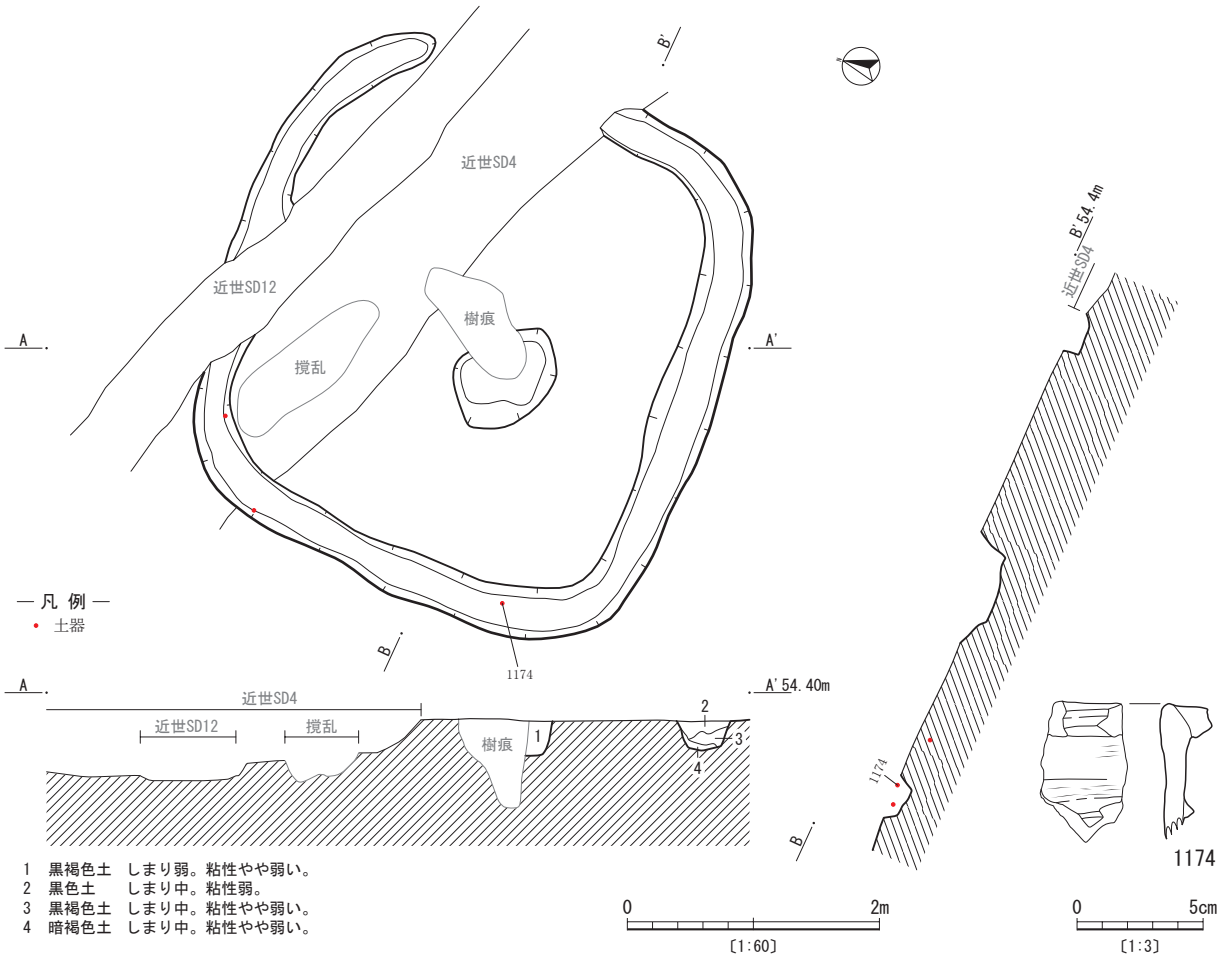
中心の土坑は，残存部で長径1.0ｍ，短径0.7ｍ，検出面（削平部除く）からの深さ0.3ｍである。

埋土は単層で，遺物は出土しなかった。

以上の状況から，周溝墓３号や４号のような暗紫コラは確認されていないが，近世の遺構に削平されていること，全体的な埋土の特徴が，他の周溝墓や弥生時代中期と比定できた遺構の埋土と類似することから，この遺構



第 214 図　弥生時代周溝墓４号（３）



第 215 図　弥生時代周溝墓５号

も同時期のものと想定している。

1174 は，入来Ⅱ式土器の甕の口縁部と考えられる。水平に屈曲する口縁部はごく短く，端部に凹線状の凹みが施される。１条残っている三角突帯は，口縁部寄りに貼付され小振りである。小片のため詳細は不明だが，全形も小振りとなる可能性があるほか，焼成も他の甕よりかなり良好である。

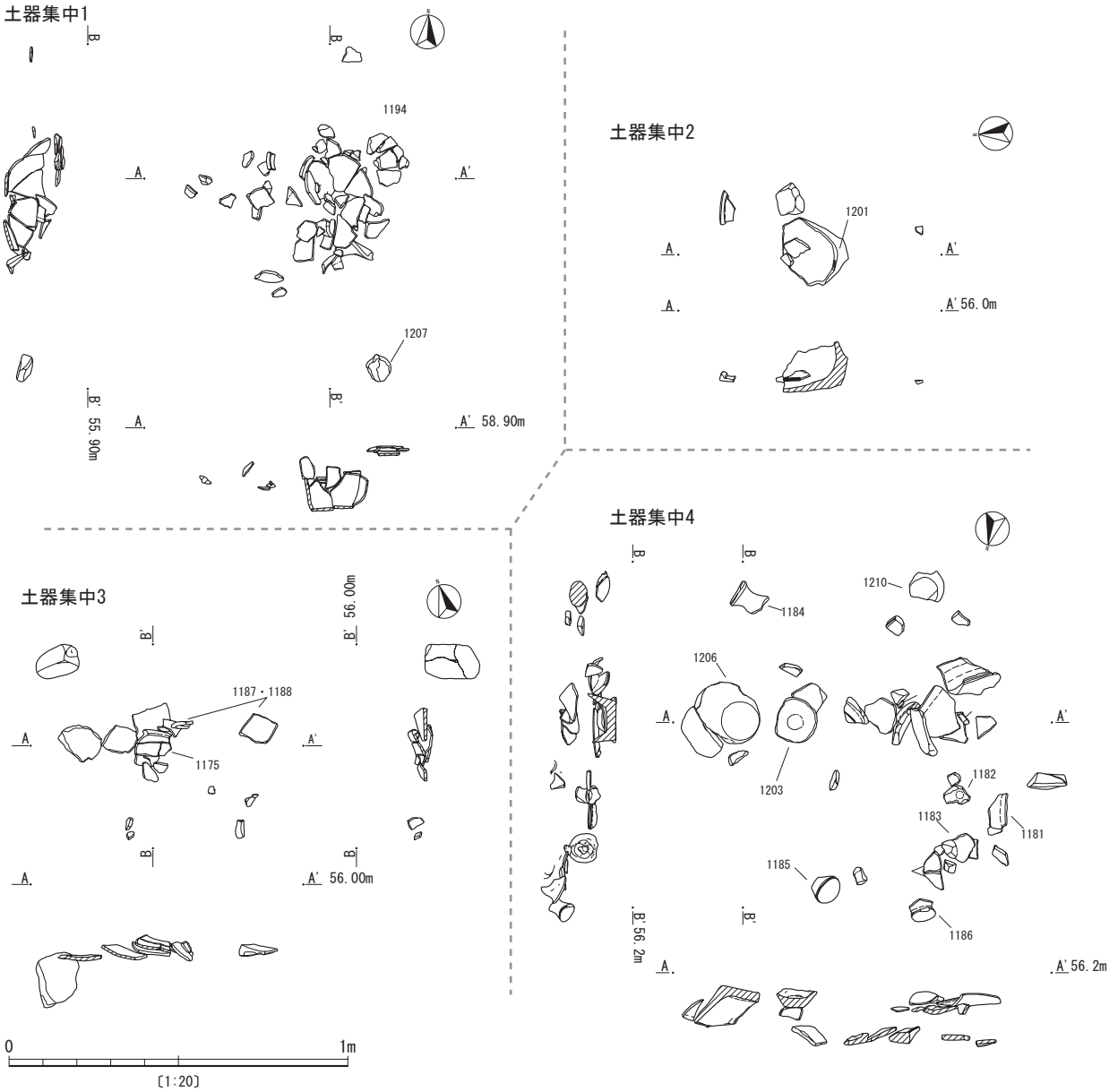
⑤土器集中

Ｆ・Ｇ－27区周辺では完形品や大型の破片が集中して出土した。当該区周辺は周溝墓，土坑墓などが多く立地し壺形土器が目立つことから，発掘調査時も慎重に調査を進め，残存状況が良い遺物については出土の状態を図化記録した。その結果，整理作業の段階で，土器の出土状態と周辺遺構との関連性について考慮すべき点が多いと判断し，出土した遺物に関連する明確な掘り込みなどは検出されなかったが土器集中として扱い，出土状況等を記載することとした。これらの遺物については準遺構扱いの遺物とし，同時にこれらと関連性が疑われるＦ・Ｇ－27区出土の遺物も合わせてここで掲載することとした。遺物の概要については，器種組成が明確となるように甕形土器，大型甕形土器，壺形土器の順に記載する。

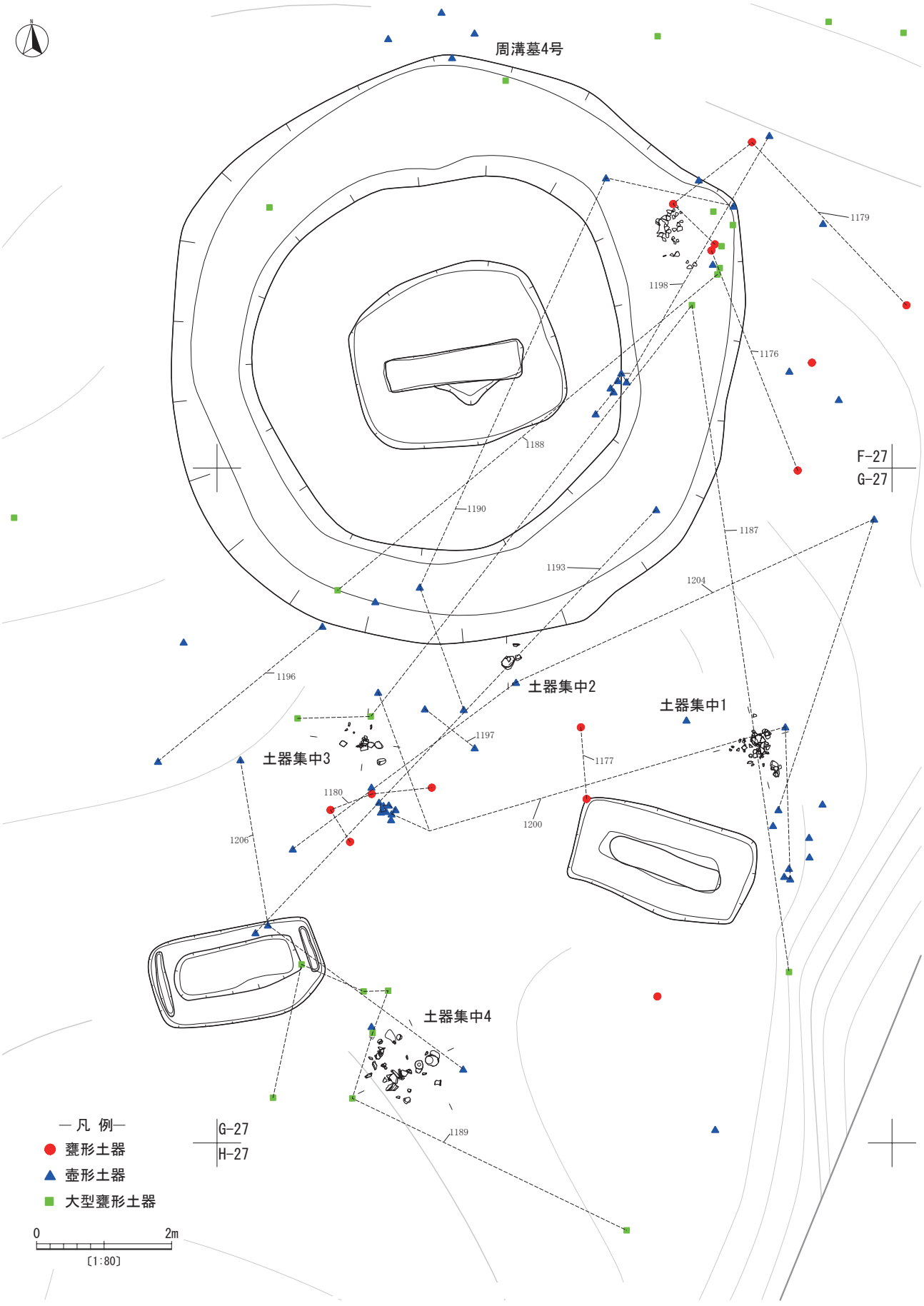
土器集中１は円形周溝墓４号と土坑墓１号の間で検出された。範囲はおよそ径0.5ｍに収まる形であった。本集中域からは壺形土器の1194・1207が出土した。1194はほぼ完形に近い形で復元されたことや底部が接地した状態だったことから，意図的に安置された土器と推察される。

土器集中２は周溝墓４号の南側で検出された。土器集中１に比べて構成される土器数が少なく，範囲も径0.4ｍと小規模であるが，壺形土器の底部は残存状況が良かったため，土器集中として扱った。土器は壺形土器の口縁部及び底部で，特に底部資料は残存度合いが良好であった。

土器集中３は土器集中２から南西に1.2ｍの地点で検



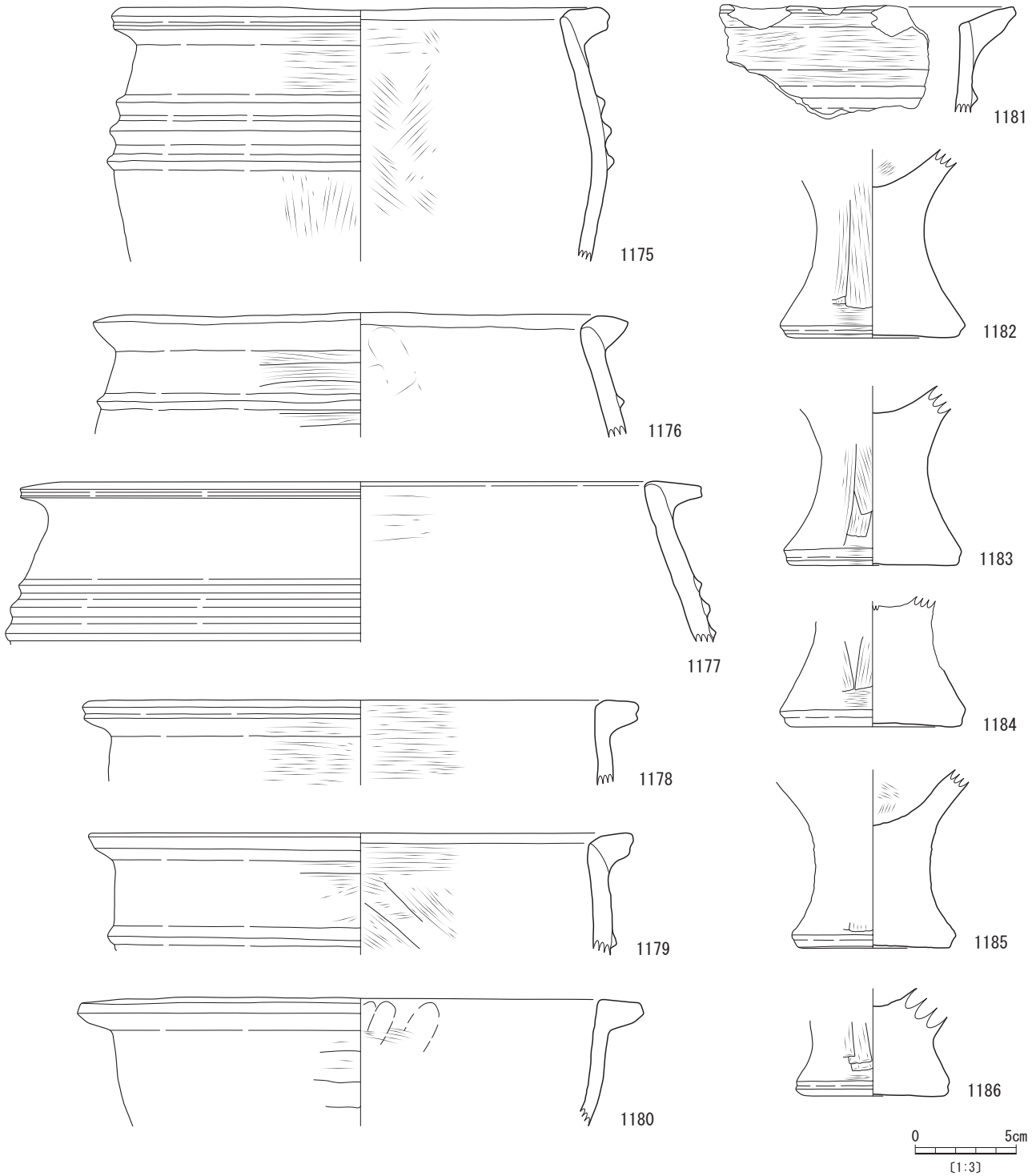
第216図　Ｆ－27区土器集中図



第 217 図　F － 27 区周辺遺物出土分布図

出された。土器 19 点で構成され，大型甕形土器，甕形土器が出土している。大型甕形土器は口縁部と胴部が出土しているが，底部はなく接合はできなかった。大型甕形土器は，本遺跡では出土数が少なく，土器集中が検出されている 27 区ライン周辺で見られたのが特徴的である。

土器集中４は土坑墓２号の南東約１ｍ地点で検出された。1.3 ｍ× 1.0 ｍの径に収まる範囲で，甕形土器，壺形土器で構成される。特に底部が多く，狭い範囲に甕形土器の底部５点，壺形土器の底部２点が見られることから，人為的な配置が示唆される状況である。また，近接して台石が１点出土している。当初，立石なども想定して調査を行ったが，検出レベルに差があることなどから包含層出土の石器として扱った（第 285 図 1733）。



第 218 図　Ｆ－ 27 区周辺出土土器（１）

甕形土器（第 218 図 1175～1186）

甕形土器は口縁部から底部までの 12 点を掲載する。口縁部の長さが短いものが主体である。

1175～1177 は胴部から口縁部に向かって内弯する器形で，胴部には三角突帯が巡る。

1175 は口径が 24.6㎝で，胴部最大径付近に３条の三角突帯を貼り付ける。口唇には幅広の凹線が巡る。外面は突帯より上位は横方向のナデ，下位は縦方向ナデとなるが，磨耗による影響で判然としない。1176 は口径が 26.4㎝である。口縁部は上面が丸みを帯び，全体に歪みが見られる。三角突帯は１条で，貼り付け後に横方向のハケナデ調整で器面を整えているため，突帯上にもハケ目が残る。1177 は 1175・1176 に比べ大きい土器で，口径が 27㎝である。口縁部断面形は三角形を呈し，口唇部には凹線が巡る。胴部には３条以上の三角突帯が貼り付けられており，全体的に磨耗が激しい。

1178 は口縁部上面も含めてナデ調整が丁寧で端整である。口径は 27.6㎝である。

1179 は口径 27㎝で，口唇部をナデによって調整することで面取りされ，口縁部断面が三角形状となる。1177 と類似する調整である。

1180 は突帯のない土器で，口径は 28㎝である。口唇部は面取りされて直線的な稜が作出される。外面は丁寧な横ナデ調整が施されるが，内面は指頭圧痕が残る。

1181 は口縁が上向きに長くのびる。口縁部下はケズリ様のナデによって，膨らみをもつように稜が生まれ口唇部は細くなる。口縁部に近い位置に三角突帯が１条見られる。

1182～1186 は底部で，端部には凹線が見られる。底径は 6.9～8.5㎝で，最も小さい 1186 を除いてほとんど同じ大きさである。

1182・1183 は底部端を横方向にナデ調整した後，縦方向のハケナデ調整を施す。ともに被熱による影響か，内底部はやや黒色がかる。1184・1185 は比熱による影響で外面が剥落している。1185 は特に剥落がひどく，粘土帯の接合箇所から薄皮上に器面が剥離し，調整は不明瞭である。1184 は部分的にハケナデ調整及びナデ調整が確認できる。1186 は他の底部に比べ底から内底部までの高さが低く，径も小さい。端部はやや丸みを帯びる。

大型甕形土器（第 219 図 1187～1189）

３点出土しており，1187・1188 は土器集中３から出土した。

1187 は口径が 54.4㎝で，口縁部がやや内弯する器形である。胴部には５条の三角突帯が巡る。口縁部の形状は通常の甕形土器と変化がない。外面調整は突帯部下位が斜め方向のハケナデ調整なのに対して，上位は縦方向のハケナデ調整である。

1188 は 1187 に比べて器形が直線的に立ち上がる。突帯の数は同数であるが，突帯上位の調整が横ナデとなる点が異なる。

1189 は口縁が細長く上向きにのびる。口径は 54.4㎝で，胴部から口縁部に向かってゆるやかに広がり，胴部最大径からほぼまっすぐ立ち上がる。突帯は断面三角形を呈し，口縁部径の位置まで張り出す。その下位には墨汁風の茶褐色の変色部分が認められるが，規則性がなく人為的な塗色の可能性は低い。外面はハケナデ調整の後，横ナデを施し，内面は横方向のハケナデ調整主体だが，一部ヘラナデがミガキ様となって光沢を帯びる。

壺形土器（第 220～222 図 1190～1211）

1190～1211 は口縁部が逆「Ｌ」字状を呈すもの，無頸壺，長頸壺，広口口縁壺などがみられる。

1190～1193 は口縁部断面形が逆「Ｌ」字状となる。

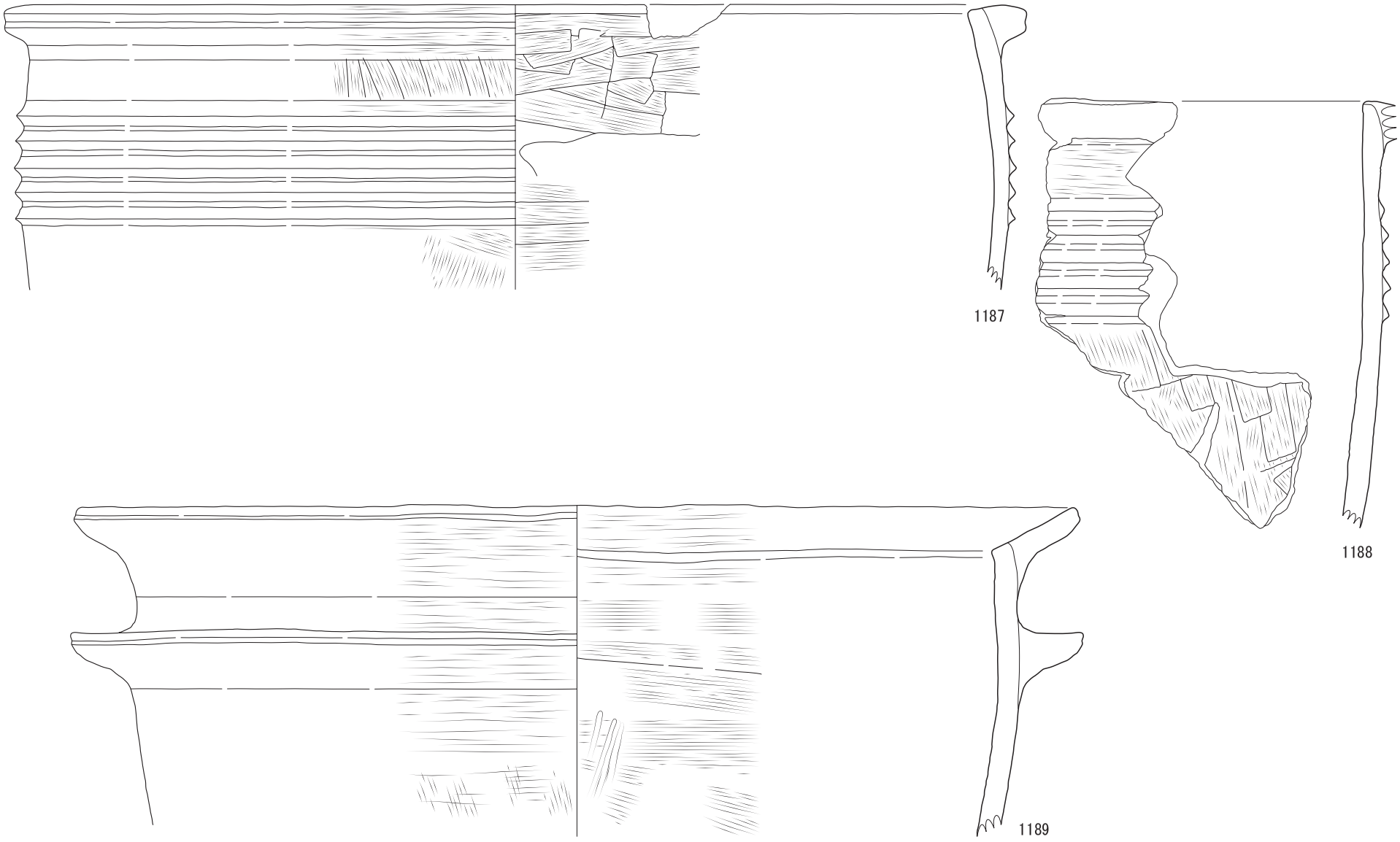
1190 は口径が 20.9㎝の，口縁から肩部までの資料である。口縁は下がり気味の逆「Ｌ」字状を呈し，端部には凹線が巡る。肩部には３条の三角突帯が巡っていたと見られるが，１条は完全に欠損し貼付痕のみが確認される。調整は外面がミガキ主体で，内面は工具ナデである。焼成が若干あまく，軟質のためかミガキによる光沢がにぶい。1191 も口径 18.4㎝の逆「Ｌ」字状の口縁で，肩部付近には２条の沈線が巡る。内外面ともにミガキ主体の調整だが，内面の頸部下位は斜めの工具ナデである。1192 は口縁部が欠損しているが，1190・1191 と同様な口縁部を有していたと考えられる。上記２点に比べ磨耗が激しく調整も不明瞭である。1193 は口縁部から胴部にかけて残存する。肩部から胴部にかけてはさほど張り出さない。口縁部は丸まり口唇部には凹線が巡る。口径は 15.2㎝である。調整は内面，外面ともハケナデによって調整し，外面は横ナデとミガキによって最終調整することで精緻な器面を呈す。一方，内面は剥落によって不明瞭な部分が大きい。

1194 は完形の壺形土器である。口径 14.8㎝，器高 34㎝，底径 5.4㎝で，口縁部は厚手の断面三角形状の粘土帯を貼り付けることで二叉状となる。貼り付けた粘土帯と体部との接合部はナデつけられず隙間がみられる。胴部最大径はほぼ中央にあり，胴部の器形は球形に近い。底部は中央部を削り，上げ底とする。器面は磨耗して調整は判然としないが，外面は斜め方向のヘラナデ，内面は縦方向のヘラナデが若干確認できる。口縁部と体部の接合箇所に調整がないことから，擬朝鮮系土器の製作技法の影響を受けた可能性が指摘できるものである。

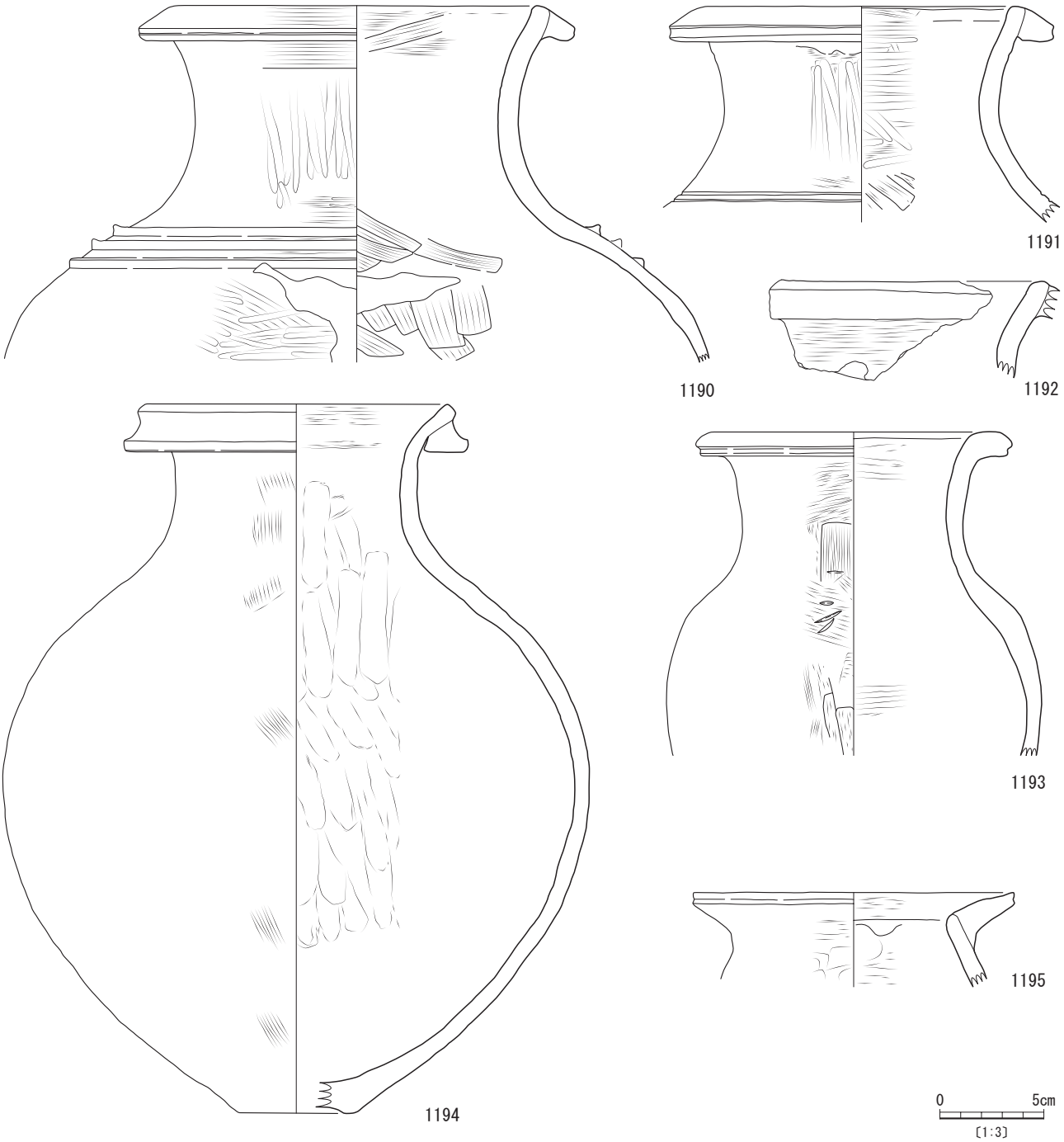
1195 は無頸の壺形土器で，口径は 16㎝である。口縁部は細長くのびて，口唇部には凹線が巡る。横ナデ主体の調整である。

1196～1199 は長頸壺である。

1196 は胴部上半で５条の三角突帯が確認できる。内面の調整は縦方向のナデである。1197 は復元した胴部



第 219 図　F － 27 区周辺出土土器（２）



第 220 図　F － 27 区周辺出土土器（３）

最大径が 11cmで，同箇所に３条の三角突帯が貼り付けられ，さらに２cm上部に１条同種の突帯が確認できる。突帯間には，外からの打撃によって空けられた孔が見られる。1198 は底部付近から頸部にかけての資料で，復元した胴部最大径が 19cmである。いわゆる算盤珠状の形で胴部最大径および頸部付近に２条と６条の突帯が貼り付けられる。最下位にある突帯は，端部が面取りされ平坦になる。1199 も 1198 同様胴部最大径の箇所に突帯が貼り付けられる。突帯は２条で断面形状は「M」字状となる。２条の突帯という点と，幅広ではあるが，断面「M」字状突帯を意識した製作意図が見受けられる。胎土はきめ細やかで，横方向のミガキ調整が施される。

1200 は広口口縁の壺形土器である。土器自体では接合ができなかったため図上復元を行った。口縁部は大きく開いた形で，口径は 36cmである。頸部は「く」の字状に屈曲して，胴部に向かって再度大きく張り出す。器厚は概して薄手で，焼成も良い。胴部最大径の箇所と頸部に三角突帯が１条ずつ貼り付けられる。胴部下半には径

３cmほどの穿孔が２か所で確認できる。外面は横方向のナデ，内面はヘラナデ調整である。胎土中に石英と黒石を含み，明黄褐色の色調を呈すことや器形などから，搬入された土器と考えられる。

1201～1211 は底部である。

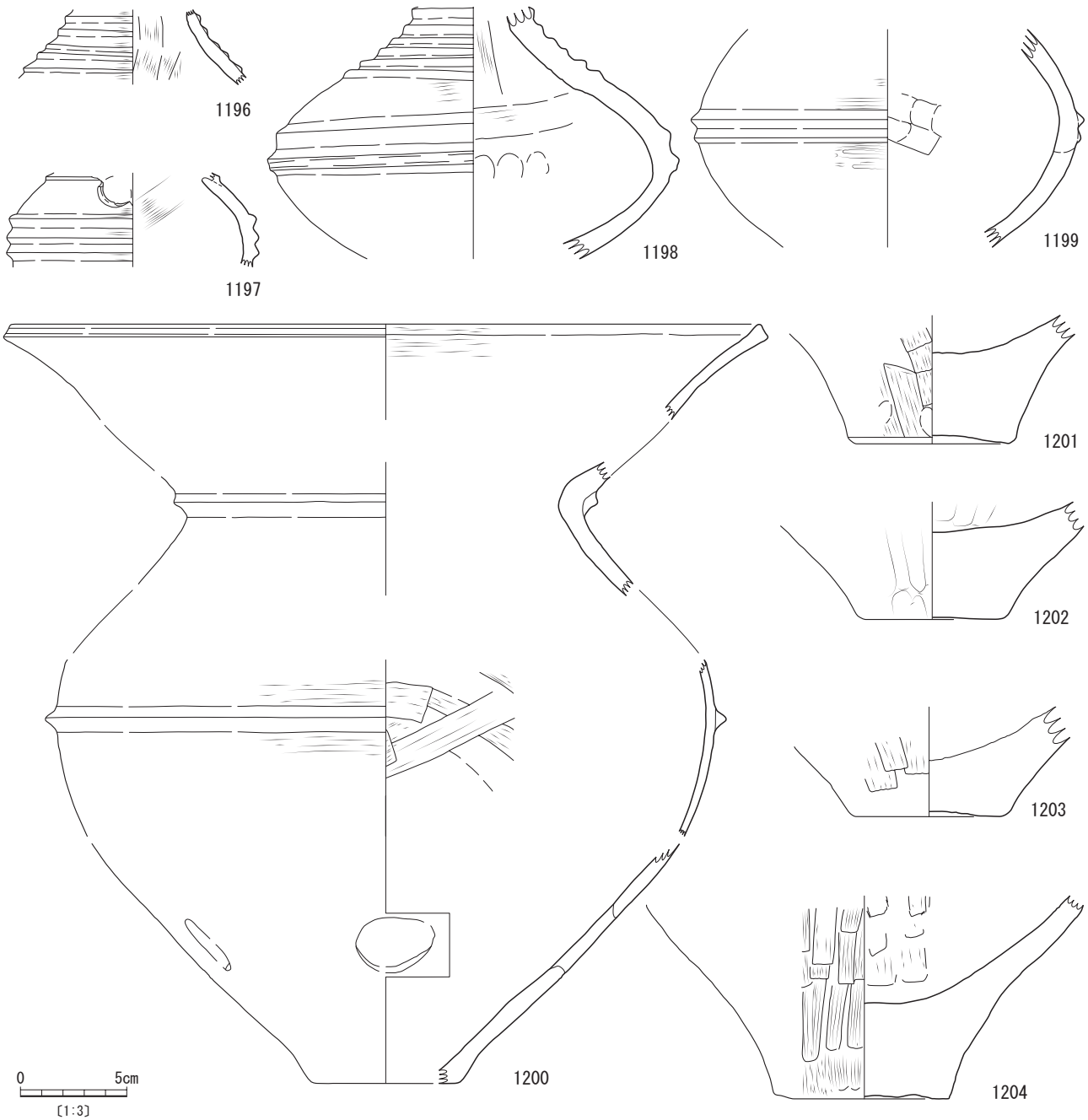
1201～1204 は底から内底部に厚みがあるもので上げ底となる。外面調整はヘラナデによるが，内面は剥離により観察できないものが多く 1202・1204 はかろうじて縦方向のヘラナデが確認できる。

1205 は底部から胴部にかけて残存する。胴部は張り出すため球形の器形と推察される。内外面ともヘラナデ調整で，外面は一部光沢が見られるが，摩滅による影響が大きい。

1206 は底径が 11cmと最も大きい。底の端部は外にやや張り出す。内外面とも摩滅が激しく凸凹し，調整は不明瞭であるが，内面で部分的に横方向のヘラナデが観察できる。内底部は器面が剥離したことにより，円形粘土盤と体部の粘土帯接合箇所に稜が生じる。

1207 は底端部がやや丸みをもつ。調整は摩滅により不明瞭である。胎土中に含まれる雲母が少なく石英が目立つ。

1208 は上げ底となる。胎土がきめ細かく，外面に混和



第 221 図　Ｆ－ 27 区周辺出土土器（４）

材が露出しない。外面は斜め方向のヘラナデ調整で，内面は剥離が多く判然としない。

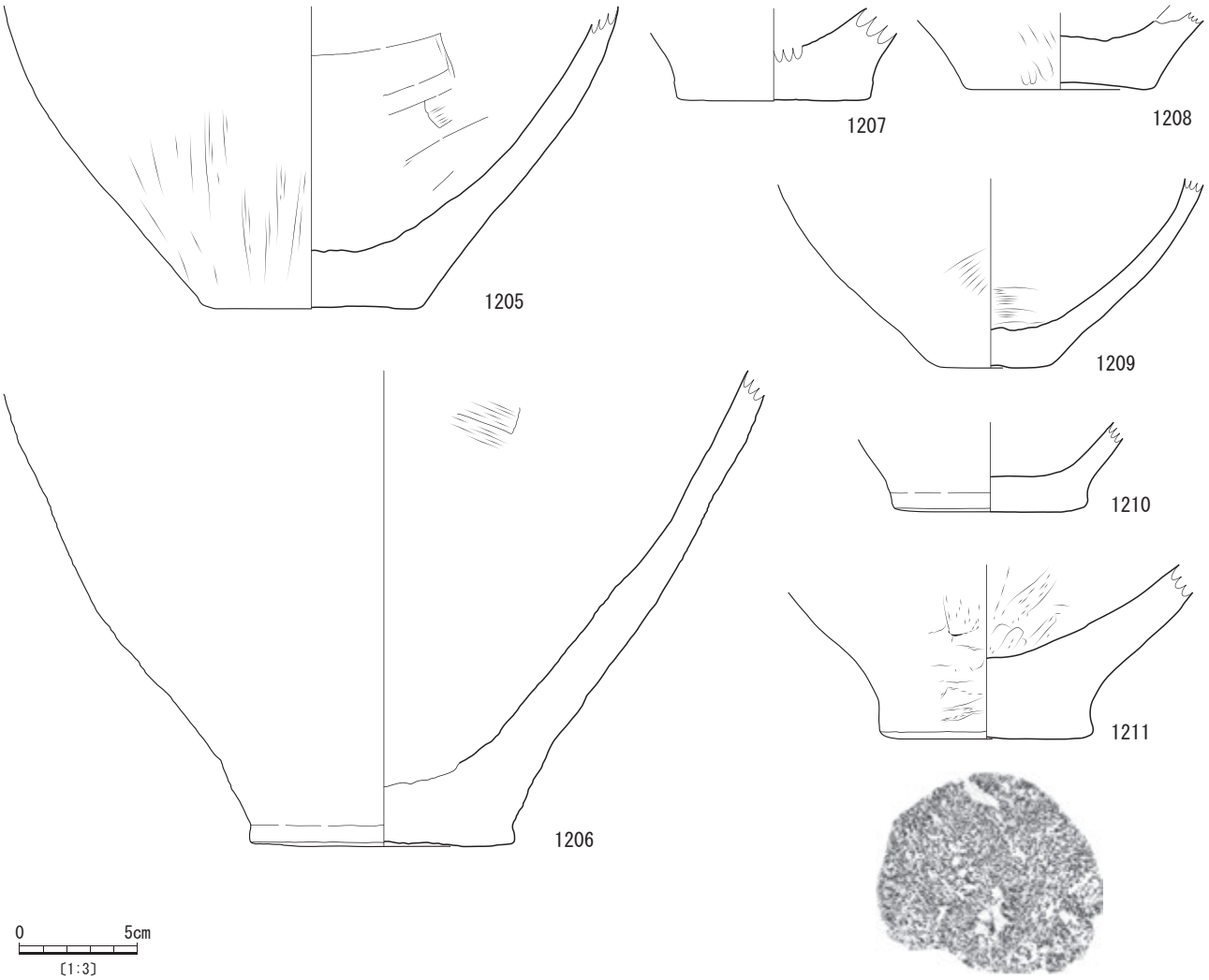
1209 は 1205 に比べ小さいが，器形が類似する。胎土はキメが細かいが，摩滅により露胎し，鉱物粒が目立つ。内底部の粘土帯接合箇所は横ナデが見られる。

1210・1211 は大きさが異なるが端部形状が類似する。1210 は残存部位での観察では内底部が平坦で，直線的に外反する器形である。調整は摩滅により不明瞭である。1211 はやや弯曲しながら外反する器形である。摩滅はあるものの，ヘラナデ調整が確認できる。底には不明瞭ながら布圧痕様の痕跡が確認できる。

⑥土坑墓

住居が集中する東区から谷を隔てた台地奥側（調査区西側）に位置する 25～27 区列付近の，丘陵のゆるやかな南西下りの稜線上に 15 基，西側の緩斜面に５基ある。

なお，ここに紹介する遺構は，一部を除き，個別の状況としては土坑墓と積極的に認定するには情報に乏しい遺構も多いが，個々の総体的な特徴や調査区内での分布状況（土坑相互，また他の遺構を含めた）等を踏まえ，土坑墓と判断した。



第 222 図　Ｆ－ 27 区周辺出土土器（５）

土坑墓１号（第 223 図）

Ｇ－ 27 区のⅢａ層で検出された。当初，アカホヤ火山灰の集中域が近接して２か所（北側：約 1.4 ｍ×約 0.3 ｍ，厚さ約１㎝，南側：約 1.6 ｍ×約 0.3 ｍ，厚さ約３㎝）検出されたため，付近を確認したところ，周辺の土も包含層より黒かったため，一帯を遺構調査に切り替えた。黒色土を除去した結果，アカホヤ火山灰集中域を含む，長軸 2.7 ｍ，短軸 1.5 ｍ，検出面からの深さ 0.2 ｍの平面形が隅丸長方形，断面略方形を呈する土坑となった。さらに，底面中央部（２か所のアカホヤ火山灰集中域の間）で，長軸 1.7 ｍ，短軸 0.4 ｍ，１段目底面からの深さ 0.5 ｍの平面形が長楕円形，断面略台形を呈する土坑を新たに検出した。１段目と２段目の主軸は，N 62° Wでほぼ一致する。こうした状況を踏まえ，２段目の土坑を主体部とする木棺墓と想定して遺構内の精査を実施したが，主体部には側板の痕跡等，木棺の推定に繋がる構造や遺物は発見されなかった。

埋土は，４層に分層できた。各埋土とも基本的には粘性の弱い黒褐色土であるが，埋土３のみアカホヤ火山灰を含んでいなかった。また，冒頭のアカホヤ火山灰集中域と関連するような層は確認されなかった。おおむねレンズ状の堆積状況を示しているが，この状況からでは少なくとも墓坑２段目が完全に埋まるまで開口していたことになり，埋没過程における何らかの意図的行為の想定が必要となる。

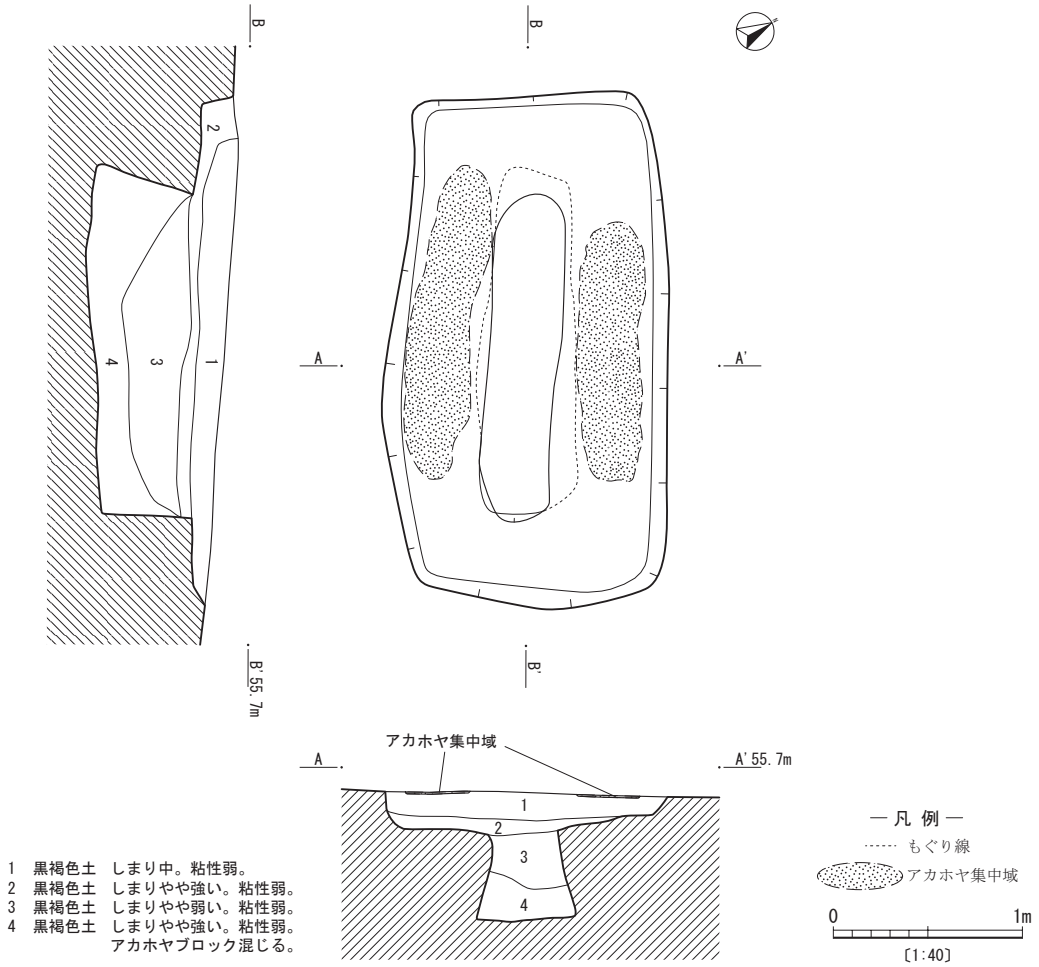
遺物は，埋土１から土器小片が出土したのみだった。また，主体部床面から 10㎝程度上面までの埋土をフローテーションにかけたが，遺物等は出土しなかった。

土坑墓２号（第 224 図左）

Ｇ－ 26・27 区のⅢｂ層で検出された。N 86° Wを主軸とした，長軸 2.5 ｍ，短軸 1.4 ｍ，検出面からの深さ 0.3 ｍの隅丸長方形の平面形を呈する。床面の中央には，主軸をほぼ同じくする長軸 1.9 ｍ，短軸 0.15 ｍ，床面からの深さ 0.1 ｍほどの掘り込みを伴うほか，土坑短辺にあたる西壁と東壁の際には溝状の掘り込みも１条ずつ（東壁：長さ 96㎝，幅 14㎝，床からの深さ８㎝，西壁：長さ 98㎝，幅 16㎝，床からの深さ 12㎝）検出した。この溝状掘り込みについては，小口板の痕跡の可能性もある。

埋土は，床面の掘り込み等を含めて黒色土の単層だった。

遺物は，埋土中から入来Ⅱ式～山ノ口式土器と想定さ



第 223 図　弥生時代土坑墓１号

れる破片が出土しているが，いずれも小片であり流れ込んだものと判断した。フローテーションも実施したが，遺物は出土しなかった。

土坑墓３号（第 224 図右 1212）

G－26 区のⅢａ層で検出された。Ⅲａ層（黒色土）掘り下げ中にアカホヤ火山灰腐植土層が集中する範囲を発見し，それをもとに平面形を想定して土坑と認定し調査に着手した。その結果，N 81°Wを主軸とした，２段の掘り込みを呈する土坑墓であることが判明した。

１段目は，長軸 2.5 m，短軸 1.2 mの平面隅丸長方形を呈し，検出面からの深さは 0.2 mである。２段目は，長軸 1.7 m，短軸 0.6 m，１段目床面からの深さ 1.0 mで主軸が１段目からわずかに南西にずれる。断面形が台形で上端がオーバーハングしている。また，平面形は隅丸長方形だが長辺の東側上端は掘り広げられていたり，壁面には所々に段が設けられているなど，やや複雑な形状をしている。なお，木棺墓を想定して床面の精査等を実施したが，２号で検出した溝状の掘り込みなどは検出されなかった。

埋土はおおむね黒褐色土で，検出面ではアカホヤ火山灰腐植土が多い傾向にあったが，１号のように面の抽出や分層ができるようなものではなかった。

1212 は，入来Ⅱ式土器の甕の口縁部と考えられる。口縁部上面は指頭押圧のためややしゃくれ，端部には凹線状の凹みが巡る。口縁部下面にススが付着する。埋土上位から出土しており，厳密には墓坑に伴う可能性は低い。

その他，床面から 10㎝程度上面までの埋土をフローテーションにかけたが，遺物は出土しなかった。

土坑墓４号（第 225 図）

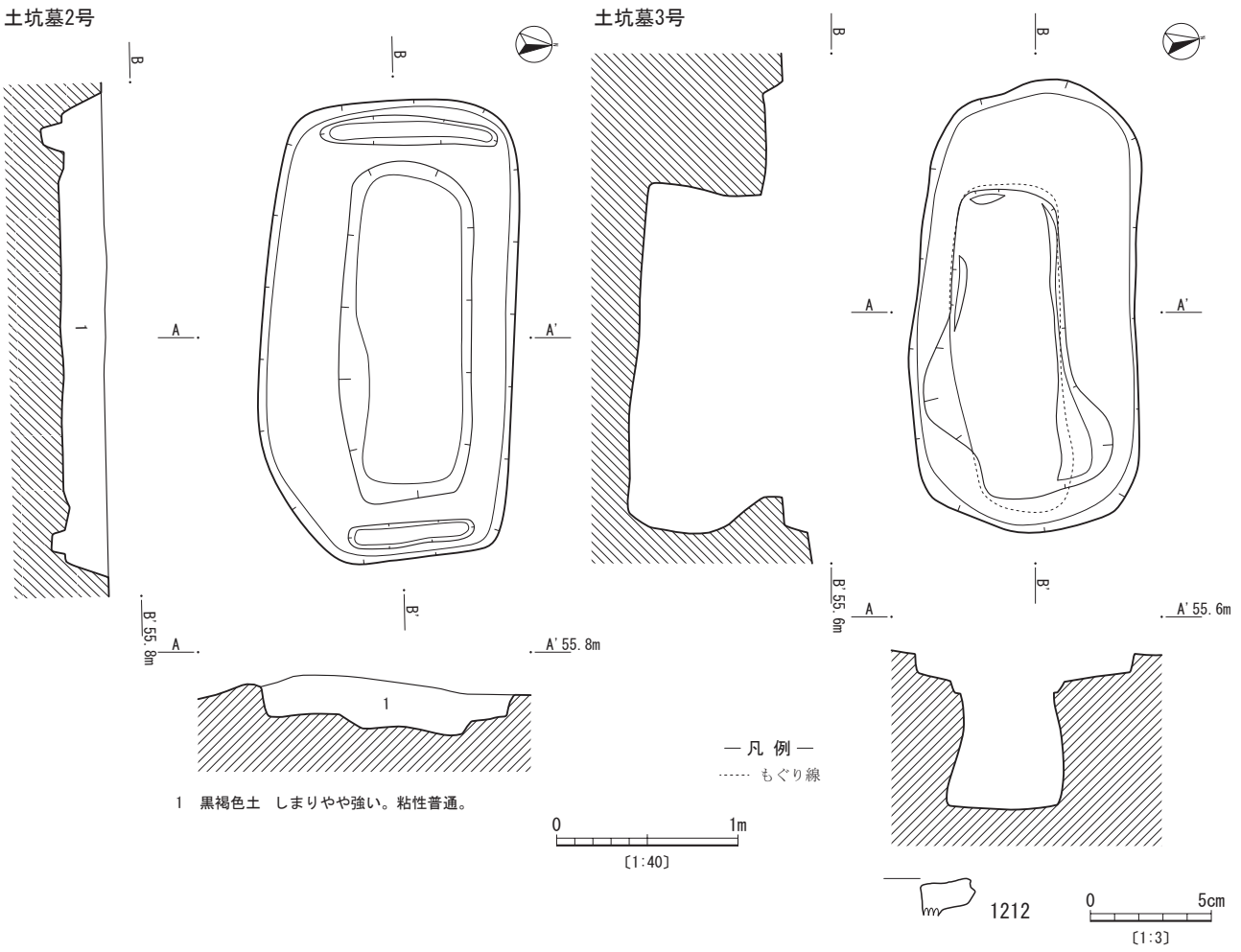
H－26 区のⅢｂ層上面で検出された。N 77°Wを主軸とした，長軸 1.9 m，短軸 0.5 m，検出面からの深さ 0.5 mの平面が長楕円形，断面はやや袋状を呈する墓坑である。床面は東西端がやや深くなっている。

埋土は２層に分層できたが，主には埋土１（黒色土）で埋土２は壁面の小規模な崩壊によるものとみられる。

遺物は出土していない。

土坑墓５号（第 225 図）

H－26 区のⅢｂ層上面で検出された。N 86°Wを主軸とした，長軸 1.8 m，短軸 1.0 m，検出面からの深さ 0.5 mの隅丸長方形を呈する。床面が，東西両端部（両



第 224 図　弥生時代土坑墓２・３号

短辺側）で浅く凹んでいた。また，南壁が地山ではなく５～10㎝大のアカホヤブロックと池田降下軽石が多量に混じる土だったことから，これを除去したところ，長軸1.9ｍ，奥行0.6ｍ，床面からの高さ0.4ｍの横穴状の構造物が検出された。当初検出した墓坑の南側に掘り込まれていたものと想定されるが，埋土２の状況等から天井部分が崩落したものと考えられ，本来の構造は不明である。

埋土は，横穴部を含めて２層に分けられた。横穴部の床面には埋土１がごく薄く堆積していたことから，ある程度空間が維持されていたものと想定されるが，埋土からは閉塞を伺わせるような状況を見いだせなかった。

遺物は出土しなかった。

土坑墓６号（第225図1213）

Ｈ－26区のⅢｂ層上面で検出された。土坑墓10号と同じく中世の溝状遺構に切られているがＮ75°Ｗを主軸とした，長軸1.7ｍ（現状），短軸0.9ｍ，検出面からの深さ0.5ｍの平面隅丸長方形と想定される土坑墓である。

南壁にはⅢｂ・Ⅳａ層を天井とした平面形が不整な長楕円形の横穴（長軸2.1ｍ，奥行0.9ｍ，開口部の高さ0.4ｍ，最奥部の高さ0.1ｍ）が掘り込まれている。埋土２・４の堆積状況から，この横穴が主体部と想定される。

埋土は，５層に分層できた。全体的におおよそ水平堆積をしている。埋土１は３～５㎝大のアカホヤブロックとⅡ層の黒色土が混じっており，埋土２・３はしまりが弱い。埋土５は横穴の主な埋土で暗褐色を呈し，しまりがやや強い。埋土４は５～10㎝大のアカホヤブロックが不均等だが多量に混じる。この状況は，土塊閉塞の可能性を想起させる。ただし，６号以外の横口式土坑墓からは，閉塞状況を想定させるような痕跡は確認できない。

遺物は入来Ⅱ式～山ノ口Ⅱ式土器と考えられる甕の脚台が埋土４の土坑側（横穴の開口部）付近から出土している。1213は，底径7.5㎝，脚台高6.0㎝で，接地面は平底である。外面は縦位のヘラナデを丁寧に施している。端部は板状工具で面取りしているが，工具の端を接地面まで下ろさないことで端部下端にわずかな胎土の盛り上がりを形成させ，凹線状の凹みのような外観に仕上げている。内面にはコゲが付着している。

土坑墓７号（第226図1214）

Ｈ－25区のⅢｂ層上面で検出された。Ｎ79°Ｅを主軸とした長軸1.8ｍ，短軸0.9ｍ，検出面からの深さ0.3ｍの平面小判形，断面略長方形を呈する土坑墓である。床面は短軸方向ではほぼ水平だが，長軸方向では西側へ漸移的に浅くなっている。また，床面中央には径0.6ｍ，床面からの深さ0.1ｍのほぼ円形の掘り込みが確認された。

なお，木棺墓を想定して床面の精査を実施したが，痕跡等は発見できなかった。

埋土は３層確認できた。水平堆積ともレンズ状堆積とも受け取れる堆積状況を呈しており，埋没過程の想定は容易でない。ただ，埋土１及び２についてはアカホヤ火山灰腐植土をほとんど含んでいない。

遺物は，墓坑西端の埋土１下位から管玉が１点（1214）出土した。埋土中の出土で欠損品でもあることから，副葬品と断定しがたい。管玉出土後，床面までの埋土をフローテーションにかけたが，他に遺物は出土しなかった。

1214は碧玉製管玉で下部を破損しており，現状で長さ７㎜，外径3.6㎜，上面孔径1.8㎜である。孔は，上下両面からの回転穿孔で開けられている。

土坑墓８号（第226図）

Ｈ－25区のⅢｂ層上面で検出された。Ｎ81°Ｗを主軸とした，長軸1.9ｍ（推定），短軸0.5ｍ，検出面からの深さ0.6ｍの平面長楕円形の土坑墓である。断面がフラスコ状を呈するのが特徴で，同形の土坑墓には３号と４号があり，うち３号は２段掘り構造であることから，８号並びに４号も本来は同じ構造だった可能性もある。なお，木棺墓を想定して床面等の精査を実施したが，板材や痕跡の発見には至らなかった。

埋土は７層に分けられた。下部になるほど黒色の度合いが濃くなる傾向がある。アカホヤを多く含む層とあまり含まない層が交互に堆積している状況が観察された。

遺物は，床面から10㎝程度上面までの埋土に実施したフローテーションの結果も含め，出土しなかった。

土坑墓９号（第227・228図1215～1221）

Ｈ－25区のⅢｂ層上面で検出された。後世の削平をかなり受けており，上部構造は不明である。

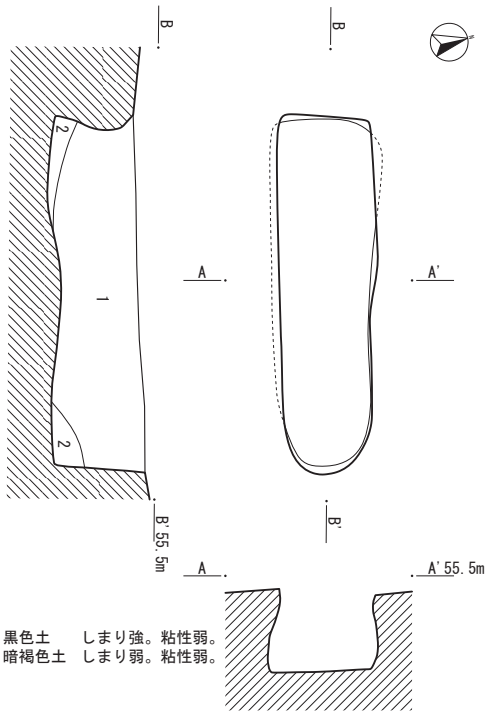
墓坑は，Ｎ55°Ｗを主軸とした，長軸2.3ｍ，短軸1.0ｍ，検出面からの深さ0.3ｍの隅丸長方形を呈する。床面は細かい凹凸が目立ったが，木棺を想定できるような状況は看取されなかった。

埋土は２層に分けられた。床面直上の埋土２の堆積状況がおおむね水平であることから，人為的に埋められた可能性も想定されるが，この層中から遺物が出土していることを踏まえると，埋没過程の復元には慎重にならざるを得ない。

磨製石鏃が５点出土している。いずれも床面直上で出土していることから埋葬時に近い時期のものと考えられる。しかし，４点はまとまって出土しているものの，出土位置や個々の向きなど配置状況には規則性が見られない。また，各石鏃の形態は様々であるが，厚さが薄く，側縁が鋭利であり，２点（1220，1221）を除き目立った破損が見られない。

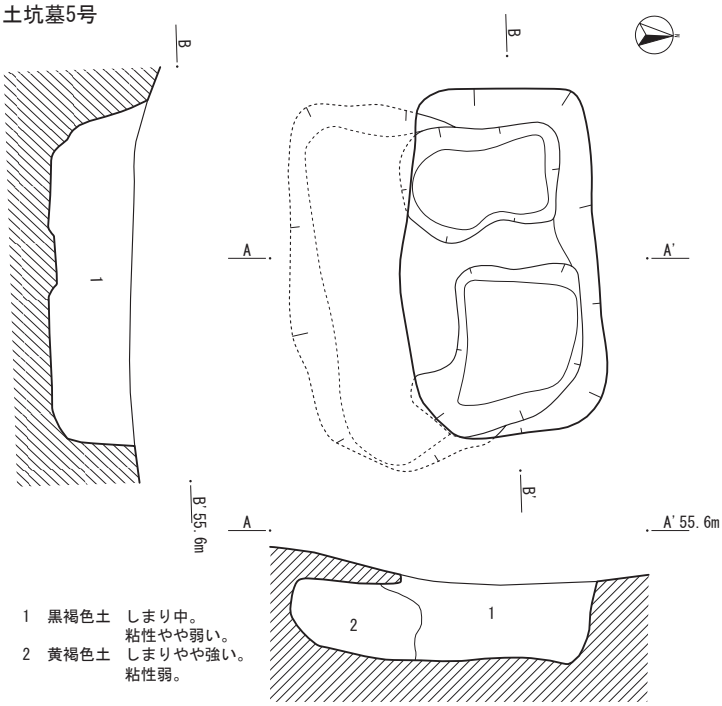
1215は埋土１で出土した。入来Ⅱ式土器の甕の口縁部と考えられる。口縁内面を明瞭に屈曲させていないため，断面形が「如意状口縁」のように見える。口縁部下面の整形が粗い。口縁端部には凹線状の凹みが浅く施さ

土坑墓4号



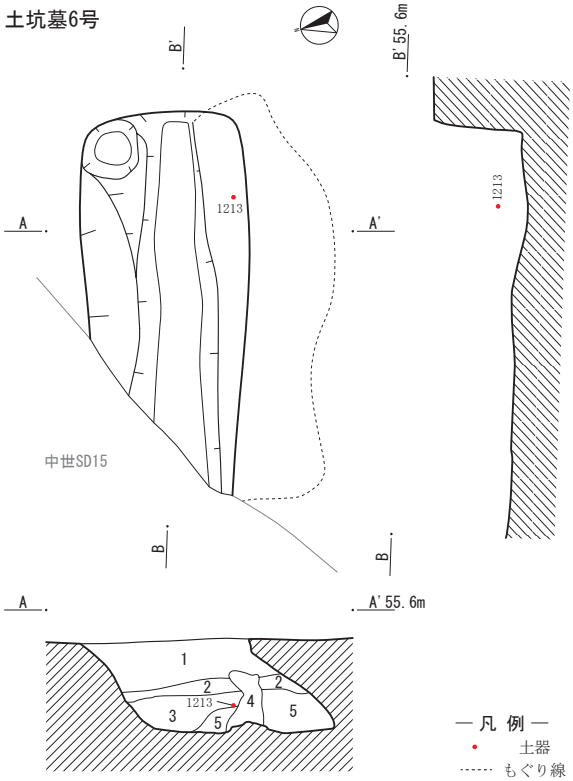
1　黒色土　しまり強。粘性弱。
2　暗褐色土　しまり弱。粘性弱。

土坑墓5号



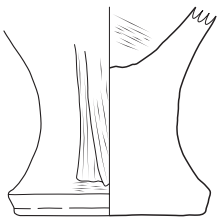
1　黒褐色土　しまり中。
　　粘性やや弱い。
2　黄褐色土　しまりやや強い。
　　粘性弱。

土坑墓6号



1　黒褐色土　しまり中。粘性なし。
2　黒褐色土　しまりやや弱い。粘性なし。
3　黒褐色土　しまり弱。粘性なし。
4　暗褐色土　しまり中。粘性弱。
5　暗褐色土　しまりやや強い。粘性普通。

— 凡 例 —
• 土器
…… もぐり線

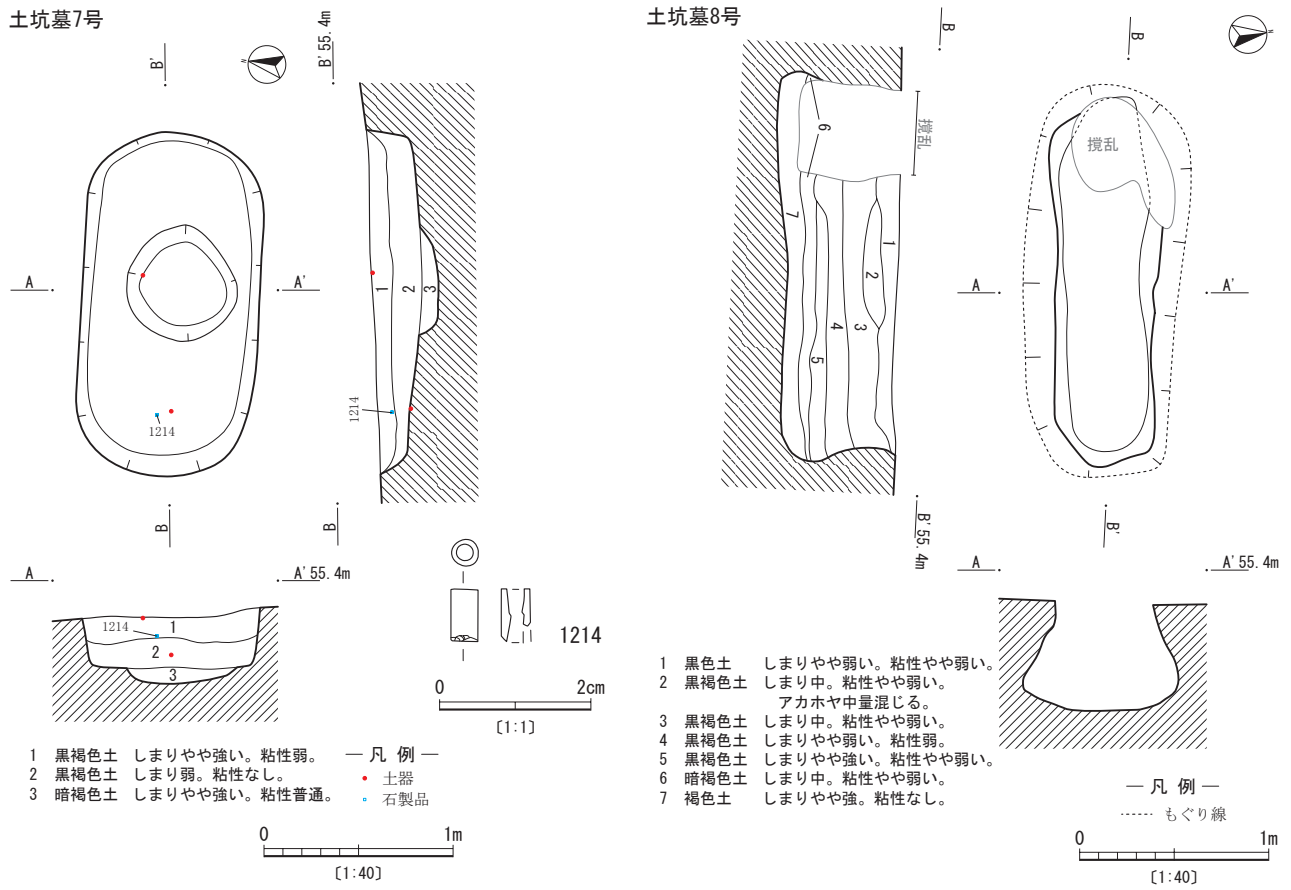


1213

0　1m
〔1:40〕

0　5cm
〔1:3〕

第 225 図　弥生時代土坑墓４～６号



第 226 図　弥生時代土坑墓７・８号

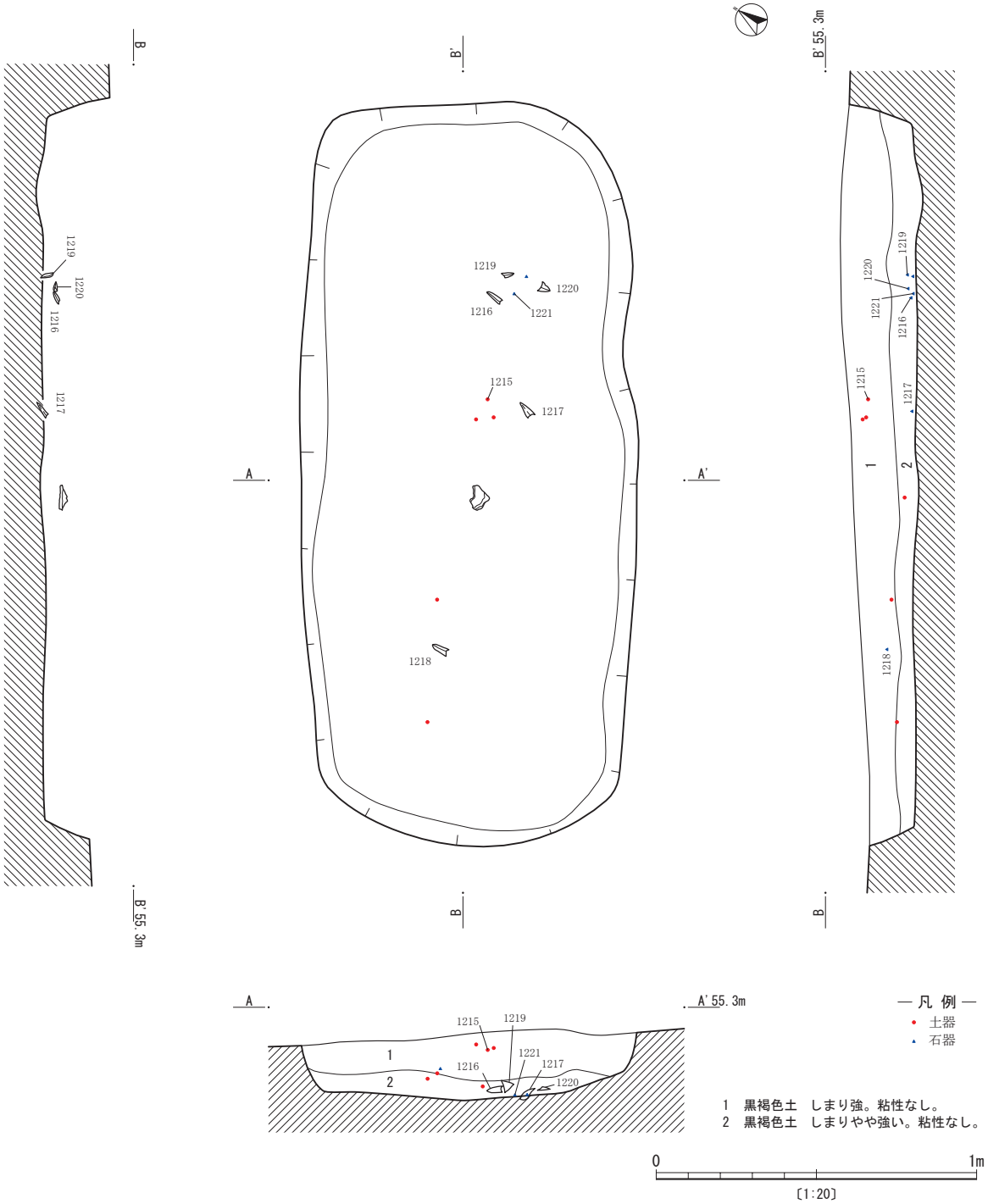
れる。

1216～1221 は，磨製石鏃である。いずれも埋土２の床面近くから出土しているが，1218 のみ墓坑西側で埋土１から出土している。1216 は，長さ 4.5cm，幅 1.5cm，厚さ 0.3cm，重さ 2.5 ｇ，緑色片岩製で形状が特徴的である。鏑がないため断面は扁平なレンズ状を呈する。基部も研磨により鋭利に整形されている。石材の特性によるものか，研磨痕は非常に細かく浅い。1217 は長さ 4.0cm，幅 2.0cm，厚さ 0.2cm，重さ 2.0 ｇ，頁岩製である。側縁には，全体に細かい凹凸が観察される。先端部のみわずかに鏑がみえる。基部は表・裏面に対し垂直に研磨されているが，平面形は弧状ではなく台形状を呈する。先端部のヒビは節理面によるものである。1218 は頁岩製で，基部両端をわずかに欠損する。現状長さ 4.0cm，幅 2.0cm，厚さ 0.3cm，重さ 2.5 ｇで，中央に鏑があり形状は 1217 に類似するが，両側辺が先端近くで角度を変えている点と基部の整形がやや粗い点が異なる。1217 同様，刃部は全体に微細な凹凸がある。1219 は，長さ 3.5cm，幅 2.0cm，厚さ 0.3cm，重さ 2.0 ｇ，頁岩製で平面形は二等辺三角形状を呈し，先端部に鏑を研ぎ出すが，身部は平坦で素材剥離面が残る。左側辺は 1217 や 1218 の刃部と類似する特徴だが，右側辺の凹凸は調査時に生じたキズである。基部は表・裏面に対し垂直に研磨される。1220 は頁岩製で接合資料である（先端部は未発見）。５cmほど離れて出土した。接合部分と先端の欠損部分は節理面とおおむね符合するため，破損が人為的な行為によるものか特定できない。基部の整形は 1217 に類似し，残存部の側縁に凹凸は見られない。1221 は先端部のみの資料である。頁岩製で鏑は研ぎ出されておらず，断面形状はレンズ状を呈する。1220 と出土地点が近く，肉眼観察ではあるが石材の特徴も類似することから，接合しなかったが同一個体の可能性がある。

土坑墓 10 号（第 229 図）

Ｉ－ 25 区のⅢｂ層上面で検出された。中世の溝状遺構に切られているが，Ｎ 64° Ｅを主軸とした，長軸 1.5 ｍ，短軸 0.8 ｍ，検出面からの深さ 0.5 ｍの隅丸方形土坑墓と考えられる。墓坑南壁際には浅い溝も検出された。さらに，南壁には長軸 1.5 ｍ（現状），奥行 0.6 ｍ，床面からの高さ 0.7 ｍ（開口部）～0.1 ｍ（最奥部）の横穴が掘り込まれていた。

埋土は，５層確認できた。埋土２はアカホヤの小ブロックとⅡ層土塊が混在した土である。埋土４のみ砂質で，垂直方向に堆積する。側板の痕跡である可能性もある。



第 227 図　弥生時代土坑墓９号（１）

遺物は出土しなかった。

土坑墓 11 号（第 229 図）

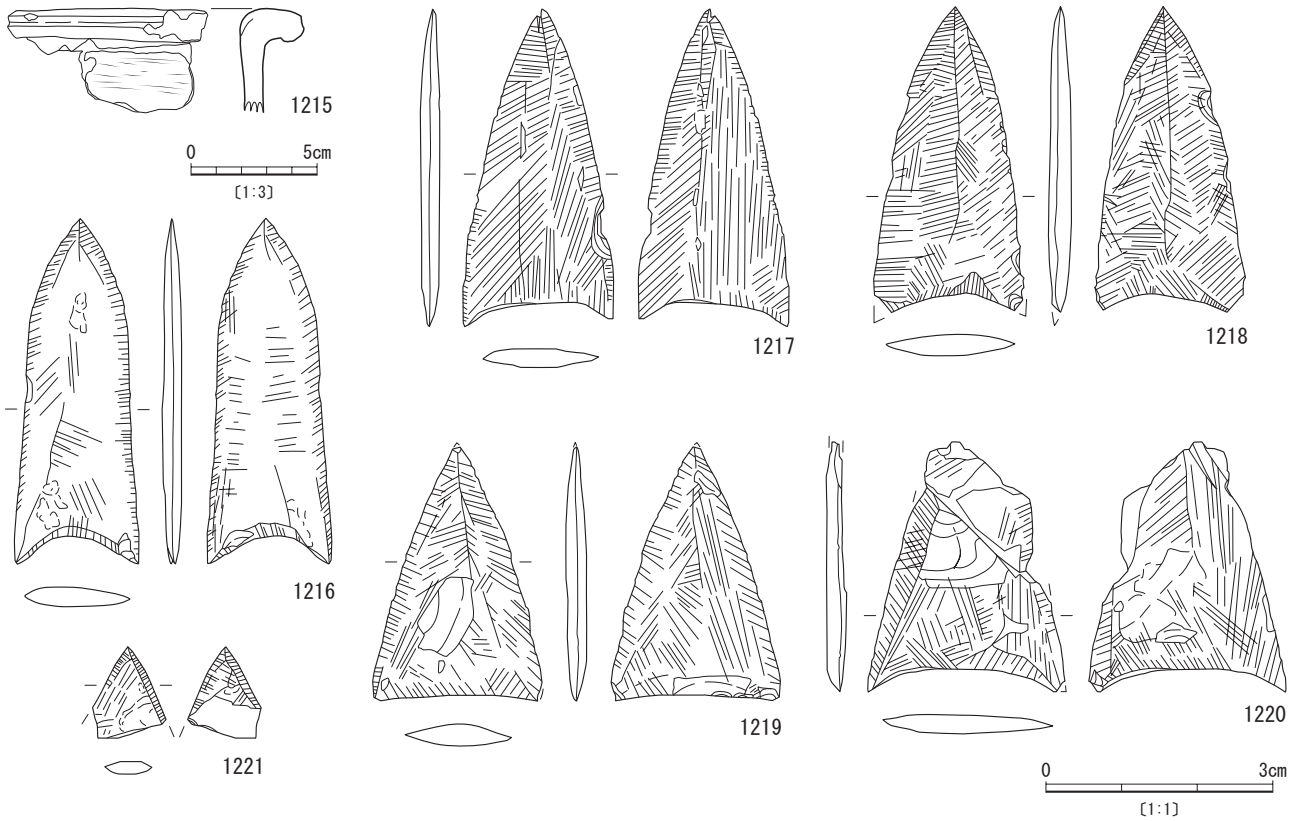
Ⅰ－ 25 区のⅢｂ層上面で検出された。中世の溝状遺構に切られているが，Ｎ 64° Ｗを主軸とした，長軸 1.2 ｍ（現状），短軸 0.6 ｍ，検出面からの深さ 0.3 ｍの平面隅丸長方形の土坑墓と想定される。床面で，壁面に沿って巡る幅 3.0～5.0㎝の浅い溝を検出した。

埋土は，４層確認できた。特に壁沿いの埋土１は，他の埋土と異なる砂質土で，上記の浅い溝と対応するように堆積している。小口板と側板の痕跡の可能性がある。埋土３は他の埋土より硬いため，貼床の可能性がある。

遺物は出土しなかった。

土坑墓 12 号（第 229 図）

Ｊ－ 25 区のⅢｂ層上面で検出された。遺構の東南端を中世の溝状遺構に切られているが，Ｎ 56° Ｗを主軸とした，長軸 2.0 ｍ（推定），短軸 0.6 ｍ，検出面からの深



第 228 図　弥生時代土坑墓９号（２）

さ 0.4 ｍの平面長楕円形の土坑墓と考えられる。浅いが，断面は全体的に袋状を呈している。

埋土は２層確認できたが，アカホヤや池田降下軽石の混入度合いを除き，差異は確認されなかった。

遺物は出土していない。

土坑墓 13 号（第 229 図）

Ｊ－ 24 区のⅢｂ層上面で検出された。Ｎ 70° Ｅを主軸とした，長軸 1.8 ｍ，短軸 0.5 ｍ，検出面からの深さ 0.3 ｍの平面形が不整長方形を呈する土坑墓である。

埋土は，２層確認された。レンズ状の堆積状況を示しており，埋土２は１よりアカホヤ火山灰が多く混じる。

遺物は，埋土１から弥生土器と考えられる小片が４点出土したが，流れ込みと考えられ図化もできなかった。

土坑墓 14 号（第 230 図）

Ｋ－ 24 区のⅢｂ層上面で検出された。墓坑西側上端のおよそ１/３を中世の溝状遺構及び土坑に切られているが，Ｎ 81° Ｗを主軸とした，長軸 1.8 ｍ，短軸 0.7 ｍ，検出面からの深さ 0.6 ｍの平面隅丸長方形の土坑墓と想定される。墓坑北壁には，長軸 1.9 ｍ（推定），奥行 0.5 ｍ，床面からの高さ 0.5 ｍ（開口部）～0.06 ｍ（最奥部）の横穴が掘り込まれている。天井部はⅢｂ～Ⅳａ層である。

埋土は，３層確認できた。堆積状況からは，横穴入口が閉塞されていた可能性を想定しにくい。他方，埋土３は，近辺の地層にはみられない色調や粘性を有している。

遺物は，埋土１上部から打製石斧片が出土しているが，流れ込みと判断した。

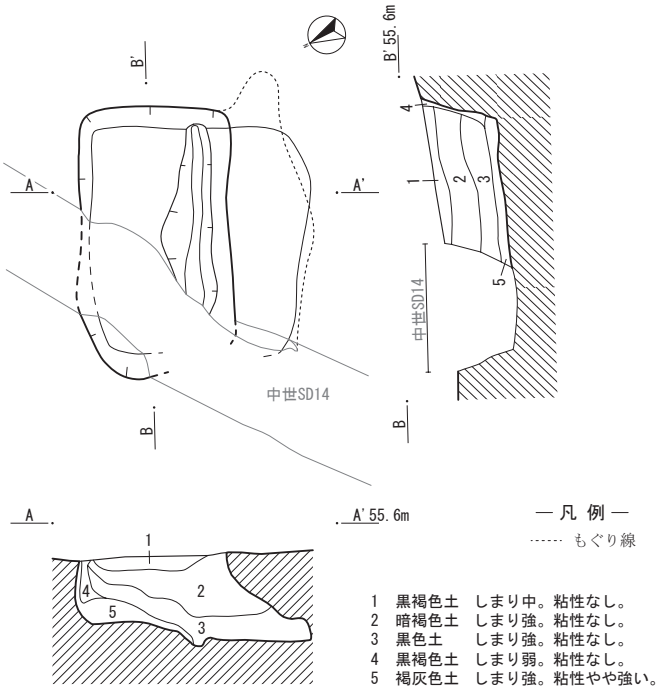
土坑墓 15 号（第 230 図）

Ｋ－ 24 区のⅢｂ層上面で検出された。Ｎ 70° Ｗを主軸とする，長軸 1.6 ｍ，短軸 0.4 ｍ，検出面からの深さ 0.5 ｍの平面形が不整隅丸長方形を呈する土坑墓である。床面西半分には，南壁沿いに浅い掘り込みを伴っていた。さらに，南壁には，軸をやや西向きにとる，長軸 1.5 ｍ，奥行 0.5 ｍ，床面からの高さ 0.4 ｍ（開口部）～0.1 ｍ（最奥部）の横穴が掘り込まれていた。天井はⅢｂ～Ⅳａ層である。

埋土は，３層確認できた。そのうち埋土１及び２にはアカホヤ腐植土が多く混入していることから，人為的に埋め戻された可能性がある。なお，横穴の閉塞を想定させるような状況は観察できなかった。また，上記した床面西側の掘り込みには中位層である埋土２が堆積しており，最下位層の埋土３は見られない。このことは，埋土３と２の堆積過程が同一でない可能性を示唆している。

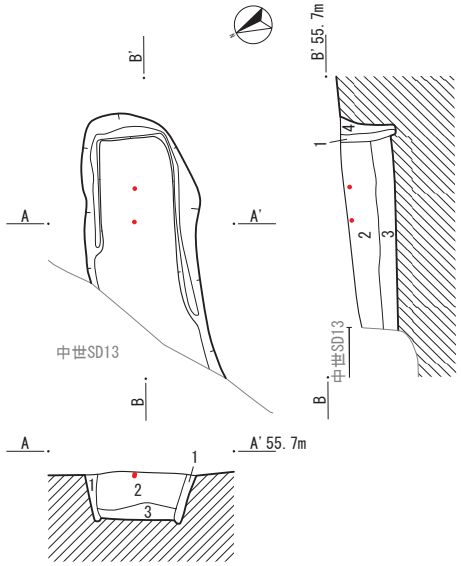
遺物は，埋土１上位から，弥生土器の小片と黒曜石の剥片が出土しているが，流れ込みと判断した。

土坑墓10号



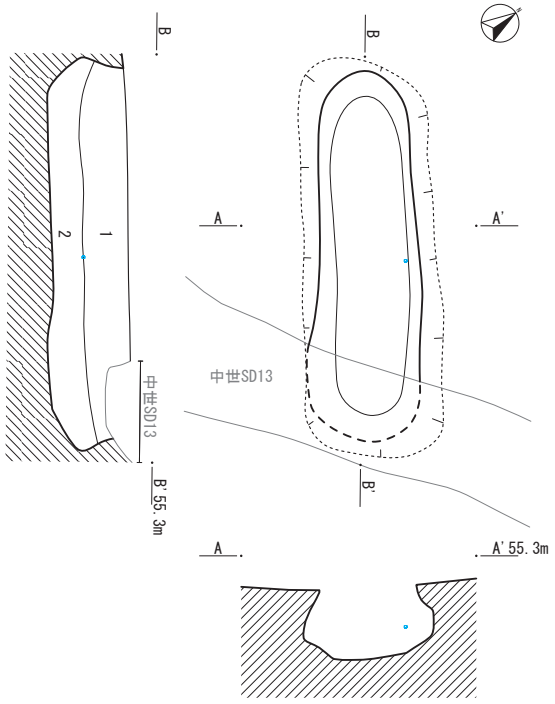
1　黒褐色土　しまり中。粘性なし。
2　暗褐色土　しまり強。粘性なし。
3　黒色土　　しまり強。粘性なし。
4　黒褐色土　しまり弱。粘性なし。
5　褐灰色土　しまり強。粘性やや強い。

土坑墓11号



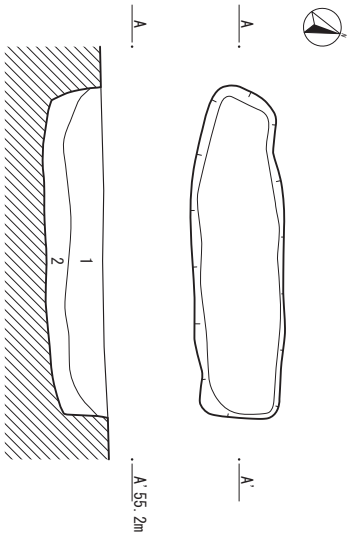
1　黒褐色土　しまりやや弱い。粘性なし。
2　黒色土　　しまり中。粘性なし。
3　黒褐色土　しまり強。粘性なし。
4　暗褐色土　しまり強。粘性なし。

土坑墓12号

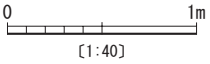


1　黒褐色土　しまり強。粘性弱。
2　暗褐色土　しまり強。粘性やや弱い。

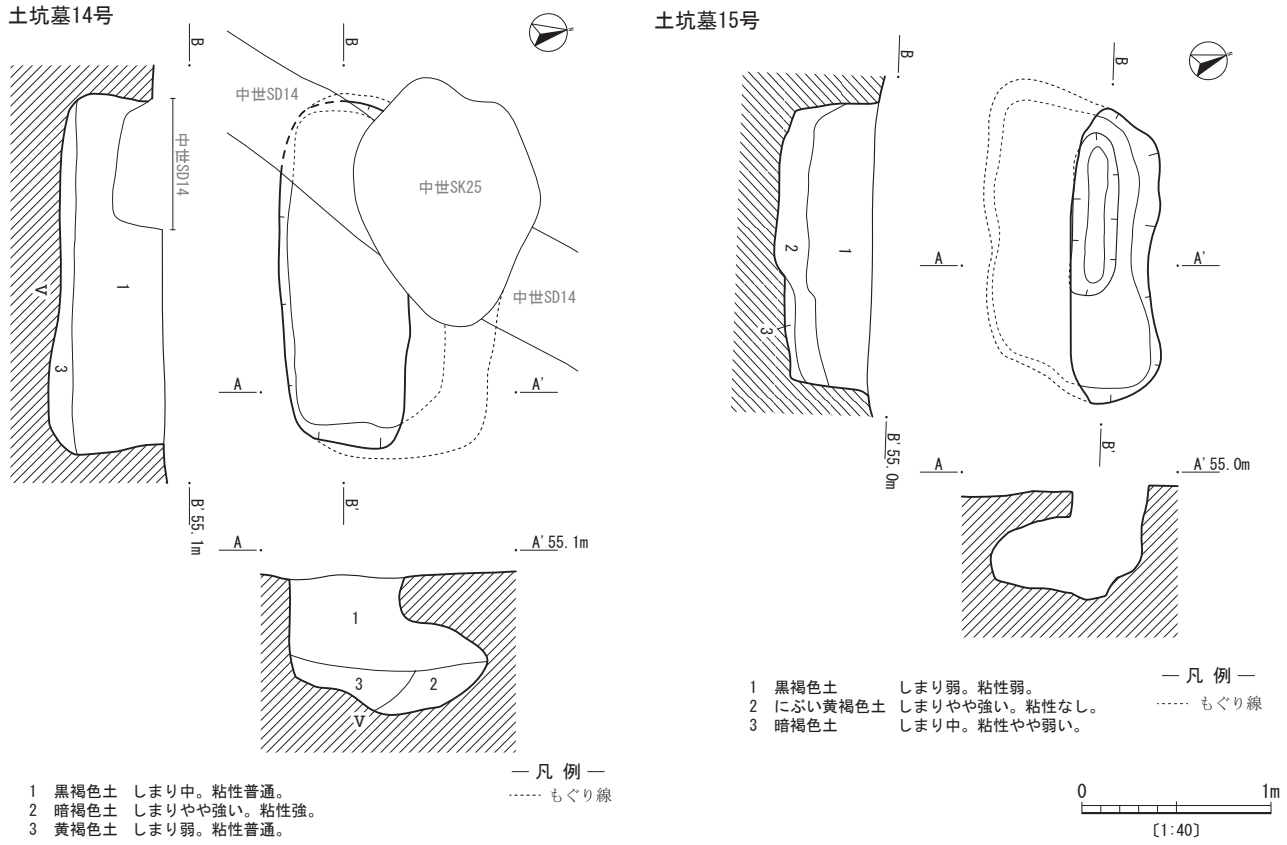
土坑墓13号



1　黒褐色土　しまやや強い。粘性やや弱い。
2　褐色土　　しまりやや強い。粘性やや弱い。



第 229 図　弥生時代土坑墓 10～13 号



第 230 図　弥生時代土坑墓 14・15 号

土坑墓 16 号（第 231 図）

Ｆ－ 24 区のⅢｂ層上面で検出された。Ｎ 79° Ｅを主軸とする，長軸 1.7 ｍ，短軸 0.6 ｍ，検出面からの深さ 0.2 ｍの平面長楕円形の土坑墓である。墓坑東側の壁面には，幅の狭い段が巡っている。また，西壁は他の壁と比して，傾斜がかなり緩やかになっている。

埋土は，残存状況の問題もあると考えられるが，黒褐色土の単層である。

遺物は出土していない。

土坑墓 17 号（第 231 図 1222）

Ｆ－ 23～24 区のⅢｂ層上面で検出された。Ｎ 85° Ｅを主軸とする，長軸 1.7 ｍ，短軸 0.9 ｍ，検出面からの深さ 0.2 ｍの平面長方形の土坑墓である。西壁のみ段が設けられ，傾斜も緩やかである。

埋土は，残存状況の問題もあると考えられるが，黒褐色土の単層である。

検出面で，土器片が２点出土した。1222 は入来Ⅱ式～山ノ口式土器の壺の肩部と考えられる。残存部の器壁の厚さや重量から，比較的大型の壺だったと想定される。内外面とも斜位基調のミガキ調整が施されているが，外面がより丁寧である。横位に巡る三角突帯は２条残っているが，胴部側に剥離痕が観察されることから，本来は３条以上あったことになる。突帯の貼付と整形は丁寧である。また，各突帯の下側と突帯剥離面にススが付着している。他の１点は小片のため詳細不明である。

土坑墓 18 号（第 231 図）

Ｅ－ 23 区のⅢｂ層上面で検出された。Ｎ 89° Ｗを主軸とする，長軸 1.5 ｍ，短軸 0.7 ｍ，検出面からの深さ 0.3 ｍの平面長方形の土坑墓である。床面は，中央部付近が浅くレンズ状に凹む。また，墓坑北西隅には，長軸 1.1 ｍ，奥行 0.4 ｍ，床面からの高さ 0.2 ｍ（開口部）～0.1 ｍ（最奥部）の横穴が，墓坑床面から１段低く掘り込まれている。横穴の位置や規模は，本遺跡で検出された他の同型墓坑と異なっている。

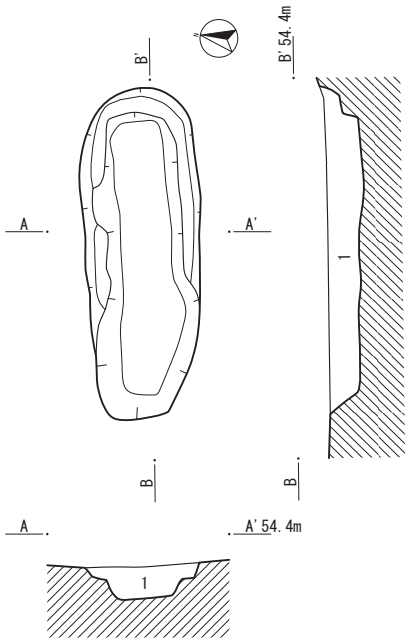
埋土は２層確認されたが，撹乱が激しく詳細な観察が困難だった。

遺物は出土しなかった。

土坑墓 19 号（第 232・233 図 1223～1230）

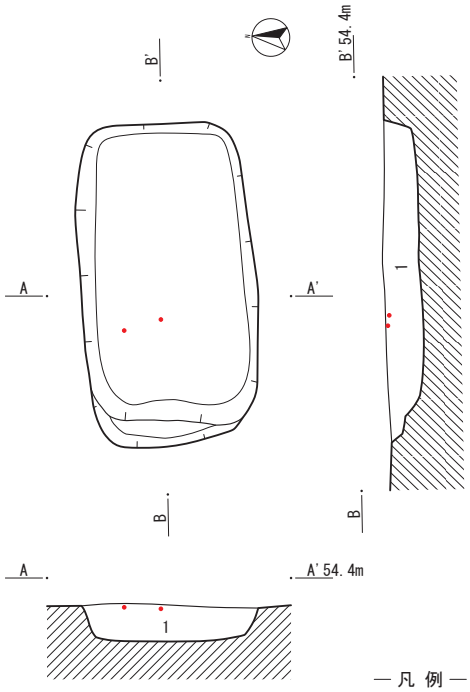
Ｆ－ 24 区のⅢｂ層上面で 20 号に近接して検出された。上面全体及び南東端を撹乱により失っているが，Ｎ 82° Ｅを主軸とする，長軸 2.6 ｍ，短軸 1.6 ｍ，検出面からの深さ 0.4 ｍの平面隅丸長方形の土坑墓である。壁面は各面とも立ち上がりが緩やかで，床面中央には，長軸を同じくする平面形が不整長楕円形の浅い掘り込みを伴う。木棺墓を想定して床面や埋土を精査したが，痕跡等の発見には至らなかった。

土坑墓16号



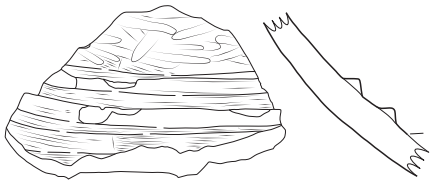
1　黒褐色土　しまり強。粘性なし。

土坑墓17号



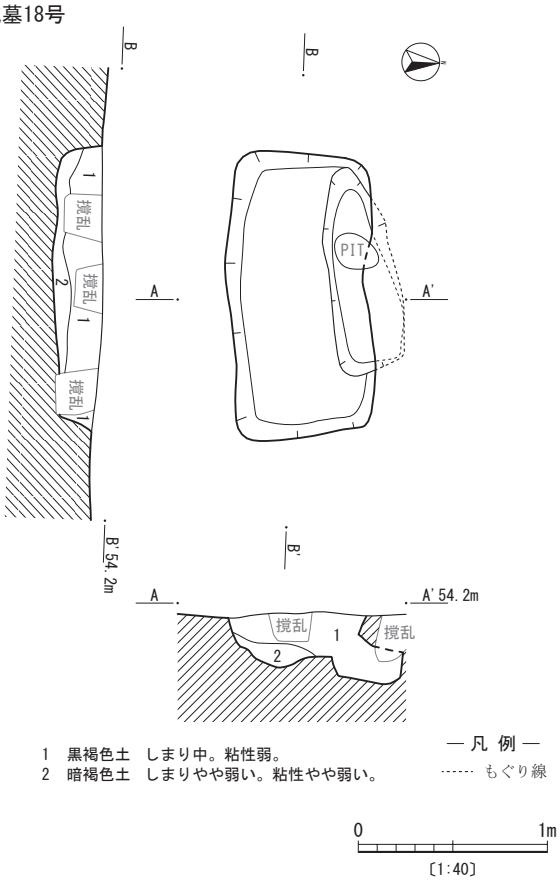
1　黒色土　しまりやや弱い。粘性弱。

— 凡 例 —
• 土器



0　5cm
〔1:3〕

土坑墓18号



1　黒褐色土　しまり中。粘性弱。
2　暗褐色土　しまりやや弱い。粘性やや弱い。

— 凡 例 —
…… もぐり線

0　1m
〔1:40〕

第 231 図　弥生時代土坑墓 16～18 号

埋土は３層確認したが，埋土３はアカホヤ混じりの土であり，木棺の痕跡を発見できなかったことも踏まえると，埋没後に掘り込み面の土が混ざりあった部分である（堆積土ではない）可能性がある。

床面中央の掘り込み内で磨製石鏃が７点，鉄鏃が２点出土した。これらは，掘り込みの西側（磨製石鏃４点：1223～1227）と東側（磨製石鏃２点：1228 と 1229，鉄鏃２点：1230 と 1231）にまとまっていたが，個々の向きや角度など配置状況は不揃いであった。このことから，副葬品ではなかった可能性も考えられる。

1223 は１段目の床面直上で出土した。現状で長さ 3.5cm，幅 1.5cm，厚さ 0.2cm，重さ 1.5 ｇの淡緑色の頁岩製で，先端部と左右の脚端部を欠く。鏑はみられず，基部は 1217 のような台形だったと考えられる。先端部の欠損は，衝撃による剥離の可能性がある。1224 は接合資料で，西側のまとまり内で 20cmほど離れて出土した（基部側が東寄り，先端部側が西寄りの地点）。先端部は未発見である。頁岩製で，上半部に鏑が見られるが正面

及び裏面に主要剥離面を残している。両側縁には細かい凹凸が観察される。先端部の欠損は，1223と同様衝撃による剥離の可能性がある。1225は完形品で，長さ3.5cm，幅2.0cm，厚さ0.3cm，重さ2.5ｇの淡緑色の頁岩製である。平基式で切り落としたかのように断面方形に整形しており，先端部にのみ短い鏑がある。大きさの割に厚い。1226は現状で長さ3.0cm，幅2.5cm，厚さ0.3cm，重さ約2.5ｇの頁岩製で，先端部を欠く。鏑があり，わずかに脚部を研ぎ出している。先端の欠損は衝撃による剥離の可能性があるほか，左側縁下部には刃毀れ状の剥離が観察される。1227は現状で長さ3.5cm，幅2.0cm，厚さ0.3cm，重さ2.0ｇの頁岩製で，先端部と両脚部を欠く。先端近くで側辺の角度を変える形状が特徴的で，鏑はなく基部の平面形状は1217と類似すると想定される。先端部の欠損は衝撃による剥離の可能性があるが，欠損部の状況が1226と似通っている。両側縁には他の磨製石鏃にも観察された細かい凹凸がわずかに観察される。

1228は，長さ3.5cm，幅2.0cm，厚さ0.25cm，重さ2.0ｇの頁岩製で，両脚端部を欠く。弧状に研ぎ出された両側辺が特徴である。正面のみ先端部に鏑がみられる。基部は浅い凹基で断面方形に整形する。両側辺下半には刃毀れが観察される。1229は，長さ4.0cm，幅2.0cm，厚さ0.4cm，重さ3.0ｇの頁岩製で，先端部並びに右脚部を欠損するほか，右側辺が刃毀れ状の剥離が観察される。鏑があり，基部は浅い凹基で断面方形に整形する。先端部の欠損は衝撃による剥離の可能性があり，その状況は1226，1227と似通っている。

1230は，長さ4.5cm，幅2.0cm，厚さ2.5cm，重さ6.0ｇの無茎三角式鉄鏃で，完形品である。両側辺は鋭利に研ぎ出す。全体的に皮革のようにもみえる有機質の物質が付着している。1231は，長さ4.0cm，幅2.0cm，厚さ0.3cm，重さ7.5ｇの無茎三角式鉄鏃で，完形品である。両側辺は鋭利に研ぎ出す。基部は，中央が弧状であるが端部が直線的に整形されており，「タガネ切り」の手法が用いられている可能性がある。

土坑墓20号（第234・235図1232～1241）

Ｅ～Ｆ－24区のⅢｂ層上面で19号に近接して検出された。墓坑の上面全体及び南西部の一部を撹乱により失っているが，Ｎ67°Ｅを主軸とする，長軸2.5ｍ，短軸1.5ｍ（現状），検出面からの深さ0.4ｍの平面隅丸長方形の土坑墓と想定される。壁面の立ち上がりは比較的垂直に近いが，西壁は他面よりやや緩やかである。床面はわずかに波打っており平坦ではないが，19号のような掘り込み等は見当たらなかった。

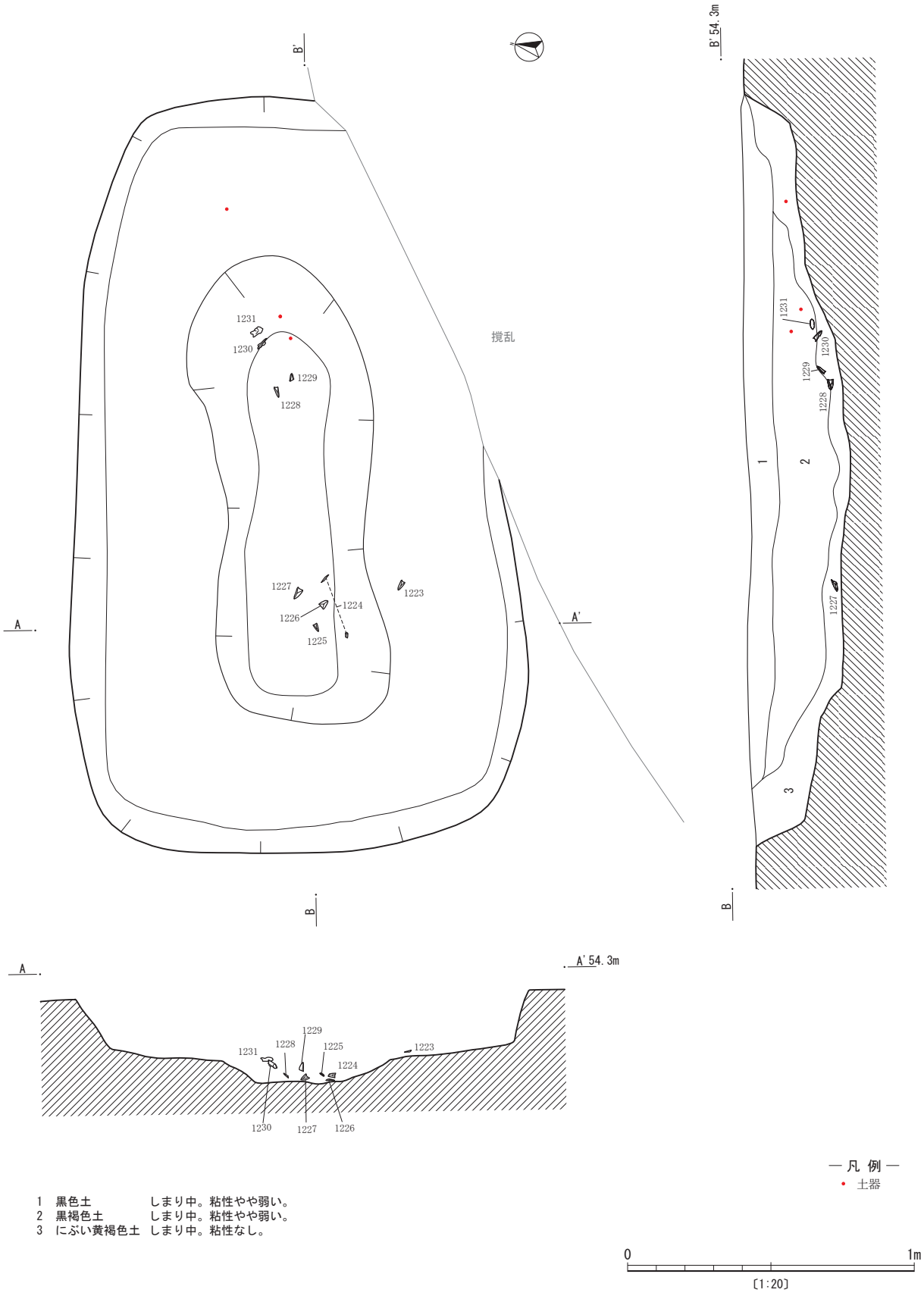
埋土は４層確認できた。いずれも黒褐色土を主体としてアカホヤの混ざりが少なかった。おおむねレンズ状の堆積状況を示している。

遺物は墓坑中央西寄りの床面近くから鉄鏃が３点，磨製石鏃が４点，管玉が１点出土した。19号と同様，個々の向き等は不揃いであったことから，鏃については副葬品ではない可能性も考えられるが，管玉については１点のみだが完全品であることから副葬品であると考えられ，原位置を保っている可能性も想定される。土器片については，小片であることや出土状況から，上記の鏃や管玉とは埋没経緯がそもそも異なる可能性が高いが，管玉などと出土位置が近いものについては，時期比定等の参考になると考えられるため掲載した。

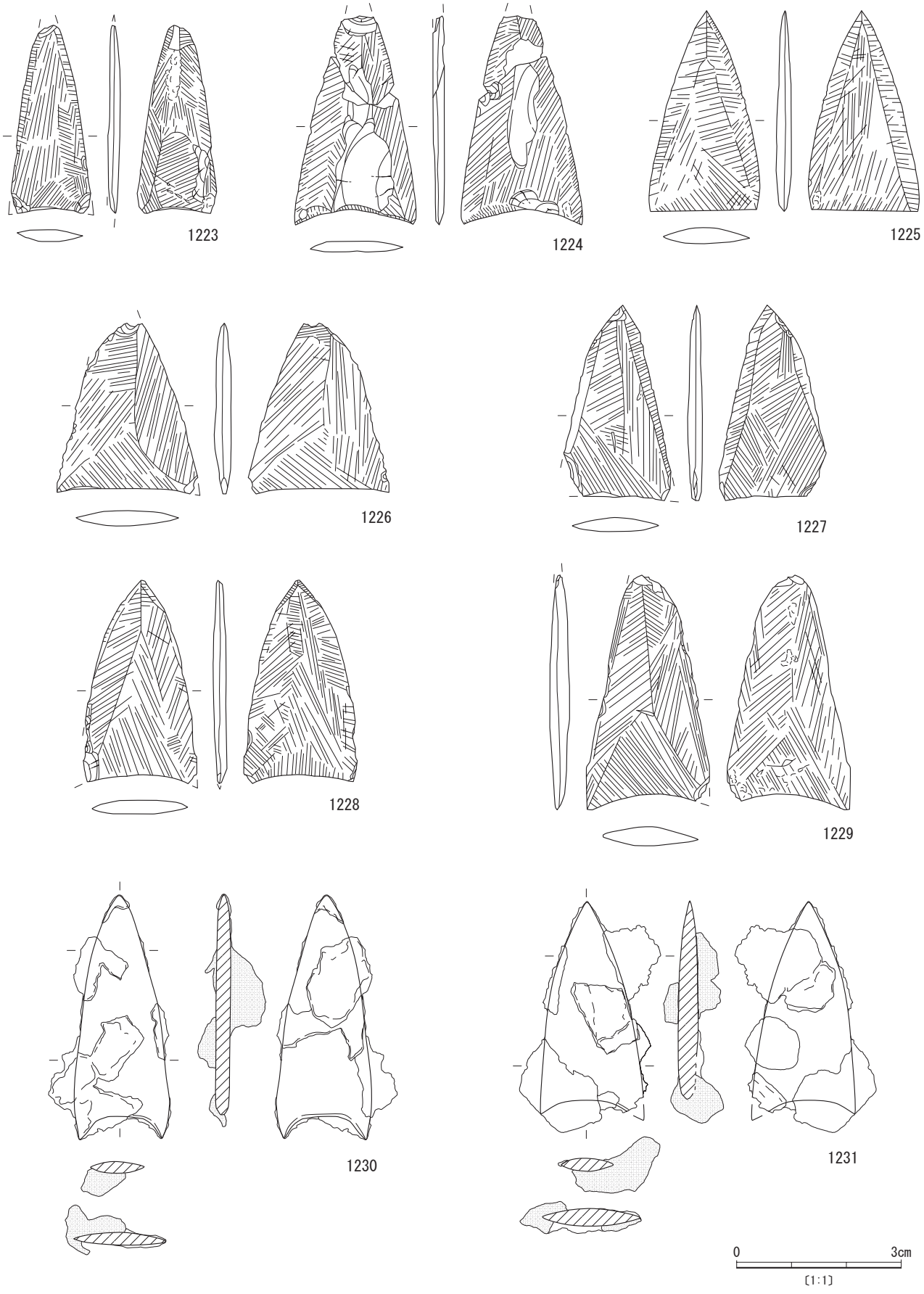
1232・1233はどちらも小片のため詳細は不明だが，入来Ⅱ式土器の甕の口縁部と想定される。1233は口縁部が短く，端部に施されている凹みは沈線状に細くやや深い。

1234～1237は，磨製石鏃である。いずれも墓坑床面直上で出土しているが，平面的には，1238と1240の周辺，1239周辺にわかれ，1235のみ東寄りに離れている。1234は現状で長さ3.5cm，幅2.0cm，厚さ0.3cm，重さ2.0ｇの頁岩製で，先端部と基部を欠く。正面並びに裏面に鏑を形成する。側辺には細かい凹凸が観察される。先端部と基部の欠損は，どちらも衝撃による剥離と考えられることから，本来は長身の鏃だったとみられる。1235～1237は破損品である。1235と1236は，破断面の状況からどちらも折れたものと考えられる。石材の特徴から同一個体の可能性があるが接合しない。墓坑内で0.8ｍほど離れていた。1237は石材の色調がやや青みがかっており，1235，1236とは別個体である。

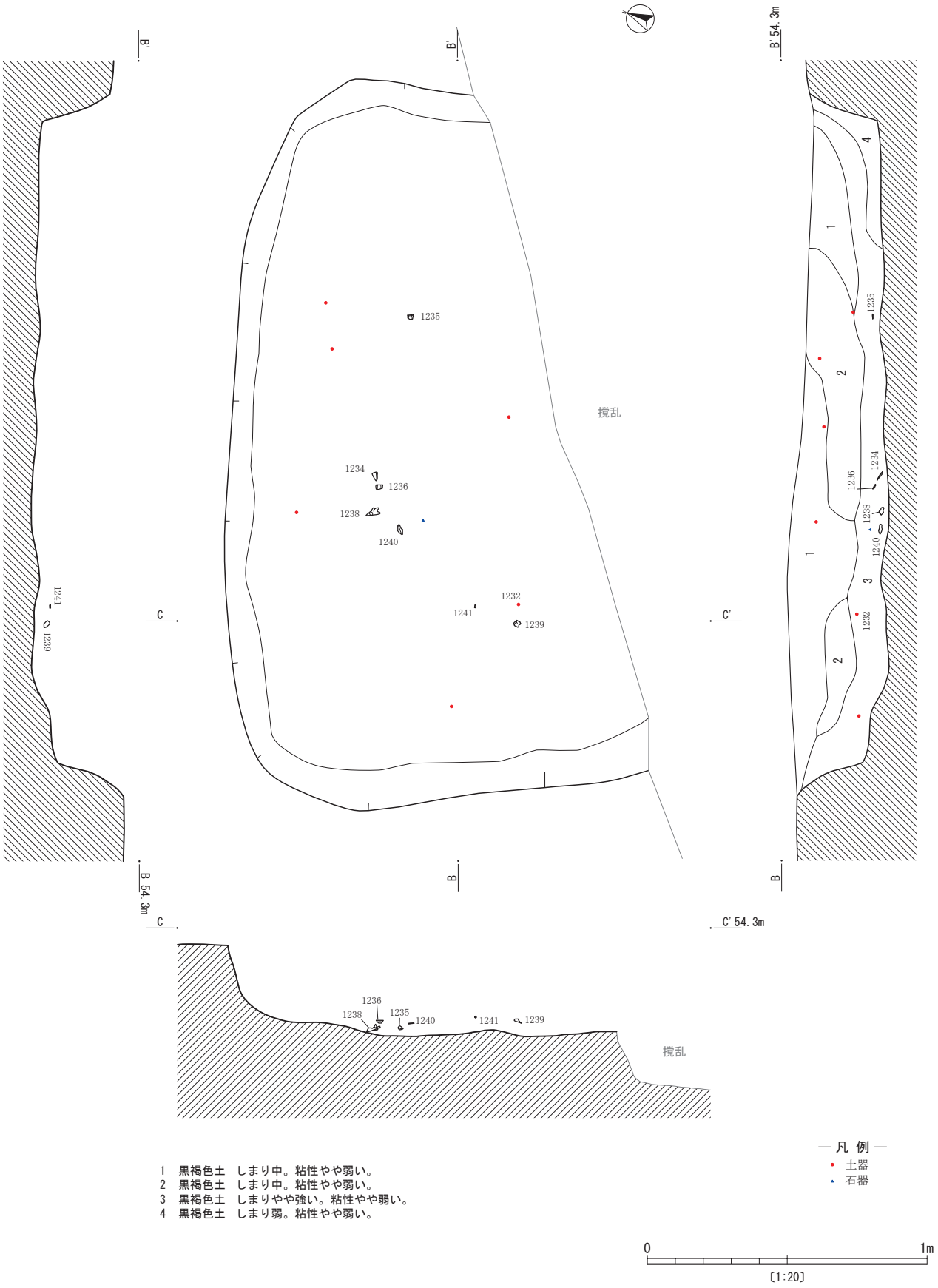
1238～1240は，鉄鏃である。墓坑内西側寄りで磨製石鏃同様床面直上から出土した。また，上記したように，1238・1240と1239は，0.6ｍほど離れている。1238は，長さ5.0cm，幅1.5cm，厚さ0.3cm，重さ6.0ｇの無茎三角式鉄鏃で，完形品である。両側辺には刃部を研ぎ出す。1230と同様に，有機質の物質が付着している。1239は，長さ4.0cm（推定），幅2.0cm，厚さ0.3cm，重さ6.0ｇの無茎三角式鉄鏃である。先端部やや下は酸化して失われており，錆で繋がっている状態である。酸化は身部側に進行しており，身部内も中空になりつつある。1240は矢柄が遺存しているために，装着状況を確認できる，本県では貴重な例である。鏃部は，長さ2.0cm，幅2.0cm，厚さ0.2cmの無茎三角式鉄鏃である。平基で，両側辺には刃部を研ぎ出す。他の資料より小型であること（特に長さが短い），先端が中心軸から右にずれている，左右非対称の平面形状であることから，再利用している可能性がある。1238と同質の物質も付着している。矢柄部は肉眼観察では木製で，長さ3.0cm，径1.0cmで丁寧に整形されているほか，有機質と思われる口巻きも残っている。口巻きは矢筈側から巻き付けていき，端を巻き込んで止めていると想定される。資料全体の重さは3.0ｇである。



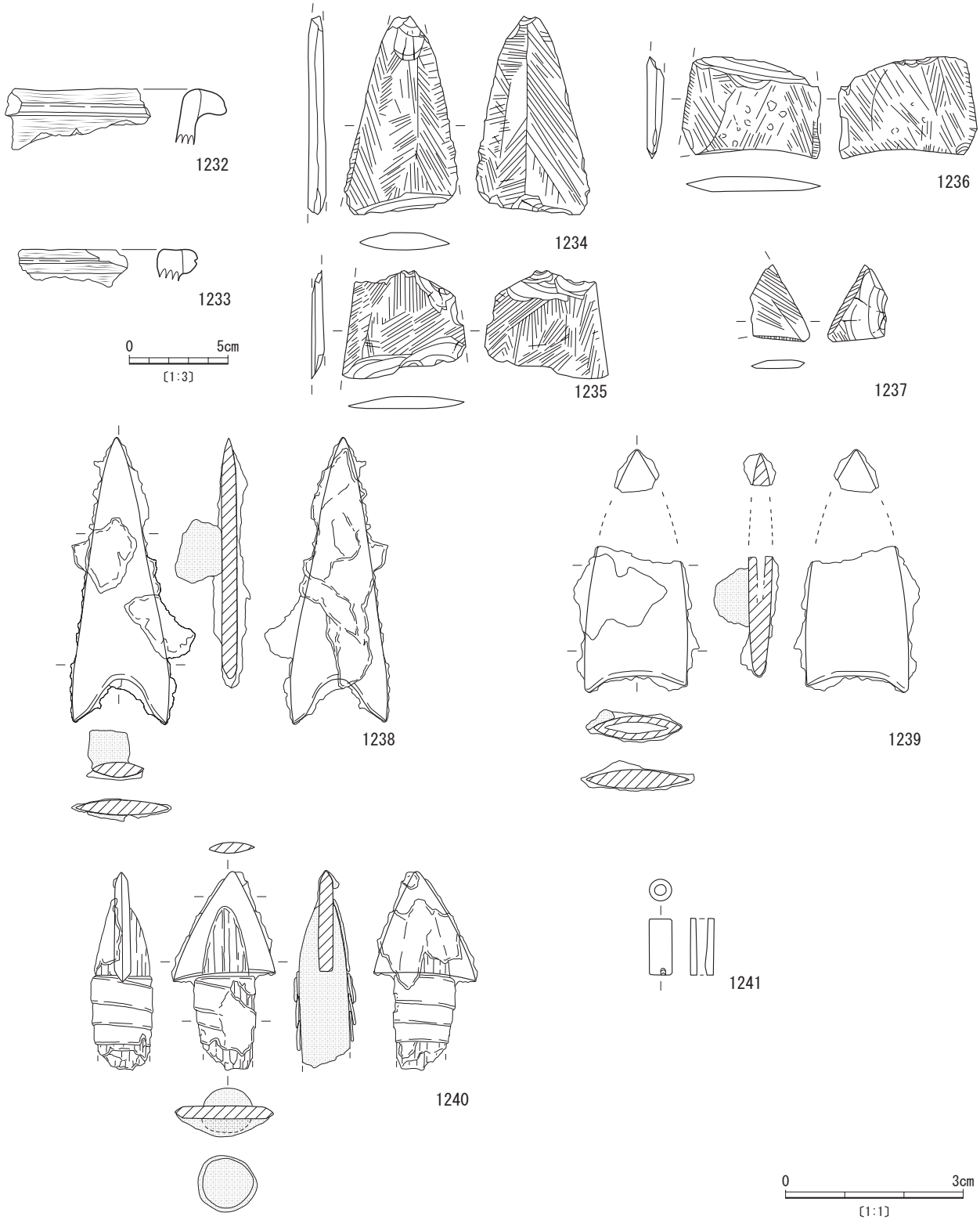
第 232 図　弥生時代土坑墓 19 号（1）



第 233 図　弥生時代土坑墓 19 号（２）



第 234 図　弥生時代土坑墓 20 号（1）



第 235 図　弥生時代土坑墓 20 号（2）

1241 は管玉である。墓坑中央やや西寄りの床面直上から出土した。碧玉製の完形品で，長さ 10㎜，外径 4 ㎜，上面孔径 1.6㎜，下面孔径 1.3㎜である。孔は，上下両面からの穿孔で，下面側から 2 ㎜程度のところで貫通している。

(2) 土器

①概要

この時期の土器は遺跡全体で出土している。出土傾向としては地形の落ち込みに流れ込んだ土器が出土した状況であり，特に 29 区から 31 区で多く出土している。

出土土器は甕形土器で判断すると南九州の弥生時代中

期を代表する入来Ⅱ式土器，山ノ口式土器が主体を成しているが，王子遺跡や中ノ原遺跡（鹿屋市）等でこれまで確認されてきた口縁部が長くのびるタイプだけではなく，先行する時期に該当する土器群も見られることが特徴的である。

掲載にあたってはまず器種ごとに大別し，その中で個体ごとに口縁部形態，端部の向きや文様の有無等を考慮してグルーピングした。掲載順は，36 区ラインから西側を調査区西部，東側を調査区東部と便宜上呼称して調査区西部から記載する。

②調査区西部（第 237 図）

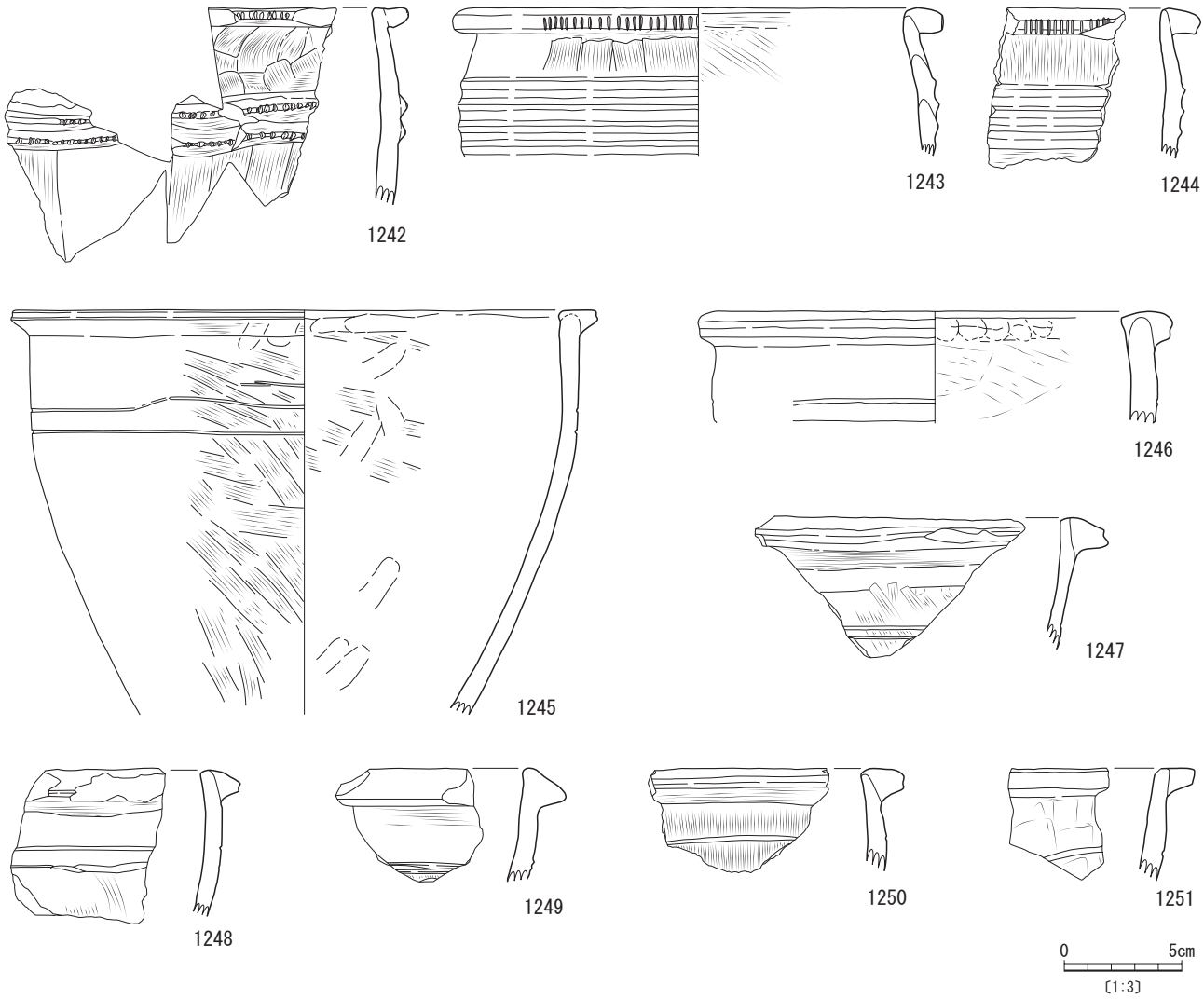
西部出土土器として 144 点を図化掲載する。出土した器種は甕形土器，蓋形土器，鍋形土器，大型甕形土器，壺形土器，鉢形土器，土製品がある。中でも，鍋形土器は当該期での器種組成ではあまり類例のないものであり，特筆される。

出土分布を見ると 30・31 区ラインの南北方向に走る谷間に多くの出土が認められ，東西平坦面からの流れ込みが想定される。

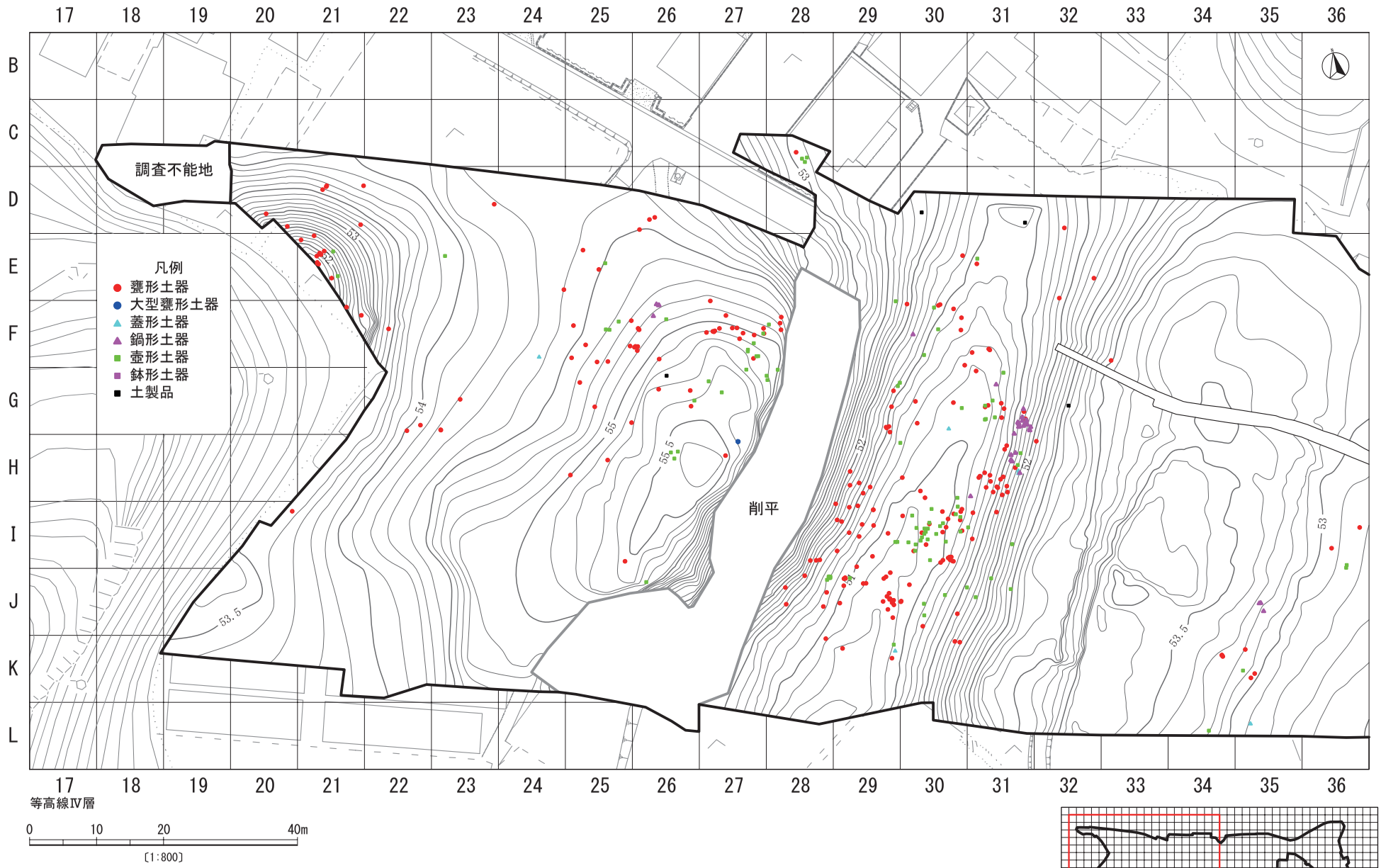
甕形土器（第 236・238 図 1242～1329）

1242～1244 は口唇，突帯状に刻目を有する土器である。1242 は，胴部から口縁にかけてほぼ垂直に立ち上がり，やや丸みを帯びた逆「L」字状の口縁で，胴部に断面三角形状の突帯が２条貼り付けられる。突帯の間隔は狭く，断面が「M」字状となる。口唇，突帯状にヘラ押圧による刻目が施される。調整は縦方向のハケナデ調整である。色調は橙色および黒褐色を呈し特徴的である。1243 は，口径が 20.8㎝で口縁がやや窄まる器形を呈す。口唇部にはヘラ押圧による縦刻目が施される。胴部には，３条の突帯が貼り付けられるが，起伏にとぼしい。調整は口縁から突帯間は縦方向のハケナデ調整である。1244 も外面調整は縦方向にハケナデ調整が施される。断面形や調整などから 1243 と同一固体と考えられる。

1245～1251 は胴部に１条もしくは２条の沈線が施される土器群である。1245～1249 は口唇に凹線が見られるものと見られないものがあり，調整もハケナデが縦，



第 236 図　弥生時代中期　西部出土土器（１）

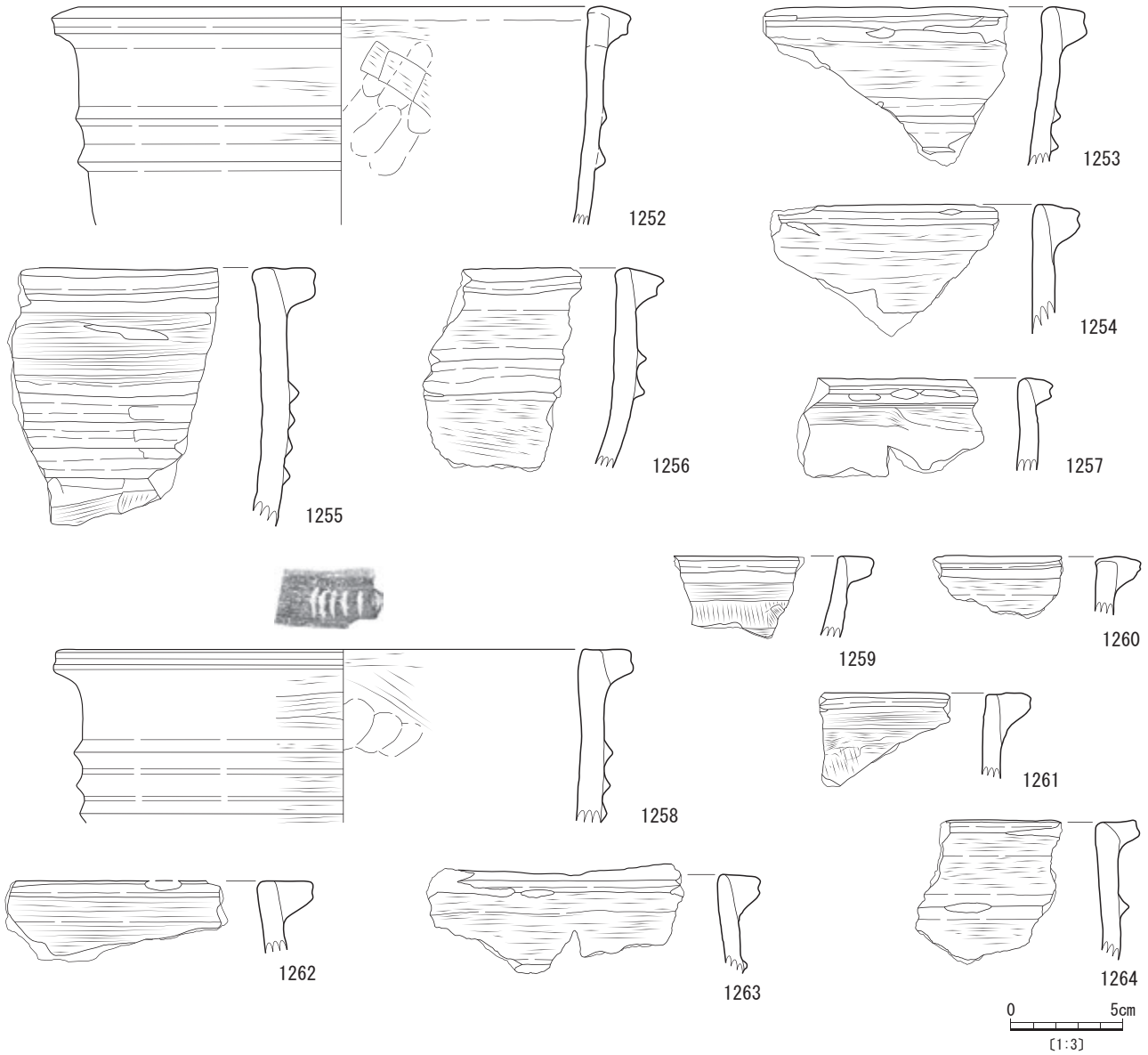


第 237 図　弥生時代中期　西部出土土器分布図

斜めに施されるなど一様ではない。1245 は口径が 25cm で，胴部下半から上半に向かって緩やかに開き，胴部に施文される２条の沈線文付近からほぼ垂直に口縁に立ち上がる。外面の調整はハケナデが明瞭に確認できる。1246 はやや内弯する器形で，口縁は短くまとまり，口唇には凹線が見られる。1247 は口唇部の整形が粗く，不整である。２条見られる沈線は，0.3cm程度の幅で狭い。1248 と 1249 は口縁部の断面形が三角形であるが，1248 は口唇部に凹線が入るのに対し，1249 は入らない。1250 は，口縁下の調整痕が顕著で縦方向のハケナデ調整が明瞭に確認できる。内面は横方向のハケナデ調整である。1251 は口唇に凹線を有さないが，胴部の沈線文および調整は 1248 と類似する。

1252～1276 は口縁から胴部にかけての資料で，口縁が短い土器群である。断面が三角形を呈すものと，四角形となるものが見られる。口縁の整形や文様等で若干の差異が見られるほか，口縁に厚みがあるのも特徴である。これら土器群は本遺跡の弥生時代中期を特徴づける土器群である。

1252～1257 は口縁がやや下がり気味となる土器群である。1252 は口径 25.8cmで，胴部から口縁に向かってわずかに外反する器形である。口縁部は短くまとまり，口唇部は凹線となる凹みを有す。２条の三角突帯が貼り付けられ，横方向のナデ調整が見られる。1253 は口縁部に歪みが見られるが，調整は比較的丁寧である。口縁部上面は丁寧なナデ調整により光沢を帯びる。1254 は口唇部の凹みが深く明瞭な凹線となる。外面にはススが付着する。1255 は残存する部分の弯曲具合から比較的大型の甕形土器になると推察される。突帯付近の器厚も１cm以上で厚い。胴部には４条の三角突帯が貼り付けられ



第 238 図　弥生時代中期　西部出土土器（２）

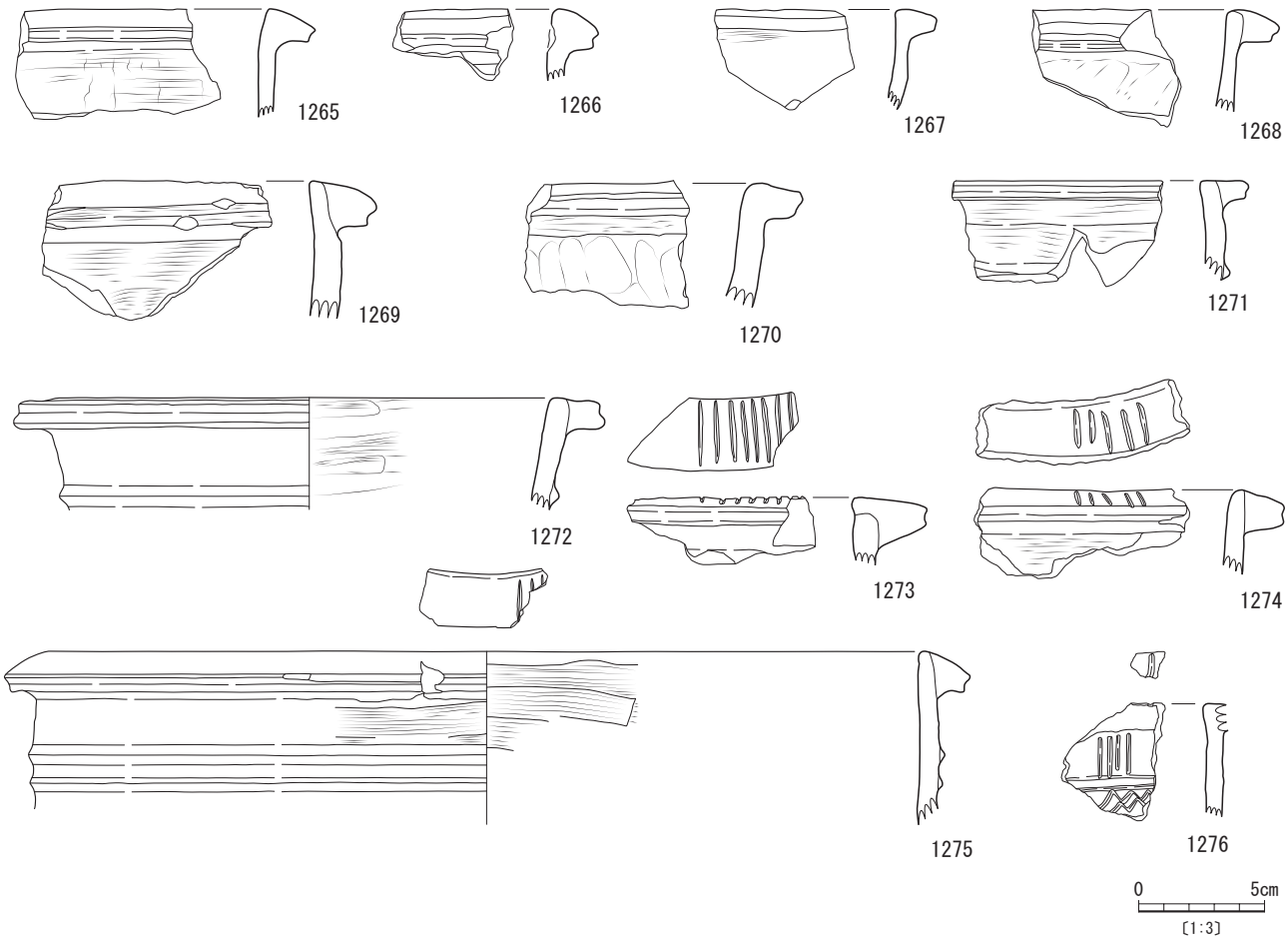
る。1256 は口縁部断面が三角形を呈し，胴部には２条の三角突帯が貼り付けられる。突帯自体に歪みが目立つ。1257 はやや小振りで，口縁を短くまとめ，内面も角がなく丸みを帯びる。

1258～1264 は口縁部上面がほぼ水平となる。1258 は口径 25.8㎝である。口縁上面が水平で爪形文様の刻みが５つ見られる。体部の器厚が約１㎝と厚くなり，重厚な感を受ける。1259 は断面台形状の口縁部を有し，口唇部は若干凹む。外面は縦方向のハケナデ調整でススが付着する。1260 は口縁部上面がやや丸みを帯び，口唇に凹線となる凹みが２条見られるのが特徴である。凹線の上位のものは幅狭で，下位は幅が広い。1261 は口唇部の凹線が明瞭で外面に多量のススが付着する。1262 は 1261 に類した口縁部である。内面は丁寧なナデ調整により器面が整っている。1263 は比較的口縁部に近い位置に三角突帯が１条確認できる。口唇部の凹線は凹みが深い。1264 は三角突帯が１条残存する。突帯は貼り付け後の調整が丁寧で，断面形状も均整のとれた三角形を呈す。調整はナデによる。

1265～1272 は口縁がやや下がり気味もしくは水平となる。1265 は口唇の凹線部の稜が明瞭で丁寧なつくりである。1266 は口縁がやや下がり気味で，口唇部の凹線が明瞭である。全体に丸みを帯びた形状である。1267 は小ぶりな甕形土器と考えられる破片である。使用時の被熱のためか，器面全体が剥離している。口唇部の凹線が判然としない。1268 は口縁下部が凹み，全体に口縁が下がる形となる。上面は丸みを帯び，口唇部の凹線は明瞭である。調整は斜方向のヘラナデが若干確認できる。1269 は厚手で，体部と口縁の接合箇所が凹む。凹み部分と口縁上面にススが付着する。上面部分は蓋の利用を想定させる痕跡である。1270 は口唇に凹線を有すが，凹みは浅く不明瞭となる。体部と口縁の接合部付近は調整のため，凹みが生じる。外面調整は不明瞭だが指オサエによる整形痕が確認できる。1271 は 1272 に類似した口縁部で，口縁部と突帯部間が外側に膨らみを持つ。内面は斜め方向のハケナデ調整が明瞭に確認できる。

1272 は口縁貼付後の調整時の指圧により，上面に凹みが見られる。胴部には１条の突帯が確認できる。口径は 23㎝である。

1273・1274 は口縁部もしくは胴部に沈線文や刻目が施される。1273 は口縁上面に８条の沈線が施される。沈線部の断面は「Ｖ」字状となる。断面形は整った三角形で，調整も丁寧なナデにより器面もきれいである。1274 は 1273 同様，口縁部上面に文様が施される。施文はヘ



第 239 図　弥生時代中期　西部出土土器（３）

ラ状工具の押し当てによると思われる刻目で５本見られる。1275 は口径 38.4㎝で，口縁部は下がり気味である。胴部には３条の三角突帯が確認できるが，最下位の突帯は部分的な残存状況である。口縁部上面には刻目が３本確認できるが欠損しているため，本来はもう数本あった可能性が考えられる。1276 は小振りな土器で胴部外面に２つの文様帯を有す。横位の沈線２条を境にして上位には縦方向の沈線を４条施し，下位には鋸歯文が２段みられる。いずれも，棒状工具が使用されていると考えられる。また，口縁部上面にも２条の沈線が施されるなど特異な文様を持つ土器であるが，胎土や器形などから在地の土器であることに疑いはないためここで掲載する。

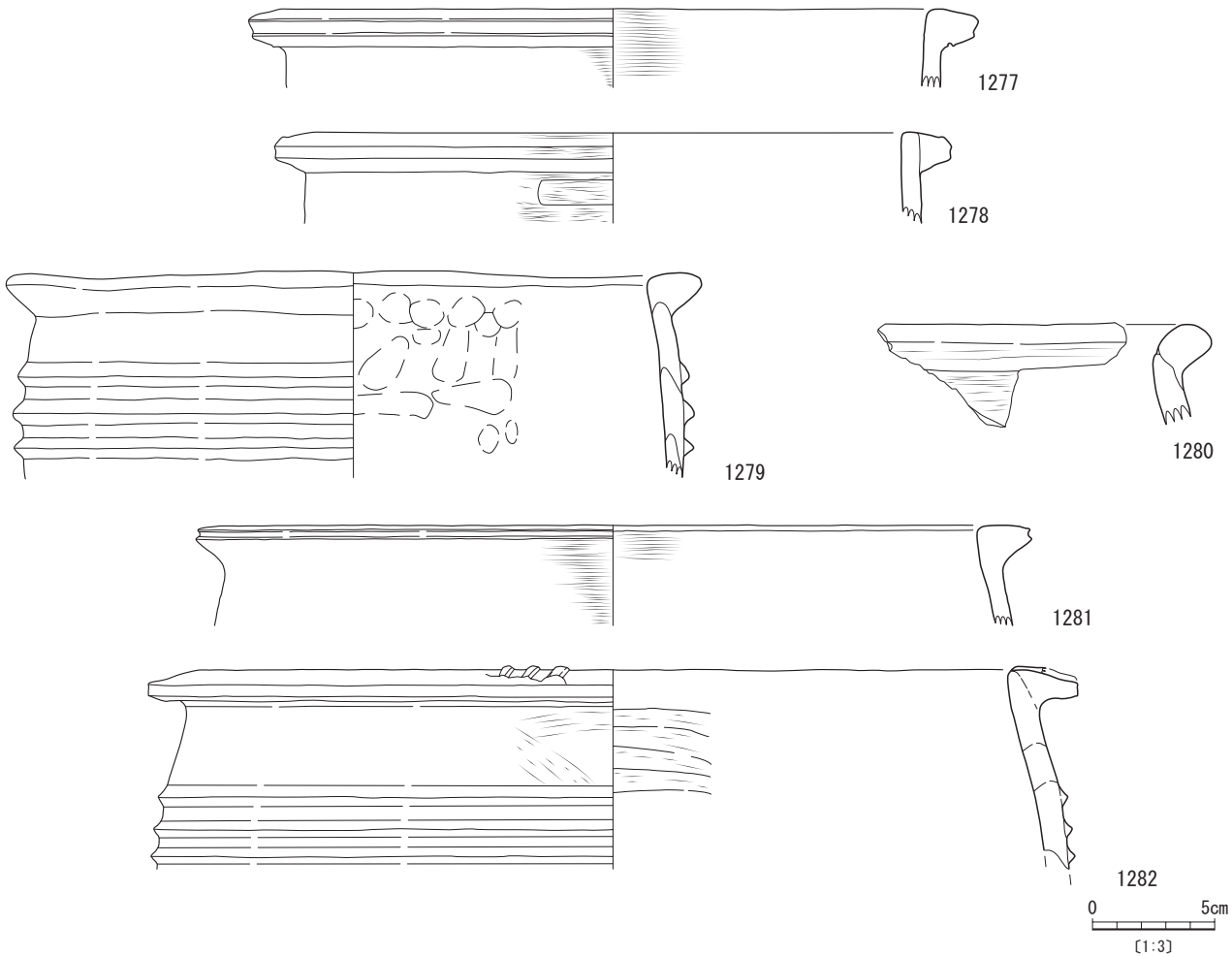
1277 と 1278 は口唇部の凹線がはっきりとし，口径が復元できた土器である。1277 は，体部と口縁貼付部付近に沈線が確認できるが，正面からは確認できないため，文様ではなく口縁部調整時に意図せず残った調整痕の可能性が高い。口径は 29.8㎝。1278 は口径が 27.6㎝で 1277 等と比べて口縁がやや丸みを帯びる。調整は残存している部位では横方向のナデが確認できる。

1279 と 1280 は口縁部断面形が丸くなり，角がないのが特徴の土器である。1279 は歪みの目立つ器形である。胴部には３条の三角突帯が巡り，突帯・口縁ともに丸みを帯びる。外面は被熱により器面剥離が著しく，調整は確認できない。内面には指頭圧痕が残る。口径は28.2㎝である。1280 は，器体に円形粘土帯を巻きつけて，口縁を作出する。丁寧な横ナデで玉縁状の口縁とする，やや特殊な形状である。

1281 と 1282 は胴部が外側に張り出し，口縁部に向かって窄まる器形である。1281 は口径が 34.2㎝で，整形は丁寧である。口縁部上面は若干の丸みを残す。口唇部には凹線が巡り，同箇所付近までススが付着する。

1282 は，胴部最大径が上半部に復元できる資料である。口縁部は口唇に向かって先細りとなり，上面には長さの短い３つの三角突帯が貼り付けられる。胴部にも三角突帯が３条巡る。口径は 38㎝である。

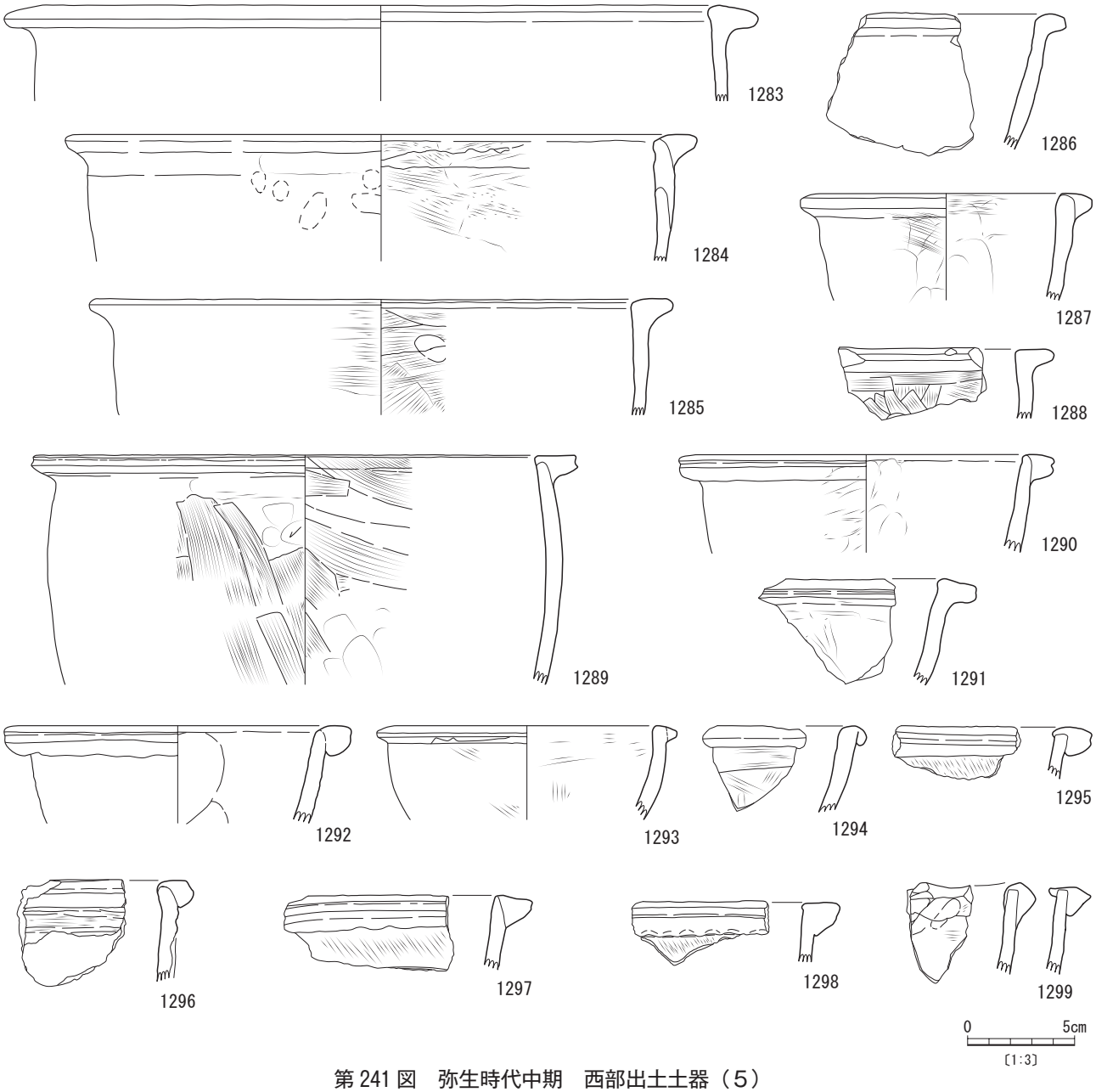
1283～1289 は胴部に三角突帯がない，またはないと想定できる口縁から胴部にかけての資料である。成形の調整が丁寧なものと，そうでないものがある。1283 は口径 35.2㎝，口縁は逆「Ｌ」字状となるが，全体に丸みを帯び，やや内側に張り出す。また器面全体が磨滅して調整



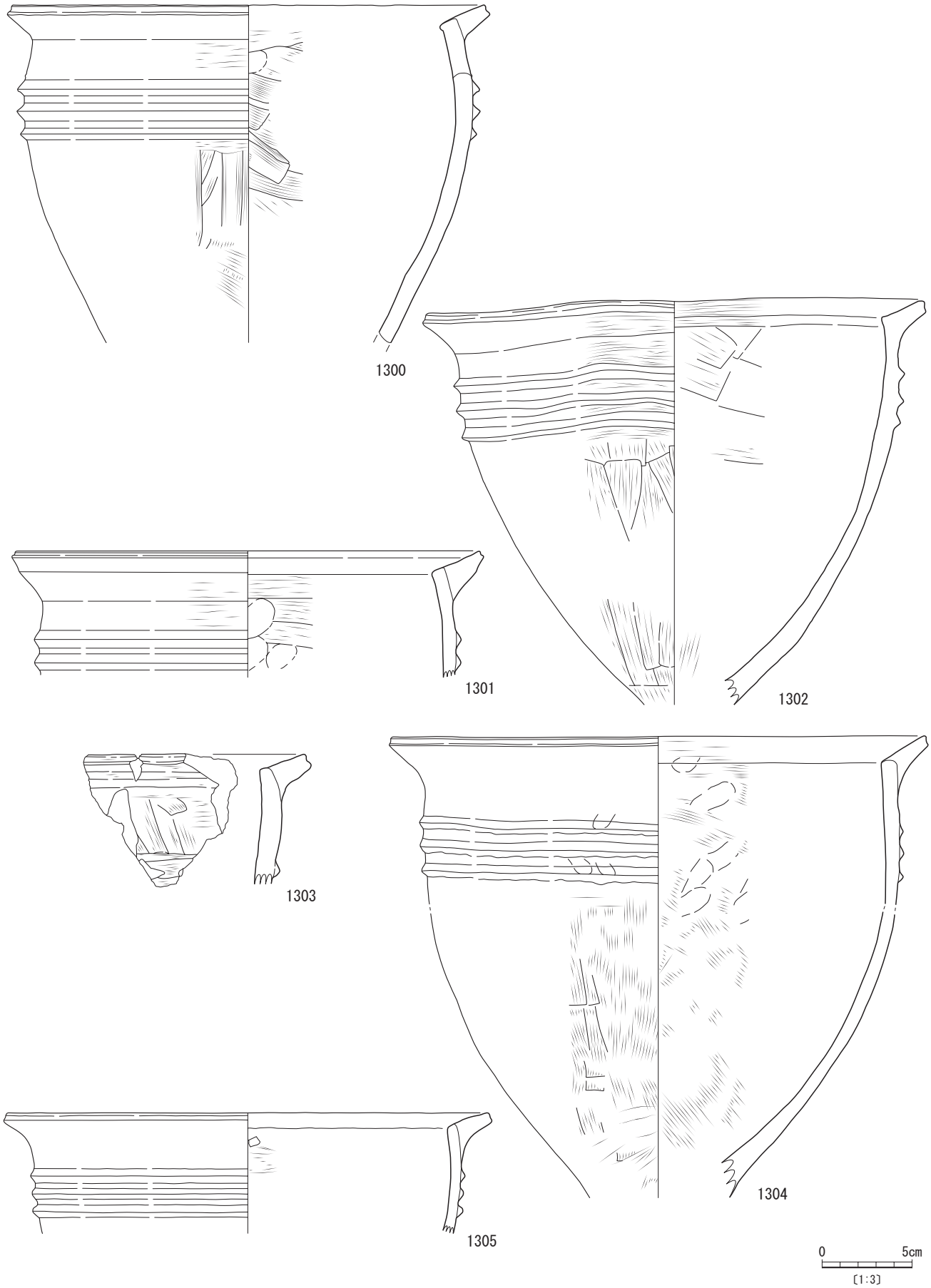
第 240 図　弥生時代中期　西部出土土器（４）

は判然としない。1284 は断面三角形状の口縁を有すが，口唇等の整形はあまく，丸みを帯びる。外面は丁寧な横ナデが見られるが，指頭圧痕が顕著に残る。口径は 29.6cmである。1285 は口径 27.2cmで，1284 と器形は類似する。胎土に雲母は含まれるが，焼成の状況による影響で白っぽくなる。外面はハケナデ調整である。1286 は口縁から胴部に向かって内傾する。口縁は指オサエによる整形の影響で凸凹が目立つ。1287 は口径 13.6cmと小型である。外器面の剥落が多く調整が不明瞭な部分もあるが，斜め方向のナデと指頭圧痕が確認できる。1288 は口縁部の破片資料であるが，端部の整形や外面調整が 1285 と類似することから掲載した。口縁部は端部に向かって先細りとなる。外面の調整も 1285 と同様，斜め方向のハケナデ調整主体である。1289～1291 は口唇部に凹線を有す土器である。1289 は口径 25.6cm。やや胴部が張る器形で，口縁部断面が三角形となる。外面調整は 1285 と類似する。1290 はやや小ぶりの土器で，口径が 17.5cmとなる。内外面の調整はヘラナデである。1291 は全体的に凹凸が目立つ土器であるが，口縁部の調整は丁寧で，口唇部の凹線も明瞭に施される。

1292～1299 は口縁部形態，貼付技法から擬朝鮮系土器との関連が推察される土器である。しかし，その所産については胎土中に雲母を含み，色調も典型的な大隅半島所産の土器と考えられるため，在地で製作された土器の可能性が高い。概して小型のものが多い。1292 は口径 16.2cmで円形粘土帯を貼り付ける。その際，外面の接合部調整がないため隙間が生じる。口唇には凹みの浅い凹線が見られる。調整はナデ主体である。1293 は口径



第 241 図　弥生時代中期　西部出土土器（5）



第 242 図　弥生時代中期　西部出土土器（6）

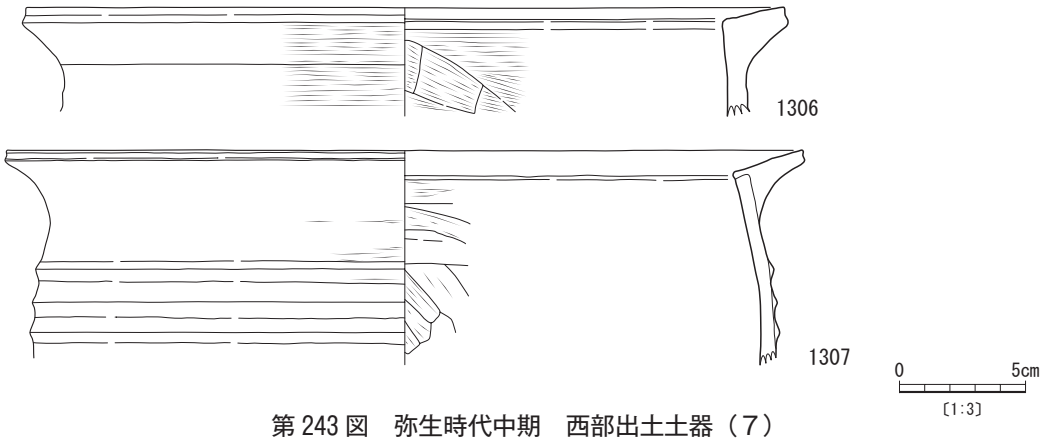
14cmで1292と大きさは類似するが，口縁が小さく貼付接合部調整が多少施される点が異なる。内外面ともに丁寧なナデ調整で器面はなめらかである。1294は器体に断面円形の粘土帯を巻き付け，その上に器体の上端をかぶせた後，ナデ調整をおこなっている。口縁は玉縁状となり，器体と貼り付けた粘土帯との接合部には隙間が生じている。1295と1296は口縁部断面が丸みを帯びる。器体部に円形粘土帯をかぶせるように貼り付けて口縁部を作出する様子が観察できる。1296は被熱のため，全体が赤褐色を呈し，外面の剥落が大きい。1297は断面三角形の口縁部だが，やはり器体との接合部の調整があまく隙間を有す。1298は1297と色調，口縁部の形が類似する。1297に比べ口縁貼り付け部に残る指頭圧痕が明瞭である。1299は薄手の器体に上端部から覆うように断面三角形の粘土帯を貼り付ける。貼付後の調整は粗雑で凹凸が激しい。調整は内外面とも横ナデで，口縁粘土帯を貼り付ける前に施されている。

1300～1307は口縁が上向きにのび，口唇に凹線が巡る土器である。その中で1300・1301は口縁が厚くなる土器である。1300は口径26.8cmで口縁から胴部下半まで残存し，３条の三角突帯が確認できる。外面のハケナデ調整が明瞭で器面は比較的整っている。1301は口径が26.2cmで，胴部突帯が２条まで確認できる。口縁部下面にはケズリ様の整形を施した結果，稜が作出され断面三角形の口縁となっている。1302は歪みのある土器で，安定した数値が割り出せないが，口径は最大値で29.4cmとなる。口縁部から底部に向かって緩やかに窄まる器形である。胴部には３条の三角突帯が貼り付けられる。外面の調整は突帯より下位は縦方向のハケナデ調整で，内面は口縁部上位から胴部にかけて横方向のハケナデ調整が顕著に確認できる。1303は口縁が厚くなり，かろうじて１条の突帯が残存する。器面調整は丁寧できれいである。1304は口縁から胴部下半まで残存する。口径30cmで胴部には３条の三角突帯が確認できる。貼付部下側は総じてナデ調整が弱く，隙間が目立つ。外面調整は縦方向のハケナデ調整とナデ調整である。1305は口径26.6cmで，口縁直下に３条の三角突帯を有す。口縁上面がやや盛り上がる。器面は磨滅し，外面調整は不明瞭である。1306は口径30.4cmで口縁部は上向きとなるが1307に比べ長さが短い。外面は丁寧な横ナデ調整だが，内面は斜め方向のハケナデ調整である。1307は口径31.6cmである。３条の三角突帯が確認できるが，突帯は高さがなく，丸みを帯びる。外面は横方向に丁寧なナデ調整が施される。

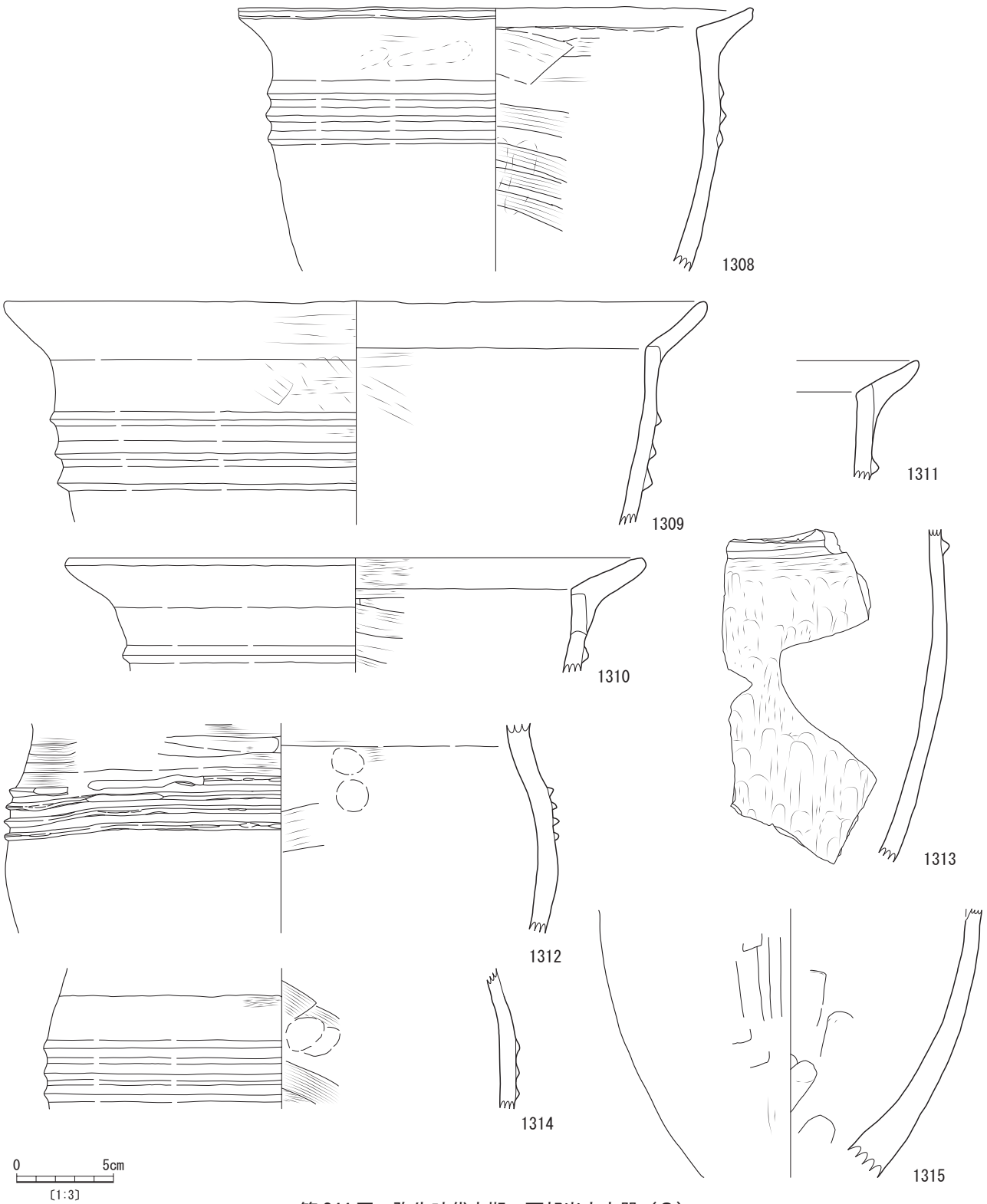
1308～1311は口縁が上向きに長くのびる土器である。口唇が丸くなり，凹線もないことから弥生時代中期末に位置づけられると考えられる。1308は口径26.6cmで口縁上面が若干凹む。口縁と体部接合は指で強く指オサエがなされる。３条の三角突帯が確認でき，貼付位置が口縁に近い。1309は口径が36.4cmで，胴部から口縁に向かってゆるやかに外反し，胴部と口縁部接合箇所に明瞭な屈曲を有す。口唇は丁寧な調整によって丸くまとめる。胴部には３条の三角突帯が貼り付けられる。1310は口径30cmで，口唇の特徴や調整なども1309と類似する。胴部下半が欠損しているため，現状は１条だけ三角突帯が確認できるが，多条突帯と推察される。1311は1310と断面形が類似するが，突帯の貼り付け位置が1310より下位となる。

1312～1315は甕形土器の胴部である。1312は胴部最大径付近に４条の貼付突帯を巡らせる。突帯は貼り付け後の調整が雑で，歪な形である。外面調整は横方向のハケナデ調整で，比較的丁寧であるため，部分的にミガキ様となり光沢をおびる。1313は胴から底部近くまで残存する。厚さが0.6cm程度で薄手のつくりである。縦方向のヘラナデにより丁寧に調整される。1314は胴部の資料であるが，接合部で口縁が剥離して欠損している。３条の突帯部付近は被熱による影響か，器面剥離が著しい。1315は胴から底部にかけてである。内外面ともにヘラによる縦ナデで丁寧な調整が施される。

1316～1329は土器の胴から底部，脚台にかけてであ



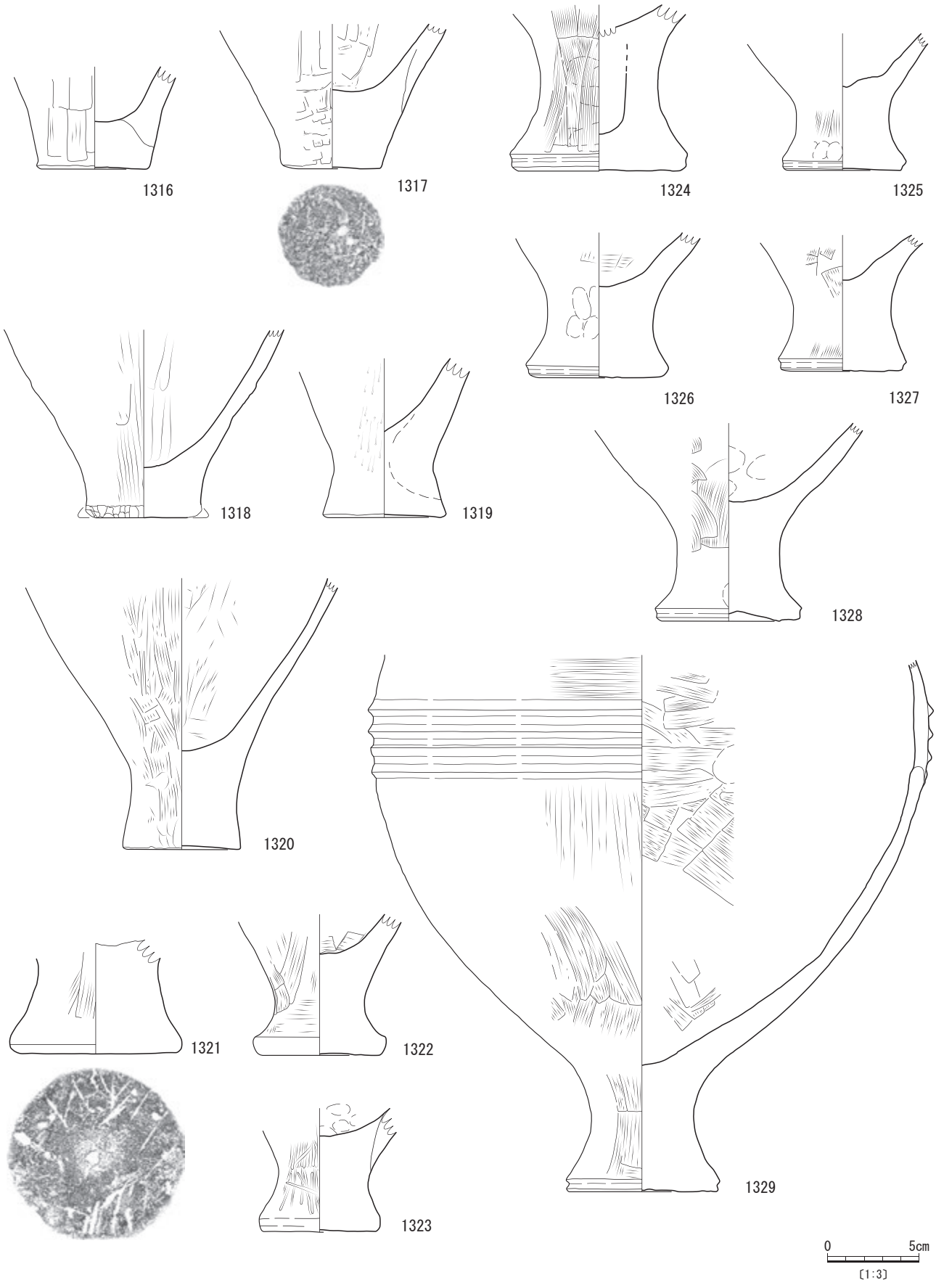
第243図　弥生時代中期　西部出土土器（7）



第 244 図　弥生時代中期　西部出土土器（8）

る。弥生時代中期を代表する充実した脚台が基本となるが，その中でも端部に凹線を有すものとそうでないものや，丸みをもつものなどバリエーションが見られた。

1316～1318 は厚手の平底となる。1316 は，縦方向のヘラナデ調整が明瞭である。調整時のかき上げのためか，脚台端部に粘土が残り外側に張り出して小さな膨らみをもつ。1317 は径 5.4cmと小さく，胴部への立ち上がりも，他の脚台部資料に比べて外反度が弱い。外面はケズリ様の縦方向のヘラナデで調整される。底には組織痕と思われる圧痕が残存するが，風化による磨滅で判然としない。1318 は縦方向のヘラナデ調整である。端部は若干磨滅するが，欠損状況から小さな粘土帯を貼り付け，



第 245 図　弥生時代中期　西部出土土器（9）

安定性を高めていた可能性も考えられる。

1319・1320 は胴部から底部にかけてのくびれが少なく端部も外側へ張り出さない器形のものである。1319 は 1320 に比べ，脚台の高さが低い。外面はその他同様ハケナデ調整だが工具押し当てが強かったためか，胎土中の鉱物移動が明瞭に観察できる。脚台下半にのみススの付着が認められる。また，欠損部にて整形時の粘土利用が観察でき，粘土塊を中心に脚台を整形した状況が観察できる。1320 は胴部に比して脚台径が 6.4cmと狭いため，不安定さを感じる。内外面ともに縦方向のハケナデ調整が丁寧に施される。外面にはススが付着する。

1321・1322 は端部に凹線を有さない脚台で，端部が丸みを帯びる。1321 は 1322 より大型の端部となるが，より外への張り出しが弱くなると推察される。底には木葉圧痕が遺存するが樹種などは不明である。1322 は内外面ともに丁寧なハケナデ調整で若干底の中央部が凹む。接地面は平らで安定感がある。

1323～1329 は脚台端部が丁寧に整形され凹線が巡る。1323 は端部の整形が，凹線の巡るその他の脚台に比べてあまく，丸みを残す。端部には不明瞭な凹線が施され，外面調整はミガキ様で光沢がある。1324 は縦方向のハケナデ調整が明瞭で内底部には使用時の炭化物が付着する。1325 も調整は 1324 同様だが器面の状態が悪く不明瞭である。1326・1327 は内底部に段差を有す。有段箇所は体部と脚台の接合箇所と推察される。調整は 1326 がナデなのに対して 1327 はハケナデ調整である。1328 は脚台中央から上方向へのハケナデ調整が施される。端部より上位は横ナデである。底部接地面は中央部が凹む。念入りにナデ調整が施されているため光沢がある。1329 はまとまって出土した。谷間に堆積する黒色土層から出土したため，当初遺構の可能性を想定して調査したが，明確な掘り込みを検出するには至らなかったため，包含層扱いとした。胴部に 4 条の三角突帯が巡る。さらに，ゆるやかな曲線を描きながら窄まり脚台に至る器形で，脚台端部には凹線が巡る。調整は脚台から胴部が縦方向の調整で，突帯上部は横方向へと変化する。

蓋形土器（第 246 図 1330～1333）

1330～1333 は破片資料であるが，西部では 4 点を図化掲載する。端部からつまみ部にあたる器形と内面に付着するススの有無などから，甕形土器と壺形土器の 2 器種に用いられたものと判断した。

1330～1332 は甕形土器の蓋と考えられる土器である。1330 は頂部で径 5 ㎝と大きめのつまみを有す。端部に向かって大きく開く器形と考えられる。外面は丁寧な縦ナデ調整である。1331 は端部から頂部に向かって反りが強くなる。内面にはススが付着する。1332 は端部の破片資料である。内面にススが付着する。器形は端部から頂部にかけて窄まる。竪穴住居跡 7 号で出土した 596 と類似する器形と推定される。端部上面には三角突帯が巡り，内外面ともに縦方向のミガキ調整が施される。

1333 は壺形土器の蓋と考えられるものである。1331 に比べて直線的な器形で，残存部の径から推定する全形は小さい。内面から穿孔された穴が見られることから壺形土器の蓋と判断した。

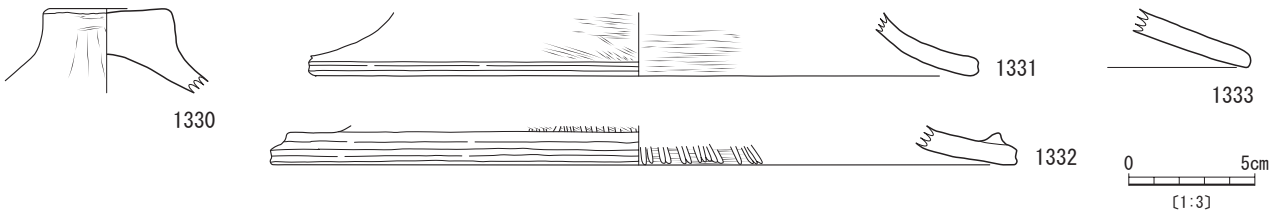
鍋形土器（第 247・248 図 1334～1340）

1334～1340 は口縁が大きく開き，器高が低くなる器形である。いずれも底部が欠落しているため，全体の形状は不明である。胎土は雲母を多く含み，粒径の大きい鉱物粒が入る。器形は中世の土師質鍋形土器を彷彿とさせるが，本遺跡で出土した中世土器とは胎土が大きく異なることや，土器全体の発色などは在地の弥生土器そのものであることなどから，弥生時代中期の土器として扱うこととした。

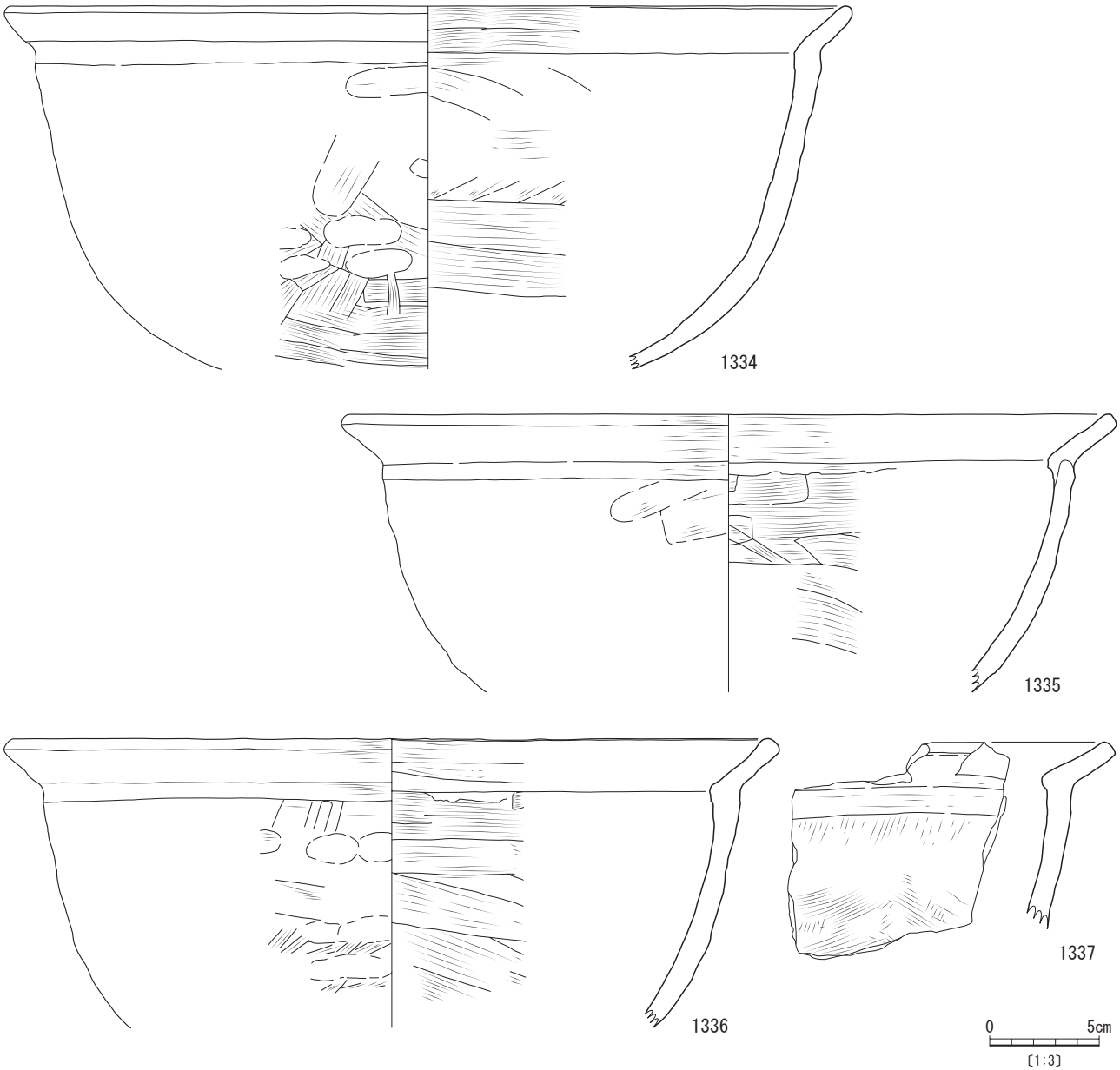
1334 は，口径 38.7cmで，口縁から底部付近まで残存する資料である。底付近から腰部にかけて，外に開きながら広がりを見せ，胴部から口縁にかけては外反の度合いを幾分かゆるめる。口縁は上向きで，体部との接合部と推定される箇所で，押圧したために凹みが見られる。内外面ともにヘラナデ調整主体であるが，外面胴部下半はハケナデ調整が明瞭であるのに対し，上半はナデである。口縁内面もハケナデ調整痕が顕著に確認できる。

1335～1337 は口唇部を 1334 に比べて平らにまとめ，長い口縁となる。口縁内側は，体部接合箇所で内側に突出し明瞭な稜線が見られる。胎土，内面調整は 1334 とほぼ同様である。1335 は被熱による器面剥離の影響で判然としない。1336 は，胴部下半まで残存していると考えられるが，1334 のような激しい工具調整痕は見られない。1337 は胴部上半から口縁にかけての資料だが，外面には粗い指オサエ調整後に斜位のハケナデ調整が明瞭である。

1338 は口径 39cmで，口縁から胴部にかけての資料である。口縁内側にかすかな凹みを有す。外面は被熱によ



第 246 図　弥生時代中期　西部出土土器（10）



第 247 図　弥生時代中期　西部出土土器（11）

りほぼ剥落し露胎する。内面も同様だが，一部ナデ調整の痕が確認できる。

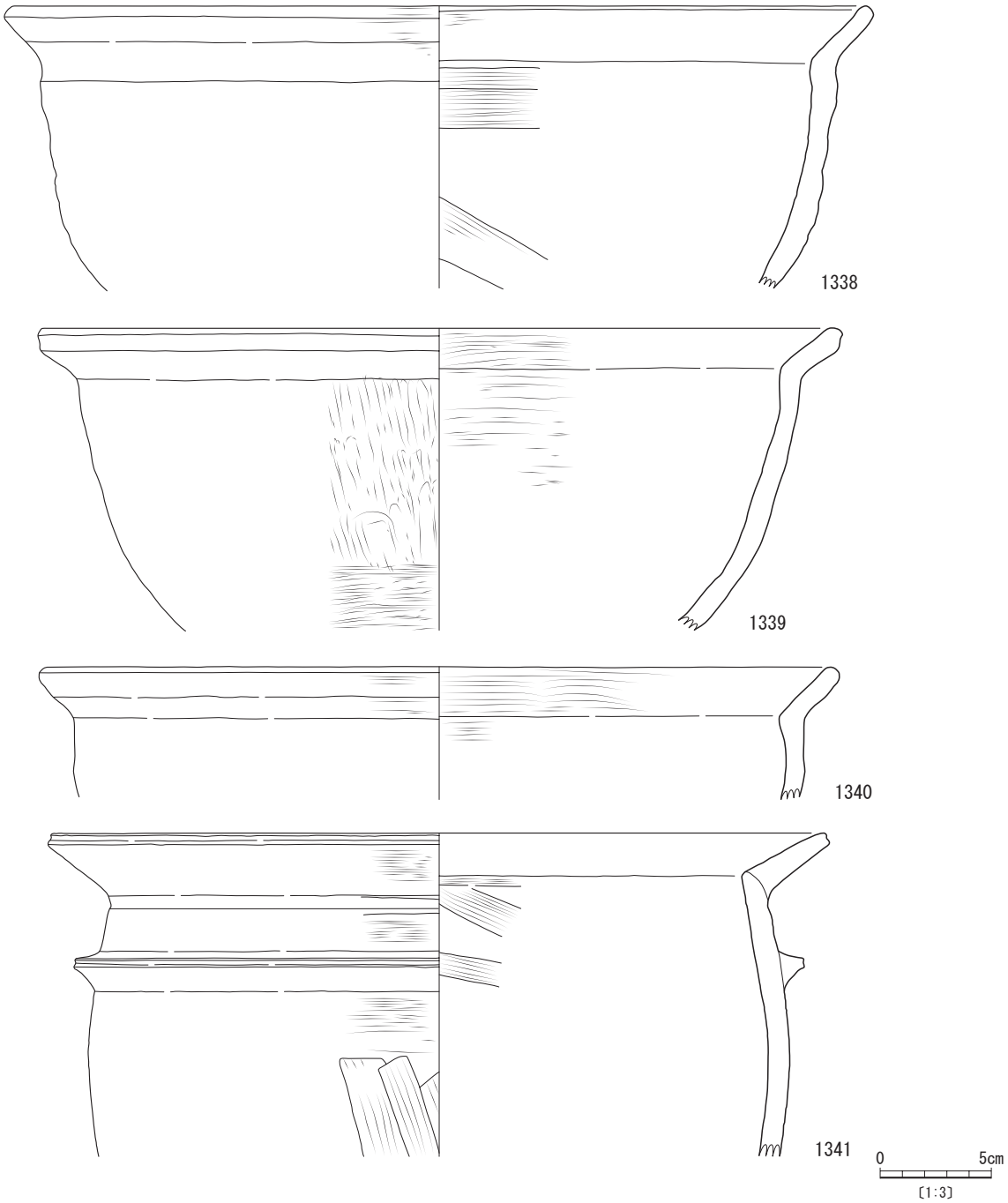
1339・1340 は，口径がそれぞれ 36㎝，32.2㎝で口縁外面に稜を持ち，整形，調整がその他の鍋形土器に比べ丁寧である。1339 は口縁から腰部付近までの資料である。口唇はやや丸みを帯び，丁寧に整形される。外面は腰部より下位で明瞭な横方向のハケナデが見られるほか，内面も同様である。1340 は 1339 に比べてやや口唇が平坦だが，整形，調整ともに丁寧である。調整は内面もハケナデ調整後に指ナデが施されており，端整な感を受ける。

大型甕形土器（第 248 図 1341）

包含層遺物として出土した大型の甕形土器は少量であった。1341 は出土地点が本調査区で最も高い位置となることや墓域という点から，用途に関しては注意を要する土器である。1341 は口径 34㎝で，大型甕形土器としては小振りである。胴部にやや膨らみをもち，口縁に向かって窄まる。口縁は上向きで，体部から長くのびる。口縁下 5㎝に断面台形状の突帯が 1 条貼り付けられる。外面調整は突帯付近では横ナデだが，そこより下位は縦方向にハケナデ調整される。胴部下半にはススが付着する。

壺形土器（第 249～251 図 1342～1375）

1342～1353 は壺形土器の口縁から胴部にかけての資料である。口縁が逆「L」字状を呈するものと二叉状となるものなどが見られた。1342 は口径 14㎝と小さい。口縁上面が丸くなり玉縁状で，口唇には凹線が巡る。内外面とも丁寧なナデ調整である。1343 は口縁の破片資料



第 248 図　弥生時代中期　西部出土土器（12）

である。下がり気味の逆「L」字状口縁で，全体に丸みがかる。外面は横ナデで，右から左方向へ胎土中の砂粒の動きが確認できる。1344 は口縁部から頸部にかけて残存する。口唇には凹線が巡る。調整は丁寧で内外面ともに光沢がある。口径は 22㎝である。1345 は口径が 20.8㎝で頸部から口縁部に向かって外反する器形で，口縁部内面に突出部を有す。口唇部は欠損するが，おおよそ断面三角形状の口縁部と推察される。外面は斜め方向のナデ調整が主体で，内面は横ナデとなる。1346 は 1345 に比べて外反度が小さい器形である。口縁部上面には３本の沈線文が施される。調整は内外面ともにミガキである。口径は 22.2㎝である。

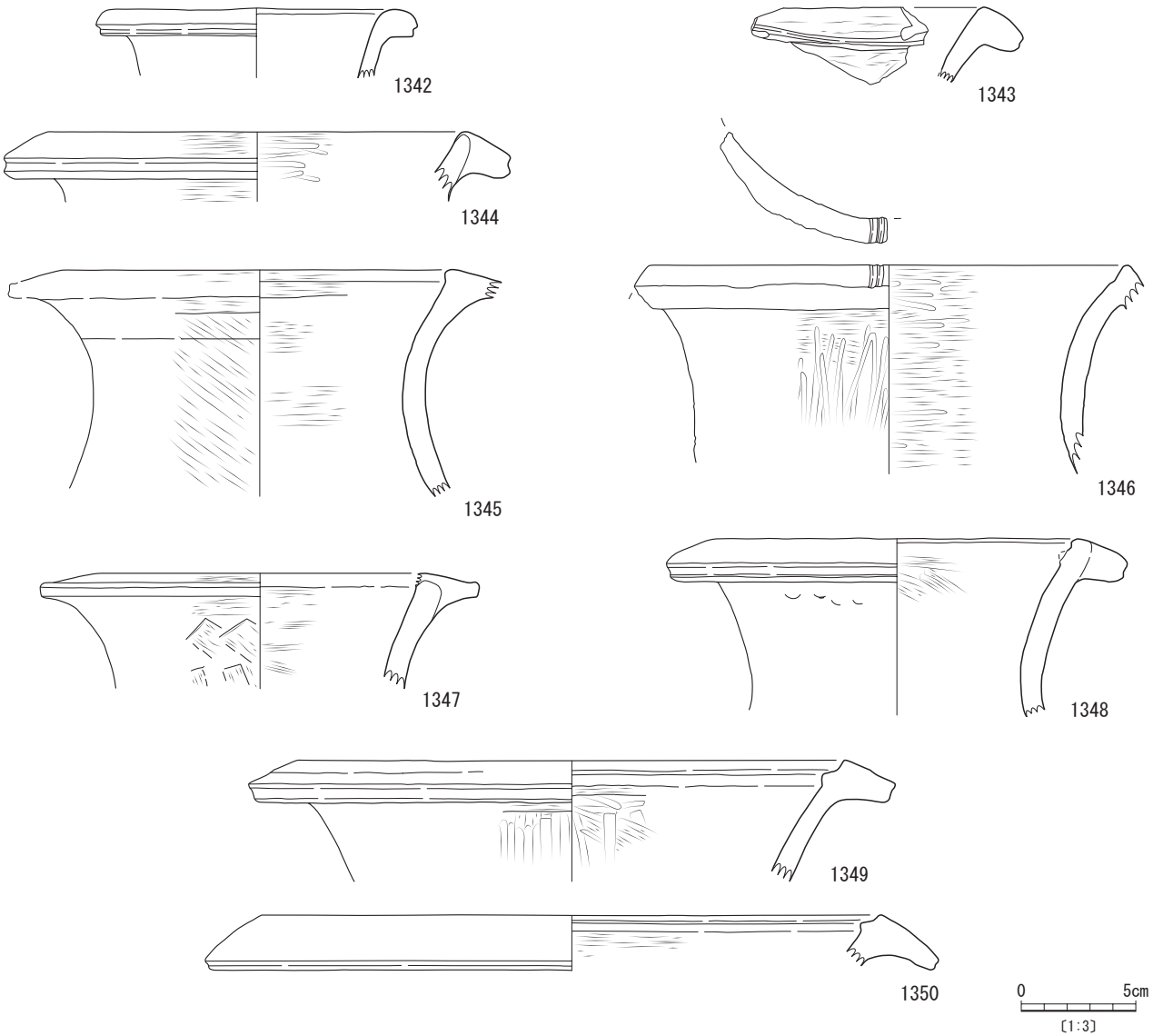
1347 は口径 19.2㎝で，先細りの口縁となるため，断面三角形状の形が際立つ。口縁部内側には貼り付け時の内側への突出部が見られる。口唇は丁寧な調整は認められるものの，凹線にはならない。外面調整も丁寧なヘラナデで，ミガキ調整は見られない。

1348～1350 は口縁内側に三角突帯が貼り付けられる。口縁はいずれも下がり気味の逆「L」字状口縁である。1348 は 1349 に比べ，口縁に厚みがある。内側の突帯は，

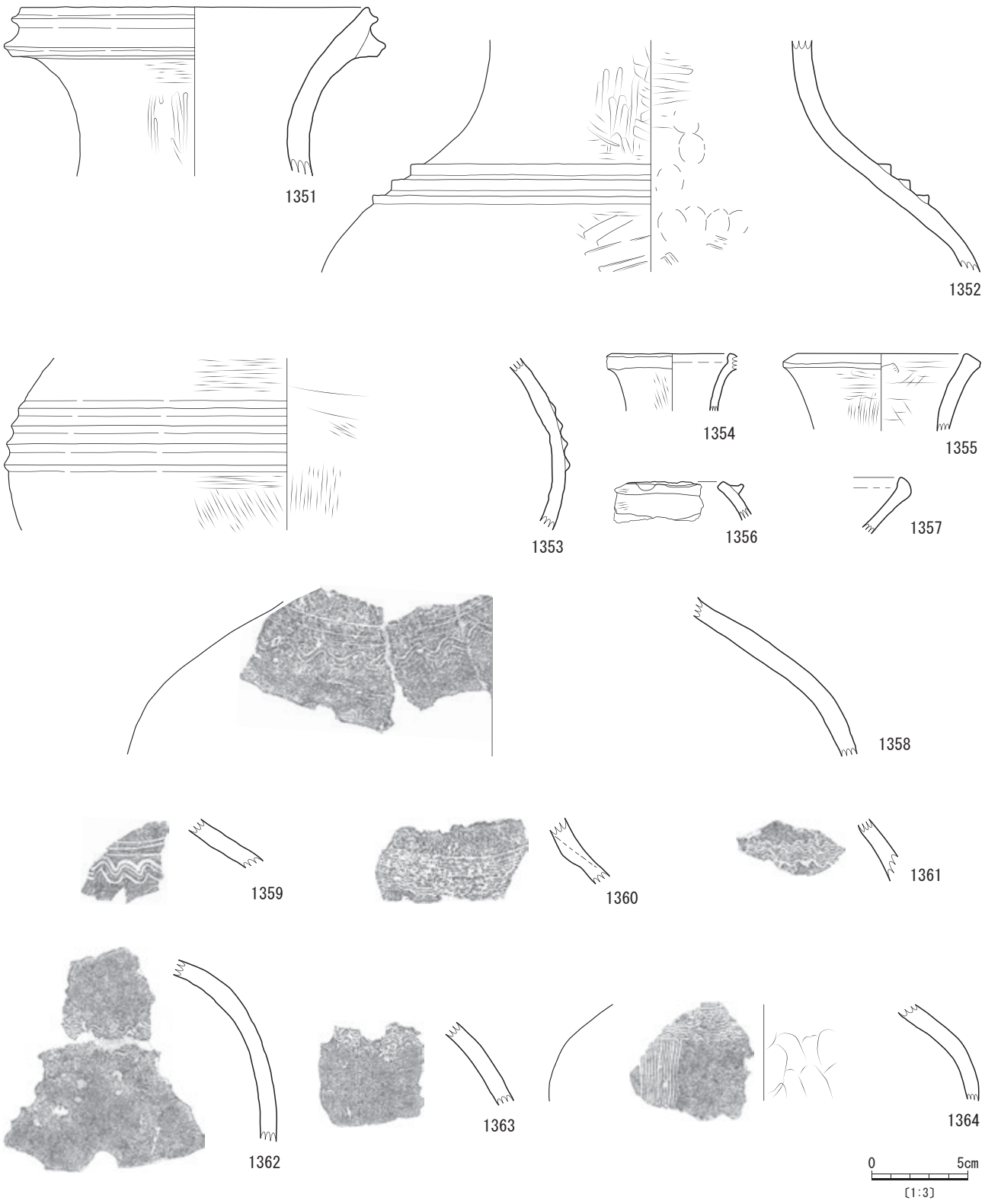
大部分が欠損している。1349 は全体にミガキ調整が施され，光沢がある。口径は 25㎝。1350 は下がり気味の口縁が長くのびる。口径は 32㎝で比較的大型である。口唇に凹線を有し，口縁部上面がやや膨らむような断面形である。焼成が良く，硬質である。1351 は頸部から口縁に向かって強く外反して開き，その下に断面台形状の貼付突帯が巡ることで二叉状口縁となる。外面は縦方向のミガキ調整が施され，口縁端には凹線が確認できる。土器の素地は白色だが外面は黒色となるため，黒塗り土器の可能性がある。1352 は頸から肩部にかけての資料である。肩部には３条の三角突帯が巡る。突帯より上位はミガキが施され，下位は斜めのヘラナデである。内面は調整が粗く指頭痕が明瞭に確認できる。1353 は胴部である。４条の三角突帯が巡る。胴部最大径は 29㎝に復元される。外面は黒塗りで丁寧な調整によって光沢がある。

1354～1357 は小型壺形土器の口縁部である。1354 は小型の壺と考えられるが，口縁は欠落している。口径は 6.8㎝に復元される。斜方向のヘラナデが一部確認できる。1355 は口径 9.2㎝である。頸部から口縁部に向かって外反する器形で口唇部は平らに整形される。調整はヘラナデである。1356 は無頸の小型壺の口縁部で，三角突帯が貼り付けられる。大きく内弯する器形である。1357 は小ぶりな袋状口縁壺である。断面形状は逆「く」の字状となる。屈曲部から口唇部に至る長さが短く丸みをもつのが特徴である。

1358～1364 は沈線文及び櫛描文を有する壺形土器の肩から胴部にかけての資料である。1358 は３条の沈線文を施し，下位に櫛描波状文を巡らせる。沈線文は，棒状工具による単沈線を上下に連続して施文している。波状文の凹線は一定ではないため，目の粗い工具と考えられる。外面は丁寧にヘラナデ調整が施され光沢感があ



第 249 図　弥生時代中期　西部出土土器（13）



第 250 図　弥生時代中期　西部出土土器（14）

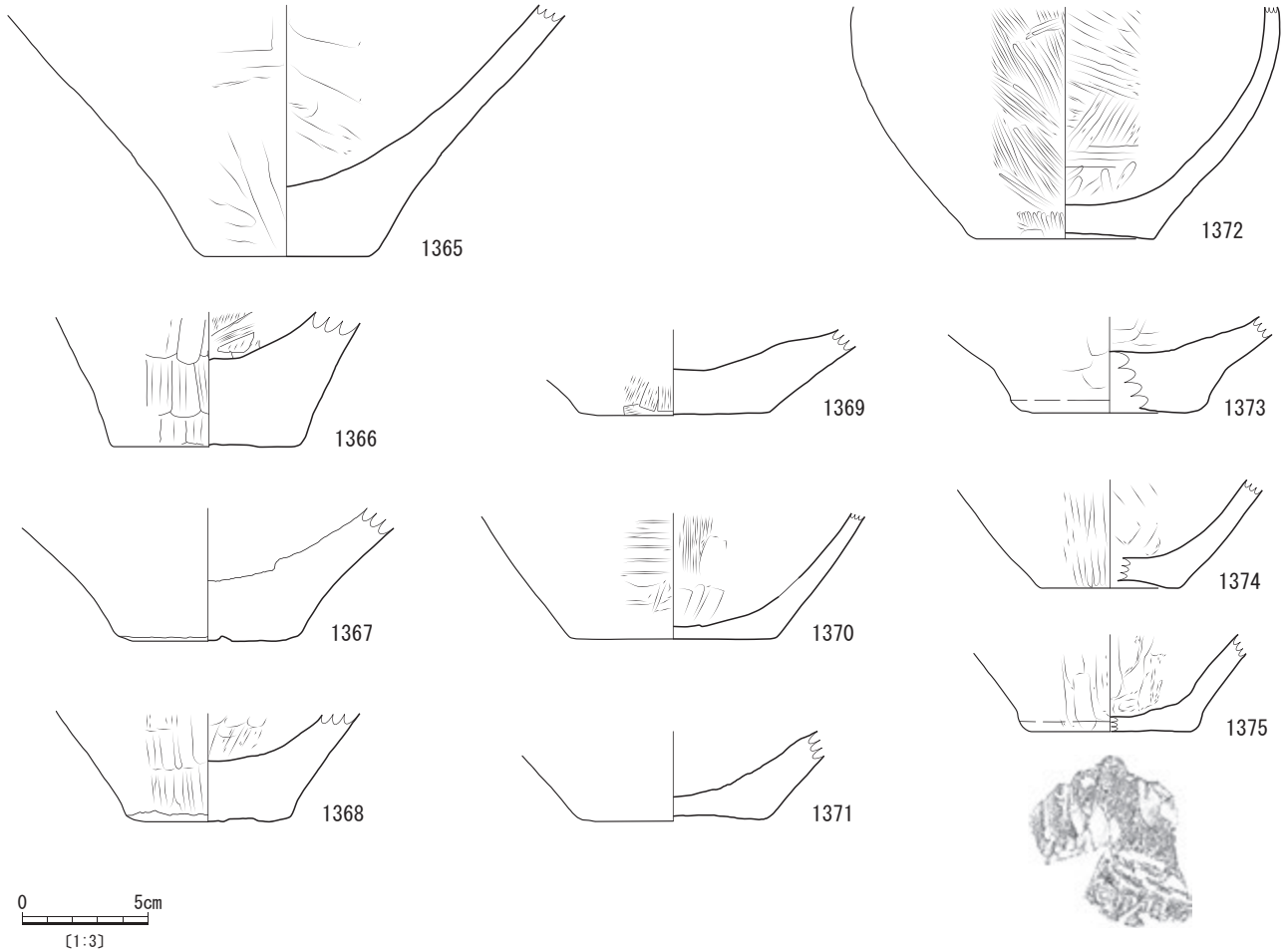
る。1359 は頸部と肩部の間となる。３条の沈線文と櫛描波状文の文様は 1358 と同様であるが，文様の凹線が深くはっきりしている。1360 は頸部にあたる資料である。上位に７条の沈線が施され，その下位に波状文が描かれる。いずれも７条の凹線で構成されることから，同じ櫛状工具による施文と考えられる。1361～1363 は肩部資料である。全て横位の櫛描波状文が施される。1364 も肩部であるが，上から横位沈線，櫛描波状文，縦位沈線文と施文される。３つの文様帯に使用される工具は同じ櫛状工具と考えられる。

1365～1375 は胴部と底部である。1365 は底径 6.4㎝で底が厚い。胴部に向かって大きく外反する。外面は斜位のヘラナデでなめらかな器面である。1366 は底径7.6㎝，外面は縦方向のヘラナデ調整だが剥離が目立つ。1367・1368 はほぼ同じ底径である。1367 は内外面とも，器面が荒れており調整が確認できない。特に内面は薄皮状に剥離する。1368 はヘラによる細かな縦ナデにより，光沢がある。底端部は整形時の指オサエが若干ながら確認できる。1369 は底径 6.8㎝で，底部から胴部に向かって大きく外傾する器形である。内面は剥落が大きく，露胎する。1370・1371 は底部厚が比較的薄い資料である。1370 は底径８㎝で器壁が薄く，横ミガキ調整による器面できれいである。1371 は底部より体部が厚くなり，上げ底である。

1372～1375 は若干，上げ底となる土器である。1372 は底部から胴部の資料で，復元底径７㎝である。残存部で胴部最大径に達する位置が見られ，形状は球形に近い。外面は斜位のミガキ調整が施され光沢が生じる。全体的に黒色で，黒塗り土器の可能性が考えられる。また内面も黒色である。底部から胴部にかけて，精徴な調整が施される。1373 は復元底径７㎝で，内外面とも器面の磨滅が著しい。底部中央がやや凹む。1374 は端部から胴部にかけて膨らみをもちながら立ち上がる。外面はミガキ調整でなめらかな器面である。1375 は底部端が外側に張り出す。外面は縦方向のミガキ調整が見られ，精緻なつくりだが内面は底部円形粘土盤と胴部接着時の工具調整が明瞭に観察できる。また胎土もチャート，石英などの鉱物が目立ち，特異である。

鉢形土器（第 252 図 1376～1380）

1376～1380 は特殊器形の鉢形土器である。1376 は口径 30.4㎝で，胴部から口縁に向かってゆるやかに外反し，胴部最大径付近からほぼ垂直に立ち上がる。口唇は



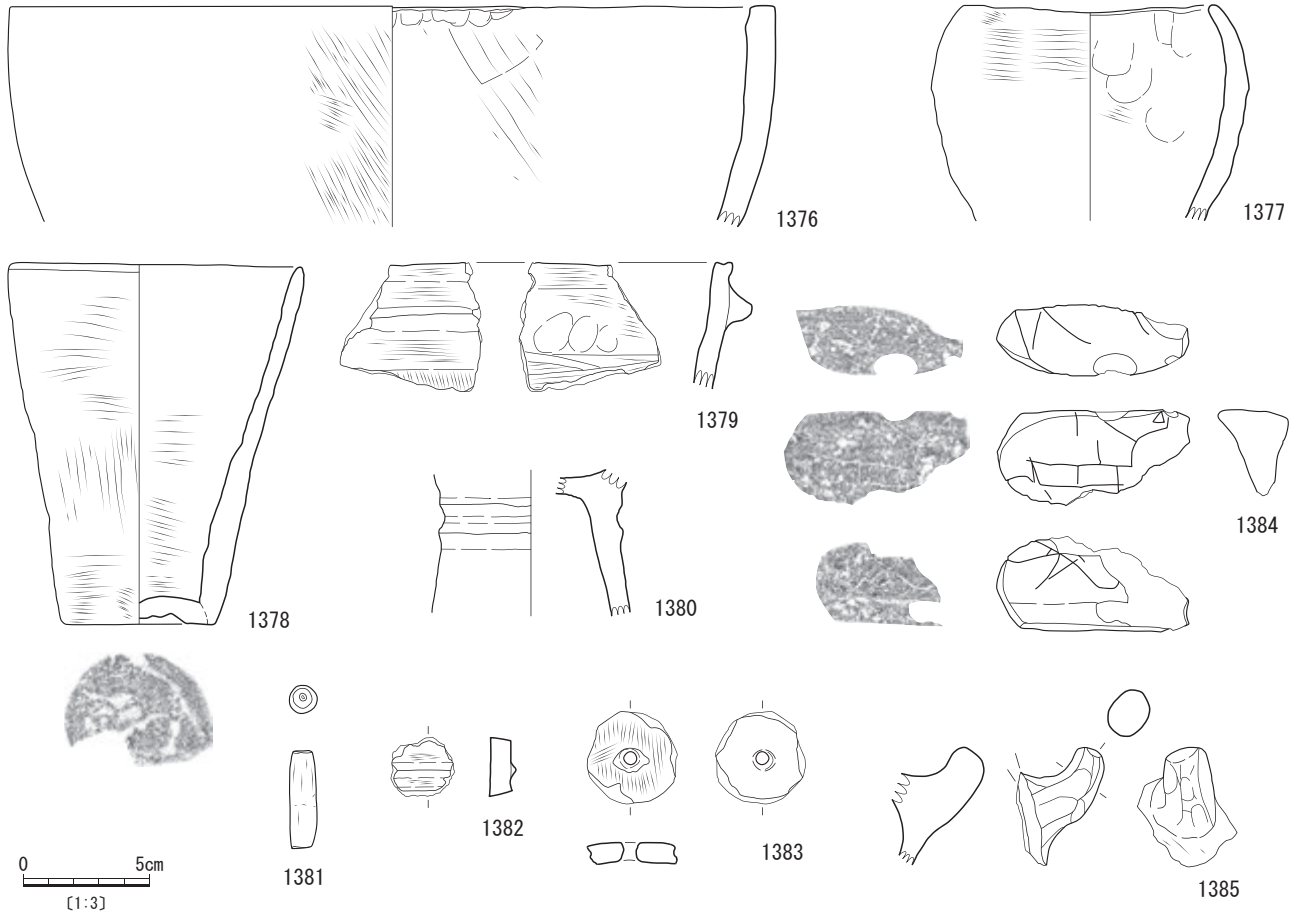
第 251 図　弥生時代中期　西部出土土器（15）

平坦に整形され，口縁内面上部には指オサエの痕跡が確認できる。調整は内外面ともに斜位のハケナデ調整である。1377 は口径 10㎝で，胴部から口縁に向かって内弯する。外面は横方向のハケナデ調整だが，指頭圧痕が明瞭で手捏ね風である。口唇もナデ調整はされるが，整形があまく不整である。外面は胴部最大径より下位に被熱の影響が大きく，剥落が激しい。1378 はコップ状の器形で完形に近い。底部から口縁に向かってゆるやかに開きながら立ち上がり，口唇は先細りである。底は円盤状粘土塊ではなく，不整形なものを利用しているため凸凹している。調整は器面が磨滅しているため不明瞭だが，上位から横，縦，横のナデ調整が確認できる。器面の色調は橙色を呈し，胎土も雲母を含まず，石英，黒色鉱物が目立つ。器形も含めて，注意を要する資料である。1379 は口縁下部に三角突帯を有し，口唇は凹線が見られる。胴部はハケナデ調整で，突帯付近が横ナデとなる。内面は指頭圧痕が見られるほか，横方向のハケナデ調整も施される。

1380 は鉢形土器の中空脚部である。屈曲部に 2 条の三角突帯が貼り付けられる。胎土は黄白色を呈し，他の土器とは異なる。やや軟質で器面が磨滅しているため，調整は不明である。搬入土器と考えられる。

土製品（第 252 図 1381～1385）

1381 は土製の錘の完形品である。長さ 3.9㎝，径1.1㎝で孔の径は 0.3㎝である。中央部に整形時の指圧痕と考えられる凹みがある。両端とも比較的丁寧に整形されている。1382 は甕の胴部片を打ち欠き，円形に成形した円盤状土製品である。径は約 2㎝と小さい。1383 は有孔円盤状土製品である。甕の胴部片を円形に打ち欠いて整形し，中央部を穿孔する。孔は土器内面から擦ってあけられたと考えられる。1384 は甕突帯部の転用土製品である。背面には体部と突帯の接合線が確認できるが，全体的に磨ることで各面をなめらかに整えている。三面に単沈線による文様，絵画が施される。沈線断面は鋭角な凹みとなっており，正面および背面の線刻の一部に朱と思われる顔料が確認できる。正面は直線的な線刻の組み合わせから絵画と考えられ，抽象的に描かれたシカを連想させる。絵画上部には三角形が描かれる。頭部と考えられる箇所に顔料が残存している。背面及び上面は直線と曲線が線刻される。1385 は一見すると組合牛角形把手だが，器体部の弯曲から牛角状の突起端部が上方向へ向く器形と考えられる。そのため器種は判然としない。円柱状の粘土塊を弯曲させながら貼り付けた後，ナデ調整となっている。



第 252 図　弥生時代中期　西部出土土器（16）

③調査区東部（第 254 図）

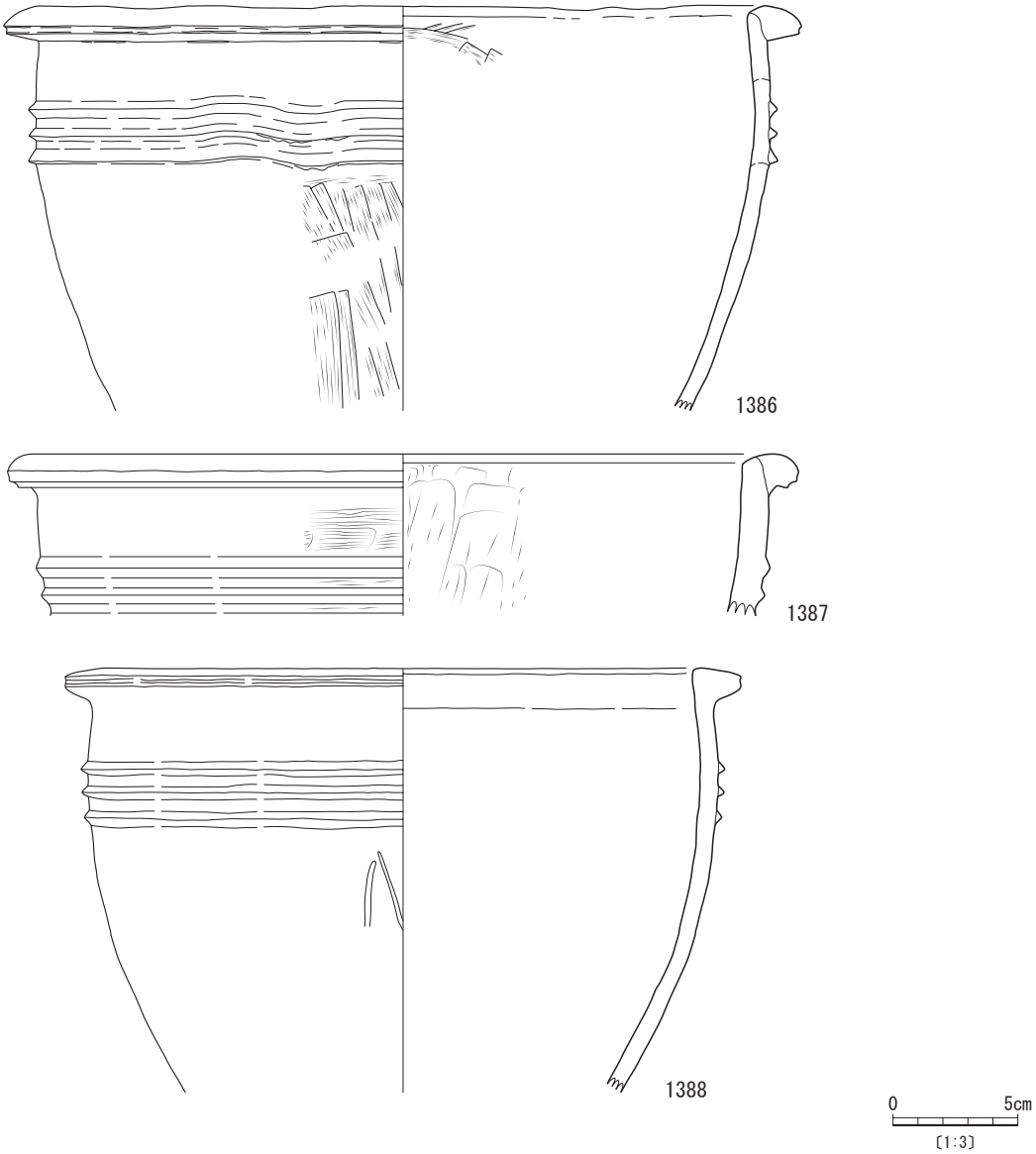
東部出土の土器として 142 点を図化掲載する。東部の地形は先述してきたとおり，44・45 区ライン付近を南北方向に走る谷を境に東西に幾分傾斜はもちながらも安定した地形が見られる。東部とした範囲で最も標高の高い 35・36 ラインを最高地にして，東に向かって緩やかに傾斜し谷筋に至るが，その谷間の 41～44 区ライン付近に，遺物の出土域の一つを認めることができる。そのほかには北からＤ－ 48 区，Ｆ－ 53 区，Ｋ－ 51 区周辺に出土域の集中が見られるが，いずれも傾斜地である。これは分布図上の空白箇所が後世の削平を受けている影響と考えられる。

出土土器の器種組成は西部と大きな差異は見られないが，甕形土器及び壺形土器の口縁部形状に変化が看取されるため，型式的な変化が存在すると考えられる。また，特筆される出土土器として，西部では出土していない凹線文土器がみられることが挙げられる。

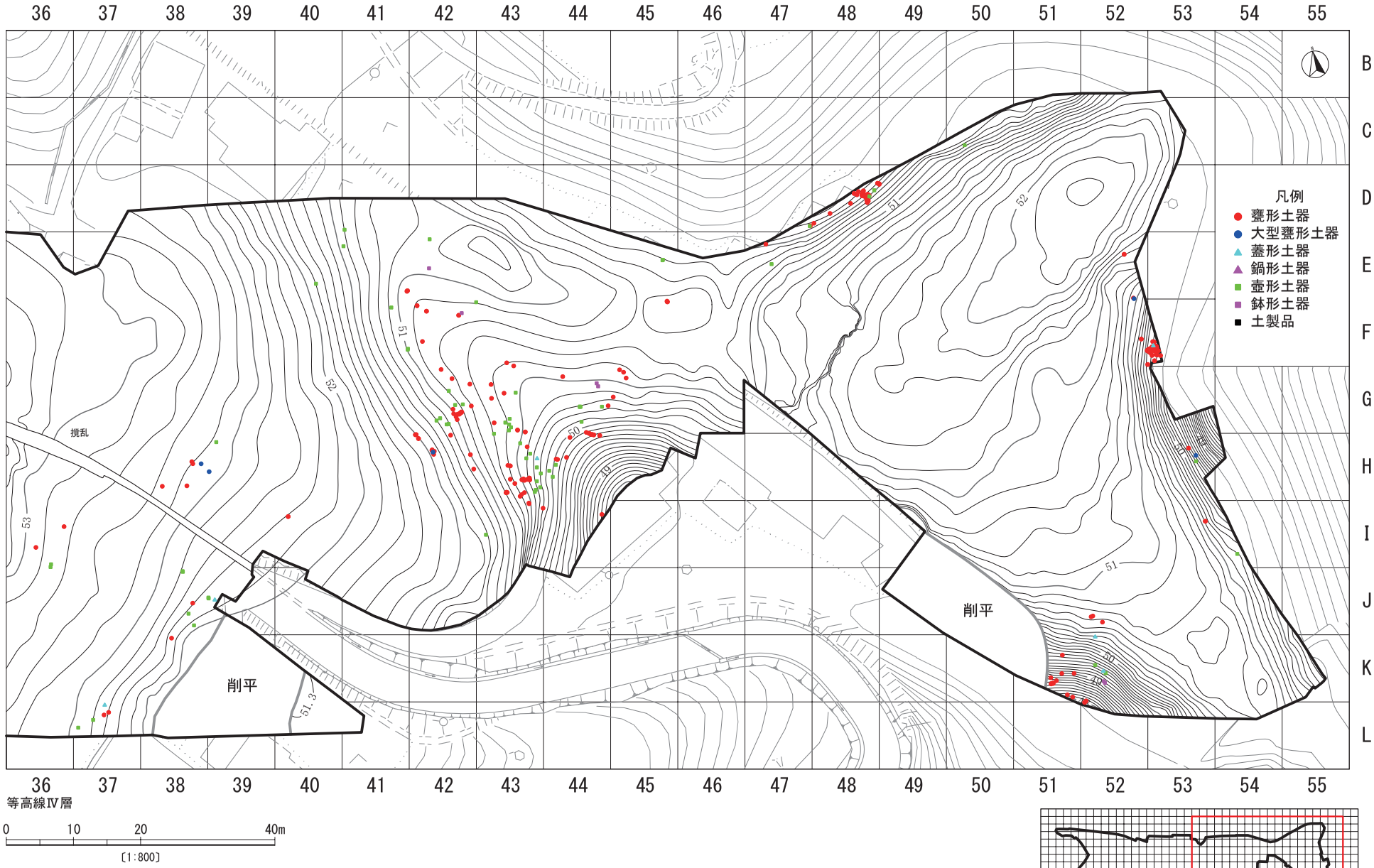
甕形土器（第 253～261 図 1386～1466）

1386～1466 は甕形土器である。口縁部，胴部，底部の順に掲載する。

1386～1388 は口縁部が短く，端部が下に向く土器群である。1386 は口径 32㎝で口縁上面が丸くなる。胴部には３条の三角突帯が巡る。外面の突帯下位は縦方向のハケナデ調整でススが付着する。1387 は口径 31.6㎝で，口縁は玉縁状となる。凹線は端部でなく下面に施され，３条の三角突帯が確認できる。1388 は口径 27㎝で３条の三角突帯を有す。口唇部には凹線が巡り，ナデ調整も丁寧である。突帯下位も丁寧なヘラナデ調整が主体だが，被熱による器面剥離とススの付着で一部不明瞭である。1389 は口径が 38.4㎝で，胴部から口縁部に向かっ



第 253 図　弥生時代中期　東部出土土器（１）

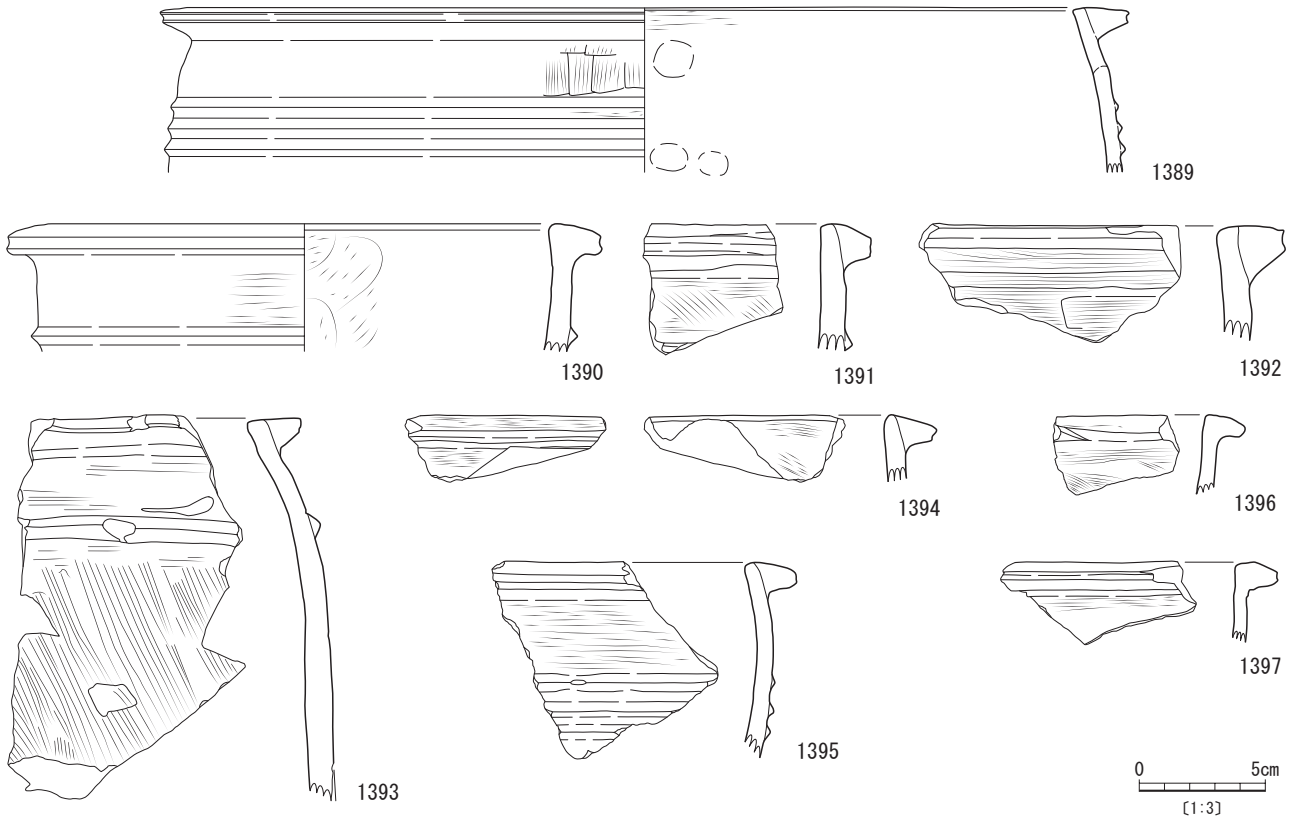


第 254 図　弥生時代中期　東部出土土器分布図

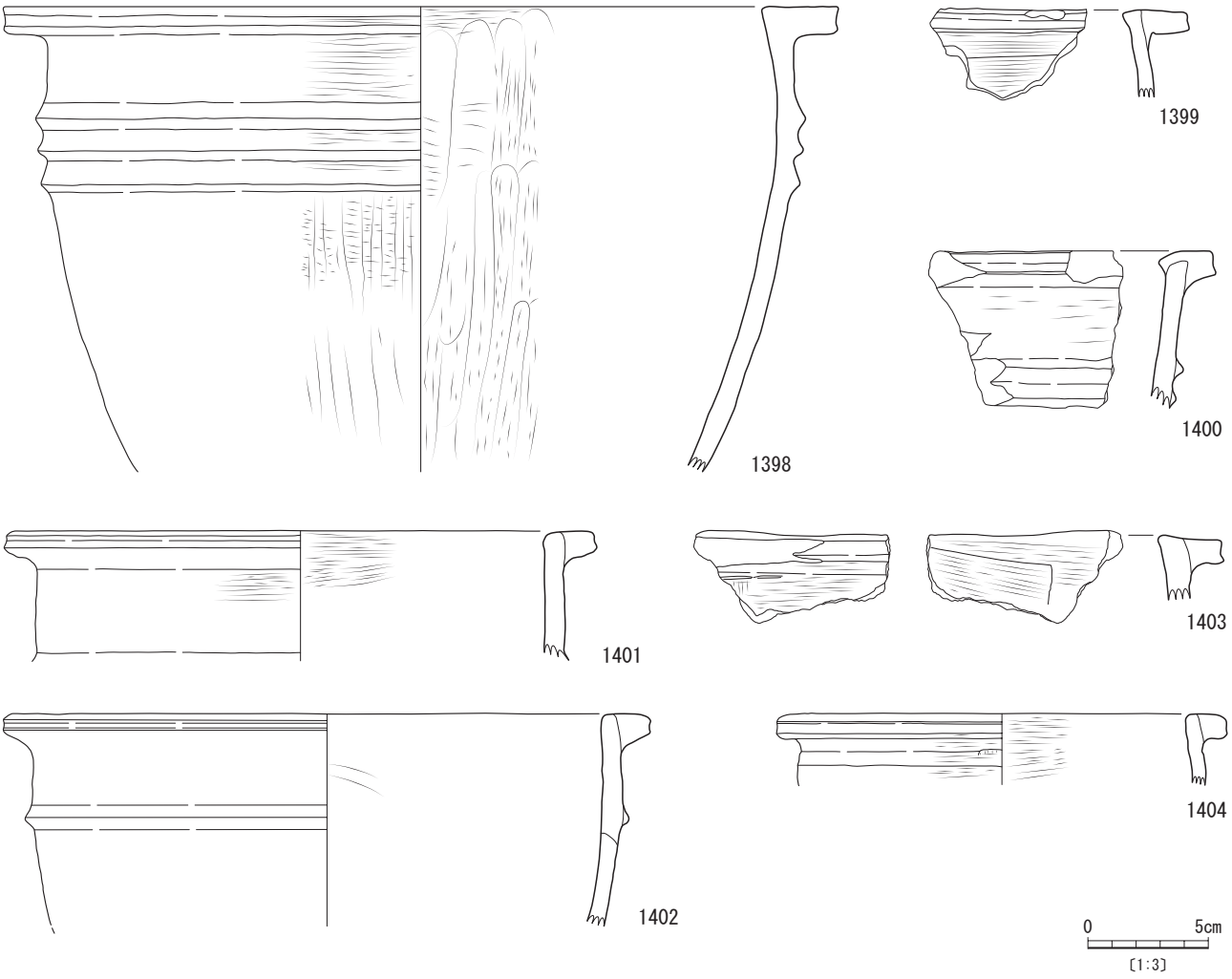
て窄まる器形である。３条の三角突帯が胴部に巡る。最大の特徴は口縁部と突帯部間の調整が縦方向の丁寧なハケナデ調整であることである。時期差を示すものか注意が必要である。1390 は口径 20㎝である。残存部の調整は，外面は横方向のヘラナデで，内面は斜めのヘラナデであるが，いずれも丁寧である。突帯から口唇部までススが付着する。1391 は破片資料である。口唇部が幅広で断面台形状である。残存部外面は横，斜めのハケナデ調整である。1392 は口縁断面形が三角形となり，横ナデ調整である。口縁下面にススが付着する。1393 は口縁から胴部までの資料である。突帯は１条で，突帯を境にして上位が横ナデ，下位が斜めのハケナデ調整となる。1394 は口縁部断面が三角形となり，口唇には浅い凹みの凹線が見られる。1395 は内弯する器形で３条の三角突帯を有す。突帯の幅は狭く，土器本来の大きさのわりに貧弱である。口唇部には凹線が見られない。1396・1397 はやや小ぶりな甕の口縁部片である。1396 は外面に横斜ハケナデ調整が明瞭で器面が整っている。1397 は口縁部下面までススが付着し，黒色の器面を呈す。

1398～1404 は口縁部が水平となる甕形土器である。1398 は口径 34.8㎝で，口縁部が逆「Ｌ」字状となる。口縁部から胴部にかけて残存し，胴部最大径となる箇所に３条の三角突帯が巡る。内外面ともにヘラナデで丁寧に調整される。1399 も 1398 同様，外面調整が丁寧である。口縁部はやや内弯し，口縁部内面が内側に若干突出する器形である。1400 は口唇の幅が広く，口縁内側に突起部が見られる。胴部から口縁部に向かってまっすぐ立ち上がる器形と推察される。1401 は口径が 24.3㎝で，胴部から口縁部に向かってまっすぐ立ち上がる器形である。胴部には１条の突帯が確認できる。口縁部の断面は四角形である。口縁部上面から胴部外面にかけてはススが付着するため，蓋を使用した利用が想定される。内外面ともに横ナデ調整である。1402 は口径 26.8㎝で突帯は１条である。内外面ともに器面の磨滅が激しく，調整は不明瞭である。1403 は口縁部上面が若干凹む。口唇部には凹線が施される。内面は横方向のハケナデが明瞭に確認できる。1404 は小型の甕形土器で，口径は 18.6㎝である。口唇部には大きさのわりに幅広な凹線が巡る。口縁部下位には調整時に押圧したために凹みが生じて，稜がついている。

1405～1414 は胴部に三角突帯を有さない土器である。1405 は口径 26.8㎝で底部から口縁部に向かって外反する。口縁は歪みを有し，上向きにのびる。内外面とも斜めのハケナデ調整だが，内面はナデ調整が最終的に施される。胴部下半から口縁部にかけてススが付着する。1406 は口径 24.8㎝で，口縁部から胴部下半までが残存する。口縁部は歪みが認められるが，ナデ調整は丁寧である。外面は胴部下半から中央にかけては縦，斜め方向



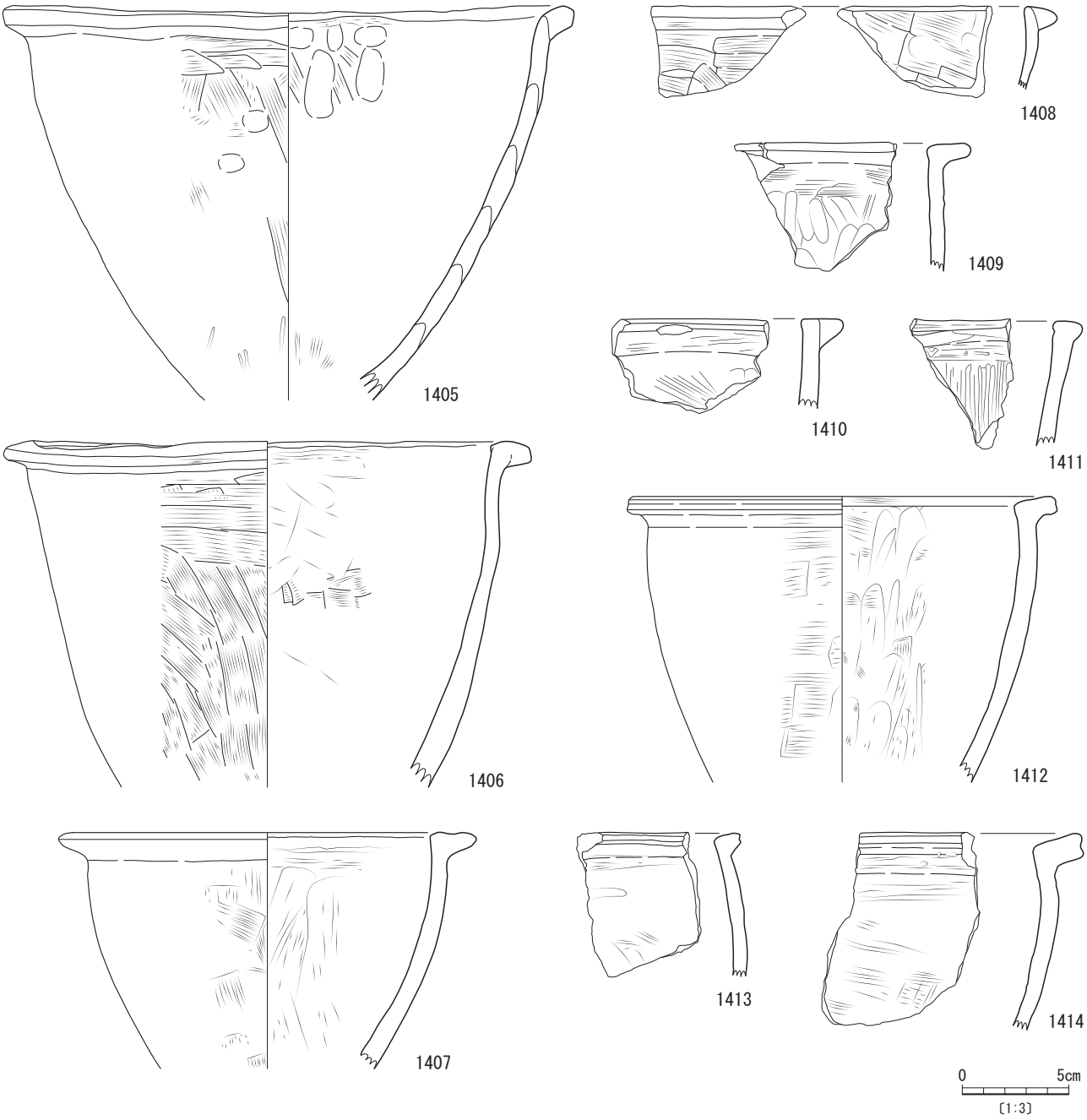
第 255 図　弥生時代中期　東部出土土器（２）



第 256 図　弥生時代中期　東部出土土器（3）

のハケナデ調整で，上半は最終調整として横方向のナデ，ハケ目が確認できる。1407 は口径 19.6㎝である。口縁部は断面三角形で，内面胴体部接合箇所が明瞭に観察できる。外面はおおむね縦，横方向のナデ調整が主体である。内面はヘラナデで，ススが付着する。1408 は端整な断面三角形状の口縁で，内外面ともにハケナデ調整である。1409 は口縁が逆「L」字状になるが，胴部の厚さと変化がなく細長い。色調はにぶい橙色で，外面にススが付着する。1410 は断面三角形の口縁である。胴部は残存部の観察では，斜めのハケナデ調整で口縁直下は横ナデである。色調はにぶい橙色で，雲母を含まない。外面にはススが付着する。1411 は口縁が小さく，歪みが大きい。外面は縦方向のハケナデ調整で口縁部と体部の接合箇所は横ナデで調整される。1412 は口径 19.4㎝。口縁部は断面形が四角形となり，口唇はわずかながら凹みが認められる。外面は横ヘラナデ，内面は縦ヘラナデ調整である。色調はにぶい橙色で特徴的である。1413 は断面三角形の口縁で口唇には凹線が巡る。胴部から口縁部にかけて，ススが付着する。1414 は口縁部断面が四角形を呈し，上方向に傾く。口唇には凹線が確認できる。外面にススが付着する。

1415～1422 は，口縁部形態に特徴のあるものと有文の資料である。胎土中に雲母を含有する土器群のため在地のものと考えられるが，他地域の文化的影響を想定させるものである。1415 は口縁が断面三角形状で口唇部には凹線が見られる。胴部の通常三角突帯が見られる箇所に櫛描きによる波状文が施される。1416 は口縁の下に櫛描きの簾状文が施される。櫛の単位は６条で胴部が欠損しているため判然としないが，２段の文様帯があったと考えられる。1417 は口唇部に凹線が巡り，口縁部上面には４本の沈線で構成される文様帯が連続して施される。内外面ともヘラナデ調整である。1418 は胴部破片である。棒状工具による３条の沈線によって波状文が施される。1419 は口縁が断面四角形を呈し，端部が丸みをもつ。内外面ともに横方向のヘラナデ調整で丁寧に仕上げられ，ススが付着する。1420 は口縁断面が二等辺三角形となり，長辺部となる口縁部下面が横方向に念入りにナデ調整される。1421 は比較的薄い器厚で，胴部から口



第 257 図　弥生時代中期　東部出土土器（４）

縁部に向かって急激に外へ屈曲する器形である。口縁部は粘土を引きのばすかたちで整形される。調整は丁寧なヘラナデ調整で，外面はさらに縦のミガキ調整が施されて光沢がある。1422 は 1421 と器厚や調整が類似するが，口縁部が下向きとなる点が異なる。屈曲部と体部の厚さがほとんど変わらず，薄手のつくりである。

1423～1429 は口縁部形態，貼付技法から擬朝鮮系との関連が推察される小型の土器である。1423 は口径16.6 cmで，丸みを帯びた断面三角形の口縁である。内外面調整はハケナデで外面全体を調整した後，口縁部に粘土帯を貼り付けた痕跡が確認できる。口縁部はやや歪みが見られる。1424 は口縁部破片である。下がり気味の口縁で端部は丸みがある。1425 は口縁の歪みが顕著で体部上端に直行して口縁粘土帯を貼り付けているため，部分的段差が生じている。外面は横方向のヘラナデ調整でススが付着する。

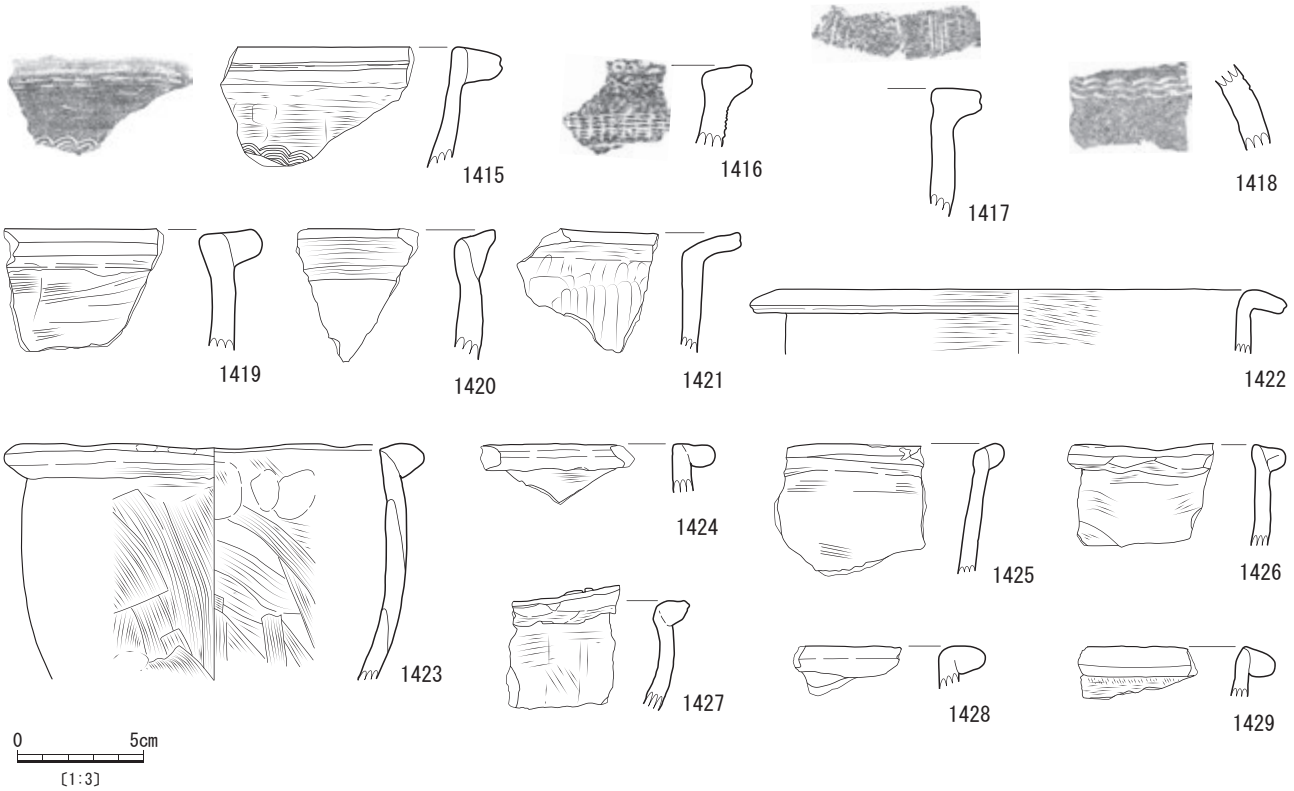
1426・1427 は口縁が整形時の指オサエの影響が強く残り，歪な形である。1426 の口縁は体部に粘土帯が貼り付けられた後，上面に再度粘土を重ねて整形される。全体にナデ調整が施される。1427 は胴部が外に膨らむ器形である。内面には調整時に出た粘土塊がそのまま焼成される等，粗さが目立つ。外面はナデ調整である。1428 は

口縁部内側が丸みを帯びる。内外面ともに器面の剥落が多いが，断面では粘土帯の貼り付けの弱さが観察できる。1429 は体部に断面円形状の粘土帯を貼り付けて口縁部を作出している。口縁部下には横方向のハケナデ調整が施されるが，接合部付近のみ調整が至らない状況が見られる。

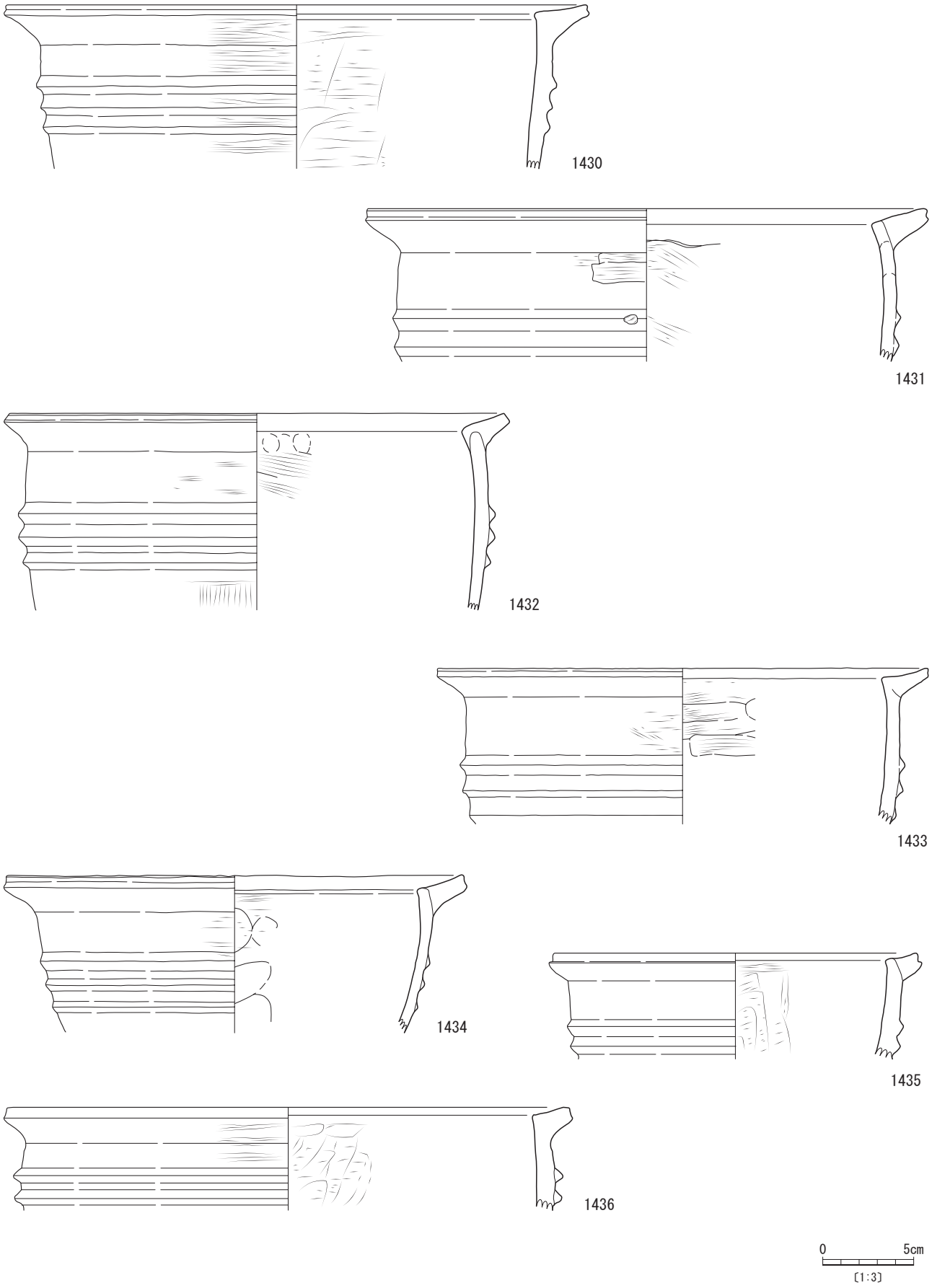
1430～1442 は口縁が上向きに長くのびる資料で，その中で 1430～1436 は胴部三角突帯の貼付位置が口縁から離れる土器である。1430 は口径が 32cmで，口縁端部に向かって先細りに仕上げる。胴部には幅広の三角突帯を３条巡らせ，外面は横ヘラナデ調整で器面を整える。1431 は口縁部の厚さが胴部より厚くなり，やや内傾する器形である。口径 31cm，２条の三角突帯が残存し，口縁部下位まで部分的にススが付着する。外面は横方向のヘラナデ調整である。1432 は口縁部が窄まる器形で口径 27.1cmに復元される。胴部には３条の三角突帯が貼り付けられ，突帯の上位は横ナデ，下位は縦のハケナデ調整となる。1433 は口径 27cmで口縁部上面がやや凹む。３条の三角突帯が胴部に巡り，縦のハケナデ調整後に横ナデで最終調整される。1434 は口径 25.5cmで，胴部から口縁部に向かってやや大きめに開く器形である。口縁部器厚が胴部より厚い。３条の三角突帯が貼り付けられ，外面は横ナデ調整される。1435 は胴部から口縁部までススが付着する。口径は 20cmで口縁上面が反るような形である。外面調整は磨滅による影響で不明瞭である。1436 は口径 31.2cmで，胴部残存部に２条の三角突帯が確認できる。横ヘラナデ調整で，ススが口縁部から突帯部まで付着する。

1437～1441 は三角突帯の貼付位置が口縁部に近くなる土器である。1437 は胴部から口縁部に向かってほぼまっすぐに立ち上がる。口径 29.2cmで，口縁部と胴部接合箇所に稜がなく，緩やかに外反しながら端部に至る。内面の横方向ハケナデ調整が明瞭である。1438 は口縁部が薄く整形される。口径は 24cmで口縁部上面はやや凹む。胴部には三角突帯が２条巡り，ススが付着する。外面はヘラナデ調整主体である。1439 は口径が 20.6cmで，やや小ぶりである。口縁部器厚が薄く，上面が凹む。また，口縁部内側が突出する。胴部には２条の三角突帯が巡り，外面はススが付着する。外面突帯下位と内面は，ハケナデ調整である。1440 は口径 29.2cmで，口縁部上面が若干膨らみをもつ。口縁部直下に起伏の少ない１条の三角突帯が確認できる。1441 は口縁部から胴部下半まで残存する，口径 26.6cmの資料である。口縁部はやや厚みをもって整形され，直下に３条の三角突帯が巡る。外面突帯の下位は縦方向のハケナデ調整である。

1442 は口径 20.5cm，器高 31cmの平底土器である。厚みのある底部から緩やかに外傾し，底から 24cm付近で口縁部に向かって窄まる長胴の器形である。口縁部は上向きで，端部は丸みをもつ。胴部最大径より若干上位に断面台形状の突帯が１条巡る。外面は底部から突帯までは



第 258 図　弥生時代中期　東部出土土器（５）

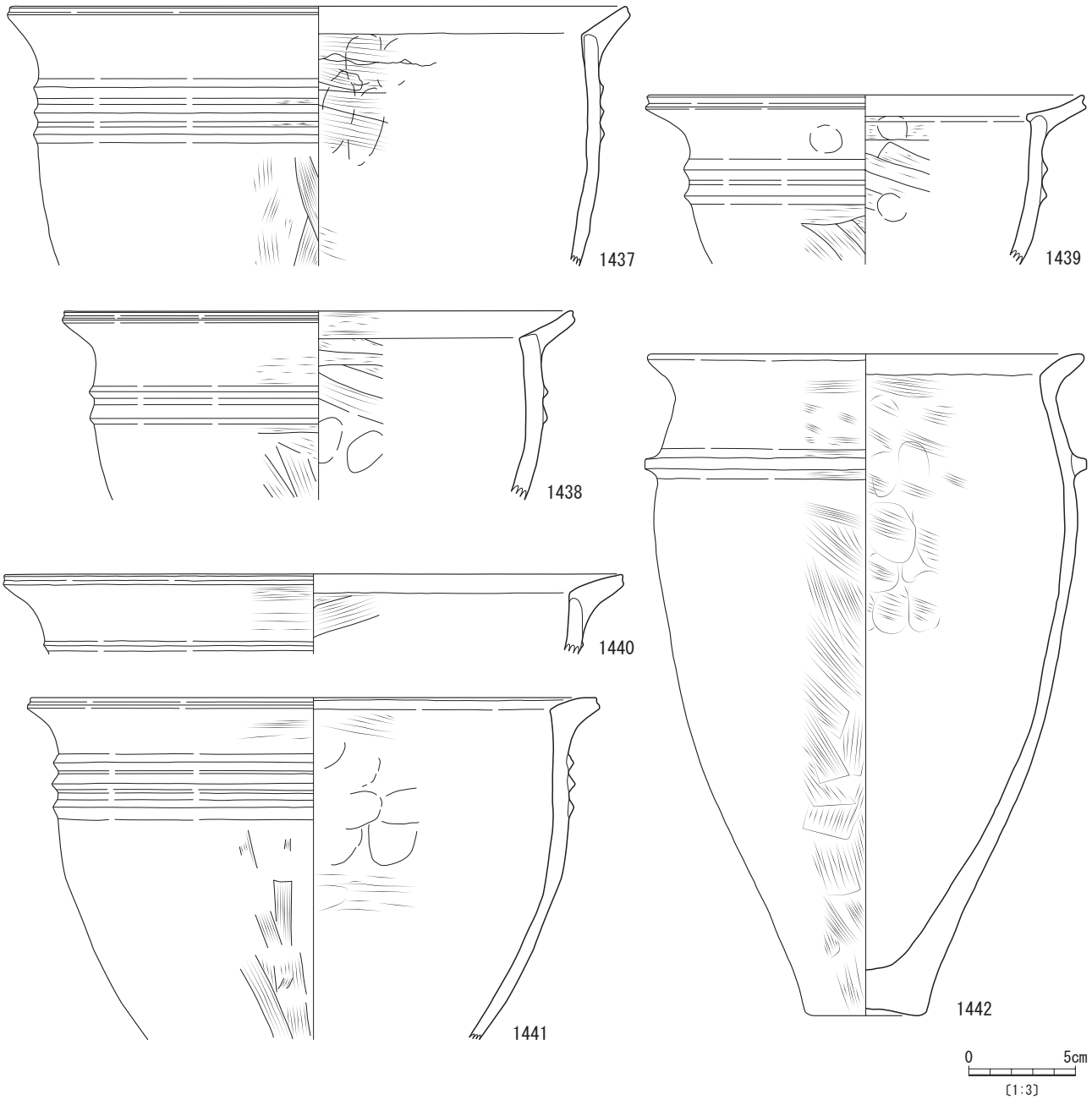


第 259 図　弥生時代中期　東部出土土器（6）

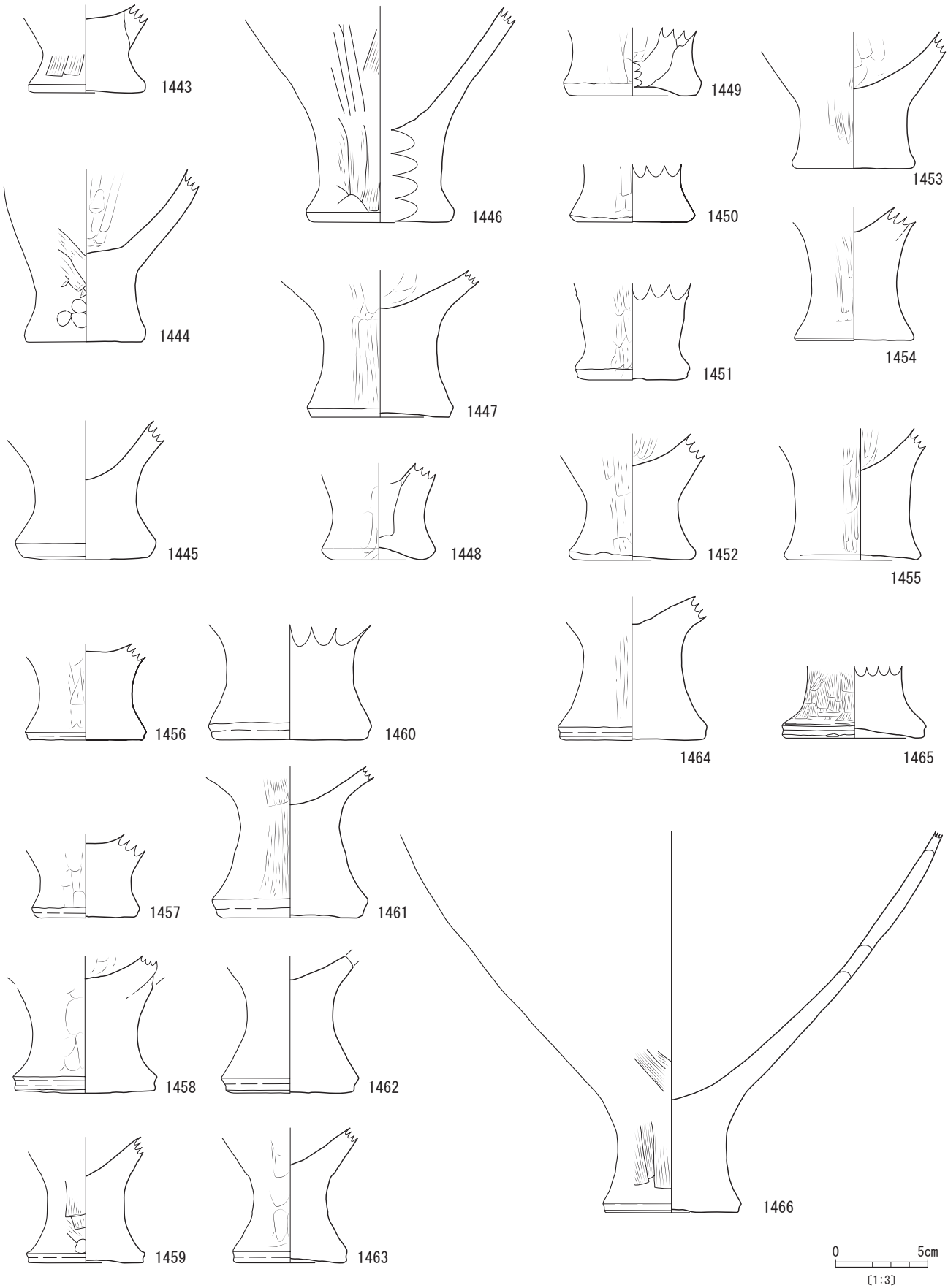
斜方向のハケナデ調整が施され，突帯上位は横，斜方向のナデとなる。内面は胴部上半がハケナデ調整だが，下半は磨滅によって不明瞭である。長胴の器形と口縁部，底部の特徴から東九州系の文化的影響を受けた在地土器と推定される。

1443～1466 は脚台である。西部同様，端部に丸みをもつもの，凹線をもつものが見られたが，くびれのないものは東部では見られなかった。端部に凹線がなく丸みをもつが面取りされる。

1443 は脚台端から内底部までの高さが 4 ㎝程と低くなる。外面は丁寧なハケナデ調整である。1444 は脚台から胴部に至るくびれが弱い。内外面ともヘラナデ調整で，特に内面は工具の押しあて痕が目立つ。1445 は脚台端部の調整が粗く凸凹している。外面はハケナデ調整であるが，胎土の鉱物が大きいため剥落して隙間穴が目立つ。1446 はハケナデ調整で，脚台端部は丸みをもつ。1447 は端部を丁寧にナデ調整して整っている。1448・1449 は明確に上げ底となる底部で，中心に粘土の剥離痕が明瞭に観察できる。1450 は外面をヘラナデ調整で整えるが，端部は整形が粗いため凸凹している。1451 は底面形状が楕円形を呈す。端部から胴部に向かって内側にくびれた後，ほぼまっすぐ立ち上がる器形である。1452 は器面に凹凸が目立ち，手捏ね風である。器面は明褐色を呈し，ほかの脚台に比べ明るい色調である。1453 は脚



第 260 図　弥生時代中期　東部出土土器（7）



第 261 図　弥生時代中期　東部出土土器（8）

台端部の張り出しが弱く，くびれが目立たないため平底風となる。ハケナデ調整が確認できる。1454・1455 は端部の張り出しが弱く，比較的まっすぐ胴部に至る。いずれも端部の丸みが少なく，接地面からすぐに内側にくびれる。

1456～1466 は端部に凹線を有すものである。1456 は高さが低い脚台で，器面は縦のヘラナデ調整が施される。底も丁寧な調整である。1457 は 1456 と類似する脚台端径と調整であるが，調整に用いた工具痕がより明瞭である。1458 は脚台端部の凹線の凹みが深く明瞭で，内底部のヘラナデ調整が丁寧である。欠損部の観察から脚台部と体部の接合箇所が確認できる。1459 は底中央が凹み，外面はハケナデ調整である。1460 は脚台端径が８㎝で比較的大型である。被熱による影響で，外面は剥離が目立ち調整も判然としない。1461 は上げ底気味の底部である。まだらに器面が剥離するが，一部分でハケナデ調整が確認できる。1462 は端部凹線が明瞭であるが内外面とも剥離が著しい。1463 は接地面がやや小ぶりで上げ底である。くびれ部にススが細い帯状に付着する。1464 は端部の凹線が明瞭である。器面が磨滅するが，縦方向のナデ調整がかろうじて観察できる。1465 は目の細かなハケナデ調整を主体に，丁寧に器面が整えられる。底面は中央部が押圧によって凹む。1466 は胴部から底部にかけて残存する。脚台端径 7.2㎝で胴残存部の最大径が約 29㎝となり，胴部へ向かって大きく開く器形である。脚台端には凹線が巡る。外面は被熱により剥落が目立つほか，ススの付着も認められる。また，底中央に若干の凹みが見られる。

蓋形土器（第 262 図 1467～1476）

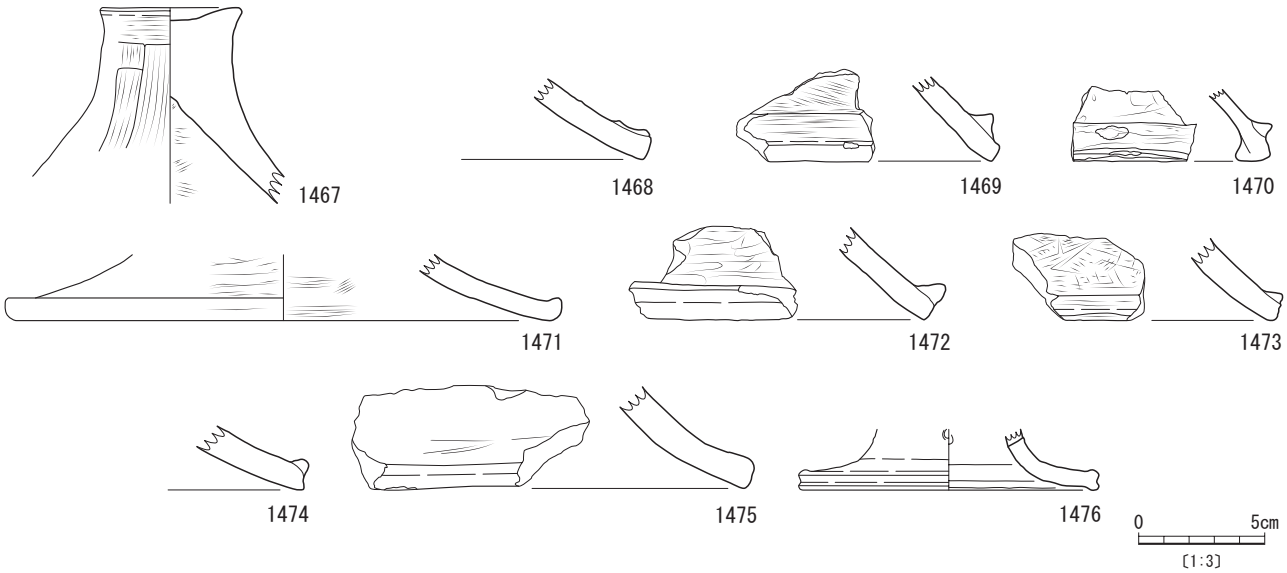
西部に比べ東部での出土がより多く，10 点を掲載する。端部に断面三角形の突帯を貼り付けるが，位置が端になるものとやや頂部に寄るものが見られる。また，復元した径や穿孔の有無などから甕形土器用と壺形土器用の２種を確認した。

1467～1475 は甕形土器の蓋である。1467 はつまみ部である。「ハ」の字状の末広がりとなる器形で，頂部が凹む。外面は縦方向のハケナデによってしっかりと調整される。1468 は端部に幅広の粘土帯を貼り付け，中央部を凹ませることで断面形上，突帯が２条となるように整形される。内面は黒褐色の色調を呈す。1469 と 1470 は断面三角形の突帯位置が頂部側に寄る。1469 は横ナデで丁寧に調整される。1470 は外面のほか，内面にも突帯があり断面三角形を呈す。端部に明瞭な突帯をもたず，内面には幅 3.5㎝でススが付着する。1471 は口径 22㎝で突帯の背は低くなる。内外面とも横ナデ調整で，内面にはススが付着する。1472 は断面三角形の突帯を端部に貼り付ける。横方向のミガキ調整により光沢がある。内面は端部ほど黒褐色の色調を呈す。1473 は全体的にざらざらとした器面だが，調整は丁寧である。貼り付けられる三角突帯の高さが低い。1474 は背の低い突帯を貼り付けることで，口唇が凹むようになり広口口縁壺の口縁に類似する断面形となる。内外面ともハケナデ調整主体だが，外面は端部付近が横ナデとなる。1475 は三角突帯がない蓋形土器である。厚さが１㎝以上あり，厚手である。調整は内外面とも横方向のヘラナデである。

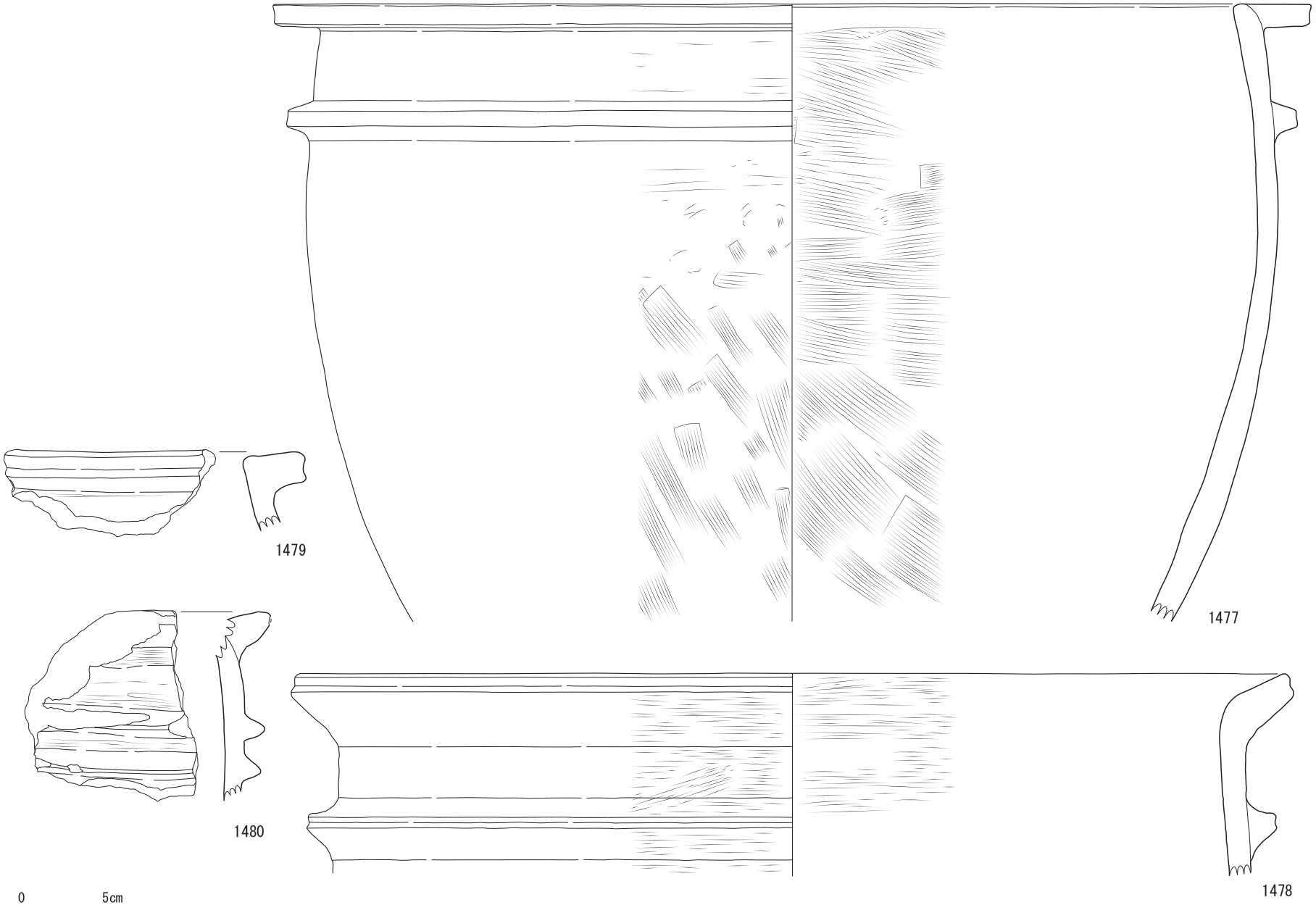
1476 は小ぶりな壺形土器の蓋である。端部には凹線が巡り，急激に頂部へ向かって立ち上がる。また，直径 0.3㎝程の穿孔が見られる。

大型甕形土器（第 263 図 1477～1480）

西部同様出土量は少ないが４点を掲載する。1477 は口径 56.8㎝で口縁から胴部が残存する。胴張りの器形で，断面台形状の突帯が１条巡る。口縁は長くほぼ水平



第 262 図　弥生時代中期　東部出土土器（９）



第 263 図　弥生時代中期　東部出土土器（10）

にのびる。外面下位にススが付着する。1478 は口径 54.8cmで口縁は上向きである。口唇には幅広の凹線が巡る。口縁部下位には断面台形状の突帯が巡る。1479 は 1480 に比べ口縁が短くなり，口唇に明瞭な凹みが見られる。1480 は口縁端がやや丸みを帯び，胴部に２条の三角突帯が確認できる。上位の突帯は接合部が未調整で隙間が見られる。

壺形土器（第 264～266 図 1481～1523）

東部でも西部同様，口縁が逆「L」字状を呈すものが主体的に見られた他，無頸壺，広口口縁壺といった器種も確認できた。口縁部，底部に大別して掲載する。

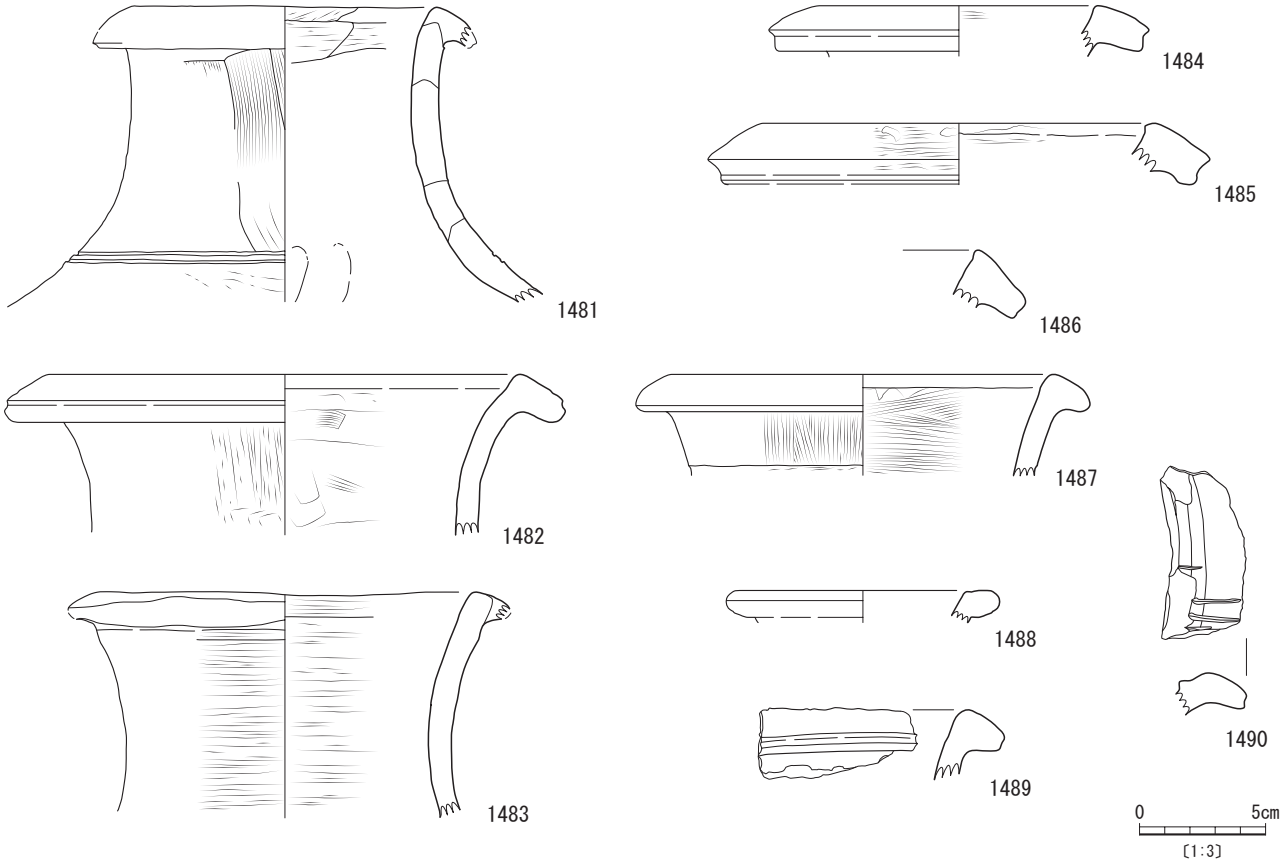
1481 は口径 15cmで下がり気味の口縁を有す。口唇部は欠損している。頸部は口縁部に向かってほぼまっすぐに立ち上がり，口縁はやや外傾する。肩部付近には２条の沈線が巡る。1482 は口径 19cmで頸部から口縁部へ向かって外傾し，口縁が開く形状である。口唇には凹線が巡る。外面の頸部にはススが付着する。1483 は 1482 に類似した器形で，口径は 17.5cmである。内外面ともに横方向のヘラナデ調整である。縦方向にススが付着するが，廃棄後に付着したものと考えられる。

1484 は口径 15cmで部分的に頸部まで残存する。断面長方形状で口唇に凹線が巡る。1485 は頸部以下が欠損する。口径 19.8cmである。断面長方形の形状で口唇には幅広な凹線が見られる。1486 は断面三角形を呈し，丁寧なナデ調整である。1487 は口縁端が丸みを帯び，下がり気味の形態である。口径 18cmで外面は縦，内面は横方向のハケナデ調整である。1488 も 1487 同様，口縁端が丸くなる。口径 18cmとやや小型で，整形時の指オサエにより若干凸凹し，手捏ね風である。1489 は全体が磨滅し，調整などが不明瞭である。口唇部には浅いながら凹みが見られる。1490 は比較的薄手のつくりで，口縁上面に３条の沈線が施される。内面は断面三角形に突き出す。

1491～1493 はいわゆる二叉状口縁となる資料である。1491 は口縁から肩部までが残存する。口径は 20.1cmで，頸部で窄まり口縁に向かって大きく開く器形である。口縁下に下向きに突帯を貼り付ける。1492 は口径 22cmで，口縁部から若干ながら頸部まで残存する。口唇には凹線が巡り，口縁と同様の形状にした突帯が口縁下に貼り付けられる。内面は横方向にミガキ調整され光沢がある。1493 は 1492 に比べ器厚が厚い。口唇および口縁下の突帯に，それぞれ二段の縦方向刻みを施す。

1494 は頸部から口縁に向かって大きく外反し，朝顔状に開く器形で口径は 18.4cmである。外面頸部は縦方向ミガキで光沢が出る。口唇には凹線が巡る。

1495～1498 は無頸壺である。総じて甕形土器と類似する口縁形状で，上向きに貼り付けられる。1495 は細長



第 264 図　弥生時代中期　東部出土土器（11）

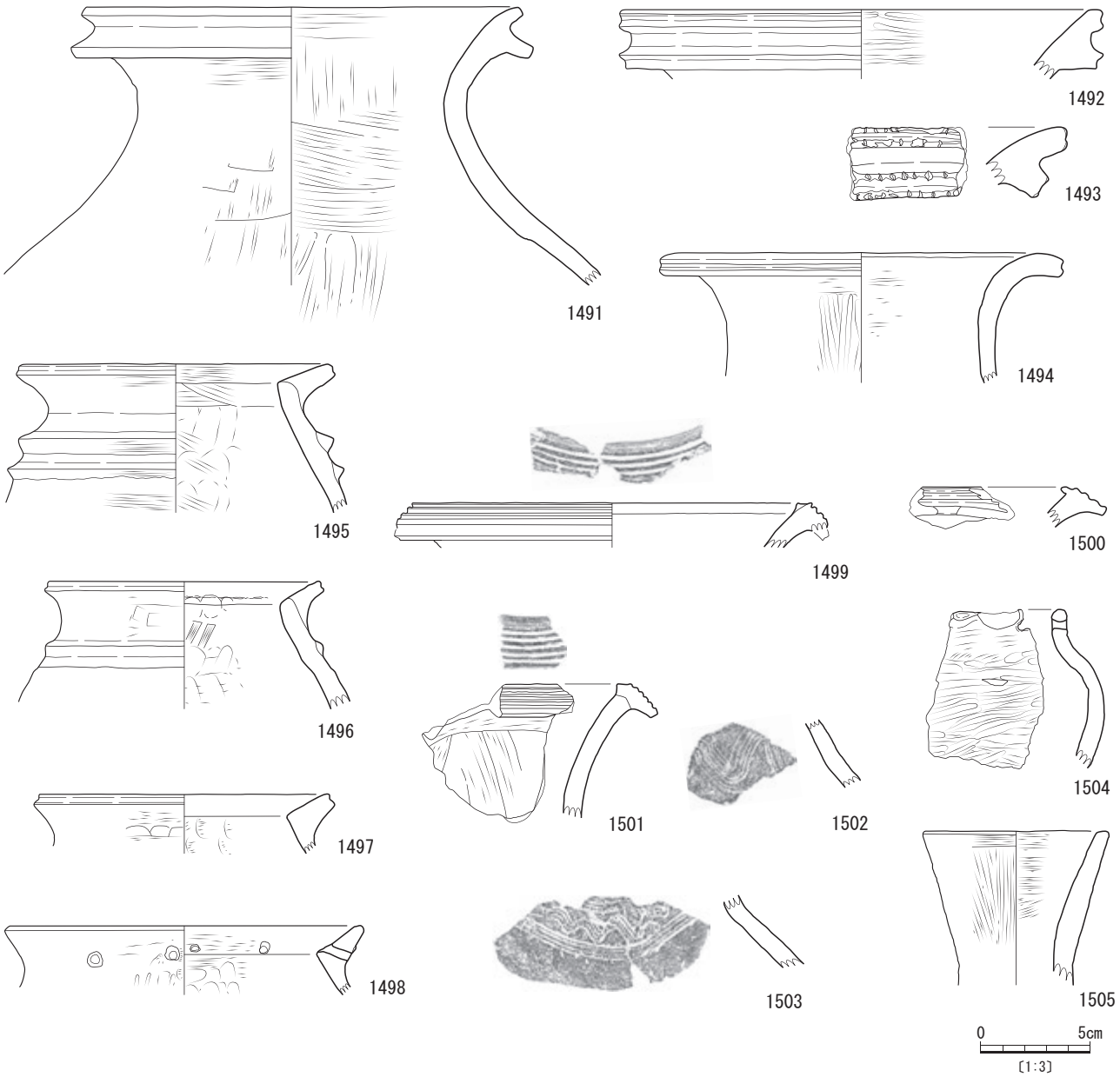
い口縁を有し，口唇には凹線が巡る。口縁部下位には２条の三角突帯が貼り付けられ，突帯下位は横方向のミガキ調整で上位はナデである。内面はハケナデ調整が若干残る。口径は 6.9㎝である。1496 は口径 12.4㎝で１条の三角突帯が確認できる。口縁内面は横ナデ調整が丁寧で光沢感がある。1497 は口縁部の資料で口径 13.2㎝である。整形が丁寧で稜線が明瞭である。口唇には凹線が巡る。1498 は口唇部が丸みを帯びる。口縁には穿孔が２か所確認できる。いずれも焼成前に内側から棒状工具を用いて穿っている。口径は 16.4㎝である。

1499～1501 は口縁部に４～５条の沈線が横方向に巡る。内面側に突き出た部位を有し，いずれも口縁は下がり気味で，正対した時に沈線が目立つ。

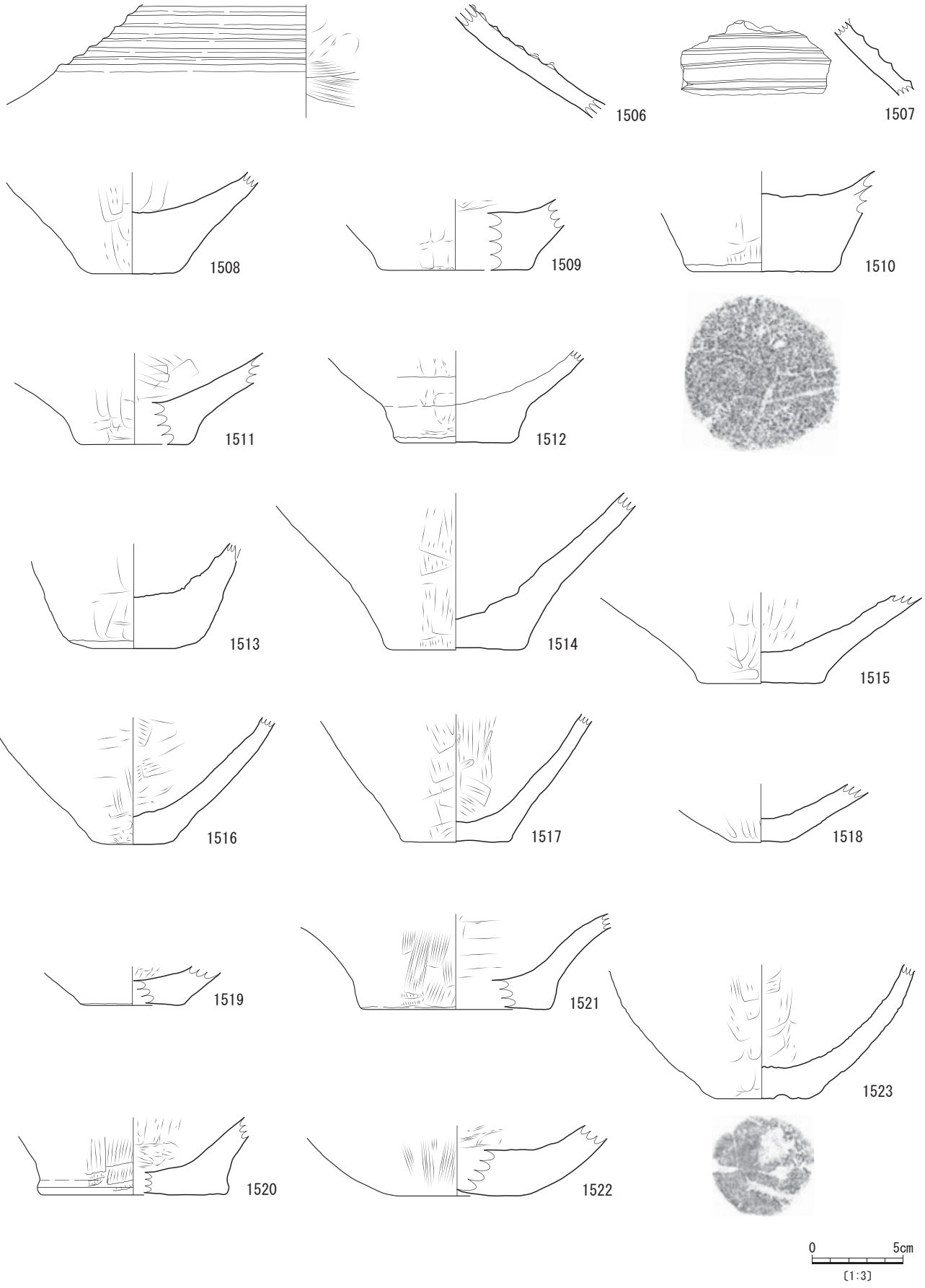
1502・1503 は櫛描きによる施文を行うもので，波状文を描く。1503 はその下に４条の弧状沈線が巡っている。

1504 は胴部が外に大きく張り出し，口縁に向かって窄まりながらまっすぐ立ち上がる器形である。口縁部には径 0.3㎝程度の穿孔が見られ，粘土が内側から外へ盛り上がることから，焼成前に内側から穿ったことが推察される。外面は横方向に念入りにミガキ調整が施されているが，内面はナデ調整が目立つ。1505 はいわゆる長頸壺の口縁部から頸部にかけてのものであるが，器厚が厚く一般的なものに比べ長さも短い。口縁部端に向かってゆるやかに外反する器形で，口径は 8.4㎝である。

1506・1507 は肩部である。1506 は７条の三角突帯が巡る。復元した径は 33㎝で，最大径はそれ以上と推察さ



第 265 図　弥生時代中期　東部出土土器（12）



第 266 図　弥生時代中期　東部出土土器（13）

れ，大型の壺と考えられる。内外面とも丁寧なナデ調整である。1507 は現存で 4 条の三角突帯が確認できる。突帯部も横ナデできれいに仕上げられ，突帯の稜も明瞭である。

1508～1523 は底部である。その中で 1508～1513 は器厚が厚く，3.5cmから 4.5cm程度の厚みを有す。そのため，内底部は平坦となる傾向が見られる。1508 はヘラナデが若干確認できるが，器面の磨滅が激しい。1509 は底部端から胴部に向けての立ち上がりにくびれが見られる。1510 は外面にハケナデ調整がある。底は磨滅しているものの，木葉痕が一部確認できる。1511 は底部のくびれが明瞭な器形で，外面にはススが付着する。1512 も 1511 同様の器形で胎土中の石英粒が大きい。1513 は底端部から胴部に向かってまっすぐに立ち上がる。内面はほぼ剥落し露胎している。

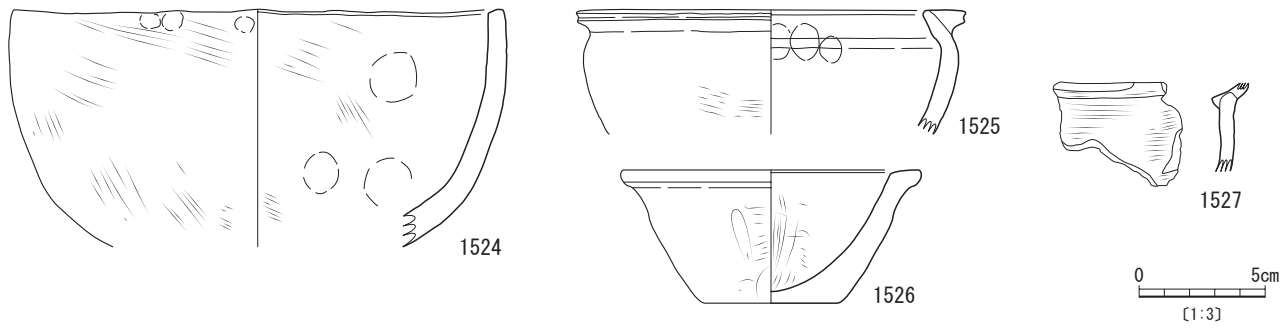
1514～1521 は底部の厚さが器体部と大きく変わらないものである。1514 はやや上げ底である。外面はヘラナデ調整で黒塗りとなる。1515 は底径が 6.7cmであるが，胴部に向かって大きく開く器形となることから安定性を欠く印象を受ける。外面調整は丁寧である。1516 は底径約 4 cmと小さく，胴部に向かって膨らみをもって立ち上がる。外面はミガキ様のヘラナデで光沢がある。1517 はやや上げ底で 1516 より大きくないものの，胴部に向かって膨らみをもって立ち上がる器形である。内外面ともヘラナデ調整である。1518 は 1516 のように底径に比して胴部に向かって大きく開いて立ち上がる器形で，内外面の剥落が著しい。外面に一部ミガキ調整の痕跡が確認できる。1519 は若干上げ底気味となる。1520・1521 は底径が比較的大きい底部である。1520 は復元底径が 10.2cmで，外面にハケナデ調整が明瞭に残る。1521 も 1520 と類似した調整が施されている。

1522 と 1523 は底部から胴部にかけて丸みを帯びた器形である。調整はナデであるが，1522 に比して 1523 が丁寧である。1523 は底に圧痕が見られるが，原体は判然としない。

鉢形土器（第 267 図 1524～1527）

口縁部がまっすぐ立ち上がるものと断面三角形状となるものが見られる。

1524 は胴部から口縁部に向かってまっすぐ立ち上がるサラダボウル状の器形で，外面の口縁端と内面に指オサエの痕跡が見られる。口唇は比較的丁寧に調整され平坦になる。口径は 19.4cmである。1525 は口縁上面が水平となる。口縁は断面三角形状で口径は 15.4cmである。胴部最大径もほぼ同じで，胴部が張り出す器形である。1526 は完形品である。口径が 11.8cm，器高 5.1cm，底径 5.6cmで口唇部は丸みを帯びる。口縁部から底部に向かって緩やかに窄まる器形である。調整はヘラナデによるもので，内底部は若干粗い調整となる。1527 は口縁内側に突出部を有し，上面がやや凹む。調整はナデでその他の鉢形土器と比べると薄手のつくりである。



第 267 図　弥生時代中期　東部出土土器（14）

(3) 石器

①概要

当該期の遺構外出土石器は総数1,631点である。その出土層位と時期は，Ⅱ・Ⅲａ層を主体として大多数を占めるが，出土状況は全体的に混在して層位に基づく時期区分が明確にできないため，ここでは縄文時代晩期から弥生時代前期，及び弥生時代中期に帰属する可能性のある石器類を一括して報告する。ただし，その中で磨製石鏃や石包丁等の器種については，弥生時代に属すると認識するところである。

石器類の分布状況は遺構の占地性と土器の分布域を考慮し，調査区の西部，東部の各分布を示し内訳を述べる。また，剥片・砕片の大多数を除き，原形を留める石器および石製品を中心に，355点を図示した。なお，石材は肉眼観察により判別した。

②調査区西部（第268図）

Ｃ～Ｌ－19～36区を一括する。出土石器類は合計1,250点である。器種別の内訳は，打製石鏃42点，磨製石鏃９点，石匙７点，削器・掻器類４点，二次加工剥片23点，石錐10点，楔形石器９点，石核３点，横刃形石器６点，石包丁２点，磨製石斧30点，打製石斧152点，敲石17点，磨石・敲石類56点，石皿・台石類18点，砥石50点，紡錘車１点，玉類２点，異形石器３点，軽石製品16点，剥片・砕片類790点である。

分布状況は，剥片・砕片類を除いた集中傾向として，Ｄ・Ｅ－21・22区の谷戸頭付近，Ｄ～Ｉ－25～27区の微高地周辺，Ｄ～Ｌ－28～33区の谷間一帯，Ｄ～Ｌ－34～36区の緩斜面の各地点において比較的広い纏まりがみられている。その中で，磨製石斧や打製石斧，磨石・敲石類や石皿・台石類は万遍なくみられ，器種別による分布傾向は特には見いだせないものの，もっとも遺物量の多い谷間部において，石鏃，石匙，石錐等の出土がやや目立っている。また，打製石斧1654・1662がＦ－29区Ⅲａ層より２点並んで出土しており，埋納された可能性がある。その他では，紡錘車1760がＨ－29区Ⅲａ層よりから，更に，管玉1761がＦ－32区Ⅱ層，棗玉1762がＦ－31区Ⅲａ層から，２点の異形石器1764（Ｅ－30区Ⅲａ層）及び1765（Ｆ－31区Ⅲａ層）が，至近距離から出土しており注目される。なお，剥片・砕片類については，黒曜石等の小片や打製石斧の調整剥片等が大半を占め，Ｅ－30・31区に集中がみられている。

以下，石器個々の特徴について述べる。実測図の並びは出土区での分布状況に関係なく，順不同である。

打製石鏃（第269・270図1528～1567）

40点図化した。類型は基部形状から，いわゆる平基（Ⅰ類）と凹基（Ⅱ類）に大別され，その三角形状の長幅比や特徴的な形状等において分類できる。

平基の石鏃は1528～1539の12点である。そのうち1528～1534はⅠａ類である。長幅比がほぼ等しく正三角形状を呈するもので，1529・1532・1533は周縁のみの調整で素材面を多く残す。1530・1531は粗雑な二次加工による不整形にある。次に1535～1539はⅠｂ類である。長幅比がやや縦長の二等辺三角形状を呈するもので，1536・1538・1339は一部に素材面を留めている。

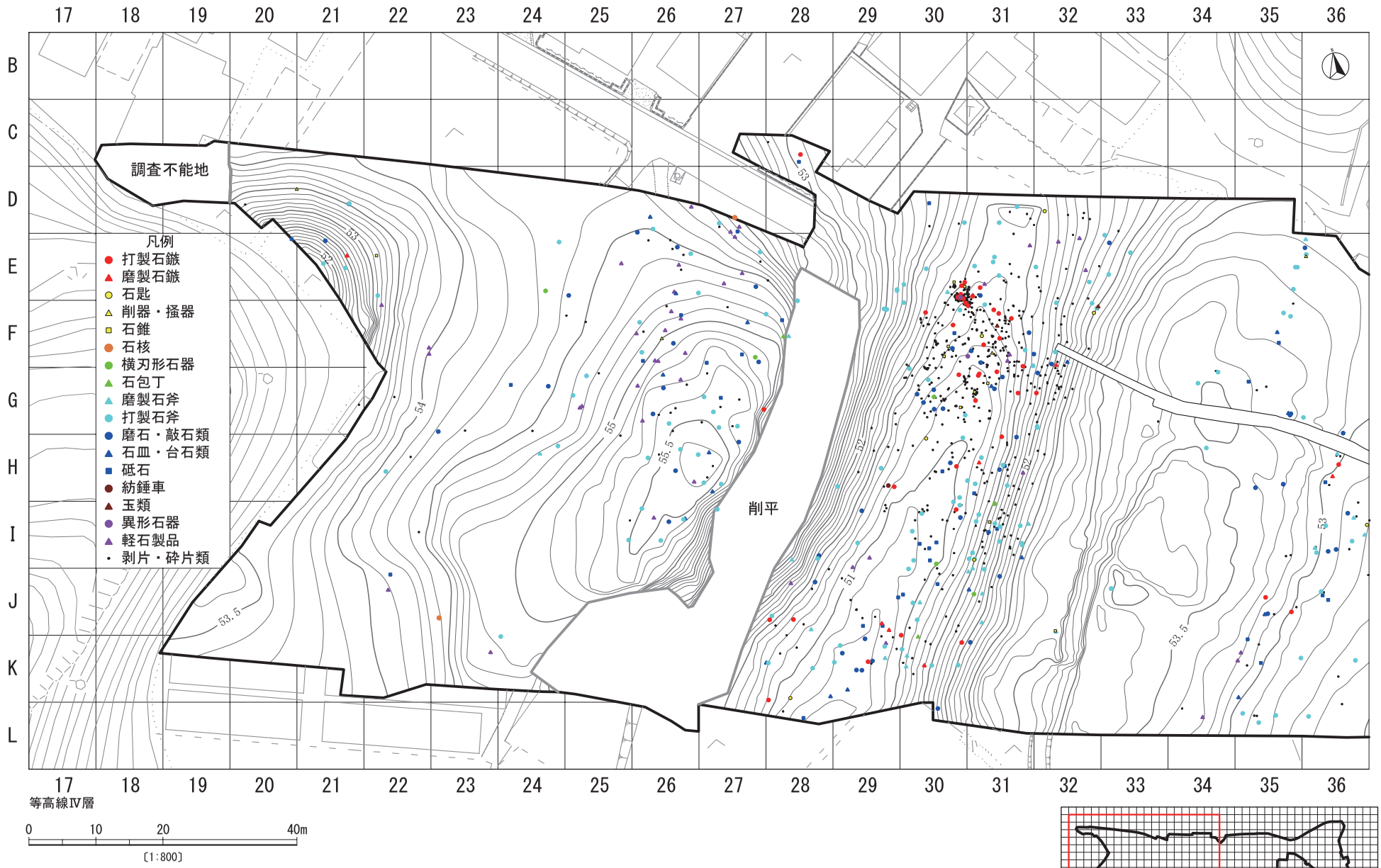
凹基の石鏃は1540～1563の24点である。そのうち1540～1549はⅡａ類である。長幅比がほぼ等しく正三角形状を呈し，素材の改善度が高いものが多い。1549は「Ｖ」字状のやや深い抉りをもつが，他の多くは内弯気味の浅い凹基の石鏃である。1550～1557はⅡｂ類である。長幅比1.5：１程の縦長の二等辺三角形状を呈する。Ⅱａ類と同様に抉入の浅い基部をもつ。1558はⅡｃ類とした。やや幅広で，側縁を外弯させ，先端部が突出する。1559～1563はⅡｄ類である。長幅比が縦長で，平面形は五角形状を呈し，基辺は抉りを挟んで基辺が左右に斜行する。基部の抉入が比較的深く施されたものもある。1559は大形品であり，残存長2.7㎝，幅2.1㎝，厚さ0.4㎝を有する。また，1562・1563では側縁の上半に明確な肩部の作出がみられる。

欠損については，40点中25点と割合多く認められる。1564～1566は上半部を，1567は脚部を残す欠損品である。また，1531・1533・1534・1536・1539・1540・1548・1549・1554・1556・1557・1559・1560は上半部あるいは先端部を欠き，1541・1545～1547は脚部を欠く。さらに1532は先端部と基部の，1553・1555・1561は上半部と脚部の両方の欠損品である。なお，使用痕として，1533・1536・1540・1549・1553・1559・1560の欠損では先端から砕けた破損が生じており，特に1559の裏面には先端方向からの衝撃による剥離痕がある。

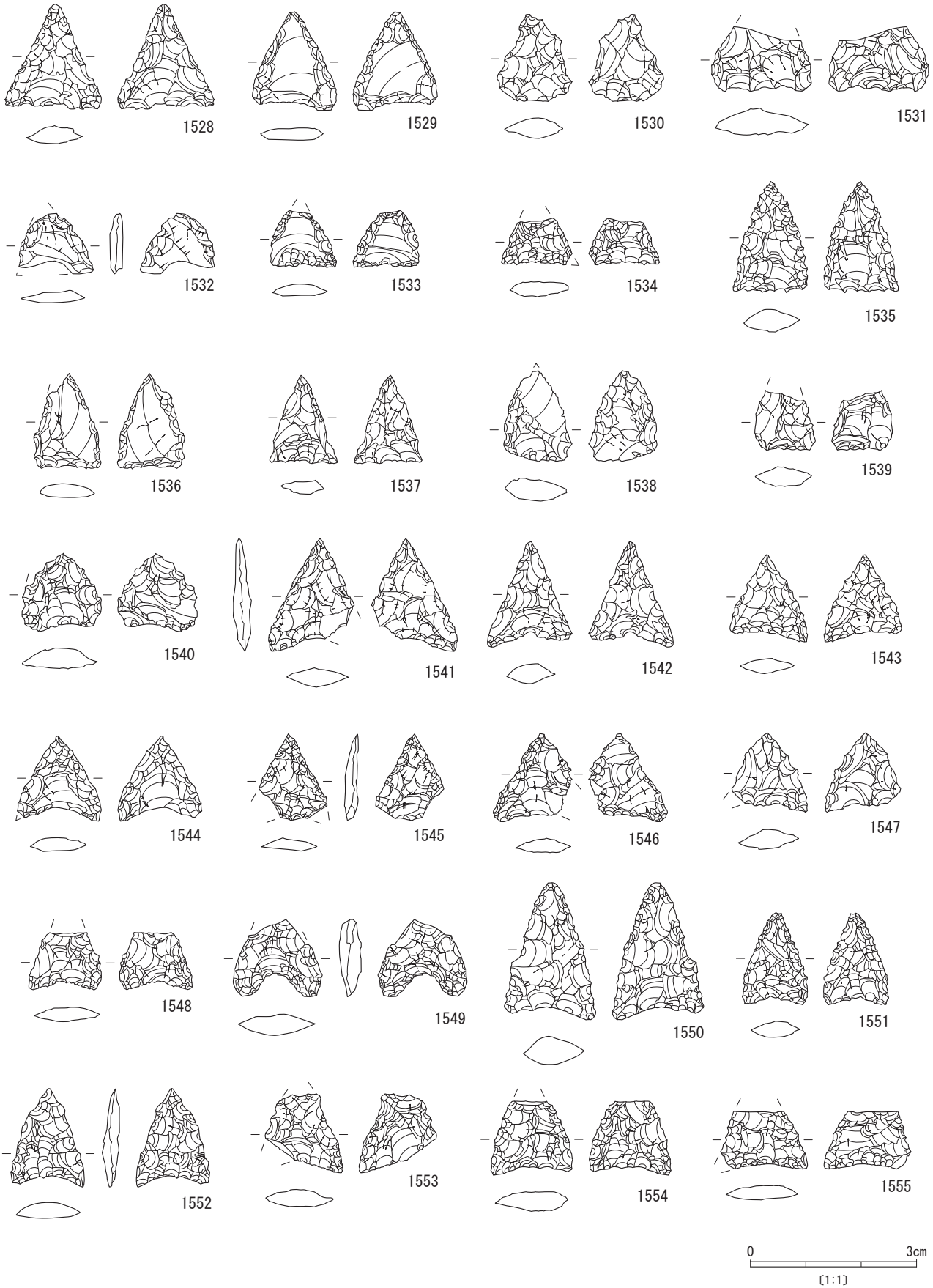
石材は，緻密な安山岩製と，腰岳産に類似する良質な黒曜石製がほぼ大半を占めるが，その他の石材もある。具体的には，緻密な安山岩製が18点（1528・1530～1532・1536～1538・1541～1544・1547・1549・1551・1553・1558・1560・1564），黒曜石製が16点（1533・1534・1540・1545・1546・1552・1554～1557・1559・1561・1563・1565～1567），チャート製が３点（1535・1539・1550），玉髄製が２点（1548・1562），ホルンフェルス製が１点（1529）である。石材と形態はさほど相関しないものの，Ⅰｂ類（二等辺三角形状）については，やや非黒曜石製に偏る傾向が見受けられる。

磨製石鏃（第270図1568～1575）

８点図化した。1568は砕片を素材とした細身で左右非対称の形状であり，やや雑な研磨で側縁の整形を行っている。石材はオリーブ色を呈する頁岩である。1569～1575は黒色頁岩を石材とする。平面形は1569が正三角形状を，1570～1574が縦長の二等辺三角形状を呈する。いずれも基部が内弯する凹基の石鏃で，平坦な研磨によ



第 268 図　西部出土石器分布図



第 269 図　西部出土石器（1）

り薄手に仕上げられており，表裏とも鏑はない。刃部は側縁に沿って研磨面の角度を変え，鋭利に整形している。なお，やや大形の 1574 は研磨が弱く，中軸に大きく素材面を留めている。欠損は 1570 が先端部，1571 が脚部，1572 が基部を欠き，1573 は上半部から一方の脚部にかけて大きく破損している。1575 は下半部を欠損するが，他の製品と特徴が大きく異なる。比較的厚みがあり，外弯する両側縁に沿って研磨角を変えて刃部を研ぎ出す中，全体的に丁寧な研磨で仕上げられている。また，欠損部にかかって，中軸の左右２か所に表裏から穿孔が施されている。装着のための紐穴の可能性がある。

石匙（第 271 図 1576～1579）

４点図化した。1576 は緻密な安山岩製で，上辺中央付近につまみ部を作り，体部は横長木葉形の整った形状を呈する。二次加工は改変度が高くほぼ全体に調整剥離を施すが，刃縁の作出はやや粗い。また，表裏面中央部付近には，剥離面稜線に研磨を加えている。1577～1579 はホルンフェルス製である。1577 は打製石斧の調整剥片が素材と考えられる小型品であり，下縁に調整は加えられず，側縁からつまみ部にかけて浅い調整剥離を施して形状を整えている。上端は折れ面で，下縁同様加工していない。1578・1579 は中軸につまみ部をもつ横型の粗製の石匙と想定される。どちらも表裏に大きく素材面を残し，二次加工は部分的な周縁調整で済ませている。1578 は下縁の刃部を直線状に仕上げる。1578 はつまみ部と体部右側を，1579 は体部左側下半及び刃部を欠く。

削器・掻器類（第 271・272 図 1580～1582）

３点図化した。いずれも削器とみられる。1580 は緻密な安山岩製のやや大形の剥片で，上辺に打面を残す。背腹両面から細かく交互剥離を施した鋭い尖頭状の刃部をもつ。また，縁辺の一部に微小剥離痕がみられる。1581 は尖頭器の加工性も検討したが，撥形を呈し，側縁に粗い刃部調整を施していることから，粗製の削器とした。素材は頁岩の横長剥片で，打製石斧の調整剥片と見られる。1582 は玉髄製の剥片断片の一辺に背腹両面からやや粗い調整が施される。石匙の欠損部を転用した可能性もある。

二次加工剥片（第 272 図 1583）

1583 は腰岳産とみられる黒曜石製の剥片断片で，右側縁から表裏面に粗い剥離を加える。残核の可能性も想定される。

石錐（第 272 図 1584～1592）

９点図化した。1584・1585 は石鏃様の両面加工を施し，下端に短く突出する錐先部を有する。1584 の錐先の端部には微小剥離が生じ，1585 は欠損する。1586 は周縁調整が加えられた逆三角形状を呈し，比較的鋭い錐部が作り出される。

1587 は不定形剥片を素材とし，折れ面を錐先の側縁に取り込んでいる。右側縁の腹面側に部分的な調整剥離を加えている。1588 は砕片を素材としてやや粗雑な周縁調整を行って，逆三角形状に整えている。錐先の端部に微小剥離が生じている。1589 は，右側縁は背面から，左側縁は腹面から表裏に急斜度の調整剥離を施しており，鈍い錐先部を有する。1590 は三角錐状の厚みのある剥片断片を素材とし，浅い稜上調整を加えたものである。上端は折れ面を残置している。錐先の端部に微小剥離が生じている。1591 は右側縁に素材剥片の折れ面を取り込み，左側縁に粗い調整を加え，比較的鋭い錐部をもつ。1592 は三角柱状を呈し，全面に急斜度の調整剥離を施す。斑晶部分から錐先側の下半部を欠損しており，加工時に破損したものかとみられる。

石材は緻密な安山岩製が多く５点（1584・1586・1589～1591），黒曜石製が３点（1585・1588・1592），チャート製が１点（1587）である。

楔形石器（第 272 図 1593・1594）

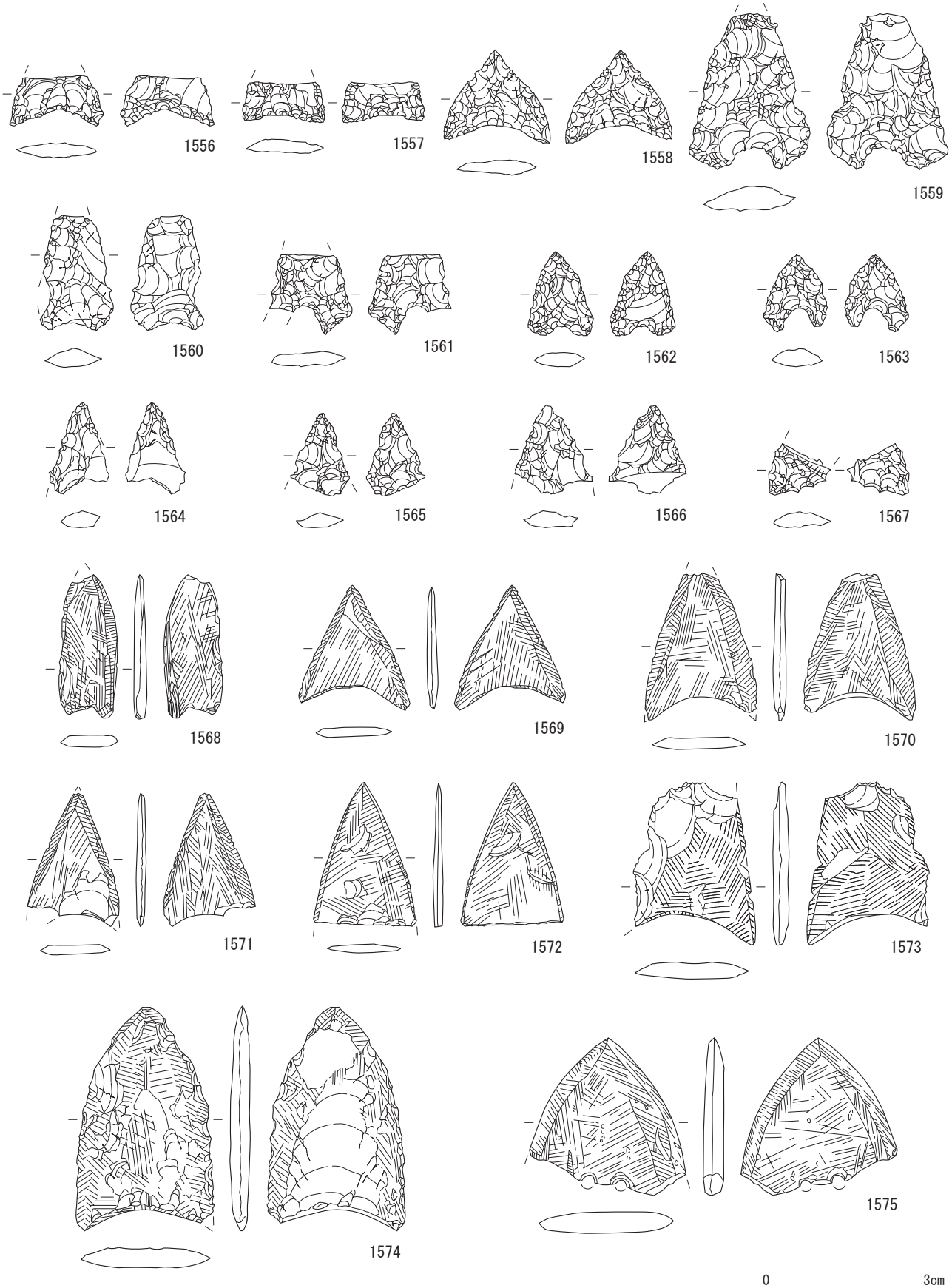
２点図化した。1593・1594 は腰岳産とみられる黒曜石製で，小形の剥片断片を素材とし，下辺に不規則な小剥離が生じている。

石核（第 273 図 1595～1597）

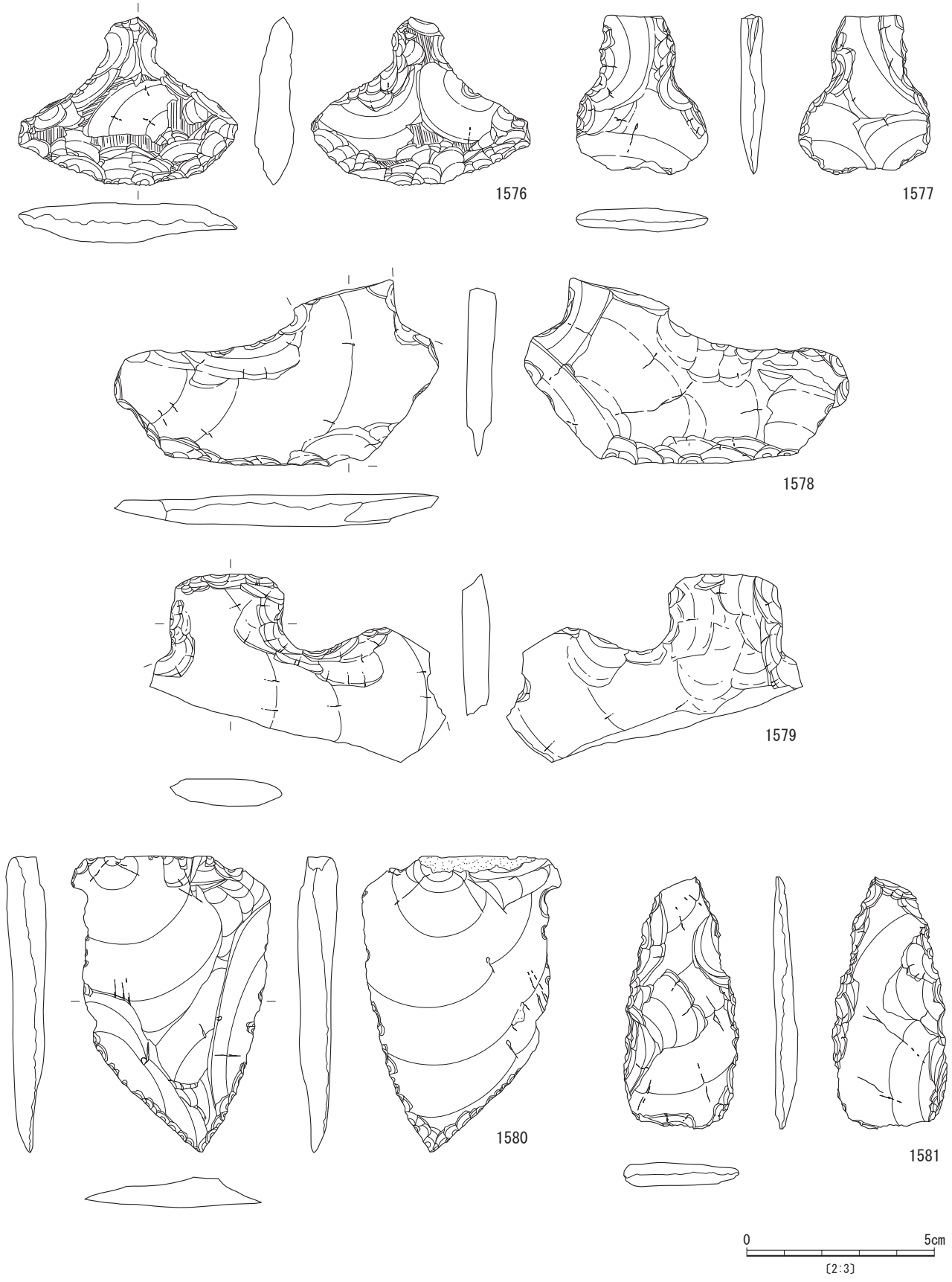
３点図化した。1595 はガラス質安山岩製で，自然面を打面として剥離された分厚い横長剥片を石核としたものである。剥片剥離はその剥片を縦位に用いて背面側で行われ，腹面を打面として上端から１枚，また自然面を打面として下端から１枚の，計２枚の不定形剥片が剥離されている。なお，背面中央の１枚は素材面の先行する剥離である。1596 は三船産とみられる黒曜石製の残核で，自然礫を分割して，その分割面を作業面としたものである。正面の作業面は，若干の打面調整を加えた後，上端を打面とした１枚，次いで横位から剥離された１枚の，計２枚の不定形剥片が剥離されている。また，左側面には割れ面が残る。1597 は鉄石英製で，頻繁に打面転移を行い，不定形な小剥片を限界まで剥離した，多面体を呈する残核である。

横刃形石器（第 274 図 1598～1603）

６点図化した。1598 は砂岩製の分厚い横長の剥片であり，その打面側を背縁部として，特段整形を行うことなく用いている。下縁の刃部に幾らかの剥離痕が生じている。1599～1601 はホルンフェルスを素材とする。1599 は鎌状を呈し，背縁部と下縁の内弯した刃部に浅く二次加工を施している。1600 は半身を欠損するが，右側縁に粗い剥離の二次加工を施して整形しており，直線状の下縁に鋭い刃部をもつ。1601 は下縁の刃部に整形加工とみられる粗い急斜度の調整剥離を加えており，弧状の刃部をもつ。また，長軸の両端に抉り部の作出が認められる。1602・1603 は頁岩を素材とする。1602 は大部分を欠損するが，背縁部に浅く二次加工を施しており，刃部



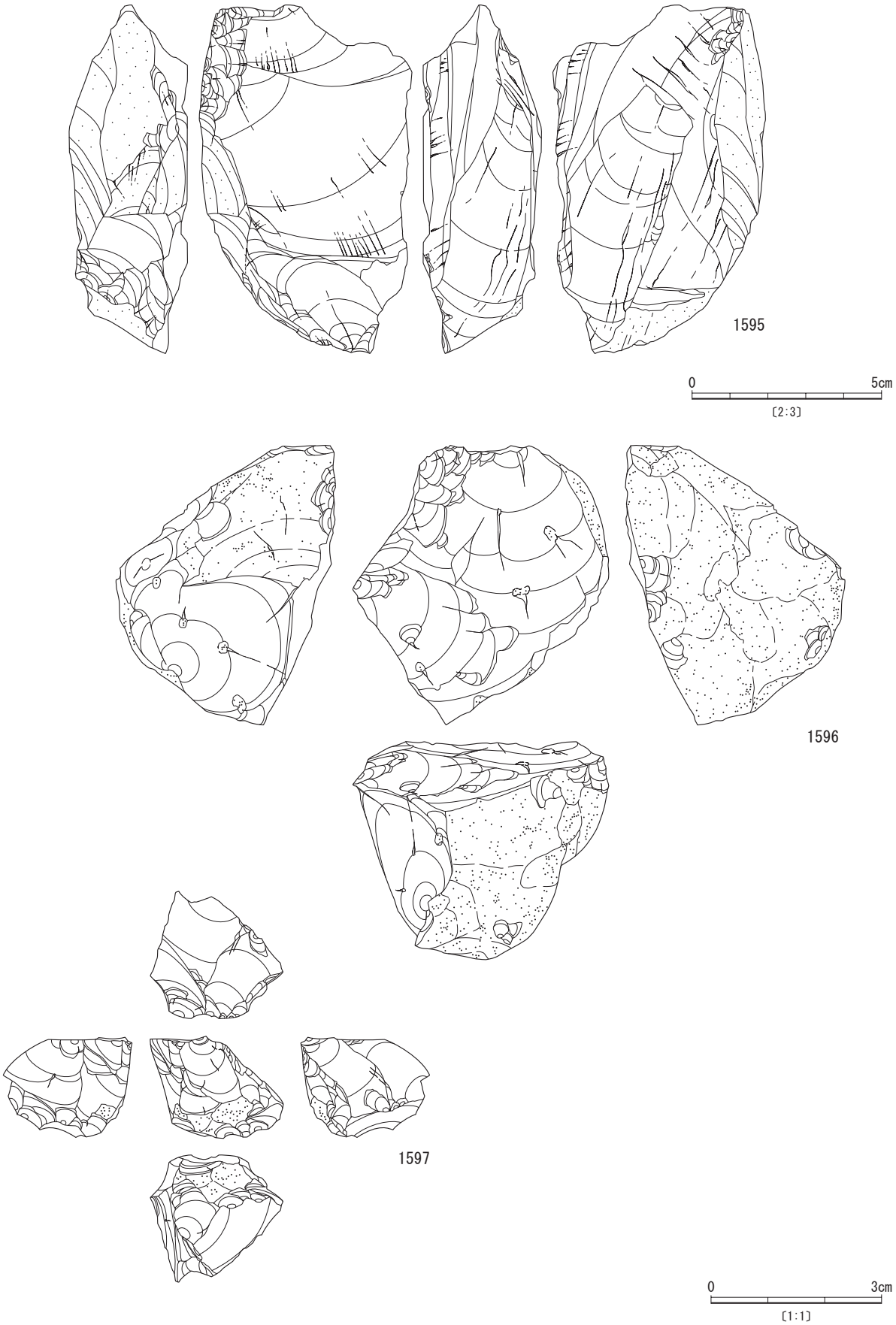
第 270 図　西部出土石器（2）



第 271 図　西部出土石器（3）



第 272 図　西部出土石器（4）



第 273 図　西部出土石器（５）

に部分的な研磨がみられる。1603は上端から左側縁を折れ面として，右側縁に周縁加工を施し，併せて抉り部を作出する。下縁の直線状の刃部に磨滅がみられる。

石包丁（第274図1604）

1点図化した。1604は頁岩製の石包丁の断片である。研磨は比較的丁寧で下端に刃部を留めるものの，その他の側縁は表裏からの粗い調整剥離によって損なわれており，小形ながら再生品とみられる。

磨製石斧（第275・276図1605～1625）

21点図化した。形態は乳棒状，定角式，打製石斧様など多様である。なお，いわゆる柱状片刃石斧と分類できるようなものは出土しなかった。

1605～1609は横断面形が楕円ないし扁平楕円形を呈する乳棒状石斧である。石材は1605・1607・1608がホルンフェルス製，1606が頁岩製，1609が硬砂岩製である。1605は打製石斧のような扁平な刃部をもつものの，胴部から基部を敲打調整により乳棒状に整えたものである。研磨は全体に弱く，刃部は成形剥離を残し，左隅を欠損している。1606は刃部を欠く欠損品である。加工は表面で中軸の一部に研磨面がみられるが，大部分は敲打のみの調整で仕上げる。使用により破損した可能性がある。1607は身部片である。縦割れした裏面に調整剥離を加えて，再度研ぎ直しており，やや扁平な形状を呈する。形態は不明である。1608は刃部片である。裏面の剥離は，使用による衝撃剥離痕とみられる。刃部はよく研磨され蛤刃状を呈するが，刃部以外の研磨は弱く，敲打調整痕を留めている。1609は刃部のみの欠損品で，蛤刃の形状を呈する。

1610はホルンフェルス製の定角式である。加工は比較的丁寧で左右対称の整った形状であるが，研磨面は凸凹を留める。刃部左側を大きく欠損し，右端に若干残る刃縁は鈍く磨滅している。1611は頁岩製で，基部及び刃部右側を欠く欠損品である。全面に研磨を施して扁平に形作られており，刃部は主に表面側を研いで片刃気味に作出されている。

1612は扁平な磨製石斧の刃部片である。丁寧な研磨により横断面形がごく薄い凸レンズ形に整えられ，刃部は円刃で身部側縁近くまで及ぶ鋭い刃縁をつくるという，特徴的な形態を有する。樹木の伐採などとは異なる用途をもつと考えられる。石材はホルンフェルスである。1613は基部の欠損品としたが，刃先の窄まった刃部片である可能性もある。側縁に研磨を加えて面取りをしたうえ，表裏面にごく弱く研磨を施しており，所々に調整剥離面を残している。石材はホルンフェルスである。

1614～1622は打製石斧にもみられる剥離整形を器面に留めたもので，部分的に研磨を加えた局部磨製石斧である。短冊形あるいは撥形などの形状を有する。石材は1614・1617・1618・1621・1622がホルンフェルス製，1615・1616・1619・1620が頁岩製である。1614は細身の短冊形で鑿状を呈し，基部を欠損している。研磨は刃部を主として中軸に広く施されており，側縁の面取りも幾らかなされている。1615・1616は主として刃部から身部にかけて研磨を施しており，刃部右側を欠損している。1617は左側縁に素材面を残置するが，刃部には丁寧な研磨を加えている。1618・1619も主に刃部に研磨を加えており，1618は基部を，1619は刃部右側と基部を欠損している。1620は身部から基部を残す欠損品であり，中軸の凸部に研磨を加えている。1621・1622は基部側を欠く刃部片であり，刃部には研磨がみられる。

1623は小型品の基部片である。素材の形状を生かしており，側縁に研磨を認める。頁岩製である。

1624・1625は使用により破損したとみられる磨製石斧の刃部の一部を含む剥片である。石材は1624が頁岩製，1625はホルンフェルス製である。

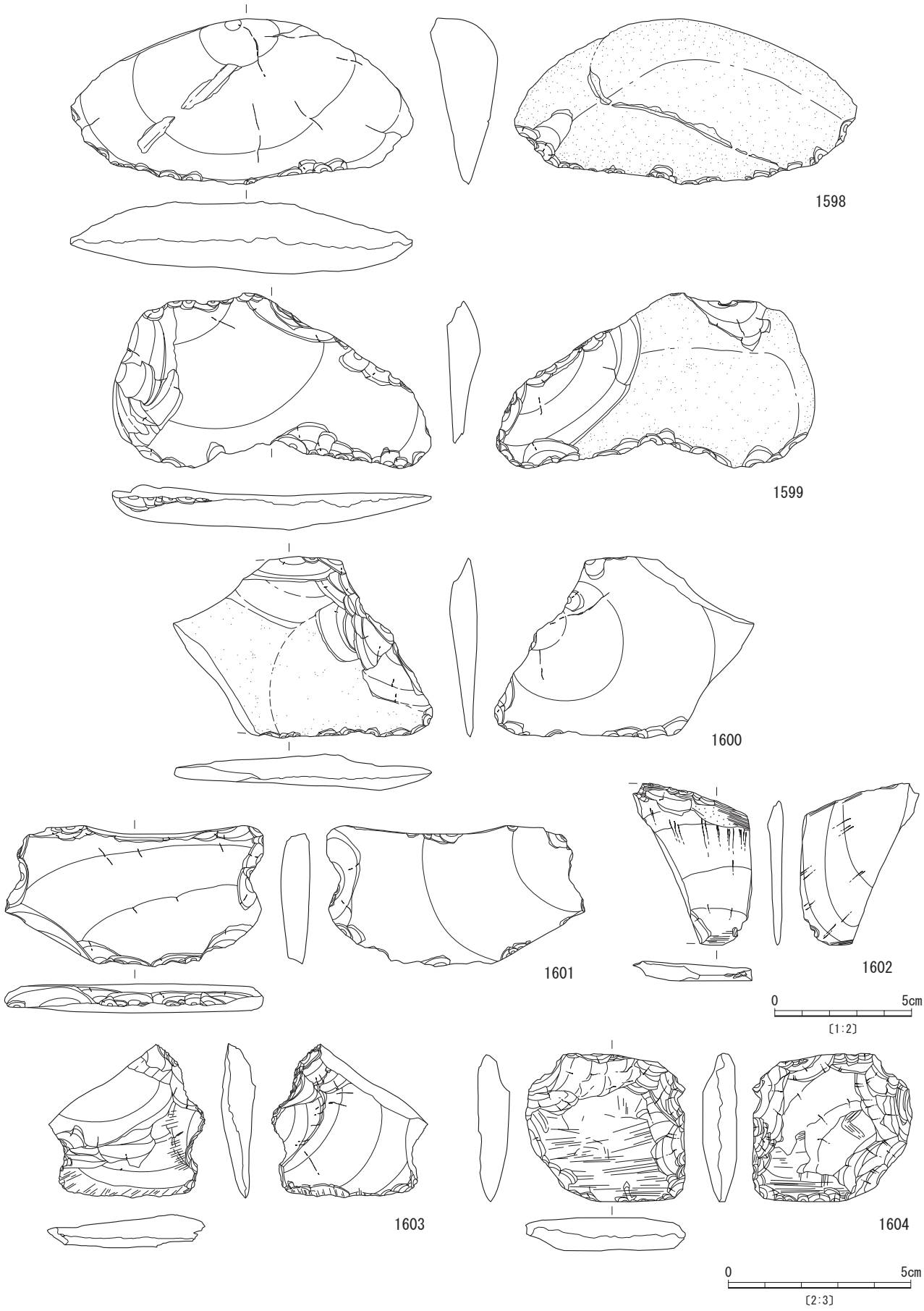
打製石斧（第276～282図1626～1701）

76点図化した。出土した定形石器の中でもっとも点数が多く，形態的にもバラエティーに富んでいる。二次加工は，器体に素材面を残して周縁加工を行ったものが目立つほか，欠損品を再加工している例も散見された。これらについて，主に平面形態からⅠ～Ⅳ類に分類を行った。石材はホルンフェルスと頁岩に限られ，ホルンフェルス製のものが割合多くみられる。なお，頁岩との区分は風化の度合による大別であり，ホルンフェルスは黄褐色を帯びる。なお，破片資料も多いことから，分類の詳細については意見が分かれるところもあろう。

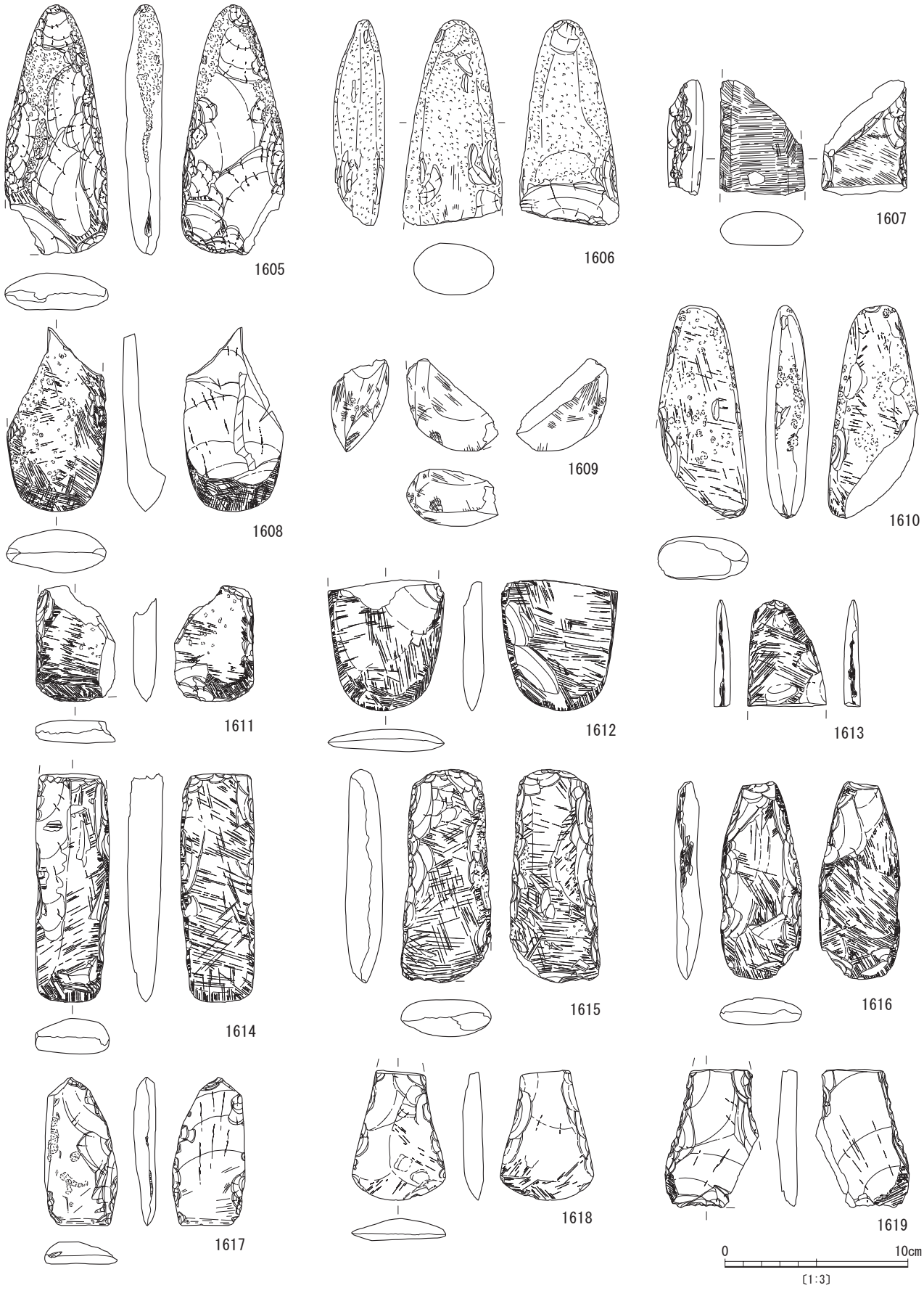
Ⅰ類　1626～1634は略短冊形を呈し，刃部幅がやや広く，直線状に基部に至るものである。1626は完形品で，細身で整った形状を呈する。長さ15.0cm，幅4.8cm，厚さ1.7cmである。1629～1631は基部から身部にかけての欠損品である。1632は裏面に使用による衝撃剥離痕がみられる。1633・1634は基部を欠く胴部から刃部にかけての欠損品である。石材は1626・1628・1629・1631・1633がホルンフェルス製，1627・1630・1632・1634が頁岩製である。

Ⅱ類　1635～1640は撥形を呈して，基部が窄まり，刃部が直線状あるいは丸みを帯びるものである。1636は完形品で，Ⅱ類の典型である。このうち1635・1638は刃先を，1639は刃部を欠損する。1640はやや鍬状を呈する大形品で，刃部右半から基部にかけて欠損している。また，刃部を主として，側縁と中軸の剥離面稜線上が使用により著しく磨滅している。石材は1635・1638・1639がホルンフェルス製，1634・1637・1640が頁岩製である。

Ⅲ類　1641～1649は抉りをもつ有肩形または両耳形を呈し，比較的細身である。特に刃部先端は鋭角だが，左右非対称になっている。使用痕がみられるものも多い。このうち1645は刃部を，1648は基部を欠損し，



第 274 図　西部出土石器（6）



第 275 図　西部出土石器（7）

1649 は刃部を残す欠損品である。石材は 1641・1643～1649 がホルンフェルス製，1642 が頁岩製である。

Ⅳ類　1650～1661 も抉りをもつ有肩形または両耳形だが，基部に比べ胴部があまり広がらず，刃部がⅢ類より尖らないものである。ただし，刃部が非対称になる点は共通する。欠損品が割合多く，1653～1655 は刃部を欠き，1658～1661 は基部を欠く。石材は 1650～1652・1654～1658・1661 がホルンフェルス製，1653・1659・1660 が頁岩製である。

Ⅴ類　1662～1672 は抉りをもち，刃部が比較的幅広く円形を呈する，いわゆるラケット形状のものである。この類も欠損品が割合多くみられる。1662 は大形の完形品であり，長さ 18.1cm，幅 11.7cm，厚さ 2.1cmを有する。また，1664 は使用による破損か，胴部が大きく剥離している。1665 は基部端と身部を欠くが，身部の一部が接合したものである。また，1666～1670 は，基部のみないし基部の一部までを欠いた欠損品であり，1671・1672 は身部から刃部ないし刃部のみの欠損品である。石材は 1662～1667・1669・1671・1672 がホルンフェルス製，1668・1670 が頁岩製である。

他：Ⅲ～Ⅴ類の欠損品　1673～1691 は基部のみの欠損品であり，1692 は身部のみ，1693～1696 は刃部のみの欠損品である。比較的ⅡもしくはⅢ類に帰属すると想定されるものが多い。石材は 1673・1674・1676・1677・1679～1686・1688・1690・1692・1693・1695・1696 がホルンフェルス製，1675・1678・1687・1689・1691・1694 が頁岩製である。

Ⅵ類　1697～1701 は不定形なものを一括した。1697 は刃部が右側縁に片寄っており，本来は撥型の形状であったものを刃部再生した可能性がある。1698・1699 は断片を素材として不整形を呈し，未成品とみられるものである。1700・1701 は打製石斧の薄手の素材剥片とみられ，若干の二次加工を観察できる。石材はホルンフェルス製が 1698～1701，頁岩製が 1697 である。

敲石（第 282 図 1702～1709）

７点図化した。敲石としてだけでなく，磨石や砥石としても用いたものがある。

1702 は，凝灰岩製定角式磨製石斧の欠損品を転用したものである。基部の末端（下面）を主として，反対側の折れ面，側面のそれぞれに顕著な敲打痕が形成されているなか，表面にもわずかながら敲打痕がみられる。1703 は方柱状の形状をした頁岩の拳大の礫を用いたもので，長軸の下端部を主として，そのほか部分的に顕著な敲打痕が形成されている。1704 は上端に折れ面がある砂岩の扁平な棒状礫を用いたもので，下端，両側縁を主として，部分的に敲打痕が集中してみられる。敲打に伴う剥離面もみられる。1705 は上半部を欠損したホルンフェルスの棒状礫で，下端に幾らかの敲打痕が形成されているほか，全面に弱い研磨がみられ，擦痕もある。1706 は上端の割れた砂岩の楕円礫を用いたもので，下端と上面に敲打痕が形成されているほか，正面，裏面，左側面に磨り面を有する。石材は被熱し赤化している。1707 は上端が窄まる砂岩の棒状礫の上下両端に敲打痕が生じたもので，敲打部を除く全面に砥面を有する。1708 は下端と側面の稜上に敲打痕が生じており，敲打作業によって破損した敲石の欠損品である。石材は砂岩である。1709 は上半部を欠損した砂岩の棒状礫で，下端から側縁の稜線上にかけて顕著な敲打痕が生じている。

磨石・敲石類（第 283～285 図 1710～1731）

22 点図化した。これらには，磨り面・敲打痕・凹みなど複数の機能を併せもったものが存在することから，磨石・敲石・凹石類として一括して扱い分類した。

Ⅰ類　磨り面のみのものである。1710～1712・1714 は全面に，1713 は表裏に磨り面を有する。1714 は上半を欠損する。

Ⅱ類　磨り面と敲打痕をもつものである。1715～1719 は側面のほぼ全周に敲打痕が形成されており，1720～1725 は側面に断続的あるいは部分的に敲打痕がみられる。これらのうち，1715・1718・1720・1724・1725 は欠損品である。

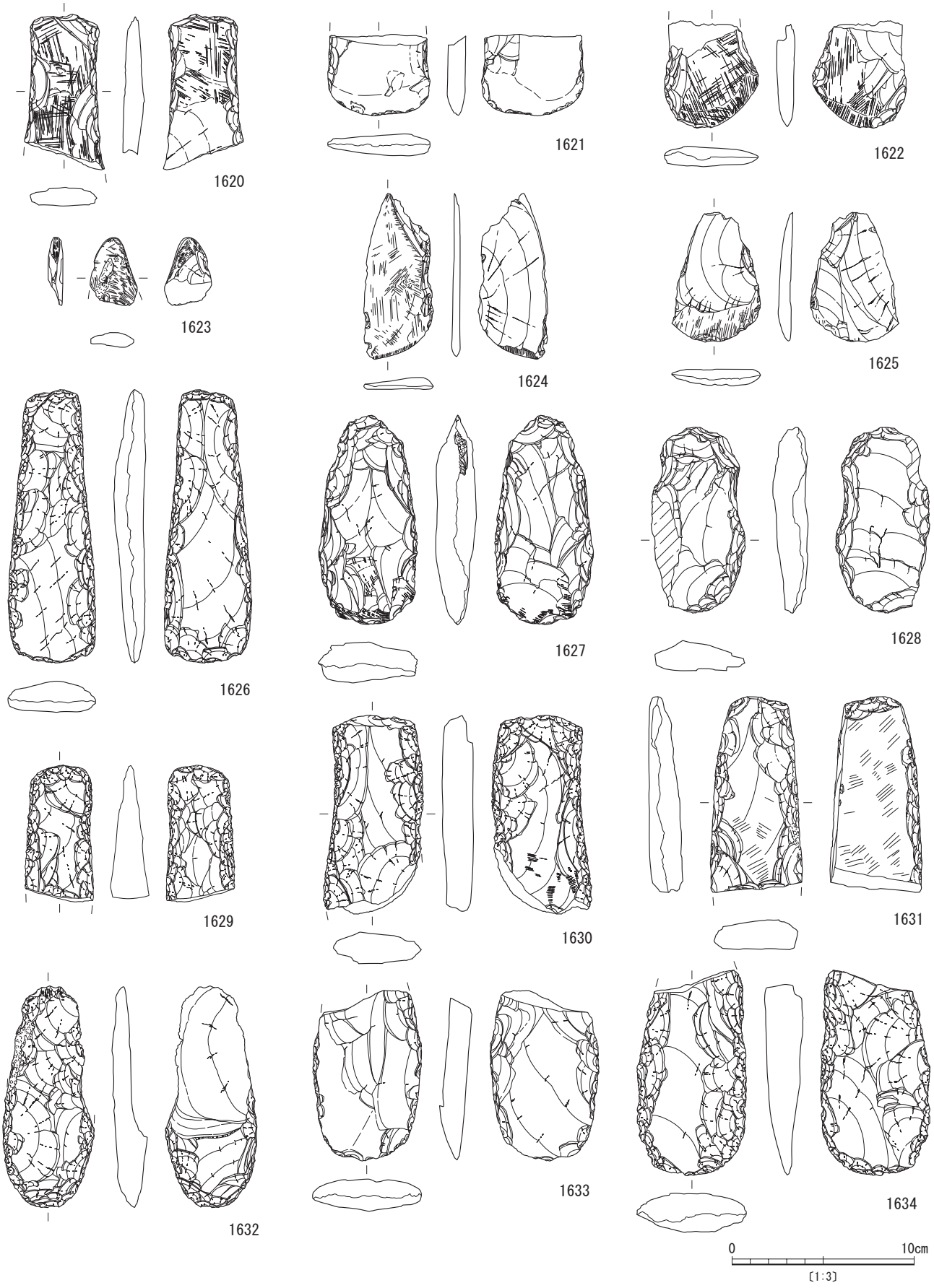
Ⅲ類　磨り面と敲打痕に加え，表裏中央に凹みをもつものである。凹みは，1726・1728・1730 は両面，1727・1730 は片面に形成されている。また，1726 には側面に顕著な敲打痕がある。1729 では敲打により破損した大きな剥離面に磨り面が形成されており，破損後も磨り面として利用を継続したことがわかる。1727・1728・1730 は欠損品である。

Ⅳ類　素材を加工して形状を整えたものである。１点出土した。1731 は敲打と研磨によって，全体を杵状に整形している。作業面としては，下面にわずかな磨り面が形成されているのみである。

石材は安山岩製が８点（1710～1712・1718・1723・1724・1727・1728），花崗岩製が４点（1713・1714・1719・1726），砂岩製８点（1715・1717・1720～1722・1725・1729・1730），凝灰岩製が１点（1716），斑れい岩製が１点（1731）で，安山岩製と砂岩製のものが多い。石材による利用状況に特に偏りはみられない。また，1715・1718・1725・1726 の４点には，被熱による赤化及びススの付着がみられる。

石皿・台石類（第 285・286 図 1732～1739）

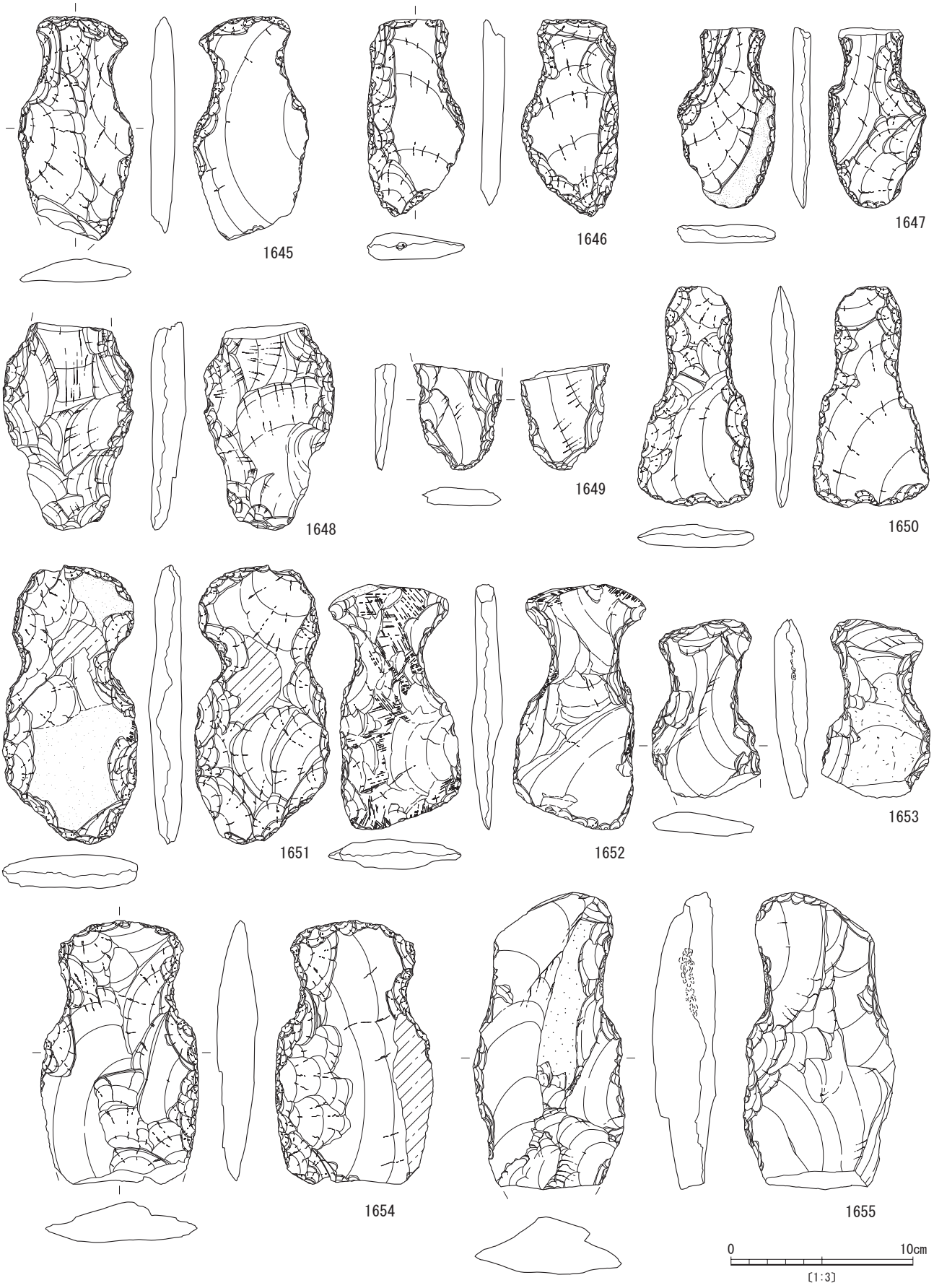
８点図化した。1732 は断面形が逆三角形状を呈する厚みのある石皿である。表面中央は使用によるすり減りと敲打痕を留め，また，上面にもわずかな凸部磨り痕がみられる。1733～1739 は石皿ないし台石の欠損品である。このうち 1733 は表裏に磨り面があり，わずかに凹む。1736 は扁平な石皿で，左側面は敲打によって整形し，表裏を平坦にしている。石材は，砂岩製４点（1732・



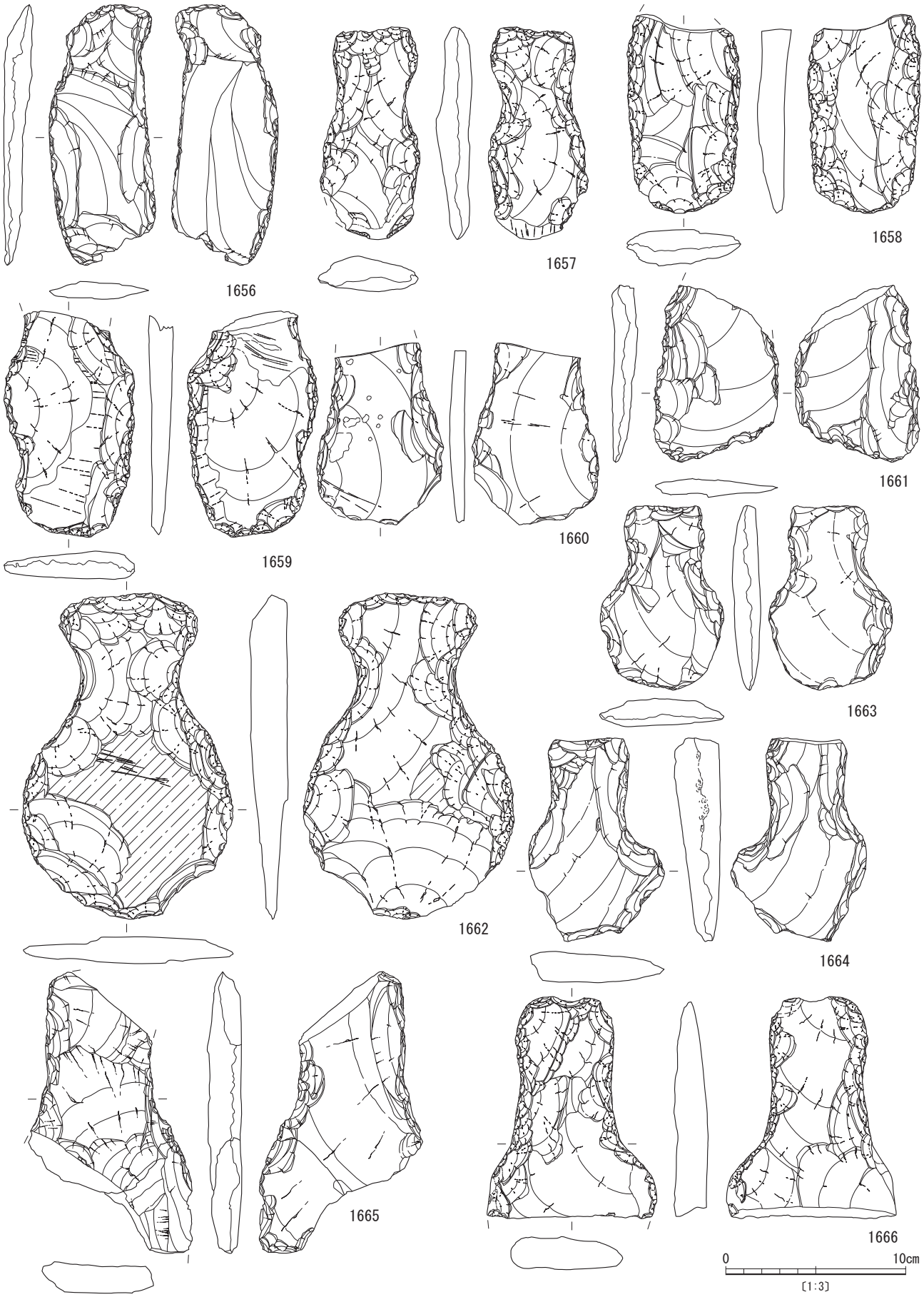
第 276 図　西部出土石器（8）



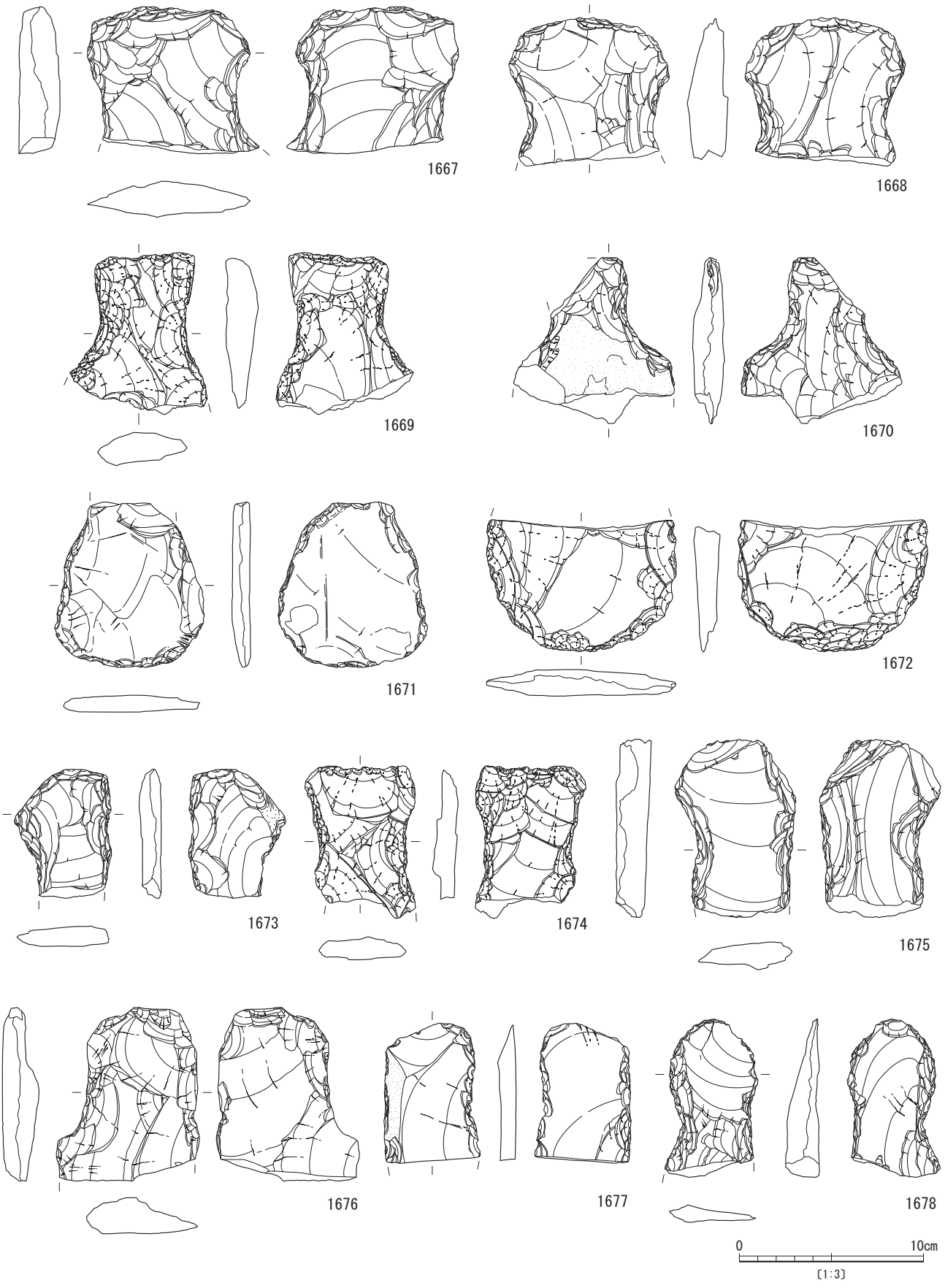
第 277 図　西部出土石器（9）



第 278 図　西部出土石器（10）



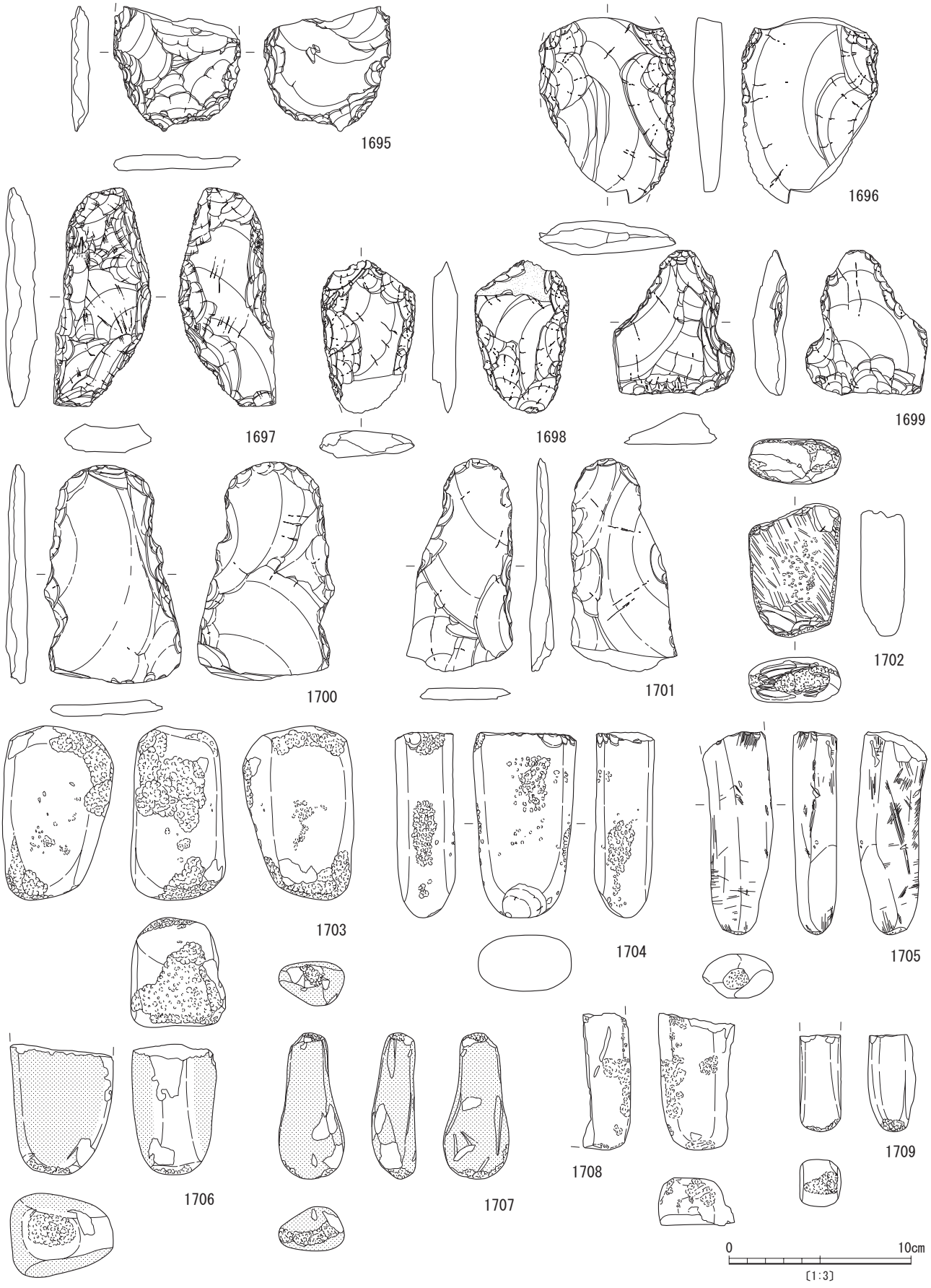
第 279 図　西部出土石器（11）



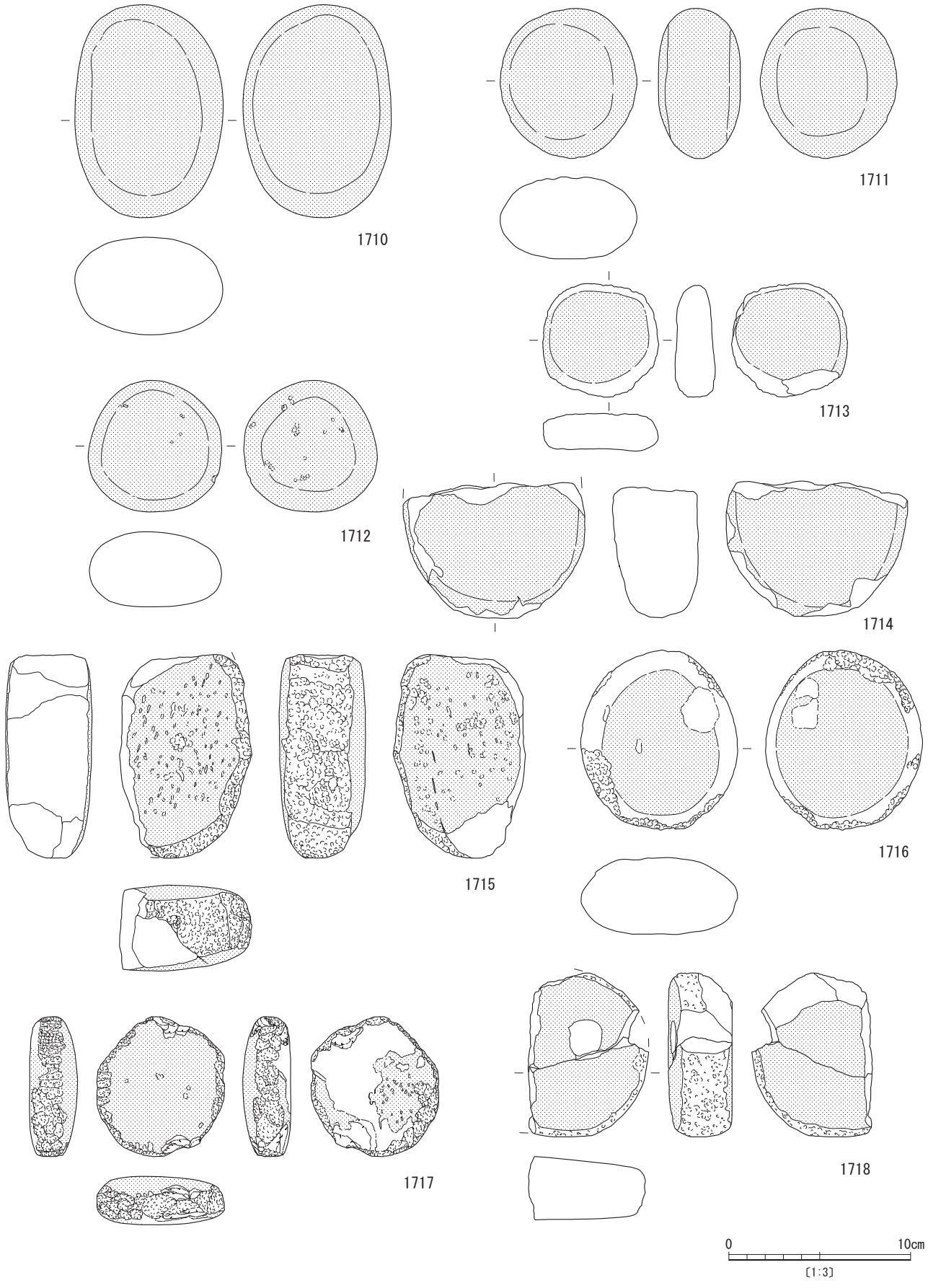
第 280 図　西部出土石器（12）



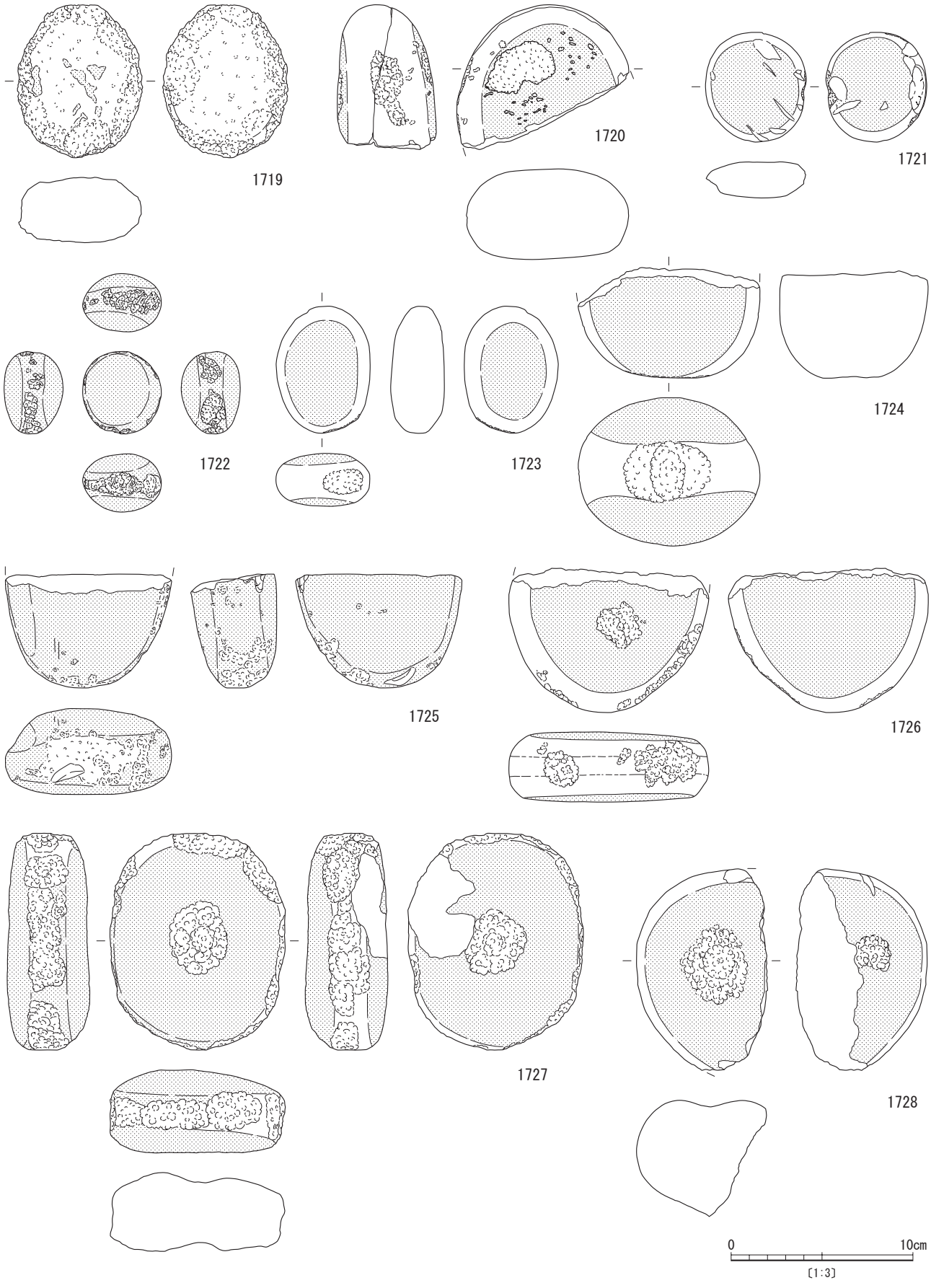
第 281 図　西部出土石器（13）



第 282 図　西部出土石器（14）



第 283 図　西部出土石器（15）



第 284 図　西部出土石器（16）

1734・1735・1737），花崗岩製３点（1733・1736・1738），斑れい岩製１点（1739）である。

砥石（第 286・287 図 1740～1759）

19 点図化した。大きさ・形態は様々で，素材となった礫の形状を残すものも多い。1740・1741 は不整な角礫を面取りしたものである。1740 は上面，表面，右側面の平坦面を，1741 は主に表裏面を砥面として利用しており，それぞれに幅広の浅い砥ぎ溝が残っている。1742 は表面の平坦面を砥面とする。1743・1744 は素材礫の原形を留め，砥面には擦痕がみられる。1745・1746 は扁平な長方形状に整形した砥石の欠損品である。1745 は調査区東部出土の砥石 1865 と接合する。1746 は裏面に欠損後も使用した痕跡がみられる。1747・1748 は扁平礫を用いており，表裏に砥面があり，1748 は下端に敲打痕も形成されている。1749 はほぼ全面が使用され，さらに右側面には多数の擦痕もみられる。

1750～1755 は剥片や礫片を利用した薄手の砥石である。1754 は接合資料で，砥面に１条の断面「Ｖ」字状の溝がみられる。1755 は表裏を砥面とし，縦方向の擦痕が多数みられる。1756 は長方形の扁平な礫を用い，砥面は光沢がある。

1757～1759 は小型の角柱状の砥石である。1759 は，表裏両面からの切り込み溝を留めており切断には至っていないものの，「施溝分割」がうかがわれる砥石である。溝は５㎜程の深さがある「Ｖ」字形の断面形を呈する。1757 も大きさ並びに形状から 1759 と同様の「施溝分割」によって作られた可能性がある。長さ 5.1cm，幅 2.3cm，厚さ 2.0cmをである。

石材は 1752 が頁岩製，1755 が片岩製，その他はすべて砂岩製である。1740～1743・1746・1747・1756・1758 には被熱による赤化・黒色付着物等がみられる。

紡錘車（第 288 図 1760）

１点図化した。1760 は結晶片岩製の紡錘車の欠損品である。ほぼ半分を欠損しており，周縁側面は丸みを帯びるように研磨されている。中心部の穿孔（径 0.7cm）は両面から穿たれている。復元直径 5.8cm，厚さ 0.5cm である。

玉類（第 288 図 1761・1762）

２点図化した。1761 は暗緑色の滑石製管玉であり，研磨はやや粗く，多角柱状で素材の稜線を若干留めており，胴中央部に最大幅をもつ。穿孔は両面から行われており，中央付近で貫通している。長さ 2.8cm，幅 0.8cmである。1762 は丸みを帯びた棗玉の形状を呈する。研磨は非常に丁寧であり，表面は滑らかに仕上げられている。穿孔は両面から行われており，中央付近で貫通している。石材は含クロム白雲母とみられ，白地に入る緑斑が美しい。長さ 2.0cm，幅 1.3cmである。

異形石器（第 288 図 1763～1765）

３点図化した。1763 は下辺を鋸歯縁とし，上辺をつまみ状に整形したもので，小型の石匙あるいは石鏃の可能性も検討したが，異形石器に含めた。石材は針尾産とみられる黒曜石である。1764・1765 は表裏面とも丁寧な調整剥離が施され，左右非対称の木葉形に仕上げている。いわゆる異形石器とは異なるが，通常の利器とも言い難いため，ここに分類した。石材はいずれも腰岳産とみられる良質の黒曜石である。

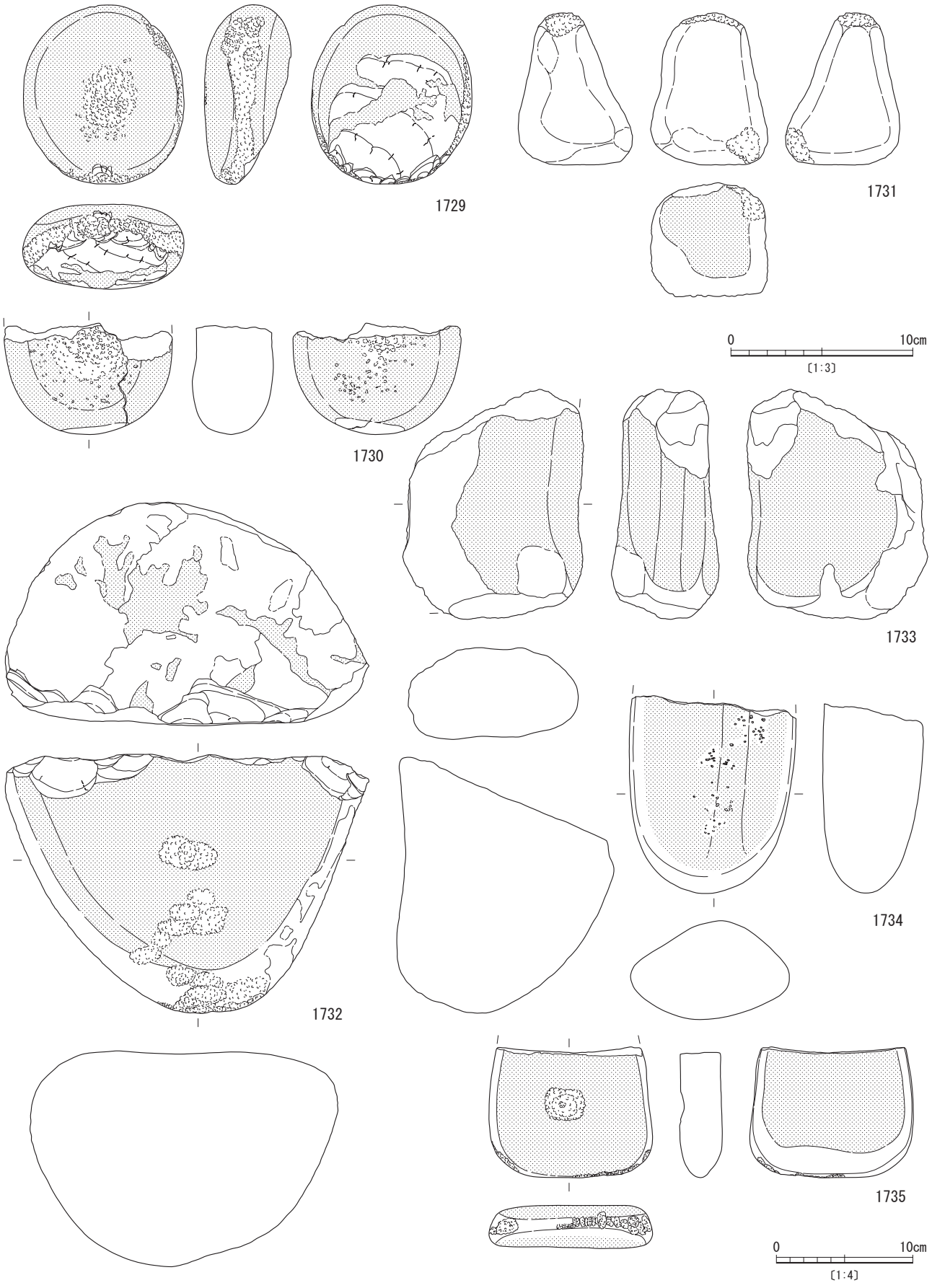
軽石製品（第 288・289 図 1766～1775）

10 点図化した。1766 は平面形がやや丸みを帯びた不整な三角形状を呈し，表裏の中央部と下面の３か所に凹みが認められる。特に表面の凹みは深い。1767 は全形が上下面に丸みをもつ略三角錐状を呈し，各側面の中央部に大きな凹みがある。また，所々に切削痕を留める。正面観はさながら人面を思わせる。長さ 17.1cm，幅11.9cm，厚さ 10.3cmである。なお，1766 と 1767 の凹み部は面が整えられていないことから，凹みは結果的に形成されたものの可能性がある。1768・1769 は軽石片を面取りして扁平に整えられており，所々に切削痕を留める。1770 は不定形であるが，正面にのみ石皿状のなだらかな凹面が形成されている。1771 は円筒形状を呈すると想定される製品の欠損品である。破断面以外の各面は比較的丁寧に整形されており，特に下面は平坦である。1772 はやや歪ながら円盤状に整形されたものである。1773 も扁平に整形し右側縁は曲面に仕上げるが，左側縁は刃状に薄くなっている。1774 は扁平な長方形を呈すると推測される製品の欠損品である。残存する各面とも比較的丁寧な面取りがみられる。1775 は平面が略方形で，縦断面が略くさび形を呈する小型の製品である。

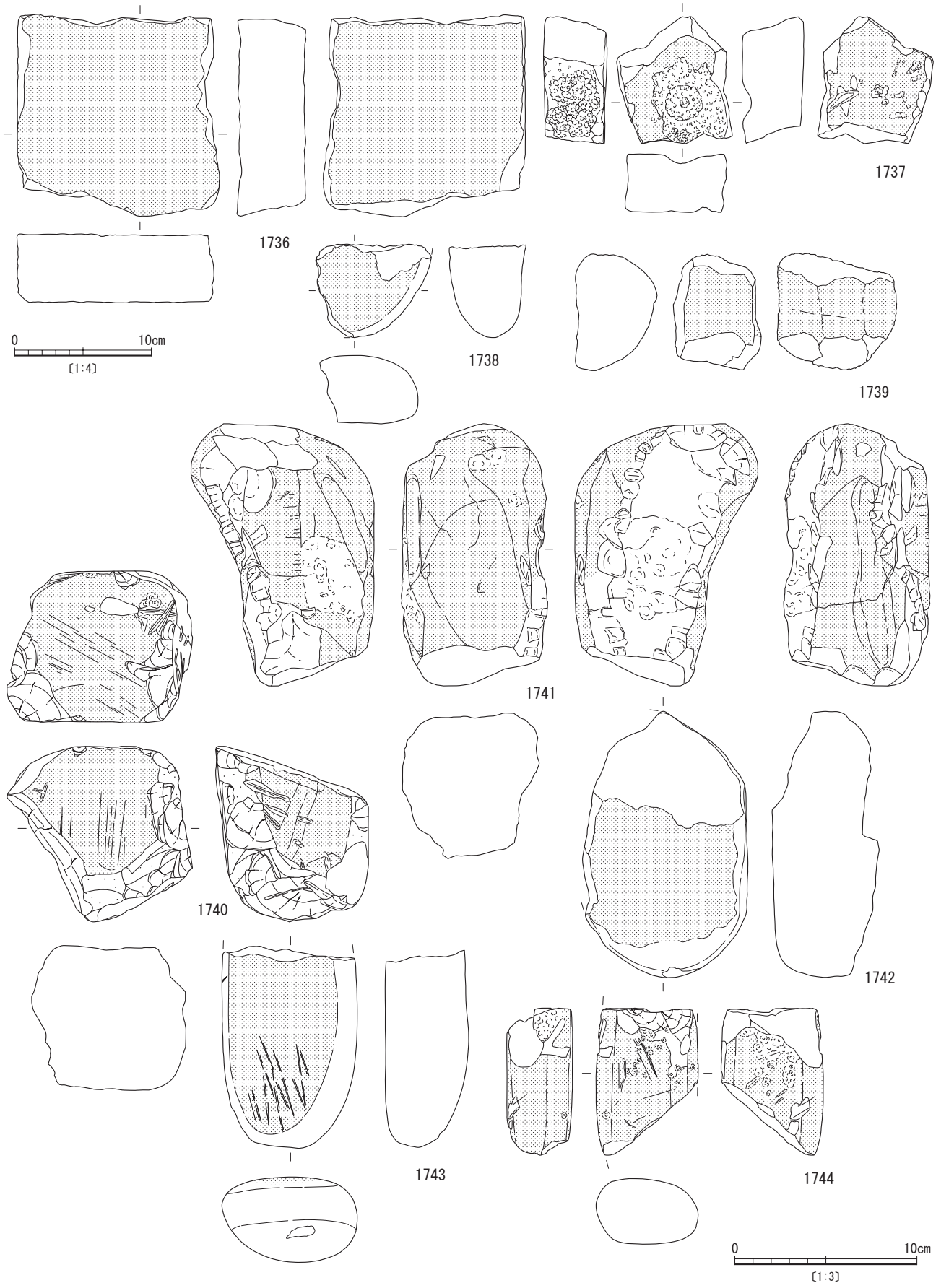
③調査区東部（第 290 図）

Ｂ～Ｌ－ 37～55 区を一括する。出土石器類は合計381 点である。器種別の内訳は，打製石鏃 26 点，磨製石鏃５点，石匙２点，使用痕のある剥片４点，石錐２点，楔形石器３点，横刃形石器１点，石包丁１点，磨製石斧９点，打製石斧 56 点，敲石４点，磨石・敲石類 16 点，石皿・台石類 14 点，砥石 29 点，軽石製品８点，剥片・砕片類 201 点である。

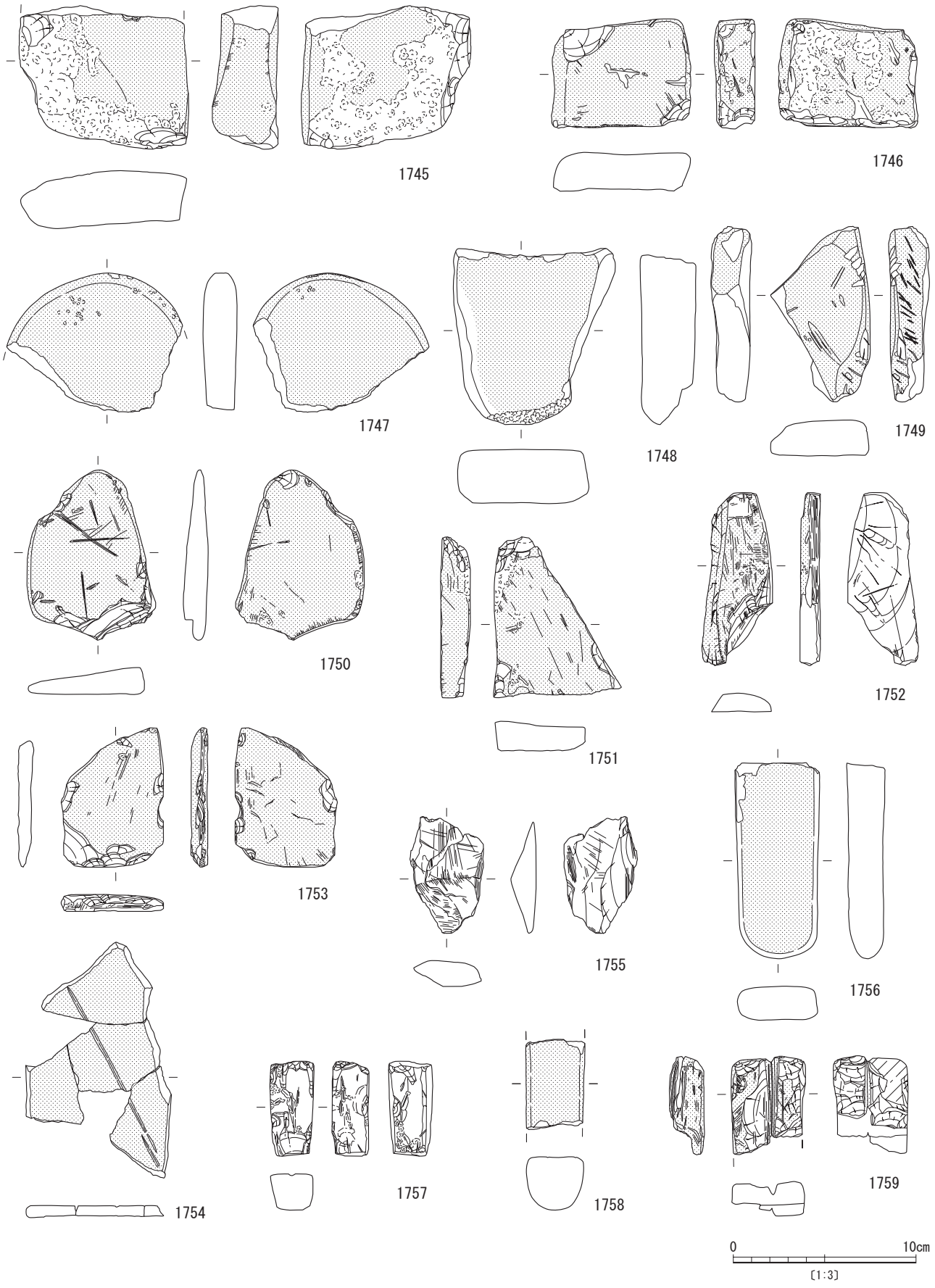
分布状況は，剥片・砕片類を除いた集中傾向として，Ｈ～Ｌ－ 37～39 区の緩斜面，Ｄ～Ｊ－ 40～43 区の谷戸頭付近において纏まりをみせ，その他の区域では疎らである。なお，47 区から東側一帯には空白部分があるが，遺物包含層の欠如によるものである。器種別の分布傾向は特に見出せないものの，谷戸頭のＦ－ 41・Ｇ－ 43 区付近において石鏃の分布がやや目立っている。その他では，大型の磨製石鏃未成品 1802 がＨ－ 43 区Ⅱ層から，石皿・台石類の完形品 1859 がＨ－ 42 区Ⅱ層から，環状軽石製品の 1882 がＩ－ 42 区Ⅱ層からそれぞれ出土して



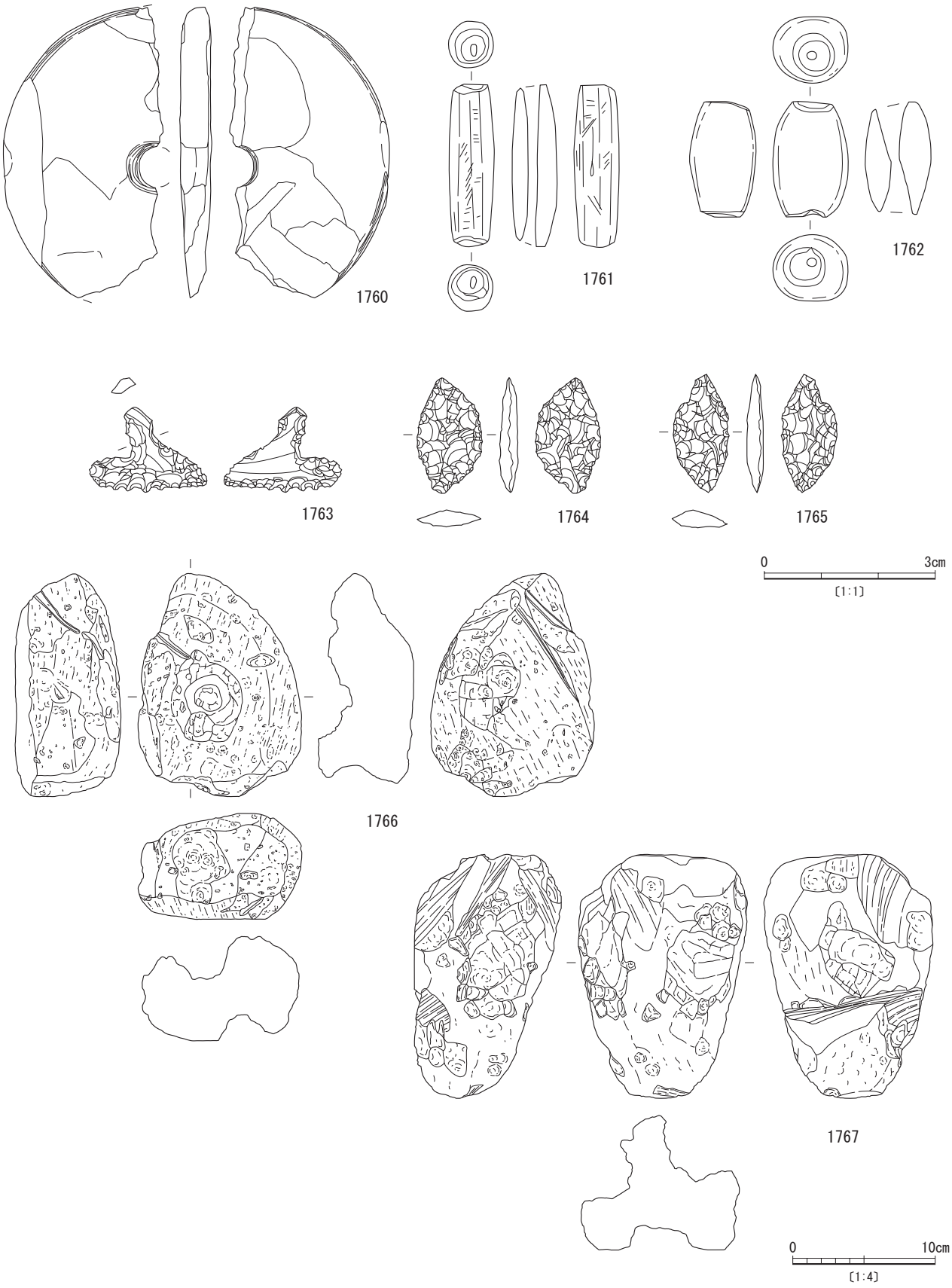
第 285 図　西部出土石器（17）



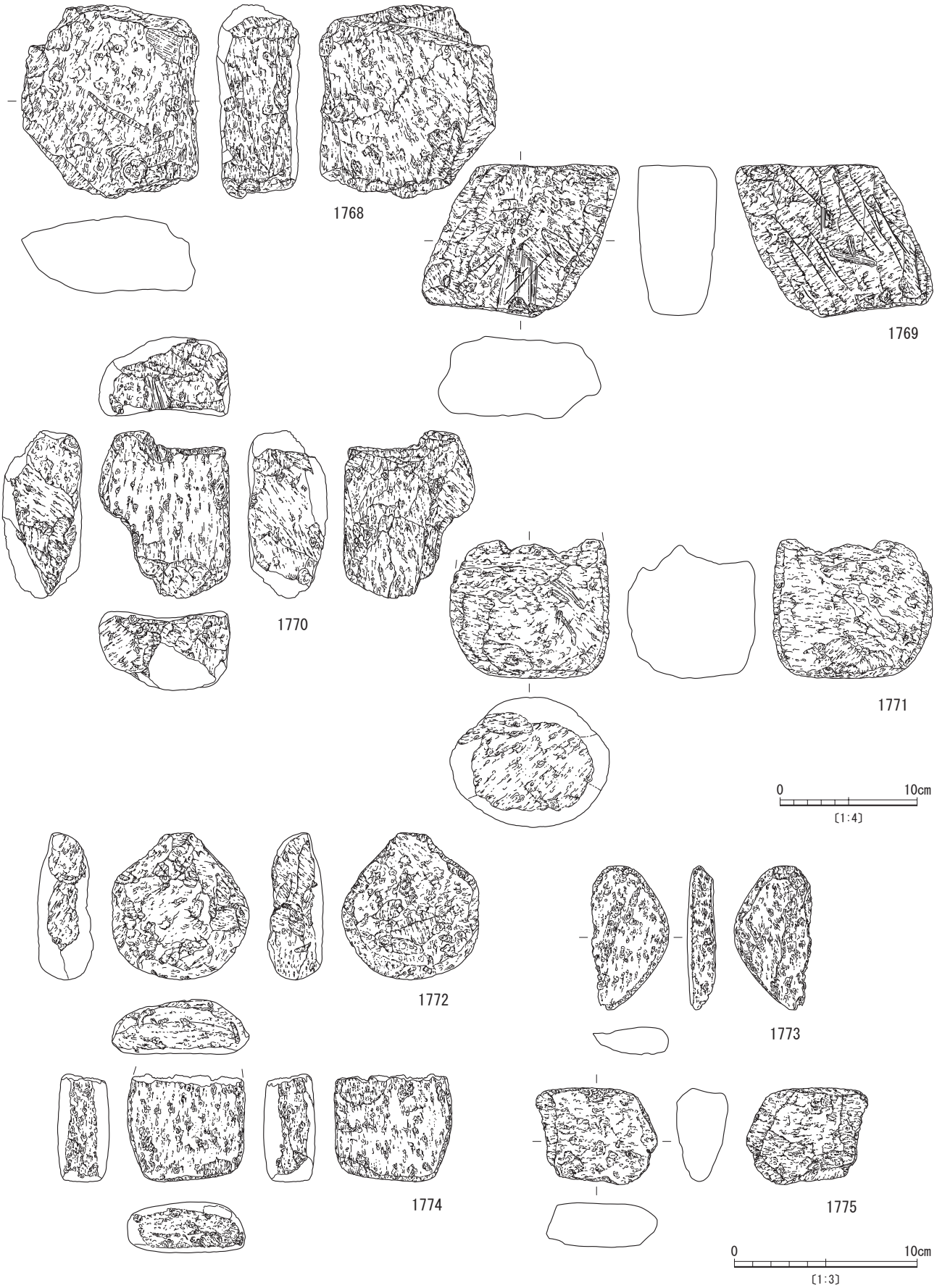
第 286 図　西部出土石器（18）



第 287 図　西部出土石器（19）



第 288 図　西部出土石器（20）



第 289 図　西部出土石器（21）

いる。また，砥石はG－43区Ⅱ層から出土した1865と，調査区西部のH－31区Ⅱ層から出土した1745が接合した。なお，剥片・砕片類については，黒曜石等の小片や打製石斧の調整剥片等が大半を占めている。

以下，石器個々の特徴について述べる。実測図の並びについては，西部と同じく分布状況に関係なく順不同である。

打製石鏃（第291・292図1776～1798）

23点図化した。類型は基部形状から平基（Ⅰ類）と凹基（Ⅱ類）に大別され，その三角形状の長幅比や特徴的な形状等において分類できる。

平基の石鏃は1776～1780の５点で，Ⅰａ類である。長幅比がほぼ等しく正三角形状を呈するもので，全体にやや粗い整形が目立つ。1779は両隅を突出させる特徴的な整形をしている。

凹基の石鏃は1781～1798の18点である。そのうち1781～1789はⅡａ類である。長幅比がほぼ等しく正三角形状を呈し，多くは抉りが比較的浅い。その中では，1788は基部の抉りがやや深い。1790～1796はⅡｂ類で，長幅比1.5：１程の縦長の二等辺三角形状を呈する。1790・1796は大形品で，1790は長さ3.5cm，幅1.8cm，厚さ0.5cmである。また，1793～1796は基部の抉りが深い。1797・1798はⅡｄ類で，やや縦長で平面形が五角形状を呈する。基部の抉りは比較的深く，側縁の上半に肩部の作出がみられる。1798は側縁を鋸歯状としている。

欠損については，23点中13点と割合多く認められる。これらのうち1777・1779・1780・1786・1791・1796は先端部あるいは上半部を欠き，1778・1785・1787・1788・1789は脚部を欠いている。なお，使用痕として，1780・1786・1796では，先端からの「砕け」が生じており，特に1796の表面には先端方向からの顕著な衝撃剥離痕が見受けられる。

石材は，緻密な安山岩製のものが半数を占め，次いで黒曜石製のものが多く，その他の石材もある。その中で緻密な安山岩製が12点（1776・1778・1779・1781～1784・1788・1791・1793～1795），黒曜石製が５点（1780・1785・1786・1792・1798），玉髄製が３点（1777・1789・1790），チャート製が２点（1796・1797），水晶製が１点（1787）である。石材と形態はこれといった傾向はみられない。

磨製石鏃（第292図1799～1803）

５点図化した。1799は整った二等辺三角形状を呈する平基の磨製石鏃である。研磨は，表裏面とも先端部から中軸に稜線を設けて左右に研ぎ分けており，両側縁は極めて鋭く仕上げている。石材は黒色頁岩製である。1800も黒色頁岩製であり，上半部と脚端を欠く。研磨により側縁付近にわずかに稜線が形成されている。1801は未成品である。両側縁と下縁を垂直に研磨して，外形を三角形状に整えているが，表裏に素材面を残している。灰色の頁岩製である。1802は二等辺三角形を呈する大形の未成品である。表裏面に研磨を施して厚さをおおまかに整えた段階にあり，両側縁は面取りをした状態で，基部の下縁も表裏からの調整剥離面が残る。灰白色の頁岩製である。長さ6.1cm，幅3.5cm，厚さ0.4cmである。1803も1802とほぼ同じ大きさ・形を呈する未成品である。まだ粗い剥離整形段階のもので，分厚く，研磨は殆ど施されていない。先端部を欠損している。黒色頁岩製である。

石錐（第292図1804）

１点図化した。1804は水晶製の縦長剥片を素材とし，主に背面側に，両側縁から錐先部にかけて粗い調整剥離を施している。上端の折れ面は使用によるものではない。

使用痕のある剥片（第292図1805・1806）

２点図化した。1805は小さく整った形状の水晶製の剥片である。背面側の下縁に直線状の微小剥離痕が生じており，使用痕である可能性がある。1806はチャート製で石匙の不定形剥片であり，二次加工はないが，直線状の下縁と突き出した上端部に不規則な微小剥離痕がみられる。

石匙（第293図1807・1808）

２点図化した。1807は中軸につまみをもつ横型の石匙である。薄手横長剥片という素材形状を生かして，部分的な周縁調整で，直線状の鋭い刃部を作出している。刃部の大部分を欠く。1808は尖頭状を呈する縦型の側刃の石匙である。部分的な調整でつまみ部を作り，刃部にもわずかに剥離がみられるが，左側縁は素材の折れ面を残置する。石材は1807・1808ともにホルンフェルスである。

横刃形石器（第293図1809）

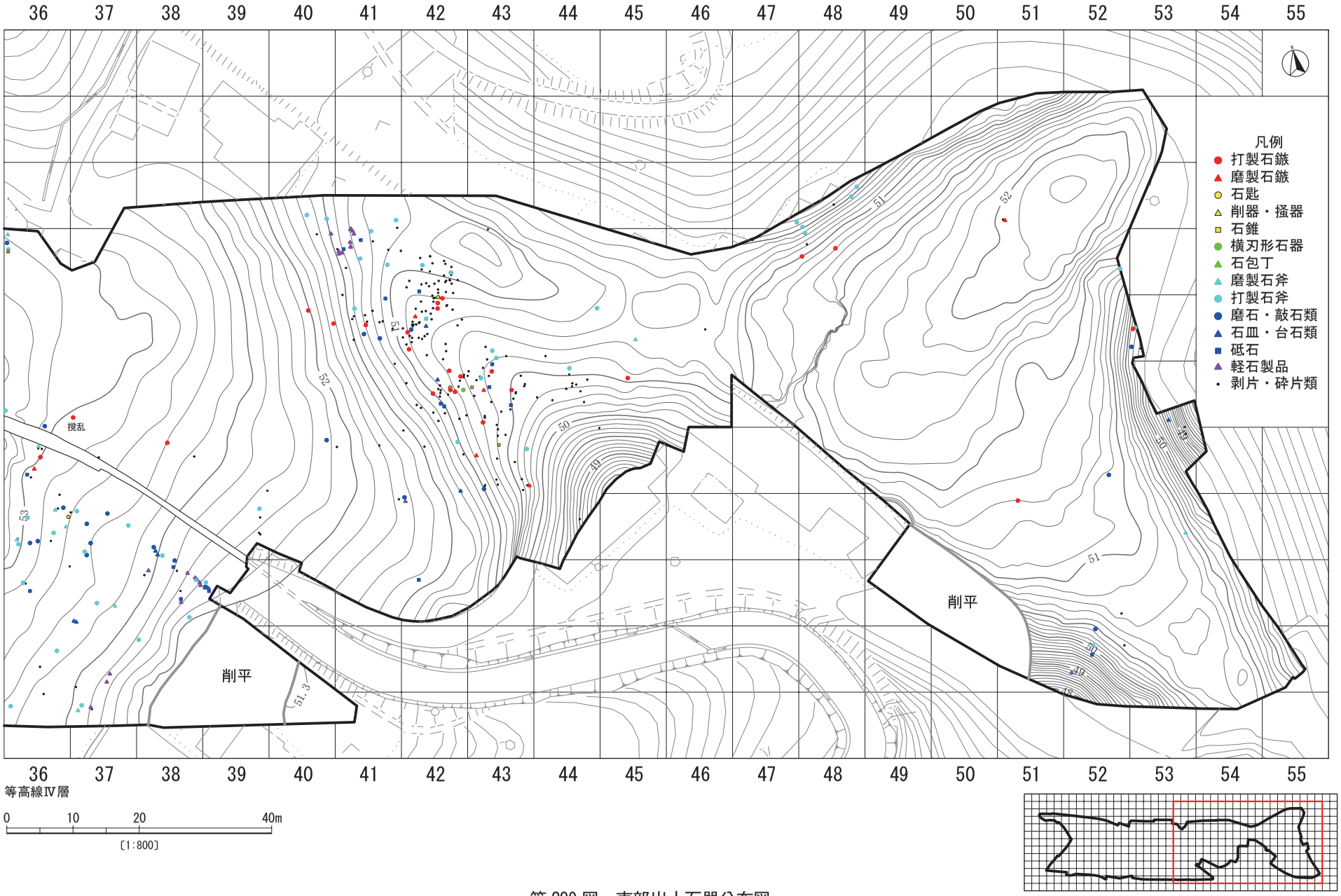
１点図化した。1809は打製石斧の調整剥片を用いた横刃形石器である。腹面に若干の調整を加えている。上縁の剥離面は既存のものとみられる。直線状の下縁に顕著な微小剥離痕が生じている。石材は頁岩である。

石包丁（第293図1810・1811）

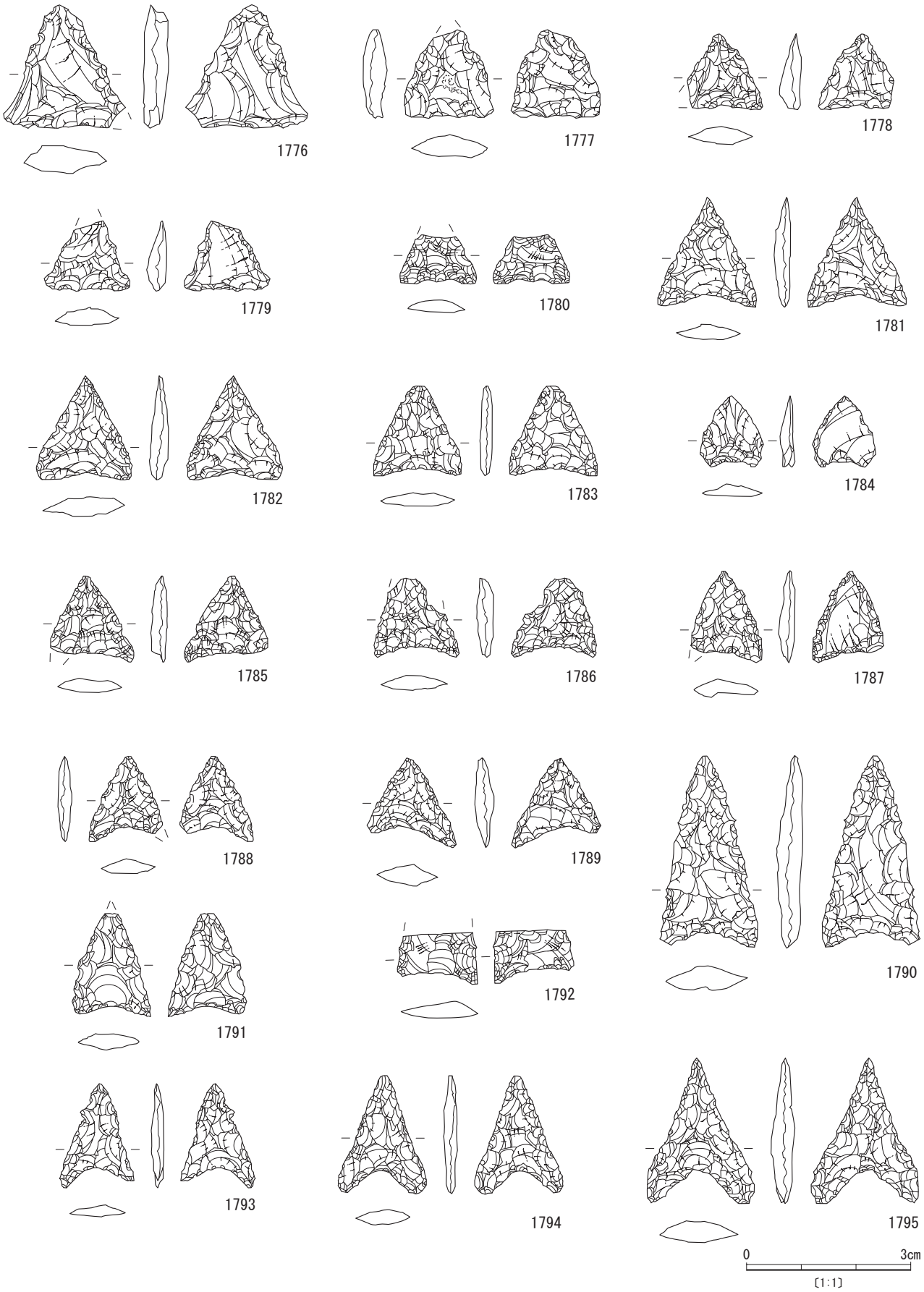
２点図化した。1810は大部分を欠損するが，やや丸みを帯びた逆台形状を呈していたと考えられ，全体に丁寧な研磨を施している。紐穴の一方が残しており，両面より穿孔されているのを観察できる。石材はホルンフェルスである。1811も大部分を欠損した破片である。研磨は雑であまり行き届いておらず，刃部には調整とみられる剥離を留めている。石材は黒色頁岩である。

磨製石斧（第294図1812～1818）

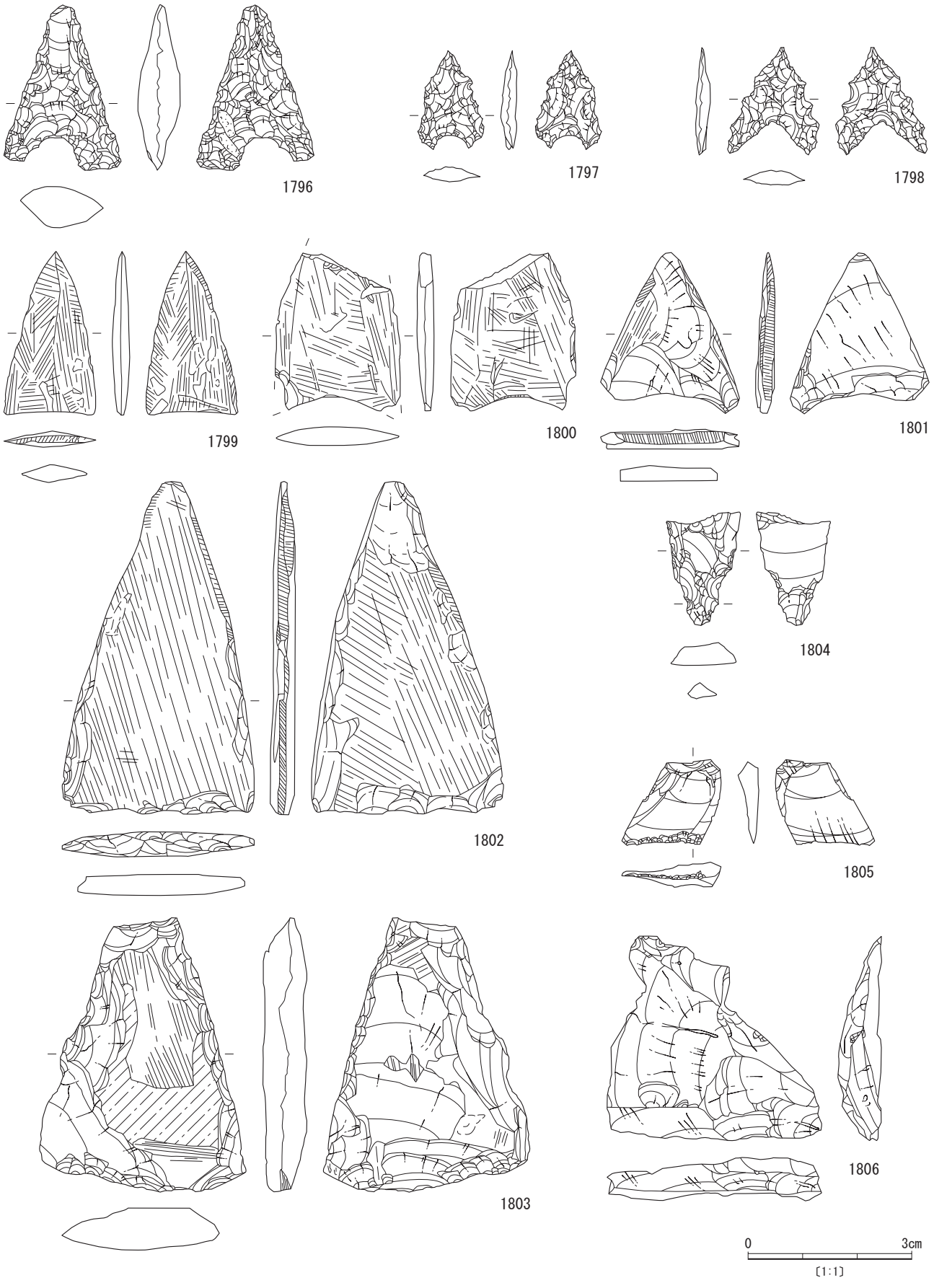
７点図化した。1812は横断面が楕円形をなす乳棒状石斧で，身部で折れた刃部側の欠損品である。刃部は整った両凸刃でよく研磨されているが，刃部以外の研磨は弱く，敲打調整痕を留めている。石材は硬砂岩である。



第 290 図　東部出土石器分布図



第 291 図　東部出土石器（1）



第 292 図　東部出土石器（2）

1813 は欠損した乳棒状石斧の再生品とみられる。裏側の破損面を扁平に研ぎ直し，長軸の一方に片刃となる鑿状の刃部を研ぎ出している。なお，片方の側縁中間に数条の縦溝が刻まれており，着柄に関わる加工の可能性がある。石材はホルンフェルスである。1814 は使用によって欠損したとみられる刃部の破片で，石材は硬砂岩である。

1815～1818 は部分的に研磨を加えた局部磨製石斧である。石材は 1815・1816・1818 がホルンフェルス製，1817 が頁岩製である。1815 は剥離整形が粗く，身部がやや膨らんだ撥形を呈し，基部を欠損する。研磨は刃部に施され，比較的薄い弱凸強凸片刃である。1816 は基部が尖った撥形を呈する。研磨は側縁に面取り状に施した上，表裏面に弱く施されている。1817 は身部から基部側を欠損する。研磨は刃部の表裏面にのみ施されている。1818 は短冊形を呈するが，基部及び刃部が窄まる変則的な平面形態である。研磨は側縁に面取り状に施して刃部幅を狭めた上で刃部の表裏面に施されている。

打製石斧（第 294～296 図 1819～1841）

23 点図化した。調査区西部の打製石斧に準拠し，凡その形態分類を行った。主にⅠ・Ⅲ～Ⅴ類がみられており，周縁加工により仕上げているものが目立つ。石材はホルンフェルスと頁岩に限られ，西部同様にホルンフェルス製のものが比較的多くみられる。

Ⅰ類　1819 はやや丸みを帯びた短冊形を呈するもので，１点のみ出土した。基部に若干の抉りを有する。石材は頁岩である。

Ⅲ類　1820・1821 は抉りをもつ両耳形を呈し，細身で，刃部先端が鋭角になり軸線から左右どちらかに片寄るものである。石材は 1820 がホルンフェルス，1821 が頁岩である。

Ⅳ類　1822～1827 は抉りをもつ有肩形を呈すると想定され，基部に比べ胴部があまり広がらず，刃部が尖らないものである。いずれも欠損品であり，胴部から刃部ないし刃部である。石材は 1822～1826 がホルンフェルス製，1827 が頁岩製である。

Ⅴ類　1828・1829 も抉りをもつ有肩形を呈すると想定されるが，刃部が比較的幅広く，いわゆるラケット形状のものである。どちらも基部を欠く，胴部から刃部にかけての欠損品である。顕著な使用痕が認められ，刃部のほか，側縁及び中軸の剥離面稜線上にも磨滅が生じている。石材は 1828 がホルンフェルス，1829 が頁岩である。

Ⅵ類　1839～1841 は不定形なものである。1839 は胴部，1840 は基部の可能性がある。1841 は打製石斧の刃部が残る剥片である。石材はいずれもホルンフェルス製である。

他：Ⅲ～Ⅴ類の欠損品　1830～1838 は基部の欠損品である。両耳形が多いが，撥形または有肩形と想定できるものもある。石材はホルンフェルス製が 1830～1833・1835～1838，頁岩製が 1834。

敲石（第 296 図 1842～1845）

４点図化した。1842・1843 は磨製石斧の基部の欠損品を転用したものである。1842 は下面の破損に伴う剥離の稜線上に敲打痕が生じているほか，上端の基部末端にも転用後に生じたと考えられる敲打痕が見られる。1843 は下面とした基部末端に敲打痕が集中し，平坦な面ができている。石材はどちらも硬砂岩である。1844・1845 は棒状礫を用いたものである。1844 は上下両端に敲打痕が生じており，1845 は上半部を欠損して，下端に敲打痕が生じている。石材はどちらも砂岩製である。

磨石・敲石類（第 297・298 図 1846～1856）

11 点図化した。調査区西部での分類に準拠する。

Ⅰ類　1846～1850 で磨り面のみのものである。1846 は節理から割れたもので，４点接合した。推定径 15㎝を超える大型品である。1847 は表裏に弱い磨り面をもつ。1848・1849 は径７㎝の小型品で，磨り面が全面に及ぶ。1850 は断面が半球状を呈する礫の平坦な裏面を磨り面とする。磨り面には光沢が生じている。

Ⅱ類　磨り面と敲打痕をもつものである。1851・1852 は表裏に平坦な磨り面をもち，側縁全周に敲打痕がみられる。1853～1855 は側面に部分的な敲打面がみられる。1852～1855 は欠損品である。

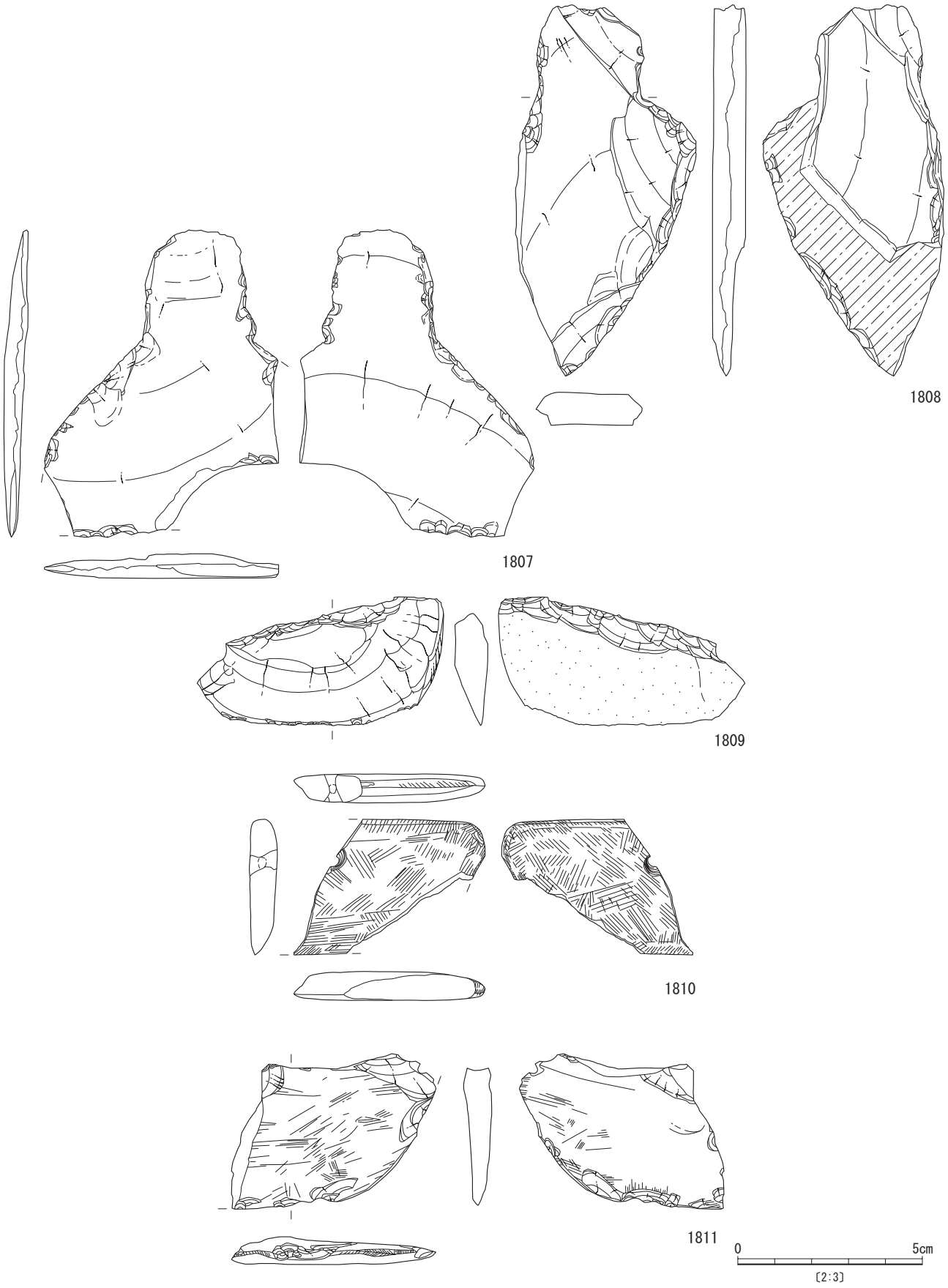
Ⅲ類　磨り面と敲打痕，表裏中央に凹みをもつものである。1856 は側面の敲打痕が全周し，中央に径 3.5㎝の比較的大きな凹み痕をもつ。

石材は砂岩製が４点（1846・1849・1851・1854），花崗岩製３点（1847・1853・1855），安山岩製３点（1848・1852・1856），頁岩製１点（1850）である。なお，1853・1854 には被熱による赤化がみられる。

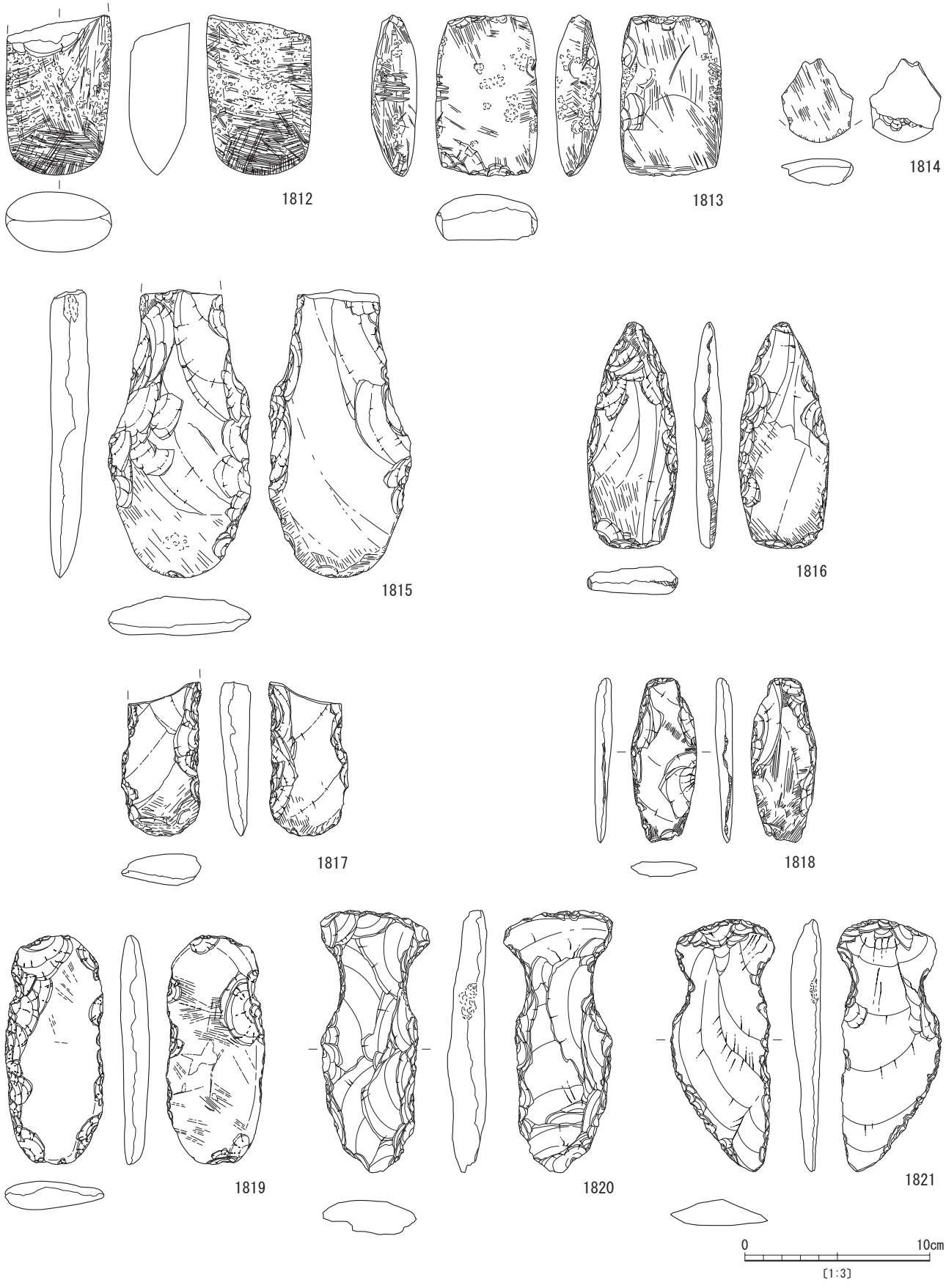
石皿・台石類（第 298・299 図 1857～1862）

６点図化した。1857 は周縁部に自然面を残して，中央部に縦長の磨り面をもつもので，磨り面と敲打痕がみられる。下半部を欠損する。1858 は盤状の礫を用いた石皿で，表面の中央が緩く凹む形状を呈し，所々に敲打痕がみられる。下半部を欠損している。1859 は平板な円礫を用いた径 23㎝の石皿である。表面は中央がやや丸く高まる凸面の磨り面を有し，敲打による凹みが３か所形成されている。一方，裏面は中央部に顕著な敲打痕があり，凹面を形成し，その周縁部には磨り面を残す。1861 は欠損品で，表面を使用しており，緩やかに凹む形状を呈している。1860・1862 は凹み部を有する台石である。1860 は面取りした方形礫の表裏面に敲打による凹みがある。1862 は欠損品で，礫の表面に敲打による凹みがみられる。

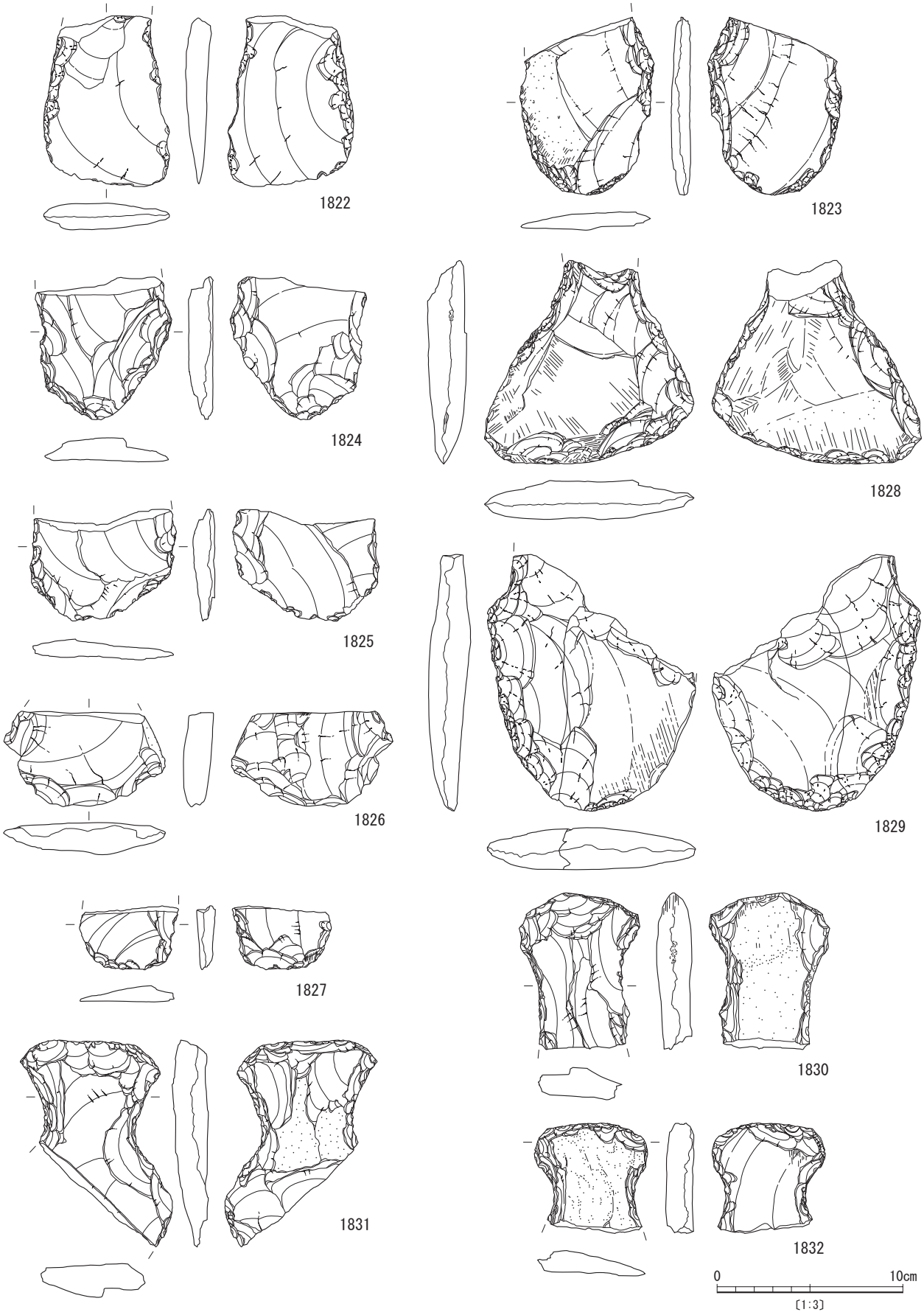
石材は花崗岩製が２点（1857・1858），安山岩製が２点（1859・1861），砂岩製が１点（1860），斑れい岩製が１点



第 293 図　東部出土石器（3）



第 294 図　東部出土石器（4）



第 295 図　東部出土石器（5）



第 296 図　東部出土石器（6）

（1862）である。また，1858 には被熱による赤化がみられる。

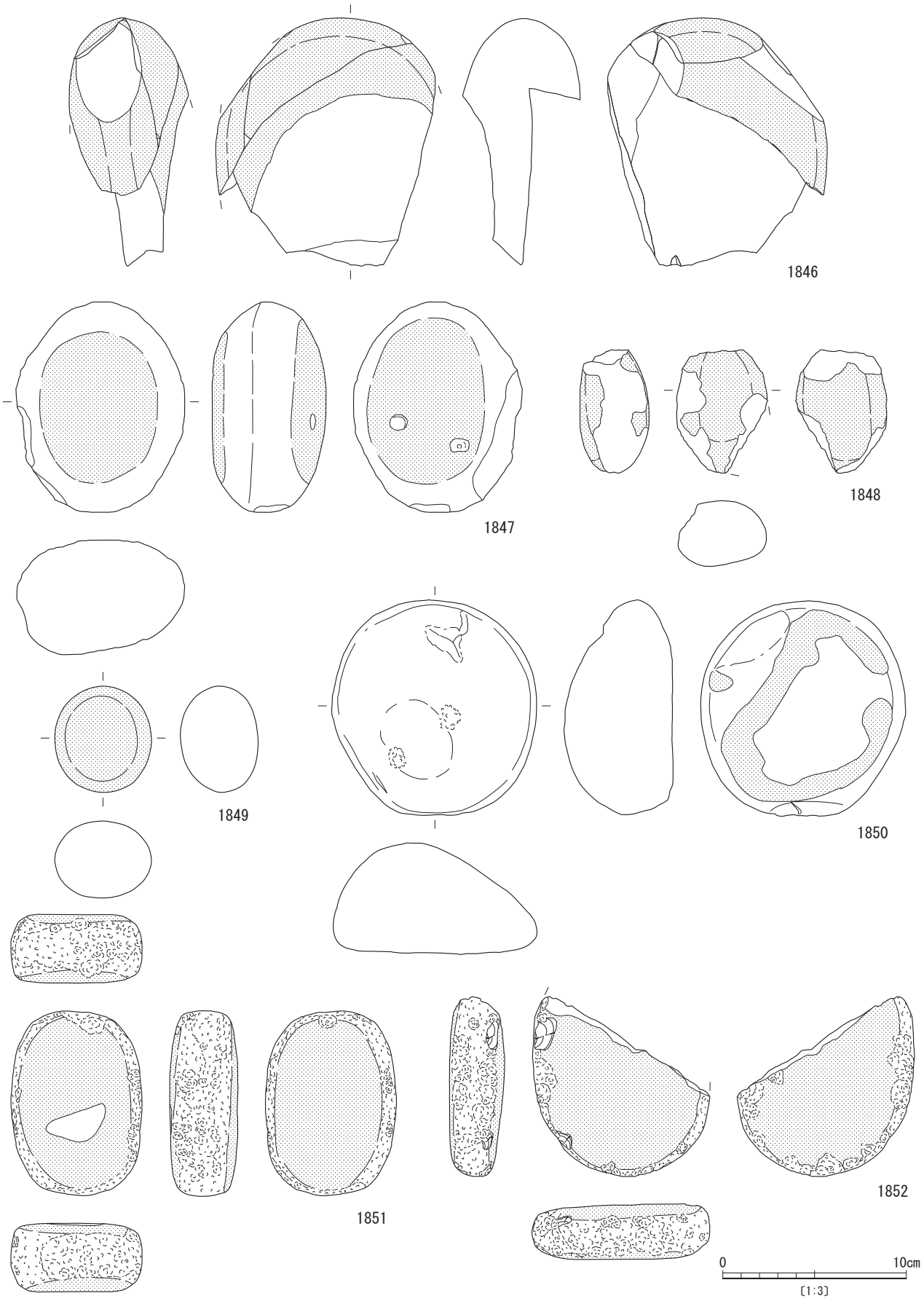
砥石（第 299・300 図 1863～1875）

12 点図化した。1863 は角柱状を呈する砥石である。主に表面と右側面を砥面として用いており，両面とも中央がやや砥ぎ減りしている。1864 は有溝砥石であり，上半部と右側面の一部を欠損している。砥ぎ溝は表裏面でそれぞれ縦に２条みられ，表面中央の溝は深く，断面は幅の広い「Ｖ」字状を呈し，幅 1.5㎝，深さ 1.0㎝である。1865 は，調査区西部出土の 1745 と接合した。全体の大きさは長さ 15.9㎝，幅 9.7㎝，厚さ 3.5㎝の長方形状を呈する。主に表面を砥面とし，中央が緩く砥ぎ減りしている。1866 は角柱状を呈し，上下面を除く全面を砥面としている。同一面上に砥面を違えた稜線がみられる中，裏面の一部に浅い溝がみられる。1867 は比較的大きな砥石の欠損品とみられる。表裏と左側面を砥面とする他，割れた右側面も砥面として利用しており，砥ぎ痕が浅い溝状に残っている。部分的に敲打痕もみられる。1868 は扁平な方形を呈する砥石の欠損品とみられ，上面に整形痕を残す。砥面は正面のみである。1869 も欠損した砥石の破片である。表裏と右側面に平坦な砥面が残る。また，裏面中央には横方向の線状の敲打痕がみられる。1870 は礫片を利用した砥石である。表面のみを砥面とし，上下方向の砥ぎ作業によって，中央部が凹んでいる。1871～1874 は手持ちで使用した小型の砥石である。1871 は礫片の割れ面を主な砥面としたもので，光沢があり，裏面は自然面を留めている。1872 は角柱状の棒状礫を用いたもので，下半部を欠損している。各面を長軸方向に使用している。1873 は横断面を蒲鉾状に整形した砥石である。表裏の縁辺の角に面取りを施している。裏面は自然面のままである。1874 は半円形に欠損したもので，残存径 4.5㎝を有する。扁平な表裏を砥面とするが，両側面の中間部に欠損後とみられる３本程の横方向の刻みがみられる。1875 は「施溝分割」の痕跡を残す不整扁平な砥石の破片であり，右側面は表裏両面から深さ５㎜程の擦り切溝を施した後に折り取られている。また，節理面である表裏の一部分を砥面とするが，分割溝と平行した数条の鋭い砥ぎ溝が残されている。

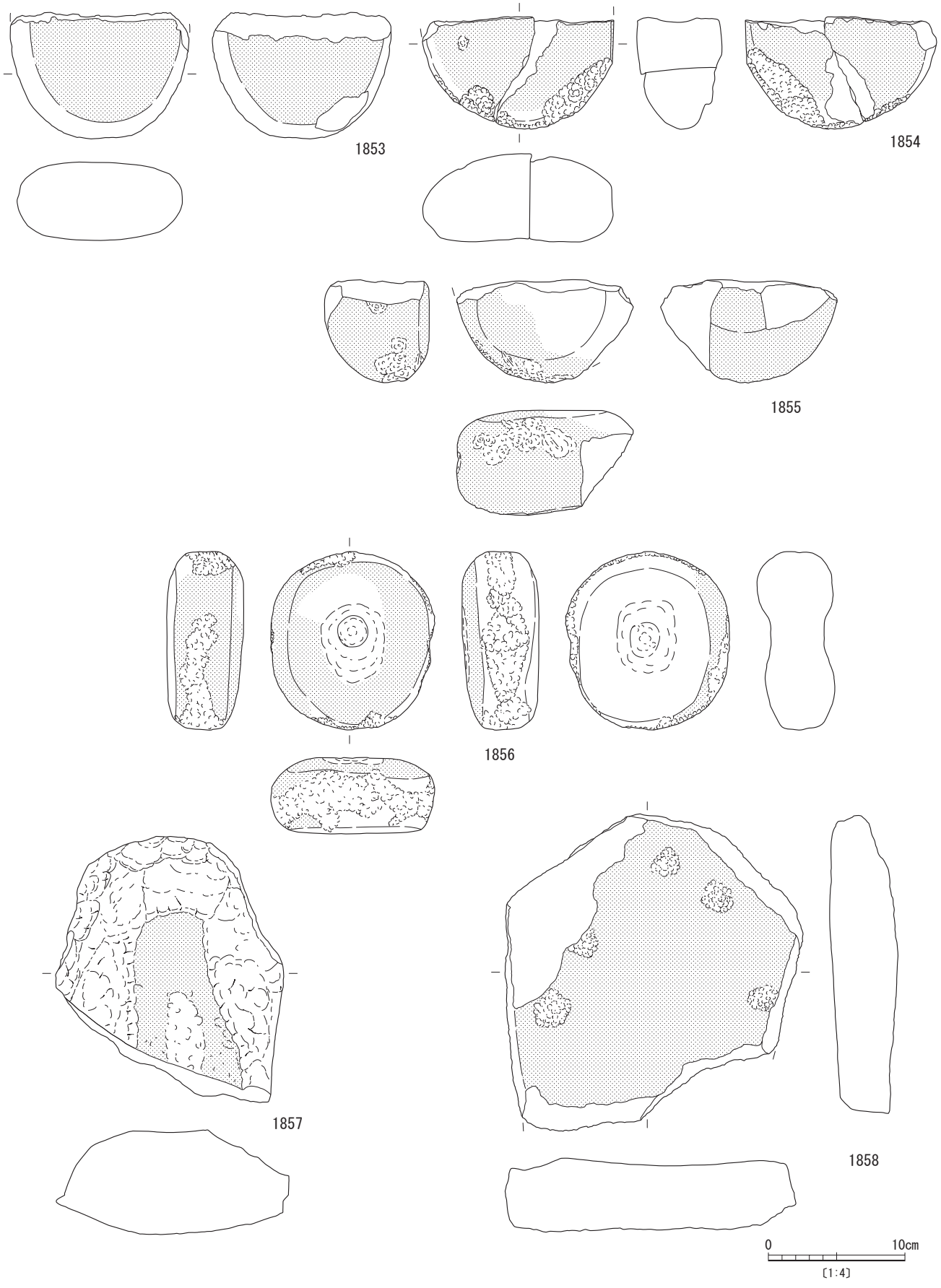
石材は 1875 が頁岩製である他，全て砂岩製である。また，1863・1869・1870・1874 には被熱による赤化，スス等がみられる。

軽石製品（第 301 図 1876～1882）

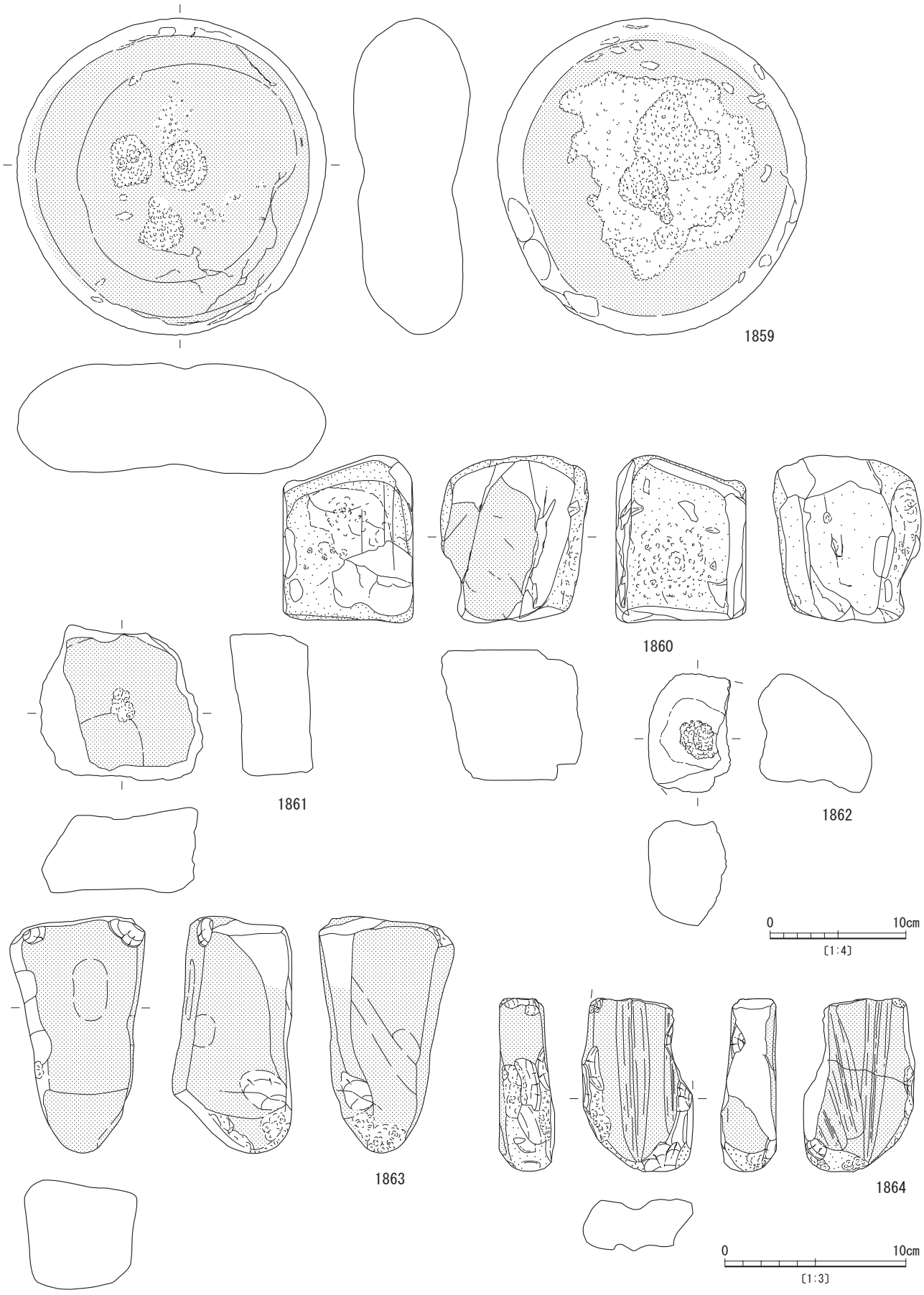
７点図化した。1876 は整った扁平楕円形を呈するもので，表裏面を加工して平坦にしている。下半の一部を欠損している。1877・1878 は大きさや形状が類似する鰹節形を呈する軽石製品で，全面に面取り加工がなされている。また 1878 は表面の中央部に不整形な凹みを有する。どちらも質の粗い軽石を用いている。1879 は丸みを帯びた不整な形状に面取りされており，右側面には弧状に抉られた部分を有する。1880 は表面に１条の溝痕をもつ不整形な破片で，溝は深さ 2.5㎝程を有する。1881 は角柱状を呈する製品で，丸みを帯びるように面取りがなされている。下半部を欠損している。1882 はリング状を呈する製品であり，比較的丁寧に整形されている。直径 6.9㎝，厚さ 2.3㎝で，穿孔は両面から行われ，穿孔部は直径 1.1㎝である。



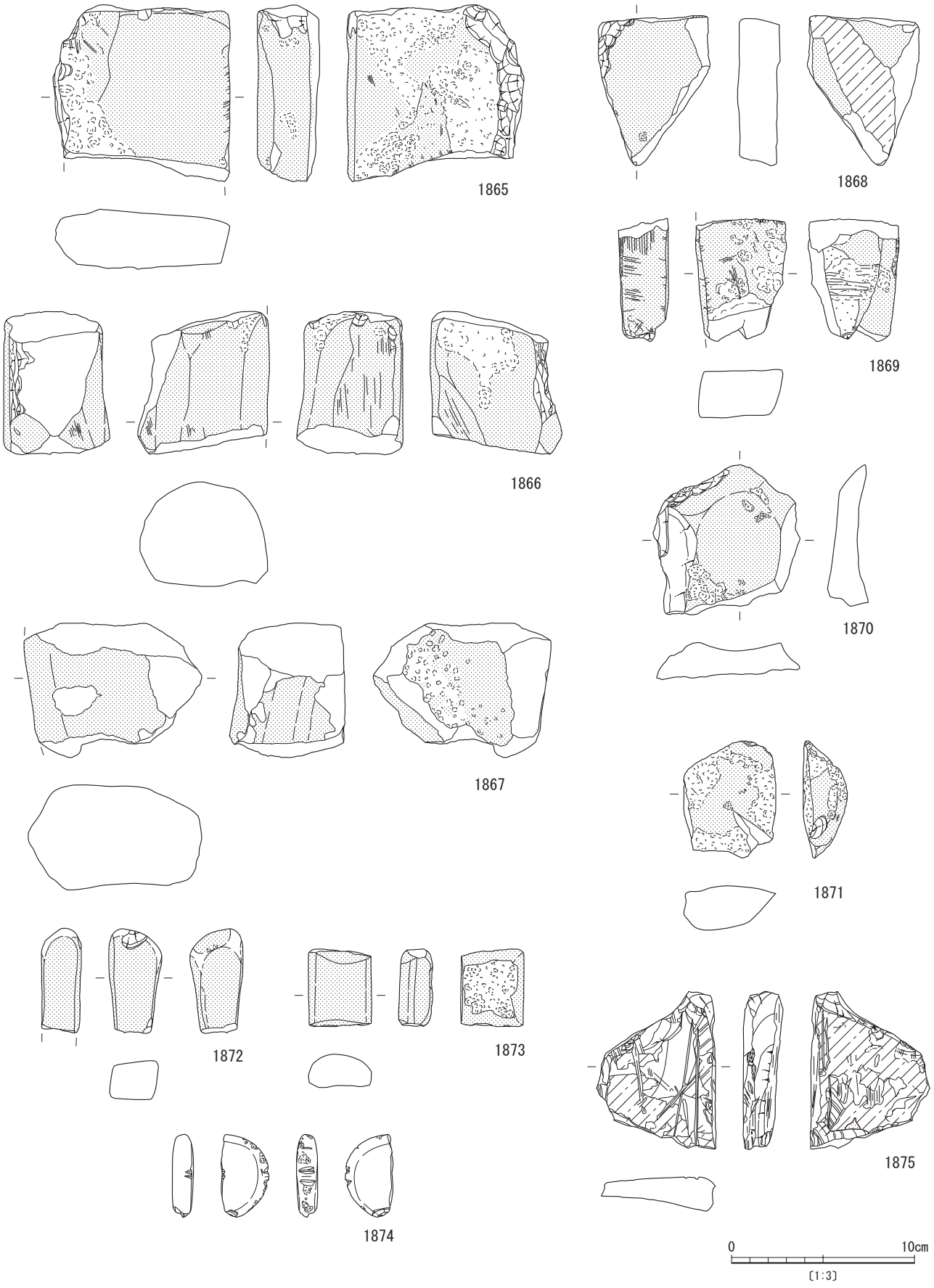
第 297 図　東部出土石器（7）



第 298 図　東部出土石器（8）



第 299 図　東部出土石器（9）



第 300 図　東部出土石器（10）



第 301 図　東部出土石器（11）

第 13 表　弥生時代住居跡・土坑・周溝墓出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
65	521	弥 SI1	②	−	甕	口縁	29.0	−	ヘラ横ナデ	−	−	にぶい褐	良好	○			○		○		角閃石
65	522	弥 SI1	②上	2316	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	褐灰 −	良好	○			○				スス
65	523	弥 SI1	②上	2315	甕	肩	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラナデ	3 条突帯	明黄褐	普通	○				○	○	○	−
68	525	弥 SI2	①②床直	5836 他	甕	完形	32.0〜33.0	8.0	ヘラナデ	ヘラナデ	突帯，凹線	橙	普通	○	○		○	○	○		摩耗，スス，器高 37.5
68	526	弥 SI2	①，②上，周溝／II	5998 他	大型甕	口縁	41.2	−	ヘラナデ	ヘラナデ，ナデ	台形状突帯	にぶい橙	良好	○	○		○	○	○		角閃石
68	527	弥 SI2	①	6095	甕	口縁	25.4	−	横ナデ	縦ナデ	凹線	−	普通	○				○		○	−
68	528	弥 SI2	−	−	甕	口縁	15.0	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい褐 褐	普通	○			○	○			摩耗
69	529	弥 SI2	−	−	甕	口縁	33.0	−	ヘラナデ	ナデ	突帯	にぶい黄褐	普通	○			○	○			−
69	530	弥 SI2	①	5977	甕	口縁〜胴	28.0	−	ヘラ縦・横ナデ	−	4 条突帯	橙，暗褐 橙	普通	○			○		○		摩耗
69	531	弥 SI2	①	5770 他	甕	口縁〜胴	33.6	−	ヘラ横ナデ	丁寧なヘラナデ	3 条突帯，凹線	明黄褐，明赤褐，黒褐 にぶい黄橙，黒褐	良好	○			○	○			摩耗
69	532	弥 SI2	①	5793 他	甕	口縁	16.0	−	−	ナデ	−	−	普通	○				○		○	摩耗
69	533	弥 SI2	①，床直	5946 他	甕	口縁	−	−	ヘラ縦ナデ	ナデ	−	−	普通	○				○		○	−
69	534	弥 SI2	①	5851	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい褐 褐	良好	○			○	○			−
69	535	弥 SI2	①	−	甕	胴〜脚	−	6.7	丁寧なヘラ縦ナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい橙 黒褐	良好	○		○	○	○			底：種子圧痕
69	536	弥 SI2	①	5761	甕	脚	−	7.6	ハケナデ・ナデ	ナデ	−	にぶい黄橙 黒褐	良好	○			○	○			−
69	537	弥 SI2	①	6099	甕	胴下〜脚	−	7.5	ヘラ縦ナデ，面取り	ヘラ縦ナデ	−	にぶい橙 黒褐	良好	○	○		○	○			コゲ
69	538	弥 SI2	②	6177	甕	脚	−	5.8	ヘラナデ	−	−	灰褐 にぶい褐	良好	○	○	○	○				摩耗
69	539	弥 SI2	①，P1 ①	5781 他	甕	胴〜脚	−	7.8	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい橙 褐灰	普通	○	○	○	○	○	○		−
70	540	弥 SI2	①	5853 他	壺	口縁	27.4	−	ハケナデ・ヘラナデ	ナデ	凹線	褐 にぶい褐	良好	○	○		○	○	○		剥落
70	541	弥 SI2	−	−	壺	口縁	−	−	ハケナデ・ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	−	褐，黒褐 褐	良好	○			○	○		○	−
70	542	弥 SI2	①	5834	壺	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい黄橙 −	普通	○			○	○		○	−
70	543	弥 SI2	①	5824	壺	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい褐	良好	○			○	○		○	−
70	544	弥 SI2	①	5864 他	壺	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	褐	普通	○			○	○			−
70	545	弥 SI2	①	5985	壺	胴	−	−	ナデ	ナデ	突帯	黄褐 にぶい黄橙	普通	○			○	○			摩耗，胴：19.6
70	546	弥 SI2	床直	5944	壺	底	−	5.0	ヘラナデ	剥落	−	褐 黒褐	普通	○			○	○		○	剥落，コゲ
70	547	弥 SI2	①	5783	壺	底	−	6.0	ナデ	ナデ	−	明黄褐	普通	○			○	○			摩耗
70	548	弥 SI2	①	5760 他	壺	底	−	7.5	丁寧なヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	−	暗赤 赤褐	良好	○		○	○	○	○		−
74	561	弥 SI3	①	5885 他	甕	口縁〜胴	24.2	−	ハケ縦ナデ	ヘラナデ	3 条突帯，凹線	橙	普通	○		○	○	○			摩耗・スス
74	562	弥 SI3	①，P2	5908 他	甕	口縁〜胴	22.6	−	ヘラナデ	ヘラナデ	3 条突帯	黒褐 にぶい橙	普通	○	○		○		○		−
74	563	弥 SI3	①	5927	甕	口縁	−	−	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	凹線	にぶい赤褐	良好	○	○	○	○				−
74	564	弥 SI3	①	5914	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ，指オサエ	凹線	にぶい橙 黒褐	良好	○		○	○	○			−
74	565	弥 SI3	①	5919	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい褐	良好			○	○				−
74	566	弥 SI3	①	5895 他	甕	胴	−	−	ヘラ斜ナデ	ヘラ斜ナデ	2 条突帯	黒褐 明赤褐	普通	○	○	○	○				−
75	567	弥 SI3	①上南西	−	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	明褐灰	普通		○			○			−
75	568	弥 SI3	①	5905	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	明褐灰	良好	○	○			○	○		−
75	569	弥 SI3	①②	5901 他	甕	脚	−	7.4	縦ナデ，ヘラナデ	ナデ	面取り	橙 黒褐	普通	○		○	○	○			−
75	570	弥 SI3	①	5913 他	甕	脚	−	6.6	ナデ	ナデ	−	明褐	普通			○	○	○	○		−
75	571	弥 SI3	①	5909 他	無頸壺	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	明赤褐	良好	○		○	○	○			−
75	572	弥 SI3	SK1 ①	5922 他	壺	胴下〜底	−	8.6	丁寧なヘラナデ	ヘラ縦ナデ	−	明赤褐 橙	良好	○			○	○	○		−
75	573	弥 SI3	①	5915 他	甕	胴下〜底	−	7.8	ヘラナデ	ヘラナデ	無文	にぶい褐	普通	○	○		○				摩耗
75	574	弥 SI3	①	5910 他	小型台付鉢	底	−	−	ナデ	ナデ	−	橙	普通			○	○	○	○		−
77	576	弥 SI4	①	−	甕	口縁	−	−	ヘラ縦ナデ	ハケ横ナデ	凹線	にぶい黄褐	良好	○	○		○		○	○	−
80	581	弥 SI5	上面	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	褐	良好	○					○		輝石
80	582	弥 SI5	②北西	−	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	沈線	黒褐，灰白	良好		○	○					スス，赤石
80	583	弥 SI5	床直	6203	甕	脚	−	8.2	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	−	にぶい褐	良好	○	○		○		○	○	−
80	584	弥 SI5	②北東	−	大型壺	胴	−	−	ハケナデ	ヘラナデ	1 条突帯	褐	良好	○	○		○	○		○	剥落
80	585	弥 SI5	北東床	6199	鉢	底	−	6.5	ヘラミガキ	ヘラナデ	−	黒，褐灰 にぶい褐	良好	○	○		○		○		底：丁寧なナデ
80	586	弥 SI5	②南西	−	蓋	つまみ	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい赤褐	良好	○			○	○	○		−
83	588	弥 SI6	床直	6213	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい赤褐	良好	○			○	○	○		−
83	589	弥 SI6	床直	6215	甕	脚	−	7.2	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい褐	良好	○	○		○	○			輝石
83	590	弥 SI6	床直	6214	壺	肩〜胴	−	−	丁寧なヘラナデ	ヘラ横ナデ	3 条沈線	褐	良好	○		○	○	○	○		−
85	593	弥 SI7	P1 ①	6330	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	突帯	暗褐 褐	良好	○			○	○			−
85	594	弥 SI7	北東	−	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	黒褐 褐	普通	○			○	○			−

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
85	595	弥 SI7	①南東	−	甕	脚	−	6.6	粗いヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	赤褐	良好	○	○		○				−
86	596	弥 SI7	①，床直/Ⅱc	6188 他	蓋	略完形	30.3	7.0	丁寧なヘラ縦ナデ	丁寧な横ナデ	突帯	にぶい赤褐 にぶい橙	良好	○			○	○	○		スス，器高 17.0
88	598	弥 SI8	②南西	−	甕	口縁	28.5	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	橙	良好	○		○	○	○			−
88	599	弥 SI8	①北東/Ⅱ	2231	甕	口縁	25.6	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	褐灰 橙	良好	○		○	○	○	○	○	−
88	600	弥 SI8	①南西，②北東	3353 他	甕	口縁～胴	23.0	−	ハケ縦ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい橙，黒褐 灰褐	良好	○	○	○	○	○			−
88	601	弥 SI8	①南東	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	橙	普通	○			○	○	○		−
88	602	弥 SI8	①南東	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい橙，黒褐	良好	○		○		○			−
88	603	弥 SI8	①北西	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	赤褐	良好	○		○	○	○		○	−
88	604	弥 SI8	①南西	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい橙	普通	○			○	○	○		−
88	605	弥 SI8	①南西	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい橙	普通	○		○		○	○		−
88	606	弥 SI8	②南東	−	甕	口縁	−	−	−	ヘラ横ナデ	−	橙 赤	普通	○	○	○	○	○			摩耗，剥落，輝石
88	607	弥 SI8	①	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	橙	普通			○	○	○			−
89	608	弥 SI8	①南東，P31，SI7P6④	−	壺	口縁	25.6	−	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	橙，赤灰 明赤褐	良好	○	○		○	○		○	−
89	609	弥 SI8	P33	−	壺	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい橙	良好	○			○	○			−
89	610	弥 SI8	①南東	−	壺	口縁	−	−	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	−	赤褐	良好	○			○	○			−
89	611	弥 SI8	①北西	−	壺	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	灰赤	良好	○	○	○		○	○		−
89	612	弥 SI8	SK1 ①	−	壺	口縁	−	−	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	−	にぶい橙	普通	○	○		○	○			−
89	613	弥 SI8	⑥層，床直，SI4 ①	5916 他	鉢	完形	17.8	9.0	ヘラ横ナデ	丁寧なヘラナデ	−	にぶい橙 にぶい赤褐，暗赤褐	普通	○		○	○	○	○		剥落，スス，器高 12.8
89	614	弥 SI8	①南東	−	蓋	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	突帯	赤褐	良好	○	○	○	○	○	○		−
89	615	弥 SI8	①北東	−	蓋	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	突帯	暗赤褐	普通	○	○	○	○	○			−
89	616	弥 SI8	①北西	−	蓋	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	突帯	にぶい赤褐	良好	○	○	○	○				−
89	617	弥 SI8	①北東	−	蓋	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	突帯，凹線	にぶい黄橙	普通	○	○			○	○		−
92	622	弥 SI9	①	6237	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	橙	普通			○	○	○			−
92	623	弥 SI9	①	6220	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい赤褐	良好	○	○	○	○	○			−
92	624	弥 SI9	上面	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい赤褐	良好	○	○		○	○			−
92	625	弥 SI9	①	6232	壺	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	橙	普通	○			○	○	○		−
92	626	弥 SI9	①	6224 他	壺	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	橙	普通	○		○	○				−
92	627	弥 SI9	①	6234	壺	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい赤褐	普通	○	○		○	○			−
92	628	弥 SI9	①	6255	蓋	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	突帯	明赤褐	普通	○		○	○				−
95	632	弥 SI10	②	6047 他	甕	口縁～胴	26.4	−	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	2条突帯，凹線	にぶい褐	良好	○			○	○			−
95	633	弥 SI10	①，②	6024 他	甕	口縁～胴	27.0	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	1条突帯，凹線，押圧痕	にぶい黄褐 黒褐	良好	○			○	○			−
95	634	弥 SI10	②	6064 他	甕	口縁	−	−	ハケ横・斜ナデ	ヘラ横・斜ナデ	−	褐灰 橙	普通		○	○	○	○			−
95	635	弥 SI10	②	6101	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ縦，斜ナデ	凹線	にぶい赤褐 黒褐	良好			○	○	○			−
95	636	弥 SI10	①	6476	蓋	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	突帯，凹線	−	良好		○	○	○	○			−
95	637	弥 SI10	①	6553	甕	口縁	26.2	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	1条突帯，凹線	にぶい赤褐	良好	○	○		○	○			−
95	638	弥 SI10	①	6023 他	甕	口縁～胴下	22.5	−	ハケ縦・斜ナデ	ヘラ斜ナデ→ナデ	凹線	にぶい赤褐 明赤褐	良好	○		○	○		○		剥落，スス，コゲ，器高 21.1
95	639	弥 SI10	②	6049 他	甕	口縁～胴	23.4	−	ヘラ斜ナデ	ヘラ横・斜ナデ	凹線	橙 にぶい赤褐	良好	○	○	○	○	○			−
95	640	弥 SI10	①	6407	甕	口縁～頸	26.0	−	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	2条突帯	にぶい褐	良好	○	○		○	○			−
95	641	弥 SI10	①	6413	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	明赤褐	普通	○	○		○	○			−
96	642	弥 SI10	①	6541	甕	胴～底	−	8.2	丁寧な縦ナデ	ヘラ横ナデ	無紋	明赤褐	普通	○			○	○			摩耗
96	643	弥 SI10	①，②	6013 他	甕	胴～底	−	7.6	ハケ斜ナデ，ヘラ斜ナデ	ナデ	−	明赤褐 にぶい橙	普通	○	○		○	○			摩耗
96	644	弥 SI10	①，②	6112 他	甕	底	−	7.2	丁寧なヘラ縦ナデ	ナデ	−	にぶい黄褐 灰褐	普通	○		○	○	○			底：面取り
96	645	弥 SI10	②	6110	大型甕	口縁	−	−	丁寧なヘラナデ	丁寧なナデ	1条突帯	黒褐，にぶい橙 にぶい橙	良好	○	○	○	○	○			スス
97	646	弥 SI10	②	6142 他	壺	頸	−	−	丁寧な縦ナデ	丁寧な横ナデ	−	灰白	普通	○	○	○		○	○	○	輝石
97	647	弥 SI10	②	6080 他	壺	胴	−	−	ヘラ横ミガキ	−	M字突帯	にぶい橙	良好	○	○	○		○		○	剥落，丹塗り輝石，胴：23.2
97	648	弥 SI10	①，②	6140 他	壺	胴～底	−	5.8	ミガキ	ヘラナデ	無紋	黒褐 明赤褐	良好	○	○		○				摩耗，剥落，底：丁寧なナデ
97	649	弥 SI10	①	6403	壺	胴	−	−	ミガキ	ミガキ	1条突帯	灰黄褐 明褐	良好	○	○			○			−
97	650	弥 SI10	①	6385	壺	底	−	7.2	丁寧なヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい赤褐 橙	良好	○			○				角閃石
97	651	弥 SI10	②	6063	壺	底	−	−	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい橙 褐灰	普通	○	○				○		角閃石
97	652	弥 SI10	②	6161	蓋	つまみ	−	8.0	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	明褐 黒褐	良好	○	○		○	○			−
97	653	弥 SI10	②	6104	蓋	口～胴	29.0	−	ヘラナデ，面取り	ヘラナデ	−	明赤褐	普通	○	○		○	○			剥落，摩耗，スス
97	654	弥 SI10	②	6090	鉢	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	突帯	にぶい褐	普通	○		○	○	○			補修孔
97	655	弥 SI10	②	6030	鉢	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	橙	良好		○	○					−
97	656	弥 SI10	①	6410	鉢	口縁	−	−	丁寧なナデ	ヘラ横ナデ	1条突帯	暗赤褐	良好	○	○			○			−
98	660	弥 SI11	−	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい赤褐	良好	○	○		○		○		−
98	661	弥 SI11	①	6301	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	−	橙	普通	○	○		○		○		角閃石
98	662	弥 SI11	①	6310	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	赤褐	良好	○	○	○	○				−

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
98	663	弥 SI11	①	6303	甕	口縁	−	−	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	−	暗赤褐 褐灰	良好	○		○	○	○			−
98	664	弥 SI11	−	−	甕	胴	−	−		ハケナデ	3条突帯	にぶい褐	普通	○		○	○				−
98	665	弥 SI11	−	−	壺	肩	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	3条突帯	にぶい橙	普通	○	○		○		○		角閃石
100	666	弥 SI12	①	6272	甕	口縁～胴	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線，3条突帯	橙	良好	○		○	○		○		−
100	667	弥 SI12	P2	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい橙	普通	○	○		○	○	○		−
100	668	弥 SI12	①，SK1 ①	6493 他	甕	口縁	24.0	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	刻目	黒 明褐灰	良好	○		○					輝石
100	669	弥 SI12	①	6293	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	突帯	にぶい赤褐 黒褐	普通	○		○					輝石
100	670	弥 SI12	①	6505	甕	口縁～胴	−	−	粗い縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	灰褐 褐灰	良好	○		○		○			輝石
100	671	弥 SI12	SK1 ①	7358	甕	脚	−	6.0	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	灰褐 黒褐	普通	○		○	○	○			−
100	672	弥 SI12	①，床直	6288 他	小型鉢	口縁～胴	7.8	−	丁寧な縦ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい橙，黒褐 橙	普通	○		○	○				−
101	673	弥 SI12	①	6258 他	大型甕	口縁～胴	45.8	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	1条突帯，凹線	赤褐，赤灰 赤褐	良好	○			○	○	○		ス ス
101	674	弥 SI12	①	6264 他	壺	口縁	23.0	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	明赤褐，黒褐	普通	○	○		○	○			−
101	675	弥 SI12	①	6525	壺	肩	−	−	粗いハケナデ	丁寧なヘラナデ	3条波状文	明赤褐	良好	○		○	○	○			−
103	682	弥 SI13	−	−	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい橙	普通	○	○		○	○			−
103	683	弥 SI13	SK1 ⑤	7751	甕	胴	−	−	ヘラナデ	ヘラ横ナデ	3条突帯	にぶい橙	良好			○	○				角閃石
103	684	弥 SI13	①	7686	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい橙	普通	○		○	○		○		−
103	685	弥 SI13	①	7688	壺	口縁	−	−	丁寧なナデ	丁寧なナデ	−	明褐灰	普通	○				○	○		角閃石
103	686	弥 SI13	−	−	壺	肩	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	2条刻目突帯	にぶい橙 にぶい橙	良好	○		○		○			角閃石
103	687	弥 SI13	②	6228 他	壺	肩	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	2条刻目突帯	にぶい橙，褐灰	良好	○		○		○	○		角閃石
103	688	弥 SI13	床直	7646	甕	肩	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	突帯	橙	普通	○		○	○	○	○		摩耗，角閃石
103	689	弥 SI13	①	7651	壺	肩	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	3条突帯	にぶい橙 灰褐	普通	○		○	○	○			−
105	693	弥 SI14	①	6682	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	橙	普通	○				○			−
105	694	弥 SI14	①	6681	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	褐灰	良好	○			○	○	○		−
105	695	弥 SI14	①	6711	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい橙	良好	○	○	○	○				角閃石
105	696	弥 SI14	①	6676	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい橙	良好	○			○				−
105	697	弥 SI14	①	6673 他	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい褐	良好	○		○	○	○	○		−
105	698	弥 SI14	北西	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい橙	良好	○	○	○	○				−
105	699	弥 SI14	床直	6724	甕	肩	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	3条突帯	灰褐 にぶい褐	普通	○	○		○	○	○		−
105	700	弥 SI14	①	6679	甕	肩	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	3条突帯	橙，赤 橙	良好	○	○		○	○	○		−
105	701	弥 SI14	−	−	甕	口縁	−	−	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	突帯	褐灰 にぶい橙	良好	○	○				○		角閃石
105	702	弥 SI14	①	6668	甕	口縁	−	−	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	突帯	黒褐 にぶい橙	普通	○	○				○		角閃石
105	703	弥 SI14	−	−	壺	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい赤褐	普通	○			○		○		−
105	704	弥 SI14	床直	7383	壺	頸	−	−	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	−	黒 にぶい橙	普通	○	○	○	○	○	○		−
105	705	弥 SI14	①	6672	壺	胴下～底	−	8.4	−	−	−	にぶい橙，にぶい赤褐	普通		○	○	○	○	○		−
105	706	弥 SI14	①	6698	壺	底	−	9.6	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい橙	良好	○			○	○	○		−
105	707	弥 SI14	①	6672	小型壺	口縁	10.0	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい橙	普通	○	○				○		角閃石
105	708	弥 SI14	①	6696	大型甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	突帯，凹線	橙 黒褐	良好	○			○	○	○		−
107	711	弥 SI15	①	7242	甕	口縁～胴	21.6	−	ヘラナデ	ナデ	2条突帯，凹線	黒褐 にぶい赤褐	良好	○	○		○				器高 6.9
107	712	弥 SI15	①	7244	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ナデ	凹線	灰褐 にぶい赤褐	普通	○			○				赤石
108	713	弥 SI15	①，床直	7184 他	壺	頸～胴下	−	−	丁寧なナデ	丁寧なナデ	3条突帯	橙	普通		○	○	○				剥落，ス ス，コゲ，器高 25.2，胴 26.2
110	717	弥 SI16	①	7424	甕	口縁	30.5	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい赤褐	良好	○		○	○	○			ス ス
110	718	弥 SI16	②	7586	甕	口縁	28.4	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	突帯，凹線	にぶい褐 褐	普通	○			○				−
110	719	弥 SI16	①	7408	甕	口縁	24.5	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい褐	普通	○		○	○				−
110	720	弥 SI16	②	7538	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	橙	普通	○		○	○	○			−
110	721	弥 SI16	①	7395	甕	口縁	−	−	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	にぶい赤褐	普通	○		○	○				角閃石
110	722	弥 SI16	①②	7412 他	甕	口縁～胴	32.4	−	丁寧なヘラナデ	ナデ	3条突帯	暗褐 褐	良好	○			○	○			−
110	723	弥 SI16	①	7428	甕	脚	−	9.0	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	明赤褐 黒褐	良好	○		○	○				−
110	724	弥 SI16	①	−	甕	脚	−	8.8	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい黄橙	普通	○		○	○	○	○		−
110	725	弥 SI16	SK2(中央土坑)	−	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラ横ナデ	突帯	にぶい黄橙	普通	○	○	○				○	摩耗，角閃石
110	726	弥 SI16	②	−	甕	口縁	−	−	ヘラ縦ナデ	横ナデ	突帯	橙	普通	○		○	○	○			−
110	727	弥 SI16	②	7540	甕	口縁付近	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	突帯	にぶい黄橙	普通	○		○				○	−
110	728	弥 SI16	①	7512	壺	肩	−	−	丁寧な横ナデ	ナデ	−	暗赤褐 灰黄	良好	○				○			剥落，丹塗り
110	729	弥 SI16	①	7418	蓋	口縁	−	−	縦ミガキ	ヘラ横ナデ	突帯	黒褐 橙	普通	○				○	○		−
110	730	弥 SI16	①	7392	蓋	口縁	−	−	縦ミガキ	横ナデ	−	暗赤褐 黒褐	良好	○		○	○	○			−

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
110	731	弥 SI16	①	7414	鉢	底	−	8.8	ナデ	−	−	橙 黒褐	普通	○				○	○		−
113	738	弥 SI17	②	6843	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	黒褐 灰黄褐	良好	○			○	○			−
113	739	弥 SI17	③	6890	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線，突帯	にぶい褐	良好	○			○	○			−
113	740	弥 SI17	②	6872	甕	口縁～胴	29.4	−	ヘラ横・斜ナデ	ハケ横ナデ	凹線，3条突帯	褐	良好	○	○		○	○			摩耗
113	741	弥 SI17	①	6887	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線，3条突帯	にぶい褐	良好	○			○	○			−
113	742	弥 SI17	①，②	6870 他	甕	口縁～胴	33.6	−	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	凹線，1条突帯	明褐 褐	良好	○		○	○	○			−
113	743	弥 SI17	①	6577	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	暗褐	良好	○			○	○			−
113	744	弥 SI17	①	6560 他	甕	口縁～胴上	34.1	−	ヘラナデ	ヘラナデ	3条突帯，凹線	にぶい橙，赤暗赤褐	普通	○		○	○	○			ススス
113	745	弥 SI17	①	6880	甕	脚	−	5.0	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	暗赤褐 赤黒	良好	○		○	○	○			−
113	746	弥 SI17	②	6858	甕	脚	−	6.4	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい赤褐 赤灰	良好	○		○	○	○	○		−
114	747	弥 SI17	②， 床直	6851 他	壺	口縁	28.7	−	ヘラナデ，ミガキ	ヘラナデ	凹線	暗赤褐 暗褐	良好	○			○	○			剥落
114	748	弥 SI17	②	6863	壺	頸～肩	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	3条突帯	にぶい橙	普通	○			○	○			ススス，肩：37.8
114	749	弥 SI17	①	6589 他	壺	口縁～胴	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ縦・横ナデ	−	橙 にぶい橙	普通	○	○	○	○	○			−
114	750	弥 SI17	②	6846	壺	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	褐	良好	○			○	○			−
114	751	弥 SI17	①	6586	壺	口縁	19.0	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい褐	普通	○			○	○			剥落
114	752	弥 SI17	①	6597	壺	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい褐	普通	○	○		○	○			剥落
114	753	弥 SI17	③	6896 他	鉢	口縁	11.0	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい褐，黒褐	良好	○			○	○		○	−
114	754	弥 SI17	①	6570	高坏	脚	−	−	丁寧なヘラナデ	ヘラケズリ	1条突帯	明赤褐，にぶい黄橙 明赤褐，黒褐	良好	○			○	○			−
114	755	弥 SI17	②	6852	蓋	つまみ	−	4.6	ヘラナデ	ヘラナデ	−	赤	普通	○			○		○		コゲ
116	758	弥 SI18	①	7575	甕	口縁	25.5	−	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	2条突帯，凹線	赤褐，黒褐 赤褐	良好	○			○				ススス
116	759	弥 SI18	②	7569	甕	脚	−	8.0	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	明赤褐 暗赤褐	普通	○			○	○	○		−
116	760	弥 SI18	②	7491	壺	底	−	−	丁寧なナデ	丁寧なナデ	−	灰褐 褐灰	普通	○	○		○	○			−
120	768	弥 SI19	①，②， ③，床直， P1①	7823 他	壺	肩～底	−	9.0	ヘラ縦ナデ，ナデ	ヘラナデ	2条突帯	にぶい赤褐， 赤黒	普通	○			○	○	○		剥落，黒斑，胴：45.0
121	769	弥 SI19	①②， 床直	6736 他	壺	口縁～頸	33.4	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい橙	普通	○		○	○	○			−
121	770	弥 SI19	②	7198 他	壺	口縁～胴	23.0	−	ヘラ縦ナデ	ハケナデ→ヘラナデ	3条突帯，凹線	赤，にぶい橙， 黒褐	良好	○		○	○	○			蟬石
121	771	弥 SI19	②下	7835 他	壺	口縁～頸	19.8	−	ミガキ	ミガキ	−	赤褐 赤褐	良好		○	○	○	○	○		角閃石
122	772	弥 SI19	②	7861 他	壺	胴	−	−	−	−	3条突帯	にぶい黄褐	普通	○				○			剥落，胴 37.8
122	773	弥 SI19	②上， 床直， SK2②	8045 他	壺	口縁	20.4	−	丁寧なヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ縦ナデ	凹線	灰褐 褐灰・黒	良好	○	○			○			−
122	774	弥 SI19	②下	7899	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい赤褐，黒褐 黒褐	良好	○	○		○	○			−
122	775	弥 SI19	P1	8192	甕	脚	−	6.8	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	凹線	灰褐 褐灰	良好	○			○	○			−
122	776	弥 SI19	①	7937	甕	脚	−	7.8	丁寧なヘラ縦ナデ	ヘラナデ	−	にぶい赤褐 黒褐	良好	○			○		○		−
123	777	弥 SI19	①，②	6979 他	大型甕	完形	45.0	8.5	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	凹線，突帯	赤，赤橙 橙，赤，赤黒	良好	○	○		○	○	○	○	ススス，黒斑，器高 46.5
124	778	弥 SI19	①，②	6974 他	甕	口縁～胴	30.0	−	ヘラナデ	ヘラナデ	3条突帯	褐灰	普通	○			○	○			−
124	779	弥 SI19	①，②上/ D48 Ⅱ	6747 他	甕	口縁～胴	30.0	−	−	−	凹線，3条突帯	にぶい橙 橙	普通	○			○	○			風化
124	780	弥 SI19	②上面	7800	甕	口縁～胴	33.0	−	丁寧なナデ	丁寧なナデ	突帯	にぶい橙 赤褐	普通	○	○		○	○	○		−
124	781	弥 SI19	②	6822	大型甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい赤褐 にぶい橙	普通	○		○	○	○			−
124	782	弥 SI19	①	6760	大型甕	口縁～胴	−	−	ヘラナデ	ハケナデ→ヘラナデ	1条突帯，凹線	にぶい赤褐 暗赤褐	良好	○	○	○	○				−
124	783	弥 SI19	①	6753 他	甕	口縁～胴下	26.8	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	4条突帯	赤灰・にぶい橙 明赤褐，赤灰	普通		○	○	○	○	○		摩耗
124	784	弥 SI19	①	6774	甕	口縁	29.5	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい橙	普通	○			○	○	○		−
124	785	弥 SI19	②上	7968	甕	脚	−	7.5	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい橙 黒褐	良好	○		○	○	○			コゲ
124	786	弥 SI19	②上/ D48 Ⅱ層	7730 他	甕	脚	−	8.0	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい橙	普通	○			○	○	○		摩耗
124	787	弥 SI19	①，②上	6786 他	甕	脚	−	7.4	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	にぶい褐 黒褐	普通	○		○	○	○			コゲ
124	788	弥 SI19	①	6958	甕	脚	−	6.2	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	凹線	にぶい赤褐	良好	○		○	○	○			−
124	789	弥 SI19	②上	7919	甕	脚	−	7.2～ 7.5	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	凹線	橙 黒褐	普通	○	○		○	○	○		−
124	790	弥 SI19	②，②上	6809 他	甕	脚	−	6.4	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	にぶい黄橙 黒褐	普通	○			○	○	○		摩耗
124	791	弥 SI19	①	6733	甕	脚	−	8.0	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	凹線	にぶい赤褐	良好	○			○	○	○		−
124	792	弥 SI19	②，②上	6813 他	甕	胴下～胴	−	6.6～ 7.6	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	−	橙 明赤褐，赤灰	普通	○		○	○	○	○		底：木葉痕
125	793	弥 SI19	②上面	6806 他	壺	口縁～肩	22.8	−	ハケ縦・横ナデ，指オサエ	ハケ斜ナデ	凹線，3条突帯	橙 橙，にぶい黄橙	普通	○	○	○	○		○		黒斑，角閃石

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
125	794	弥SI19	①②, D49 Ⅱ	6745他	壺	肩～胴	－	－	ヘラ縦・斜ナデ	ヘラ縦ナデ, 指オサエ	3条突帯, 波状沈線	橙, 黒褐 橙	良好			○	○	○		○	スス, 胴37.8
126	795	弥SI19	①	6746他	壺	底	－	7.0	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	－	赤褐, 黒 赤褐	良好	○	○	○	○	○			－
126	796	弥SI19	②上	7970	壺	底	－	10.5	ヘラナデ	ヘラナデ	－	赤	普通	○	○		○	○	○		摩耗
126	797	弥SI19	①	6762	壺	底	－	4.8～5.1	ヘラナデ	ヘラナデ	－	にぶい橙 褐灰	普通	○			○	○	○		－
125	798	弥SI19	②	7223	壺	底	－	7.8	ヘラナデ	ヘラナデ	－	赤褐 にぶい赤褐	普通	○			○	○	○		－
126	799	弥SI19	②	7739他	壺	口縁～肩	26.0	－	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	凹線, 3条突帯	にぶい橙	良好	○	○	○	○	○	○		－
126	800	弥SI19	②	6728他	壺	肩～胴	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	2条突帯	明赤褐	良好	○	○	○	○	○	○		胴：48.0
127	801	弥SI19	①, ②上下	6781他	大型壺	底	－	9.0	ハケ横ナデ, ヘラ縦ナデ	ハケ横ナデ	－	にぶい橙, 赤褐, 赤黒 にぶい橙・赤褐	良好	○			○	○		○	○	－
127	802	弥SI19	②上	7802他	大型壺	底～胴	44.5～46.0	9.0	－	－	－	赤, にぶい橙, 褐灰 にぶい橙	普通	○	○			○	○	○	○	剥落, 黒斑, 角閃石
127	803	弥SI19	②下	8122	大型壺	底	－	9.5	ヘラナデ	ヘラナデ	－	にぶい赤褐 にぶい橙	良好	○			○	○	○			摩耗
127	804	弥SI19	①②	7205他	大型壺	口縁～肩	30.6	－	ハケ縦ナデ, 横ナデ	丁寧な横ナデ	1条沈線	にぶい橙, 赤 にぶい橙	良好	○			○	○	○		○	－
128	805	弥SI19	②	8049他	無頸壺	口縁～底	14.5	7.1	－	－	凹線, 穿孔2個	にぶい黄橙, 灰黄褐 にぶい褐	普通	○			○	○			風化, 器高18.0
128	806	弥SI19	①	6752	鉢	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	－	灰褐	良好	○	○		○		○		－
128	807	弥SI19	①	6966	鉢	底	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	沈線	にぶい橙 にぶい黄橙	普通	○				○			角閃石
128	808	弥SI19	①/ D48 Ⅱ	7039	鉢	完形	25.5	9.5	ヘラ縦ナデ	ヘラ斜ナデ	二叉状口縁, 刻目突帯	赤 暗赤灰, にぶい橙, 黒褐	普通	○	○		○	○			器高17.6
128	809	弥SI19	①	7933	壺	底	－	11.0	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	にぶい赤褐 にぶい橙	普通	○	○	○	○	○			－
130	817	弥SI20	①	7316他	甕	口縁～胴上	30.0	－	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線, 2条突帯	にぶい橙	良好	○		○	○	○			－
130	818	弥SI20	①	7306	甕	口縁～胴上	20.5	－	ハケ縦ナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい赤褐	良好			○	○	○	○		－
130	819	弥SI20	①	7305	甕	口縁	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	赤褐	普通	○		○	○				－
130	820	弥SI20	北西	－	壺	口縁	－	－	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	－	－	普通	○	○	○	○				－
130	821	弥SI20	①	7322	壺	口縁	－	－	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	－	暗赤褐 明赤褐	普通	○	○	○	○				－
130	822	弥SI20	①南西	－	壺	口縁	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	暗赤褐	普通	○		○	○				－
130	823	弥SI20	床直	7329	壺	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい橙	普通	○	○		○		○		－
130	824	弥SI20	①	7324	壺	口縁	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	明赤褐	普通	○		○	○	○			－
130	825	弥SI20	①	7308	壺	口縁	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい橙, 灰赤	良好	○		○	○				－
133	826	弥SI21	①	10319	甕	口縁	31.1	－	横ナデ	ヘラナデ	凹線, 2条突帯	にぶい褐, にぶい橙 にぶい褐, 褐灰	普通	○	○	○	○	○		○	スス
133	827	弥SI21	①	10362	甕	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	橙	普通	○	○		○	○		○	スス
133	828	弥SI21	－	－	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	－	にぶい橙, 灰黄褐	普通	○	○	○	○	○			摩耗
133	829	弥SI21	①	－	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ→ヘラ横ナデ	凹線	にぶい赤褐 褐灰	普通	○	○	○	○	○	○		スス
133	830	弥SI21	①	10323	甕	口縁	－	－	ヘラ縦ナデ→横ナデ	ヘラ横ナデ	－	にぶい褐 にぶい橙	普通		○	○	○	○	○		－
133	831	弥SI21	－	－	甕	口縁	21.0	－	横・斜ナデ	横ナデ, ヘラナデ	－	にぶい橙, 灰褐 にぶい橙, にぶい褐	普通		○	○	○	○	○	○	－
133	832	弥SI21	－	－	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	－	にぶい黄橙, 黒褐 にぶい橙	普通	○	○	○	○	○		○	－
133	833	弥SI21	P1①	－	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	－	橙, 暗褐	普通	○	○		○	○	○	○	－
133	834	弥SI21	①	10317	甕	底(脚)	－	7.4	ヘラ縦・横ナデ, 横ナデ	－	－	にぶい橙	普通	○	○	○	○	○	○		－
133	835	弥SI21	－	－	大型甕	胴	－	－	横ナデ, ヘラ斜ナデ	横ナデ	突帯	にぶい橙	普通	○	○		○	○			－
133	836	弥SI21	①	10357	壺	口縁	－	－	ミガキ, ヘラナデ	横ナデ	－	にぶい赤褐 にぶい褐	普通		○	○	○	○		○	－
136	848	弥SI22	P1①	－	蓋	口縁	－	－	ヘラ縦・横ナデ	ヘラ横ナデ	－	にぶい赤褐, 褐灰 にぶい赤褐	普通	○	○		○	○			－
137	850	弥SI23	①	－	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	－	灰褐 にぶい赤褐	普通			○	○	○		○	－
138	851	弥SI24·31	①	15196他	甕	口縁～胴	25.0	－	横ナデ	横ナデ, ヘラ斜ナデ	凹線	橙 にぶい赤褐	普通	○			○	○	○		摩耗, 赤石
138	852	弥SI24	①	15520他	甕	口縁	－	－	横・斜ナデ	ヘラ斜ナデ, 横ナデ	3条沈線	にぶい橙 橙	良好	○	○		○	○			－
138	853	弥SI24	①	15192	甕	胴	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	2条沈線	灰黄褐, 褐灰	普通		○	○	○	○		○	－
140	854	弥SI25	①	15793	甕	口縁～胴	26.9	－	横ナデ, ヘラ斜ナデ	ヘラ横ナデ, 横ナデ	凹線, 3条突帯	にぶい橙	普通	○		○	○	○	○		スス
140	855	弥SI25	②	15557	甕	口縁～胴	－	－	横ナデ, ヘラ斜ナデ	横ナデ, ヘラ斜ナデ	凹線	黒褐 灰褐	普通	○	○	○	○	○			－
140	856	弥SI25	②	15534	甕	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	－	灰褐, にぶい橙 にぶい橙	普通	○			○	○	○		○	－
140	857	弥SI25	②	15546	甕	頸	－	－	ヘラ横ナデ	横ナデ	3条沈線	にぶい赤褐 にぶい褐	普通			○	○	○	○		－
140	858	弥SI25	①, ②	15548	甕	脚	－	－	縦ナデ	縦ナデ	－	にぶい赤褐	普通			○	○	○	○		摩耗
140	859	弥SI25	①～④	15526他	壺	頸～胴	－	－	ヘラナデ, 丁寧なミガキ	丁寧なヘラナデ	2条沈線, 櫛描状文	暗赤褐, 黒褐 赤褐	普通	○			○	○	○	○	スス, 胴：27.0
140	860	弥SI25	②	15554	蓋	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい褐	普通			○	○	○	○	○	スス
144	863	弥SI26	①	16053他	甕	口縁～胴	28.0	－	ヘラ縦・横ナデ	ヘラナデ, ミガキ	2条突帯	褐, 黒褐 褐	良好	○			○	○		○	－
144	864	弥SI26	①	16078	甕	口縁～胴	27.3	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線, 3条突帯	橙, にぶい橙 橙, にぶい褐	普通	○		○	○	○	○		摩耗, スス
144	865	弥SI26	①	12856他	甕	口縁～胴	29.2	－	丁寧なヘラ縦・横ナデ	横ナデ, 指オサエ	凹線, 4条突帯	灰褐 にぶい赤褐	普通		○	○	○	○	○		スス

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
144	866	弥SI26	①，②，P10①	12770他	甕	口縁～胴	25.4	－	横ナデ，ハケ斜ナデ	横ナデ，ハケ横・斜ナデ	凹線，２条沈線	にぶい赤褐，明赤褐	普通	○		○	○	○	○	○	黒斑
144	867	弥SI26	①，②	12850他	甕	口縁～胴	24.8	－	横ナデ，ハケ斜ナデ	横・斜ナデ，ハケ斜ナデ	穿孔	橙	普通	○			○	○	○		ススa
144	868	弥SI26	①，②	12798他	甕	脚	－	7.2	横ナデ，ハケ縦・斜ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい褐 黒褐	普通	○			○	○			種子圧痕
145	869	弥SI26	①，②，P10①	12843他	甕	口縁～胴	30.6	－	横ナデ，ハケ斜ナデ	ハケ斜ナデ	２条突帯，沈線	にぶい橙 にぶい褐	普通	○	○		○	○		○	ススa
145	870	弥SI26・G43	①，②，Ⅱb	12794他	甕	口縁	21.0	－	横ナデ，ヘラ斜ナデ	横ナデ，ヘラ斜ナデ	凹線	にぶい黄褐，黒褐 橙，にぶい赤褐	普通	○	○		○	○	○		ススa
145	871	弥SI26	②	12848	甕	口縁	－	－	横ナデ	指オサエ→横ナデ	突帯	にぶい褐 にぶい橙	普通	○		○	○	○	○	○	ススa
145	872	弥SI26	②	12831	甕	口縁	26.0	－	縦・横ナデ	横ナデ	凹線，３条突帯	灰褐 にぶい橙	普通	○	○		○	○		○	－
145	873	弥SI26	②	12818	甕	口縁	22.6	－	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	黒褐 にぶい橙	普通	○	○		○		○		－
145	874	弥SI29・42	①	15019	甕	口縁	－	－	横ナデ	横，斜ナデ	凹線	灰褐 赤灰	普通			○	○	○	○		－
145	875	弥SI26	－	P14他	甕	口縁～胴下	26.0	－	丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	凹線，３条突帯	暗赤 赤褐	良好	○		○	○	○	○		－
145	876	弥SI26	①	12787他	甕	口縁	23.8	－	縦・横ナデ	指オサエ，斜ナデ	２条突帯，穿孔	にぶい赤褐	普通	○			○	○	○	○	－
146	877	弥SI26	①	14311他	甕	口縁	34.5	－	横ナデ，ハケ縦ナデ	横ミガキ，横ナデ，ヘラ横ナデ	凹線	にぶい赤褐	良好	○		○	○	○		○	－
146	878	弥SI26	①，②，Ⅱb	12819他	甕	口縁	19.9	－	ハケ縦ナデ，斜，横ナデ	横ナデ，縦ミガキ	１条突帯	黒褐 にぶい橙	普通	○			○		○		赤石
146	879	弥SI26	②	12834	甕	口縁	－	－	横・斜ナデ	横ナデ	－	灰褐 にぶい褐	普通	○	○		○		○		－
146	880	弥SI26	①	14999	甕	口縁	－	7.2	ヘラ斜ナデ，横ナデ	ヘラ横ナデ，横ナデ	－	黒褐 にぶい橙	普通	○			○	○			赤石
146	881	G・H43	Ⅱb	11856他	甕	口縁～胴	25.6	－	丁寧なハケナデ	丁寧なハケナデ	凹線，１条突帯	橙 にぶい橙	良好	○	○		○	○	○		
146	882	弥SI26	①	14994他	壺	口縁	－	－	横ナデ	－	－	にぶい赤褐 －	普通	○		○	○	○			－
146	883	弥SI26	②	12830	甕	脚	－	7.3	ヘラ縦ナデ，横ナデ	－	－	にぶい黄橙 にぶい褐	普通	○			○	○		○	底：ナデ，指オサエ
146	884	弥SI26	P2①	－	甕	脚	－	5.1	縦ヘラナデ	ナデ	－	にぶい赤褐 褐灰	普通	○	○		○	○			－
146	885	弥SI26	②	12839	甕	脚	－	6.1	横ナデ	－	－	にぶい赤褐	普通	○			○	○			底：ナデ
146	886	弥SI26	①	14995	甕	脚	－	5.8	縦ナデ，縦ミガキ	横ナデ	－	にぶい赤褐 褐灰	普通	○			○	○		○	赤石，底：ナデ
146	887	弥SI26・H43	①，Ⅱb	11863他	甕	脚	－	7.1	縦ミガキ	横ナデ	－	にぶい赤褐 灰褐	普通				○	○	○	○	ススa
146	888	弥SI26	①	14983	甕	脚	－	7.4	丁寧なナデ	丁寧なナデ	凹線	にぶい橙	普通		○		○	○	○	○	－
146	889	弥SI26	①	15002	甕	脚	－	7.3	ヘラ縦・横ナデ	縦・斜ナデ	－	にぶい橙 黒褐	普通				○	○		○	底：ヘラナデ
146	890	弥SI26	①	15016	甕	脚	－	6.8	ヘラ縦ナデ，横ナデ	－	－	にぶい橙	普通	○			○	○		○	赤石，底：ナデ
146	891	弥SI26	①	15015	甕	脚	－	7.2	縦ミガキ，横ナデ	ヘラナデ	－	橙 黒褐	普通	○			○	○	○		－
146	892	弥SI26	①	14988	壺	口縁	42.8	－	横ナデ	横ナデ	－	にぶい赤褐	普通	○		○	○	○			赤石
146	893	弥SI26	②	12864	壺	口縁	－	6.6	ナデ	横ナデ	凹線	にぶい赤褐	普通	○			○	○		○	－
146	894	弥SI26	－	－	壺	口縁	13.0	－	横ナデ	横ナデ→横ミガキ	－	にぶい褐	普通					○	○	○	－
146	895	弥SI26	①	－	壺	底	－	－	ナデ	－	－	灰褐 橙	普通	○		○	○	○	○	○	剥落
146	896	弥SI26	①	14996	蓋	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	－	褐灰 灰褐	普通	○		○	○	○			－
146	897	弥SI26	①	15010	蓋	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	－	にぶい橙	普通	○			○	○			－
146	898	弥SI26	①	14980他	鉢	口縁	－	－	縦ミガキ	横・斜ミガキ	－	黒褐	普通	○			○	○			－
146	899	弥SI26	①	15127	鉢	口縁	－	－	縦ナデ→斜ナデ	指オサエ	－	にぶい赤褐	普通	○			○	○		○	赤石
146	900	弥SI26・28	①	15027他	鉢	脚	－	4.6～3.9	縦・斜ミガキ，縦ナデ	ナデ	－	にぶい赤褐，褐灰 にぶい赤褐	普通	○			○	○	○		底：ナデ
146	901	弥SI26	①	16059	高坏	脚	－	10.7	－	－	－	橙	普通	○				○		○	摩耗
148	909	弥SI27	①	15622	甕	口縁～胴	15.2	－	ヘラナデ，指オサエ	ヘラナデ，指オサエ	－	にぶい褐 にぶい橙，褐	普通		○	○	○	○			－
148	910	弥SI27	①	12759	甕	口縁	29.1	－	横ナデ	－	凹線，穿孔	暗赤褐 にぶい赤褐	普通		○	○	○	○		○	－
148	911	弥SI27	①	12760	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	凹線	橙	普通	○	○		○	○		○	－
150	912	弥SI28	SK1①	15571	甕	口縁	24.0	－	横ナデ，丁寧なヘラ縦ナデ	横ナデ，丁寧なヘラナデ	凹線，３条突帯	にぶい褐，黒褐 にぶい黄橙，にぶい赤褐	普通		○	○	○	○	○	○	ススa
150	913	弥SI28	②	13468	甕	口縁	－	－	粗い横ナデ	横ナデ	凹線	灰褐 にぶい褐	普通	○	○	○		○			－
150	914	弥SI28	②	13451	甕	頸	－	－	横ナデ，ヘラ斜ナデ	斜ナデ	２条突帯	にぶい赤褐 にぶい赤褐	普通	○		○	○	○			－
150	915	弥SI26・28	①，②	12782他	甕	脚	－	7.3	ヘラ縦ナデ，横・斜ナデ	－	－	にぶい橙 黒褐	普通			○	○	○	○		－
150	916	弥SI28	②	13500	甕	脚	－	7.7	ヘラ縦ナデ，縦ミガキ	－	－	にぶい赤褐	普通	○		○	○	○			コゲ，底：ミガキ，白土
150	917	弥SI28	①	13426	甕	脚	－	7.0～6.4	－	ナデ	－	にぶい褐 黒褐	普通	○		○	○	○	○		摩耗，赤石
150	918	弥SI28	①	15573	壺	肩	－	－	横ナデ	ナデ	３条突帯	黄灰 にぶい赤褐	普通	○			○	○	○		剥落
152	923	弥SI29	①	15595	甕	口縁	－	－	横ナデ	横，斜ナデ	突帯	明赤褐 にぶい橙	普通	○		○	○	○	○		－

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
152	924	弥SI29	−	−	甕	胴	−	−	横ナデ	横ナデ	M字状突帯	にぶい橙	普通	○				○	○	○	摩耗
152	925	弥SI29	−	−	甕	脚	−	−	−	−	刻目	橙 灰黄	普通	○				○	○	○	摩耗
155	927	弥SI30	−	−	甕	口縁	−	−	縦ナデ	横ナデ	−	にぶい橙	普通			○	○	○	○		−
155	928	弥SI31	①	13773	甕	口縁	−	−	ミガキ，ナデ	横ナデ	−	にぶい橙	普通	○	○	○		○		○	−
155	929	弥SI32	①	13786	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	橙	普通	○	○		○	○	○		−
155	930	弥SI33	①	13785 他	甕	口縁	36.4	−	ヘラ横ナデ	横ナデ	凹線，2条突帯	にぶい橙	普通		○	○	○	○	○		−
155	931	弥SI34	−	13772 他	壺	口縁～底	14.0	6.0	ヘラ縦ナデ，縦ミガキ	丁寧なナデ	−	にぶい橙 にぶい赤褐，暗赤褐	普通	○		○	○	○	○		剥落，スス，種子圧痕器高32.0
155	932	弥SI26･30	①	13779 他	壺	口縁	15.5	−	縦ミガキ	横ナデ，ヘラ横ナデ	凹線，5条沈線	にぶい橙	普通	○	○		○	○	○		−
157	934	弥SI31	②	14656 他	甕	口縁	34.7	−	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい橙 橙	普通		○	○	○	○	○	○	−
157	935	弥SI31	①，②	14673 他	甕	口縁	35.3	−	ヘラ横ナデ	ヘラナデ	−	にぶい橙	普通	○			○	○	○		−
157	936	弥SI31	①，②	14643 他	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	−	橙	普通			○	○	○	○		−
157	937	弥SI31	②	14676	大型甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	−	橙 にぶい橙	普通			○	○	○	○		−
157	938	弥SI31	②	14680	甕	口縁～胴	−	−	ハケ縦ナデ→横ナデ	ヘラ斜ナデ→横ナデ	凹線	にぶい赤褐 にぶい赤褐，灰褐	良好		○	○	○	○			−
157	939	弥SI31	②	14661	甕	口縁	−	−	横ナデ	横･斜ナデ	凹線	にぶい橙 にぶい赤褐	普通		○		○	○	○		−
157	940	弥SI31	①	14629 他	大型甕	口縁	47.6	−	横ナデ	横ナデ	−	橙	普通	○		○	○	○			−
157	941	弥SI31	①	14614	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい褐 にぶい赤褐	普通				○	○	○		赤石
157	942	弥SI31	①	14628	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい橙	普通			○	○	○	○	○	−
157	943	弥SI31	①	14642	甕	口縁	−	−	ナデ	ナデ	2条渦巻突帯	橙	普通	○	○		○	○		○	−
157	944	弥SI31	②	14662	甕	脚	−	8.3	ハケ縦･斜ナデ，横ナデ	−	−	にぶい橙	普通			○	○	○	○	○	−
158	945	弥SI31	②	15151	壺	口縁	−	−	ヘラ縦ナデ→横ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい赤褐	普通	○	○		○	○	○		−
158	946	弥SI31	−	−	壺	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	沈線	灰褐 褐灰	普通		○	○	○	○			−
158	947	弥SI31	−	−	壺	底	−	5.0	ヘラナデ	ヘラナデ，ナデ	−	にぶい橙，浅黄橙 褐灰	普通			○		○	○		摩耗
158	948	弥SI31	②	14672	蓋	口縁	−	−	ハケ縦ナデ，横ナデ	横ナデ	凹線，1条突帯	にぶい赤褐	普通	○	○		○	○	○		−
158	949	弥SI31	①	15592	円盤状土製品	甕の胴	−	−	横ナデ	ナデ	2条突帯	灰褐 にぶい褐	良好	○		○	○	○		○	（長さ×幅×厚）4.5×4.6×0.8
159	954	弥SI32	①	13171	甕	口縁	−	−	ナデ	ナデ	凹線	にぶい橙	普通		○	○	○	○	○		−
159	955	弥SI32	①	13175	甕	脚	−	7.8	ハケ縦ナデ，横ナデ	ハケナデ	凹線	にぶい褐 灰褐	普通		○	○	○	○	○		−
159	956	弥SI32	①	13170	壺	肩	−	−	ナデ	ミガキ	3条突帯	にぶい橙	普通	○			○	○		○	−
159	957	弥SI32	①	−	高坏	脚	−	−	ナデ	ナデ	−	にぶい橙	普通	○	○		○	○	○		黒斑
163	958	弥SI33	①，床直	16632 他	甕	口縁～底（完形）	29.7	8.3	ハケ縦ナデ	ハケ横ナデ，ヘラ縦ナデ	凹線，3条突帯	赤	普通	○	○	○	○	○			剥落，スス，底：丁寧なナデ，器高28.1
163	959	弥SI33	①	16979	甕	口縁	−	−	横ナデ	−	−	橙	普通	○	○		○				−
163	960	弥SI33	①	16978	甕	脚	−	7.8	横ナデ→ヘラ縦ナデ	ヘラナデ→ナデ	凹線	にぶい橙 灰褐	普通	○		○	○	○			磨滅
163	961	弥SI33	②	15425 他	甕	口縁	30.8	−	横ナデ	指オサエ，横ナデ	凹線	にぶい橙 明褐	普通	○	○		○	○			−
163	962	弥SI33	①，②	16432 他	甕	口縁～胴下	16.7	−	縦ナデ，ヘラ横ナデ	ハケ横ナデ	−	にぶい橙 赤	普通	○	○		○		○		ススス
163	963	弥SI33	②	16626	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	褐 にぶい褐	普通	○	○		○	○			−
163	964	弥SI33	②	15317	甕	口縁	−	−	ナデ	横ナデ	凹線	にぶい褐	普通	○			○	○			−
163	965	弥SI33	①，②	13197 他	甕	口縁～胴	30.2	−	横ナデ，ヘラ縦ナデ	横･斜ナデ	凹線，3条突帯	黒褐 にぶい赤褐	普通	○		○	○	○			ススス，赤石
163	966	弥SI33	−	15276 他	甕	口縁～胴	26.0	−	ヘラナデ	ヘラ縦ナデ	凹線，3条突帯	明赤褐 橙	良好	○			○	○	○		−
163	967	弥SI33	①，②	15279 他	小型甕	口縁～胴	18.8	−	−	−	凹線	にぶい褐	普通	○			○	○			摩耗，赤石
163	968	弥SI33	①，②	15449 他	甕	脚	−	8.5	ハケ縦ナデ	−	凹線	にぶい橙 灰黄褐	普通	○		○	○	○	○		摩耗
163	969	弥SI33	②	15383	甕	脚	−	7.4	横ナデ→ヘラ縦ナデ	ナデ	−	にぶい橙	普通	○		○	○	○		○	底：ミガキ
163	970	弥SI33	②	16395	甕	脚	−	9.0	横ナデ	−	−	にぶい橙	普通	○		○	○	○	○		−
164	971	弥SI33	①	16583 他	甕	口縁～底	33.3	8.0	ヘラ縦ナデ，横ナデ	ヘラ縦･横ナデ	凹線，3条突帯	明赤褐	普通			○	○	○	○		摩耗，スス，器高：28.8
164	972	弥SI33	①	15477	甕	口縁	−	−	横ナデ	ヘラ横ナデ	−	褐	普通	○	○		○	○			−
164	973	弥SI33	①	−	甕	口縁～頸	30.8	−	ハケ縦ナデ→横ナデ	ハケ横ナデ	凹線，沈線	褐 にぶい褐	普通	○			○	○		○	−
164	974	弥SI33	①	16390 他	甕	口縁	33.0	−	ハケ横ナデ	ハケ横ナデ	凹線，3条突帯	橙，灰褐 橙	普通	○	○		○	○	○	○	ススス
164	975	弥SI33	①	16404	甕	口縁	30.4	−	横ナデ	斜ナデ	凹線，1条突帯	にぶい橙	普通	○			○	○	○	○	−
164	976	弥SI33	①	16406	甕	口縁～胴	−	−	横ナデ	横ナデ，ヘラ斜ナデ	凹線，2条突帯	灰褐 褐	普通	○			○	○			ススス，赤石
165	977	弥SI33	①	13198 他	甕	口縁	37.6	−	横ナデ	横ナデ	凹線，2条突帯	にぶい赤褐 にぶい橙	普通	○			○	○	○	○	ススス，赤石
165	978	弥SI33	①	16415 他	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい褐	普通	○	○		○	○		○	−
165	979	弥SI33	①	13240	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	褐 灰褐	普通	○	○		○	○			−
165	980	弥SI33	①	16798	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	暗褐 明褐	普通	○	○		○	○			−

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
165	981	弥SI33	①	16591	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	褐	普通	○	○		○	○			−
165	982	弥SI33	①	16390	甕	口縁	23.8	−	横ナデ	横ナデ	凹線，2条突帯	橙	普通	○			○	○		○	−
165	983	弥SI33	①	13190他	甕	口縁	25.8	−	ヘラ横・斜ナデ，指オサエ	横ナデ，ヘラ斜ナデ	1条突帯	にぶい褐	普通	○			○	○			−
165	984	弥SI33	①	15285他	甕	脚	−	8.7	ハケ縦ナデ，面取り	ヘラナデ	−	にぶい黄橙灰黄褐	普通		○	○	○	○	○		−
165	985	弥SI33	①	13241他	甕	脚	−	8.6	ヘラ縦ナデ，横ナデ，面取り	ヘラナデ	−	にぶい橙灰褐	普通		○		○	○	○		摩耗，赤石
165	986	弥SI33	①	16417	甕	脚	−	7.5	縦・横ナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい橙黒褐	普通		○	○	○	○	○		剥落，底：ナデ
165	987	弥SI33	①	16392	大型甕	胴	−	−	ハケ横ナデ	ハケ横ナデ，縦ミガキ	突帯	にぶい橙にぶい赤褐	普通	○		○	○	○			スス
166	988	弥SI33	①・②・床直	13242他	大型壺	口縁～胴	32.0	−	ミガキ，ハケ縦ナデ	ミガキ，ナデ	凹線，突帯	赤，赤黒	良好		○	○	○	○	○		剥落
166	989	弥SI33	①・②・床直	13242他	大型壺	底	−	8.0	ナデ	−	−	赤，赤黒	良好		○	○	○	○	○		
166	990	弥SI33	②	15331他	壺	口縁	22.0	−	丁寧な横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	明褐	普通	○	○		○	○		○	−
166	991	弥SI33	②	15405	壺	口縁	−	−	横ナデ，ハケ縦ナデ	−	凹線	灰褐褐	普通	○			○				赤石
166	992	弥SI33	−	16988	壺	頸～肩	−	−	横ナデ，ヘラ斜ナデ	斜ナデ	1条突帯	黒褐明褐	普通	○	○		○	○			−
166	993	弥SI33	①	16419	壺	口縁	22.2	−	横ナデ	横ナデ	−	明褐	普通	○	○		○	○			−
166	994	弥SI33	①	16726	壺	口縁	9.2	−	横ナデ	横ナデ	−	褐	普通	○			○	○			−
166	995	弥SI33	①，②	16385他	壺	口縁	33.8	−	ヘラ横ナデ	横ナデ	凹線	明褐	普通	○	○		○	○			−
166	996	弥SI33	①	16386	壺	口縁	14.0	−	横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	褐明褐	普通	○	○		○	○			−
166	997	弥SI33	−	−	壺	肩	−	−	横ナデ	横ナデ	2条突帯	黒褐明褐	普通	○	○		○	○			−
166	998	弥SI33	①	13235	壺	肩	−	−	−	ヘラ縦ナデ	4条突帯	黒褐明褐	普通	○			○	○			赤石
166	999	弥SI33	①	13271	壺	口縁	18.0	−	ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	沈線，暗文	橙	普通	○	○		○		○		角閃石
166	1000	弥SI33	①	16380	壺	肩	−	−	丁寧な斜ナデ	丁寧な横・斜ナデ	櫛描波状文	明褐	普通	○			○	○		○	赤石
166	1001	弥SI33	①	15360	壺	底	−	11.0	ヘラ横ナデ	丁寧なミガキ	−	暗灰黄黄灰	普通	○		○	○	○	○		摩耗
166	1002	弥SI33	①	15297	壺	底	−	12.0	ヘラ縦ナデ	指オサエ，横ナデ	−	明褐にぶい褐	普通	○			○	○			赤石
166	1003	弥SI33	①	16394	蓋	つまみ	−	5.0	ハケ縦ナデ，横ナデ	−	−	にぶい橙橙	普通		○	○	○	○		○	−
166	1004	弥SI33	①	16420	蓋	つまみ	−	4.1	斜ナデ	ナデ	−	にぶい黄橙にぶい褐	普通		○		○	○	○		−
166	1005	弥SI33	①	16425	蓋	つまみ	−	−	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	にぶい橙	普通	○	○		○	○		○	−
166	1006	弥SI33	①	16912	蓋	口縁	−	−	横ナデ，ハケ縦ナデ	横ナデ	凹線，1条突帯	暗褐にぶい黄褐	普通	○			○	○			赤石
166	1007	弥SI33	①	15298	蓋	口縁	−	−	横ナデ→ハケ縦ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	明褐	普通	○			○	○		○	−
166	1008	弥SI33	床	15398	鉢	口縁	−	−	横ナデ	−	凹線	橙	普通	○	○		○	○		○	−
166	1009	弥SI33	①	16389	鉢	口縁～底	11.2	7.5	ハケ縦ナデ，横・斜ナデ，面取り	ナデ，ヘラ斜ナデ	凹線，刻目	にぶい赤褐	普通	○		○	○	○			スス，底：ナデ，指オサエ，器高12.2
166	1010	弥SI33	①	13252他	高坏	脚	−	−	ヘラ横ナデ	−	−	褐明褐	普通	○				○		○	剥落
167	1011	弥SI33	①	15475	土製勾玉	−	−	−	ミガキ	−	沈線，穿孔	明赤褐にぶい橙	普通							○	（長さ×幅×厚）3.7×2.3×1.4
167	1012	弥SI33	①	15304	土製勾玉	−	−	−	ミガキ	−	穿孔	にぶい橙	普通	○				○		○	（長さ×幅×厚）2.7×2.4×1.4
167	1013	弥SI33	②	15418	土製勾玉	−	−	−	ミガキ	−	−	赤褐灰	普通	○						○	丹塗り，厚さ1.0
169	1030	弥SI34	−	−	甕	口縁	−	−	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	凹線	橙にぶい橙	普通	○	○		○	○			−
170	1031	弥SI35	①	13165	甕	胴	−	−	横ナデ	−	突帯	灰褐褐灰	普通		○			○		○	スス
170	1032	弥SI35	①	14574	壺	底	−	5.8	横ミガキ，横ナデ	ナデ	−	にぶい橙灰黄褐	普通	○		○	○	○			−
171	1033	弥SI36	①	29410他	甕	口縁	21.0	−	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	凹線，3条突帯	橙−	良好			○	○	○		○	スス
171	1034	弥SI36	①	29473	甕	口縁	−	−	ハケ縦ナデ，横ナデ	ヘラ斜ナデ，横ナデ	凹線，2条突帯	橙，にぶい橙にぶい橙	普通	○	○	○	○	○			−
171	1035	弥SI36	①	29412	甕	口縁	−	−	横ナデ，ハケ縦ナデ	横・斜ナデ	凹線	褐−	普通			○	○	○	○		スス
172	1036	弥SI37	①	29493	甕	口縁	−	−	横ナデ	−	−	にぶい褐，にぶい橙−	普通		○	○	○	○	○		−
172	1037	弥SI37	①	29492	甕	口縁	−	−	横ナデ	−	凹線	にぶい橙，灰褐−	普通	○	○		○	○	○		−
172	1038	弥SI37	①	29489	甕	口縁	−	−	横ナデ	−	凹線	黒褐，黒−	普通			○	○	○	○		−
172	1039	弥SI37	①	29491	甕	胴	−	−	横ナデ	横ナデ	3条突帯	にぶい赤褐，黒にぶい褐	普通	○	○		○	○	○		−
172	1040	弥SI37	①	−	壺	肩	−	−	横ミガキ，斜ナデ	−	2条沈線	にぶい橙−	普通	○	○		○	○	○		−
174	1042	弥SI38	①，④	25440他	甕	口縁～底	30.4	8.6	ハケ縦・横ナデ	ヘラ縦・横ナデ，指オサエ	凹線，3条突帯	明赤褐	普通	○			○	○	○		スス，コゲ，器高33.4
174	1043	弥SI38	①	25437他	甕	口縁～胴	16.5	−	ハケ縦ナデ，横ナデ	丁寧な横・斜ナデ	−	にぶい褐灰褐	普通		○		○	○	○		スス

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外 内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
174	1044	弥SI38	①	29496	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	橙 −	普通	○		○	○	○	○	○	−
174	1045	弥SI38	①	25414他	甕	口縁	41.0	−	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい褐 橙	普通	○		○	○	○		○	−
176	1046	弥SI39	①	−	小型甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい褐 褐灰	普通		○	○	○	○			−
176	1047	弥SI39・J38	①，Ⅱb	23035他	甕	口縁	22.5	−	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	−	−	普通		○	○	○	○	○		−
176	1048	弥SI39	①	29823	壺	肩	−	−	−	−	3条突帯	橙 −	普通			○	○	○	○		摩耗
179	1049	弥SI40	①	33229	小型甕	完形	12.4	5.0	横ナデ，ハケ縦ナデ	横ナデ，指オサエ	凹線，1条突帯	暗赤灰	良好	○	○	○	○	○			器高12.7
179	1050	弥SI40	③	31428他	甕	口縁～底	24.0	9.5	丁寧な縦ミガキ	丁寧な縦・横ミガキ	凹線，1条突帯	浅黄橙，にぶい橙 灰褐，黒	良好	○	○		○	○		○	スス，器高18.7
179	1051	弥SI40	③	33052他	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線，1条突帯	黒褐 にぶい黄褐	普通	○	○		○	○			−
179	1052	弥SI40	③	33056	甕	口唇	−	−	横ナデ	ヘラ斜ナデ	凹線	にぶい褐	普通	○			○	○			−
179	1053	弥SI40	③	33230	甕	口縁	22.6	−	横ナデ	ヘラ斜ナデ→横ナデ	凹線，2条突帯	灰黄褐 褐灰	普通	○			○	○			赤石
179	1054	弥SI40	③	33019	甕	口縁	−	−	横・斜ナデ	−	−	浅黄橙	普通	○				○		○	赤石
179	1055	弥SI40	③	−	甕	胴	−	−	横ナデ	横ナデ	沈線，波状文	明褐	普通	○			○	○			−
179	1056	弥SI40	③	33049	甕	脚	−	7.8	不明	−	凹線	にぶい赤褐 −	普通	○			○	○			剥落
179	1057	弥SI40	①	32394	甕	口縁	24.6	−	指オサエ，横ナデ	−	凹線	にぶい褐 −	普通	○			○	○			赤石
179	1058	弥SI40・I34	①，Ⅱb	31500他	甕	脚	−	7.5	ヘラ縦ナデ，横ナデ	−	凹線	にぶい橙 −	普通	○			○	○	○	○	−
179	1059	弥SI40	①	31691	甕	脚	−	8.0	−	−	−	にぶい褐 −	普通	○	○		○	○			剥落
179	1060	弥SI40	③	33224	壺	口縁	26.5	−	横ナデ，縦ミガキ	横ナデ	突帯	灰褐 橙	普通	○	○		○	○			−
179	1061	弥SI40	③	33046	壺	胴	−	−	横ミガキ	横ナデ	3条突帯	黒褐 褐	普通	○	○		○	○			−
179	1062	弥SI40	②	32376	壺	口縁	12.4	−	ミガキ，横ナデ	ミガキ，横ナデ	−	にぶい褐 −	普通	○	○		○	○			−
179	1063	弥SI40	①	31523	壺	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい褐	普通	○			○	○			−
179	1064	弥SI40	③	−	蓋	口縁	−	−	横ナデ→縦ミガキ	横ナデ→縦ミガキ	1条突帯	にぶい褐 褐	普通	○			○	○			スス
179	1065	弥SI40	③	33220	蓋	口縁	−	−	横ナデ→縦ミガキ	横ナデ→縦ミガキ	1条突帯	にぶい褐 明褐	普通	○			○	○			−
179	1066	弥SI40	②	32407	鉢	口縁～胴	−	−	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	1条突帯	灰黄褐 褐灰	普通	○				○			赤石
179	1067	弥SI40	③	33013	鉢	脚	−	3.2	指オサエ	−	−	褐 −	普通	○			○				−
179	1068	弥SI40	③	33035	鉢	脚	−	2.1	指オサエ	−	−	褐 −	普通	○	○		○				−
179	1069	弥SI40	−	−	鉢	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	−	黒褐 にぶい黄橙	普通	○			○	○			−
179	1070	弥SI40	①	31533	鉢	底	−	−	横ナデ	横ナデ	−	にぶい橙	普通		○	○	○	○	○	○	−
181	1073	弥SI41	①，③	33046他	甕	口縁	−	−	横ナデ	−	凹線	にぶい褐 −	普通		○	○	○	○	○		−
181	1074	弥SI41	①	36281	甕	胴	−	−	ハケ縦ナデ，横ナデ	斜ナデ	−	にぶい褐，黒褐 にぶい赤褐，褐灰	普通		○	○	○	○			−
181	1075	弥SI41	①	36346	土製勾玉	−	−	−	ミガキ	−	沈線，穿孔	橙 −	普通	○						○	−
184	1078	弥SI42	①	22248	甕	口縁～胴	32.6	−	横・斜ナデ	指オサエ，横ナデ	凹線	褐，明赤褐 橙，にぶい橙	普通	○		○	○	○	○	○	スス，コゲ
184	1079	弥SI42	①	22231他	甕	口縁	31.8	−	丁寧な縦・横ナデ	丁寧な横・斜ナデ	凹線，3条突帯	にぶい橙，橙 にぶい橙，にぶい黄橙	普通		○	○	○	○	○		−
184	1080	弥SI42	①，②	22241他	甕	口縁	−	−	横ナデ	指オサエ，ヘラナデ	凹線，3条突帯	にぶい橙	普通	○			○	○	○		−
184	1081	弥SI42	①	22244	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	灰褐 にぶい橙	普通		○		○	○		○	−
184	1082	弥SI42	①	21395	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい黄褐， にぶい橙	普通	○	○	○	○	○	○		−
184	1083	弥SI42	−	−	甕	脚	−	6.2	ヘラ縦ナデ，斜ナデ，面取り	−	−	にぶい黄橙	普通	○			○	○			−
188	1084	弥SI43	②，④	22623他	甕	口縁～胴	24.0	−	ハケ斜ナデ→横ナデ	ハケ斜ナデ，横ナデ，指オサエ	凹線，2条突帯	にぶい黄褐 橙	普通	○			○	○			−
188	1085	弥SI43	②，③	22619他	甕	口縁～胴	18.0	−	横ナデ，ハケ縦・斜ナデ	横ナデ，ハケ縦・斜ナデ	−	にぶい橙，褐灰 にぶい橙，灰褐	普通	○			○	○	○	○	摩耗，スス
188	1086	弥SI43	②	22652	壺	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	−	にぶい橙	普通		○	○	○	○	○	○	−
188	1087	弥SI43	②	22653	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい赤褐 褐灰	普通	○	○	○	○	○			−
188	1088	弥SI43	④	23860	甕	脚	−	5.6	ヘラ縦ナデ，横ナデ	−	−	−	普通	○			○	○	○		剥落，底：ミガキ
188	1089	弥SI43	④	23162	甕	脚	−	6.2	ヘラ縦ナデ，縦・横ナデ	ヘラ縦ナデ	凹線	にぶい橙 褐灰	普通			○	○	○	○	○	−
188	1090	弥SI43	④	23167	甕	底	−	5.6	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	赤褐 黒褐	普通	○			○	○			−
188	1091	弥SI43	②	22624	甕	脚	−	5.0	縦・横ナデ	縦ナデ	−	にぶい赤褐，黒褐 橙	普通	○		○	○	○	○	○	底：ナデ
188	1092	弥SI43	②	22662	甕	脚	−	8.0	ヘラ縦ナデ	−	凹線	にぶい赤褐	普通	○		○	○	○	○		−
188	1093	弥SI43	②	−	壺	口縁	−	−	ハケナデ	横ナデ	−	にぶい橙 橙	普通	○			○	○	○		−

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
188	1094	弥 SI43	①	22699	壺	底	−	6.6	ヘラ縦ナデ	ナデ	−	にぶい橙，灰褐 褐灰	普通		○	○	○	○			剥落
188	1095	弥 SI43	①，②	22664 他	壺	底	−	8.4	ハケ縦ナデ， ミガキ	−	−	黒褐 明褐	普通	○			○	○			−
188	1096	弥 SI43・ 45・D28	①，②， Ⅱ	17167 他	壺	底	−	7.2	ヘラ縦ナデ， ミガキ	ヘラ縦ナデ， ミガキ	−	にぶい橙，灰褐	普通	○	○	○	○	○			−
188	1097	弥 SI43	②	22645	蓋	口縁	−	−	ヘラ斜ナデ， 横ナデ	横ナデ	−	にぶい橙 灰黄褐	普通	○	○	○	○	○			ススス
188	1098	弥 SI43	②	22637	甕	底	−	3.5	ハケ縦ナデ	指オサエ	−	明褐 橙	普通	○			○	○			剥落
188	1099	弥 SI43	②	22627	円盤状土製品	甕の胴	−	−	ヘラ縦ナデ	ナデ	−	褐灰 灰褐，褐灰	普通		○	○	○	○	○		−
190	1102	弥 SI44	①	22605	甕	口縁	−	−	横・斜ナデ	横ナデ	凹線・沈線	にぶい褐，褐灰 にぶい赤褐	良好	○	○		○	○			−
190	1103	弥 SI44	①	22604	甕	口縁～胴	−	−	ヘラ縦ナデ→ 横ナデ	ヘラ斜ナデ	凹線，３条突帯	にぶい赤褐，灰褐 黄灰	普通	○		○	○	○	○		−
190	1104	弥 SI44	①	22600	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	灰褐	普通	○			○	○	○		−
190	1105	弥 SI44	②	21940	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	褐灰，にぶい橙	普通	○			○	○			−
190	1106	弥 SI44	①	22596	甕	口縁	−	−	縦・横ナデ	横ナデ	１条突帯	にぶい橙 にぶい赤褐	普通	○	○		○	○		○	−
190	1107	弥 SI44	①	22602	甕	胴	−	−	横ナデ	−	１条突帯	橙	普通			○	○	○	○		摩耗
193	1111	弥 SI45	①	26733	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	橙	普通	○	○		○	○	○		−
193	1112	弥 SI45	①	26748 他	甕	口縁	−	−	横ナデ	−	−	にぶい赤褐 にぶい褐	普通	○	○	○	○	○			摩耗
193	1113	弥 SI45	①	22487	甕	口縁	−	−	横ナデ，ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい橙 橙	普通	○	○		○	○		○	−
193	1114	弥 SI45	①	22447 他	甕	口縁～胴	20.0	−	ハケ縦ナデ， 横ナデ	ハケ横・斜ナデ	−	にぶい橙，褐灰 にぶい橙	普通	○	○	○	○	○			ススス
193	1115	弥 SI45	①	22480	甕	口縁	−	−	横ナデ	横・斜ナデ	凹線，３条突帯	にぶい赤褐	普通	○	○	○	○	○			−
193	1116	弥 SI45	①	22465 他	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線，２条突帯	明赤褐 にぶい赤褐	普通	○	○		○	○	○		−
193	1117	弥 SI45	①	22495	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい橙	普通		○		○	○			−
193	1118	弥 SI45	①	22431	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい赤褐	普通	○	○		○	○			−
193	1119	弥 SI45	①，②	21905 他	甕	口縁	−	−	ハケ縦ナデ→ 横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい赤褐，褐灰 にぶい赤褐	普通	○		○	○	○			−
193	1120	弥 SI45	①	22497	甕	口縁	−	−	横ナデ，ハケ 横・縦ナデ	横ナデ，ナデ	凹線	にぶい橙	普通	○	○		○	○	○		−
193	1121	弥 SI45	①	22483	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい橙 にぶい褐	普通	○	○	○	○	○			−
193	1122	弥 SI45	①	−	甕	口縁	−	−	−	斜ナデ	−	にぶい橙	普通	○			○	○	○		摩耗
193	1123	弥 SI45	②	21904	甕	口縁～胴	−	−	ヘラ横ナデ	横ナデ	凹線，２条沈線	橙	普通	○			○	○	○		−
193	1124	弥 SI45	①	22509	甕	口縁	−	−	ミガキ	丁寧な横ナデ	刻目	灰褐 明褐灰	良好			○	○	○	○	○	−
193	1125	弥 SI45	①	22473	甕	胴	−	−	ヘラ縦・横ナデ	横ナデ	櫛描波状文	にぶい橙 にぶい橙，灰黄褐	良好	○			○	○		○	−
193	1126	弥 SI45	①	26740	鉢	口縁	−	−	ハケ斜ナデ→ 横ナデ	−	刻目突帯，刻目	灰褐 にぶい橙	普通		○	○	○	○	○	○	−
193	1127	弥 SI45・ D29	①，②， Ⅱ	21914 他	蓋	つまみ～胴	−	7.0	縦ミガキ，ナデ	ナデ，ヘラ横・ 斜ナデ	凹線	にぶい赤褐，褐灰 にぶい赤褐	普通	○		○	○	○	○		−
195	1135	弥 SK1	①	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい赤褐 赤褐	普通	○			○				−
195	1136	弥 SK1	③	−	甕	肩	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	３条突帯	褐灰 にぶい褐	普通	○			○				−
195	1137	弥 SK1	①	−	壺	口縁	20.5	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	褐	普通	○			○				−
195	1138	弥 SK1	①	−	壺	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	赤褐	良好	○	○		○				−
195	1139	弥 SK1	①	−	壺	口縁	−	−	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい赤褐	良好	○			○		○		−
195	1140	弥 SK1	②	−	壺	胴	−	−	丁寧なナデ	ヘラナデ	−	黒 にぶい赤褐	良好	○	○		○	○			−
196	1143	弥 SK2	①	7373	甕	口縁	−	−	丁寧な横ナデ	横ナデ	１条突帯	黒褐	普通	○	○		○	○			波状口縁
196	1144	弥 SK2	①	7373	蓋	口縁	−	−	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	突帯	黒褐 明褐灰	普通	○							ススス，角閃石
197	1145	弥 SK5	①②	6654 他	甕	口縁	24.5	−	ハケ斜ナデ	ハケ横ナデ	−	にぶい橙	普通	○	○			○	○		−
197	1146	弥 SK5	②	6720	甕	口縁	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい赤褐	良好	○	○		○	○	○		−
198	1147	弥 SK11	③	23910	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	−	黒褐 褐	普通	○	○		○	○			−
198	1148	弥 SK11	③	23911	甕	胴	−	−	−	−	２条突帯	暗褐 にぶい褐	普通	○	○		○	○			−
198	1149	弥 SK13	①	−	壺	口縁	−	−	横ナデ	横・斜ナデ	突帯	褐	普通	○	○		○	○			−
207	1150	周溝墓１	覆土中層	5823	甕	口縁	36.0	−	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線，１条突帯	にぶい赤褐	普通	○			○	○	○		−
208	1151	周溝墓２	①	13152	小型壺	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	褐	普通		○		○	○			−
208	1152	周溝墓２	①	13151	小型壺	肩	−	−	横ミガキ	横ナデ	２条突帯	褐	普通	○			○				
208	1153	周溝墓２	①	13151	小型壺	底	−	5.4	縦ミガキ	ヘラ横ナデ	−	褐 明褐	普通	○			○	○			赤石
211	1154	周溝墓３ SG1	②	−	鉢	完形	15.0	7.0	ハケ縦ナデ	ハケ斜ナデ， 横ナデ	凹線１条突帯，二又状口縁	褐	普通	○	○		○	○			剥落，ススス，器高 11.4
211	1155	周溝墓３ SG1	①	−	鉢	完形	23.5	16.0	横ミガキ，ヘラ縦ナデ	指オサエ，ヘラ縦ナデ，横ミガキ	凹線，１条突帯，二又状口縁	黒褐 褐	良好				○	○			剥落，器高 20.0
211	1156	周溝墓３ SG2	①	−	短頸壺	完形	13.4	3.0	横ミガキ	指オサエ，横ナデ	穿孔	にぶい褐 黒	普通	○			○	○			赤石，器高 11.8
211	1157	周溝墓３ SG2	②，③	−	壺	胴～底	−	6.4	丁寧なナデ， 縦ミガキ	ハケ斜ナデ， 指オサエ	穿孔	にぶい赤褐 にぶい褐，灰褐	普通		○	○	○	○	○		ススス，底：軽いケズリ，器高 16.3

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
211	1158	周溝墓3 SG2	③	−	甕	完形	31.6	8.2	横ナデ，縦・横ミガキ	横ナデ，指オサエ	凹線，3条突帯	にぶい橙	良好				○	○			スス，器高29.7
211	1159	周溝墓3	②	15432他	鉢	ほぼ完形	15.4	5.2	丁寧な横ナデ，ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ，ハケ斜ナデ	−	にぶい褐，黒にぶい橙	普通		○	○	○			○	器高11.2
211	1160	周溝墓3 SG1	①	−	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線	褐	普通	○	○		○	○			−
211	1161	周溝墓3	②	15440	壺	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ，ケズリ様	4条沈線	明褐	普通	○			○	○			−
211	1162	周溝墓3	②	15444	壺	肩	−	−	横ナデ	横・斜ナデ	6条突帯	にぶい褐橙	普通	○			○	○			赤石
208	1163	周溝墓3 J42	−	−	鉢	口縁	−	−	横ナデ，縦ミガキ	横ナデ，縦ミガキ	−	にぶい赤褐，黒褐にぶい赤褐	普通	○		○		○		○	−
211	1164	周溝墓3	②	16804	鉢	胴～底	−	2.7	横ナデ，ヘラ縦ナデ	−	−	にぶい黄橙橙	普通	○	○		○	○			黒斑
214	1165	周溝墓5 G27，H22，J29	①，Ⅱ，Ⅱa	21003他	大型甕	口縁	50.0	−	縦・横ナデ	横・斜ナデ，ミガキ	凹線，突帯	にぶい橙	普通		○	○	○	○	○		−
214	1166	周溝墓4	①，④	22156他	壺	口縁	20.0	−	ヘラ縦・横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	橙	普通		○	○	○	○			−
214	1167	周溝墓4 F27	Ⅰ，Ⅱ，Ⅱb，Ⅲa	№2他	壺	ほぼ完形	21.8	−	縦ミガキ	ヘラ斜ナデ，横ナデ，指オサエ	凹線，突帯	にぶい赤褐	良好	○	○	○	○	○	○		黒斑
214	1168	周溝墓4 E25	Ⅰb	18019他	甕	口縁	19.0	−	横ナデ	横ナデ	凹線	橙にぶい橙	普通	○			○	○	○	○	摩耗
214	1169	周溝墓4 F27	②，Ⅱ	18900他	壺	底	−	6.2	ミガキ	−	−	にぶい橙	普通		○		○	○	○	○	剥落
214	1170	周溝墓4	①	23148	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	−	にぶい黄橙	普通	○		○		○	○		−
214	1171	周溝墓4	覆土	22053	甕	脚	−	8.0	ヘラ縦ナデ，横ナデ，面取り	ヘラ縦ナデ	−	にぶい橙にぶい赤褐	普通	○	○		○	○	○		−
215	1174	周溝墓5	④	22695	甕	口縁	−	−	横ナデ，ミガキ	指オサエ→横ナデ，ミガキ	凹線，1条突帯	橙	良好	○			○	○			−

第14表　弥生時代住居跡・土坑・周溝墓出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
65	524	弥SI1	周溝内	2312	砥石	10.5	6.7	2.1	243.4	砂岩	
71	549	弥SI2 P4	−	−	磨製石鏃	1.7	(1.3)	0.1	(0.2)	頁岩	
71	550	弥SI2	①	5808	磨製石鏃	2.2	1.2	0.3	1.1	頁岩	
71	551	弥SI2	①	5859	磨製石鏃	(2.6)	(2.4)	0.2	(1.7)	頁岩	
71	552	弥SI2	①	5803	磨製石鏃	(2.9)	(2.3)	(0.3)	(3.0)	頁岩	
71	553	弥SI2	①	5957	磨製石鏃	(5.1)	(4.0)	(0.4)	(10.4)	頁岩	
71	554	弥SI2	①	5809	磨製石斧	7.8	4.7	1.4	63.4	ホルンフェルス	
71	555	弥SI2	①	5799	磨製石斧	(7.5)	(5.2)	(1.5)	(86.8)	ホルンフェルス	
71	556	弥SI2	①	5860	磨製石斧	(2.7)	(7.5)	(1.1)	(23.3)	ホルンフェルス	
71	557	弥SI2	床直	6006	敲石	11.8	4.5	3.8	266.2	安山岩	
71	558	弥SI2	①	5855	敲石	(8.7)	5.5	3.5	(273.0)	砂岩	
71	559	弥SI2	①	5861	敲石	5.0	4.8	4.1	135.0	石英	
72	560	弥SI2	①	5858	磨石・凹石類	10.0	9.0	5.3	764.3	安山岩	
75	575	弥SI3	②	5959	軽石製品	(10.2)	9.0	3.9	(70.3)	軽石	
77	577	弥SI4	床直	5966	砥石	(6.6)	(2.1)	(0.7)	(15.9)	砂岩	
77	578	弥SI4	①南西	−	砥石	(6.1)	(0.7)	(0.7)	(20.3)	砂岩	
77	579	弥SI4	①	−	磨石類	8.3	7.8	(4.5)	(482.4)	安山岩	
77	580	弥SI4 弥SK2	①	−	石皿・台石類	(11.5)	(11.7)	(5.5)	(647.5)	砂岩	
80	587	弥SI5	床直	6206	磨石・敲石類	(7.6)	(5.1)	(3.0)	(176.4)	砂岩	
83	591	弥SI6	床直	6211	磨製石鏃	1.2	2.0	0.2	0.6	頁岩	未成品
83	592	弥SI6	床直	6210	磨石・敲石類	(11.2)	9.1	6.4	(868.9)	砂岩	
86	597	弥SI7	①	−	敲石	15.0	4.5	2.9	311.4	砂岩	
89	618	弥SI8 P3	−	−	砥石	(6.1)	(8.9)	(3.8)	(271.7)	砂岩	
89	619	弥SI8	床直	6461	砥石	(6.4)	6.4	(3.9)	(174.9)	砂岩	
89	620	弥SI8	②	−	砥石	(5.3)	(5.4)	(2.5)	(90.8)	砂岩	
89	621	弥SI8	①	−	砥石	(6.6)	(5.8)	(1.9)	(91.9)	砂岩	
92	629	弥SI9	床直	6210	磨製石鏃	(2.2)	2.0	0.2	(1.2)	頁岩	
92	630	弥SI9	①	6250	打製石斧	(6.8)	6.7	1.6	(69.0)	頁岩	
92	631	弥SI9 SK1	①	6615	敲石	12.0	4.6	2.8	224.7	砂岩	
97	657	弥SI10	②	6070	打製石斧	8.7	5.2	0.8	56.5	ホルンフェルス	
97	658	弥SI10 P6	①	6660	敲石	5.6	5.0	4.2	149.4	砂岩	
97	659	弥SI10	②	6153	磨石・敲石類	5.3	4.8	4.8	187.0	砂岩	
101	676	弥SI12	①	6623	打製石鏃	2.5	1.6	0.4	1.3	鉄石英	
101	677	弥SI12	床直	6634	磨製石鏃	(4.1)	2.5	0.4	(4.2)	頁岩	
101	678	弥SI12	床直	6635	砥石	(9.9)	3.1	(2.7)	(89.7)	砂岩	

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
101	679	弥SI12 SK1	④	7360	砥石	(6.6)	(5.9)	3.2	(172.5)	砂岩	
101	680	弥SI12	③	−	砥石	5.3	5.3	1.2	31.9	砂岩	
101	681	弥SI12 SK1	④	7359	砥石	(7.9)	(5.0)	(2.8)	(89.6)	砂岩	
103	690	弥SI13	Ⅲ	T.02	磨製石剣	(8.1)	3.0	0.7	(19.2)	頁岩	
103	691	弥SI13	床直	7693	砥石	7.4	4.7	1.7	96.4	砂岩	
103	692	弥SI13	①	7661	軽石製品	14.3	11.2	4.7	130.7	軽石	
106	709	弥SI14	①	6706	砥石	9.0	7.3	5.5	287.0	砂岩	
106	710	弥SI14 SK1	①	6726	石皿･台石類	(16.9)	(13.2)	(6.1)	(1914.0)	砂岩	
108	714	SI15	−	−	打製石鏃	1.4	1.0	0.2	0.3	緻密安山岩	
108	715	SI15 SK2	①	−	打製石鏃	2.2	1.4	0.3	0.6	緻密安山岩	
108	716	弥SI15	①	7264	軽石製品	7.9	9.5	4.9	66.2	軽石	
111	732	弥SI16	②	7555	磨製石斧	(3.2)	(3.6)	(1.0)	(10.9)	砂岩	
111	733	弥SI16	①	7514	砥石・敲石	17.0	4.7	3.2	486.8	砂岩	
111	734	弥SI16	床直	7562	砥石・敲石	7.7	5.5	3.2	212.4	砂岩	
111	735	弥SI16 SK2	−	−	敲石	(5.5)	(3.0)	1.9	(45.3)	砂岩	
111	736	弥SI16	床直	7563 他	砥石	(3.3)	(7.9)	2.1	(64.9)	砂岩	
111	737	弥SI16	床直	8178	砥石	(11.2)	6.6	5.9	(536.6)	砂岩	
114	756	弥SI17	床直	7371	打製石斧	(8.6)	6.0	2.5	(136.5)	ホルンフェルス	
114	757	弥SI17	床直	7372	磨石･敲石類	(4.1)	(6.4)	(3.4)	(94.5)	石英	
116	761	弥SI18	床直	6932	打製石鏃	1.1	1.4	0.35	0.4	黒曜石	
116	762	弥SI18	床直	6931	打製石鏃	1.5	2.1	0.5	1.5	水晶	
116	763	弥SI18	②	7500	打製石鏃	2.0	1.8	0.7	1.7	水晶	
116	764	弥SI18	①	6913	打製石鏃	1.6	1.4	0.4	0.6	緻密安山岩	
116	765	弥SI18	①	7468	磨製石斧	14.9	5.9	2.5	282.2	頁岩	
116	766	弥SI18	①	7467	砥石	(7.4)	(6.7)	(1.5)	(116.1)	砂岩	
116	767	弥SI18	②	7572	軽石製品	8.7	8.9	3.7	69.4	軽石	
128	810	弥SI19	②	6978	磨製石鏃	1.6	(1.7)	0.3	(0.8)	頁岩	
128	811	弥SI19	②層下	8128	磨製石鏃	(2.1)	(1.3)	0.3	(0.7)	頁岩	
128	812	弥SI19	床直	8161	磨製石鏃	(4.2)	2.3	0.5	(5.0)	頁岩	
128	813	弥SI19	②	7235	磨製石鏃	(4.2)	1.6	0.5	(4.1)	頁岩	
128	814	弥SI19	①	7940	敲石	(6.3)	2.8	2.3	(76.0)	砂岩	
128	815	弥SI19	②層下	7824	敲石	9.2	6.0	3.8	350.0	砂岩	
128	816	弥SI19	①	6802 他	砥石	(14.2)	5.3	(5.2)	(445.6)	砂岩	
134	837	弥SI21	Ⅲ	16803	石皿	31.5	22.0	6.8	6980.0	砂岩	
134	838	弥SI21	①	10309	磨製石鏃	(1.9)	(2.3)	0.3	(1.6)	頁岩	
134	839	弥SI21	①床直	10392	敲石	9.4	6.4	5.0	377.9	石英	
134	840	弥SI21	①	10308	敲石	8.3	7.1	2.6	219.7	砂岩	
135	841	弥SI21	①	10399	磨石類	6.0	4.6	3.0	120.3	砂岩	
135	842	弥SI21	①	10325	砥石	(6.0)	(3.3)	(0.9)	(23.9)	頁岩	
135	843	弥SI21	①	10331	軽石製品	8.6	6.4	3.2	31.6	軽石	
135	844	弥SI21	①	10398	軽石製品	13.1	7.5	3.9	95.5	軽石	舟形
135	845	弥SI21	①	10307	軽石製品	10.5	11.2	4.7	116.9	軽石	
135	846	弥SI21	①	10396	軽石製品	6.8	6.3	3.9	33.5	軽石	
135	847	弥SI21	①	10334	軽石製品	8.5	4.4	3.2	25.9	軽石	
136	849	弥SI22	①	10285	敲石	(12.7)	5.6	3.3	(341.0)	砂岩	
140	861	弥SI25	②	15563	異形石器	1.5	1.7	0.4	0.5	黒曜石	
140	862	弥SI25	②	12801 他	砥石	19.1	8.3	0.8	109.3	砂岩	
147	902	弥SI26	①	16076	軽石製品	12.3	11.2	5.7	155.2	軽石	
147	903	弥SI26	床直	16220	磨製石鏃	2.1	1.5	0.7	1.9	頁岩	
147	904	弥SI26	②	12989	石包丁	9.5	(9.7)	0.8	(89.9)	頁岩	
147	905	弥SI26	②	12871	打製石斧	(6.9)	(7.5)	(1.6)	(82.5)	ホルンフェルス	
147	906	弥SI26	①	16072	敲石	10.7	3.9	2.9	173.7	砂岩	
147	907	弥SI26 P14	①	−	軽石製品	4.2	3.4	2.1	8.5	軽石	
147	908	弥SI26 P14	①	−	軽石製品	3.7	1.7	1.1	2.1	軽石	
149	919	弥SI28	床直	13517	打製石鏃	1.5	1.2	0.3	0.4	緻密安山岩	
149	920	弥SI28	②	13514	打製石鏃	1.7	1.1	0.3	0.5	黒曜石	
149	921	弥SI28	①	13437	砥石	(5.8)	(6.8)	(2.0)	(83.0)	砂岩	
149	922	弥SI28	②	13511	軽石製品	14.8	12.9	6.4	260.3	軽石	
152	926	弥SI29 ･42	①	15624	石皿	51.1	35.8	13.1	18500.0	花崗岩	
155	933	弥SI30	①	13799	軽石製品	6.3	4.1	1.6	12.9	軽石	
158	950	弥SI31	床直	15160	磨製石鏃	2.6	2.5	0.4	2.9	頁岩	
158	951	弥SI31	①	14646	磨製石鏃	5.2	3.7	0.6	13.3	頁岩	未成品
158	952	弥SI31	床直	14712	軽石製品	8.8	6.8	3.7	42.5	軽石	
158	953	弥SI31	−	−	軽石製品	7.5	2.8	3.4	19.2	軽石	
167	1014	弥SI33	SK-1 ①	16984	磨製石鏃	2.3	2.0	0.1	0.7	頁岩	
167	1015	弥SI33	②	15307	磨製石鏃	(2.2)	1.4	0.1	(0.5)	頁岩	
167	1016	弥SI33	②	15333	磨製石鏃	(2.3)	(2.3)	0.4	(2.2)	頁岩	
167	1017	弥SI33	①	14599	磨製石鏃	3.3	1.9	0.3	0.7	頁岩	
167	1018	弥SI33	①	15306	磨製石鏃	4.0	2.6	0.3	3.5	頁岩	
167	1019	弥SI33	①	13275	磨製石鏃	(4.8)	3.7	0.5	(9.7)	頁岩	未成品
168	1020	弥SI33	①	16426	打製石斧	(7.6)	(11.0)	(1.3)	(118.6)	ホルンフェルス	
168	1021	弥SI33	①	15384	敲石	(4.5)	(1.9)	(1.4)	(7.1)	ホルンフェルス	
168	1022	弥SI33	①	13274	敲石	7.7	2.8	1.9	64.9	砂岩	

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
168	1023	弥 SI33	②	15332	砥石	(3.5)	4	1.60	(21.8)	頁岩	
168	1024	弥 SI33	②	16951	砥石	(9.8)	(3.8)	1.6	(83.5)	砂岩	
168	1025	弥 SI33	①	16413	砥石	9.7	8.0	1.30	125.3	砂岩	
168	1026	弥 SI33	①	17044	石皿	28.5	28.5	8.2	8520.0	砂岩	
168	1027	弥 SI33	②	15344	軽石製品	15.1	14.5	8.0	292.4	軽石	
168	1028	弥 SI33	②	15339	軽石製品	(12.4)	7.8	(3.3)	(92.0)	軽石	
168	1029	弥 SI33	①	16800	軽石製品	11.5	4.3	4.1	66.7	軽石	
172	1041	弥 SI37	①	−	砥石	(5.2)	(3.6)	(2.3)	(59.5)	砂岩	
179	1071	弥 SI39	②	32380	砥石	9.8	7.0	1.5	158.3	砂岩	
179	1072	弥 SI40	①	31513	横刃形石器	6.3	(7.3)	1.3	(63.4)	ホルンフェルス	
182	1076	弥 SI41	③	36355	磨石･敲石類	11.3	8.1	4.5	563.7	砂岩	
182	1077	弥 SI41	③	36359	砥石	19.1	7.6	6.4	1115.7	砂岩	
188	1100	弥 SI43	床直	22847	磨製石鏃	26	21.9	2.3	1.24	頁岩	
188	1101	弥 SI43	床直	22965	磨製石鏃	10.1	20.6	2.4	0.6	頁岩	
190	1108	弥 SI44	①	22609	打製石鏃	20.6	18.2	3.4	0.9	緻密安山岩	
190	1109	弥 SI44	①	22610	軽石製品	44.1	29.2	12.7	6.0	軽石	
190	1110	弥 SI44	②	21943	磨石･敲石類	122.0	93	54.5	788	砂岩	
194	1128	弥 SI45	床直	22449	磨製石鏃	6.6	3.5	0.6	13	頁岩	
194	1129	弥 SI45 P4	−	25291	磨製石鏃	2.5	21.2	2.9	1.69	頁岩	
194	1130	弥 SI45	①	−	打製石鏃	15.2	12.5	2.7	0.4	チャート	
194	1131	弥 SI45	②床直	25290	石皿･台石類	(12.1)	13.5	(6.9)	(1451.3)	砂岩	
194	1132	弥 SI45	②	25288	砥石	147.5	65.5	50.5	616	砂岩	
194	1133	弥 SI45	②	25289	砥石	103.0	75.5	17.5	141.1	頁岩	
194	1134	弥 SI45	①	22506	砥石	103.0	93.5	39.5	544.0	砂岩	
195	1141	弥 SK1	①	7150	軽石製品	6.6	5.4	2.8	17.8	軽石	
195	1142	弥 SK1	①	7151	打製石斧	12.6	5.7	2.7	180.8	ホルンフェルス	
214	1172	周溝墓 4	周溝①	22565	打製石鏃	(2.4)	(2.1)	0.5	(1.8)	緻密安山岩	
214	1173	周溝墓 4	覆土上	22050	打製石斧	(6.1)	(7.0)	(2.3)	(92.5)	ホルンフェルス	

第 15 表　F-27 区周辺出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	黒石	備考
218	1175	SG5	−	SG5-№10 他	甕	口縁～胴	24.6	−	横ナデ，ヘラ縦ナデ	横･斜ナデ	凹線，３条突帯	にぶい黄橙 にぶい黄褐	普通		○	○	○	○	○	○	−
218	1176	F・G27	Ⅱb	22025 他	甕	口縁	26.4	−	ハケ横ナデ	横ナデ	１条突帯	にぶい褐 にぶい橙	普通	○	○		○				−
218	1177	G・F27	Ⅱ・Ⅲ	19016 他	甕	口縁～胴	27.0	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線，３条突帯	にぶい黄橙	普通	○			○	○	○	○	摩耗
218	1178	F27	Ⅱb	18898 他	甕	口縁	27.6	−	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい橙	普通	○				○	○		−
218	1179	F27・28	Ⅰ・Ⅱb	18347 他	甕	口縁	27.0	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横･斜ナデ	凹線，１条突帯	にぶい赤褐	普通	○	○	○	○	○			−
218	1180	G27	Ⅰ・Ⅱ・Ⅱb	18311 他	甕	口縁	28.0	−	丁寧な横ナデ	横ナデ，指オサエ	−	橙 にぶい橙	良好				○	○			軽石
218	1181	SG4	Ⅱb	SG4-№21	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	凹線，１条突帯	にぶい橙	普通		○	○	○	○			−
218	1182	SG4	Ⅱb	SG4-№15	甕	脚	−	8.0	ヘラ縦ナデ，横ナデ	ナデ	凹線	にぶい橙 褐灰	普通	○	○		○	○	○		−
218	1183	SG4	Ⅱb	SG4-№19	甕	脚	−	8.2	ヘラ縦ナデ，横ナデ	−	凹線	にぶい橙 褐灰	普通				○	○	○	○	摩耗
218	1184	SG4	Ⅱb	SG4-№26	甕	脚	−	8.5	ハケ縦ナデ，横ナデ	−	凹線	にぶい褐	普通		○		○	○	○		剥落
218	1185	SG4	Ⅱb	SG4 №4	甕	脚	−	7.2	−	−	凹線	にぶい赤褐 橙～黒褐	普通		○	○	○	○		○	剥落
218	1186	SG4	Ⅱb	SG4 №24	甕	脚	−	6.9	ヘラ縦ナデ，横ナデ	−	凹線	にぶい橙 橙	普通		○	○	○	○			摩耗
219	1187	SG5	−	17900 他	大型甕	口縁～胴上	54.4	−	ヘラ縦･斜ナデ，横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線，５条突帯	にぶい橙～橙 にぶい赤褐	普通		○	○	○	○		○	−
219	1188	SG5	−	18785 他	大型甕	口縁～胴上	−	−	横ナデ，ヘラ縦ナデ	ヘラ横･斜ナデ	凹線，５条突帯	橙 にぶい橙	普通			○	○	○		○	−
219	1189	SG4	Ⅱ・Ⅱa・Ⅱb	16196 他	大型甕	口縁～胴上	54.4	−	丁寧な横ナデ，ハケ縦ナデ	横ナデ，ハケ横ナデ	−	橙 にぶい赤褐	普通	○	○	○	○	○			−
220	1190	F・G27	Ⅱ・Ⅱa・b	19028 他	壺	口縁～肩	20.9	−	ヘラナデ，ミガキ，横ナデ	横・斜ナデ，ヘラナデ	凹線，３条突帯	橙	普通	○			○	○	○		−
220	1191	F27・29	Ⅱ・Ⅱb	20715・23510	壺	口縁～頸	18.4	−	横ナデ，ヘラ縦ナデ，縦ミガキ	横ナデ→横ミガキ	凹線，沈線	にぶい橙	普通	○	○		○	○	○		−
220	1192	SG3	Ⅱb	№5	壺	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	−	にぶい橙	普通		○	○	○	○			摩耗
220	1193	F30・G27	Ⅱb	20101 他	壺	口縁～胴	15.2	−	ハケナデ，横ナデ，ミガキ	ハケナデ	凹線	にぶい赤褐・赤黒 明赤褐	普通	○		○	○				剥落，長石
220	1194	SG6	Ⅱ・Ⅱa	18319 他	壺	完形	14.8	5.6	ヘラ斜ナデ	ハケ縦ナデ	二又状口縁	明赤褐 −	普通		○	○	○	○	○		摩耗，器高：34.0
220	1195	G27	Ⅱb	20200	壺	口縁	16.0	−	横ナデ，丁寧なヘラナデ	横ナデ	凹線	にぶい赤褐	良好	○	○		○	○			細砂質土
221	1196	G26・27	Ⅱ	19009 他	壺	頸	−	−	横ナデ	縦ナデ	５条突帯	橙 にぶい黄橙	普通	○	○		○		○		−

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
221	1197	G27	Ⅰ	18305 他	壺	胴	－	－	横ナデ	ナデ	1条突帯，3条突帯，穿孔	にぶい橙 にぶい黄橙	普通	○	○	○	○	○	○	○	－
221	1198	F27	Ⅱ・Ⅱb	19492 他	壺	肩～胴	－	－	横ナデ	縦･横ナデ	6条突帯，2条突帯	にぶい橙	普通	○			○	○	○	○	－
221	1199	J29	Ⅱb	26856 他	壺	胴	－	－	横ミガキ	斜ナデ	2条突帯	橙	普通	○			○				長石
221	1200	G27	ⅠⅡ	18312 他	壺	口縁～底	36.0	－	横ナデ	ヘラナデ	突帯，穿孔	明黄褐	普通					○		○	－
221	1201	SG3	Ⅱb	SG3 №4	壺	底	－	7.2	ヘラ縦ナデ，指オサエ	－	－	にぶい橙	普通		○	○	○	○	○		摩耗，底：ナデ
221	1202	F27	Ⅱ	18902	壺	底	－	6.4	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	－	浅黄橙，赤 明褐灰	良好	○		○		○			長石
221	1203	SG4	Ⅱb	SG4 №5	壺	底	－	7.0	ヘラ縦ナデ	－	－	にぶい赤褐	普通		○	○	○	○	○	○	剥落
221	1204	G27	Ⅰ・Ⅱ	17903 他	壺	底	－	8.2	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	－	明赤褐	良好	○	○	○	○	○			剥落，長石，底：丁寧なナデ
222	1205	SG3	Ⅱb	SG3 №1 他	壺	底	－	9.6	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	－	にぶい橙 にぶい赤褐	普通		○	○	○	○	○		剥落，摩耗
222	1206	SG4・G27・29	Ⅱb・Ⅲa	20195 他	壺	胴～底	－	11.0	－	ヘラ横ナデ	－	にぶい赤褐	普通		○	○	○	○	○	○	摩耗
222	1207	SG6	Ⅱa	SG6 №10	壺	底	－	8.2	－	－	－	橙 にぶい橙	普通	○			○	○	○		摩耗
222	1208	G27	Ⅱ	18938	壺	底	－	8.0	丁寧なヘラ斜ナデ	－	－	橙	普通		○	○	○		○		剥落，底：丁寧なヘラナデ
222	1209	F27	Ⅱ	18939	壺	底	－	4.8	ナデ	横ナデ	－	にぶい橙	普通	○		○		○	○	○	摩耗
222	1210	SG4	Ⅱb	SG4 №8	壺	底	－	8.2	－	－	－	にぶい橙	普通			○	○	○	○		摩耗
222	1211	F27	Ⅰ	18388	壺	底	－	9.0	ヘラナデ	ヘラナデ	－	赤橙	普通	○	○	○	○	○			摩耗，長石，底：布圧痕

第 16 表　弥生時代土坑墓出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
224	1212	SK80	②	－	甕	口縁	－	－	横ナデ	－	－	橙 －	普通		○	○	○	○	○		－
225	1213	SK68	－	28158	甕	脚	－	7.0	ヘラ縦ナデ	ナデ	－	にぶい橙 褐灰	普通		○	○	○	○			－
228	1215	SK65	①	21175	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	－	灰褐 にぶい褐	普通	○	○		○	○			－
231	1222	SK104	①	22412	壺	肩	－	－	横ナデ･ミガキ	－	－	にぶい橙	普通		○	○	○	○	○		－
235	1232	SK109	①	22320 他	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	－	にぶい赤褐 橙	普通			○	○	○	○		－
235	1233	SK109	－	－	甕	口縁	－	－	横ナデ	－	－	にぶい赤褐～にぶい橙	普通		○	○	○	○	○		－

第 17 表　弥生時代土坑墓出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
226	1214	弥 ST7	①	22006	管玉	0.7	径 0.36	－	0.1	碧玉	
228	1216	弥 ST9	下	21961	磨製石鏃	4.51	1.62	0.27	2.6	緑色片岩	
228	1217	弥 ST9	下	21962	磨製石鏃	4.15	2.00	0.25	2.3	頁岩	
228	1218	弥 ST9	下	21964	磨製石鏃	(4.02)	2.00	0.25	(2.5)	頁岩	
228	1219	弥 ST9	下	21960	磨製石鏃	(3.34)	2.22	0.3	(2.2)	頁岩	
228	1220	弥 ST9	下	21959	磨製石鏃	(3.30)	2.60	0.25	(2.5)	頁岩	
228	1221	弥 ST9	下	21966	磨製石鏃	(1.2)	(0.95)	(0.17)	(0.2)	頁岩	
233	1223	弥 ST19	床直	22849	磨製石鏃	(3.4)	(1.43)	0.22	(1.3)	頁岩	
233	1224	弥 ST19	床直	22853	磨製石鏃	(3.78)	2.20	0.2	(1.8)	頁岩	
233	1225	弥 ST19	床直	22851	磨製石鏃	3.63	2.00	0.29	2.3	頁岩	
233	1226	弥 ST19	床直	22852	磨製石鏃	3.10	2.54	0.3	2.4	頁岩	
233	1227	弥 ST19	床直	22854	磨製石鏃	(3.53)	(1.94)	0.25	(1.9)	頁岩	
233	1228	弥 ST19	床直	22855	磨製石鏃	(3.67)	(2.04)	0.25	(2.0)	頁岩	
233	1229	弥 ST19	床直	22856	磨製石鏃	(4.23)	2.26	0.36	(3.2)	頁岩	
235	1234	弥 ST20	床直	22718	磨製石鏃	(3.3)	(1.9)	(0.3)	(2.1)	頁岩	
235	1235	弥 ST20	床直	22719	磨製石鏃	(1.8)	(2.1)	(0.2)	(0.9)	頁岩	
235	1236	弥 ST20	床直	22717	磨製石鏃	(1.7)	(2.3)	0.3	(1.4)	頁岩	

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	備　考
235	1237	弥ST20	床直	－	磨製石鏃	（1.3）	（1.0）	（0.2）	（0.1）	頁岩	
235	1241	弥ST20	床直	22318	管玉	1.0	径0.4	－	0.2	碧玉	

第18表　弥生時代土坑墓出土鉄製品観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ（cm）	幅（cm）	重量（g）	備　考
233	1230	弥ST19	床直	22857	鉄鏃	4.4	1.7	2.7	
233	1231	弥ST19	床直	22858	鉄鏃	3.9	1.9	6.2	
235	1238	弥ST20	床直	22716	鉄鏃	4.8	1.6	5.8	
235	1239	弥ST20	床直	22319	鉄鏃	（4.0）	1.75	7.5	
235	1240	弥ST20	床直	22715	鉄鏃	1.8	1.7	5.7	

第19表　弥生時代中期西部出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径（cm）	底径（cm）	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備　考
236	1242	F30	Ⅱa･b, Ⅲa	37351他	甕	口縁～胴	－	－	ハケ縦ナデ	ナデ	２条刻目突帯	橙 黒褐	普通	○			○	○			－
236	1243	G29	Ⅲa･b	30491他	甕	口縁～胴	20.8	－	横ナデ，ハケ縦ナデ	横ナデ，指オサエ	刻目，３条突帯	にぶい褐 にぶい赤褐	良好				○	○			－
236	1244	G29，30	Ⅱb	30442他	甕	口縁～胴	－	－	ハケ縦ナデ	－	刻目，３条突帯	橙，黒褐 にぶい橙	普通			○	○	○		○	－
236	1245	I･J28･29，H31	Ⅱ，Ⅱb，Ⅲ，Ⅲa	23436他	甕	口縁～胴	25.0	－	ハケナデ	縦･横ナデ→ヘラナデ	２条沈線	黄橙 にぶい黄橙･黒褐	良好	○		○	○				－
236	1246	G22	Ⅱ	20980	甕	口縁～胴	20.2	－	丁寧なナデ	丁寧なナデ	２条沈線，凹線	褐 にぶい赤褐	良好				○	○			－
236	1247	D20	Ⅱ	21098	甕	口縁	－	－	ナデ→ハケナデ→ヘラナデ	ナデ→ハケナデ→ヘラナデ	２条沈線	橙～黒褐	普通	○	○	○	○	○		○	－
236	1248	I36	Ⅲa	29523	甕	口縁	－	－	ナデ，ヘラナデ	ナデ，ヘラナデ	沈線，凹線	にぶい褐～黒褐	普通	○	○	○	○	○		○	－
236	1249	E21	Ⅱ	21402	甕	口縁	－	－	横･斜ナデ	横･斜ナデ	沈線	褐灰，褐	普通	○	○	○	○	○			－
236	1250	I36	Ⅲa	29202	甕	口縁	－	－	横ナデ･ハケ縦ナデ	ハケ横ナデ	沈線	灰褐～黒褐	普通			○	○	○	○	○	－
236	1251	D23	Ⅰ	－	甕	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	沈線	暗赤褐	普通	○	○	○	○	○			ススa
238	1252	H･I29	Ⅱ，Ⅱb	23893他	甕	口縁～胴	25.8	－	横ナデ	横ナデ，ヘラ斜ナデ	２条突帯	橙	普通	○			○	○			－
238	1253	D23	Ⅱa	20084	甕	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線，２条突帯	橙	普通		○	○	○	○	○		－
238	1254	E25	Ⅰ	18169	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい褐～褐灰 にぶい橙	普通	○		○	○	○			ススa
238	1255	I30	Ⅱ	21830	甕	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横･斜ナデ	４条突帯	にぶい褐～褐灰 にぶい褐	普通	○	○		○	○	○		剥落
238	1256	E25	Ⅱb	20423	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	２条突帯	にぶい褐 にぶい赤褐	普通	○	○	○	○	○			－
238	1257	H24･25	Ⅰ	18176	甕	口縁	－	－	ナデ	ナデ	－	にぶい橙	普通	○	○		○	○	○	○	－
238	1258	E24	－	－	甕	口縁	25.8	－	横ナデ	斜ナデ，指オサエ	３条突帯，刺突文	にぶい赤褐	普通	○	○		○				－
238	1259	D26	Ⅱ	19105	甕	口縁	－	－	ハケ縦･横ナデ	ハケ斜ナデ	凹線	褐灰 にぶい黄褐	普通			○	○	○	○	○	ススa
238	1260	H21	Ⅱ	21023	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	凹線	橙	普通		○		○	○	○		－
238	1261	E21	Ⅱ	19544	甕	口縁	－	－	ハケ横･斜ナデ	ハケ横ナデ	凹線	にぶい黄橙～褐灰 橙	普通	○	○		○	○	○	○	ススa
238	1262	G31	Ⅱb	31109	甕	口縁	－	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	凹線	橙	普通		○		○	○	○		－
238	1263	G23，I25	Ⅱ，Ⅱb	19297他	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	凹線，突帯	にぶい橙	普通			○	○	○		○	－
238	1264	D21	Ⅱ	19711	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	凹線，突帯	にぶい橙	普通	○			○	○	○	○	－
239	1265	F26	Ⅱb	20562	甕	口縁～胴上	21.0	－	ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	凹線	赤 にぶい橙	良好	○	○		○	○			－
239	1266	F22	Ⅱ	21323	甕	口縁	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい橙	良好	○			○	○	○		ススa
239	1267	G23	Ⅲa	22221	甕	口縁	－	－	ナデ	ナデ	－	橙～にぶい橙	普通	○	○		○	○	○		－
239	1268	E32	Ⅲb	16762	甕	口縁	－	－	ヘラ斜ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい橙	良好	○			○	○	○		ススa
239	1269	E20	Ⅱ	－	甕	口縁～胴	－	－	横ナデ	粗い横ナデ	凹線	にぶい褐 橙	普通	○			○	○			ススa，赤石
239	1270	F21	Ⅱ	18001	甕	口縁	－	－	ヘラ縦ナデ，指オサエ	ヘラ縦ナデ	凹線	明黄褐	普通	○			○	○	○		－
239	1271	G22･23	Ⅱ，Ⅱb	20996他	甕	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ハケ斜ナデ	凹線	にぶい橙～褐	普通			○	○	○	○		－
239	1272	E21	Ⅱ	21266他	甕	口縁	23.0	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線，１条突帯	にぶい橙	普通	○	○		○	○			－
239	1273	D21	Ⅱ	17957	甕	口縁	－	－	丁寧なナデ	横ナデ	８条沈線，凹線	橙	良好	○			○	○			－
239	1274	D21	Ⅱ	19686	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	凹線，刻目	にぶい赤褐 にぶい橙	普通			○	○	○	○		－
239	1275	G30，H･I29	Ⅱa･b	30150他	甕	口縁	38.4	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線，３条突帯	にぶい橙	普通	○	○	○	○	○			－
239	1276	H29	Ⅱ	26694	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	沈線，波状文	にぶい橙 にぶい橙～にぶい褐	普通			○	○	○			－

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
240	1277	F28	Ⅰ	18791 他	甕	口縁	29.8	－	横ナデ	横ナデ	－	にぶい橙	普通		○	○	○	○		○	－
240	1278	F25･28	Ⅰ，Ⅱb，Ⅲa	18777 他	甕	口縁	27.6	－	ヘラ横ナデ	－	凹線	にぶい黄橙	良好	○	○		○	○	○		－
240	1279	F26	Ⅱb，Ⅲa	20565 他	甕	口縁～胴	28.2	－	ナデ	横ナデ→指オサエ	3条突帯	褐	良好				○	○			剥落
240	1280	G25･26	Ⅱ，Ⅱb	19234 他	甕	口縁	－	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	－	にぶい橙	普通		○		○	○		○	－
240	1281	D21	Ⅱ	19709 他	甕	口縁	34.2	－	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい橙	普通	○			○	○	○	○	ス ス
240	1282	F29，G26	Ⅱ	19243 他	甕	口縁	38.0	－	横ナデ→斜ナデ	横ナデ	3条突帯	橙 明赤褐	普通	○			○	○			－
241	1283	F27	Ⅰ，Ⅱ，Ⅱb	18346 他	甕	口縁	35.2	－	横ナデ	横ナデ	－	にぶい橙～橙	普通	○	○	○	○	○	○	○	摩耗
241	1284	G･I29	Ⅱa･b	30007 他	甕	口縁	29.6	－	丁寧な横ナデ，指オサエ	粗いハケナデ	沈線	にぶい橙	良好				○	○			－
241	1285	I28･29･31	Ⅱ，Ⅱb	23438 他	甕	口縁	27.2	－	ハケ横ナデ，指オサエ	ハケ横ナデ，指オサエ	－	にぶい橙	普通	○	○		○	○	○	○	－
241	1286	F27	Ⅰ，Ⅱb	18540 他	甕	口縁	－	－	ナデ	ナデ	－	橙	普通			○	○	○	○	○	－
241	1287	C28	Ⅱb	17182	甕	口縁	13.6	－	斜ナデ，指オサエ	ヘラ縦ナデ	－	橙	良好	○	○		○	○	○		剥落，ス ス
241	1288	F25	Ⅲa	21815	甕	口縁	－	－	ハケ横・斜ナデ，横ナデ	横ナデ	－	灰黄褐	普通		○	○	○	○	○	○	－
241	1289	E21	Ⅱ	21415 他	甕	口縁～胴	25.6	－	横ナデ→ハケ斜ナデ	ハケナデ，ヘラナデ	－	明赤褐	普通	○			○	○			－
241	1290	F21	Ⅱ	18005	甕	口縁	17.5	－	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	明赤褐	良好			○	○	○	○		ス ス
241	1291	E21	Ⅱ	21120	甕	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	凹線	にぶい橙	良好	○			○	○	○		細砂質土
241	1292	F25	Ⅱb	20537	甕	口縁	16.2	－	ナデ，指オサエ	ナデ，指オサエ	凹線	にぶい橙	普通	○			○	○		○	擬朝鮮系
241	1293	J29	Ⅱb	27932 他	甕	口縁	14.0	－	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	灰褐 にぶい橙	普通	○		○	○	○	○		擬朝鮮系
241	1294	F26	Ⅱ	19437	壺	口縁	－	－	ハケナデ	ハケナデ	－	橙	普通	○		○	○	○	○	○	擬朝鮮系
241	1295	F25	Ⅱb	20541	甕	口縁	－	－	横ナデ，ヘラ斜ナデ	ヘラ斜ナデ	－	にぶい褐 灰褐	普通	○		○		○		○	擬朝鮮系
241	1296	D26	Ⅱ	19102	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	－	明赤褐 にぶい赤褐	普通	○				○	○	○	剥落，擬朝鮮系
241	1297	F25	Ⅱb	20459	甕	口縁	24.4	－	横･斜ナデ	ヘラ斜ナデ・横ナデ	－	にぶい橙	普通	○	○	○	○	○	○		ス ス，擬朝鮮系
241	1298	E27	Ⅱb	20698	甕	口縁	－	－	横・斜ナデ，指オサエ	横ナデ，斜ナデ	－	にぶい橙	普通	○	○			○		○	擬朝鮮系
241	1299	G31	Ⅱb	31121	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	－	にぶい赤褐	普通	○		○	○	○			擬朝鮮系
242	1300	J29･30	Ⅱ，Ⅱb	25469 他	甕	口縁～胴	26.8	－	ハケ縦ナデ，横ナデ	ハケ斜ナデ	凹線，3条突帯	にぶい赤褐～にぶい橙	普通	○			○	○			－
242	1301	H31	Ⅲa	31804	甕	口縁～胴	26.2	－	横ナデ	横ナデ	凹線，2条突帯	にぶい黄橙	良好	○			○	○		○	－
242	1302	G30，H31	Ⅱ，Ⅱa･b	28568 他	甕	口縁～胴	27.9～29.4	－	ハケ縦・横ナデ	ハケ縦・斜ナデ，横ナデ	3条突帯	にぶい黄褐～褐灰 にぶい黄褐～灰黄褐	普通		○	○	○	○	○	○	－
242	1303	G31	Ⅱ	30192 他	甕	口縁	26.4	－	丁寧な縦・横ナデ	丁寧な縦・横ナデ	1条突帯	灰黄褐 にぶい橙	普通	○	○	○	○	○	○		－
242	1304	I30	Ⅱa･b	29877 他	甕	口縁～胴	30.0	－	ハケ縦ナデ，ナデ	ハケナデ→ナデ	3条突帯	にぶい褐	普通	○		○	○		○		ス ス
242	1305	G33	Ⅱ	36384	甕	口縁	26.6	－	横ナデ	横ナデ	3条突帯	にぶい橙 にぶい黄橙	良好				○	○			摩耗，赤石
243	1306	G29，I･J30	Ⅱ，Ⅱb	25141 他	甕	口縁	30.4	－	丁寧な横ナデ	ハケ斜ナデ	凹線	にぶい橙	普通		○	○	○	○	○		ス ス
243	1307	G31	Ⅱ	27501 他	甕	口縁	31.6	－	丁寧な横ナデ	ヘラ横・斜ナデ	3条突帯	橙 にぶい橙	良好	○			○	○		○	－
244	1308	K35	Ⅲa	34045 他	甕	口縁～胴	26.6	－	ナデ，指オサエ	ナデ	3条突帯	灰赤 橙，にぶい赤褐	普通				○				ス ス，灰白石
244	1309	F27･29	Ⅰ，Ⅱb	18859 他	甕	口縁～胴	36.4	－	ハケ横ナデ，ナデ	ハケ横ナデ，ナデ	3条突帯	にぶい橙	良好	○			○	○			赤石
244	1310	F27	Ⅱb	20882	甕	口縁	30.0	－	横ナデ	ハケ横ナデ	1条突帯	にぶい橙	良好	○						○	軽石
244	1311	F27	Ⅱ	18873	甕	口縁	－	－	横ナデ	ヘラ横ナデ	1条突帯	にぶい橙	普通		○			○	○	○	－
244	1312	I28～30，G31，D26，H29，G26，K29	Ⅱ，Ⅱb，Ⅲa	19113 他	甕	胴	－	－	ハケ横ナデ	ハケ横ナデ→指オサエ	4条突帯	黒褐～にぶい褐	普通	○		○	○	○	○	○	－
244	1313	F26	Ⅱb，Ⅲa	20024 他	甕	肩～胴	－	－	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	突帯	赤，黒 にぶい黄橙	良好	○	○		○				－
244	1314	K30	Ⅰ	24341 他	甕	口縁～胴	－	－	ハケ横ナデ	ヘラ横ナデ	3条突帯	にぶい橙	良好	○	○		○	○			剥落，ス ス
244	1315	E30，H29～31，I29･30，J29	Ⅱa･b，Ⅲa	16500 他	甕	胴	－	－	丁寧なヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ縦ナデ	－	にぶい橙 明赤褐	普通	○		○	○	○			長石
245	1316	D20	Ⅱ	19779	甕	脚台	－	5.9	ヘラ縦ナデ	縦ナデ	－	にぶい赤褐	良好	○			○	○			－
245	1317	F25	Ⅱb	20484	甕	脚台	－	5.4	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	－	にぶい橙 黒褐	良好	○	○	○	○			○	底：布目圧痕
245	1318	J29	Ⅱ	25601 他	甕	胴～脚台	－	6.0	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	－	にぶい橙 赤	良好		○	○		○	○		長石，底：圧痕
245	1319	E25	Ⅲa	21650	甕	脚台	－	6.7	ハケ縦ナデ	ハケ縦ナデ	－	にぶい赤褐 にぶい橙	良好	○			○	○			ス ス
245	1320	F30･31	Ⅱb，Ⅲa	37412 他	甕	胴～脚台	－	6.4	ハケ縦ナデ	ハケ縦ナデ	－	にぶい橙，黒 にぶい褐，黒褐	良好	○	○	○	○				ス ス，長石，底：ヘラナデ
245	1321	G25	Ⅰ	17924	甕	脚台	－	9.4	縦ハケナデ	－	－	にぶい黄橙 －	普通				○	○			底：木葉痕
245	1322	K34	Ⅱb，Ⅲa	31461 他	甕	脚台	－	6.4	ハケ縦ナデ，横ナデ	丁寧なハケ横ナデ	－	にぶい橙 にぶい褐～灰褐	良好	○			○	○			－
245	1323	H25	Ⅰ	18182	甕	脚台	－	6.2	丁寧な横ナデ→縦ミガキ	ナデ，指オサエ	凹線	明赤褐 黒褐	良好				○	○			コゲ
245	1324	K35	Ⅱb	31444	甕	脚台	－	8.9	ハケ縦ナデ	－	凹線	にぶい橙	良好				○				コゲ，灰石
245	1325	K29	Ⅲa	29372	甕	脚台	－	6.4	縦･横ナデ	－	凹線	にぶい褐 黒褐	良好	○			○				赤石

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	黒石	備考
245	1326	G25	Ⅰ	17920	甕	脚台	－	7.8	ハケ縦ナデ	ナデ	凹線	にぶい黄橙 灰黄褐	良好	○			○	○			剥落
245	1327	H29	Ⅱ	19076	甕	脚台	－	7.0	ハケ縦ナデ		凹線	にぶい橙	良好	○			○	○		○	－
245	1328	D32	Ⅲb	16294	甕	脚台	－	8	ハケ縦ナデ，横ナデ	ナデ，指オサエ	凹線	にぶい橙 －	普通	○			○	○			－
245	1329	SG8	－	№2他	甕	胴～脚台	－	8.3	ヘラ縦ナデ，横ナデ	ヘラ横・斜ナデ，横ナデ	凹線，４条突帯	にぶい黄橙～褐 にぶい黄褐～褐	普通		○	○	○	○	○		剥落，摩耗
246	1330	F24	Ⅲ	21796	蓋	つまみ	5.0	－	丁寧な縦ナデ	ナデ	－	にぶい橙 赤	良好			○	○	○	○		－
246	1331	G30，H31	Ⅱa･b	30297他	蓋	口縁	－	－	ヘラ横・斜ナデ，横ナデ	横ナデ	－	にぶい赤褐～灰褐 明赤褐，黒褐	普通	○	○		○	○			ススス
246	1332	L35	Ⅲa	33102	蓋	口縁	－	－	縦ミガキ	縦ミガキ	１条突帯	にぶい赤褐	普通	○			○			○	ススス
246	1333	K29	Ⅱb	27697	蓋	口縁	－	－	斜ナデ	斜ナデ	－	にぶい橙	普通	○			○	○	○	○	－
247	1334	J35	Ⅲa	36314他	鍋	口縁～胴	38.7	－	ヘラナデ，ハケナデ	ヘラナデ，ハケナデ	－	にぶい褐 にぶい橙	普通	○		○	○	○	○	○	－
247	1335	G･H31	Ⅱ	27582他	鍋	口縁～胴	35.4	－	ヘラナデ，ナデ	ヘラナデ，ナデ	－	にぶい褐	普通	○	○	○	○	○	○	○	剥落
247	1336	G31	Ⅱ	27538他	鍋	口縁～胴	35.4	－	ヘラナデ，ナデ	ヘラナデ，ナデ	－	にぶい赤褐 にぶい褐	普通		○	○	○	○	○		－
247	1337	F30	Ⅱ	27448他	鍋	口縁～胴	－	－	指オサエ→ハケ斜ナデ	横･斜ナデ	－	にぶい赤褐 橙	普通	○			○	○			－
248	1338	G31	Ⅱ	27547他	鍋	口縁～胴	39.0	－	ナデ	ナデ，ハケナデ	－	にぶい赤褐 にぶい褐	普通	○	○	○	○	○	○	○	剥落，摩耗
248	1339	H31	Ⅱ	26502他	鍋	口縁～底	36.0	－	ヘラ縦ナデ，ハケ横ナデ	ヘラ横ナデ	－	明赤褐	良好	○			○	○			ススス
248	1340	D32	Ⅲb	－	鍋	口縁	32.2	－	ハケナデ→ナデ	ハケナデ→ナデ	－	にぶい橙	普通	○	○	○	○	○	○	○	ススス
248	1341	H27	Ⅱ	19064他	大型甕	口縁～胴	34.0	－	ハケ縦ナデ，横ナデ	ヘラ斜ナデ	凹線，突帯	にぶい橙	普通	○			○	○		○	赤石，ススス
249	1342	E25，F27	Ⅰ，Ⅱb	18348他	壺	口縁	14.0	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	凹線	明赤褐	良好			○	○	○			－
249	1343	E21	Ⅱ	21126	壺	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	凹線	橙	良好	○			○	○	○		－
249	1344	F25	Ⅱb	20471他	壺	口縁～頸	22.0	－	横ナデ	横ミガキ・横ナデ	－	にぶい褐，にぶい橙 にぶい橙，灰褐	普通		○	○	○	○		○	－
249	1345	I30･31	Ⅱ，Ⅱb	30597他	壺	口縁	20.8	－	横･斜ナデ	横ナデ	－	橙	普通		○		○	○	○		－
249	1346	C28	Ⅱb，Ⅲa	17213他	壺	口縁～頸	22.2	－	横ナデ，縦ミガキ	横ナデ，縦ミガキ	刻目	にぶい橙 橙	普通	○	○		○	○	○		－
249	1347	H･I30	Ⅱb，Ⅲa	30603他	壺	口縁	19.2	－	丁寧なヘラナデ	ヘラ横ナデ	－	橙	良好		○	○	○		○		剥落，長石
249	1348	E31	Ⅱb	16702	壺	口縁～頸	20.0	－	ハケ縦ナデ→丁寧な横ナデ	横ナデ，斜ナデ	突帯	にぶい黄橙	普通	○			○	○		○	－
249	1349	I･J30	Ⅲa	31918他	壺	口縁	25.0	－	丁寧なヘラ縦ナデ→ミガキ	丁寧なヘラ縦ナデ→ミガキ	凹線，突帯	暗赤褐	良好	○		○	○	○			－
249	1350	K29	Ⅱb	27693	壺	口縁	32	－	横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい赤褐	普通	○	○		○	○			黒斑
250	1351	G29～31	Ⅱb，Ⅲa	30465他	壺	口縁	19.0	－	縦ミガキ，横ナデ	－	二叉状口縁，凹線	にぶい橙 橙	普通	○	○		○				剥落
250	1352	F28～30，G27･28	Ⅰ，Ⅱa	18292他	壺	頸～肩	－	－	ミガキ，ヘラナデ	ミガキ，指オサエ，ナデ	３条突帯	にぶい橙 灰黄褐	良好	○			○	○		○	－
250	1353	G31	Ⅱ，Ⅱb	31085他	壺	胴	－	－	縦･横ナデ	ヘラ縦ナデ	４条突帯	黒 にぶい黄橙	普通		○	○	○	○			胴：29.0
250	1354	G26	Ⅱ	19233	壺	口縁	6.8	－	ヘラ縦ナデ	－	凹線	にぶい橙 橙	普通				○		○	○	－
250	1355	J31	Ⅱ	29690	壺	口縁	－	9.2	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい黄橙 黒	良好	○			○	○	○		長石
250	1356	I36	Ⅰ	－	壺	口縁	－	－	ナデ	ナデ	突帯	にぶい赤褐	普通			○	○	○		○	－
250	1357	J30	Ⅱ	－	壺	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	－	橙 にぶい橙	普通			○	○	○	○	○	－
250	1358	F27	Ⅱ	10891他	壺	肩	－	－	丁寧なヘラナデ	斜ナデ，指オサエ	３条沈線，櫛描波状文	橙	普通	○			○	○			－
250	1359	F25	Ⅱb	20493	壺	肩	－	－	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	３条沈線，櫛描波状文	赤褐	良好	○		○	○	○	○		ススス
250	1360	J30	Ⅱb	26968	壺	肩	－	－	ヘラナデ	ヘラ縦･横ナデ	７条沈線，櫛描波状文	にぶい橙 赤褐	普通	○		○	○	○			－
250	1361	J31	Ⅲa	30904	壺	肩	－	－	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	櫛描波状文	橙	普通	○			○	○			－
250	1362	J30･31	Ⅱ，Ⅲa	28851他	壺	肩	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	櫛描波状文	赤	良好	○		○	○	○			－
250	1363	J31	Ⅱ	30023	壺	肩	－	－	ヘラ縦ナデ	丁寧なヘラナデ	櫛描波状文	赤	良好	○		○	○	○			－
250	1364	I31	Ⅲa	28993	壺	肩	－	－	丁寧なヘラナデ	ヘラ縦ナデ	沈線，櫛描波状文	にぶい赤褐	良好								－
251	1365	K35	Ⅱb	31434	甕	底	－	6.4	ヘラ斜ナデ	ヘラ斜ナデ	－	赤 赤橙	良好	○	○	○	○				底：布目圧痕
251	1366	F30，H31	Ⅱa･b	30300他	壺	底	－	7.6	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	－	赤	良好		○	○	○	○			剥落
251	1367	H31	Ⅱa	30321	壺	底	－	7.2	－	－	－	にぶい橙	普通	○		○	○	○	○		摩耗，底：ナデ
251	1368	E21	Ⅱ	21314	壺	底	－	6.2	丁寧なヘラ縦ナデ，指オサエ	丁寧なヘラ縦ナデ	－	赤	良好	○	○	○	○	○			底：ナデ
251	1369	L34	Ⅱb	31235	壺	底	－	6.8	ヘラ縦･横ナデ	－	－	にぶい赤褐 －	普通	○		○	○	○		○	剥落
251	1370	H26	Ⅰ	18274	壺	底	－	8.0	ヘラ横ミガキ	ハケ縦ナデ	暗文	赤橙 赤灰	良好	○	○	○	○				剥落，長石，底：丁寧なナデ
251	1371	F27･28	Ⅰ	18345他	壺	底	－	7.2	－	－	－	橙	普通		○		○	○	○	○	摩耗
251	1372	I30	Ⅱb，Ⅲa	30612他	壺	胴～底	－	7.0	ヘラ斜ミガキ	ヘラ横ナデ	－	明赤褐，赤黒 赤黒	良好	○		○	○	○	○		長石，底：丁寧なナデ
251	1373	J26	Ⅲa	22531	壺	底	－	7.0	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	－	橙 赤灰	普通	○	○	○	○	○			摩耗，長石
251	1374	I29･30	Ⅱb，Ⅲa	30661他	壺	底	－	5.6	ヘラ縦ミガキ	丁寧なヘラ横ナデ	－	にぶい赤褐	良好	○		○	○	○			－

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
251	1375	E23	Ⅱ	21956	壺	底	－	6.6	縦ミガキ	縦ナデ	－	にぶい橙 褐灰	良好	○		○		○			底：丁寧なナデ
252	1376	F27	Ⅱ，Ⅱb	18895 他	鉢	口縁～胴	30.4	－	ハケ斜ナデ	ハケ斜ナデ，指オサエ	－	橙 にぶい橙	良好	○	○		○		○		長石
252	1377	I･J36	Ⅱb，Ⅲa	29549 他	鉢	口縁～胴	10	－	ハケ横ナデ	ナデ，指オサエ	－	にぶい赤褐	普通		○	○	○	○	○	○	剥落
252	1378	J28･29	Ⅱ	23582 他	鉢	完形	11.7	5.9	縦･横ナデ	－	－	橙	普通			○		○	○		摩耗，器高 14.3
252	1379	G30	Ⅱb	30375	鉢	口縁	－	－	ハケ横ナデ	ハケ横ナデ，指オサエ	凹線，突帯	にぶい赤褐	普通	○	○		○	○		○	赤石
252	1380	J30	Ⅲa	28926	鉢	脚	－	－	－	－	2条突帯	にぶい黄橙	普通	○				○	○	○	摩耗
252	1381	E31	Ⅱa	15970	土錘	完形	－	－	－	－	－	にぶい黄橙	普通							○	3.85 × 1.1 × 1.1
252	1382	G26	Ⅱb	20294	円盤状土製品	甕の胴	－	－	横ナデ	横ナデ	－	にぶい赤褐	普通				○	○		○	－
252	1383	G32	Ⅱb	36895	円盤状土製品	甕の胴	－	－	ヘラナデ	不明	穿孔	にぶい褐～褐灰 灰黄褐	普通		○	○	○	○	○	○	－
252	1384	D30	Ⅲb	16522	土製品	不明	－	－	ナデ	ナデ	沈線，絵画	にぶい黄橙	普通	○		○	○	○	○	○	朱
252	1385	F24	Ⅰ	5027	不明	把手	－	－	ナデ	ナデ	－	明赤褐	普通	○		○	○				－

第 20 表　弥生時代中期東部出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
253	1386	E41	Ⅱb	11040 他	甕	口縁～胴	32.0	－	ハケ縦･横ナデ	ハケ横ナデ	凹線，3条突帯	褐 赤褐	普通	○			○	○			スス
253	1387	G53	Ⅰ	－	甕	口縁～肩	31.6	－	ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	凹線，3条突帯	にぶい赤褐	普通	○	○	○	○	○			スス
253	1388	G44･45	Ⅱb	14212 他	甕	口縁～胴	27.0	－	丁寧なヘラナデ	－	3条突帯	にぶい赤褐	普通	○		○	○	○		○	剥落，スス
255	1389	G42	Ⅱb	11672 他	甕	口縁～胴	38.4	－	ハケ縦ナデ，横ナデ	横ナデ	凹線，3条突帯	にぶい赤褐	良好	○			○	○		○	－
255	1390	D48	Ⅱ	7288	甕	口縁	20.0	－	ヘラ横ナデ	ヘラ斜ナデ	突帯	にぶい赤褐	良好	○		○	○	○			スス
255	1391	H42	Ⅱa	8817	甕	口縁	－	－	ハケ横･斜ナデ	－	凹線	にぶい橙	普通	○		○	○	○	○	○	－
255	1392	SI40	①	15221	甕	口縁	－	－	ヘラ横ナデ→横ナデ	横ナデ	凹線	にぶい橙～灰黄褐 橙～にぶい橙	普通	○	○	○	○	○	○		スス
255	1393	K51	Ⅱa･c	2309 他	甕	口縁～胴	－	－	横ナデ，ハケ斜ナデ	ヘラナデ	凹線，突帯	赤橙	良好	○	○		○	○	○		－
255	1394	G43	Ⅱb	12104 他	甕	口縁	－	－	ナデ	ナデ	凹線	灰褐 にぶい赤褐	普通	○			○	○			－
255	1395	G42	Ⅱb	10799 他	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	3条突帯	にぶい橙，灰褐 にぶい赤褐	普通		○	○	○	○			－
255	1396	E47	Ⅱb	15513	甕	口縁	－	－	ハケ横･斜ナデ	ハケ横ナデ	－	黒褐 橙	普通	○			○		○		－
255	1397	SI40	①	15220	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	凹線	橙	普通	○	○	○	○	○		○	スス
256	1398	D48	Ⅱ	6984 他	甕	口縁～胴	34.8	－	ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	3条突帯	にぶい褐	良好	○		○	○	○			輝石
256	1399	SI40	①	15222	甕	口縁	－	－	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	－	にぶい赤褐～灰褐 にぶい橙	普通		○	○	○	○	○		－
256	1400	H44	Ⅱb	14389 他	甕	口縁	－	－	横ナデ	横ナデ	2条突帯	橙	良好				○	○			－
256	1401	H43･44	Ⅱb	12328 他	甕	口縁	24.3	－	横ナデ	横ナデ	凹線，突帯	灰褐 にぶい褐	普通		○	○		○			スス
256	1402	G45	Ⅱb，Ⅲa	14003 他	甕	口縁～胴	26.8	－	－	－	凹線，1条突帯	にぶい橙 橙	普通	○			○	○		○	摩耗
256	1403	K38	Ⅱb	23021	甕	口縁	－	－	ヘラ縦ナデ→横ナデ	ハケ横ナデ	凹線	にぶい橙	普通	○			○	○	○		－
256	1404	F43，G43	Ⅱb	12425 他	甕	口縁	18.6	－	ヘラ縦ナデ→横ナデ	横ナデ	凹線	明赤褐，褐灰 にぶい赤褐	普通			○	○	○			スス
257	1405	I44	Ⅱ	17426	甕	口縁～胴	26.8	－	ハケ斜ナデ，横ナデ	ハケ斜ナデ，ナデ	－	にぶい褐	良好				○	○			スス，灰白石
257	1406	H42･43	Ⅱa･b	8841 他	甕	口縁～胴	24.8	－	ハケナデ，横ナデ	ハケナデ，ナデ	－	にぶい赤褐 暗赤褐	普通	○			○			○	－
257	1407	K51	Ⅱc	2292 他	甕	口縁～胴上半	19.6	－	縦･横ナデ	ヘラナデ	－	にぶい橙	良好		○		○	○	○		スス，角閃石
257	1408	D41	Ⅱa	－	甕	口縁	－	－	ハケナデ	ハケナデ	－	褐	普通		○	○	○	○		○	－
257	1409	D48	Ⅱ	7717 他	甕	口縁～胴	－	－	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	－	にぶい橙	普通	○	○	○	○	○			スス
257	1410	D48	Ⅱ	7294	甕	口縁	－	－	ハケ斜ナデ，横ナデ	ハケナデ→ヘラナデ	－	にぶい橙	普通		○			○	○		スス，輝石
257	1411	F53	Ⅱ	15879	甕	口縁	－	－	ハケ縦ナデ，横ナデ	ヘラナデ	－	暗赤褐	普通	○		○	○	○			－
257	1412	D48	Ⅱ	7725	甕	口縁～胴	19.4	－	ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	凹線	灰白，にぶい赤橙 灰白	普通	○	○		○				輝石
257	1413	D47	Ⅱ	7298	甕	口縁～胴	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横･縦ナデ	凹線	赤褐	普通	○		○	○	○			スス
257	1414	I52	Ⅱ	2229	甕	口縁～胴	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	凹線	黒褐 にぶい橙	良好	○	○		○	○	○		スス
258	1415	H38	Ⅱa	13543	甕	口縁～肩	－	－	ハケ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線，櫛描波状文	赤	良好	○				○	○		－
258	1416	SI3	①	－	甕	口縁	－	－	－	ヘラ横ナデ	凹線，櫛描簾状文	にぶい赤褐	普通	○	○	○	○		○	○	－
258	1417	K51	Ⅱc	3775	甕	口縁	－	－	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線，沈線	にぶい橙	普通	○		○	○	○			スス
258	1418	I50	Ⅱ	－	甕	肩	－	－	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	波状文	灰褐 にぶい橙	普通	○		○	○	○			－

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
258	1419	E52	Ⅱ	9402	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい赤褐	普通	○		○		○			スス
258	1420	J52	Ⅱ	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい橙	普通			○	○	○			−
258	1421	K51	Ⅱ	674	甕	口縁	−	−	丁寧なヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	−	灰赤 明赤褐	良好	○			○	○	○	○	輝石
258	1422	G43	Ⅱb	12529	甕	口縁	−	−	横ナデ	横・斜ナデ	凹線	灰褐	普通	○		○	○	○			−
258	1423	E32，H42	Ⅱa，Ⅲa	8862 他	甕	口縁～胴	16.6	−	ハケナデ	ハケナデ	−	褐	普通				○	○			擬朝鮮系
258	1424	H42	Ⅱa	8884	甕	口縁	−	−	ナデ	ナデ	−	にぶい橙	普通	○		○	○	○		○	擬朝鮮系
258	1425	J54	Ⅰ	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい橙 にぶい赤褐	普通	○		○	○	○			スス，擬朝鮮系
258	1426	G43	Ⅱb	11809	甕	口縁	−	−	ナデ	ナデ	−	黒褐	普通		○	○	○	○	○		擬朝鮮系
258	1427	G42	Ⅱb	10907	甕	口縁	−	−	ナデ	ナデ	−	灰黄褐～にぶい黄褐	普通			○	○	○			擬朝鮮系
258	1428	G42	Ⅱb	−	甕	口縁	−	−	横ナデ	横ナデ	−	にぶい褐	普通		○	○	○	○			擬朝鮮系
258	1429	G44	Ⅱb	14299	甕	口縁	−	−	ハケ横ナデ	ヘラ斜ナデ	−	灰褐 にぶい橙	普通		○	○	○	○			擬朝鮮系
259	1430	D49	Ⅱ	7764 他	甕	口縁～肩	32.0	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線，３条突帯	褐灰	普通	○	○	○	○				輝石
259	1431	H38	Ⅱa	13563 他	甕	口縁～胴	31.0	−	ヘラ横ナデ	横ナデ→斜ナデ	凹線，２条突帯	にぶい褐 灰褐	普通	○			○	○			−
259	1432	I，H43	Ⅱa･b	13406 他	甕	口縁～胴	27.1	−	ハケ縦ナデ，横ナデ	横・斜ナデ	凹線，３条突帯	にぶい橙 橙	普通	○			○	○		○	−
259	1433	H43	Ⅱa	13351 他	甕	口縁	27.0	−	ハケ縦ナデ→横ナデ	ハケ横ナデ	凹線，３条突帯	にぶい黄橙 明褐	普通	○			○	○			−
259	1434	L37	Ⅲa	23271 他	甕	口縁	25.5	−	横ナデ	横ナデ	凹線，３条突帯	にぶい赤橙	普通	○		○	○	○		○	−
259	1435	D48	Ⅱ	7722	甕	口縁	20.0	−	−	ヘラ横ナデ	凹線，３条突帯	にぶい褐	良好	○	○	○	○	○			摩耗，スス，輝石
259	1436	J52	Ⅱ	2226 他	甕	口縁	31.2	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線，２条突帯	にぶい橙	普通	○		○	○	○			スス
260	1437	H43	Ⅰa，Ⅱa	13282 他	甕	口縁～胴	29.2	−	ハケ縦ナデ，横ナデ	ハケ横ナデ	凹線，３条突帯	橙	普通	○			○	○			赤石
260	1438	E･G･H44	Ⅱ，Ⅱb	14271 他	甕	口縁～胴	24.0	−	ヘラ横・斜ナデ	ヘラ斜ナデ	凹線，２条突帯	にぶい橙	普通	○			○	○		○	スス，赤石
260	1439	E44	Ⅱb	17086	甕	口縁～胴	20.6	−	ハケ斜ナデ，横ナデ	ハケ斜ナデ，横ナデ	凹線，２条突帯	にぶい橙 にぶい褐	良好	○			○	○		○	スス
260	1440	G43	Ⅱb	12188 他	甕	口縁	29.2	−	ヘラナデ	ハケ	凹線，１条突帯	にぶい褐 褐灰	普通	○	○		○	○			−
260	1441	H43	Ⅱa･b	13335 他	甕	口縁～胴	26.6	−	ハケ縦ナデ→ヘラナデ	ヘラ横ナデ	凹線，３条突帯	暗赤褐	普通	○		○	○	○			長石
260	1442	F53	Ⅱ	9283 他	甕	完形	20.5	5～5.2	ハケナデ，横・斜ナデ	ヘラナデ	１条突帯	赤・灰赤 橙	普通	○			○				コゲ，スス，角閃石，器高：31.0
261	1443	I40	Ⅱa	9190	甕	脚台	−	6.3	ハケ縦ナデ	ナデ	−	にぶい褐	普通	○			○	○			−
261	1444	G41，H42	Ⅱ，Ⅱb	12007 他	甕	脚台	−	6.6	ヘラナデ，指オサエ	ヘラナデ	−	褐 褐灰	普通	○		○	○	○			−
261	1445	I53	Ⅱ	5747	甕	脚台	−	7.0	ハケナデ	ハケナデ	−	にぶい赤褐 黒褐	普通	○		○	○	○			−
261	1446	F42	Ⅱb	11106	甕	脚台	−	8.0	ハケ縦ナデ	−	−	にぶい赤褐 黒褐	普通	○			○	○			摩耗
261	1447	K51	Ⅱc	3372	甕	脚台	−	7.5	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	−	灰褐 褐灰	普通	○	○	○	○	○			−
261	1448	H43	Ⅱa	13374	甕	脚台	−	6.2	縦ナデ	ナデ	−	灰赤	良好	○		○	○	○			底：ナデ，白粉
261	1449	H42	Ⅱb	10765	甕	脚台	−	7.4	ヘラ縦ナデ	−	−	赤褐	良好	○		○	○	○			長石
261	1450	G53	Ⅰ	−	甕	脚台	−	6.7	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	−	赤	良好	○	○	○	○		○		−
261	1451	D48	Ⅱ	7720	甕	脚台	−	5.5～7.5	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい褐	良好	○			○	○	○		−
261	1452	D50	Ⅰ	−	甕	脚台	−	6.5	ヘラナデ	ヘラナデ	−	明褐灰	普通	○	○		○	○			コゲ
261	1453	K52	Ⅱ，Ⅱc	3308 他	甕	脚台	−	6.5	ハケ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	にぶい赤褐 暗赤褐	良好	○			○	○			剥落
261	1454	F42	Ⅱa	13519	甕	脚台	−	6.5	縦ミガキ	ナデ	−	にぶい褐 にぶい黄橙	良好	○			○	○		○	−
261	1455	E52	Ⅴb	12902	甕	脚台	−	6.0	ヘラナデ	ナデ	−	赤褐 黒褐	良好	○	○	○	○	○			−
261	1456	F53	Ⅱ	9214	甕	脚台	−	6.2	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	凹線	にぶい赤褐 黒褐	普通	○		○	○	○	○		−
261	1457	D48	Ⅱ	7779	甕	脚台	−	5.5	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい赤褐 赤黒	良好	○			○	○	○		角閃石
261	1458	F53	Ⅲ	14885	甕	脚台	−	7.6	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	凹線	にぶい赤褐 黒褐	良好	○			○	○			角閃石
261	1459	G45	Ⅱb	14792	甕	脚台	−	6.4	ハケ縦ナデ	ナデ	凹線	橙 にぶい褐	普通	○		○	○	○		○	−
261	1460	−	表土	−	甕	脚台	−	8.0	−	ナデ	凹線	にぶい赤褐	普通	○	○	○	○	○			剥落
261	1461	D48	Ⅱ	7732	甕	脚台	−	7.8	ハケナデ	ヘラナデ	凹線	にぶい赤褐 黒褐	普通	○			○	○	○		剥落
261	1462	J38	Ⅱb	23003	甕	脚台	−	7.4	−	−	凹線	にぶい赤褐 灰褐	良好	○			○	○			剥落，赤石
261	1463	D48	Ⅱ	7780	甕	脚台	−	6.2	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	凹線	赤 赤褐	普通	○		○	○	○			摩耗
261	1464	I43	Ⅱb	16925	甕	脚台	−	7.5	ヘラ縦ナデ	−	凹線	にぶい橙	普通			○	○	○	○	○	−
261	1465	F42	Ⅱa	9686	甕	脚台	−	7.3	ハケ縦ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい褐	普通			○	○	○	○	○	−
261	1466	G42	Ⅱb	10802 他	甕	胴～脚台	−	7.2	ハケ縦・斜ナデ	−	凹線	明赤褐 明黄褐	良好	○				○		○	剥落，スス
262	1467	中 SD7	①	28110	蓋	つまみ～胴	5.4	−	ハケ縦ナデ，横ナデ	ナデ	−	にぶい赤褐	普通	○	○	○	○	○			−
262	1468	F53	Ⅱ	9421	蓋	口縁	22.0	−	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	突帯	灰褐	良好	○		○		○			スス，輝石
262	1469	D50	Ⅰ	−	蓋	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	M 字突帯	にぶい赤褐 赤黒	普通	○	○		○	○			輝石

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
262	1470	H42	Ⅱb	14172	蓋	口縁	−	−	横・斜ナデ	横・斜ナデ	−	にぶい橙	普通		○	○	○	○	○	○	−
262	1471	H50	Ⅰ	−	甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	突帯	にぶい橙	普通			○		○	○		スス，輝石
262	1472	D49	Ⅱ	−	蓋	口縁	−	−	丁寧なヘラ横ナデ，横ミガキ	丁寧なヘラ縦ナデ	突帯	赤褐 暗赤灰	普通			○	○	○	○		輝石
262	1473	K52	Ⅱ	2199	蓋	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	突帯	にぶい赤褐	普通	○	○	○	○	○	○		−
262	1474	C50	Ⅱb	−	蓋	口縁	−	−	ハケ横ナデ	ハケナデ	突帯	赤	良好	○	○	○	○	○		○	−
262	1475	K52	Ⅱa	2272	蓋	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい橙	普通	○			○	○	○		輝石
262	1476	L37	Ⅲa	23270	蓋	口縁	11.8	−	横ナデ	横ナデ	凹線，円孔	灰褐	普通	○			○	○	○		細砂質土
263	1477	F43·53，H42	Ⅱ，Ⅱb	9207 他	大型甕	口縁～胴	56.8	−	ハケ縦ナデ→ヘラナデ	ハケ横ナデ→ヘラナデ	凹線，M字突帯	赤 −	普通	○	○	○	○	○			スス
263	1478	古 SI3，H38·39	Ⅱa	13629 他	大型甕	口縁	54.8	−	横ナデ	横ナデ	凹線，突帯	橙	普通	○			○	○	○	○	−
263	1479	C50	Ⅱb	−	大型甕	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	赤褐	普通	○	○	○	○	○			−
263	1480	D50	Ⅰ	−	大型甕	口縁～肩	−	−	横ナデ	ヘラ縦・横ナデ	２条突帯	にぶい褐	良好	○	○	○	○				−
264	1481	G41～43	Ⅱb	10788 他	壺	口縁～胴	15.0	−	ハケ縦ナデ，ヘラミガキ	ナデ	２条沈線	明褐	普通	○			○				−
264	1482	D47	Ⅱ	7299	壺	口縁～頸	19.0	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	橙	普通	○		○		○	○		スス，輝石
264	1483	G44	Ⅱb，Ⅲa	13968 他	壺	口縁～頸	17.5	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい橙～褐	普通		○	○	○	○	○		スス
264	1484	I54	Ⅱ	5757	壺	口縁	15.0	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	にぶい赤褐	良好	○			○	○	○		−
264	1485	F53	Ⅱ	9239	壺	口縁	19.8	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	赤褐・暗赤灰	良好	○		○	○				−
264	1486	K52	Ⅱc	3316	壺	口縁	−	−	丁寧なナデ	丁寧なナデ	凹線	赤黒 にぶい赤褐	良好	○		○	○	○	○		−
264	1487	K52	Ⅱ	2155	壺	口縁	18.0	−	ハケ縦ナデ	ハケ横ナデ	突帯	にぶい赤褐，黒褐 にぶい赤褐	普通	○	○	○	○	○			−
264	1488	D48	Ⅱ	−	壺	口縁	10.8	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい赤褐	普通			○	○	○			−
264	1489	E47	Ⅱ	7067	壺	口縁	−	−	−	−	凹線	橙	普通	○			○	○	○		摩耗
264	1490	C50	Ⅰ	−	壺	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線，３条沈線，突帯	にぶい橙	良好	○		○	○		○		輝石
265	1491	中 SD7，H39	①，Ⅱb	−	壺	口縁～頸	20.1	−	ヘラ縦ナデ，横ナデ	ヘラ横ナデ，縦・横ナデ	二叉状口縁	にぶい橙 灰黄褐	普通	○	○	○	○	○			−
265	1492	E·F41	Ⅱb	11273	壺	口縁	22.0	−	丁寧なヘラナデ	横ミガキ	凹線，二叉状口縁	褐	良好	○		○	○				−
265	1493	C51	Ⅰ	−	壺	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	二叉口縁，ヘラ刻み	にぶい橙	普通	○	○	○		○	○		輝石
265	1494	E42	Ⅱa	9961	壺	口縁	18.4	−	ヘラ縦ミガキ	丁寧な横ナデ	凹線	にぶい赤褐 にぶい褐，黒褐	普通	○		○	○	○	○	○	剥落
265	1495	G44	Ⅱb	14305	壺	口縁～肩	6.9	−	横ミガキ，ナデ	ハケ縦・横ナデ	凹線，２条突帯	明赤褐	普通			○	○	○			長石
265	1496	E45	Ⅱb	15620 他	壺	口縁～肩	12.4	−	横ナデ	丁寧な横ナデ	凹線，１条突帯	赤	普通	○		○			○		細砂質土，長石
265	1497	G43	Ⅱa·b	9032 他	壺	口縁	13.2	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	凹線	橙	良好		○	○	○	○			−
265	1498	G43	Ⅱb	11825 他	壺	口縁	16.4	−	丁寧なヘラナデ	ハケ横ナデ	穿孔２個	赤	良好			○	○	○			−
265	1499	G42	Ⅱb	10884 他	壺	口縁	18.0	−	横ナデ	横ナデ	４条沈線	明赤褐	普通	○	○	○	○				−
265	1500	H43	Ⅱb	11862 他	壺	口縁	−	−	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	４条沈線	にぶい褐	普通	○	○		○	○			−
265	1501	G49	Ⅱa	8910	壺	口縁	−	−	ヘラ縦・横ナデ	ヘラ横ナデ	５条沈線	褐 にぶい褐	良好	○	○		○				−
265	1502	I53	Ⅱ	−	壺	肩	−	−	ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	櫛描波状文	橙	普通				○	○	○		輝石
265	1503	中 SD7	①	25354 他	壺	頸	−	−	−	ヘラナデ，ナデ	櫛描圏線・波状文	にぶい褐 灰黄褐	普通		○	○	○	○	○		スス
265	1504	H43，44	Ⅱb	14171 他	壺	口縁	−	−	横ミガキ	ナデ	穿孔	にぶい褐，にぶい橙	普通	○		○	○	○		○	−
265	1505	中 SK3	①	24468 他	壺	口縁～頸	8.4	−	ヘラ縦・横ナデ	ヘラ横ナデ	−	にぶい黄橙	普通			○	○	○	○		−
266	1506	H43	Ⅱa·b	14128 他	壺	肩	−	−	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	７条突帯	明赤褐	良好	○	○		○				赤石
266	1507	F41	Ⅱb	11235	壺	肩	−	−	横ナデ	ナデ	４条突帯	にぶい橙	良好	○	○	○	○		○		−
266	1508	D51	Ⅰ	−	壺	底	−	4.6～5.0	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい赤褐 にぶい橙	良好	○					○		摩耗，角閃石
266	1509	L37	Ⅱb	26765 他	壺	底	−	8.4	ヘラ縦ナデ	−	−	橙	普通	○		○	○	○	○		−
266	1510	D48	Ⅱ	7706	壺	底	−	8.0	ハケナデ	−	−	暗褐 にぶい橙	良好	○		○	○	○	○		剥落・底：木葉痕
266	1511	E40	Ⅱb	15580	壺	底	−	6.0	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	橙 赤灰	良好	○		○		○			スス
266	1512	H43	Ⅱb	15616	壺	底	−	6.0	縦ナデ	ナデ	−	赤	良好		○	○		○	○		剥落
266	1513	G51	Ⅰ	−	壺	底	−	7.0	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい褐 にぶい橙	普通	○	○	○	○	○			剥落
266	1514	G51	Ⅰ	−	壺	胴下半～底	−	7.5	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい橙 赤褐	普通	○		○	○	○			剥落
266	1515	D48	Ⅱ	7175 他	壺	底	−	6.7	丁寧なヘラナデ	ヘラナデ	−	明赤褐	良好			○	○	○	○		剥落
266	1516	H43·44	Ⅱb	14153 他	壺	底	−	4.2	ヘラナデ	丁寧なナデ	−	赤・暗赤灰 灰黄褐	良好		○	○	○				底:ヘラケズリ，ナデ
266	1517	C50	Ⅱb	−	壺	底	−	5.8	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	−	にぶい橙	良好	○	○		○				−
266	1518	SD36	①	25355	壺	底	−	3.5	縦ミガキ	−	−	にぶい赤褐 灰褐	普通	○	○		○	○	○		摩耗
266	1519	H43	Ⅱb	12373 他	壺	底	−	5.6	丁寧なナデ	丁寧なナデ	−	明赤褐	良好	○			○	○	○		−
266	1520	F43	Ⅱb	11093	壺	底	−	10.2	ハケ縦ナデ	ヘラナデ	−	赤橙 にぶい黄橙	良好	○		○		○			長石，底：ケズリ，ナデ
266	1521	D41	Ⅱb	12944	壺	底	−	10.4	ハケ縦ナデ	ヘラ横ナデ	−	橙 灰褐	良好	○	○		○	○	○		底：ヘラナデ
266	1522	F41	Ⅱb	11236	壺	底	−	7	縦ナデ	ヘラ縦ナデ	−	赤 暗赤灰	良好	○				○			長石

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外内	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
266	1523	C51	Ⅰ	−	壺	底	−	5.7	丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	−	明赤褐 にぶい赤褐	普通	○				○	○		角閃石，底：圧痕
267	1524	G44	Ⅱb	13870 他	鉢	口縁～胴	19.4	−	斜ナデ，指オサエ	斜ナデ，指オサエ	−	にぶい橙～褐灰 褐灰	普通	○	○	○	○	○		○	スス
267	1525	D･E42	Ⅰ，Ⅱb	11088 他	鉢	口縁	15.4	−	ナデ，指オサエ	ナデ，指オサエ	−	にぶい赤褐 にぶい橙	普通	○	○		○	○			−
267	1526	K52	Ⅱa	2148 他	鉢	完形	11.8	5.6	ヘラナデ	ヘラナデ	−	にぶい黄橙	普通	○	○		○		○		角閃石，底：褐灰，器高：5.1
267	1527	F42	Ⅱb	9727	鉢	口縁	−	−	ナデ	ナデ	−	にぶい橙～橙 にぶい橙，黄灰	普通	○		○	○	○	○		−

第 21 表　縄文時代晩期～弥生時代西部石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
269	1528	L28	Ⅲa	34143	打製石鏃	1.9	1.7	0.4	0.8	緻密安山岩	
269	1529	F31	Ⅲa	40281	打製石鏃	1.8	1.5	0.2	0.6	ホルンフェルス	
269	1530	F30	Ⅲa	38938	打製石鏃	1.6	1.3	0.4	0.6	緻密安山岩	
269	1531	E31	Ⅲa	38830	打製石鏃	(1.2)	1.8	0.5	(0.9)	緻密安山岩	
269	1532	中 SD8	④	25379	打製石鏃	(1.1)	(1.4)	0.2	(0.3)	緻密安山岩	
269	1533	G31	Ⅲa	38671	打製石鏃	(1.0)	1.2	0.2	(0.2)	黒曜石	
269	1534	G31	Ⅱ	−	打製石鏃	(0.8)	(1.3)	0.3	(0.3)	黒曜石	
269	1535	F30	Ⅱb	37398	打製石鏃	2.0	1.3	0.4	0.9	チャート	
269	1536	G31	Ⅲa	29019	打製石鏃	(1.7)	1.2	0.3	(0.5)	緻密安山岩	
269	1537	E30	Ⅲa	38972	打製石鏃	1.6	1.2	0.3	0.4	緻密安山岩	
269	1538	F31	Ⅱb	39326	打製石鏃	(1.6)	1.2	0.4	(0.6)	緻密安山岩	
269	1539	G31	Ⅲa	40576	打製石鏃	(1.1)	1.1	0.4	(0.5)	チャート	
269	1540	E30	Ⅲa	38185	打製石鏃	(1.4)	1.4	0.3	(0.5)	黒曜石	
269	1541	F36	撹乱	−	打製石鏃	(2.0)	(1.5)	0.3	(0.7)	緻密安山岩	
269	1542	E31	Ⅲa	38828	打製石鏃	1.9	1.5	0.4	0.6	緻密安山岩	
269	1543	E30	Ⅲa	38963	打製石鏃	1.6	1.4	0.3	0.4	緻密安山岩	
269	1544	E30	Ⅲa	38173	打製石鏃	1.5	1.5	0.3	0.5	緻密安山岩	
269	1545	C28	Ⅱb	17216	打製石鏃	(1.5)	(1.2)	0.2	(0.3)	黒曜石	
269	1546	K30	Ⅱ	23726	打製石鏃	1.6	(1.4)	0.3	(0.4)	黒曜石	
269	1547	F31	Ⅲa	38788	打製石鏃	1.4	(1.4)	0.4	(0.5)	緻密安山岩	
269	1548	K28	Ⅱ	24403	打製石鏃	(1.0)	1.3	0.3	(0.4)	玉髄	
269	1549	古 SI4	−	−	打製石鏃	(1.4)	1.6	0.4	(0.8)	緻密安山岩	
269	1550	J35	Ⅲa	35595	打製石鏃	2.5	1.6	0.5	1.4	チャート	
269	1551	K29	Ⅲa	28957	打製石鏃	1.7	1.1	0.3	0.5	緻密安山岩	
269	1552	G27	Ⅱb	20170	打製石鏃	1.8	1.3	0.3	0.4	黒曜石	
269	1553	F31	Ⅲa	40077	打製石鏃	(1.4)	(1.4)	0.3	(0.5)	緻密安山岩	
269	1554	F31	Ⅲa	40485	打製石鏃	(1.3)	1.4	0.4	(0.6)	黒曜石	
269	1555	G30	Ⅱb	30367	打製石鏃	(1.0)	(1.6)	0.3	(0.4)	黒曜石	
270	1556	E30	Ⅲa	38177	打製石鏃	(0.9)	1.7	0.3	(0.3)	黒曜石	
270	1557	F31	Ⅱb	39636	打製石鏃	(0.7)	1.5	0.3	(0.3)	黒曜石	
270	1558	J30	Ⅲa	28914	打製石鏃	1.6	1.9	0.3	0.6	緻密安山岩	
270	1559	H29	Ⅲa	32809	打製石鏃	(2.8)	2.2	0.5	(2.2)	黒曜石	
270	1560	F30	Ⅲa	38241	打製石鏃	(2.1)	(1.3)	0.4	(0.9)	緻密安山岩	
270	1561	I30	Ⅲa	31869	打製石鏃	(1.4)	(1.4)	0.3	(0.5)	黒曜石	
270	1562	G31	Ⅲa	38669	打製石鏃	1.5	1.2	0.3	0.4	玉髄	
270	1563	G31	Ⅱa	30327	打製石鏃	1.3	1.1	0.3	0.3	黒曜石	
270	1564	G32	Ⅱb	39519	打製石鏃	(1.6)	(1.0)	0.4	(0.4)	緻密安山岩	
270	1565	H30	Ⅲa	32699	打製石鏃	(1.6)	(1.4)	0.4	(0.5)	黒曜石	
270	1566	E30	Ⅲa	38169	打製石鏃	(1.5)	(1.0)	0.3	(0.3)	黒曜石	
270	1567	G31	Ⅱb	31131	打製石鏃	(0.9)	(1.1)	(0.3)	(0.2)	黒曜石	
270	1568	E21	Ⅱ	19586	磨製石鏃	(2.5)	1.0	0.2	(0.9)	頁岩	
270	1569	J29	Ⅲa	28764	磨製石鏃	2.2	2.0	0.2	0.6	頁岩	
270	1570	J29	Ⅱb	27212	磨製石鏃	(2.6)	2.0	0.2	(1.3)	頁岩	
270	1571	J29	Ⅱb	27224	磨製石鏃	(2.4)	(1.7)	0.2	(0.7)	頁岩	
270	1572	F25	Ⅲb	−	磨製石鏃	(2.6)	(1.8)	(0.2)	(0.9)	頁岩	
270	1573	K30	Ⅱ	26297	磨製石鏃	(2.9)	(2.2)	0.3	(1.9)	頁岩	
270	1574	H31	Ⅱ	28437	磨製石鏃	4.0	2.5	0.3	3.8	頁岩	
270	1575	H36	Ⅳa	36260	磨製石鏃	(2.8)	(2.8)	0.4	(3.3)	頁岩	
271	1576	F31	Ⅱb	37119	石匙	4.5	5.8	1.1	21.1	緻密安山岩	
271	1577	H30	Ⅱ	24013	石匙	4.2	3.5	0.6	9.5	ホルンフェルス	
271	1578	I36	Ⅲa	29169	石匙	4.4	8.5	0.9	40.7	ホルンフェルス	
271	1579	F32	Ⅲb	16467	石匙	(5.0)	(7.9)	0.7	(24.9)	ホルンフェルス	
271	1580	F26	Ⅱ	19435	削器･掻器類	7.9	5.3	1.1	35.8	緻密安山岩	
271	1581	D21	Ⅱ	17965	削器･掻器類	6.7	3.1	0.7	14.1	頁岩	
272	1582	F31	Ⅲa	40699	削器･掻器類	1.5	4.1	0.9	5.3	玉髄	
272	1583	J30	Ⅲa	28869	二次加工剥片	2.9	2.0	0.7	3.3	黒曜石	
272	1584	中 SD5	①	37313	石錐	1.3	1.2	0.3	0.4	緻密安山岩	
272	1585	G31	Ⅲa	33401	石錐	(1.3)	1.2	0.4	(0.4)	黒曜石	

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
272	1586	E30	Ⅲa	38187	石錐	2.1	1.4	0.5	1.1	緻密安山岩	
272	1587	I31	Ⅲa	32240	石錐	2.4	1.7	0.5	1.4	チャート	
272	1588	F30	Ⅲa	38347	石錐	2.0	1.1	0.6	0.7	黒曜石	
272	1589	F30	Ⅲa	38350	石錐	2.3	1.0	0.8	1.3	緻密安山岩	
272	1590	E22	Ⅱ	19625	石錐	3.4	1.7	1.5	4.8	緻密安山岩	
272	1591	G31	Ⅱ	27480	石錐	3.4	0.9	0.8	2.3	緻密安山岩	
272	1592	H32	Ⅵ	37895	石錐	(2.2)	0.9	0.9	(1.6)	黒曜石	
272	1593	F31	Ⅲa	38787	楔形石器	1.8	1.4	0.7	1.2	黒曜石	
272	1594	F31	Ⅲa	40079	楔形石器	1.1	1.4	0.6	0.6	黒曜石	
273	1595	D27	Ⅱb	20587	石核	9.2	5.6	3.1	150.0	黒色安山岩	
273	1596	J23	Ⅱ	18238	石核	4.9	4.5	3.8	68.9	黒曜石	
273	1597	G32	Ⅱb	－	石核	1.8	2.3	2.2	6.5	鉄石英	
274	1598	F27	Ⅱ	18888	横刃形石器	6.0	12.5	2.6	174.6	砂岩	
274	1599	G30	Ⅲa	33554	横刃形石器	6.4	11.6	1.7	102.5	ホルンフェルス	
274	1600	I31	Ⅲa	33152	横刃形石器	6.7	(9.4)	1.3	(64.3)	ホルンフェルス	
274	1601	E24	Ⅱa	20047	横刃形石器	5.1	9.4	1.1	76.3	ホルンフェルス	
274	1602	J31	Ⅲa	30594	横刃形石器	(5.9)	(4.4)	0.7	(14.9)	頁岩	
274	1603	I30	Ⅲa	33193	横刃形石器	(5.6)	(5.6)	1.2	(32.8)	頁岩	
274	1604	F28	Ⅰ	18811	石包丁	4.1	4.4	0.9	19.9	頁岩	
275	1605	K30	Ⅱb	27868	磨製石斧	(13.7)	(5.6)	2.1	(199.0)	ホルンフェルス	
275	1606	中 SD8	④	25381	磨製石斧	(11.2)	(5.4)	2.8	(214.1)	頁岩	
275	1607	E30	Ⅲa	38193	磨製石斧	(6.3)	(4.6)	2.0	(71.7)	ホルンフェルス	
275	1608	I36	Ⅲa	29146	磨製石斧	(10.0)	(5.4)	(2.4)	(110.0)	ホルンフェルス	
275	1609	中 SD5	①	17455	磨製石斧	(5.0)	(5.0)	(3.1)	(52.8)	砂岩	
275	1610	F28	Ⅱ	19349	磨製石斧	(11.7)	(4.9)	2.4	(180.9)	ホルンフェルス	
275	1611	J35	Ⅰ	－	磨製石斧	(6.3)	(4.3)	1.3	(47.9)	頁岩	
275	1612	J32	Ⅰ	－	磨製石斧	(7.2)	(6.4)	1.2	(74.8)	ホルンフェルス	
275	1613	L31	Ⅲa	32270	磨製石斧	(5.8)	4.3	0.9	(29.2)	ホルンフェルス	
275	1614	F31	Ⅱb	38413	磨製石斧	(12.5)	4.0	2.0	(157.5)	ホルンフェルス	
275	1615	F29	Ⅱ	23504	磨製石斧	(11.7)	4.9	2.0	(172.5)	頁岩	
275	1616	J31	Ⅰ	－	磨製石斧	10.8	4.4	1.5	94.1	頁岩	
275	1617	J33	Ⅰ	36275	磨製石斧	8.1	4.0	1.2	47.8	ホルンフェルス	
275	1618	E26	Ⅱb	－	磨製石斧	(7.1)	5.2	1.2	(49.4)	ホルンフェルス	
275	1619	I28	Ⅱ	23453	磨製石斧	(7.6)	(5.1)	1.1	(57.3)	頁岩	
276	1620	L30	Ⅱ	34066	磨製石斧	(8.5)	(4.4)	1.2	(53.2)	頁岩	
276	1621	I36	Ⅲa	29191	磨製石斧	(4.5)	5.6	1.2	(42.5)	ホルンフェルス	
276	1622	L31	Ⅲa	32316	磨製石斧	(5.9)	5.1	1.1	(41.0)	ホルンフェルス	
276	1623	I31	Ⅱ	28307	磨製石斧	(3.7)	(2.6)	(0.8)	(8.1)	頁岩	
276	1624	J31	Ⅱ	30579	磨製石斧	(9.1)	(3.8)	(0.5)	(21.6)	頁岩	
276	1625	K30	Ⅱ	23772	磨製石斧	(7.1)	(4.9)	(0.9)	(30.3)	ホルンフェルス	
276	1626	I27	Ⅲa	22427	打製石斧	15.0	4.8	1.7	149.9	ホルンフェルス	
276	1627	J28	Ⅱ	23844	打製石斧	11.5	5.4	2.2	158.1	頁岩	
276	1628	中 SD15	①	18706	打製石斧	10.2	5.1	2.0	105.8	ホルンフェルス	
276	1629	K36	Ⅲa	23200	打製石斧	(7.5)	(3.8)	(2.1)	(68.9)	ホルンフェルス	
276	1630	K28	Ⅱb	27774	打製石斧	(10.9)	(5.5)	1.8	(149.6)	頁岩	
276	1631	E33	Ⅲb	16368	打製石斧	(10.8)	5.1	1.8	(137.4)	ホルンフェルス	
276	1632	H27	Ⅰ	－	打製石斧	(12.2)	(5.0)	(2.0)	(117.2)	頁岩	
276	1633	F35	Ⅱ	－	打製石斧	(9.4)	6.0	1.8	(112.8)	ホルンフェルス	
276	1634	I31	Ⅱ	28230	打製石斧	(11.3)	6.0	2.2	(175.7)	頁岩	
277	1635	E22	Ⅱ	19646	打製石斧	(18.3)	8.9	2.5	(353.0)	ホルンフェルス	
277	1636	G25	Ⅰ	18757	打製石斧	15.9	6.6	2.2	236.6	頁岩	
277	1637	K32	Ⅰ	－	打製石斧	9.4	6.0	1.2	71.6	頁岩	
277	1638	J36	Ⅲa	29286	打製石斧	(12.0)	7.5	1.5	(121.4)	ホルンフェルス	
277	1639	I26	Ⅰ	17889	打製石斧	(13.0)	(6.3)	1.4	(145.2)	ホルンフェルス	
277	1640	F28	Ⅰ	22011	打製石斧	(14.2)	(11.7)	2.1	(388.3)	頁岩	
277	1641	E26	Ⅲa	22105	打製石斧	16.0	6.7	2.5	219.2	ホルンフェルス	
277	1642	H27	Ⅰ	17894	打製石斧	13.8	6.2	1.5	156.1	頁岩	
277	1643	E26	Ⅱa	19473	打製石斧	12.7	5.3	1.6	109.3	ホルンフェルス	
277	1644	K27	Ⅱ	24127	打製石斧	13.0	5.2	2.2	163.5	ホルンフェルス	
278	1645	E26	Ⅲ	－	打製石斧	(12.3)	6.3	1.3	(121.8)	ホルンフェルス	
278	1646	G30	Ⅱ	33726	打製石斧	10.9	5.3	1.5	101.9	ホルンフェルス	
278	1647	G32	Ⅱa	29598	打製石斧	(9.9)	5.4	1.0	(61.7)	ホルンフェルス	
278	1648	F32	Ⅲa	40496	打製石斧	(11.4)	7.1	1.9	(157.8)	ホルンフェルス	
278	1649	D31	Ⅲb	16689	打製石斧	(5.9)	(4.9)	(1.1)	(32.4)	ホルンフェルス	
278	1650	I36	Ⅲa	29218	打製石斧	12.2	6.4	1.3	98.7	ホルンフェルス	
278	1651	G25	Ⅲa	21666	打製石斧	15.3	7.4	1.9	255.7	頁岩	
278	1652	D26	Ⅱa	19482	打製石斧	13.5	7.3	1.7	151.3	ホルンフェルス	
278	1653	中 SD5	①	17460	打製石斧	(9.8)	5.9	1.8	(106.8)	頁岩	
278	1654	F29	Ⅲa	36389	打製石斧	(14.5)	8.7	2.2	(306.1)	ホルンフェルス	
278	1655	F32	Ⅲb	16962	打製石斧	(16.3)	8.4	3.5	(424.0)	ホルンフェルス	
279	1656	中 SD5	①	17461	打製石斧	14.5	5.9	1.6	125.1	ホルンフェルス	
279	1657	H34	Ⅰ	36274	打製石斧	11.8	5.5	2.0	138.4	ホルンフェルス	
279	1658	I31	Ⅲa	32244	打製石斧	(11.1)	6.3	2.0	(143.0)	ホルンフェルス	
279	1659	H29	Ⅲa	33504	打製石斧	(12.6)	7.2	1.6	(177.1)	頁岩	
279	1660	I30	Ⅲa	31936	打製石斧	(10.1)	7.0	1.0	(89.3)	頁岩	
279	1661	中 SD5	②	17456	打製石斧	(9.8)	7.0	1.4	(95.7)	ホルンフェルス	
279	1662	F29	Ⅲa	36388	打製石斧	18.1	11.7	2.1	443.0	ホルンフェルス	
279	1663	G27	Ⅰ	17896	打製石斧	10.2	6.8	1.6	114.5	ホルンフェルス	
279	1664	F32	Ⅲb	16468	打製石斧	11.3	7.5	2.6	183.1	ホルンフェルス	

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
279	1665	I31	Ⅱ・Ⅲa	29618 他	打製石斧	(15.6)	(9.1)	1.9	(254.6)	ホルンフェルス	
279	1666	I30	Ⅲa	31865	打製石斧	(12.3)	9.4	1.9	(246.8)	ホルンフェルス	
280	1667	中 SD5	②	17463	打製石斧	(8.0)	(9.3)	(2.2)	(209.3)	ホルンフェルス	
280	1668	H26	Ⅲa	22202	打製石斧	(8.1)	(8.7)	(2.6)	(187.5)	頁岩	
280	1669	H27	Ⅲ	22009	打製石斧	(12.4)	(10.5)	(2.5)	(358.0)	ホルンフェルス	
280	1670	H26	Ⅱ	20393	打製石斧	(9.0)	(8.7)	(1.7)	(110.5)	頁岩	
280	1671	E21	Ⅱ	19593	打製石斧	(8.9)	8.1	1.0	(99.2)	ホルンフェルス	
280	1672	G26	Ⅱb	20338	打製石斧	(7.2)	(10.3)	(1.5)	(125.8)	ホルンフェルス	
280	1673	E31	Ⅲb	16771	打製石斧	(7.0)	(5.3)	(1.2)	(51.4)	ホルンフェルス	
280	1674	K29	Ⅲa	28696	打製石斧	(8.3)	(6.0)	(1.4)	(73.4)	ホルンフェルス	
280	1675	中 SD5	①	17459	打製石斧	(9.7)	(6.6)	(1.9)	(129.5)	頁岩	
280	1676	F26	Ⅲa	21454	打製石斧	(9.4)	(7.8)	(2.0)	(130.6)	ホルンフェルス	
280	1677	K28	Ⅱ	23832	打製石斧	(7.6)	(5.2)	(1.3)	(57.3)	ホルンフェルス	
280	1678	中 SD5	①	17497	打製石斧	(8.6)	(5.1)	(1.8)	(68.7)	頁岩	
281	1679	F32	Ⅱa	11399	打製石斧	(11.8)	(7.2)	(1.6)	(112.9)	ホルンフェルス	
281	1680	E31	Ⅲb	16861	打製石斧	(7.6)	(7.1)	(1.7)	(93.6)	ホルンフェルス	
281	1681	F35	Ⅱ	−	打製石斧	(7.5)	(4.9)	(1.6)	(71.5)	ホルンフェルス	
281	1682	I26	Ⅱ	21236	打製石斧	(6.6)	(10.6)	(1.8)	(170.8)	ホルンフェルス	
281	1683	中 SD5	①	17471	打製石斧	(8.9)	5.9	2.0	(112.8)	ホルンフェルス	
281	1684	中 SD14	①	19451	打製石斧	(5.7)	(6.7)	(1.7)	(76.5)	ホルンフェルス	
281	1685	古 SI4	①	37918	打製石斧	(5.9)	(6.0)	(1.6)	(63.5)	ホルンフェルス	
281	1686	P2698	①	−	打製石斧	(5.2)	(6.9)	(1.2)	(54.9)	ホルンフェルス	
281	1687	F31	Ⅲa	40160	打製石斧	(5.9)	(6.3)	(1.5)	(89.3)	頁岩	
281	1688	E32	Ⅲa	16217	打製石斧	(5.4)	(7.5)	(1.5)	(70.2)	ホルンフェルス	
281	1689	E32	Ⅲb	16255	打製石斧	(5.3)	(5.6)	(1.8)	(64.9)	頁岩	
281	1690	D31	Ⅲb	16867	打製石斧	(5.0)	(5.1)	(1.9)	(53.2)	ホルンフェルス	
281	1691	E31	Ⅲb	16859	打製石斧	(4.6)	(6.4)	(1.4)	(51.2)	頁岩	
281	1692	E33	Ⅱb	15928	打製石斧	(7.4)	(6.3)	(1.7)	(97.0)	ホルンフェルス	
281	1693	H31	Ⅲa	33010	打製石斧	(11.2)	8.4	1.8	(185.6)	ホルンフェルス	
281	1694	F26	Ⅱ	19429	打製石斧	(10.1)	7.1	1.0	(77.7)	頁岩	
282	1695	中 SD5	①	17464	打製石斧	(6.9)	(6.9)	(1.0)	(52.4)	ホルンフェルス	
282	1696	L36	Ⅲa	23493	打製石斧	(10.2)	7.5	1.9	(159.1)	ホルンフェルス	
282	1697	F30	Ⅱb	37348	打製石斧	12.0	5.3	1.7	117.5	頁岩	
282	1698	I28	Ⅱ	23437	打製石斧	(8.4)	5.2	1.5	(68.4)	ホルンフェルス	
282	1699	F31	Ⅲa	38865	打製石斧	8.0	6.7	2.0	91.5	ホルンフェルス	
282	1700	中 SD13	①	19445	打製石斧	7.5	12.0	1.2	101.7	ホルンフェルス	
282	1701	G27	Ⅲa	22175	打製石斧	5.8	11.7	1.3	77.7	ホルンフェルス	
282	1702	F31	Ⅲa	40134	敲石	7.4	5.1	2.5	148.5	凝灰岩	
282	1703	D21	Ⅱ	19698	敲石	9.6	5.2	6.1	492.0	頁岩	
282	1704	F32	Ⅱb	36988	敲石	10.2	5.7	3.3	300.8	砂岩	
282	1705	K29	Ⅱ	25935	敲石	(11.1)	3.9	2.4	(142.4)	ホルンフェルス	
282	1706	L30	Ⅲa	33874	敲石	(7.2)	5.7	4.6	(263.3)	砂岩	
282	1707	F26	Ⅰ	18157	敲石	8.1	3.6	2.4	77.7	砂岩	
282	1708	中 SD5	①	17501	敲石	(7.5)	(4.2)	(2.6)	(117.6)	砂岩	
282	1709	F31	Ⅱb	36850	敲石	(5.3)	2.3	2.6	(51.6)	砂岩	
283	1710	H30	Ⅲa	33457	敲石	11.7	8.2	5.4	818.5	安山岩	
283	1711	J26	Ⅱ	−	磨石･敲石類	8.3	7.5	4.5	379.3	安山岩	
283	1712	中地 3	②	22958	磨石･敲石類	7.3	7.4	4.2	311.4	安山岩	
283	1713	I29	Ⅱ	24642	磨石･敲石類	6.3	6.4	2.2	132.9	花崗岩	
283	1714	I31	Ⅲa	33170	磨石･敲石類	(7.0)	9.8	4.5	(439.0)	花崗岩	
283	1715	G31	Ⅲa	40577	磨石･敲石類	11.2	7.3	4.7	598.0	砂岩	
283	1716	K25 中地 3	①	−	磨石･敲石類	9.9	8.7	4.2	423.0	凝灰岩	
283	1717	I28	Ⅱ	23522	磨石･敲石類	7.7	7.0	2.7	204.0	砂岩	
283	1718	E31･H27	Ⅱ・Ⅲa	19070 他	磨石･敲石類	(9.0)	(6.5)	3.5	(324.3)	安山岩	
284	1719	E26	Ⅲa	21548	磨石･敲石類	8.4	6.9	3.6	291.5	花崗岩	
284	1720	F27	Ⅱ	18903	磨石･敲石類	(8.0)	(9.5)	(5.5)	(473.0)	砂岩	
284	1721	K29	Ⅱ	25241	磨石･敲石類	6.0	5.6	2.0	90.3	砂岩	
284	1722	I26	Ⅱ	19289	磨石･敲石類	4.5	4.3	3.2	83.9	砂岩	
284	1723	K29	Ⅱ	25938	磨石･敲石類	7.0	5.2	2.9	153.0	安山岩	
284	1724	H26	Ⅰ	18257	磨石･敲石類	(8.2)	(10.0)	(5.9)	(688.0)	安山岩	
284	1725	E26	Ⅲa	21561	磨石･敲石類	(6.3)	(9.1)	(4.7)	(364.4)	砂岩	
284	1726	G26	Ⅱ	19228	磨石･敲石類	11.9	9.7	4.6	808.0	花崗岩	
284	1727	E21	Ⅱ	21138	磨石･敲石類	(7.9)	(11.0)	3.9	(586.0)	安山岩	
284	1728	G26	Ⅰ	18466	磨石･敲石類	(11.1)	(7.2)	6.4	(604.0)	安山岩	
285	1729	G31	Ⅱb	31130	磨石･敲石類	9.9	8.8	4.7	510.0	砂岩	
285	1730	F23	Ⅰ	−	磨石･敲石類	(6.1)	(9.2)	(4.5)	(363.8)	砂岩	
285	1731	G30	Ⅲa	32508	磨石･敲石類	8.4	6.5	6.3	387.0	斑れい岩	
285	1732	J35	Ⅲb	36588	石皿･台石類	18.9	26.7	16.3	8600.0	砂岩	
285	1733	F27	Ⅱb	20	石皿･台石類	(16.8)	(13.3)	7.9	(2200.0)	花崗岩	
285	1734	I26	Ⅱ	21237	石皿･台石類	(14.5)	12.2	7.3	(1700.0)	砂岩	
285	1735	D26	Ⅱ	19104	石皿･台石類	(9.6)	12.0	3.2	(680.0)	砂岩	
286	1736	H27	Ⅱ	19090	石皿･台石類	(14.8)	(14.8)	5.0	(2180.0)	花崗岩	
286	1737	F32	Ⅱb	36963	石皿･台石類	(9.3)	(8.5)	(4.7)	(502.0)	砂岩	
286	1738	中 SD7	①	36563	石皿･台石類	(6.8)	(8.5)	(5.6)	(402.7)	花崗岩	
286	1739	G26	Ⅱb	20295	石皿･台石類	(8.5)	(8.7)	(6.8)	(576.0)	斑れい岩	
286	1740	D28	Ⅱ	17132	砥石	9.6	10.2	8.4	903.7	砂岩	
286	1741	H30	Ⅲa	33452	砥石	14.3	8.0	10.0	1304.9	砂岩	
286	1742	E26	Ⅲ	−	砥石	(14.4)	(9.3)	(5.9)	(906.0)	砂岩	

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
286	1743	H36	Ⅲa	29040	砥石	(11.1)	7.4	4.8	(582.0)	砂岩	
286	1744	中SD5	①	17468	砥石	(8.1)	5.6	3.6	(215.8)	砂岩	
287	1745	H31	Ⅱb	30828	砥石	(7.8)	(9.3)	(3.6)	(361.6)	砂岩	
287	1746	G24	Ⅱ	22125	砥石	6.0	7.6	2.2	163.7	砂岩	
287	1747	J22	Ⅱ	20276	砥石	(7.6)	(9.6)	1.9	(189.5)	砂岩	
287	1748	I30	Ⅲa	31874	砥石	9.6	8.6	3.1	429.0	砂岩	
287	1749	K35	Ⅲa	31674	砥石	9.6	5.4	2.3	109.6	砂岩	
287	1750	F28	Ⅲa	22521	砥石	9.3	7.0	1.5	115.9	砂岩	
287	1751	H27	Ⅲa	－	砥石	(8.8)	(7.0)	(1.6)	(104.3)	砂岩	
287	1752	J36	Ⅲa	29559	砥石	(9.5)	3.9	1.1	(47.0)	頁岩	
287	1753	E26	Ⅲ	－	砥石	7.6	5.6	0.9	51.3	砂岩	
287	1754	I30	Ⅱ	24705他	砥石	(13.0)	(7.9)	(6.5)	(77.2)	砂岩	
287	1755	F25	Ⅰ	18450	砥石	6.4	4.0	1.4	26.6	片岩	
287	1756	J28	Ⅰ	－	砥石	(10.7)	4.6	2.1	(189.5)	砂岩	
287	1757	K35	Ⅲa	33124	砥石	5.2	2.4	2.0	45.1	砂岩	
287	1758	I30	Ⅱ	24758	砥石	(4.9)	3.2	3.0	(79.3)	砂岩	
287	1759	F29･G31	Ⅰ・Ⅱ	23505他	砥石	(5.4)	4.1	1.9	(51.9)	砂岩	
288	1760	H29	Ⅲa	33516	紡錘車	(5.1)	2.8	0.6	(10.6)	結晶片岩	
288	1761	F32	Ⅱa	11400	管玉	2.8	0.8	0.8	2.5	滑石	
288	1762	F31	Ⅲa	40523	棗玉	2.0	1.3	1.1	5.3	クロム白雲母	
288	1763	H34	Ⅰ	－	異形石器	2.0	1.5	0.3	0.5	黒曜石	
288	1764	E30	Ⅲa	39044	異形石器	2.0	1.1	0.4	0.7	黒曜石	
288	1765	F31	Ⅲa	38879	異形石器	2.0	1.0	0.3	0.5	黒曜石	
288	1766	E27	Ⅰ	18122	軽石製品	15.6	11.5	7.4	267.9	軽石	
288	1767	I26	Ⅰ	－	軽石製品	17.1	11.9	10.3	425.6	軽石	
289	1768	E25	Ⅲa	21653	軽石製品	14.1	13.0	6.1	375.7	軽石	
289	1769	F31	Ⅱb	37111	軽石製品	11.1	11.4	6.0	293.1	軽石	
289	1770	G31	Ⅱ	28080	軽石製品	12.2	9.6	5.8	170.0	軽石	
289	1771	K25	Ⅳ	22931	軽石製品	(10.1)	11.6	9.4	(311.6)	軽石	
289	1772	D26	Ⅱb	－	軽石製品	8.1	7.5	3.0	40.4	軽石	
289	1773	G31	Ⅱ	－	軽石製品	(7.9)	(4.2)	1.6	(13.0)	軽石	
289	1774	F31	Ⅱb	38422	軽石製品	(5.9)	(6.4)	2.8	(31.4)	軽石	
289	1775	G25	Ⅰ	－	軽石製品	(5.3)	(6.6)	(2.5)	(27.5)	軽石	

第22表　縄文時代晩期～弥生時代東部出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
291	1776	G43	Ⅱb	12649	打製石鏃	2.3	(2.2)	0.5	(2.1)	緻密安山岩	
291	1777	F42	Ⅱa	9751	打製石鏃	(1.6)	1.6	0.4	(1.0)	玉髄	
291	1778	G42	Ⅱb	12069	打製石鏃	1.4	(1.4)	0.4	(0.5)	緻密安山岩	
291	1779	F41	Ⅱb	11260	打製石鏃	(1.3)	1.6	0.4	(0.5)	緻密安山岩	
291	1780	P573	－	－	打製石鏃	(0.9)	1.4	0.2	0.3	黒曜石	
291	1781	H38	Ⅱb	13658	打製石鏃	2.0	1.8	0.3	0.8	緻密安山岩	
291	1782	H37	Ⅱa	13539	打製石鏃	1.9	1.8	0.3	0.8	緻密安山岩	
291	1783	古SI1	①	14546	打製石鏃	1.6	1.6	0.3	0.5	緻密安山岩	
291	1784	G42	Ⅱb	11763	打製石鏃	1.3	(1.2)	0.3	(0.3)	緻密安山岩	
291	1785	F42	Ⅱa	10249	打製石鏃	(1.6)	(1.5)	0.3	(0.5)	黒曜石	
291	1786	F42	Ⅱa	9762	打製石鏃	(1.5)	1.6	0.3	(0.5)	黒曜石	
291	1787	G43	Ⅱa	9102	打製石鏃	(1.7)	(1.3)	0.3	(0.5)	水晶	
291	1788	F40	Ⅱa	9592	打製石鏃	(1.6)	(1.4)	0.3	(0.4)	緻密安山岩	
291	1789	F42	Ⅱb	11191	打製石鏃	1.6	1.6	0.4	0.6	玉髄	
291	1790	F53	Ⅲ	12889	打製石鏃	3.5	1.8	0.5	2.2	玉髄	
291	1791	中SD7	①	36369	打製石鏃	(1.9)	1.4	0.3	0.7	緻密安山岩	
291	1792	G43	Ⅱb	11782	打製石鏃	(1.0)	1.5	0.3	0.4	黒曜石	
291	1793	E48	Ⅱ	7114	打製石鏃	1.9	1.3	0.2	0.4	緻密安山岩	
291	1794	F40	Ⅲ	15579	打製石鏃	2.2	1.6	0.3	0.6	緻密安山岩	
291	1795	G45	Ⅱb	14048	打製石鏃	2.7	1.9	0.4	1.3	緻密安山岩	
292	1796	H44	Ⅱ	－	打製石鏃	(3.0)	2.1	0.8	(2.9)	チャート	
292	1797	E48	Ⅱ	7111	打製石鏃	1.8	1.2	0.3	0.5	チャート	
292	1798	I51	Ⅲ	6709	打製石鏃	1.9	1.7	0.3	0.5	黒曜石	
292	1799	F42	Ⅱb	11269	磨製石鏃	3.0	1.7	0.3	1.4	頁岩	
292	1800	中SI1	①	7137	磨製石鏃	(3.9)	(2.3)	0.3	(2.8)	頁岩	
292	1801	H43	Ⅱa	8792	磨製石鏃	2.9	2.5	0.3	2.4	頁岩	未成品
292	1802	H43	Ⅱa	16909	磨製石鏃	6.1	3.5	0.4	11.4	頁岩	未成品
292	1803	G43	Ⅱb	12645	磨製石鏃	(5.0)	3.8	0.8	(15.4)	頁岩	未成品
292	1804	G43	Ⅱb	11766	石錐	2.0	1.3	0.4	0.9	水晶	
292	1805	G42	Ⅱb	10983	微小剥離痕剥片	1.5	1.8	0.4	0.7	水晶	
292	1806	D41	Ⅱb	11072	微小剥離痕剥片	3.7	3.9	0.8	7.1	チャート	
293	1807	F42	Ⅱ	11628	石匙	8.3	(6.3)	0.7	(27.7)	ホルンフェルス	
293	1808	G42	Ⅱb	11689	石匙	10.0	4.9	0.9	49.3	ホルンフェルス	
293	1809	古SI1	①	14547	横刃形石器	3.5	6.7	1.0	20.7	頁岩	
293	1810	中SD7	①	－	石包丁	3.7	(5.2)	8.1	(18.2)	ホルンフェルス	
293	1811	J38	Ⅱ	23653	石包丁	(5.5)	(4.2)	(0.8)	(18.8)	頁岩	
294	1812	J42	Ⅰ	－	磨製石斧	(8.7)	5.7	3.3	(245.9)	砂岩	
294	1813	I53	Ⅱ	5819	磨製石斧	8.7	5.5	2.5	186.9	ホルンフェルス	
294	1814	K52	Ⅱ	2184	磨製石斧	(4.5)	(3.9)	(1.4)	(18.1)	砂岩	

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
294	1815	中 SD7	①	37250	磨製石斧	(15.5)	(7.7)	2.1	(310.4)	ホルンフェルス	
294	1816	中 SD7	①	27991	磨製石斧	12.2	4.9	1.5	109.8	ホルンフェルス	
294	1817	F45	Ⅲa	15870	磨製石斧	(8.3)	4.3	1.7	(65.6)	ホルンフェルス	
294	1818	D48	Ⅱ	7297	磨製石斧	(8.9)	3.5	1.0	(33.2)	頁岩	
294	1819	G51	Ⅰ	－	打製石斧	12.4	5.3	1.6	139.6	頁岩	
294	1820	中 SD7	①	26865	打製石斧	14.2	5.9	2.1	173.6	ホルンフェルス	
294	1821	H43	Ⅱb	14176	打製石斧	13.6	5.6	1.6	117.3	頁岩	
295	1822	C51	Ⅰ	－	打製石斧	(9.2)	6.7	1.5	(96.1)	ホルンフェルス	
295	1823	E42	Ⅲ	17027	打製石斧	(9.6)	7.2	1.1	(80.6)	ホルンフェルス	
295	1824	E41	Ⅱa	10240	打製石斧	(7.7)	(7.3)	(1.3)	(80.2)	ホルンフェルス	
295	1825	D40	Ⅱb	12973	打製石斧	(6.0)	(7.9)	(1.2)	(47.0)	ホルンフェルス	
295	1826	D48	Ⅱ	7273	打製石斧	(5.1)	(8.7)	(1.7)	(91.4)	ホルンフェルス	
295	1827	D40	Ⅱb	12974	打製石斧	(3.4)	(5.3)	(1.0)	(18.2)	頁岩	
295	1828	中 SD7	①	28010	打製石斧	(10.9)	11.3	2.1	(257.2)	ホルンフェルス	
295	1829	J54	Ⅰ	－	打製石斧	(13.7)	(11.2)	2.3	(325.0)	頁岩	
295	1830	F43	Ⅱb	12478	打製石斧	(8.4)	(6.5)	(1.9)	(116.7)	ホルンフェルス	
295	1831	G43	Ⅱb	12238	打製石斧	(11.1)	(8.2)	(2.0)	(147.3)	ホルンフェルス	
295	1832	中 SD7	①	25316	打製石斧	(5.9)	(6.1)	(1.5)	(67.5)	ホルンフェルス	
296	1833	中 SK3	①	24465	打製石斧	(9.0)	(6.8)	(2.3)	(156.8)	ホルンフェルス	
296	1834	I39	Ⅱa	13702	打製石斧	(6.9)	(6.4)	(1.7)	(81.7)	頁岩	
296	1835	C51	Ⅰ	－	打製石斧	(6.6)	(5.5)	1.2	(48.2)	ホルンフェルス	
296	1836	E53	Ⅱ	15873	打製石斧	(7.0)	(6.9)	(1.4)	(79.0)	ホルンフェルス	
296	1837	E48	Ⅱ	7113	打製石斧	(7.1)	(4.5)	1.0	(47.0)	ホルンフェルス	
296	1838	F43	Ⅱb	9836	打製石斧	(5.1)	(4.6)	(1.3)	(47.7)	ホルンフェルス	
296	1839	F41	Ⅱb	9616	打製石斧	(8.1)	6.1	1.9	(106.9)	ホルンフェルス	
296	1840	中 SD7	①	－	打製石斧	(6.0)	(6.8)	(1.6)	(82.8)	ホルンフェルス	
296	1841	F44	Ⅲa	15871	打製石斧	(11.5)	(5.8)	(1.5)	(91.7)	ホルンフェルス	
296	1842	H52	Ⅱ	5817	敲石	10.8	5.7	3.8	342.8	砂岩	
296	1843	J38	Ⅰ	－	敲石	8.9	6.3	4.5	367.4	砂岩	
296	1844	I40	Ⅰ	－	敲石	10.1	2.7	1.6	70.7	砂岩	
296	1845	K52	Ⅱ	－	敲石	(5.6)	3.4	1.9	56.2	砂岩	
297	1846	F41・I37・K37・P1629	Ⅱb・Ⅲa・①	11267 他	磨石・敲石類	(13.4)	(11.9)	(6.5)	(813.8)	砂岩	
297	1847	F41	Ⅱa	9594	磨石・敲石類	11.4	9.2	6.2	878.3	花崗岩	
297	1848	F42	Ⅱb	11184	磨石・敲石類	(6.7)	(4.9)	3.7	(128.2)	安山岩	
297	1849	K52	Ⅱ	2206	磨石・敲石類	5.8	5.3	4.3	178.6	砂岩	
297	1850	中 SD3	①	13761	磨石・敲石類	11.7	11.1	5.9	1100.0	頁岩	
297	1851	H43	Ⅱa	8798	磨石・敲石類	10.0	7.1	3.7	456.8	砂岩	
297	1852	中 SD7	①	25294	磨石・敲石類	(9.8)	(9.7)	(3.0)	(371.7)	安山岩	
298	1853	I38	Ⅰ	33170	磨石・敲石類	(6.9)	(9.8)	(4.4)	(439.0)	花崗岩	
298	1854	L37 P1072	①	－	磨石・敲石類	(6.2)	(10.5)	4.9	(413.2)	砂岩	
298	1855	中 SD3	①	13757	磨石・敲石類	(5.6)	(9.7)	(5.7)	(403.8)	花崗岩	
298	1856	F53	Ⅱ	9439	磨石・敲石類	9.8	9.0	4.2	555.3	安山岩	
298	1857	G53	Ⅱ	9322	石皿・台石類	(19.2)	(16.7)	7.5	(3402.7)	花崗岩	
298	1858	J54	Ⅰ	－	石皿・台石類	(23.2)	21.8	5.5	(3700.0)	花崗岩	
299	1859	H42	Ⅱb	13403	石皿・台石類	23.3	22.8	8.6	6600.0	安山岩	
299	1860	G42	Ⅱb	11657	石皿・台石類	12.3	10.9	9.6	2009.7	砂岩	
299	1861	中 SD7	①	25298	石皿・台石類	(11.4)	(12.0)	6.1	1313.2	安山岩	
299	1862	F42	Ⅱb	11174	石皿・台石類	(8.8)	(6.0)	(8.3)	(552.0)	斑れい岩	
299	1863	E41	Ⅱb	11069	砥石	13.0	7.5	6.6	785.1	砂岩	
299	1864	E42	Ⅱa	10064	砥石	(9.5)	(6.1)	3.1	(232.3)	砂岩	
300	1865	G43	Ⅱb	12243	砥石	(9.6)	(9.7)	(3.4)	(488.0)	砂岩	
300	1866	G43	Ⅱb	12557	砥石	(7.8)	(7.2)	5.8	(446.1)	砂岩	
300	1867	C50	Ⅱb	－	砥石	7.4	9.7	6.3	568.0	砂岩	
300	1868	E41	Ⅱb	11065	砥石	(8.2)	(6.1)	(2.3)	(136.0)	砂岩	
300	1869	F41	Ⅱb	11281	砥石	(6.7)	(5.0)	(2.7)	(131.4)	砂岩	
300	1870	J42	Ⅱb	15430	砥石	8.2	8.0	2.2	151.9	砂岩	
300	1871	G42	Ⅱb	10979	砥石	6.4	5.0	2.4	80.9	砂岩	
300	1872	G43	Ⅱb	11001	砥石	(5.7)	2.9	2.2	52.4	砂岩	
300	1873	K52	Ⅱ	2163	砥石	4.2	3.4	1.8	43.3	砂岩	
300	1874	F47	Ⅱa	－	砥石	4.5	2.6	1.2	18.7	砂岩	
300	1875	J38	Ⅰ	－	砥石	8.6	6.5	2.2	95.4	頁岩	
301	1876	E41	Ⅱb	11071	軽石製品	(13.2)	9.6	3.7	(108.8)	軽石	
301	1877	E41	Ⅱb	15603	軽石製品	14.9	7.1	3.7	82.1	軽石	
301	1878	E41	Ⅱb	11067	軽石製品	13.7	6.0	3.8	90.4	軽石	
301	1879	E41	Ⅱb	15604	軽石製品	9.9	(8.5)	4.3	(57.2)	軽石	
301	1880	J38	Ⅲa	23106	軽石製品	(7.9)	(8.4)	(5.4)	(67.9)	軽石	
301	1881	E41	Ⅱb	12947	軽石製品	(6.4)	5.9	4.0	(39.8)	軽石	
301	1882	I42	Ⅱa	9106	軽石製品	6.9	6.4	2.3	21.6	軽石	

第３節　古墳時代の調査

１　概要（第 302 図）

地形に関する概要は，前節のとおりである。

古墳時代に帰属すると判断した遺構は，竪穴住居跡５軒，土坑 10 基である。住居跡には花弁型住居と考えられるものもあったが，それらを含め，遺構は調査対象区内から散在して検出された。微地形とも関連しないように見受けられる。また，遺物については谷部に集中して出土する傾向にあったが，これは丘陵部が後世の削平を受けているための「見かけ」の分布状況である可能性がある。

遺物では，住居跡から主に東原式土器の特徴を有する資料が出土したが，従来の鹿児島県域で構築・活用されてきた枠組みに収まらない器形や器種構成も散見された。



第 302 図　古墳時代遺構配置図

２　遺構

(1) 竪穴住居跡（ＳＩ）

竪穴住居跡１号（第 303 図～第 306 図 1883～1897）

Ｇ－ 42 区のⅢｂ層で検出された。Ⅱｂ層の人力掘り下げ中に高坏などの成川式土器片が集中して出土しはじめたため，遺構の存在を想定して周辺一帯を精査することとした。しかし，Ⅱｂ層が黒色土であったことから遺構の検出は難航し，Ⅲｂ層まで下げて遺構（本住居跡並びに南接する土坑１号）のプランを確定した。

住居はやや小振りで，長軸 2.8 m，短軸 2.4 m，検出面からの深さは 0.1 mで,平面形はほぼ正方形状を呈し，南側にわずかな張り出しを設ける。張り出し部と住居本体部分の床面に高低差はない。貼床については，張り出し部を含め確認できなかった。

柱穴は５本検出したが，位置関係が平面形状と若干ずれる状況であった。そのうち，Ｐ１並びにＰ３～４については，平面形の四隅に近い位置にあり間隔がほぼ一定であることと個々の規模や形状が類似することから，これら４本が主柱穴と考えられる。

また，住居中央西寄りに，平面円形で断面逆台形の土坑（ＳＫ１）が１基検出された。

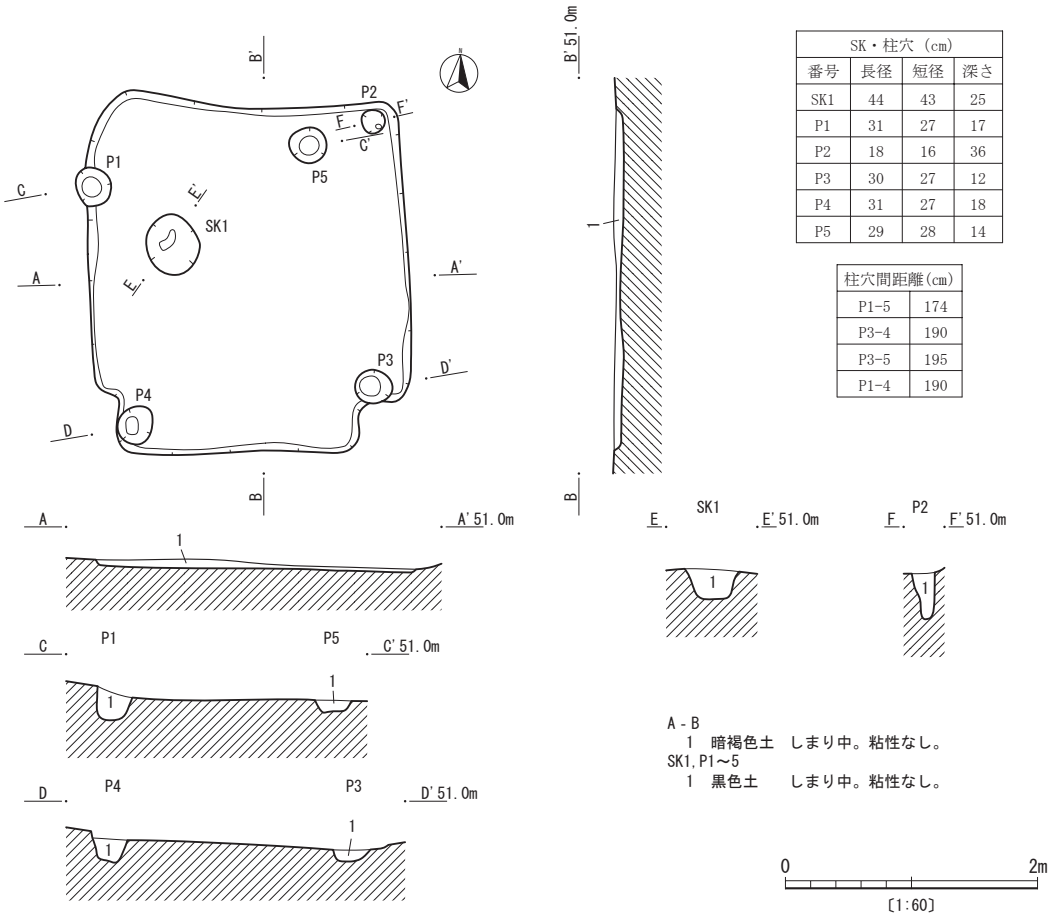
埋土は黒色土の単層で,ほとんどアカホヤを含まない。

遺物は，上記した屋内構築土坑の上面で東原式土器の甕（第 305 図 1883）が一括して出土したほか，住居北東隅では笹貫式土器並行と考えられる高坏が出土している（第 305 図 1887)。また，北西隅の主柱穴（Ｐ１）底面から，小壺がほぼ完形の状態で出土しており（第 305 図 1885)，住居廃絶時の状況が良好に残っていた。

さらに，張り出し部で上記の土器と同レベルで出土した甕の破片が，南側に近接する土坑１号（第 322 図）中から出土した東原式土器の甕（第 322 図 1958）と接合した。

この土坑１号については，検出面から底面までの深さが異なることから別遺構としたが，相互に関連する可能性もある。

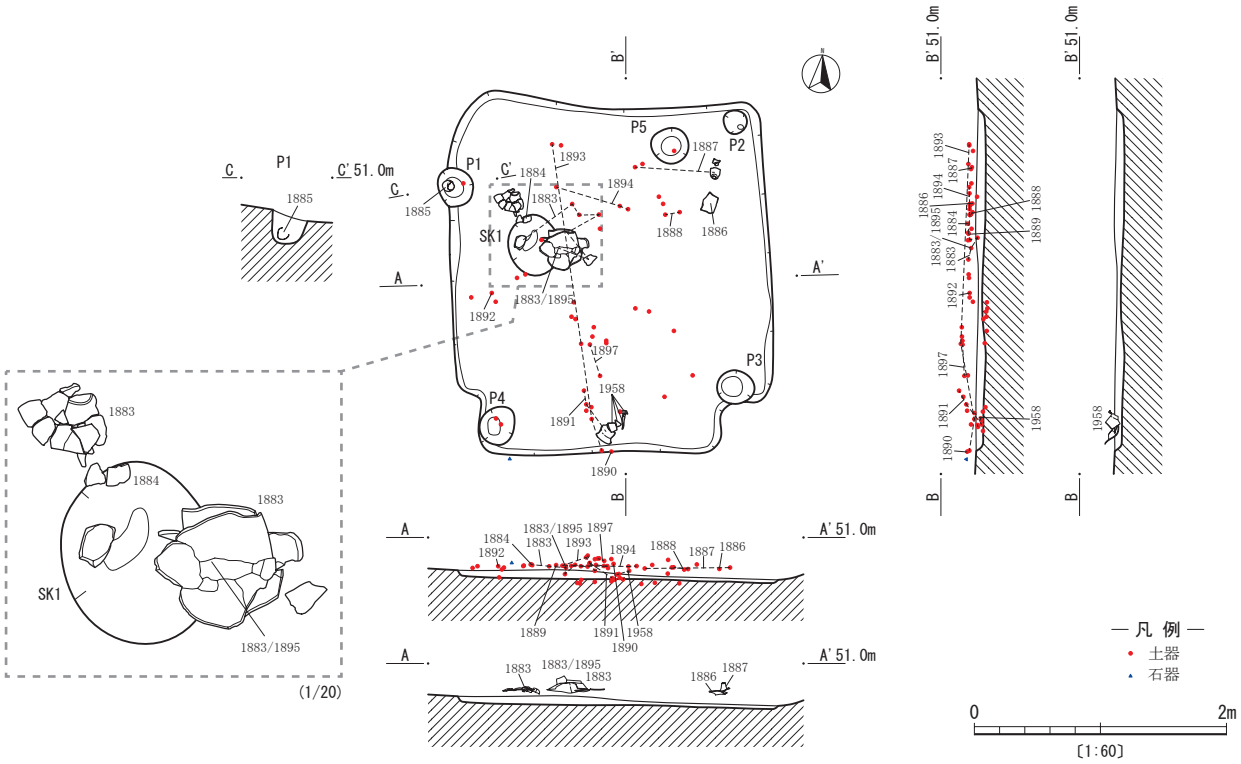
1883 は東原式土器の甕である。復元口径27～28.5cm,胴径 27cmで,底部から口縁部下まであまり張らずに直線的に立ち上がり，口縁部下（突帯下位）で一旦軽くくびれ，外弯する口縁部に至る器形である。最大径は口縁部下（突帯下位）にある。口縁部は，平面形がややひずむが，口唇部は断面方形に丁寧に仕上げている。器面調整は，口縁部は内外面とも丁寧なヨコナデであるが，口縁



SK・柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
SK1	44	43	25
P1	31	27	17
P2	18	16	36
P3	30	27	12
P4	31	27	18
P5	29	28	14

柱穴間距離(cm)	
P1-5	174
P3-4	190
P3-5	195
P1-4	190

第 303 図　古墳時代竪穴住居跡１号（１）



第 304 図　古墳時代竪穴住居跡 1 号（2）

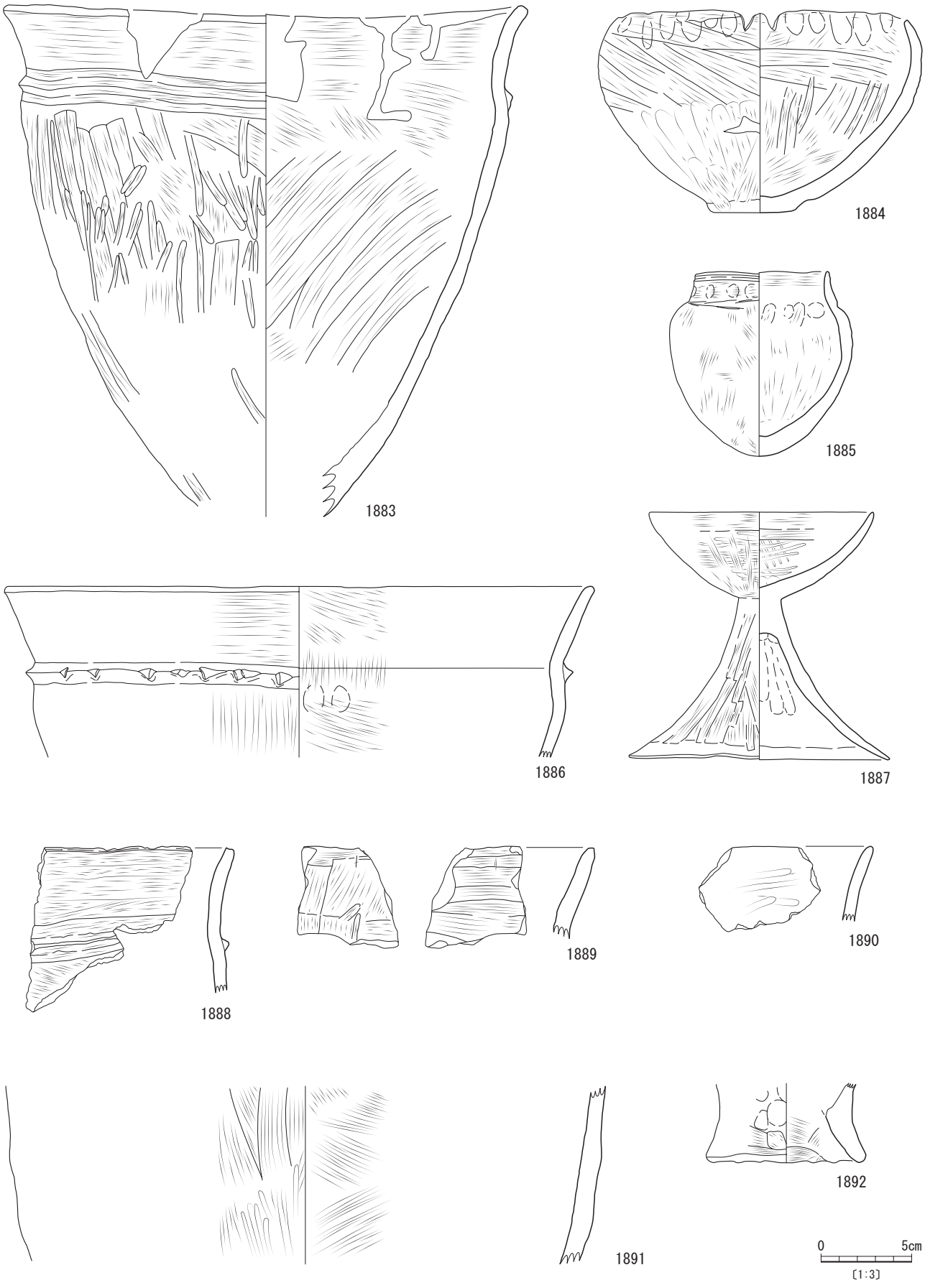
部下のくびれ付近から下位では，外面は２種類の工具を用いた縦基調のやや粗いナデで，内面は斜位のヘラナデである。なお，内面は調整痕が右上がりになっていることから，当該作業の際，製作者が左手を使っていたことがわかる。口縁部下のくびれ部に貼付された突帯は，断面三角形に整形されるが，波打っていたり接合面が消されていないなど粗い仕上げ部分も見られる。

1884 は鉢である。1883 と同じくＳＫ１上で出土した。口径は，端部が 16cmで弯曲部が 18cm，底径 4.5～６cm，器高 11cmである。器形は，平面楕円形で高台状に成形された底部から丸く張りつつ立ち上がり，口縁部で内弯する。器壁は底部から口縁部にかけて漸移的に薄くなっている。高台状の底部は形状の割に薄く，胴部下半の方が厚みがある。調整は内外面でほぼ一致しており，胴部下半が縦位のナデ，胴部上半から口縁部下が斜位基調の粗いハケ目，口縁部が指頭押圧の後に軽い横ナデである。整形に際し，調整や成形は粗いものの，口唇部を薄く仕上げる意識があることは明瞭に看取される。この他，外面は胴部下半に黒班が１か所あるほか，胴部上半にススが広く付着している。

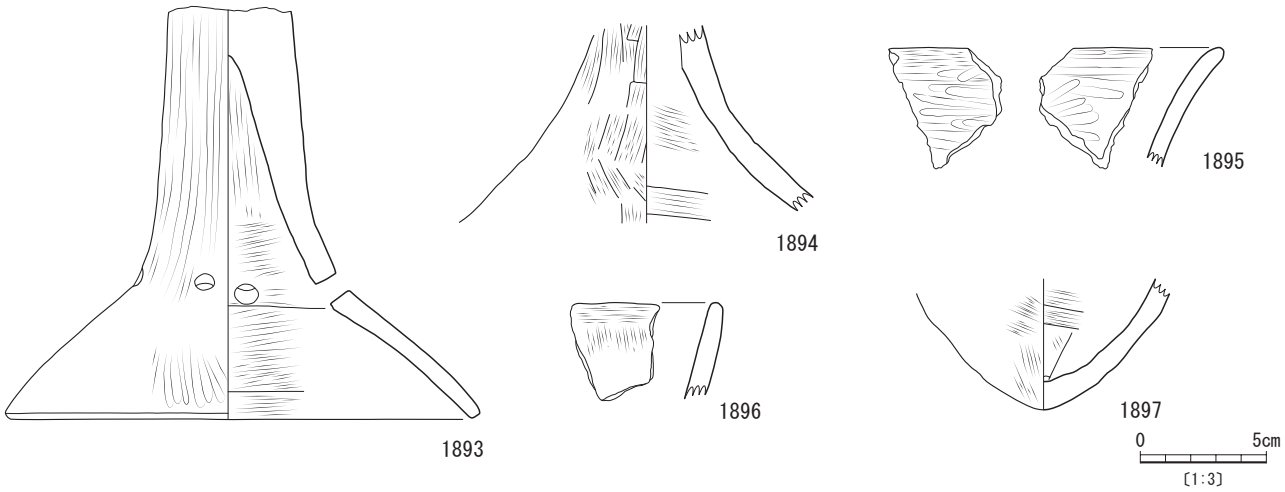
1885 は小壺である。口縁部が全体の２/３程度を欠損するが，他に割れやヒビはない。口径 7.5cm，器高 10cmで，尖り気味の丸底からわずかに丸みを帯びつつ胴部へ立ち上がり，肩部から窄まって軽く内傾する口縁部に至る器形を有する。やや腰高な器形だが，大人の手には収まりの良い形状である。器壁は，底部がやや厚く口唇部が薄い他はほぼ一定の厚みに整えられている。器面は内外面でほぼ一致しており，底部から肩部付近までは縦基調のナデ，肩部は指オサエ，口縁部は横位のナデである。口唇部は薄く仕上げる。肩部と口縁部の境界には，板状工具の端をずらしながら連続して軽く押し当てて，１条の横位細沈線のようにも見える浅い段を形成している。口縁部外端には，横位の沈線文が浅く１条巡る。この他，内面は特に上半部から口縁部内端にかけてススが広く付着している。

1886 は東原式土器の甕である。復元口径 32.5cmで，器形の概要は 1883 と類似するが，口縁部はより直線的に外反する。また，口唇部は断面舌状に整形される。器面は，内外ともやや摩滅して詳細がわかりにくいが丁寧なナデ調整が施されている。突帯は，頂部をやや上向きに整形したあとに連続刻目を施している。刻みに伴う粘土のはみ出しを処理しておらず，工具の動かし方についても，右に動かしている箇所と左に動かしている箇所があるなど，やや大雑把な施文である。

1887 は高坏である。形状からは布留式あたりに伴う畿内系の高坏の特徴を有する。1886 の近くで出土した。口径 12.5cm，脚径 14.5cm，器高 12cmで，坏部は底部からわずかに張りつつ広がり，直立気味の口縁部に至る器形を呈し，脚部は底部に向けてラッパ状の優美な曲線を描いて広がる。器面は，坏部と脚部の内面には丁寧なナデ



第 305 図　古墳時代竪穴住居跡 1 号（3）



第 306 図　古墳時代竪穴住居跡１号（４）

調整が施され，坏部外面は縦位のやや粗いナデ調整のあとに粗いミガキが横位に施され，脚部外面は縦位のヘラナデが器形に合わせて放射状に丁寧に施されている。口縁部は，成形を兼ねた丁寧なヨコナデで薄く仕上げられる。

1888～1890 は甕の口縁部である。1888 は焼成が特に良好で，想定される法量に比して器壁が薄い。口唇部は断面方形に整形される。突帯は小さい。外面に噴きこぼれの痕跡が観察される。1889 は小片のため詳細は不明だが，突帯が貼付されていない可能性がある。1890 は口唇部外端に面取り状の整形を施している。

1891 は，大型の甕の胴部下半と考えられる。調整は，外面がケズリに近い縦位のナデのあとに縦基調のミガキが軽く加えられており，内面は斜位の丁寧なナデである。外面の色調は，広く黒色化している。

1892 は甕の脚部である。1883 近くで出土した。底径９㎝で，内面の接合面位置から脚高はごく低いとわかる。指オサエで成形したあとナデて整形している。

1893･1894 は高坏の脚部である。1893 は，底径 18.5㎝で，円柱状の上部から屈曲して漏斗状の端部に至る器形である。調整は，外面は風化しているため観察が困難だが縦位のミガキが施されているようで，内面は端部が横ナデ，円柱部が粗い縦ナデである。また，器面の風化度合いが，すべての破片で内面よりも外面が進行しているのが目を引く。屈曲部には，円形透かしが５か所施されている。間隔はやや不揃いで，いずれも外側から穿孔される。この他，端部の外面端部にはススの痕跡もわずかにうかがえる。1894 は 1887 と同型の器形であるが，器壁が全体的に厚い。また，外面の調整は端部へ向かうにつれて方向が乱れる。内面上端には接合面がある。

1895・1896 は，小型丸底壺の口縁部と考えられる。1895 はやや外弯する器形で，内外面ともに横基調のミガキ調整で整形されている。ただし，甕である可能性もある。1896 の外面は，ミガキに近いナデ調整が縦位に施される。

1897 は小壺の底部である。器形は 1885 に類似すると考えられる。底部は，極めてわずかな平底となる可能性もある。

竪穴住居跡２号（第 307・308 図 1898～1905）

Ⅰ・Ｊ－ 40 区のⅢｂ層で検出された。調査区境界の土手部分に位置し樹痕の侵食等が著しかったうえ，中世の掘立柱建物跡や弥生時代の竪穴住居跡等と切り合っていたため，当初は近接する３基の別個の土坑と認識していた。その後，埋土の検討などを経て１軒の竪穴住居と判断したが，本来の構造を把握しきれなかった恐れがある。

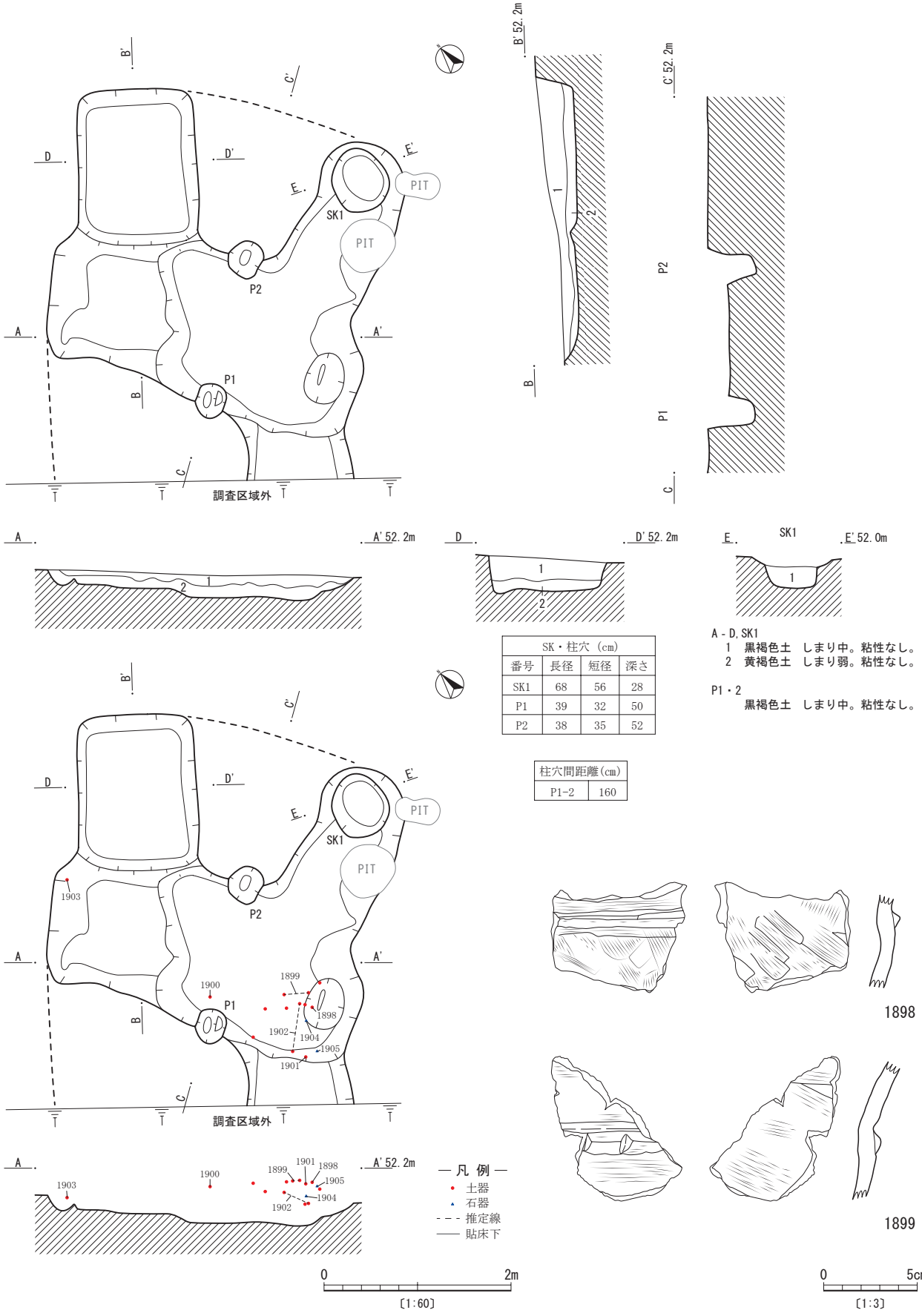
現状から，長軸４ｍ，短軸 3.5 ｍ程度の規模を呈すると想定される。平面的には張り出し部が構築されているように見えるが，床面は，南西の調査区外に延びる部分を除き，微妙な段差はあるもののほぼ同じ深さである。仮に，この微妙な段差を構造とみれば，Ｐ１とＰ２に挟まれた範囲の面積が住居とするには小さくなる。

柱穴は，２本（Ｐ１及びＰ２）検出した。想定する住居の範囲と，位置関係に大きな齟齬を見いだせないこと，柱痕跡はないものの径や深さが一定程度あることから，住居の柱穴と想定している。

埋土は２層確認したが，冒頭に述べた厳しい状況のために判断に苦慮した。埋土２には，アカホヤ火山灰層の土塊が大量に入っていた。

遺物は，中央部竪穴の南西角にまとまっていたが，埋土上位からの出土である。

1898・1899 は，甕の突帯部分である。1898 の突帯は，



SK・柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
SK1	68	56	28
P1	39	32	50
P2	38	35	52

柱穴間距離(cm)	
P1-2	160

第 307 図　古墳時代竪穴住居跡２号（１）

貼付がやや雑であるほか，内面と外面で調整の仕上がりに差がある（内面がやや丁寧）。1899 は，突帯上半に接合面ナデ消しと突帯の整形を兼ねた強いヨコナデが施されているため，突帯の上位が沈線状に凹んでいる。

1900 は甕の底部である。径約８㎝で器壁は厚く，大型の甕と想定される。

1901 は高坏の脚部で，ラッパ状に緩やかに開く器形を有する。器壁は端部に向けて漸移的に薄くなるが，端部と基部で厚さはかなり異なる。調整は，内外面とも縦位のヘラナデだが，外面はミガキも加えられ，器形に合わせて略放射状に施されている。

1902 は坩である。掲載した遺物のなかでは比較的下位から出土した。口径 11cm，胴径９㎝，器高６㎝（推定）で，器形はかなり変容している。器壁は薄く，内外面ともミガキに近いナデ調整が施される。特に外面調整は，器形に調整方向を合わせており，文様効果を意図していると想定される。胴部外面に黒斑がある。

1903 は手捏ねの鉢である。他の遺物と異なり，住居北西端から出土した。口径７㎝，器高４㎝（推定）で，円錐形の器形と考えられる。底部外面近くに爪跡が残る。

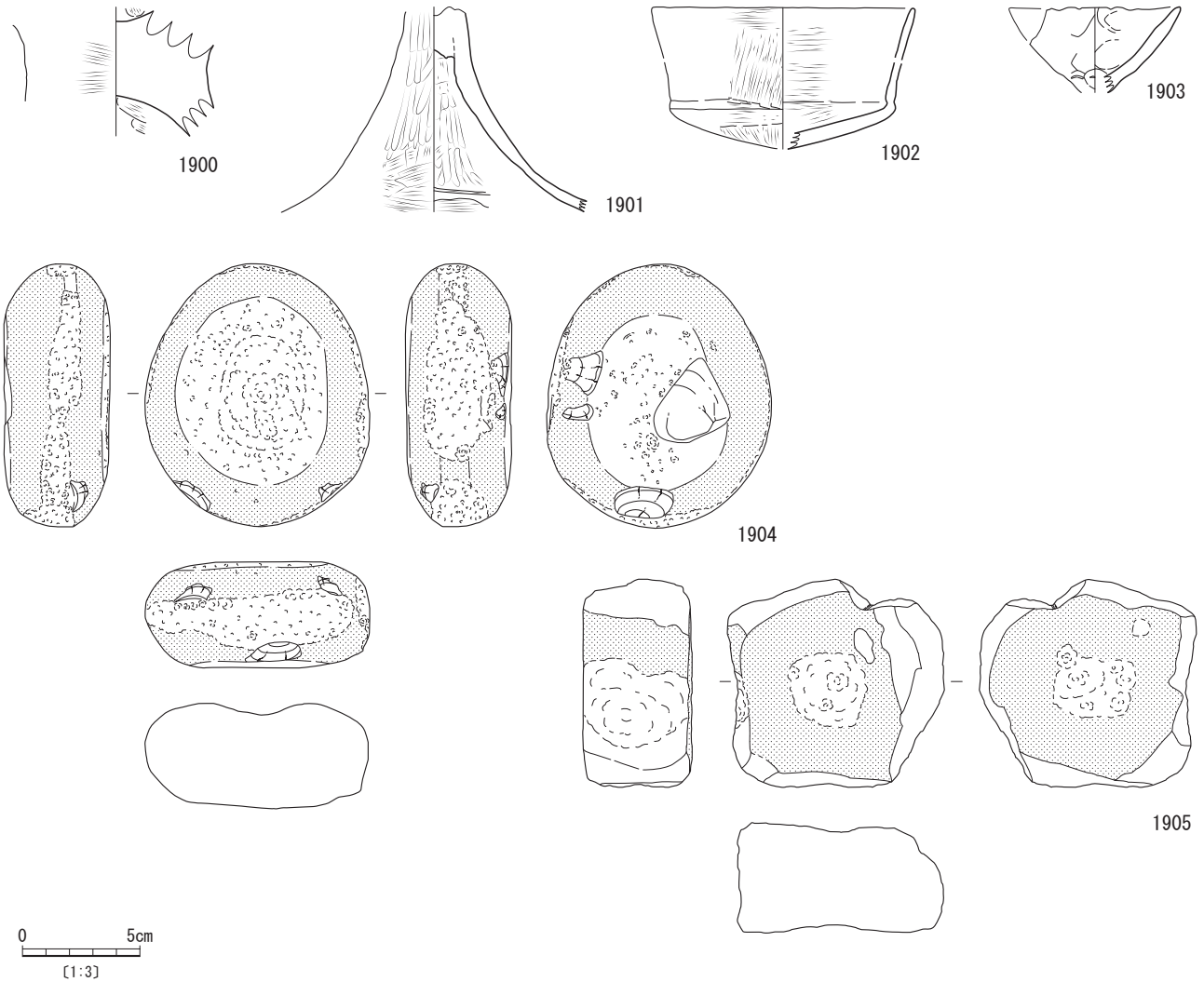
1904 は敲石である。長さ 11cm，幅 9.5cm，厚さ 4.5cm，重さ 740 ｇの砂岩製で，正面は敲打のために大きく凹んでいるほか，下縁と両側縁は敲打による凹凸まで潰れて面が形成されている。裏面にも中央に敲打部があるほか被熱による剥落がある。

1905 は凹み石と考えられる。側面が不整形であるが断続的に磨り面が観察されることから完形品と判断する。長さ・幅９㎝，厚さ 4.5cm，重さ 673 ｇの花崗岩製で，正面と背面の中央が浅く凹み，その周辺は平坦な磨面である。

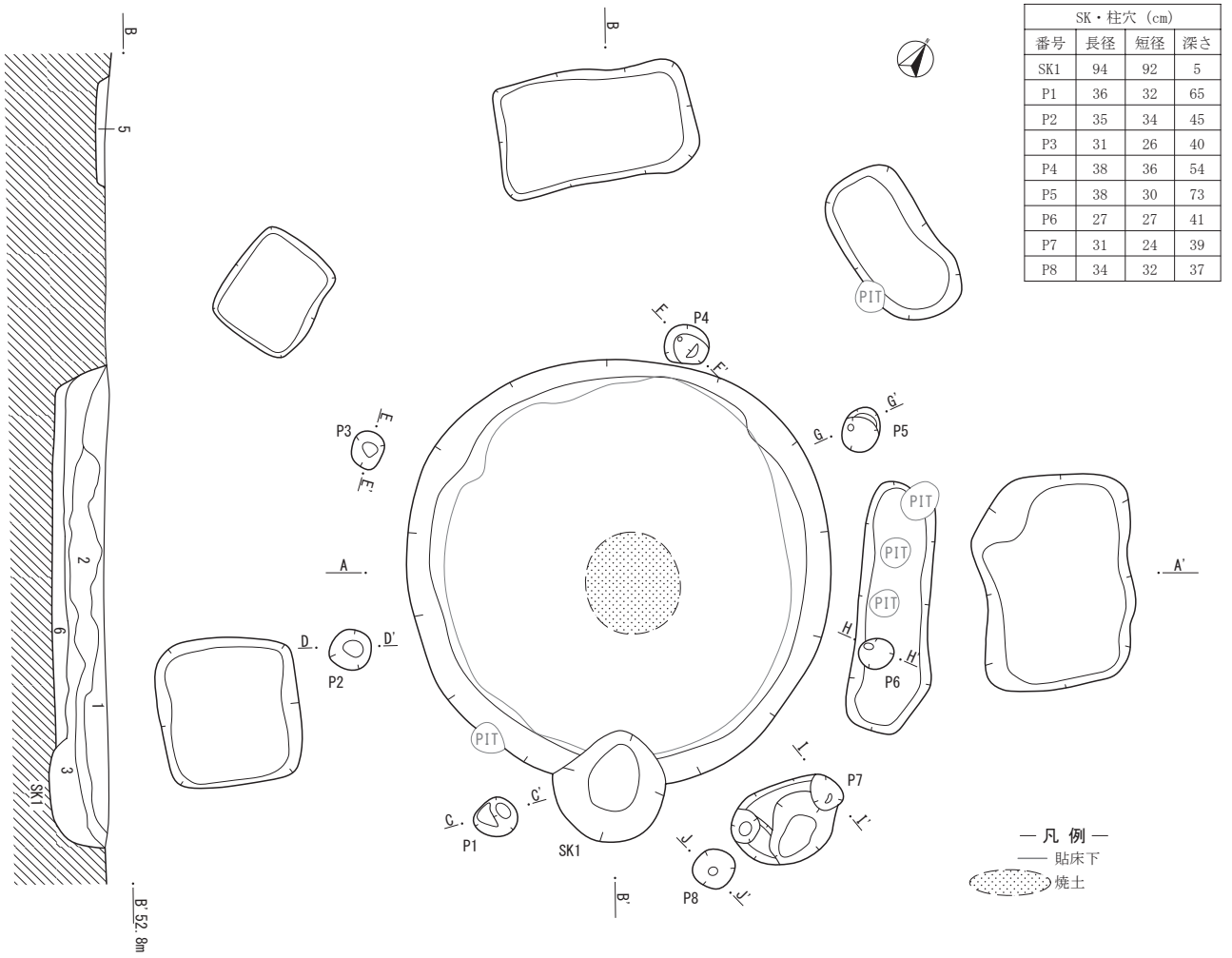
竪穴住居跡３号（第 309 図～第 312 図 1906～1928）

Ｈ－ 38･39 区のⅢｂ層上面で，径 3.8 ｍの円形の竪穴，並びにその周囲に５基の平面長方形の浅い土坑，２基の平面略楕円形の土坑と７本の柱穴を近接して検出した。

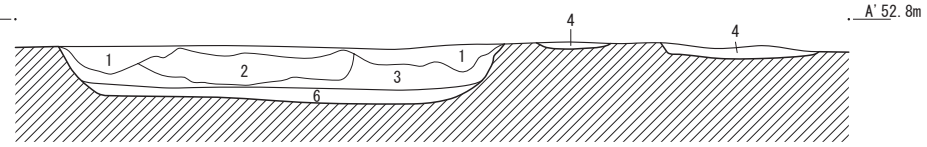
円形の竪穴は，検出面からの深さが 0.4 ｍで床面はほぼ平坦，壁は曲線的に開きながらたちあがり，壁際に壁



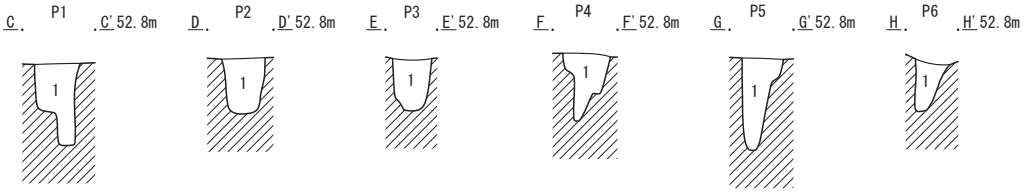
第 308 図　古墳時代竪穴住居跡２号（２）

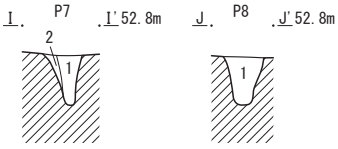


SK・柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
SK1	94	92	5
P1	36	32	65
P2	35	34	45
P3	31	26	40
P4	38	36	54
P5	38	30	73
P6	27	27	41
P7	31	24	39
P8	34	32	37



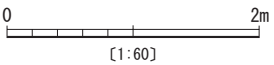
A－B
1　明黒褐色土　しまり中。粘性なし。
2　黒褐色土　　しまり中。粘性なし。
3　黒褐灰色土　しまり中。粘性なし。
4　暗褐色土　　しまり強。粘性なし。
5　黒褐色土　　しまり強。粘性なし。
6　暗褐色土　　貼床。しまり強。粘性なし。



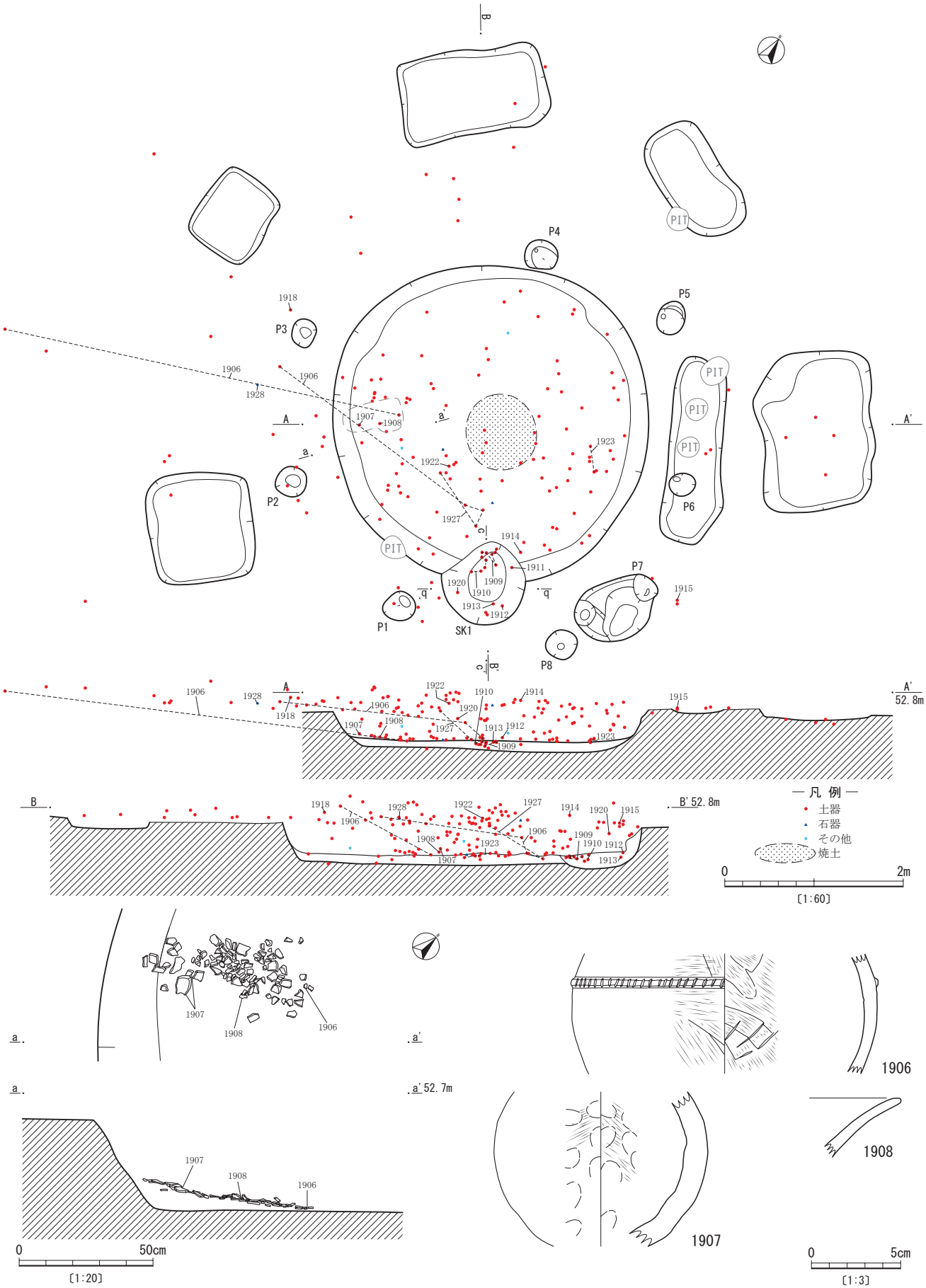


P1～8
1　黒褐色土　　しまり中。粘性なし。
2　明黄褐色土　しまり中。粘性なし。

柱穴間距離(cm)	
P1-2	181
P2-3	168
P3-4	260
P4-5	160
P5-6	187
P6-7	132
P7-8	114
P8-1	187



第 309 図　古墳時代竪穴住居跡３号（１）



第 310 図　古墳時代竪穴住居跡３号（２）

帯溝などは見当たらなかった。床面中央には，径 80㎝程度にわたって褐色に変色した範囲が確認された。また，南壁に径 90㎝の平面円形の土坑（ＳＫ１）を伴う。調査当初は別個の土坑（ＳＫ 44）として扱っていたが，埋土が竪穴の下位の埋土３と一致したこと，円形竪穴の貼床（埋土６）を切って掘られているのを確認したことから，竪穴に伴う土坑として扱うこととした。

５基の浅い土坑は，平面形こそ若干異なるものの全体として規格性がうかがえること，円形竪穴を中心としてそれぞれの外側の壁がほぼ 4.2 ｍの距離に位置すること，検出面からの深さが 10㎝程度で共通することなどから，円形竪穴と一連の施設と考えられる。

南東部で検出された２基の土坑も，上記した５基の土坑の内側で円形竪穴からの距離がほぼ同じであることから，円形竪穴と一連の施設と考えられる。特に南側の平面楕円形の土坑は，土坑長軸線上の両端に小ピットを伴う形状が，弥生時代の竪穴住居に散見された施設と酷似することも，住居関連施設の可能性を補強すると考える。円形竪穴の外側を環状に巡る７本の柱穴は，Ｐ１とＰ５がほぼ同じ深さで他の５本より深いが，径は７本ともほぼ同じであり，状況から円形竪穴と一連の柱穴と考えられる。

埋土は，主に円形竪穴で４層確認された。うち埋土６は，上記したように貼床で，床面全体にほぼ均等の厚さで平坦に貼られている。色調は，弥生時代の竪穴住居の貼床に比してアカホヤ火山灰が少ないためか黒っぽい。他の埋土は，おおむねレンズ状の堆積状況を示していることから，埋土の流入方向は不明ながら自然堆積で埋没したものと想定される。なお，貼床を剥いだ掘削面も，比較的平坦で掘り込み等は検出されなかった。

この他，柱穴並びに２基の楕円形土坑の埋土は，円形竪穴の埋土と特徴がほぼ一致している。５基の長方形土坑の埋土は，円形竪穴とやや異なる色調の土が堆積していたが，硬度が貼床と酷似している。

遺物は，円形竪穴に伴う土坑（ＳＫ１）から出土した甕類（第 311 図上及び 1909～1913），円形竪穴南西部の貼床上で，複数の壺の破片が竪穴中心から外側へ帯状に出土した壺（第 310 図下及び 1906～1908）の状況が，その違い（破損状況及び分布状況）を含めて人為性を強く感じさせる点で注目される。

その他，埋土中から出土した遺物は，堆積層の違いを超えて接合する資料も散見された。

このような状況から，これらの遺構群は花弁型住居であったと考えられる。床面に小ピットを伴う土坑が弥生時代の竪穴住居と同じ機能を有すると仮定すれば，南東に入口が設けられていたことになる。

また，遺物の接合状況から，あまり削平を受けていない可能性を指摘でき，さらにそのことから，この住居は当時の形状をある程度残しており，従前の花弁型住居とはやや異なる形状をしていたことがわかる（埋没後ほどなくして削平された可能性も想像できるが，その場合は 1906 の接合状況を説明できない）。

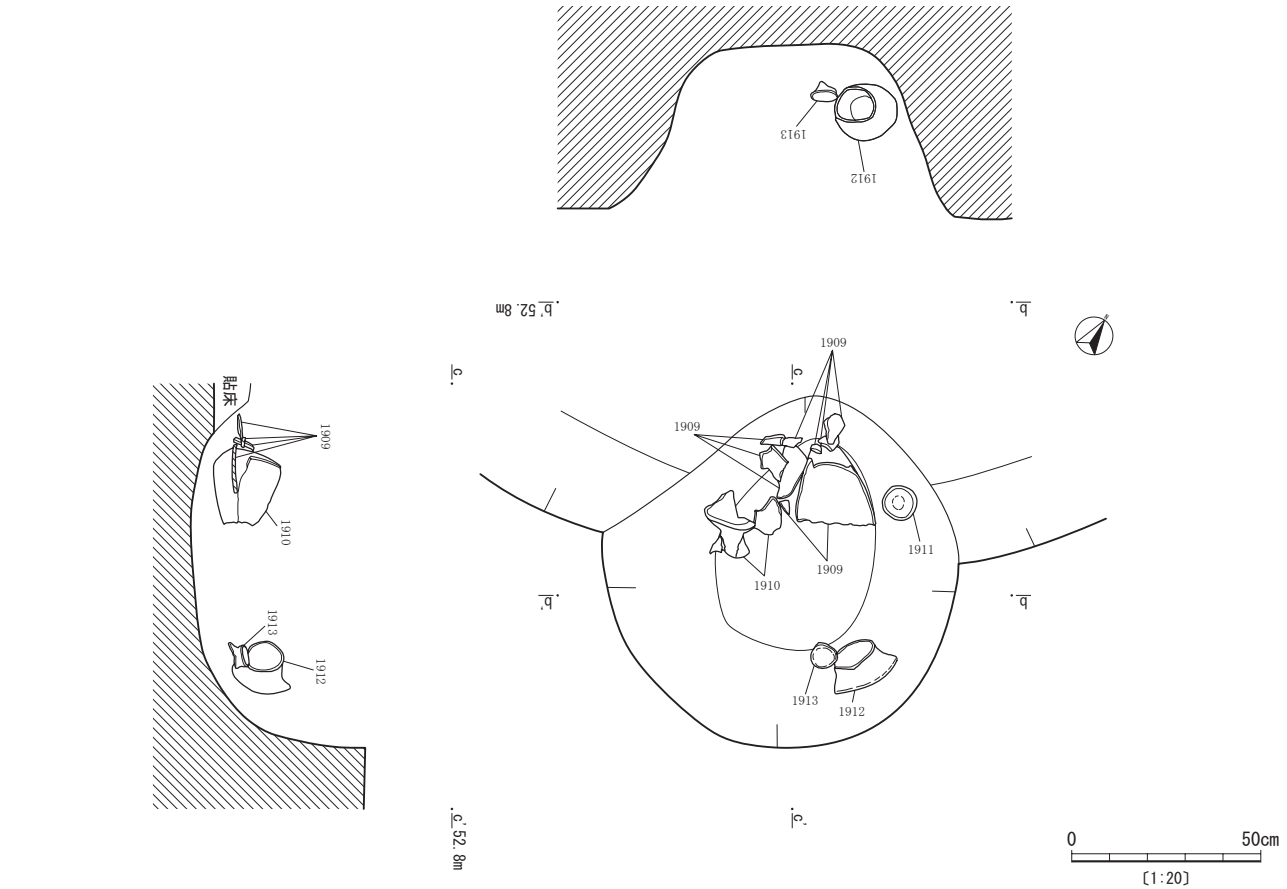
なお，西端の張り出し部近くで，底面から小形壺が出土した土坑６（第 324 図 1966）が検出されている。

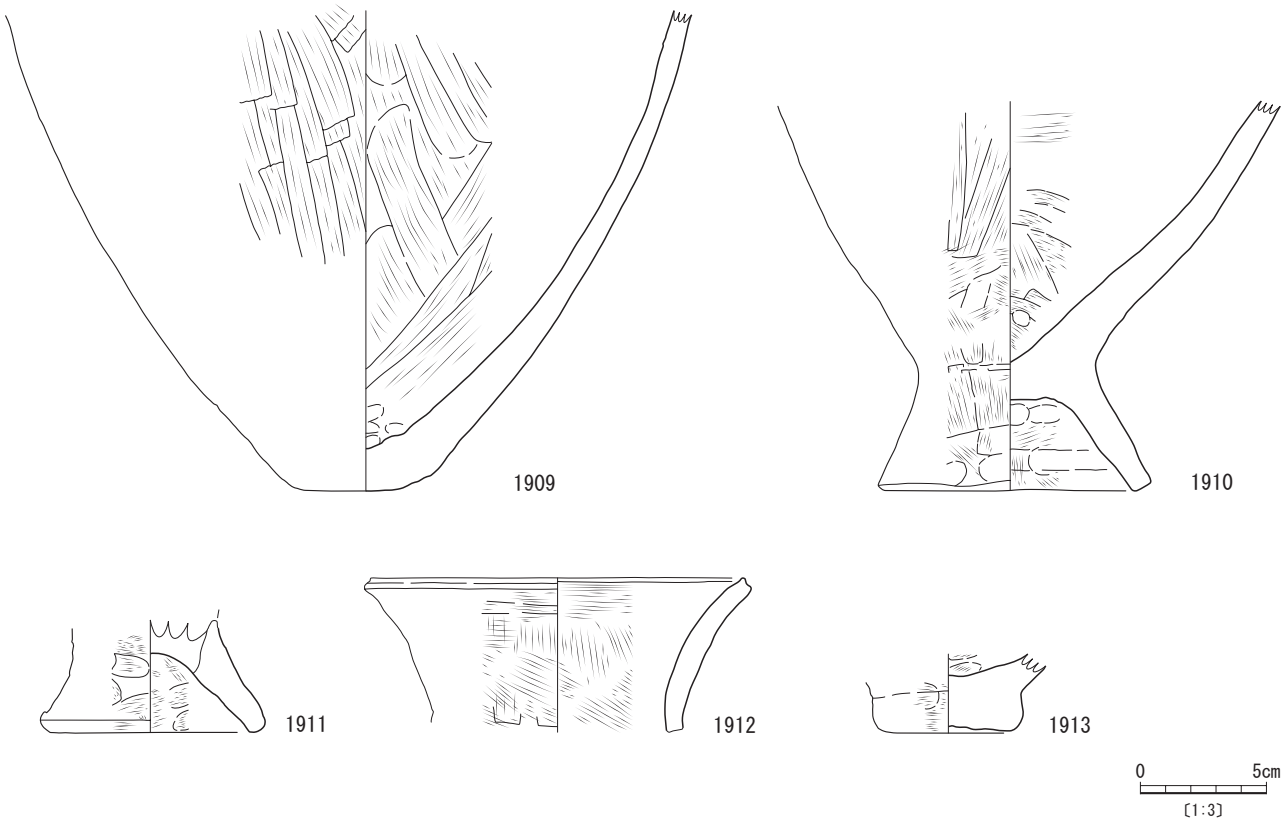
1906 は胴径 17㎝の壺である。球状の器形で，器面は内外面ともに斜位基調の丁寧なヘラナデが施されているが，外面は突帯周辺のみ斜位のナデの後に横ナデとなっている。最大径部分からやや肩部寄りに１条貼付された突帯は，器形に比して小振りで，刻目を入れてから断面台形にナデて仕上げている。きめの細かい胎土を用いている。1907 は手捏ねの小型壺と考えられる。胴径 12㎝で器厚 1.2㎝前後と，器形に比して分厚い器壁である。内外面とも指頭押圧の痕跡が残り，器面調整は外面にケズリに近い粗いナデが軽く入る程度である。分厚い器壁だが，色調は内部まで外面とほぼ同色となっている。1908 は高坏の坏部片である。小片だが，体部中央で「く」の字状に屈曲する器形と考えられる。器面が風化しており調整の詳細は不明である。

次に，円形竪穴に伴う土坑（ＳＫ１）から出土した 1909～1913 について概説する。

1909 は壺の下半部である。底径４㎝，資料上端部で径 27㎝で，アーモンド状のあまり胴部が丸く張らない器形を呈すると考えられる。器壁は，底部付近がやや厚いが胴部はほぼ一定の厚さに整えられている。器面調整は，外面が縦基調のヘラナデ，内面が斜位のヘラナデで底部のみ指頭押圧である。外面の調整開始点が底部接地面から数㎝空けているため，底部が円盤貼り付け状に突き出しているように見える。1910 は，甕の底部である。底径７㎝，脚径 10㎝で，比較的大型の甕だったと想定される。脚部は，外底面を平坦に脚を短く直線的に整形しており，安定性を高くしている。端部も断面方形に丁寧に仕上げている。底部は内面を漏斗状に尖らせ，胴部へは直線的に広がる器形である。器面調整は，外面は縦基調，内面は斜位だがあまり斉一性がない。内面にコゲの痕跡が認められる。1911 は甕の脚部である。脚径８㎝で，1910 より小形の甕だったと想定される。わずかに「ハ」の字状に弯曲する器形で，全体に指頭押圧の痕跡が残り，器壁は場所によって厚さが異なり，脚端部の整形も大雑把である。

1912 は壺の口縁部である。口径 15㎝，頸部径 10㎝で，頸部接合面で剥離している。器壁は内外面ともにヘラナデで調整しているが，成形時の指ナデを消し切れていないため細かい凹凸が目立つ。口縁端部は凹線状に凹む。1913 は壺の底部と考えられる。底径 4.5㎝で，外観で 1.5㎝ほど突き出している。色調が明褐灰色系を呈しており，特徴的である。接地面はやや色調が赤みを帯びて





第 311 図　古墳時代竪穴住居跡３号（３）

いることから被熱している可能性がある。都城盆地の壺の特徴と類似する。

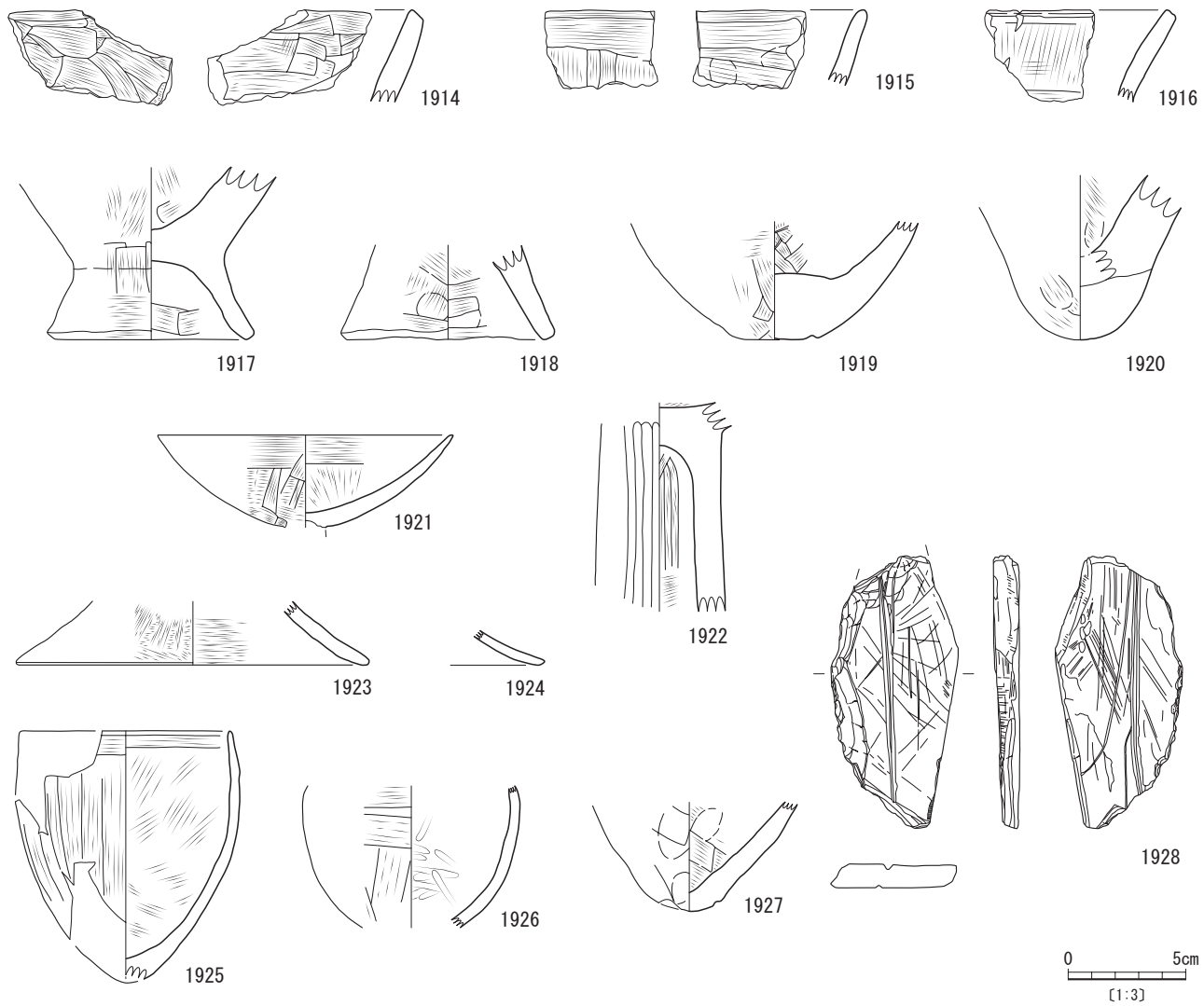
この他，埋土中出土の主な遺物は以下のとおりである。

1914 は甕の口縁部である。色調が灰白色系を呈しているのが特徴的である。1915・1916 も甕の口縁部と考えられる。1916 の外面調整は，角度，長さや間隔がほぼ揃っていることから，装飾的効果を意図していたことが想起される。1917・1918 は甕の脚部である。1917 は底径 6.5cm，脚径 8 cmで，脚部内面の色調が，底面は鈍い赤褐色，他は端部まで黒褐色を呈していることから，火に関わる何らかの道具に再利用された可能性が想定される。なお，脚や胴部の外面に顕著な被熱痕跡は確認されない。1918 は脚径 9 cmで，指頭押圧の痕跡が残る。

1919・1920 は壺の底部である。1919 は径 3 cm程度の平底であるが，内面が凸レンズ状に盛り上がるのが特徴的である。また，接地面には植物の茎の圧痕が多く残る。1920 は成形が特徴的であるが，粘土を継ぎ足して先端部を作るなど，製作技法については他の底部に厚みのある壺と共通している。

1921～1924 は高坏である。1921 は口径 12.5cmの坏部で，口縁部は横ナデ，口縁部以下は縦位のヘラナデで内面のみ軽くハケ目も加えられる。1922 は脚で径は 5 cm程度，外面には縦位のミガキが均等に施される。浅黄橙色の色調が目を引く。1923 は床面近くから出土した脚部で径は 15cm，外面には縦位の放射状のハケ目が丁寧に施されている。1924 は器壁が特に薄い。

1925～1927 は鉢である。1925 は，口径 9 cm，器高 11cm（推定）の砲弾型をした鉢で，底部は鈍い尖底になると想定される。器壁は薄く軽い。調整は，口縁部が横ナデで口縁部以下はヘラナデであるが，外面は縦位に均等に施しており，装飾的効果を意図している可能性がある。外面底部周辺のみ縦位の調整痕が指などでナデ消されている。1926 は口径 9 cm（推定）で，口唇部と底部を欠く。基本的な調整方法は 1925 と共通するが，外面の調整が



第 312 図　古墳時代竪穴住居跡３号（４）

やや徹底しない一方，内面はミガキ調整で仕上げる点などに違いが見られる。1927 は尖底の鉢と考えられる。1925 や 1926 とは，器壁がより厚く手捏ねの痕跡が残るなど，成形に違いが見える。

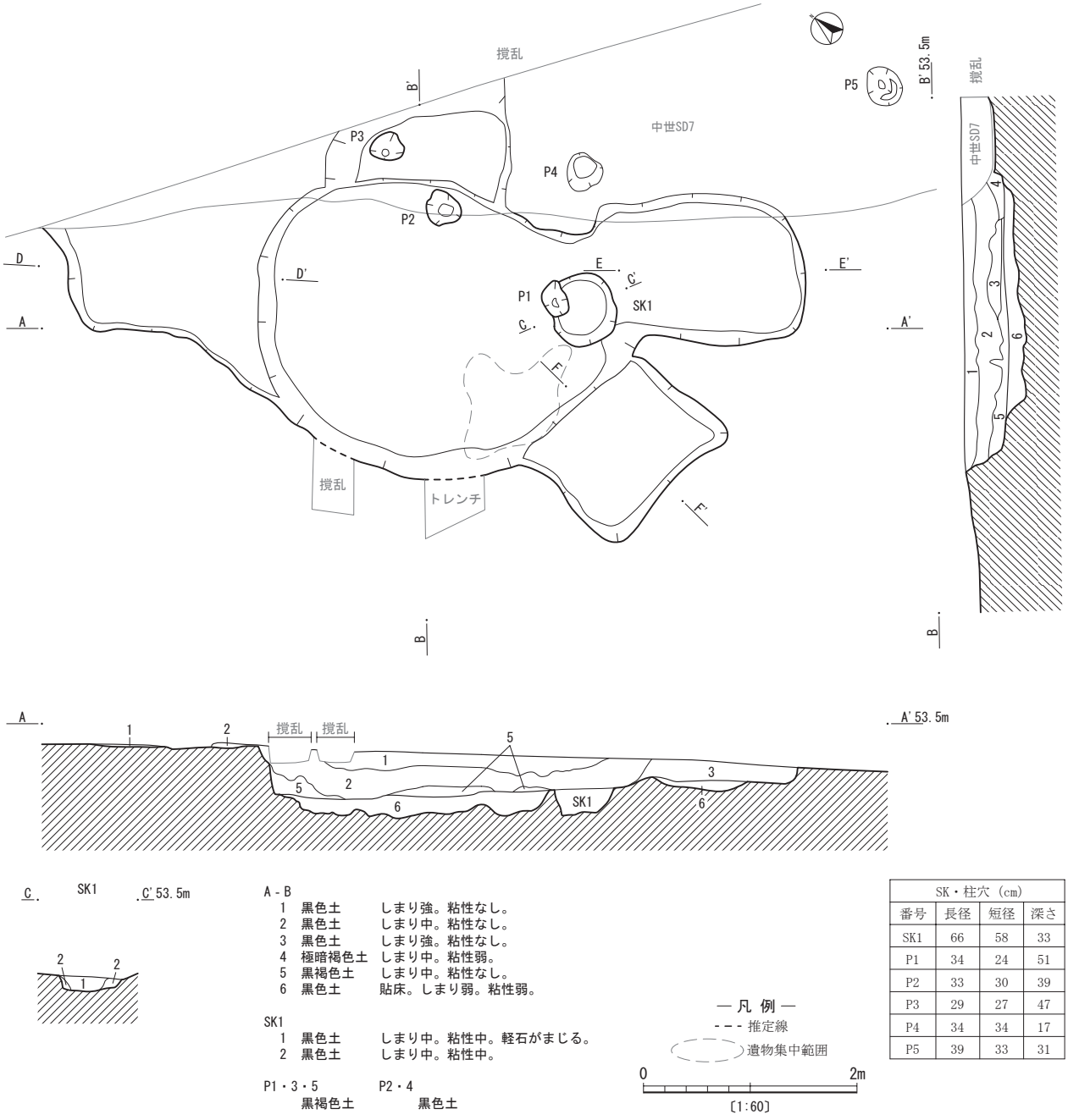
1928 は砥石である。長さ 11.5cm（推定），幅 5.5cm，厚さ 1 cm，重さ 86 g の頁岩製で，正面，裏面及び右側面が砥面で，正面と裏面には断面「V」字の溝が走る。また，裏面は剥落しているが砥石としての利用を継続している。

竪穴住居跡４号（第 313～316 図 1929～1941）

H － 36 区のⅢａ層中で検出された。町道部分にあたり，かつ中世の溝状遺構により一部削平されている。

長径 6.9 m，短径不詳，中心部での検出面からの深さ 0.4 mの花弁形住居であるが，張り出し部がおよそ北側と南側にのみ構築されていることもあって，全体の平面形は楕円形となっている。

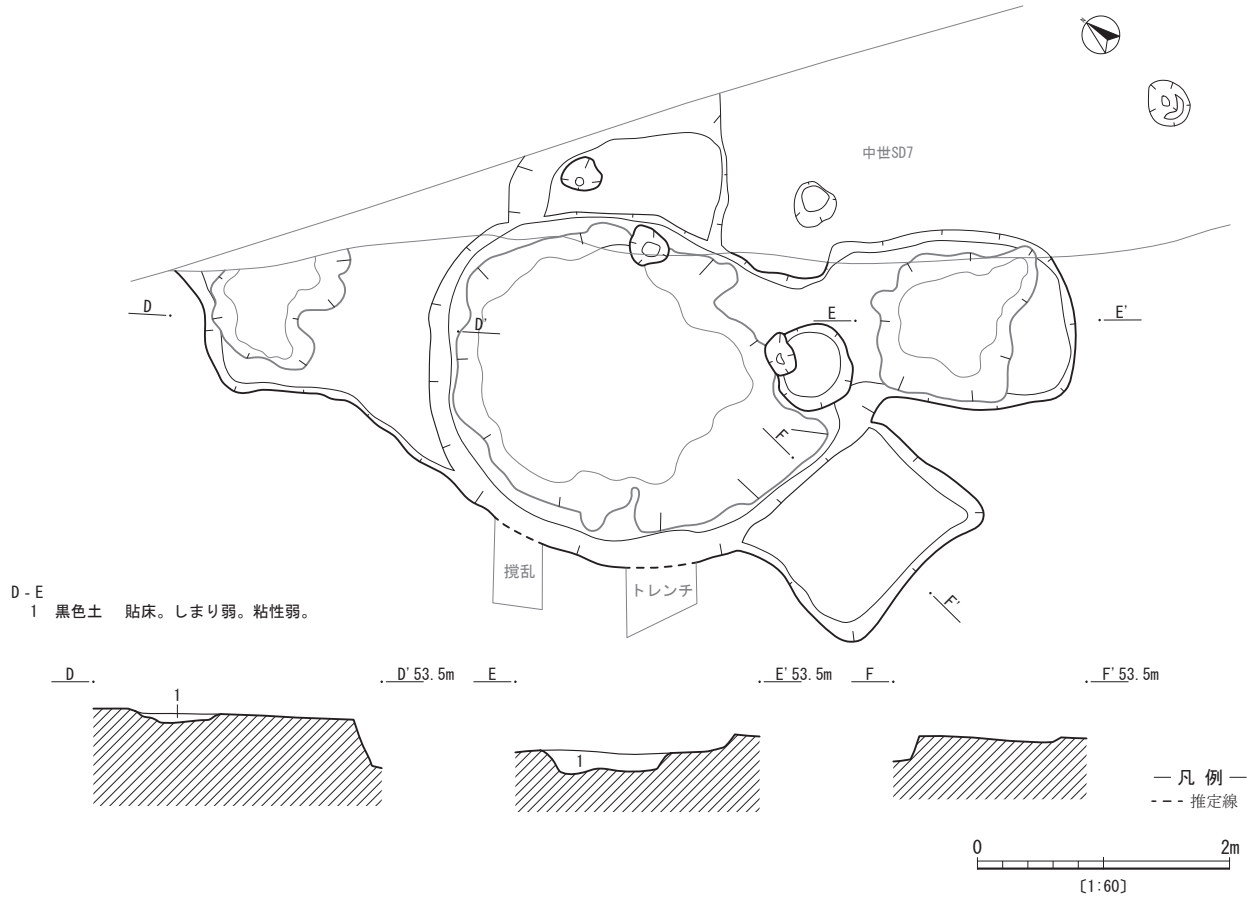
北側と南側にそれぞれ２基がまとまって偏在する張り出し部は，双方東寄りの張り出しが相対的に深くなっている。また，張り出し部の平面形は方形を基本とするが，



SK・柱穴（cm）

番号	長径	短径	深さ
SK1	66	58	33
P1	34	24	51
P2	33	30	39
P3	29	27	47
P4	34	34	17
P5	39	33	31

第 313 図　古墳時代竪穴住居跡４号（１）



第 314 図　古墳時代竪穴住居跡４号（２）

相対的に広い方の張り出し部は，形状が崩れている。

柱穴は，住居東側から竪穴外を含めて５本検出された。径 30cm程度で深さも４本が 30cmを超えるなど，いずれもしっかりした柱穴であるが，竪穴とは配置がずれることから，これらが主柱穴とは想定しづらい。

中央部竪穴の床面南端から，平面円形で断面逆台形を呈する土坑（ＳＫ１）が１基検出された。住居の埋土と土坑の埋土の特徴がおおむね類似することから，住居使用時の土坑と想定して差し支えないと考えられる。

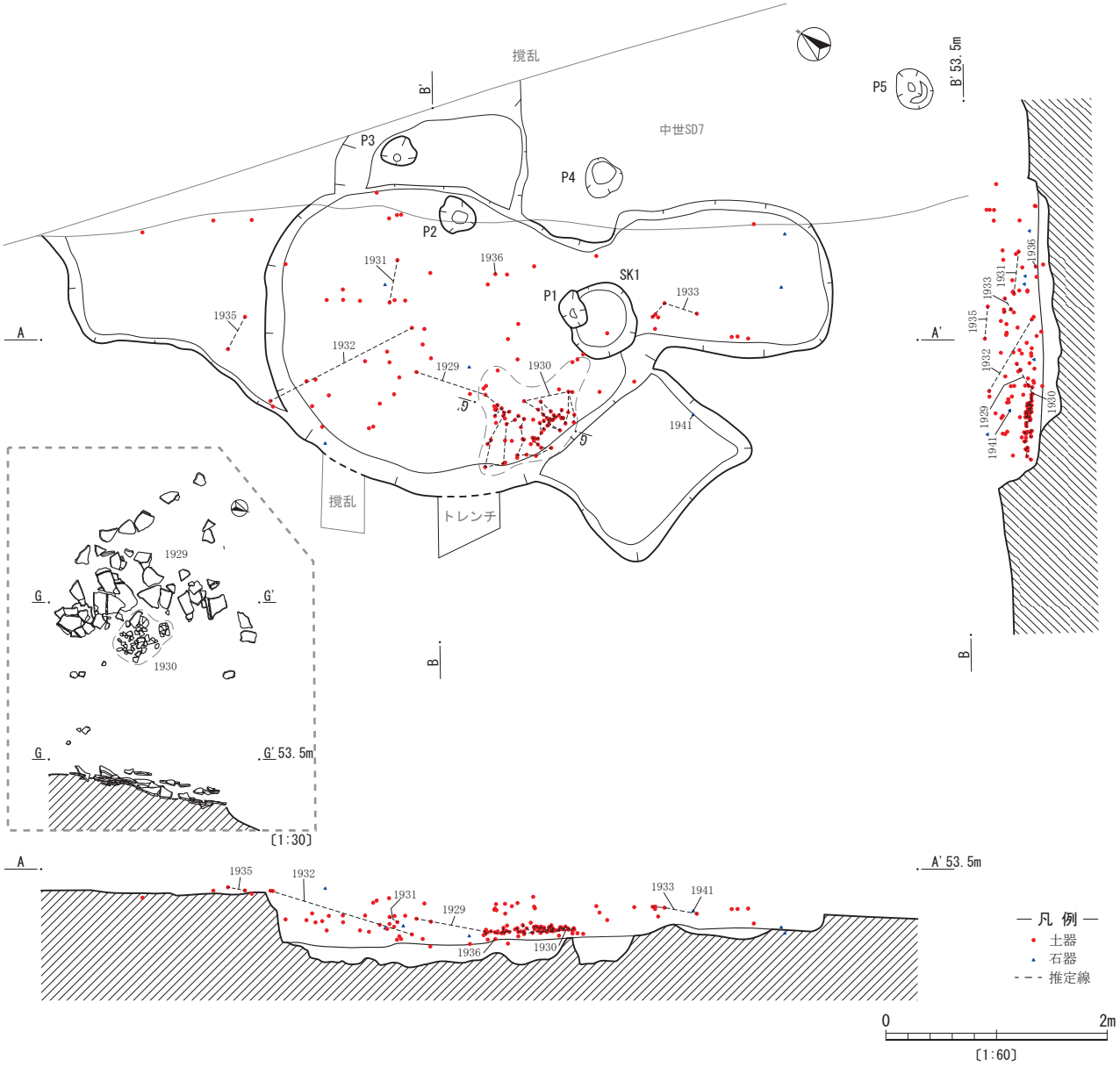
貼床は，中央部竪穴にのみ確認された。平均 10cm程度と厚く貼っている。なお，貼床を除去して検出した掘り込み面は，全面に細かい凹凸が広がっていた。ちなみに，広い方の張り出しの床面には，他の住居埋土に比して貼床のような硬い埋土で埋まった掘り込みを確認した（第 314 図）。

埋土は６層確認した。うち貼床は埋土６である。また，埋土４や５にはアカホヤやＶ層由来の土塊が混じる。おおむねレンズ状の堆積状況を示すことや埋土５及び３の状況から，複数方向からの土砂の流入による自然堆積で埋没したものと想定される。

遺物は，埋土下位から上位まで出土したが，中央部竪穴貼床面から若干浮いて（埋土５を挟むか）出土している。特に，土坑の南隣からまとまって出土した甕（1929）と壺（1930）は，破片にレベル差がほぼなく破片相互の重なりも少ないという，やや不自然な出土状況を呈している（第 315 図左）。

1929 は，辻堂原式土器並行期と考えられる甕である。口径 32cm，胴部上半はわずかに張るものの下半は直線的に底部にいたる器形を呈し，突帯付近で器壁を直立させ，口縁部は直線的に外傾させている。口縁端部は断面舌状に仕上げる。器面は，外面が縦基調，内面が斜位の軽いハケナデで整えられているが，内面調整は器形の変化に沿っていない部分も見られる。突帯は，法量に比して小振りだが断面三角形に丁寧に整形され，刻目はほぼ等間隔で大きさや深さなど形状を揃えている。

1930 は，口径 8.5cm，頸部径７cm，胴部最大径（突帯上端付近）16cmの壺である。口縁部に比して胴部が大きい器形で，肩部の丸みも強い。器壁を薄くほぼ均一に仕上げており，口縁端部も薄い舌状に整えるなど，坩に似た精緻さを有する。器面は，内面には指オサエの痕跡を残すものの，外面は口縁部～頸部と突帯周辺が横ナデ，肩部は縦ナデの丁寧な調整が施され，特に肩部は放射状に間隔を揃えている。胴部に１条巡る刻目突帯も，細やかな作業で貼付されている。また，外面の色調は全体的



第 315 図　古墳時代竪穴住居跡４号（３）

に赤褐色を呈しているが，顔料は塗布されていないと想定される。

1931～1933 は，埋土中から出土した甕である。1931 は口径 30.5cmで，器形は 1929 に類似するが突帯を貼付していない。ただ，突帯を貼付する位置に外面調整具の打ち込み痕を付けて（残して）おり（従って器面に残る調整痕の方向も変化しており），当該位置に何らかの意識が働いていることをうかがわせる。1932 も，1929 などと同様の器形と想定されるが，口縁端部は断面方形に仕上げる。器面には，ハケ目の痕跡が比較的明瞭に残るほか，突帯の貼付工程に伴う指先の爪の痕跡も残っている。1933 は甕の底部である。底径は 8.5cmで高さは低く，底部の厚さに比べ脚部の器壁が薄いものの，「八」の字状に整形されており安定感がある。全体に，繊維質の混和剤の跡が比較的多く散見される。

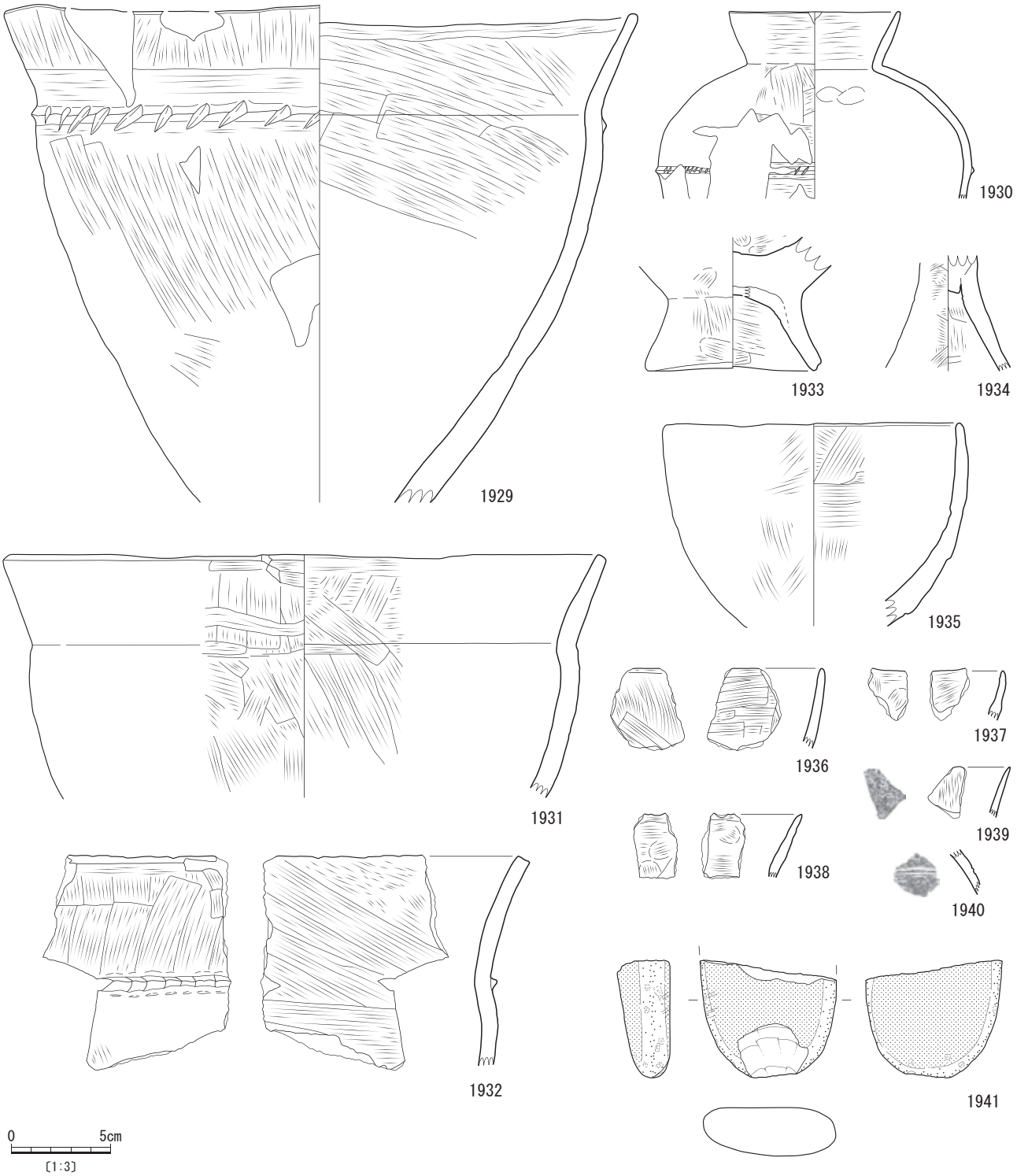
1934 は高坏の脚部で，ラッパ状に開く器形と想定される。内外面ともナデ調整が施されるが，外面のナデの方向は不規則である。土坑の埋土中から出土した。

1935～1938 は，鉢と考えられる。1935 は口径 15cmで，深めの椀のような器形である。底部を欠くため，脚が付いていた可能性も考えられる。器壁は底部が厚く，口縁部に向かうにつれて漸移的に薄くなる。器面は，内外面とも工具で不規則にナデられており，成形時の凹凸や歪みが残る。胴部下位には，内外面とも黒斑が観察されるが，場所が異なる。また，器面にススやコゲは観察されない。北西の張り出し部床面直上で出土した。1936 は

器壁が薄く外面の調整痕も丁寧である。1937・1938は，薄いつくりだが手捏ねの痕跡が残る。

1939・1940は坩と考えられる。1939は口縁部，1940は肩部または胴部で同一個体と想定され，どちらも外面には波状文を施している。1940には平行する２条の横位沈線文も施文されている。

1941は磨・敲石である。砂岩のやや扁平な転礫を用いており，破断している。敲打面は主に下端が用いられ，作業に伴うと考えられる大きな剥離がある。磨り面は正面及び裏面が用いられているが，特定の向きの擦痕などは観察されない。現存で長さ６㎝，幅７㎝，厚さ2.5㎝，重さ130ｇである。



第316図　古墳時代竪穴住居跡４号（４）

竪穴住居跡５号（第 317～321 図 1942～1957）

Ｇ～Ｈ－ 22～23 区のⅢａ～Ⅲｂ層上面で検出された。遺構の中央に地層観察用ベルトを設定していたため，先に遺構東側の張り出し部を検出したがそれぞれ個別の土坑と認識していた。その後，ベルトを挟んだ西側でも特徴の類似する土坑を検出したため，これらについて再検討し，１軒の住居と判断した。

長径 7.3 ｍ（現状），短径 6.4 ｍ，中央部竪穴で検出面からの深さ約 0.6 ｍの平面略円形を呈する花弁形住居であるが，中央部竪穴と張り出し部が連結しておらず，間仕切りの幅も広い点が特徴である。なお，北西のみ張り出し部がないが，浅い張り出し部もあることを踏まえると検出できなかった可能性もある。

中央部竪穴は，長軸 3.1 ｍ，短軸 2.3 ｍで検出面からの深さは 0.5 ｍあり，平面形は南北に長い洋梨状を呈する。床面は南北２か所が浅く凹むほか，突出する南壁は，途中に段を設ける。北側では炭化物の集中域も検出された。

５か所確認した張り出し部は，いずれも平面形はおおむね方形または中央部竪穴から広がる扇形だが，検出面からの深さは 0.1～0.2 ｍと差異がある。

柱穴は，中央部竪穴の周囲を巡るように８本検出されたが，径や深さに顕著な規模の違いが見られるため，どれが主柱穴にあたるか判然としない。ただし，そのうち４本（Ｐ１～Ｐ４）については，柱痕跡こそないものの，径が比較的大きい（50～70㎝）こと，遺物が出土していることなどから主柱穴の可能性が想定される。

埋土は４層確認されたが，貼床は確認されなかった。他方，埋土２やＰ１～４の埋土には，炭化物が他の埋土よりも多量に含まれていた。また，埋土３及び４にはアカホヤ火山灰が多く含まれていた。なお，堆積状況からは，人為的な埋め戻しか自然埋没か判断できなかった。

遺物は，点数こそ多くないが，上記した柱穴４本のほか，中央部竪穴でも特徴的な出土状況が確認された。

Ｐ１からは，炭化材６点（試料として採取），砥石（1955）などのほか，土玉（1954）が出土している。Ｐ２の底面では横転した状態の完形の坩が出土した（第 319 図左上及び 1942）。埋土中には炭化物も多く含まれていた。Ｐ３並びにＰ４では，底面中央から安山岩の礫（加工痕，被熱痕跡なし）が出土した。

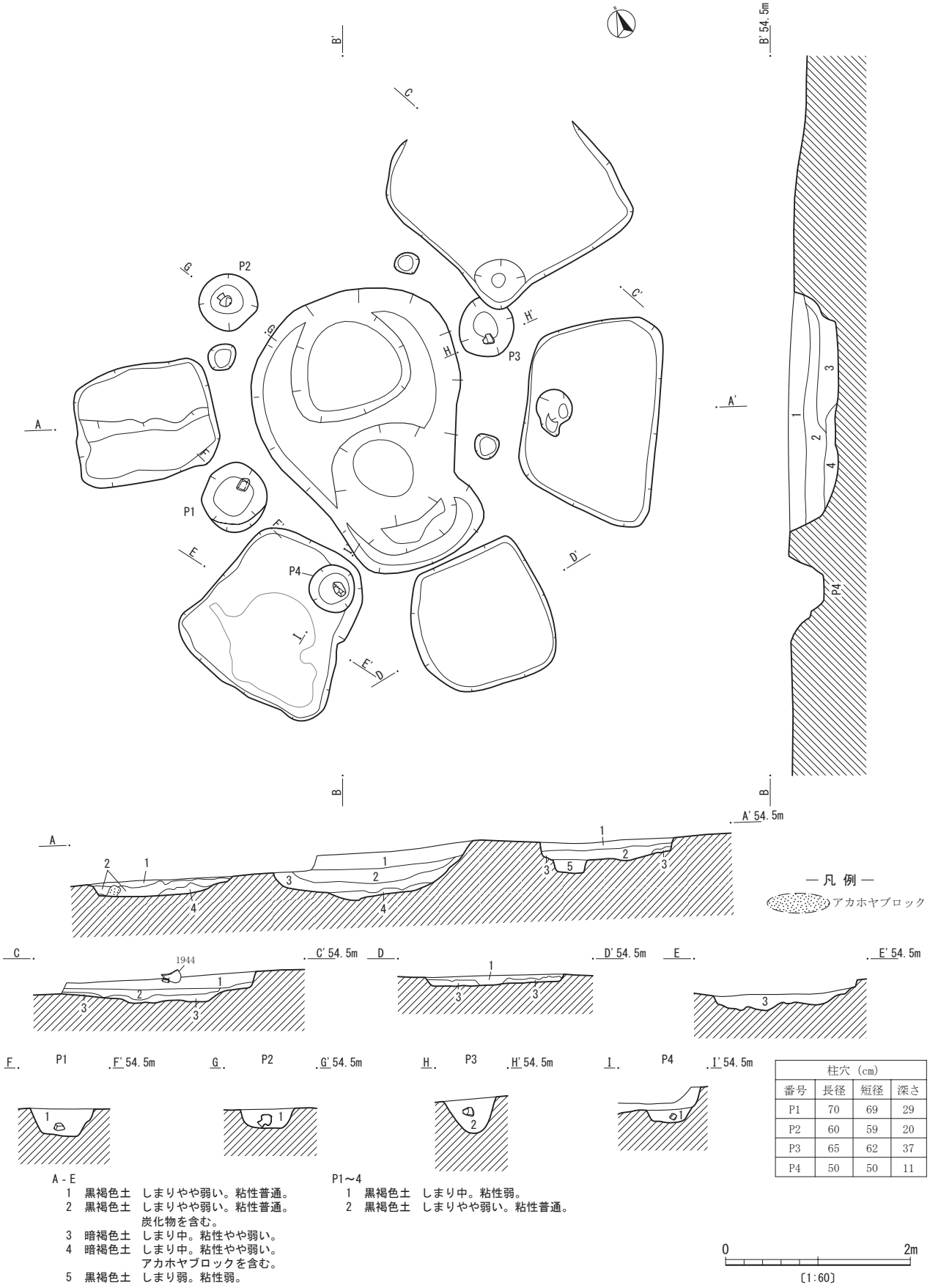
中央部竪穴では，中央部西寄りの埋土４直上から，甕２点（1943，1945），鉢（1944），高坏（1946）がレベルはやや異なるものの列状に出土した（第 318 図下）。なお，鉢は張り出し部出土資料と接合する。

５号の構造，遺物の出土状況並びに遺物個々の形状や埋土中の多量の炭化物などを踏まえると，この建物は，一般的な住居とは異なる機能を付された建物だった可能性もある。

1942 は，Ｐ２底面から出土した坩である。口縁部の１か所を欠くが，口径９㎝，頸部径７㎝，胴径 14㎝，器高 15㎝の完形品である。底部は，鈍い尖底で先端に小突起（径１㎝・厚 0.4㎝程度）を付け，胴部は最大径を頸部近くに取る腰高な形状で，下半には接合面と考えられる段がある。頸部は短く直立させ，わずかに開きながら直線的に口縁部に至る。器壁はほぼ均一で，底部周辺のみわずかに厚みを増す。なお，底部先端の小突起の成形については，内面に突起に対応するような凹みが観察されるが，器面の様子からは内面を突いているようにも，逆に外面から粘土を貼り付けているようにも見受けられ，表面観察だけでは判別できなかった。器面は内外面ともに丁寧な作業がなされており，特に外面は縦位のミガキが器形に合わせて緻密に施されている。内面は横ナデ，口唇部はミガキの後にごく軽く横ナデを加えている。明瞭な文様はないが，口縁部と口唇部に横ナデに伴う細い圏線があり，頸部屈曲部にはミガキ工具の打ち込み痕を揃えることで，１条の横位細沈線状の凹みがある。なお，被熱痕跡は確認されなかった。

口縁部の欠損については，断面形状や接合資料が住居内にないことなどから人為的な可能性がある。また，胴部内面には，底端から頸部にかけて，ススが環状に付いている。その角度は，坩を出土状態にまで傾けるとほぼ水平になる。因みに事実関係は，出土時は坩内部まで土が充満していた，Ｐ２埋土には炭化物が多量に含まれていた，器面に被熱痕跡等はみられない，である。

1943～1946 は，住居中央やや西寄りの地点でまとまって出土した（第 318 図下。1944 のみ住居内広範囲に接合資料あり）。1943 は，笹貫式土器並行期と考えられる甕である。口径 28㎝で底部を欠くが，口径の割に器高が短い開口部の大きい器形と想定される。胴部は丸みをもつがあまり張らず，突帯付近から角度をほぼ直立させてそのまま口縁部に至る。ただ，内面の突帯上位付近のみ，器壁が口縁部の外反する甕のようにやや突出している。器面は，内外面ともに丁寧な調整が施され，特に外面は器形と異なり口縁部と胴部で調整方向を変えているのを観察できる。突帯はつまみ上げて仕上げているが，場所によって技法を変えている。1944 は鉢と想定しているが，Ⅲのような器形で歪みも目立つ。口径 30.5㎝，底径９㎝，器高 12㎝で，脚は低いが「八」の字状に広がる。底部から大きく開き，やや持ち上げつつもそのまま脚端部に至る。器壁は，底部から口縁部にかけて漸移的に薄くなるが器形に比して厚く，特に底部付近は分厚い。器面は，体部は内外面ともにヘラナデが粗くはないものの不規則に施され，口縁部のみ横ナデが加わる。脚は横ナデだが成形時の手捏ね痕がわずかに残る。文様等は，調整による効果を意識したと想定されるものを含め観察されない。口縁部内面やや下位には，部分的にススが付着

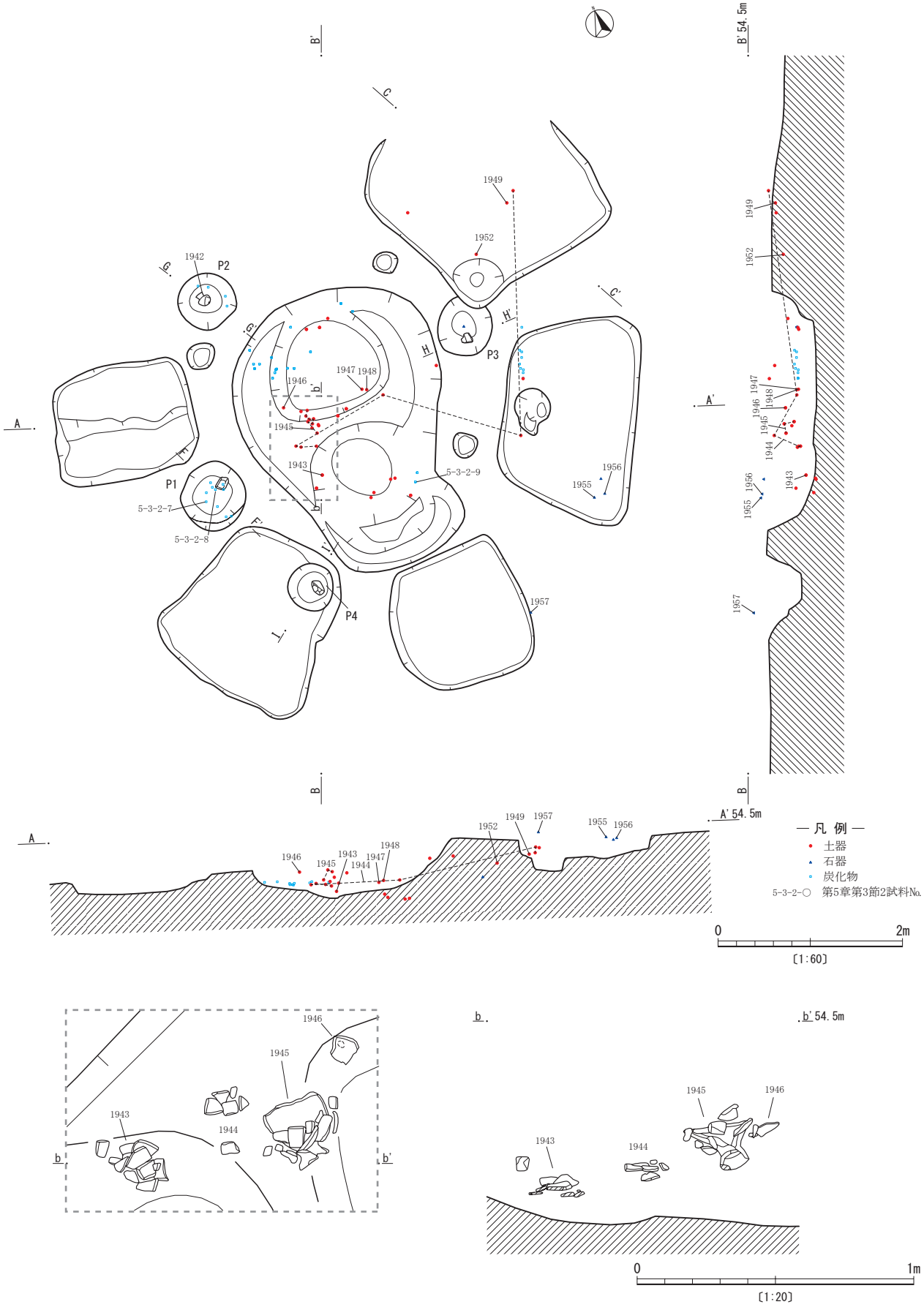


柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1	70	69	29
P2	60	59	20
P3	65	62	37
P4	50	50	11

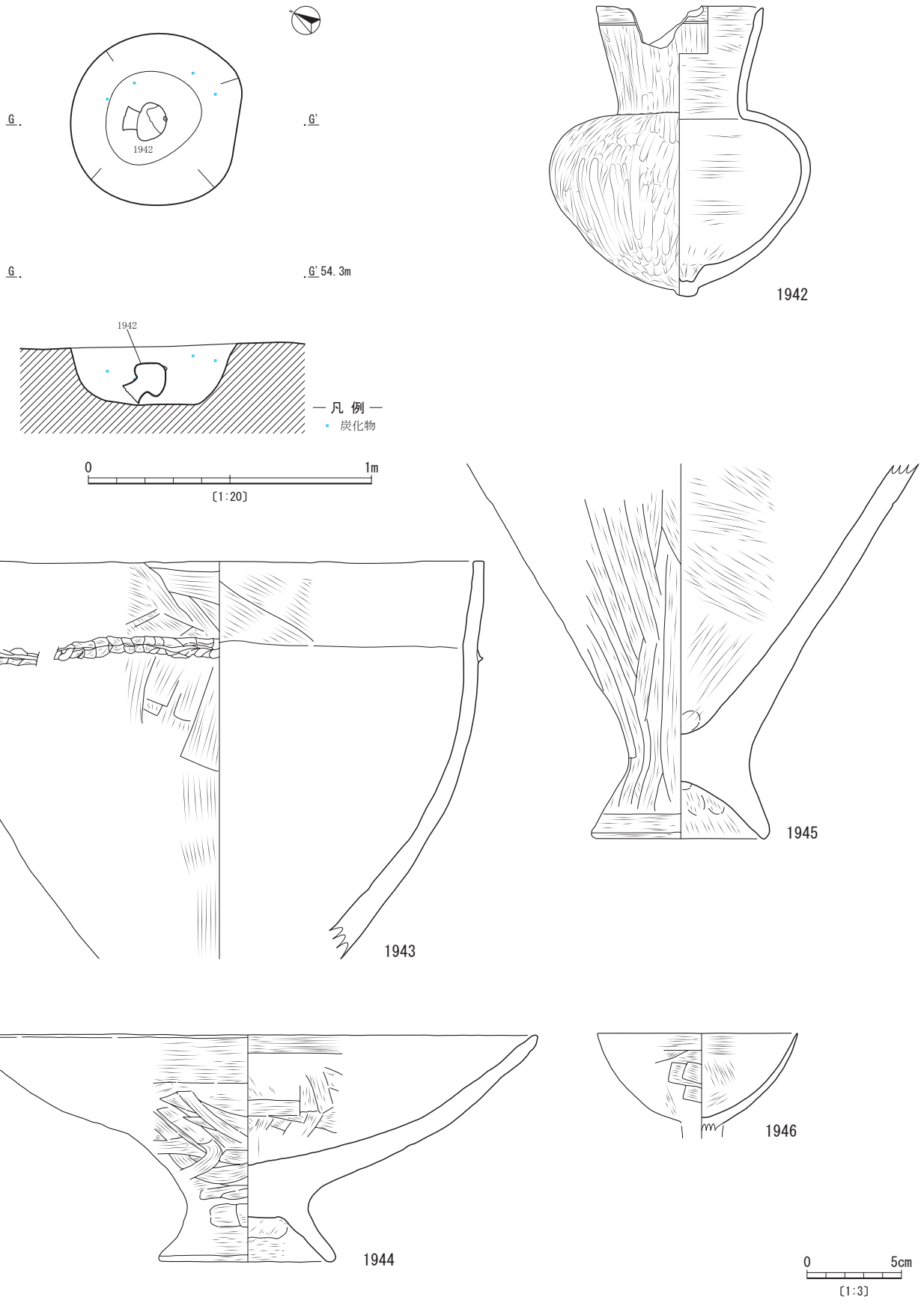
A - E
1　黒褐色土　しまりやや弱い。粘性普通。
2　黒褐色土　しまりやや弱い。粘性普通。
　　炭化物を含む。
3　暗褐色土　しまり中。粘性やや弱い。
4　暗褐色土　しまり中。粘性やや弱い。
　　アカホヤブロックを含む。
5　黒褐色土　しまり弱。粘性弱。

P1～4
1　黒褐色土　しまり中。粘性弱。
2　黒褐色土　しまりやや弱い。粘性普通。

第 317 図　古墳時代竪穴住居跡５号（１）



第 318 図　古墳時代竪穴住居跡５号（２）



第 319 図　古墳時代竪穴住居跡５号（３）

している。器形とススの付着状況から，蓋である可能性もある。1945 は甕と考えられる。底径９㎝，現状で器高20㎝で，底部から胴部にかけてほぼ直線的に開く器形である。脚も基部から端部に向けて漸移的に厚さを減じる整形で，端部も断面舌状に仕上げている。器面は，外面が脚端部を除いて縦位のヘラナデ，内面は底部付近が縦位ヘラナデで胴部は斜位のヘラナデであるが，ケズリのような痕跡や細かいヒビを伴う。また，外面調整について，脚端部から胴部まで一連の動作で（途中の一旦停止はあるものの）ナデ上げている。この他，胎土に白色の細粒を多く含み色調も鈍い橙色を呈するなど，全体的に従来知られている成川式土器と異なる特徴を備えた土器である。1946 は高坏の坏部である。口径 10.5㎝とやや小振りで，脚部との接合部で割れている。器壁は薄く，底部からわずかに弯曲しながら尖り気味に整形された口縁部に至る。胎土はキメが細かく混和剤の粒子もごく小さい。種子か何かが爆ぜた痕跡が１か所観察される。内外面にススが付着している。

1947・1948 は甕または壺の口縁部である。同一個体の可能性もある。口唇部を断面方形に仕上げ，器面はナデ調整を施す。1947 は口径 20㎝で，端部の同じ箇所を内→外の順に２回打ち欠いている部分が１か所ある。

1949 は壺の底部と考えられる。底径５㎝で，接地部分を細長く伸ばした器形で，底部はほぼ平底に整形される。外面は縦位のミガキ調整が施される。胎土に雲母を含み，色調は鈍い褐色を呈する。

1950 は，小形丸底壺の口縁部と考えられる。口径11.5㎝で，器壁はやや厚みがあるものの，内外面ともに丁寧な横ナデで整形されている。胎土のキメも細かい。

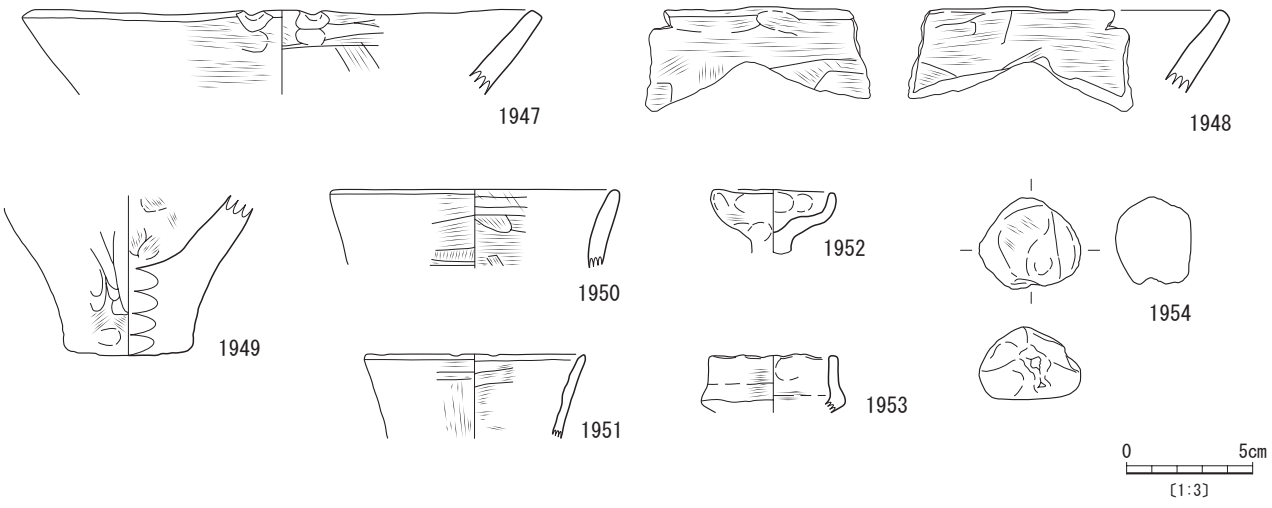
1951 は坩の口縁部と考えられる。口径 8.5㎝で，内外面ともに器表面の剥落が著しく詳細は不明だが，確認できる限りでは丁寧な調整が施されていたようである。

1952 は，手捏ねの鉢もしくは高坏と考えられる。北東部の張り出し床面から出土した。口径 4.5㎝で，下部は接合面で割れている。口縁部平面形はやや楕円にひずむ。器面調整は，外面より内面が丁寧に施されている。1953 も手捏ねの土器で，坩のような器形を呈すると想定される。口唇部などは成形時の凹凸を残すが，胴部や屈曲部は横ナデされており，そのためか器壁の厚さも比較的揃っている。口径５㎝，屈曲部径６㎝である。

1954 は，1945・1946 の近くから出土した，土玉である。１か所に平坦面を有するが，それ以外に文字化できるような特徴等はなく，凹み部も意図的に穿った様子は看取されない。色調は，全面黒色を呈する。幅４㎝，奥行 3.5㎝，高さ３㎝である。

1955 は砥石である。南東の張り出し部から出土した。砂岩製で，下半部の正面並びに左右側面を砥面としており，横断面でみると，正面は凹面，右側面は凸面，左側面は平面となっているのが特徴的である。上半部は敲打痕が各面に観察される。表面の色調が赤みを帯びたり黒変したりしている部分があり，被熱した可能性がある。1956 は砂岩製の敲石である。敲打痕は各面の中心部に集中するが，特に正面，裏面，左右側面の敲打部分は顕著に凹む。1954 の隣から出土しており，表面の色調から，同様に被熱した可能性がある。

1957 は磨石である。ホルンフェルスの転礫を用いており，主に上下端に形成されている敲打部分以外を磨り面としている。敲打部分には平坦面が複数できている。



第 320 図　古墳時代竪穴住居跡５号（４）



第 321 図　古墳時代竪穴住居跡５号（５）

(2) 土坑（ＳＫ）

10 基の土坑が検出された。中央丘陵では，東側の斜面の緩やかになる部分に４基，北側の斜面に１基，南東方向に下る緩斜面に１基，南側に１基のあわせて７基がある。西側丘陵では，西側の緩斜面に３基ある。

形状・規模など様々で，そのほとんどが用途不明である。

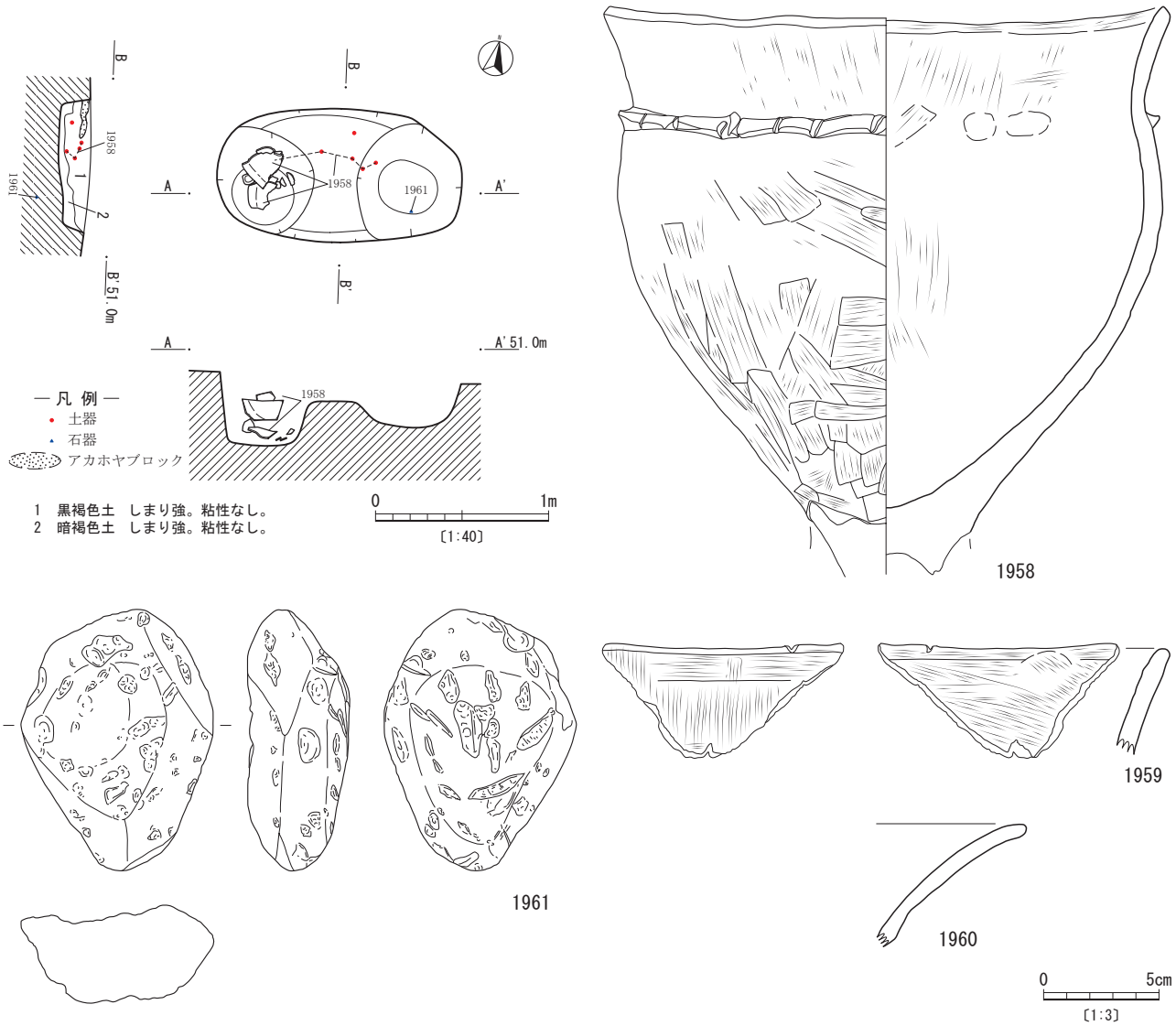
土坑１号（第 322 図 1958～1961）

Ｇ－ 42 区のⅢｂ層で検出された。Ｎ 84° Ｅに軸をもち，平面形は長楕円形を呈する。長径 145cm，短径 79cm，検出面からの深さは 19cmである。遺構の東側と西側に床面から一段低くなっている部分があり，それぞれ遺物が出土している。床面からの深さは，東側が 15cm，西側が 26cmである。埋土は２層に分けられ，埋土１・２ともにしまりが強い。埋土１は黒褐色土に小さなアカホヤの粒が混じっており，埋土２は暗褐色土に池田降下軽石を多く含んでいる。

遺物は，東原式と考えられる土器片数点と軽石製品１点が出土している。

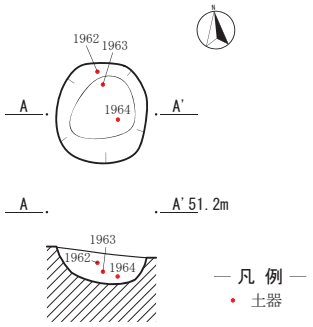
1958 と 1959 は甕である。1958 は竪穴住居跡１号と遺構間接合した土器で，刻目突帯をもつ口縁部～胴部で，丸く張る胴部から底部にかけて急に窄まる曲線的な器形である。口縁部は外反するが直線的に整形されており，端部は断面方形に仕上げている。突帯はよく整形されているが，部分的に断面方形を呈する。刻目は広めの間隔で施されているが，１か所近接している部分がある。口径は 24.5～25.6cmと歪みが激しい。調整は外面がハケ縦・横ナデ，内面がヘラ縦・横ナデと指オサエである。口縁部から胴部中程までススの付着がみられる。1959 は口縁部で，甕の割に丁寧な調整が施してある。外面は横・縦ナデ，内面は横・斜めナデである。

1960 は高坏の口縁部である。内面の口縁付近にススが付着していることから，外蓋として転用されたものと考えられる。調整は内外面とも横ミガキである。



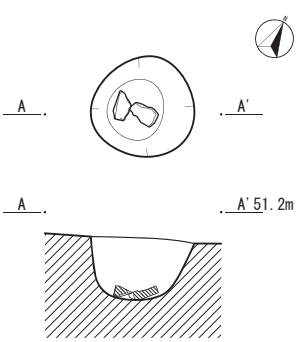
第 322 図　古墳時代土坑１号

土坑2号



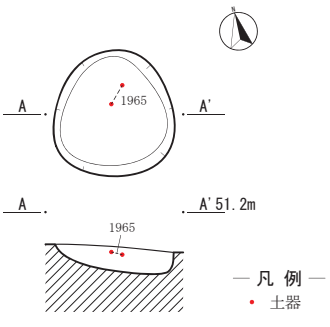
黒褐色土　しまり強。粘性なし。

土坑3号



黒色土　　しまり中。粘性なし。

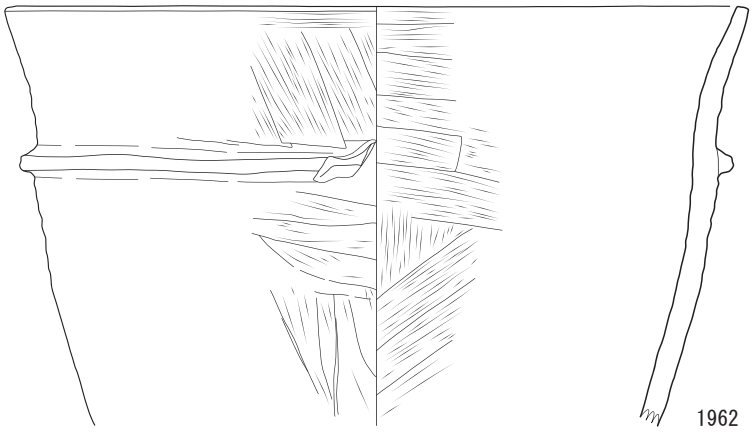
土坑4号

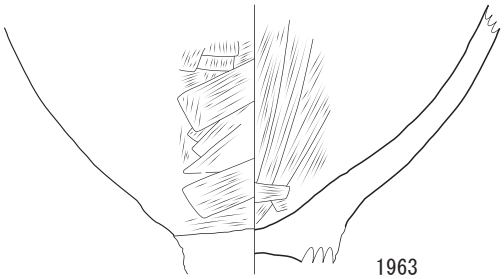


黒色土　　しまり弱。粘性やや弱い。

0　1m
〔1:40〕

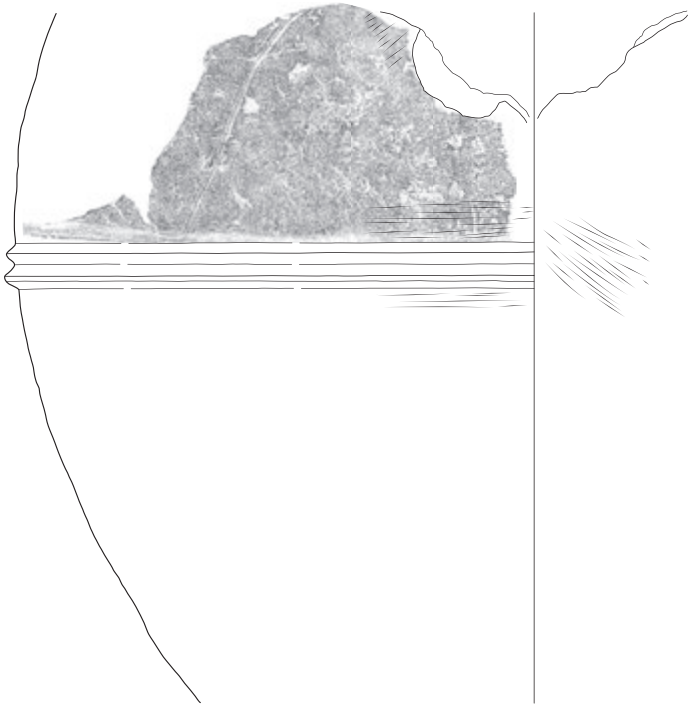
土坑2号

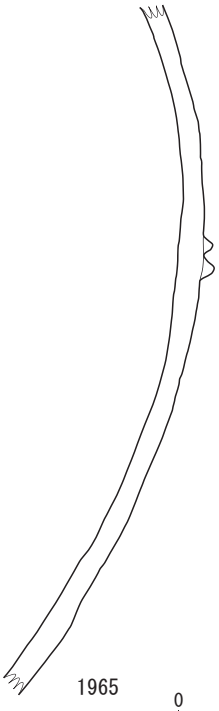






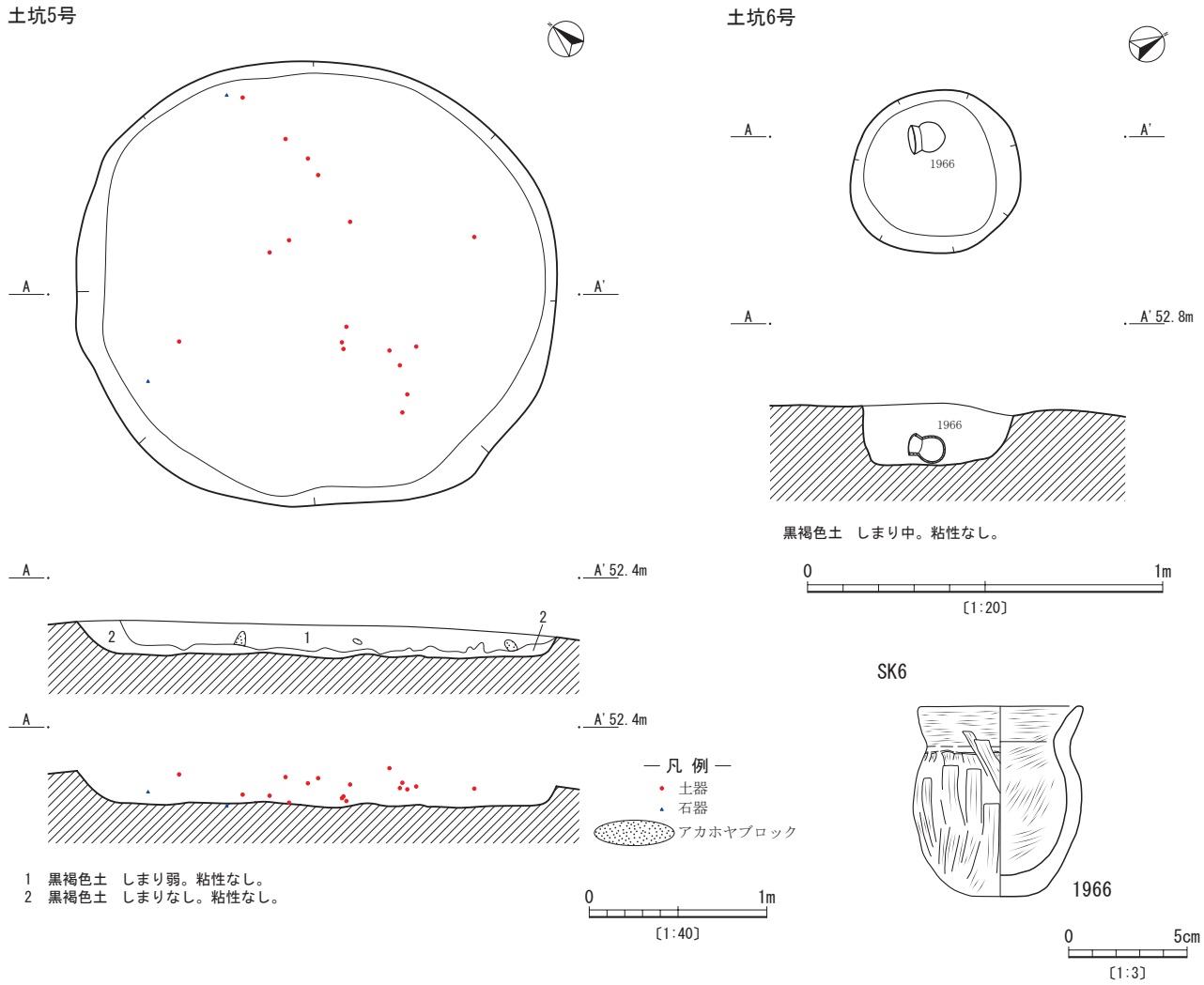
土坑4号





0　5cm
〔1:3〕

第 323 図　古墳時代土坑２～４号



第 324 図　古墳時代土坑５・６号

1961 は略楕円形の軽石製品である。

土坑２号（第 323 図 1962～1964）

Ｆ－ 42 区のⅢｂ層で検出された。おおよそ円形を呈する。径は 50cm，検出面からの深さは 15cmである。埋土は２層に分けられ，埋土１・２ともに黒褐色土だが，埋土１には火山灰が多量に混入している。

床面からほぼ完形に近い小壺１点と，土器片２点が出土している。

1962 と 1963 は甕である。1962 は無刻目突帯をもつ口縁部である。調整は内外面ともに横・縦・斜めナデである。1963 は胴下半部で，鉢のようにやや開き気味の器形である。器面調整は丁寧だが，調整の痕跡が多く残る資料で，外面が縦・斜めナデ，内面が縦位・横位・斜めナデである。

1964 は，手捏ね成形による小型壺の胴部～底部である。底部の一部に粘土が貼り付いており，安定しない。底径は 2.3～2.7cmの楕円形を呈する。調整は外面が縦ナデ，内面が横・縦ナデと指オサエである。

土坑３号（第 323 図）

Ｆ・Ｇ－ 42 区のⅢｂ層で検出された。平面形はほぼ円形を呈する。径約 50cm，検出面からの深さは 40cmである。埋土は単層で，微少なアカホヤ粒が混じる黒色土である。

床面から 40cm大の角礫２点が出土している。

土坑４号（第 323 図 1965）

Ｆ－ 41・42 区のⅢｂ層で検出された。平面形はほぼ円形を呈する。径は約 60cm，検出面からの深さは 15cmである。埋土は単層で，アカホヤが少量混じる黒褐色土である。

成川式の土器片が出土している。

1965 は大型壺の胴部である。２条の断面略三角形を呈する突帯を有するが，２条とも下側部分の接合があまい。２条のうち下の突帯は頂部がやや丸みを帯び，断面台形に近い形状を呈している。突帯より上の部分には，雑だが大振りの鋸歯文がみられる。また，人為的に内面から打ち欠いたと思われる部分があり，その周辺の内面

部には赤色顔料を塗布したと思われる痕跡が確認できる。調整については，外面は摩滅およびススの付着により不明瞭，内面は一部斜めナデが確認できるが，全体的に摩滅により不明瞭である。

土坑５号（第 324 図）

Ｅ－ 40 区のⅢｂ層で検出された。平面形はおおよそ円形を呈する。長径 260cm，短径 250cm，検出面からの深さは 90cmである。埋土は２層に分かれ，埋土１・２中にアカホヤブロックが混じっている。埋土１は黒褐色土に細かいアカホヤの粒が少量混じっている。埋土２は黒褐色土に埋土１より大きな粒径のアカホヤが少量混じっている。

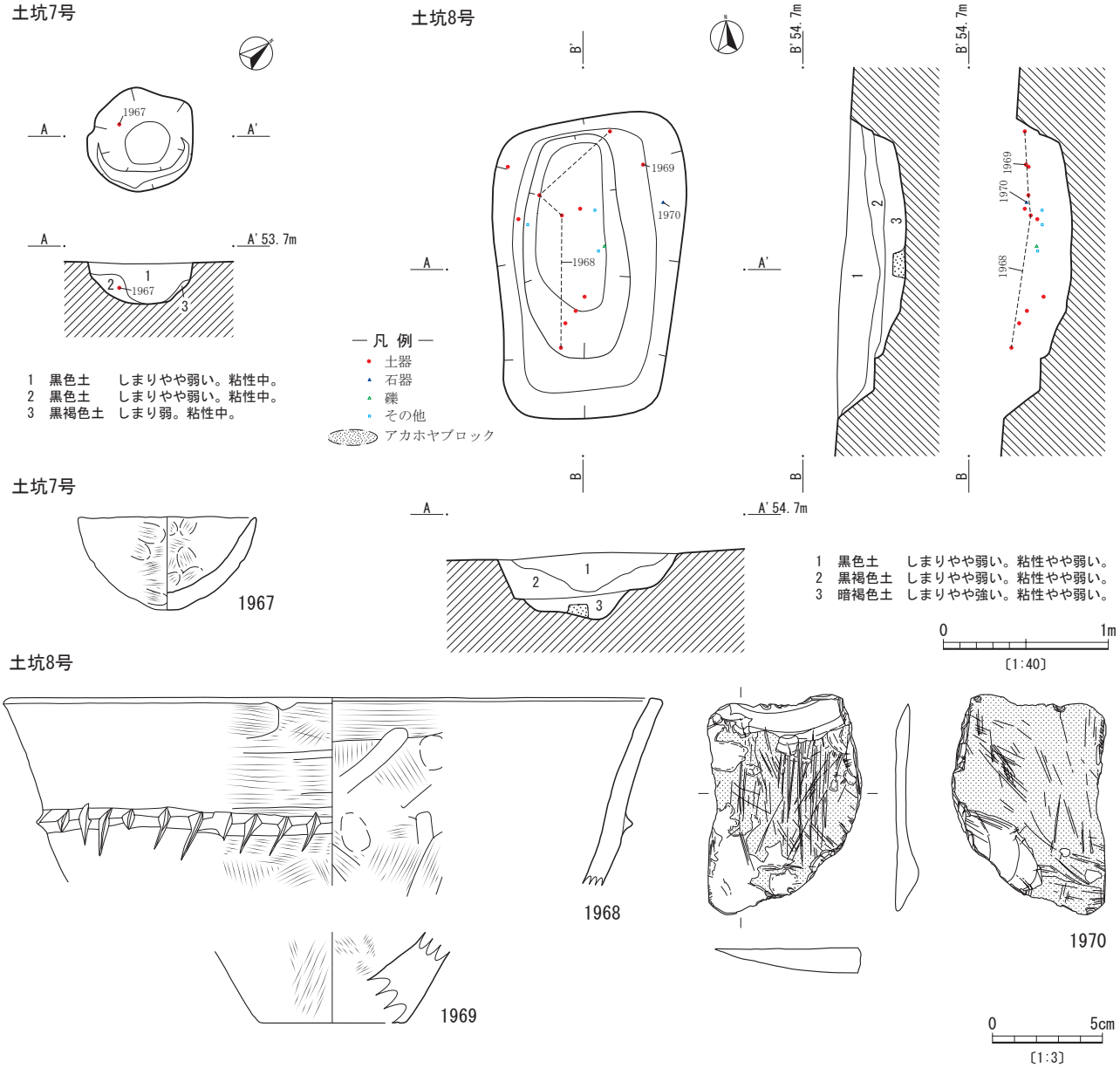
遺物は土師器片と石器が出土している。

土坑６号（第 324 図 1966）

Ｈ－ 38 区のⅢｂ層で検出された。平面形はほぼ円形を呈する。径は 40cmで，検出面からの深さは 17cmである。埋土は単層で，黒褐色土にアカホヤの小さな粒と池田降下軽石が少量混じっている。

床面から完形の小壺が出土している。

1966 は完形の小型壺である。外反する口縁部と丸く張り出す胴部の境に，工具を押し当てて作った段がある。底は平底となる。調整は外面の口縁部が横ナデ，胴部が縦ナデ，内面が横・斜め・縦ナデである。



第 325 図　古墳時代土坑７・８号

土坑７号（第 325 図 1967）

Ｈ－ 34 区のⅣ層で検出された。平面形は不定形だがおおよそ円形を呈する。径 65cm，検出面からの深さは 27cmである。中央部が深く，遺構の東側が段掘りになっている。埋土は３層に分かれ，しまりが弱い。埋土１・２は黒色土に黄橙色の粒が混じっている。埋土１の方が粒が多く，アカホヤブロックもみられた。埋土３は黒褐色土に黄橙色の粒が微量に混じっている。

成川式の鉢が出土している。

1967 は手捏ね成形による完形の鉢である。一部残っている口唇部から尖った先端が確認できる。胎土に小礫を多く含み，そのため器面の凹凸が顕著である。調整は内外面ともに斜めナデである。

土坑８号（第 325 図 1968～1970）

Ｊ－ 22 区のⅢｂ層で検出された。Ｎ４° Ｅに軸をもち，平面形は隅丸長方形を呈する。長軸 182cm，短軸 110cm，検出面からの深さは 40cmである。深さ 30cmのところがテラス状になっており，緩やかな傾斜で一段掘り込まれている。埋土は３層に分かれる。埋土１は黒色土，埋土２は黒褐色土でレンズ状堆積がみられることから，遺構廃棄後の流れ込みと判断する。埋土３は暗褐色土で３cm大のアカホヤブロックが混じっている。しまりも強いことから，床面を平坦にするための人為的なものの可能性がある。遺物は，埋土２から土器が出土しており，口縁部の形状から辻堂原期の成川式と考えられる。赤色顔料３点が出土し，分析の結果パイプ状の粒子がみられ，鉄バクテリアから作られたベンガラと判断された。また，埋土１から未製品だが擦痕のある石器が出土している。

1968 は刻目突帯をもつ甕の口縁部である。突帯は断面三角形だが，頂部がやや丸みを帯びる。調整は内外面ともヘラナデ，指オサエである。

1969 は壺の底部である。調整は内外面ともに斜位ナデで，外面は特に丁寧でミガキのようになっている。

1970 は頁岩製の砥石である。正面に研いだ痕跡がみられる。

土坑９号（第 326 図 1971）

Ｊ－ 22 区のⅢｂ層で検出された。平面形は円形を呈する。径は 75 × 74cm，検出面からの深さは 48cmである。深さ 30cmのところにテラス状の緩やかな傾斜があり，一段深くなっている。埋土は黒色土の単層で，極小のアカホヤが微量に混じっている。

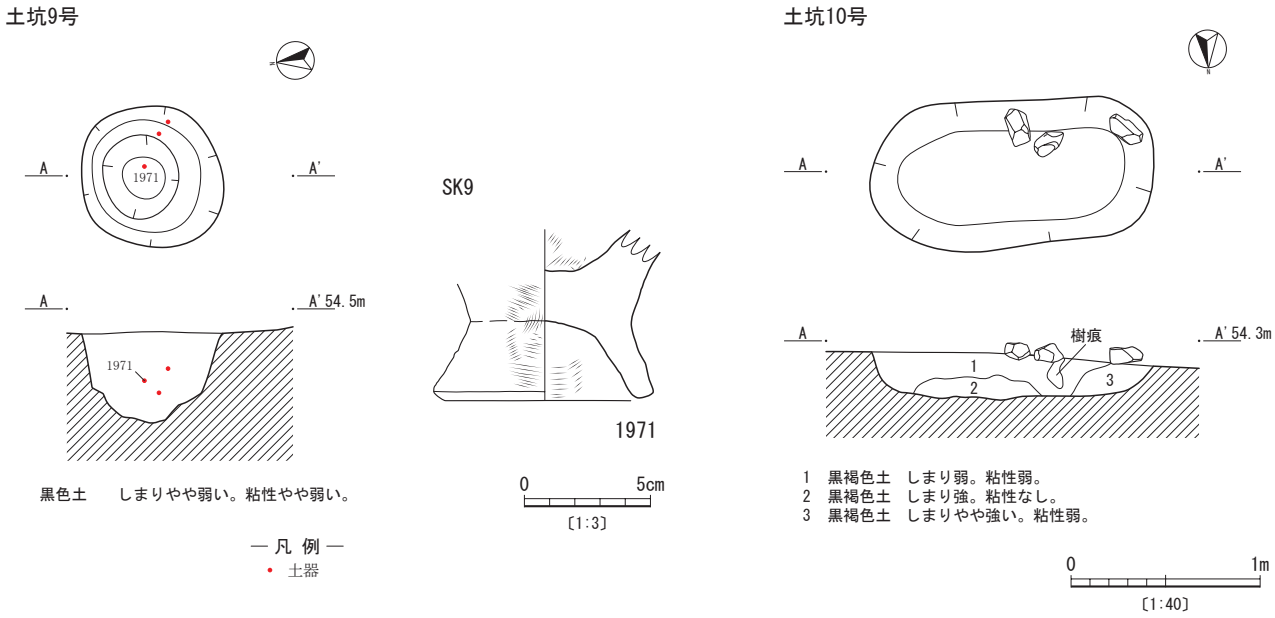
遺物は，成川式土器の脚台１点と土器片２点が出土している。

1971 は甕の脚台である。脚台の接地面はやや凸凹している。調整は外面が向きの揃わない斜方向ハケナデ，内面が横あるいは斜めのハケナデである。

土坑 10 号（第 326 図）

Ｈ－ 22 区のⅢｂ層で検出された。Ｎ２° Ｅに軸をもち，平面形は楕円形を呈する。長径 149cm，短径 75cmで，検出面からの深さは 25cmである。埋土は黒褐色土で，３層に分かれる。埋土１は包含物がなく，埋土２は３～５cm大のアカホヤブロックと粒径１～２cmの池田降下軽石が混じっている。埋土３は粒径の小さいアカホヤの粒と池田降下軽石が少量混じっている。

埋土１上面から被熱痕跡のある礫が３点出土している。



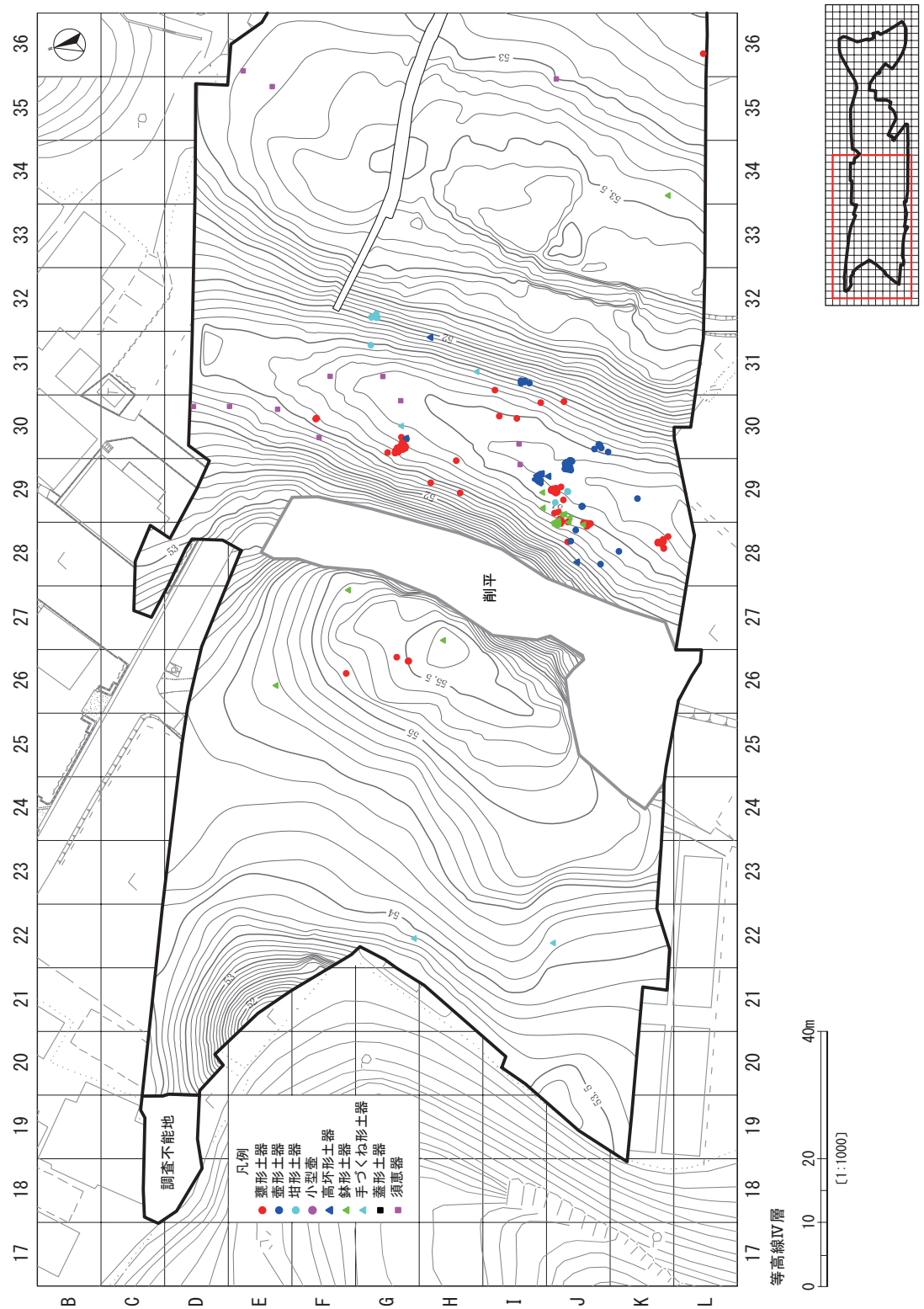
第 326 図　古墳時代土坑９・10 号

3　土器・須恵器

(1) 調査区西部（第 237 図）

当該時期の包含層遺物は少なかったが，そのうち西部の 41 点，東部の 35 点を図化した。西部の出土傾向は，Ⅰ－ 29 区・Ｊ－ 29 区に遺物が集中しており，特に高坏形土器についてはそのほとんどがⅠ－ 29 区で出土している。

甕形土器，壺形土器，坩形土器，高坏形土器，鉢形土器，手捏ね土器が出土している。



第 327 図　古墳時代　西部出土土器分布図

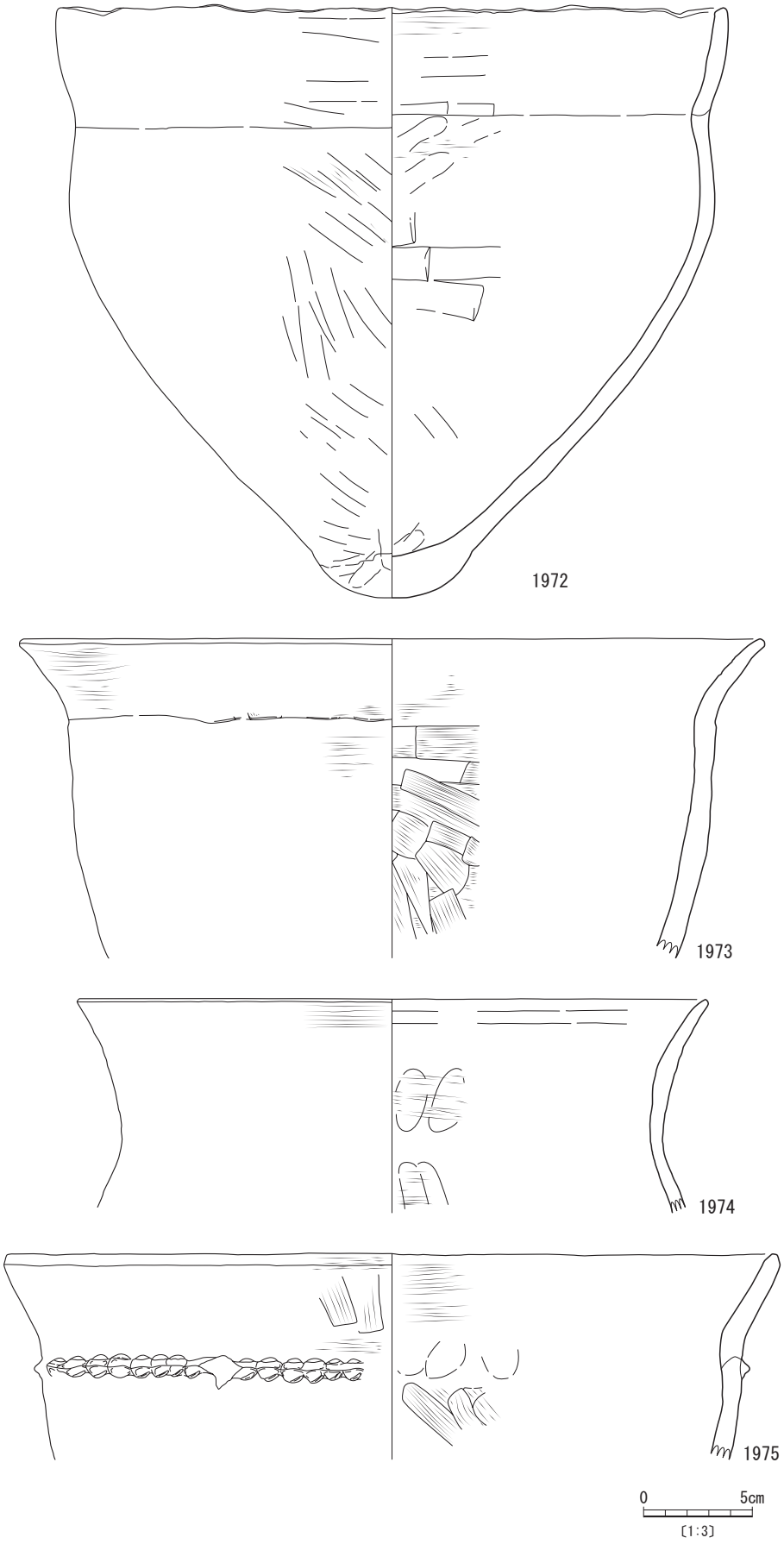
甕形土器（第 328・329 図1972～1985）

口縁部は，緩やかに外反し先端付近でわずかに内弯するもの，強く外反するもの，緩やかに外反するもの，頸部に突帯が貼り付けられるものがある。

1972 は緩やかに外反し先端付近でわずかに内弯するもので口縁直径 31.0cm，推定高 27.0cmの丸底甕である。口縁端は凸凹し，肩がやや張る丸みを帯びた器形をしている。底部は粘土が外に貼り付けられており，凸レンズ状に突出している。胴部にススが付着している。1973 は口縁直径 34.2cmの大型甕で，口縁が強く外反する。外面は口縁へかき上げているため，頸部で段状を呈している。外面はヘラナデ，内面はハケナデである。縦ナデが横ナデにより消されているが，頸部に縦ナデヘラ押し当てを明瞭に残すことにより段状を呈している。1974 は緩やかに外反するもので，内外ともに基本は横ナデであるが，胴部は縦ナデも確認できる。1975 は頸部に突帯を貼り付け，指でつまみ出すようにして稜を作出している。また，つまみ出す際についたと考えられる爪の痕が明瞭に残る。内面に強くヘラを押し当てているため器面が歪んでいる。1976 の外面はヘラ斜ナデ・横ナデ，内面は横ナデである。色調はにぶい褐色である。

1977 は完形品である。口縁直径 17.4cm，高さ 20.6cmの丸底で，長胴で頸部は窄まり，口縁は緩やかに外反する。輪積みの痕が内面頸部近くに明瞭に残り，段状になっている。器形は歪んでおり，器面の凹凸が激しい。また，1974・1976 と口縁部の形態が似ていることから，３点は同様の器形であるとみられる。

1978 は胴部である。手捏ね風で，内面に指で押した痕が強く残

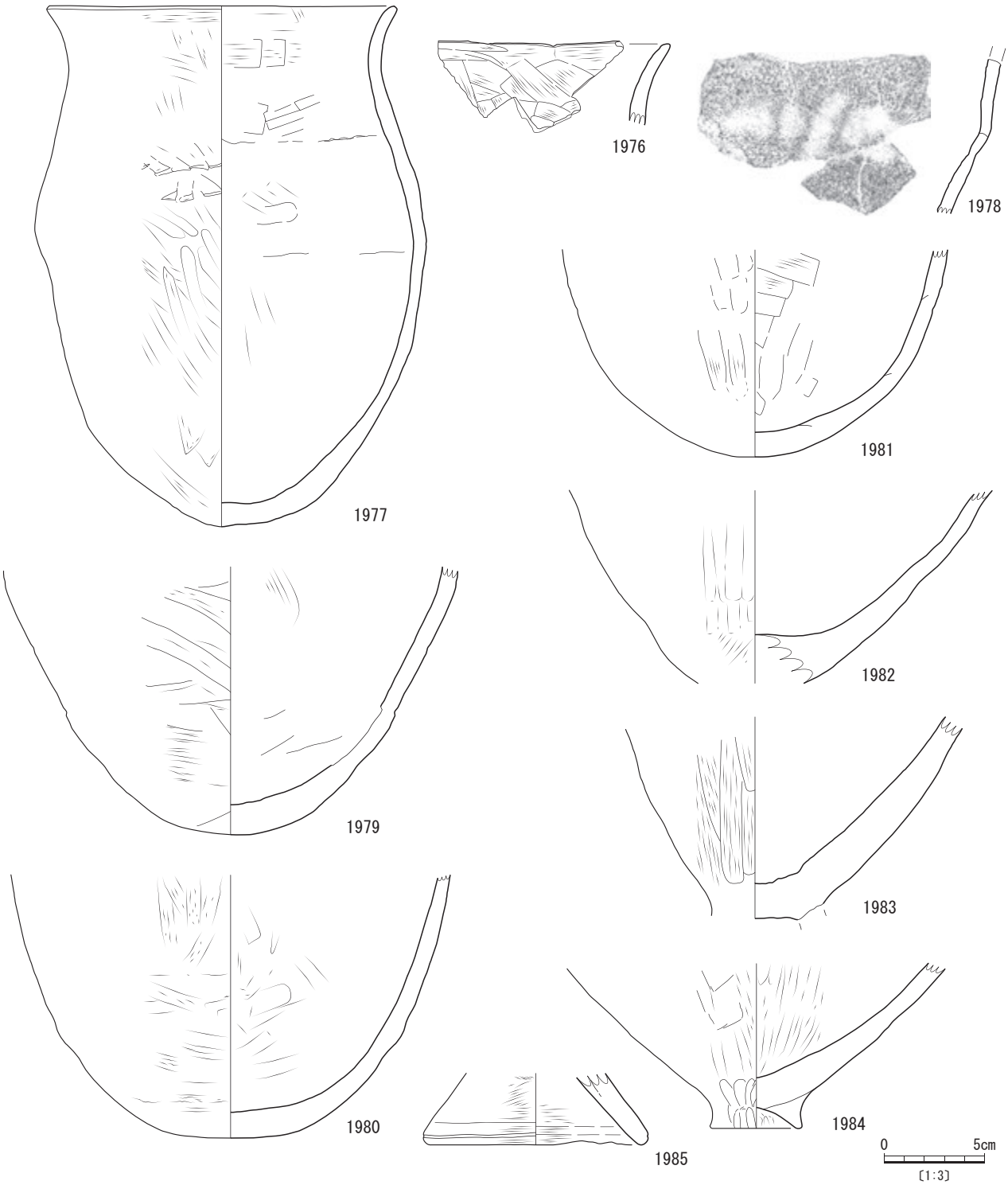


第 328 図　古墳時代　西部出土土器（１）

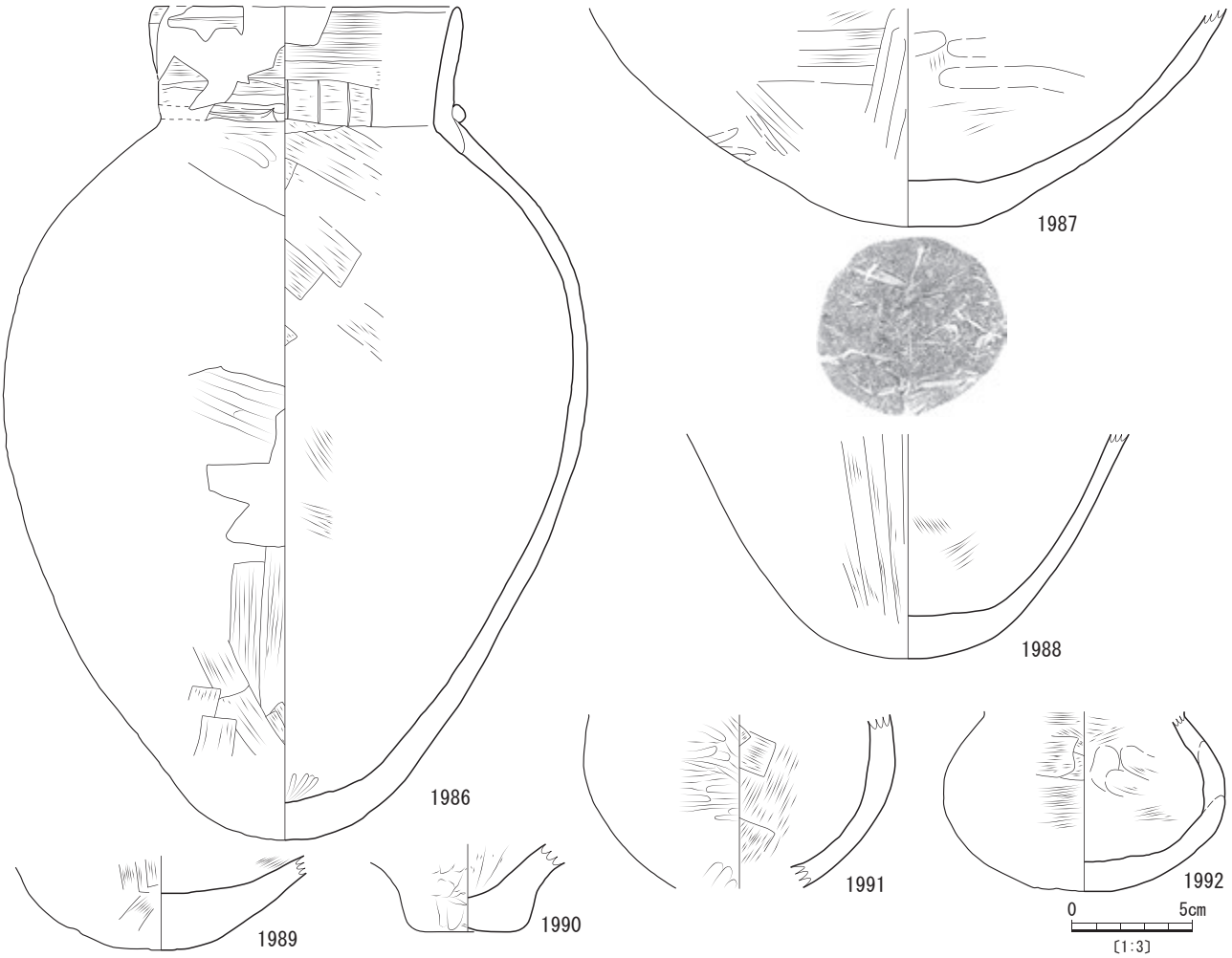
るため器面が歪む。

1979～1984 は底部で，1979～1982 は丸底，1983・1984 は脚台付である。1979 の外面はナデ方向が定まっておらず，器面の凹凸が激しい。1980 の外面は調整が雑で，器面の凹凸が残るが，内面の調整は丁寧で器面は滑らかである。1981 は外面のヘラ縦ナデが一部光沢を帯びる。胎土は石英を多く含む。1982・1983 は胴部から底部で，1982 は丸底，1983 は脚台付で器形は雑であり，脚台は欠損している。1984 は胴部から脚台である。底に粘土を貼り付け，貼り付け部には指圧痕がみられる。

1985 は脚台である。中空で外に開きながら下にのびる。端部の整形が雑である。図面には反映できなかったが，肉眼観察で体部と脚台境には上下から指押しした突帯の貼り付けが確認できた。また，外面端部に 1 条の凹線が巡る。



第 329 図　古墳時代　西部出土土器（2）



第 330 図　古墳時代　西部出土土器（３）

壺形土器（第 330 図 1986～1990）

1986 は完形品で口縁直径 12.0cm，高さ 34.5cmの丸底である。やや肩の張った長胴の器形を呈し，口縁はわずかに外に開きながらまっすぐ立ち上がる。頸部の突帯は粘土紐を貼り付けているが，ほとんど剥落している。上下の調整は雑である。

1987～1990 は底部である。1987～1989 は丸底で，底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がり底部が肥厚する。1987 は底に粘土を貼り付けて分厚くし，底部には木の葉状の線刻みがみられる。1988 は調整が丁寧で，器面が滑らかである。1989 は特に底部が肥厚し，厚さ 2.3cmである。器面が凸凹している。1990 は不安定な小さい平底で，内外ともにヘラ斜ナデである。

坩形土器（第 330 図 1991・1992）

1991・1992 は坩形土器である。1991 は下から緩やかに立ち上がり，胴部中央付近に最大径がある球状の器形を呈する。器壁がやや厚く，平均して 0.9cmほどある。1992 は底部から緩やかに立ち上がり，胴部中央付近に最大径がある楕円体状の器形を呈する。頸部が窄まって口縁に続く形状と考えられる。内面には指オサエの痕が強く残る。外面底部は黒色化している。

高坏形土器（第 331 図 1993～1999）

1993～1996 は坏部が腰部から屈折し，口縁部が外反する器形である。1993 の口縁直径は 23.0cmである。深い坏部で脚部端が欠けている。脚部はやや外反しながら下にのびる。坏部と脚部のつなぎ目には脚部内面から粘土塊を充填している。摩滅しているため調整は不明瞭だが縦ナデである。1994～1996 は同じような器形の坏部だが，やや浅い。内外ともに横ナデ整形されており，特に外面は丁寧な横ナデが残る。

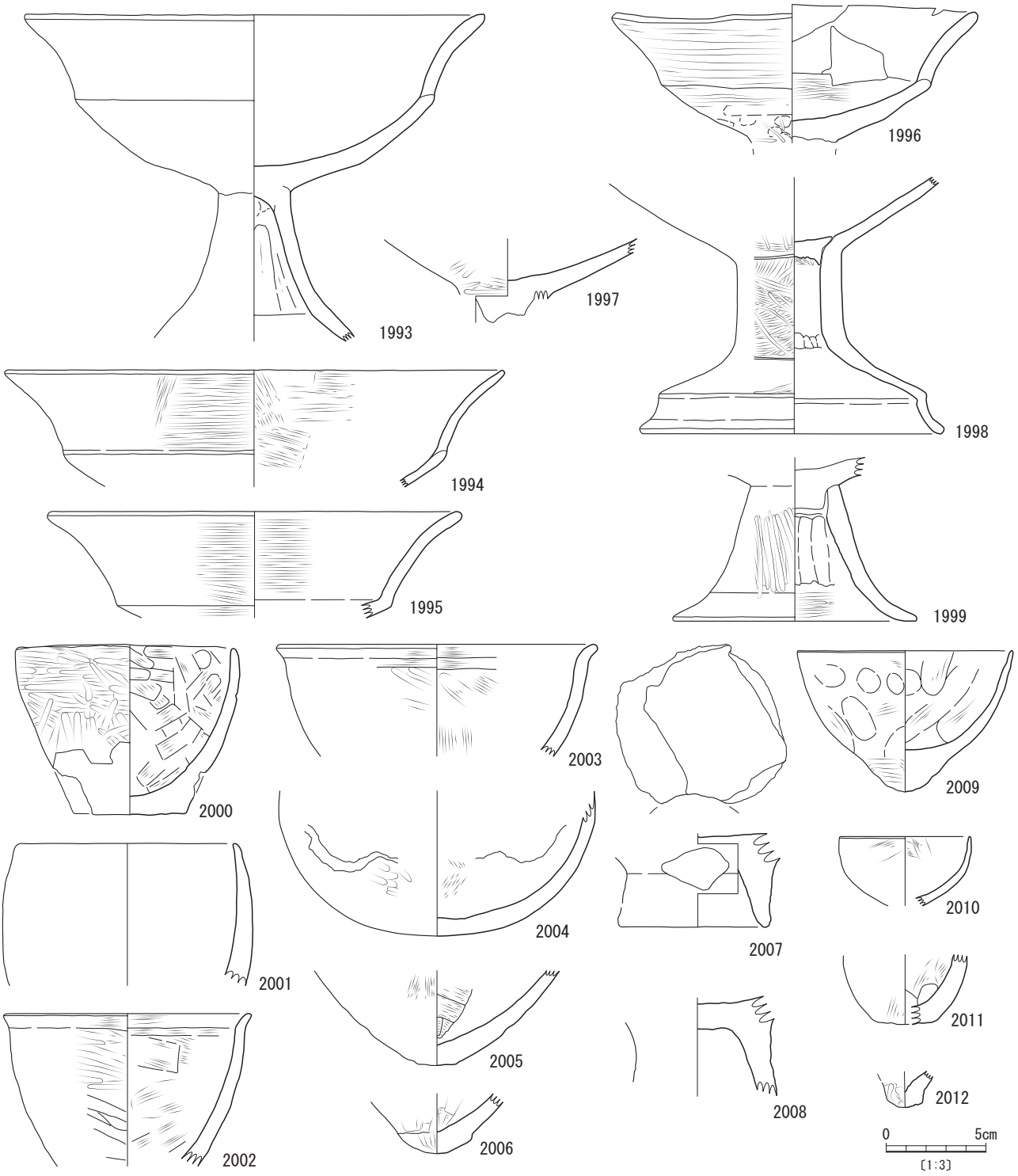
1997～1999 は坏部下半から脚部の破片である。坏部と脚部との外面接合部は丁寧に磨かれている。坏部下に突起がみられる。1998 は坏部とのつなぎ目からまっすぐ下に伸び，外に開きながら途中で強く屈折し，段を作って大きく外反する器形を呈する。坏部から脚部にかけてソケット状に押し込み，接合部を成形している。つくりが非常に丁寧で内底部のみが剥離している。接合面は接着しやすいよう掻き目などを施している。1999 の脚は

外へ開きながら下にのび，端部付近で強く外反する。1997・1998と同様の技法で接合していると考えられる。坏部下部に脚部内面接合部に向かって粘土を押した痕が残る。

鉢形土器（第331図2000～2008）

2000は口縁付近でわずかに内弯する盌形の器形を呈する。口縁直径10.7㎝，高さ8.5㎝の完形品だが，外面底部付近は，底部の中心を残すように広く欠けており，二次焼成時に破裂したと考えられる。内外ともに研磨に近い丁寧なナデだが，底の調整は雑である。

2001～2003は口縁部から胴部である。2001は口縁がやや内弯し，先端は先細る。2002は外にスス，内にコゲが残っている。2003は口縁直径16.0㎝で，先端近くで外反する。



第331図　古墳時代　西部出土土器（4）

2004～2006 は底部である。2004 は内面からの人為的な打ち欠きが確認できる。2005 は底部に粘土を貼り付け，突起状平坦面を作出している。2006 は凸レンズ状に突出する底部である。外面は雑な縦ナデ，内面は横ナデである。胎土は粗い土を用いている。

2007・2008 は脚台である。中空で脚はまっすぐ下にのび，脚部内面上部と内底は平坦である。外面は縦ナデ，内面は横ナデ仕上げである。脚台を残すように円形に残存しているため，意図的に打ち欠いている可能性もある。2007 は抉り込みのような痕が確認できる。

手捏ね土器（第 331 図 2009～2012）

2009 は円錐状の器形で，底部は肥厚し丸い尖底である。口縁端部は先細り，焼成によるひび割れが器壁全体に見られる。底部には黒斑が確認でき，内面にも一部黒斑が認められる。

2010 は薄手の半球状の器形で，口縁端部は先細る。外面には黒斑が確認できる。

2011・2012 は底部である。2011 は不安定な平底で，胴部にかけて丸みをもつ。内外ともにナデで，色調はにぶい黄色である。2012 は丸い尖底で，内面には絞りの痕が確認できる。内外ともにナデである。色調はにぶい橙色で，胎土は砂質土である。

(2) 調査区東部（第 333 図）

東部はＥ～Ｇ－ 40～42 区を中心に出土しており，該当するグリッドには 11 号住居跡や土坑１～４号があるため，包含層として掲載するが遺構出土遺物の可能性も考えられる。

器種は，甕形土器，壺形土器，坩形土器，高坏形土器，手捏ね土器，鉢形土器，蓋形土器である。

甕形土器（第 332・334 図 2013～2027）

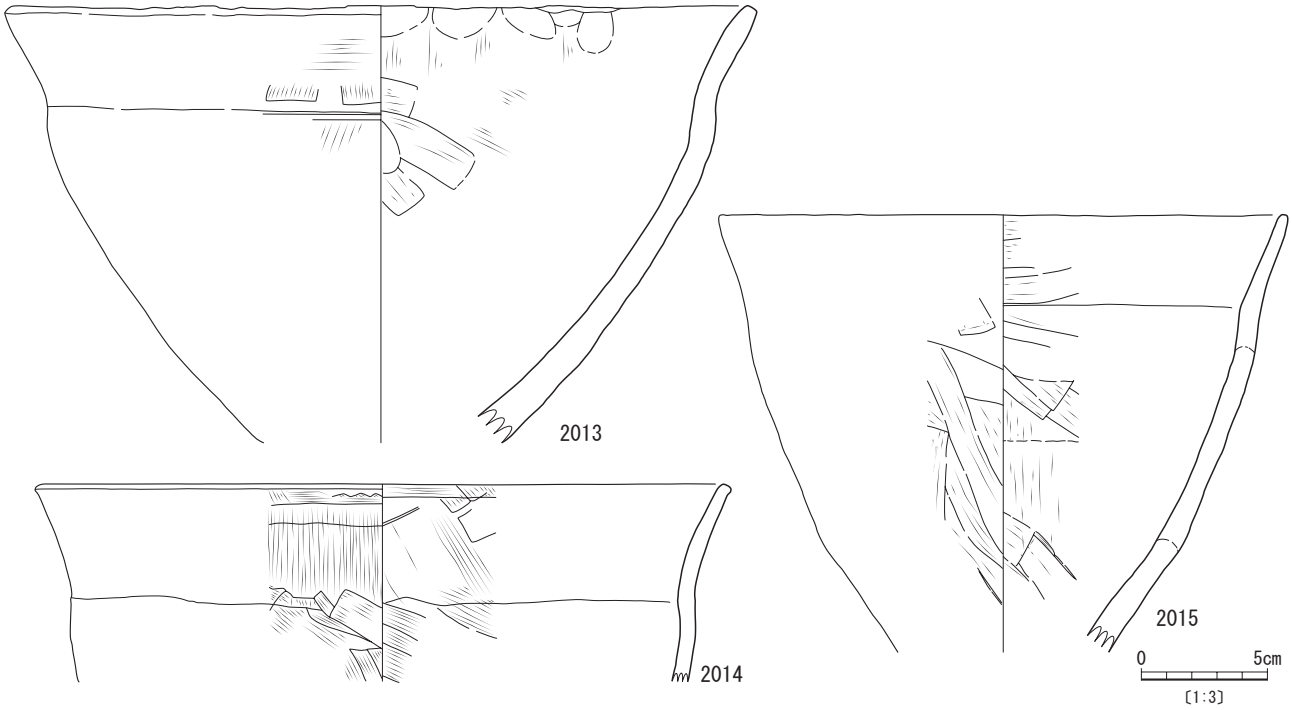
西部と比較すると，東部が多く出土している傾向がある。突帯が無いものとあるもの，大きく二種類に分かれるが，器形に大きな差が見られない。

2013～2020 は口縁～胴部である。2013～2015 は突帯が無い。口縁部外面はヘラ縦ナデ調整が確認できる。その後に，ヘラ横ナデを施しているものもある。

2016～2020 は三角突帯貼付がある。2016～2018・2020 は刻み目がなく，断面形状は角がしっかりとした三角形を呈する。2019 は突帯をつまむ様に整形し，2.0～2.5㎝の幅で不規則に刻目を入れる。口縁・突帯とも歪みが激しい。2017 は断面形状が丸みを帯びた三角形を呈する。突帯下部がしっかりとナデ付けられていないため，接合部が確認できる。

2013～2016・2018～2020 は頸部から口縁端部にかけてほぼ同じ厚みで，長く緩やかに外反するもので，2017 は直線的にのびるものである。2013・2015・2016・2018～2020 は口縁端部を平らに整形し矩形であるが，2015・2017 は丸くおさめている。口径は 22.6～34.0㎝と幅があり，30.0㎝程度の 2013・2018・2019 と，それ以下の 2014～2017・2020 に分類ができる。胴部上半が残存しているものに関しては，どれもススが付着しており使用した痕跡が見られる。

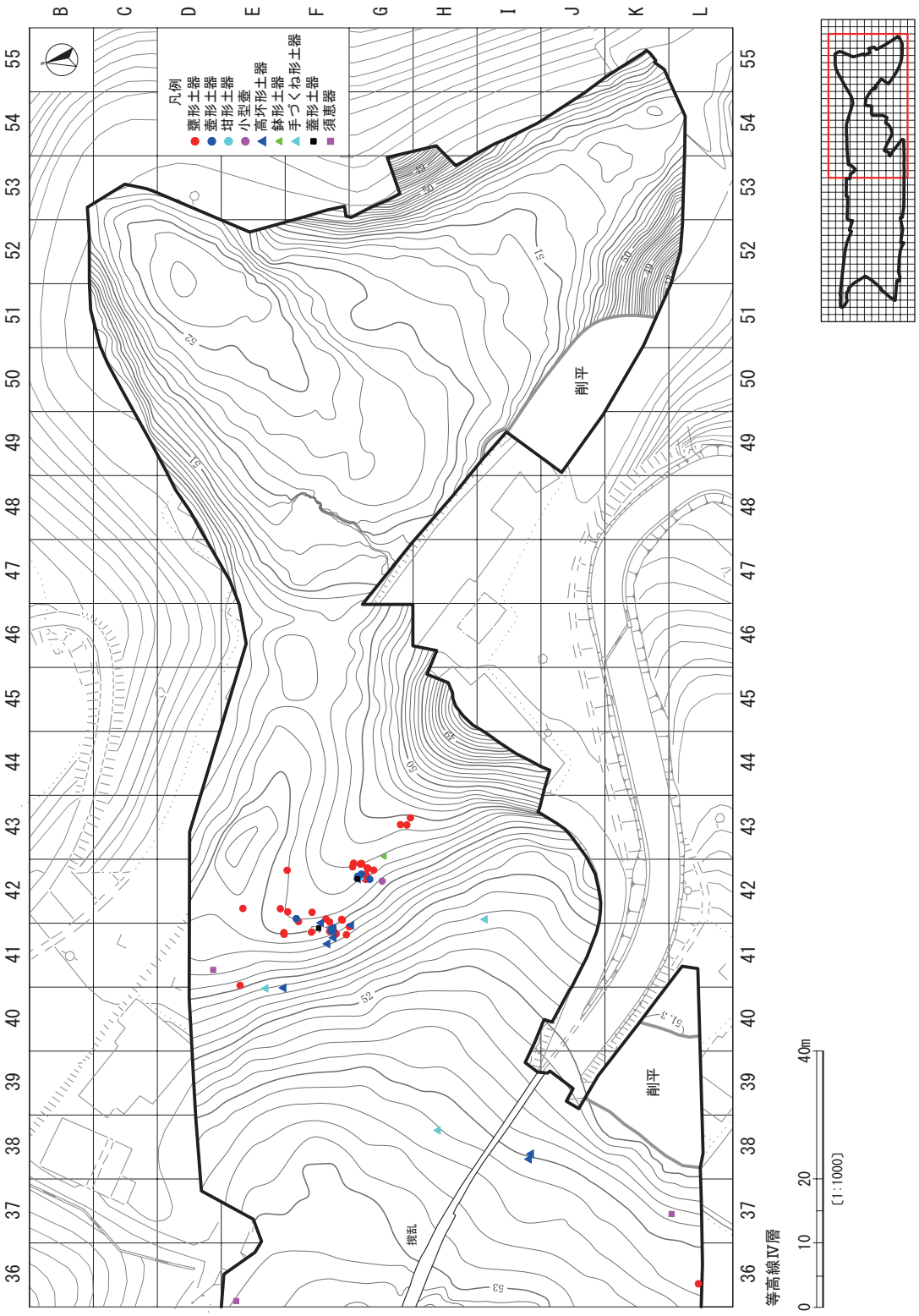
2021～2027 は胴部～脚台である。上げ底のものと中空のものとに分かれる。2021 は脚台が剥離した胴部である。胴部上面にススが付着する。2022 は上げ底の胴部～脚台である。内弯しながら立ち上がる小型の甕と想



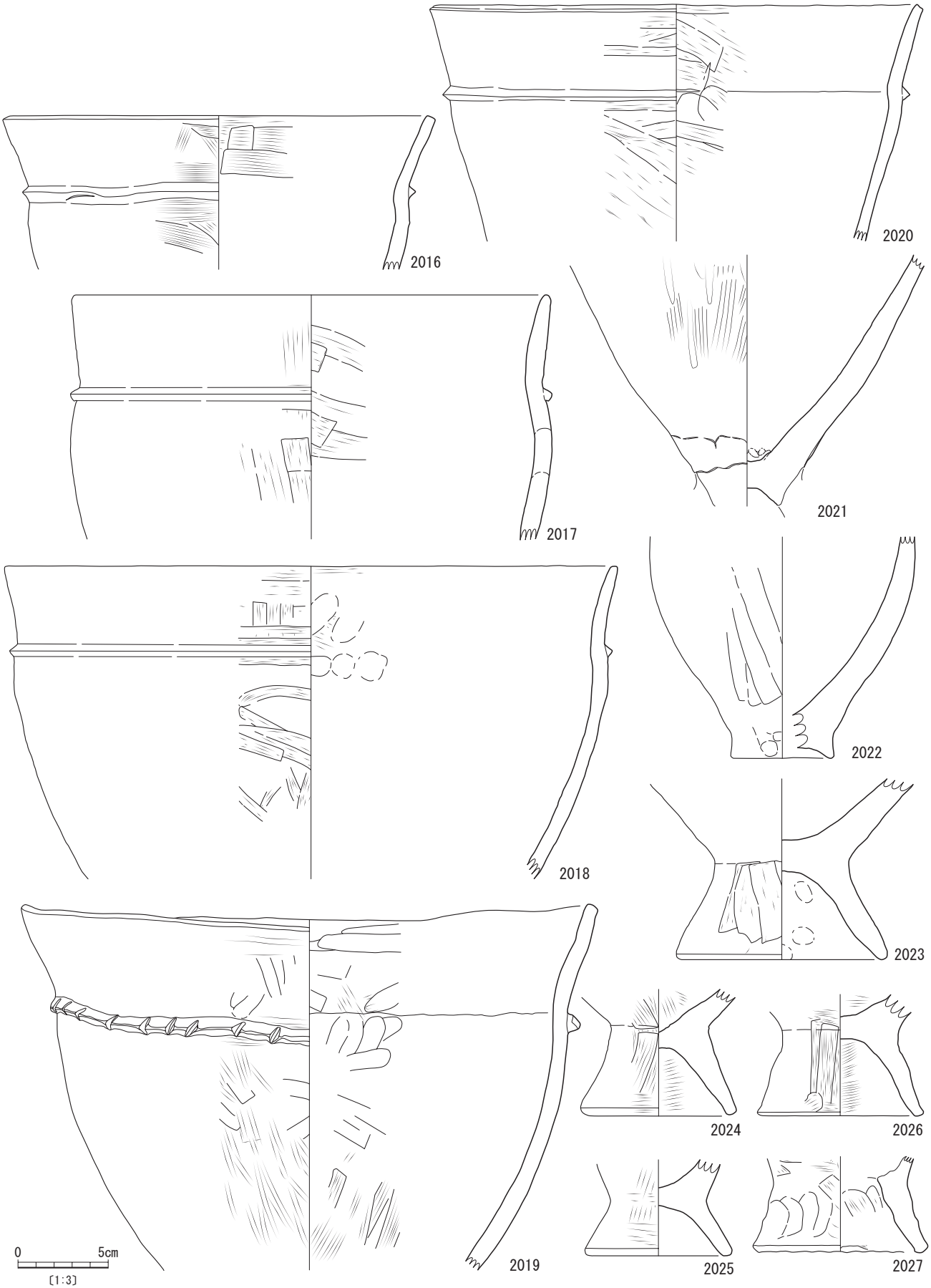
第 332 図　古墳時代　東部出土土器（１）

定される。胎土には小石がやや多めに含まれ，焼成は軟質である。

2023～2027 は中空の脚台である。2023～2025 は外面調整にヘラ縦ナデを施している。2023 は，外面調整のヘラ縦ナデが一部ケズリの様に強めに施される。2025 はヘラ縦ナデ後に指ナデをし，器面を滑らかにしている。また，焼成が良好で硬質である。2026 はヘラ縦ナデの後指オサエを施しているため，器面が凸凹している。2027 も器面に指オサエ，ヘラナデの痕がよく残り 2026 より凹凸が激しい。また，胴部からの剥離も確認できる。焼成はやや軟質で，剥離面は橙色を呈している。端径は 2023 が大きく 11.6cmで，2025 が小さく 8.0cmである。



第 333 図　古墳時代　東部出土土器分布図



第 334 図　古墳時代　東部出土土器（２）

壺形土器（第 335 図 2028～2033）

2028～2031 は底部である。2028・2029 は丸底である。2028 は底部中心が分厚く最大厚は 4.8㎝である。底部から直線的に開くように立ち上がる。粘土塊を中心に積み上げるように整形している。外面調整はヘラ縦ナデが施されるが部分的にミガキのようになり，光沢を帯びる。2029 は底部が肥厚せずに，全体的に厚みが均一で高さの低い球胴形を呈している。外面調整のヘラナデは方向が定まっておらず，ヘラの痕がよく残る。黄石・灰石など小石がやや多く含まれる。

2030・2031 は平底である。2030 は底部の貼り付けが弱く接着部が明瞭である。内外とも調整が粗く，ヘラナデや粘土がヨレた痕がよく残る。器形も大きく歪んでいる。2031 も同様に外面調整が粗い。平底だが，丸みをもつため安定はしない。内底部に調整時にできたと考えられる粘土塊がそのまま残り，底面には繊維状圧痕が見られる。2030・2031 ともに胎土に小石をやや多く含む。

2032・2033 は小型壺である。2032 は頸部内面に絞りの痕が見える。頸部が窄まってから口縁に続く形状であると考えられる。器壁がやや厚く，平均して 1.0㎝程ある。胴部外面の上部はナデを丁寧に施しているが，下部はヘラの痕がよく残り，やや雑である。内面には指オサエの痕が残る。2033 は指でつまみ上げるように端部を整形した短頸の丸底壺である。胴部下半から底部にかけ広く剥落しているが，粘土にしわが見られることから焼成時に爆ぜて剥落したものと考えられる。胎土に黄石・茶石などが多く含まれ，0.5㎝程の粒の大きい小石も見られる。

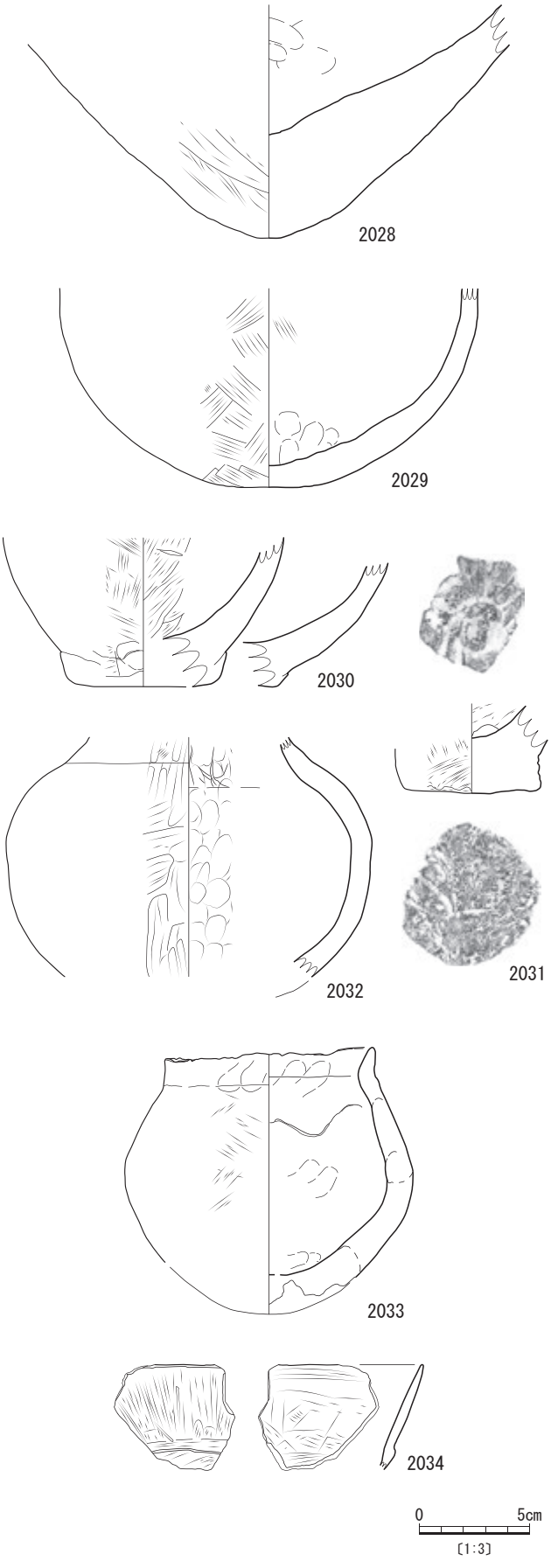
坩形土器（第 335 図 2034）

口縁端部を先細るように仕上げている。腰部の稜は外面調整時のヘラを強く当てることにより作出されている。器壁は 0.5㎝程と薄い。

高坏形土器（第 336 図 2035～2041）

2035・2036 は坏部である。2035 は内弯しながら広がり腰部から緩やかに外反し，立ち上がる。内外ともに明瞭な稜を持つ。ハケナデ調整で，基本は縦方向であるが，内口縁部は横方向に施される。また，内口縁部にススがみられることから蓋に転用されていた可能性が指摘できる。2036 は盌形で内弯しながら立ち上がり，口縁端部は先細るように仕上げている。西部出土の 1997・1998 等と同様の方法を用いており，坏部から脚部にソケット状に押し込み，接合部を成形している。焼成は良好で硬質である。

2038～2041 は脚部である。2037・2038 は大きく「ハ」の字状に開くもので，2039・2040 は緩やかに円錐状に開くもの，2041 は筒状である。2037 の外面はハケ縦ナデ後ミガキが施され，光沢を持つ。中央よりやや上に穿孔がされている。また，割れ口にもう 1 か所穿孔が確認で



第 335 図　古墳時代　東部出土土器（3）

きることから２か所以上は穿孔していることがわかる。

2038 はハケ縦ナデを細かく施しており，ハケ目状に残る。坏部は接合面から剥離している。色調は比較的白色で浅黄橙色を呈している。

2039・2040 は円錐形である。2036 と同様の方法で坏部から脚部にソケット状に押し込み，接合部を成形しているものである。2039 は脚台の粘土がほとんど乾燥してから接合されたものと見られ，接着用の粘土から坏部が剥がれたものと考えられる。2040 は接着用の粘土が棒状に残っている。内外とも縦方向の丁寧なナデ調整で，端部は薄い。2041 は筒状で，端部が外に開く器形である。内面は粗いヘラ縦ナデが施されている。外面は縦方向のヘラナデである。

手捏ね土器（第 336 図 2042～2045）

尖底で，円錐状にほぼまっすぐのびる形状と，やや丸みをもち内弯しながら立ち上がり口縁付近でより内側に屈曲するものがある。

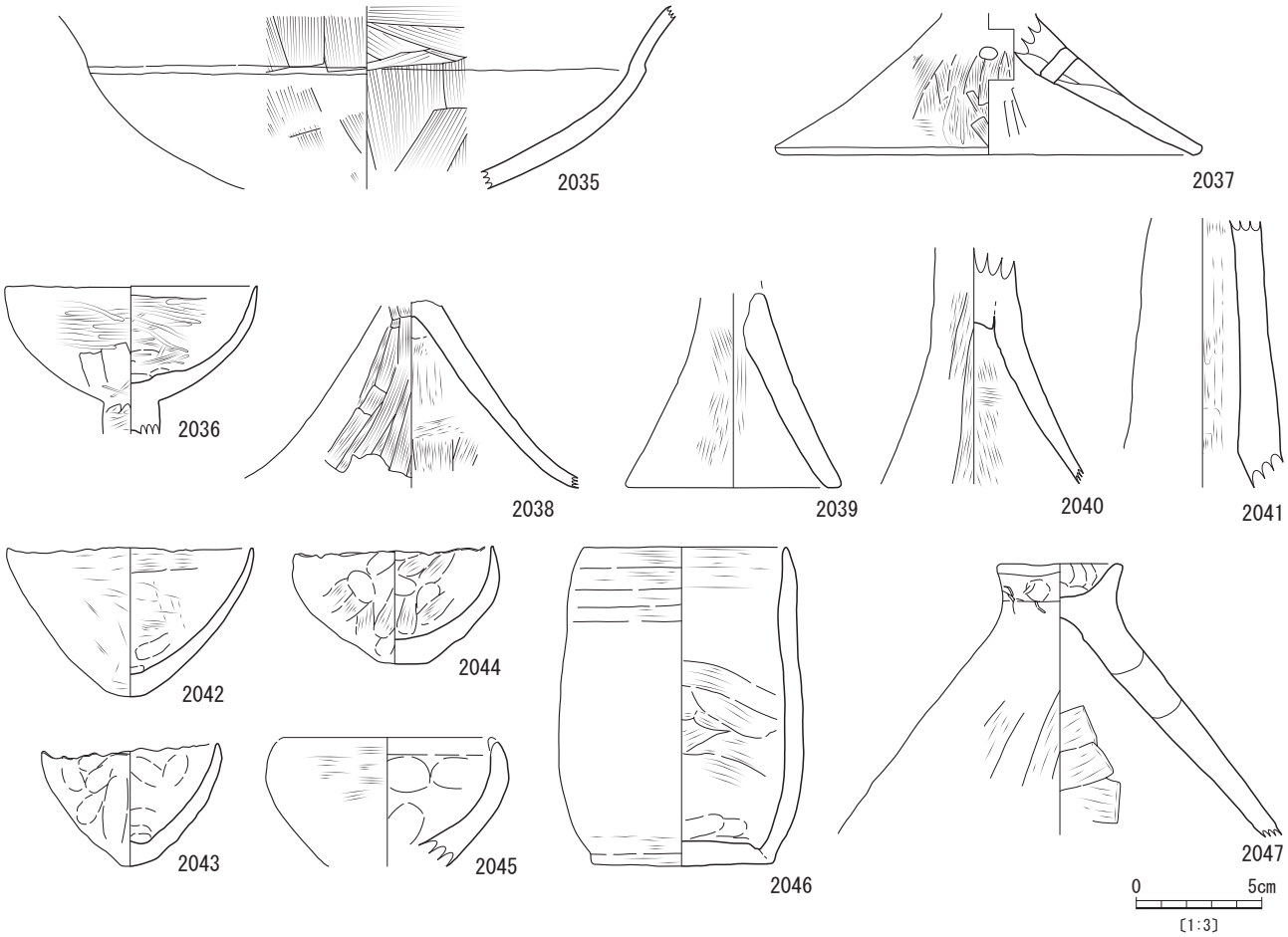
2042・2043 は円錐状で口縁端部が先細るものである。2042 はほぼ完形である。指オサエ後ナデを施しているため，器壁の凹凸がほとんどみられない。丁寧なつくりをしている。2043 は外面に指オサエの痕が残るが，内面は比較的丁寧にナデており，滑らかである。

2044・2045 はやや丸みをもち内弯しながら立ち上がり，口縁付近で内に屈曲するものである。2044 は完形で，外面は指オサエの痕が残るが，内面はナデで仕上げている。底部は一部平坦な面があるが，全体的に不整形である。口縁端部はつまみ出すようにして薄く整形している。外面にススが付着している。2045 は外面調整の指オサエをナデ消している。また，全体的にやや厚みがある。

2042～2044 は口縁端部を横ナデ，あるいはつまみ出すようにし，先細るように作出している。

鉢形土器（第 336 図 2046）

2046 は口縁部の一部が欠損しているが，ほぼ完形である。円盤状底部の外面に積み上げていく作り方で，底部は短く垂直に立ち上がり，腰部は少し膨らんで，ほぼそのまま口縁に向かってやや内弯気味に直線的に立ち上がる。底部は平底であるが，中央部が少し膨らんでいるため自立はするが安定感がややない。外面調整のヘラナデが一部ミガキ状になり光沢を帯びている。外面の一部に縦方向の黒斑がみられる。口縁部は横ナデを施し，やや先細るように仕上げている。調整は非常に丁寧である。大型の湯飲み茶碗のような形状をしている。



第 336 図　古墳時代　東部出土土器（４）

蓋形土器（第 336 図 2047）

つまみ径が 5.0cm程で，口縁部に向かって直線的に大きく開く形状を呈する。天井部は指で押さえており，やや凹む。外面調整は比較的丁寧なヘラ縦ナデが施されている。つまみ付近に，調整を施した時についたと考えられる爪痕が見られる。外面欠損部付近にススが付着している。形状が甕に類似していることから甕の可能性も指摘できる。

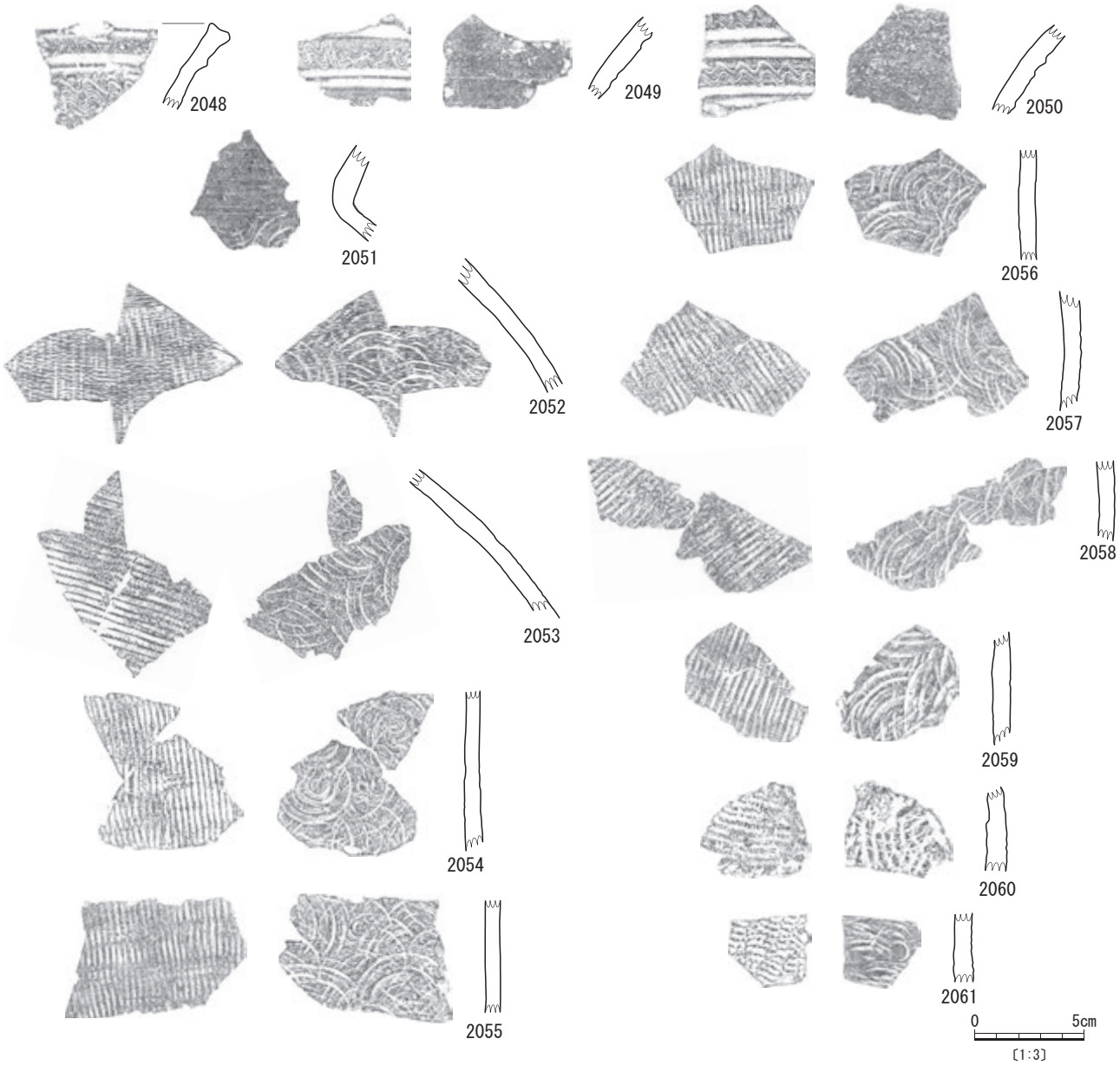
(3) 須恵器（第 337 図）

包含層から出土した須恵器の中で，14 点を図化した。そのうち西部側から出土した物が 10 点あり，全体の約７割である。グリッドＪ～Ｄ－ 29～33 区で西部出土土師器が多く出土した位置とほぼ同じか，やや北側に当たる。土師器と同様に流れ込みと考えられる。遺構内からの出土は確認されなかった。器種はすべて甕である。

2048～2050 は緩やかに外反しながら立ち上がる口縁部で，端部断面が矩形になる。外面に突帯文と，その下に７条ほどの櫛描波状文を挟んで，上下に１～２条凹線が２段巡る。2048 は黄灰色，2050 は光沢のある黒褐色の自然釉がかかる。

2051 は頸部から肩部，2052・2053 は肩部，2054～2061 は胴部である。外面のタタキ痕は格子状タタキ痕と平行状タタキ痕に分かれる。内面当て具は全て細かい同心円である。2060 は外面に光沢のあるオリーブ灰色でガラス質の自然釉がみられる。2061 は光沢のある黒褐色の自然釉がかかる。

割れ口は赤褐色を呈し，焼成が良く硬質で，胎土が緻密である。



第 337 図　古墳時代　須恵器

第 23 表　古墳時代住居跡・土坑出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
305	1883	古 SI1	14910 他	甕	口～胴下	27.3～28.4	–	丁寧な横ナデ，縦ナデ	丁寧な横ナデ，斜ナデ	1 条突帯	にぶい橙～にぶい褐	にぶい橙	普通	○		○		○		○	ススス
305	1884	古 SI1	19114 他	鉢	口縁～底	15.7	4.5～6.3	縦ナデ，ハケ縦ナデ，指オサエ，横ナデ	縦ナデ，ハケ縦ナデ，指オサエ，横ナデ	–	にぶい橙	橙	普通		○			○	○	○	ススス，黒斑 器高 11.0
305	1885	古 SI1 P1	15826	小型壺	口縁～底	7.5	–	縦・横ナデ，指オサエ	縦・横ナデ，指オサエ	1 条沈線	にぶい橙～灰褐	にぶい橙～灰褐	普通	○				○	○		ススス 器高 10.6
305	1886	古 SI1	14917	甕	口縁	32.3	–	丁寧な縦・横ナデ	丁寧な横・斜ナデ	1 条刻目突帯	にぶい橙	にぶい橙	良好		○			○	○	○	–
305	1887	古 SI1 G42	12042 他	高坏	完形	12.4	14.5	ヘラ縦ナデ，縦ナデ，横ミガキ	丁寧な縦・横ナデ	–	明黄橙	明黄橙	良好		○			○	○		輝石 器高 12.0
305	1888	古 SI1	14524 他	甕	口縁	–	–	横ナデ	横ナデ，斜ナデ	1 条突帯	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	○				○	○	吹きこぼれ
305	1889	古 SI1	14925	甕	口縁	–	–	横ナデ，縦ナデ	横ナデ	–	浅黄橙～灰褐	にぶい橙	普通		○			○	○		長石
305	1890	古 SI1	14537	甕	口縁	–	–	横ミガキ	横ミガキ	–	橙	にぶい橙	普通			○	○	○	○		ススス
305	1891	古 SI1	14532 他	鉢	胴	–	–	縦ナデ，縦ミガキ	丁寧な斜ナデ	–	黒褐，明褐灰	にぶい橙	普通		○			○	○	○	赤石
305	1892	古 SI1	14541 他	甕	脚	–	8.8	指オサエ，ナデ	ナデ	–	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	○			○	○		–
306	1893	古 SI1 G42	11659 他	高坏	脚	–	18.6	縦ミガキ，縦ナデ	横ナデ，粗い縦ナデ	円孔 5 個	浅黄橙～橙	褐灰～にぶい黄橙	普通		○			○	○		赤石
306	1894	古 SI1 G42	12024 他	高坏	脚	–	–	ヘラ縦ナデ，縦ナデ	斜ナデ，ヘラ横ナデ	–	にぶい赤褐	にぶい赤褐	普通	○		○		○	○	○	–
306	1895	古 SI1	14911	小型丸底壺	口縁	–	–	横ナデ，横ミガキ	横ミガキ	–	橙	にぶい橙	普通		○			○	○	○	–
306	1896	古 SI1	–	小型丸底壺	口縁	–	–	縦・横ナデ	横ナデ	–	明褐灰	明褐灰	良好		○			○	○		摩耗，赤石
306	1897	古 SI1	14529 他	壺	底	–	–	縦・斜ナデ	縦・横ナデ	–	橙～灰褐	にぶい灰黄褐～褐灰	普通	○		○		○			–
307	1898	古 SI2	16814	甕	胴	–	–	ヘラナデ，横ナデ	ヘラナデ	1 条突帯	にぶい橙～灰褐	橙	普通	○	○			○	○		ススス
307	1899	古 SI2	16811 他	甕	胴	–	–	横ナデ	ヘラナデ，斜ナデ	1 条刻目突帯	にぶい橙	橙	普通	○	○			○		○	ススス
308	1900	古 SI2	17036	甕	底	–	–	横ナデ	ナデ	–	にぶい橙	褐灰	普通		○			○	○	○	–
308	1901	古 SI2 J42	14849 他	高坏	脚	–	–	ヘラ縦・横ナデ，縦ミガキ	ヘラ縦ナデ，縦ミガキ，横ナデ	–	橙～褐灰	にぶい橙	普通	○		○		○	○		–
308	1902	古 SI2	16813 他	坩	口縁～底	11.2	–	ヘラ縦・斜ナデ，丁寧なナデ	丁寧なナデ	–	明黄褐～褐灰	にぶい黄橙～褐灰	普通	○	○			○			黒斑
308	1903	古 SI2	15599	鉢 (手捏)	口縁～底	7.3	–	指オサエ，ヘラナデ	指オサエ，ヘラナデ	–	橙～灰褐	橙	普通	○	○			○	○		–
310	1906	古 SI3	14496 他	壺	胴	–	–	横ナデ，ヘラ斜ナデ	斜ナデ	1 条刻目突帯	橙	にぶい橙	普通		○	○		○	○	○	–
310	1907	古 SI3	5-No.6 他	小型壺 (手捏)	胴	–	–	ナデ，指オサエ	ナデ，指オサエ	–	にぶい黄橙	灰黄褐	普通					○		○	赤石
310	1908	古 SI3	5-No.56 他	高坏	口縁	–	–	–	–	–	にぶい橙	橙	良好	○				○	○	○	–
311	1909	古 SI3	No.4 他	甕	胴～底	–	4.0	ヘラ縦ナデ	ヘラ斜ナデ，指オサエ	–	橙～にぶい橙	橙	普通		○			○	○	○	–
311	1910	古 SI3	No.13 他	甕	胴～脚	–	9.8	ヘラ縦・斜ナデ，指オサエ	ヘラ横・斜ナデ，指オサエ	–	にぶい黄橙～灰黄褐	にぶい黄橙～褐灰	普通	○	○			○		○	コゲ
311	1911	古 SI3	No.3	甕	脚	–	8.0	横ナデ，指オサエ	横ナデ，指オサエ	–	にぶい橙	にぶい橙，褐灰	普通		○		○	○	○		–
311	1912	古 SI3	No.1	壺	口縁	15.3	–	ヘラナデ	ヘラナデ	凹線	橙	橙	普通	○		○		○			–
311	1913	古 SI3	No.2	壺	底	–	4.5	横ナデ	ナデ	–	明褐灰	浅黄橙	普通			○	○	○	○	○	–
312	1914	古 SI3	14427	甕	口縁	–	–	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	–	褐灰	にぶい黄橙	普通	○	○			○	○		–
312	1915	古 SI3	14501	甕	口縁	–	–	縦・横ナデ	指オサエ，横ナデ	–	灰褐	橙	普通	○	○	○		○			ススス
312	1916	古 SI3	–	甕	口縁	–	–	ヘラ縦ナデ，横ナデ	横ナデ	–	にぶい赤褐	褐灰	普通		○	○		○		○	–
312	1917	古 SI3	–	甕	脚	–	8.2	縦・横ナデ	縦・横ナデ	–	にぶい橙	にぶい赤褐色	普通		○				○	○	–
312	1918	古 SI3 H38	13686 他	甕	脚	–	9.1	指オサエ，横ナデ	指オサエ，横ナデ	–	にぶい黄橙	にぶい黄褐	普通	○				○	○		–
312	1919	古 SI3	14077 他	壺	底	–	2.6	ヘラナデ	ヘラナデ	–	橙	にぶい橙	普通	○				○	○		–
312	1920	古 SI3	14940 他	壺	底	–	–	ナデ	斜ナデ	–	にぶい橙，褐灰	にぶい橙	普通			○		○	○	○	摩耗
312	1921	古 SI3	–	高坏	坏	12.5	–	ヘラ縦ナデ，横ナデ	ヘラ縦ナデ，横ナデ	–	橙	橙～にぶい橙	普通	○	○			○			–
312	1922	古 SI3	14506	高坏	脚	–	–	縦ミガキ	横ナデ，ヘラ縦ナデ	–	浅黄橙	浅黄橙	普通		○			○	○	○	–
312	1923	古 SI3	15174 他	高坏	脚	–	15.0	横ナデ，ハケ縦ナデ	横ナデ	–	にぶい橙	にぶい橙	普通					○	○	○	–
312	1924	古 SI3	–	高坏	脚	–	–	縦・横ナデ，ミガキ	横ナデ	–	黄橙	浅黄橙	普通		○			○		○	–
312	1925	古 SI3	–	鉢	完形	9.0	–	横ナデ，ヘラ縦ナデ	横ナデ，ヘラ縦ナデ	–	浅黄橙～にぶい黄橙	浅黄橙～にぶい黄橙	普通		○			○	○		–
312	1926	古 SI3	14738 他	鉢	口縁～胴	8.8	–	横ナデ，ヘラ縦・横ナデ	ミガキ	–	橙～にぶい赤褐	橙～灰褐	普通			○		○	○	○	–
312	1927	古 SI3	14951 他	鉢(手捏)	底	–	–	ヘラ斜ナデ，指オサエ	ヘラ斜ナデ，指オサエ	–	にぶい橙	にぶい褐	普通	○	○			○	○	○	–
316	1929	古 SI4	39361 他	甕	口縁～胴下	31.8	–	ハケ縦ナデ，横・斜ナデ	ハケ斜ナデ，横ナデ	1 条刻目突帯	にぶい橙～にぶい赤褐	にぶい橙	普通	○	○			○		○	–
316	1930	古 SI4	39691 他	壺	口縁～胴	8.6	–	縦・横ナデ	横ナデ，指オサエ	1 条刻目突帯	赤褐色	にぶい黄橙色	普通	○		○					赤石

挿図番号	掲載番号	出土位置	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
316	1931	古 SI4	37915 他	甕	口縁	30.4	−	ヘラナデ	ヘラ横・斜ナデ	−	灰褐〜にぶい橙	にぶい褐〜にぶい橙	普通	○	○	○		○	○		−
316	1932	古 SI4	37302 他	甕	口縁	−	−	横ナデ，ヘラ縦ナデ	ヘラ横・斜ナデ	1 条突帯	にぶい橙，灰褐	にぶい橙	普通		○	○		○	○	○	−
316	1933	古 SI4	37296 他	甕	脚	−	8.4	縦・横ナデ	斜ナデ	−	にぶい橙	にぶい橙	普通		○			○	○	○	赤石
316	1934	古 SI4	−	高坏	脚	−	−	ヘラナデ	縦ナデ	−	橙	橙	普通	○	○			○	○	○	−
316	1935	古 SI4	37322 他	鉢	口縁〜胴	14.8	−	ヘラナデ	ヘラナデ	−	橙〜灰褐	橙〜灰褐	普通	○	○			○			スス，黒斑
316	1936	古 SI4	37920	鉢	口縁	−	−	ヘラ縦・斜ナデ	ヘラ横ナデ	−	浅黄橙	にぶい橙	普通		○	○		○	○		−
316	1937	古 SI4	−	鉢（手捏）	口縁	−	−	縦・横ナデ	横・斜ナデ	−	にぶい橙	にぶい橙	普通	○						○	赤石
316	1938	古 SI4	−	鉢（手捏）	口縁	−	−	縦・横ナデ	横ナデ	−	にぶい橙	にぶい橙	普通	○				○		○	赤石
316	1939	古 SI4	−	坩	口縁	−	−	−	縦ナデ	波状文	にぶい橙	浅黄橙	普通		○			○		○	−
316	1940	古 SI4	−	坩	胴	−	−	縦ナデ	斜ナデ	波状文，2 条沈線	浅黄橙	にぶい橙	普通		○			○		○	−
319	1942	古 SI5	−	坩	完形	8.8	−	横ナデ，縦ミガキ	縦・横ナデ	凹線	にぶい橙〜にぶい褐	にぶい橙〜にぶい褐	普通	○	○	○		○			剥落，黒斑 器高 15.3
319	1943	古 SI5	SK4-No.3	甕	口〜胴	28.0	−	ヘラ縦・斜ナデ	ヘラ縦ナデ	1 条突帯	にぶい橙〜にぶい褐	にぶい橙〜にぶい褐	普通	○	○	○		○			黒斑
319	1944	古 SI5 G・H23	22723 他	鉢	口縁〜脚	30.6	9.0	横ナデ，ヘラナデ	ヘラ横ナデ，横ナデ，指オサエ	−	にぶい赤褐〜褐灰	にぶい赤褐〜褐灰	普通	○				○		○	スス，赤石 器高 12.0
319	1945	古 SI5	SK4-No.8 他	甕	胴〜底	−	9.0	ヘラ縦ナデ，横ナデ	ヘラ縦・斜ナデ，指オサエ	−	にぶい橙	にぶい橙	普通	○				○	○	○	−
319	1946	古 SI5	SK4-No.19	高坏	坏	10.6	−	ナデ	ナデ	−	灰黄	にぶい黄橙	普通		○			○	○	○	スス
320	1947	古 SI5	22736 他	甕	口縁	19.8	−	横ナデ	ヘラ縦ナデ，横ナデ	−	橙〜にぶい橙	橙	普通	○				○	○	○	−
320	1948	古 SI5	22735	甕	口縁	−	−	ナデ	横ナデ	−	にぶい赤褐	にぶい橙	普通	○				○	○	○	−
320	1949	古 SI5	22817	壺	底	−	5.2	斜ナデ，縦ミガキ	ナデ	−	にぶい褐，褐灰	褐灰	普通	○			○	○			赤石
320	1950	古 SI5	−	小型丸底壺	口縁	11.4	−	丁寧な横ナデ，ヘラ縦ナデ	丁寧な横ナデ	−	にぶい黄橙〜灰白	にぶい黄橙〜灰白	普通	○				○	○		−
320	1951	古 SI5	−	坩	口縁	8.6	−	横ナデ	横ナデ	−	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	○			○	○		剥落
320	1952	古 SI5	22682 他	高坏（手捏）	口縁	4.6	−	横ナデ	横ナデ	−	にぶい橙	にぶい橙	普通			○		○		○	−
320	1953	古 SI5	−	坩？	口縁〜胴	5.2	−	横ナデ	横ナデ	−	にぶい橙	明褐灰	普通	○	○			○	○		−
320	1954	古 SI5	No.7	土製品	完形品	−	−	−	−	−	黒	黒	普通	○	○	○		○			4.0 × 3.5 × 3.0
322	1958	古 SI1 古 SK1	14900 他	甕	口縁〜胴	24.5〜25.6	−	ハケ縦・横ナデ	ヘラ縦・横ナデ，指オサエ	刻目突帯	橙〜にぶい橙	浅黄橙〜にぶい橙	普通			○		○	○		スス
322	1959	古 SK1	17112	甕	口縁	−	−	縦・横ナデ	横・斜ナデ	−	にぶい赤褐	にぶい赤褐	普通		○	○		○		○	−
322	1960	古 SK1	17112	高坏	口縁	−	−	横ミガキ	横ミガキ	−	橙	橙	普通		○	○		○	○		スス，蓋に転用
323	1962	古 SK2 G43・44	11780 他	甕	口縁	29.4	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	橙	橙	普通					○	○	○	赤石
323	1963	古 SK2 F41	12660 他	甕	胴下半	−	−	縦・斜ナデ	ナデ	−	にぶい赤褐	にぶい橙	普通		○			○	○	○	赤石
323	1964	古 SK2	16437	小型壺（手捏）	胴〜底	−	2.3〜2.7	縦ナデ	縦・横ナデ，指オサエ	−	浅黄橙	浅黄橙	普通		○			○	○	○	−
323	1965	古 SK4	16435 他	大壺	胴	−	−	横ナデ	斜ナデ	鋸歯文，2 条突帯	にぶい橙	にぶい橙	普通	○				○	○	○	摩耗，スス，赤石
324	1966	古 SK6	16989	小型壺	口縁〜底	7.0	−	縦・横ナデ	ナデ	−	橙	橙	普通	○				○	○	○	器高 8.0
325	1967	古 SK7	37969	鉢	完形	8.1	−	斜ナデ	斜ナデ	−	橙	橙	普通			○			○		器高 4.2
325	1968	古 SK8	20360 他	甕	口縁	30.0	−	ヘラ縦・横ナデ	ヘラナデ，指オサエ	刻目突帯	橙〜にぶい褐	橙〜褐	普通		○			○	○		スス
325	1969	古 SK8	21256	壺	底	−	6.5	丁寧な斜ナデ	斜ナデ	−	にぶい赤褐	にぶい橙	普通			○		○	○		赤石
326	1971	古 SK9	21525	甕	脚	−	8.7	斜ナデ	横・斜ナデ	−	にぶい橙	黒褐	普通	○	○	○		○		○	−

第 24 表　古墳時代住居跡・土坑出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
308	1904	古 SI2	①	17039	磨石・敲石類	11.2	9.6	4.5	742.1	砂岩	
308	1905	古 SI2	①	17038	磨石・敲石類	8.9	9.2	4.6	672.7	花崗岩	
312	1928	古 SI3	①	14508	砥石	(11.60)	5.40	1.10	(85.7)	頁岩	
316	1941	古 SI4	①	39360	磨石・敲石類	(5.94)	(6.87)	(2.65)	(129.8)	砂岩	
321	1955	古 SI5	①	22726	砥石	17.65	10.9	8.7	2003.5	砂岩	
321	1956	古 SI5	①	22727	磨石・敲石類	17.1	9.15	8.3	1866.8	砂岩	
321	1957	古 SI5	②	22614	磨石・敲石類	11.8	9.9	6.9	1261.3	ホルンフェルス	
322	1961	古 SK1	②	14116	軽石製品	11.3	8.3	4.4	80.6	軽石	
325	1970	古 SK8	①	21257	砥石	10.0	7.0	1.2	87.6	頁岩	

第 25 表　古墳時代西部土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
328	1972	F･G30	Ⅱ･Ⅲa	23983 他	甕	口縁～底	31.0	－	ヘラ横・斜ナデ	ヘラ横ナデ，横ナデ	橙	橙	普通	○				○	○	○	－
328	1973	I36	Ⅱb	29483	甕	口縁～胴	34.2	－	ヘラナデ	ハケナデ	橙～褐灰	橙～褐灰	普通	○		○	○	○	○	○	－
328	1974	J29	Ⅱ	25541 他	甕	口縁～胴	29.0	－	横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	普通		○	○		○	○	○	－
328	1975	H29	Ⅱ	26406 他	甕	口縁～胴	34.8	－	ヘラ縦ナデ，斜ナデ	ヘラ斜ナデ，横ナデ，指オサエ	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	○				○		－
329	1976	J28･29	Ⅱ	25681 他	甕	口縁	－	－	ヘラ斜ナデ，横ナデ	横ナデ	にぶい褐	にぶい褐	普通		○		○	○	○	○	－
329	1977	J28･29	Ⅱ	23628 他	甕	完形	17.4	20.6	ヘラ斜ナデ，横ナデ	横･斜ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	普通	○	○		○				胴 20.6cm
329	1978	J29	Ⅱ	25543 他	甕	口縁～胴	－	－	粗いナデ	指オサエ	赤，灰白	赤，灰白	良好	○				○	○		－
329	1979	J28	Ⅱ	25052 他	甕	胴～底	－	－	ナデ，ケズリ	ナデ，ケズリ	にぶい橙～灰黄	浅黄橙	普通	○	○			○	○		ススス
329	1980	K･L28	Ⅱ	23815 他	甕	底	－	－	ヘラ縦・横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	灰白，褐灰	灰白，褐灰	良好	○		○		○			ススス
329	1981	F26	Ⅱ	19149	甕	底	－	－	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦・横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	良好	○				○	○	○	石英多
329	1982	J29	Ⅱ	25564 他	甕	胴	－	－	ヘラ縦ナデ→斜ナデ	－	にぶい黄褐～にぶい赤褐	橙，黒褐	普通		○	○	○	○	○	○	ススス
329	1983	I･J30	Ⅱa･b	24224	甕	胴	－	－	縦ナデ	－	にぶい赤褐	褐灰	普通		○			○	○	○	石英多
329	1984	I30･3 1	Ⅱ	28476 他	甕	胴～脚	－	4.6	ヘラ縦ナデ，指オサエ	縦ナデ	にぶい黄橙，赤橙	にぶい黄橙，赤橙	良好	○	○				○		－
329	1985	G35	Ⅱ	－	甕	脚	－	11.2	横･斜ナデ	横ナデ	橙	橙	普通	○		○		○	○	○	凹線
330	1986	J29	Ⅱ	25440 他	壺	完形	12.0	34.5	ミガキ，ヘラ縦ナデ，横ナデ	ミガキ，ヘラ斜ナデ，横ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	普通		○			○			器高 34.5cm
330	1987	J30	Ⅱ	25012 他	壺	底	－	－	ミガキ，ナデ	ナデ	褐灰～にぶい黄橙	褐灰～にぶい黄橙	普通		○	○	○	○	○	○	底：木の葉文
330	1988	I31	Ⅱ	28185 他	壺	底	－	－	ヘラ縦ナデ	斜ナデ	橙～にぶい橙	橙～にぶい橙	普通		○	○		○	○	○	－
330	1989	J29，K28	Ⅱ	25232 他	壺	底	－	－	ヘラ縦ナデ→ナデ	斜ナデ	にぶい黄橙	灰褐	普通		○	○		○	○		－
330	1990	K29	Ⅱb	27722	壺	底	－	5.0	ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	橙	橙	良好		○	○		○	○		－
330	1991	J29	Ⅱ	25567 他	坩	胴	－	－	丁寧な横・斜ミガキ	ヘラ斜ナデ	にぶい赤褐，黒褐	にぶい赤褐	普通			○		○	○	○	－
330	1992	G31･32	Ⅱb	36952 他	坩	胴	－	－	丁寧な横ナデ	横・斜ナデ，指オサエ	橙	にぶい褐	普通	○				○		○	－
331	1993	I･J29	Ⅱ	26539 他	高坏	坏～脚	23.0	－	縦ナデ	縦ナデ	黄橙	黄橙	良好						○		－
331	1994	I29	Ⅱb	－	高坏	坏	25.0	－	丁寧な横ナデ	ヘラ横・斜ナデ	にぶい黄橙	橙	普通					○			輝石
331	1995	I29	Ⅱa･b	29943 他	高坏	坏	－	－	横ナデ	横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	普通		○			○	○	○	－
331	1996	I29	Ⅱa	30020	高坏	坏	18.3	－	横ナデ	横ナデ	橙	橙	良好				○	○	○	○	－
331	1997	I29	Ⅱa・b	29964 他	高坏	坏	－	－	ミガキ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	普通			○		○		○	－
331	1998	I29	Ⅱa･b，Ⅲa	29750 他	高坏	坏～脚	－	14.3	横ナデ→ミガキ	横ナデ	橙	橙	良好	○				○	○	○	－
331	1999	I29，J28	Ⅱ	24263 他	高坏	脚	－	12.2	横ナデ→縦ミガキ	横ミガキ，横・縦ナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好				○	○			橙石
331	2000	J29	Ⅱ	26212	鉢	完形	10.7	8.5	ミガキ	ヘラナデ，ナデ	にぶい橙～にぶい黄褐	にぶい橙～にぶい黄褐	普通		○			○	○	○	－
331	2001	D31，E31	Ⅱb，Ⅲ	16026 他	鉢	口縁～胴	12.4	－	横･斜ナデ	横･斜ナデ	灰赤	暗赤灰	良好	○				○			－
331	2002	J28	Ⅱ	26142 他	鉢	口縁～胴	12.4	－	丁寧な斜ミガキ，横ナデ	横ナデ，ヘラ斜ナデ	にぶい橙	橙～灰白 褐灰	普通		○	○		○		○	ススス，コゲ
331	2003	J28	Ⅱ	24171 他	鉢	口縁～胴	16.0	－	ミガキ，横ナデ	ナデ	橙～にぶい橙	橙～にぶい橙	普通	○	○			○		○	－
331	2004	I28，I･J29	Ⅱ	25684 他	鉢	底	－	－	ミガキ	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	普通		○	○		○	○	○	－
331	2005	F27	Ⅱ	18904	鉢	底	－	1.9	縦ナデ	ヘラ斜ナデ	にぶい黄橙，黄灰	黄灰	普通		○			○	○	○	－
331	2006	K34	Ⅱb	31478	鉢	胴～底	－	3.7	粗い縦ナデ	横ナデ	にぶい橙 黒褐	にぶい橙	普通	○	○	○		○			－
331	2007	E25	Ⅰa	18022	鉢	脚	－	－	縦ナデ	横ナデ	にぶい褐	明褐	普通	○				○		○	－
331	2008	H27	Ⅱb	20217	鉢	脚	－	－	縦ナデ	横ナデ	にぶい橙	橙	普通		○	○		○		○	石英多
331	2009	J22	Ⅱ	18232	手捏ね	口縁～底	10.8	－	ヘラナデ→横ナデ，指オサエ	斜ナデ	にぶい褐	にぶい橙	普通	○			○	○		○	－
331	2010	G22	Ⅱ	20995	手捏ね	口縁～胴	6.6	－	ナデ	ナデ	褐～黒褐	褐～黒褐	普通	○		○		○	○		－
331	2011	G30	Ⅱ	24907	手捏ね	底	－	2.8	ナデ	ナデ	にぶい黄	浅黄	普通	○		○	○	○	○	○	－
331	2012	H31	Ⅱ	28985	手捏ね	底	－	－	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	普通		○	○		○		○	－

第 26 表　古墳時代東部土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
332	2013	F41	Ⅱb，Ⅲ	11197 他	甕	口縁～胴	29.8	－	ヘラナデ，ナデ，指オサエ	ヘラナデ，ナデ，指オサエ	橙	橙	普通	○	○		○	○		○	ススス
332	2014	E･F42	Ⅱa	9641 他	甕	口縁～胴	27.6	－	ヘラナデ	ヘラ横・斜ナデ	にぶい橙～灰褐	にぶい橙	普通	○		○		○	○		ススス
332	2015	E40	Ⅱb	－	甕	口縁～胴	22.6	－	ヘラ縦ナデ，丁寧なナデ	ヘラ横・斜ナデ	にぶい橙	橙	普通	○				○			ススス
334	2016	F42	Ⅱb	11126 他	甕	口縁～胴	24.0	－	ヘラ縦・横ナデ	ヘラ横ナデ	にぶい橙	橙～にぶい橙	普通	○	○			○			ススス

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	備考
334	2017	E41･42, G42	Ⅱa･b	9966 他	甕	口縁～胴	26.6	－	ヘラ縦ナデ	ヘラ斜ナデ	橙	橙	普通	○	○			○			ス ス
334	2018	G42	Ⅱb	10864 他	甕	口縁～胴	34.0	－	丁寧な横ナデ，ヘラ斜ナデ	横ナデ，指オサエ	橙	橙	普通	○	○					○	ス ス
334	2019	G42	Ⅱb	12039 他	甕	口縁～胴	32.0	－	ミガキ，ヘラナデ，ナデ	ヘラ横･縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	○	○			○		砂質土，ス ス
334	2020	F41･42	Ⅱa･b	9634 他	甕	口縁～胴	27.4	－	丁寧な横ナデ，ヘラ斜ナデ	ヘラ斜ナデ	褐灰	明赤褐	普通	○	○			○			ス ス
334	2021	E41	Ⅱa･b	10104 他	甕	胴～底	－	－	ヘラナデ，粗いナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	普通	○				○			ス ス
334	2022	I38	Ⅱa	29885	甕	胴～底	－	－	ヘラ縦ナデ，ナデ，指オサエ	－	浅黄橙～にぶい橙	浅黄橙～にぶい橙	普通	○	○			○	○		－
334	2023	G41	Ⅱb	12884	甕	脚	－	11.6	ヘラ縦ナデ	ナデ，指オサエ	橙	黒褐	普通	○	○						－
334	2024	F41	Ⅱb	12885	甕	脚	－	8.6	ヘラ縦ナデ，横ナデ	縦･横ナデ	にぶい橙	黒褐	普通			○		○	○	○	－
334	2025	G42	Ⅱb	10868	甕	脚	－	7.4	ヘラ縦ナデ→ナデ	指オサエ	にぶい赤褐	にぶい橙	良好	○				○			－
334	2026	F42	Ⅱb	11138 他	甕	脚	－	9.2	ヘラ縦ナデ，指オサエ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	普通					○	○	○	－
334	2027	F41	Ⅱb	11248	甕	脚	－	9.1	ヘラナデ，ナデ，指オサエ	ナデ	にぶい黄橙～浅黄橙	にぶい黄橙～浅黄橙	普通	○				○	○	○	－
335	2028	F41	Ⅱb	11219	壺	底	－	－	ヘラ縦ナデ	ヘラナデ，指オサエ	明黄褐	灰黄褐	普通	○	○						－
335	2029	H42	Ⅱb	11110	壺	底	－	－	ヘラナデ	ナデ，指オサエ	にぶい橙	橙	普通	○				○	○	○	－
335	2030	G42	Ⅱb	11662 他	壺	底	－	4.4	粗いヘラナデ	粗いヘラナデ	にぶい褐黒褐	にぶい橙	良好		○	○		○			－
335	2031	G42	Ⅱb	12037	壺	底	－	5.7～6.4	粗いヘラナデ	ヘラナデ	橙	赤黒	良好	○		○		○			底：繊維法圧痕
335	2032	F42	Ⅱb	11110	小型壺	頸～胴	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ，指オサエ	赤橙	赤橙	良好		○	○		○		○	－
335	2033	G42	Ⅱb	11666	小型壺	口縁～底	9.5	－	ナデ	ナデ	にぶい褐～にぶい黄灰	にぶい褐～にぶい黄灰	普通	○	○		○	○	○		ス ス
335	2034	D48	Ⅱ	－	坩	口縁	－	－	ヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	にぶい橙	にぶい橙	普通			○				○	蟬石
336	2035	F41	Ⅱb	11206 他	高坏	坏	－	－	ハケ縦･横ナデ	ヘラ横ナデ	赤	赤	良好		○	○		○			ス ス
336	2036	F41	Ⅱb	11253	高坏	坏～脚	10.0	－	縦ケズリ→横ミガキ，横ナデ	横ナデ→ミガキ	橙	橙	良好	○				○		○	－
336	2037	F41	Ⅱb	11222 他	高坏	脚	－	16.9	ハケ縦ナデ→ミガキ	横ケズリ→横ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	○			○	○			２か所穿孔
336	2038	G41	Ⅱb	12883	高坏	脚	－	－	ハケ縦ナデ	ヘラ縦ナデ，横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好		○		○	○		○	－
336	2039	SD 7	Ⅰ	26872 他	高坏	脚	－	8.6	ヘラ縦ナデ	縦ナデ	にぶい橙	にぶい橙	普通	○					○	○	－
336	2040	F42	Ⅱb	1112	高坏	脚	－	－	丁寧な縦ナデ	丁寧な縦ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	普通		○	○		○		○	－
336	2041	E41	Ⅱb	11283	高坏	脚	－	－	ヘラ縦ナデ	粗いヘラ縦ナデ	橙	橙	普通	○				○	○	○	－
336	2042	G42	Ⅱb	11664	手捏ね	完形	9.8	－	指オサエ→ナデ	指オサエ→ナデ	にぶい橙～浅黄橙	にぶい橙～浅黄橙	普通	○	○		○	○	○	○	黒斑 器高 5.9cm
336	2043	E40	Ⅱa	10419	手捏ね	完形	6.9	－	ナデ，指オサエ	指オサエ→ナデ	橙	橙	普通	○			○	○	○	○	器高 4.8cm
336	2044	I42	Ⅱa	9106	手捏ね	完形	7.8	2.0	ナデ，指オサエ	指オサエ→ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	良好	○			○	○	○	○	黒斑，ス ス 器高 4.7cm
336	2045	H38	Ⅱa	13613	手捏ね	口縁～胴	8.8	－	指オサエ→ナデ	ナデ，指オサエ	にぶい橙	浅黄橙	普通	○	○			○	○	○	－
336	2046	G42	Ⅱb	11688	鉢	完形	8.0	7.2	丁寧なヘラナデ，横ナデ	丁寧なヘラナデ，横ナデ	にぶい橙～黒褐	にぶい橙～黒褐	普通	○	○		○	○		○	黒斑，ス ス 器高 12.7cm
336	2047	F41，G42	Ⅱ	9607 他	蓋	つまみ～胴	－	－	丁寧なヘラ縦ナデ	ヘラ斜ナデ	橙	にぶい橙	普通	○	○			○		○	ス ス，つまみ径：5.0cm

第 27 表　古墳時代須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	出土位置	層位	取上番号	器種	部位	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土 白石	胎土 黄白色	胎土 小石	備考
337	2048	F31	Ⅰ	一括	甕	口縁	突帯文，櫛描波状文，凹線	－	灰（白～黄白自然釉）	灰（白～黄白自然釉）	良好	○		○	－
337	2049	E41	Ⅱa	一括	甕	口縁	突帯文，櫛描波状文，凹線	－	灰	灰（黄灰自然釉）	良好	○		○	－
337	2050	L37	Ⅲa	23268	甕	口縁	突帯文，櫛描波状文，凹線	－	灰白（黒褐･浅黄自然釉）	灰（浅黄自然釉）	良好	○		○	－
337	2051	D41	Ⅱa	10297	甕	頸～肩	平行タタキ	同心円	灰（灰白～灰黄自然釉）	灰	良好	○		○	屈折部に自然釉
337	2052	E30，F31	Ⅱb	37124 他	甕	肩	格子状タタキ	同心円	灰	灰	良好	○	○	○	－
337	2053	G･D30	Ⅱ･Ⅲa･中SD5	26542 他	甕	頸～肩	平行タタキ	同心円	灰白(白～黄白自然釉)	灰	良好	○		○	－
337	2054	E30，L29	Ⅰ，Ⅱa	16311 他	甕	胴	平行タタキ	同心円	灰	灰	良好	○	○	○	－
337	2055	F30	Ⅱb	36505	甕	胴	平行タタキ	同心円	灰	灰（黄灰自然釉）	良好	○	○	○	－
337	2056	G31	Ⅱ	28601	甕	胴	平行タタキ	同心円	灰	灰	良好	○	○	○	－
337	2057	I29・30	Ⅱ	24675 他	甕	胴	平行タタキ	同心円	灰（灰白～灰黄自然釉）	灰	良好	○		○	－
337	2058	D30，J35	Ⅱb，Ⅲ	15985 他	甕	胴	平行タタキ	同心円	灰（灰白～灰黄自然釉）	灰	良好	○	○	○	－
337	2059	J29	Ⅰ	一括	甕	胴	平行タタキ	同心円	灰（灰黄自然釉）	灰	良好	○		○	－
337	2060	F31	Ⅰ	一括	甕	胴	格子状タタキ	同心円	灰（灰オリーブ自然釉）	灰	良好	○		○	自然釉がガラス質
337	2061	SD13	①	17500	甕	胴	格子状タタキ	同心円	灰（黒褐自然釉）	灰	良好	○		○	－

第４節　時期不明の掘立柱建物跡の調査

１　概要

時期不明の掘立柱建物跡が 11 棟検出された。これらは検出された調査区の大部分が削平を受けていたこと，時期を判断できるような遺物が出土しなかったこと，埋土に軟質なものがあったことなどから，建物としてはピット群から抽出できたものの，時期を限定できなかったために時期不明の遺構として扱うこととした。

２　遺構

Ｆ・Ｇ－ 49・50 区付近で３棟，Ｅ－ 46 区で１棟，Ｈ－ 42 区で１棟，Ｊ・Ｋ－ 35～37 区付近で２棟，Ｆ～Ｈ－ 23～27 区付近で３棟，Ｄ－ 20 区で１棟の計 11 棟が検出された。柱間は１間×１間が３棟，１間×２間が２棟，２間×４間が１棟，３間×４間が１棟，３間×６間が２棟，４間×６間が２棟である。これらは住居のほか高床倉庫，作業小屋，畜舎，物見小屋，墓前建物などの用途として使われた可能性がある。

(1) 掘立柱建物跡（ＳＢ）

掘立柱建物跡１号（第 339 図）

Ｇ－ 49・50 区のⅣ層であるアカホヤ火山灰層で検出された。検出区一帯は後世の削平を深く受けているため，下層で検出されたものと思われる。

建物規模は３間×６間で，桁行が約 820cm，梁行が約 450cmの東西に長い長方形の建物である。主軸方位はＮ 73° Ｅで，柱間は桁行が 115～172cm，梁行が 143～158cm とまちまちである。建物の中央に桁行と並行する２本の柱穴（Ｐ 19・Ｐ 20）が中央に並んでいるが，支え柱か仕切りの柱穴かは不明である。

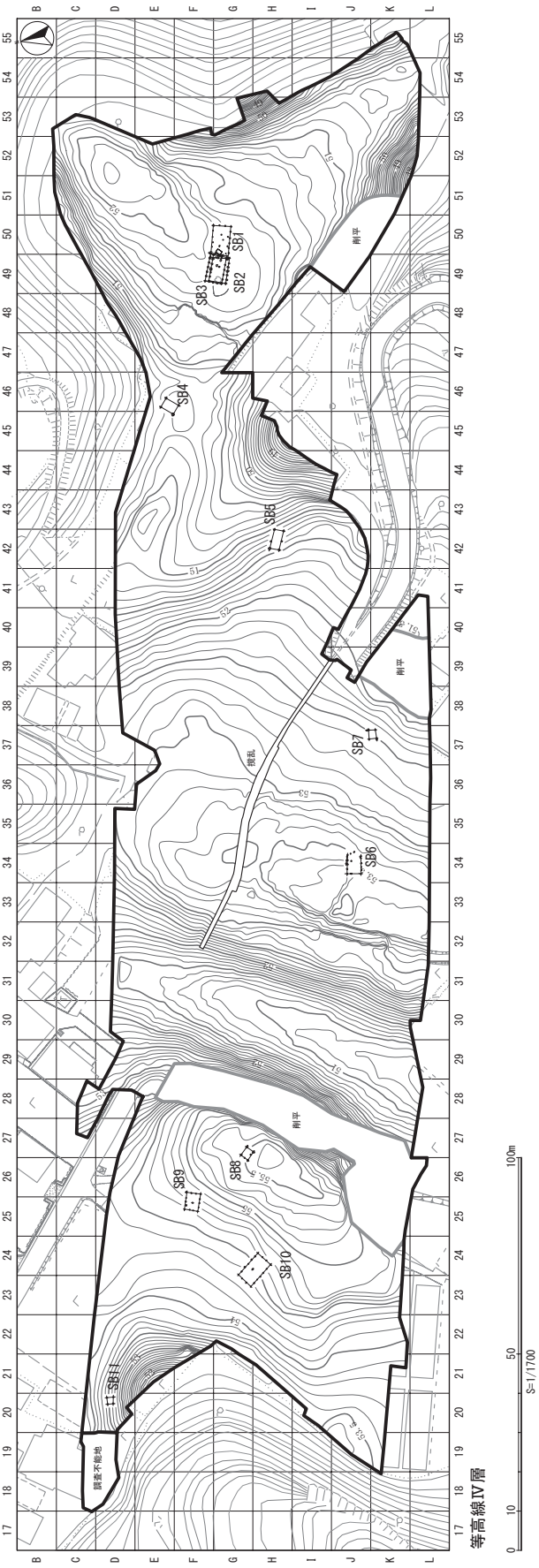
柱穴の形状はおおむね直径 20～40cmの円形だが，Ｐ６・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ 10・Ｐ 12 のように，方形あるいは隅丸方形となるものもある。現存の深さは６～９cmの浅いものや，30cmを超す深いものもあるが，大半は 15～25cm である。Ｐ 15～Ｐ 17 は弥生時代の竪穴住居跡 16 号と重複関係にあり，同住居跡調査後に検出したため，浅くなっている。埋土は黒褐色土あるいは黒色土である。

掘立柱建物跡２号（第 340 図）

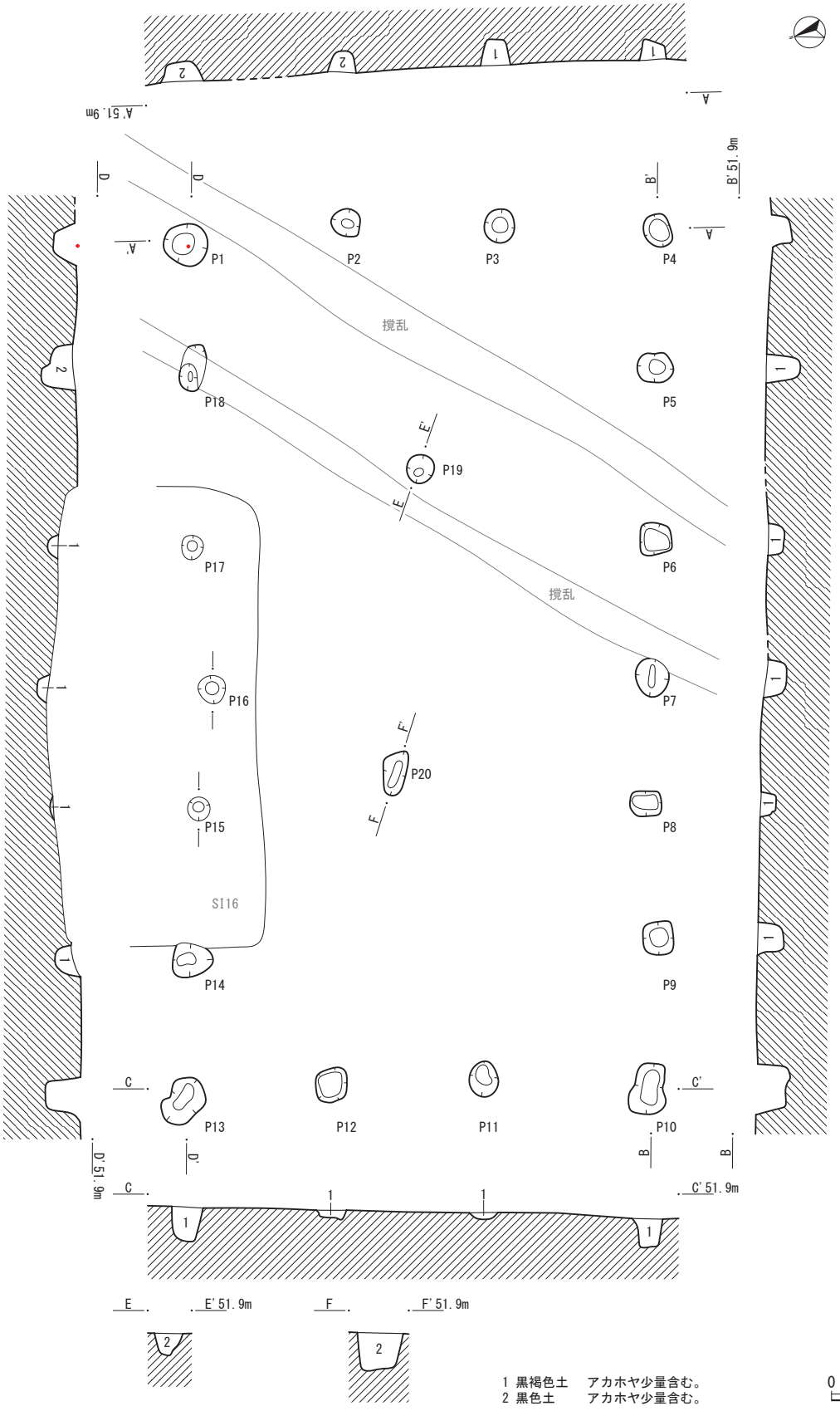
Ｆ・Ｇ－ 49・50 区のⅢｂ層で検出された。Ｐ 11・Ｐ 14 は掘立柱建物跡３号のＰ 11・Ｐ 14 と切り合っており，３号より古い。

建物規模は４間×６間で，桁行が 630～650cm，梁行が 400～410cmで，東西に長い長方形の建物である。主軸方位はＮ 69° Ｅである。建物中央東側に桁行と並行して２本の柱穴（Ｐ 20・Ｐ 21）がある。建物に付属する小屋のような構造が想定される。

柱穴の形状は丸みを帯びているが，不定形気味である。Ｐ６・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ 13 など一部で隅丸方形となるものも見られた。深さは 10cm足らずのものから 50cmを超す深いものまで様々である。埋土は黒褐色土である。梁行



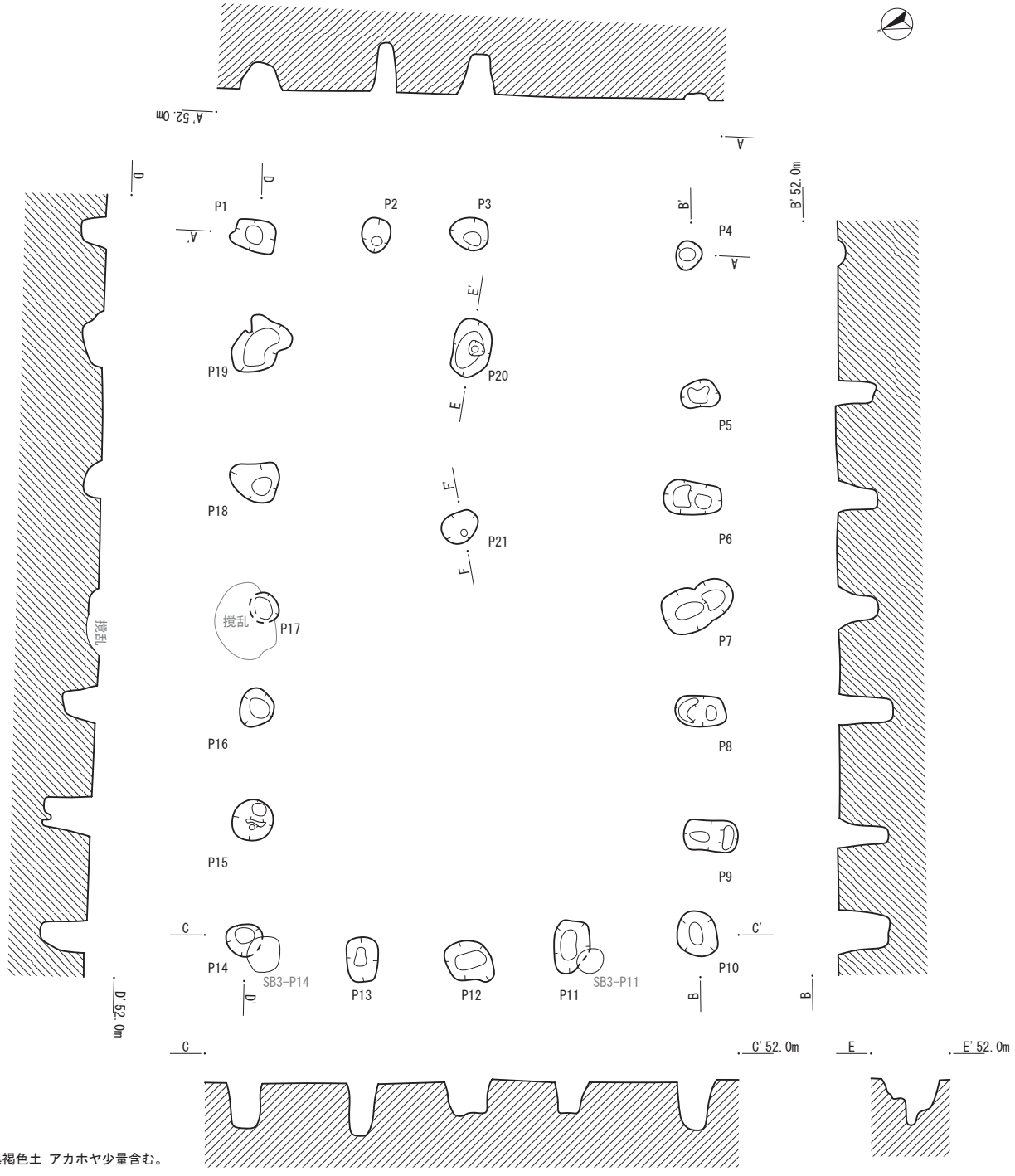
第 338 図　掘立柱建物跡配置図



柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1	42	39	21
P2	28	26	21
P3	32	29	25
P4	32	25	20
P5	35	27	32
P6	30	31	16
P7	37	32	20
P8	30	24	15
P9	32	29	25
P10	49	36	31
P11	34	28	6
P12	32	30	9
P13	49	36	34
P14	38	33	20
P15	23	22	3
P16	27	26	11
P17	23	21	10
P18	44	(23)	32
P19	28	26	21
P20	44	23	36

方向	柱穴間距離	
桁行（cm）	P4-10	821
	P4-5	131
	P5-6	165
	P6-7	132
	P7-8	120
	P8-9	130
	P9-10	144
	P13-1	819
	P13-14	135
	P14-15	145
	P15-16	115
	P16-17	137
	P17-18	172
	P18-1	117
	P19-20	291
梁行（cm）	P1-4	454
	P1-2	154
	P2-3	147
	P3-4	153
	P10-13	447
	P10-11	158
	P11-12	147
	P12-13	143

第 339 図　掘立柱建物跡 1 号

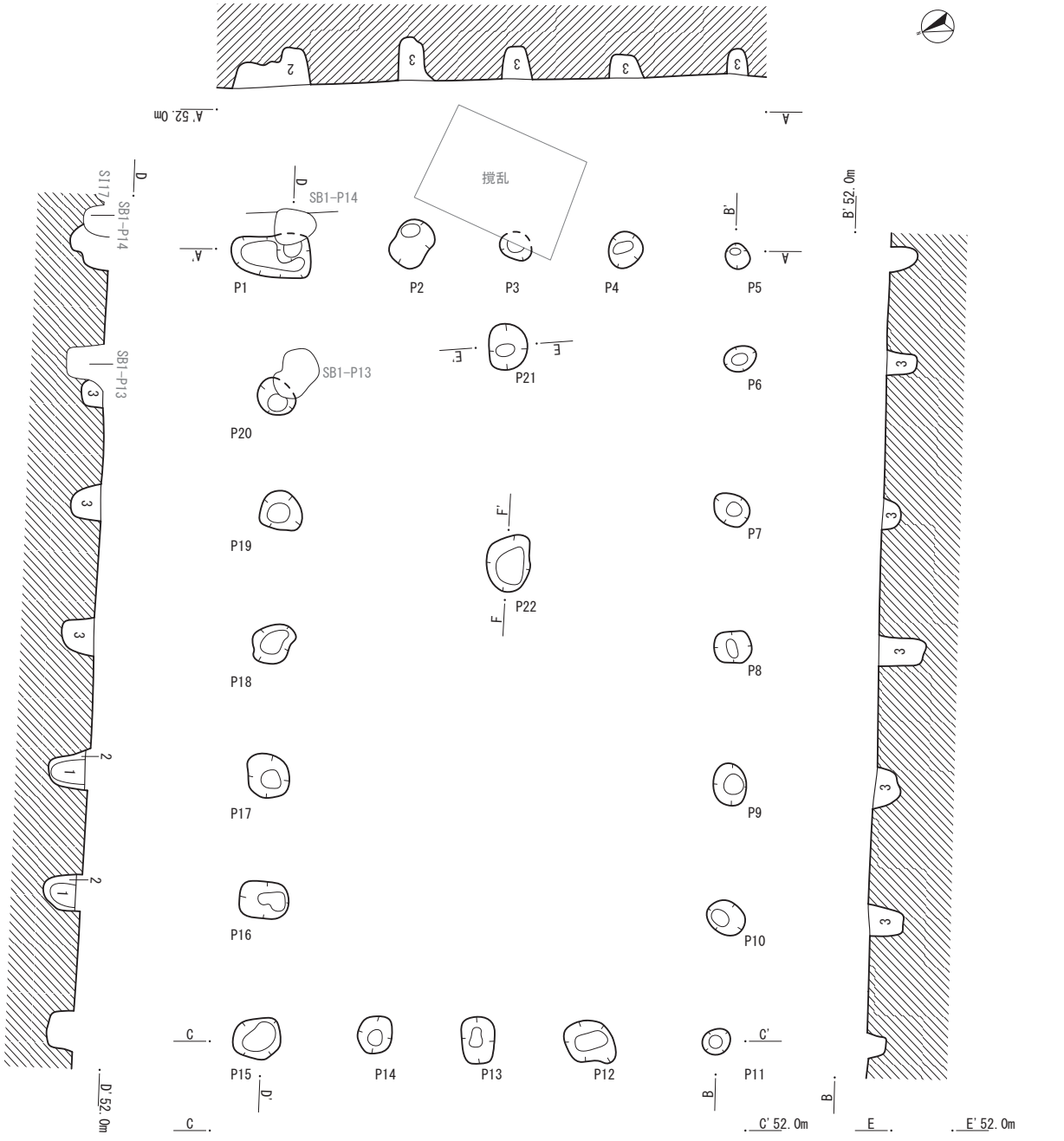


黒褐色土 アカホヤ少量含む。

柱穴（cm）				番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離		方向	柱穴間距離		方向	柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	P11	51	35	29		P4-10	649		P17-18	120		P10-14	433
P1	39	30	26	P12	43	38	34		P4-5	134		P18-19	129		P10-11	122
P2	32	28	47	P13	43	30	50		P5-6	99	桁行	P19-1	107	梁行	P11-12	97
P3	37	31	38	P14	35	31	44		P6-7	102	（cm）	P3-12	698	（cm）	P12-13	103
P4	27	24	7	P15	40	39	46		P7-8	101		P3-20	107		P13-14	115
P5	36	25	37	P16	37	32	32		P8-9	120		P20-21	175			
P6	56	31	38	P17	28	(23)	10		P9-10	95		P21-12	414			
P7	70	41	38	P18	47	40	17		P14-1	671		P1-4	415			
P8	48	29	51	P19	58	41	20		P14-15	112	梁行	P1-2	116			
P9	52	29	48	P20	55	37	53		P15-16	107	（cm）	P2-3	92			
P10	43	38	49	P21	36	29	42		P16-17	97		P3-4	208			

0 2m
〔1:60〕

第 340 図　掘立柱建物跡２号



柱穴（cm）																	
番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離		方向	柱穴間距離		方向	柱穴間距離	
P1	73	37	36	P12	42	38	35	桁行（cm）	P5-11	723	桁行（cm）	P18-19	121	梁行（cm）	P4-5	103
P2	44	33	40	P13	43	30	50		P5-6	97		P19-20	105		P11-15	422
P3	31	(13)	30	P14	34	31	28		P6-7	138		P20-1	132		P11-12	117
P4	33	30	21	P15	43	38	24		P7-8	127		P3-13	727		P12-13	102
P5	23	21	25	P16	45	34	35		P8-9	126		P3-21	91		P13-14	96
P6	31	23	28	P17	40	37	37		P9-10	122		P21-22	198		P14-15	108
P7	35	28	17	P18	43	36	29		P10-11	114		P22-13	438			
P8	34	29	43	P19	38	36	28		P15-1	719	梁行（cm）	P1-5	426			
P9	38	30	24	P20	37	(28)	20		P15-16	127		P1-2	130			
P10	36	29	32	P21	42	35	31		P16-17	113		P2-3	96			
P11	27	23	18	P22	54	41	16		P17-18	121		P3-4	100			

第 341 図　掘立柱建物跡３号

の東側と西側では柱穴の数が非対称だが，東側のものが当初からなかったか，浅くて削平されたかは判断できなかった。

掘立柱建物跡３号（第 341 図）

掘立柱建物跡２号と同じＦ・Ｇ－ 49・50 区のⅢｂ層で検出された。掘立柱建物跡２号とほぼ同規模で，北へ１ｍほどずらしている。Ｐ 11・Ｐ 14 が２号のＰ 11・Ｐ 14 と切り合っており，ともに新しいことから２号が廃絶されたあと桁全体を北側へずらし，東壁をやや拡張して３号を建てたと考えられる。Ｐ 12・Ｐ 13 は２号と同じ柱位置にある。また，Ｐ１・Ｐ 20 は掘立柱建物跡１号のＰ 13・Ｐ 14 に切られていることから，掘立柱建物跡１号より古い。建物の東側のコンクリート製の肥尿ためにより，Ｐ３が切られている。

建物規模は４間×６間で，桁行が約 720cm，梁行が約 410cmあり，平面は東西に長い長方形を呈す。東側にある桁行と並行する２本の柱穴（Ｐ 21・Ｐ 22）は間仕切りと考えられる。主軸方位は２号と同じＮ 69° Ｅであることから，さほど時期を経ずして建て替えられたものと思われる。

柱穴の形状はおおむね円形だが，一部隅丸方形や不定形気味のものもみられた。大きさは径 25cmほどの小さいものから 40 × 70cm大のものまである。深さは 16cm～50cmで，20cm～35cmほどのものが多い。Ｐ 16・Ｐ 17 で柱痕跡が確認された。埋土は黒褐色土である。

掘立柱建物１～３号は近接した場所にあり，規模・構造なども似ていることから，同じような用途でそれほど離れない時期に少しずつ移動して建て替えられたものと考えられる。切り合い関係から，２号から３号，１号への建て替えである。

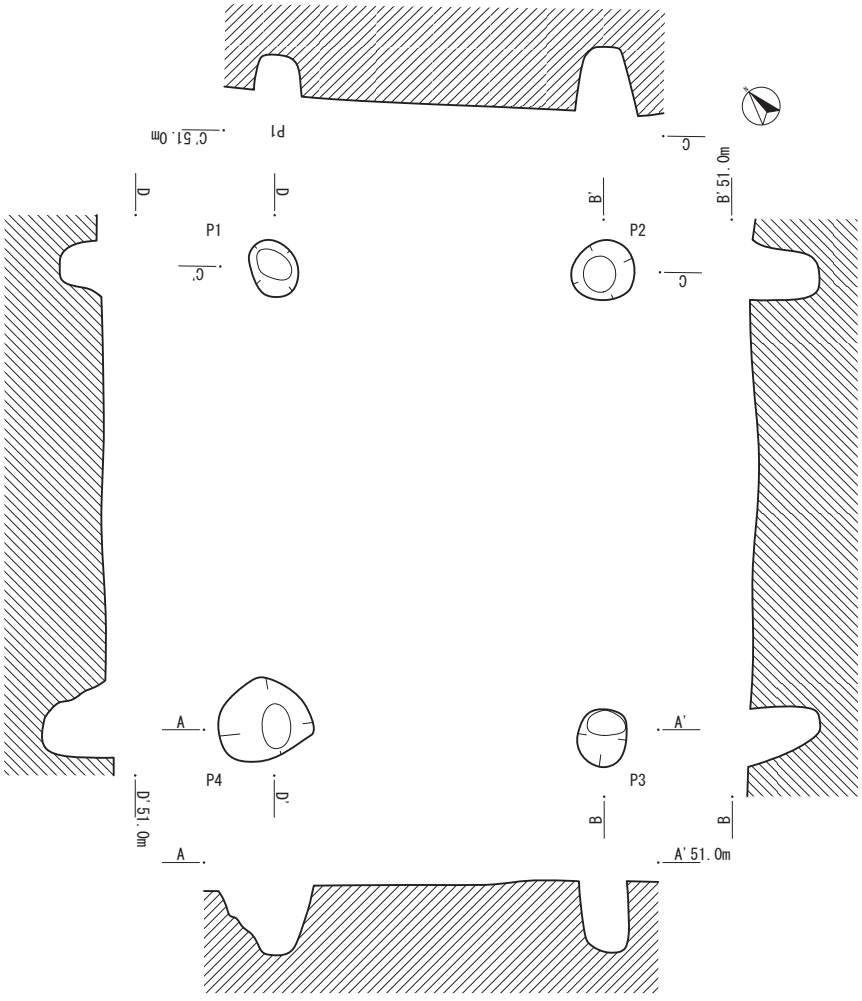
掘立柱建物跡４号（第 342 図）

Ｅ－ 46 区のⅢｂ層で検出された。

建物規模は１間×１間で，桁行が 360cm，梁行が 250cmで，平面は南北に長い長方形を呈する。主軸方位はＮ 42° Ｗである。

柱穴の形状は丸みを帯びているが，不定形気味である。Ｐ３とＰ４では柱痕跡が確認された。径は 40～70cmで，深さは 55cm程度である。埋土は黒褐色土である。

中央に土坑等を想定して精査したが，検出されなかった。柱穴の大きさからも高い建物だった可能性が高い。



柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1	48	37	30
P2	50	48	55
P3	46	39	57
P4	72	62	56

方向	柱穴間距離	
桁行（cm）	P2-3	358
	P4-1	366
梁行（cm）	P1-2	258
	P3-4	261

黒褐色土　しまり中。粘性弱。層中にアカホヤが多量混じる。アカホヤブロック有。

0　2m
〔1:60〕

第 342 図　掘立柱建物跡４号

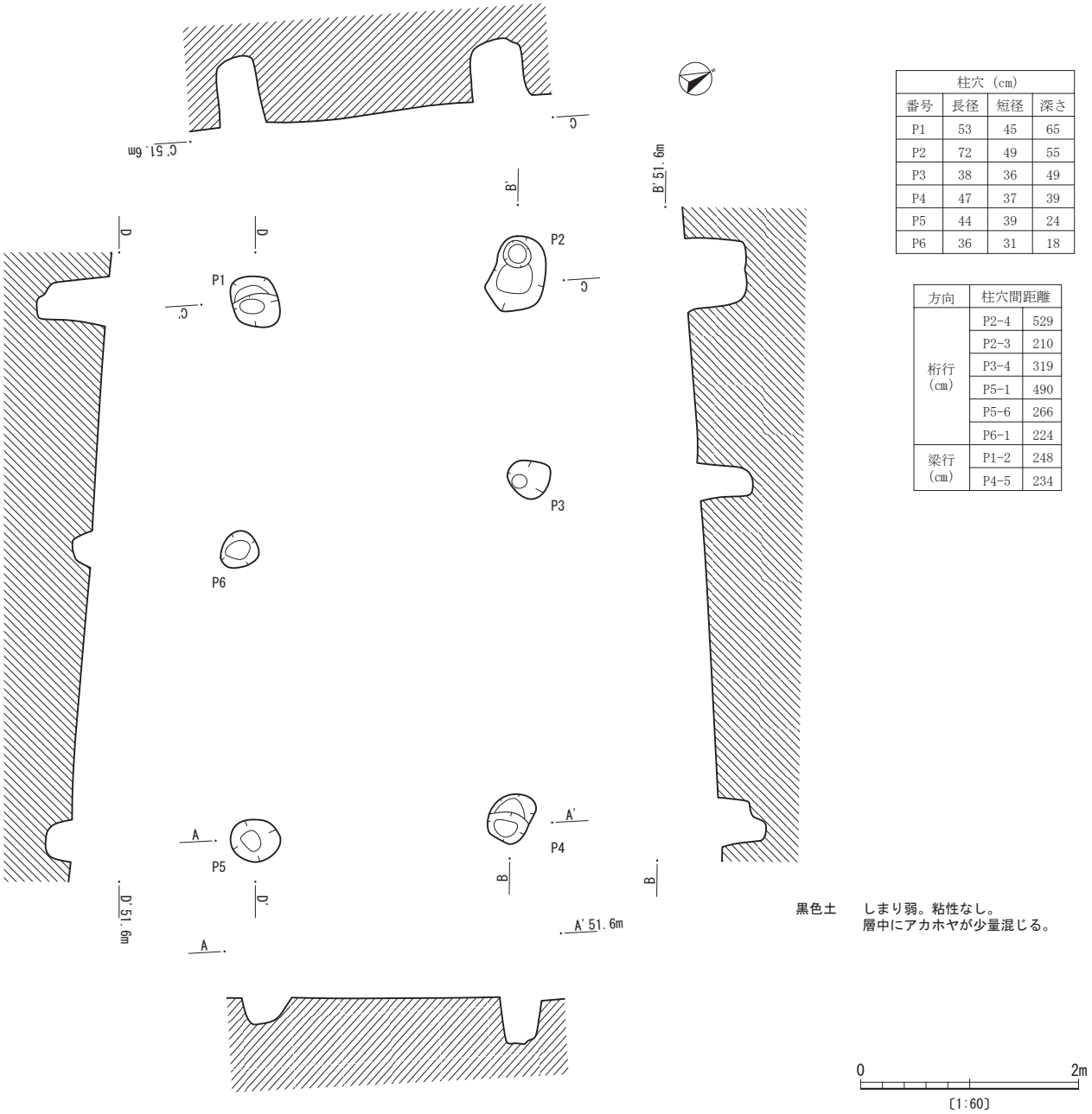
掘立柱建物跡５号（第 343 図）

Ｈ－ 42 区のⅢｂ層で検出された。

建物規模は１間×２間で，桁行が 500cm，梁行が 240cm である。平面はやや歪んだ東西に長い長方形を呈し，主軸方位はＮ 66° Ｅである。

柱穴の形状は径 35～55cmほどでおおむね丸みを帯びているが，不定形のものが多い。深さは 18～65cmで，検出面が傾斜しているためＰ１・Ｐ２が深くＰ５・Ｐ６が浅いが，底面の標高にそれほど差はない。埋土はいずれの柱穴も黒色土である。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４のように柱穴に切り合いが見られるものもあることから，建て替えが想定される。

中央に土坑はなく，比較的高さのある建物が想定される。



柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1	53	45	65
P2	72	49	55
P3	38	36	49
P4	47	37	39
P5	44	39	24
P6	36	31	18

方向	柱穴間距離	
桁行（cm）	P2-4	529
	P2-3	210
	P3-4	319
	P5-1	490
	P5-6	266
	P6-1	224
梁行（cm）	P1-2	248
	P4-5	234

黒色土　しまり弱。粘性なし。
層中にアカホヤが少量混じる。

0　2m
〔1:60〕

第 343 図　掘立柱建物跡５号

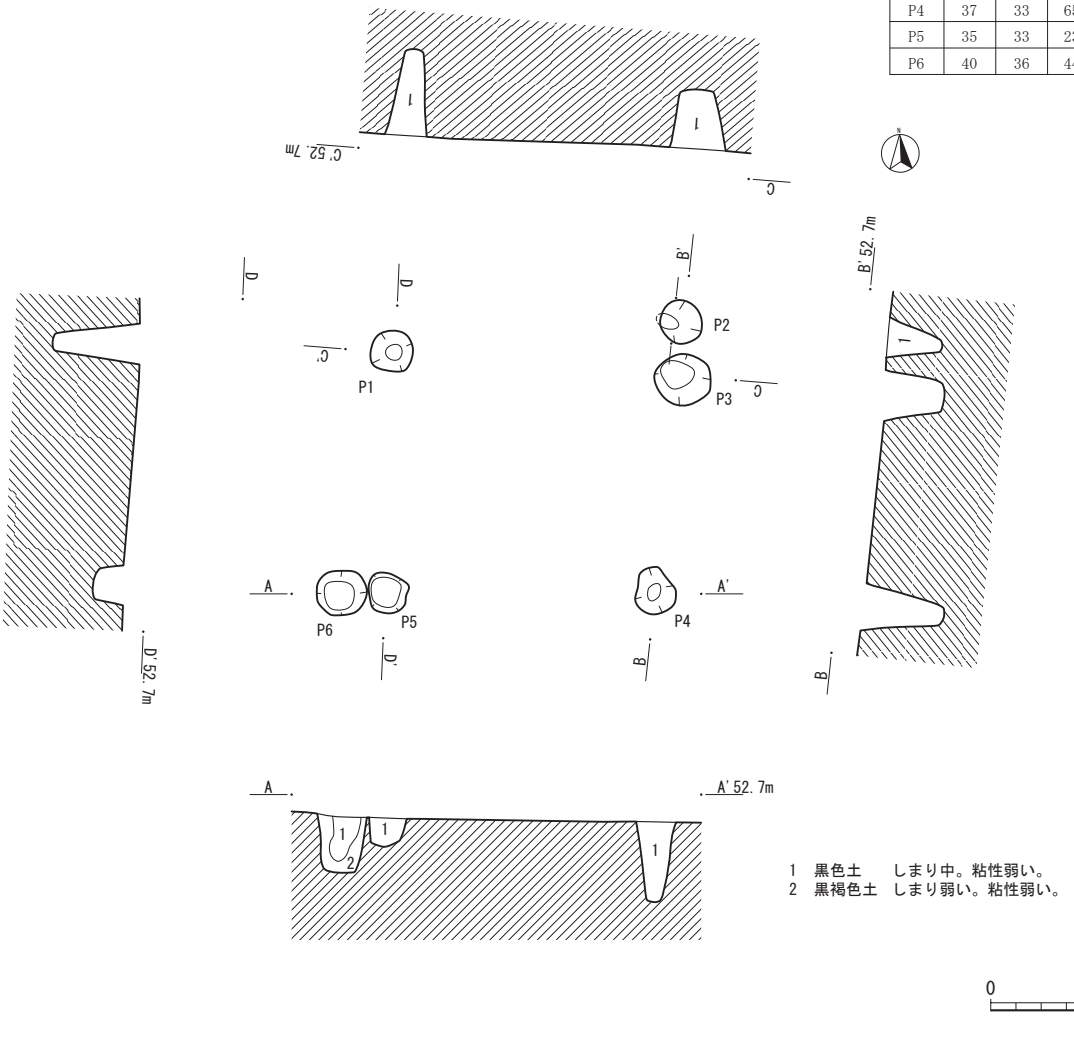
掘立柱建物跡６号（第 344 図）

Ｊ・Ｋ－ 37 区のⅢｂ層で検出された。

建物規模は１間×１間で，桁行が 210cm，梁行が 190cm である。平面形は東西にやや長いほぼ正方形を呈す。主軸方位はＮ 84° Ｅである。北東と南西に柱穴が２か所ずつ（Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ６）検出されており，控え柱や建て替えの痕跡と推測されるが，特定には至らなかった。

柱穴の形状はおおむね円形だが，一部不定形のものも見られる。深さはＰ１～Ｐ４・Ｐ６が 44～69cm，Ｐ５が 23cm である。埋土はＰ６を除き単一の埋土で，黒色土である。しまりはあまりなかった。

柱穴（cm）				方向	柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ			
P1	33	33	69	桁行（cm）	P1-3	225
P2	34	34	45		P4-6	250
P3	45	41	47		P4-5	213
P4	37	33	65	梁行（cm）	P2-4	215
P5	35	33	23		P3-4	173
P6	40	36	44		P5-1	191



第 344 図　掘立柱建物跡６号

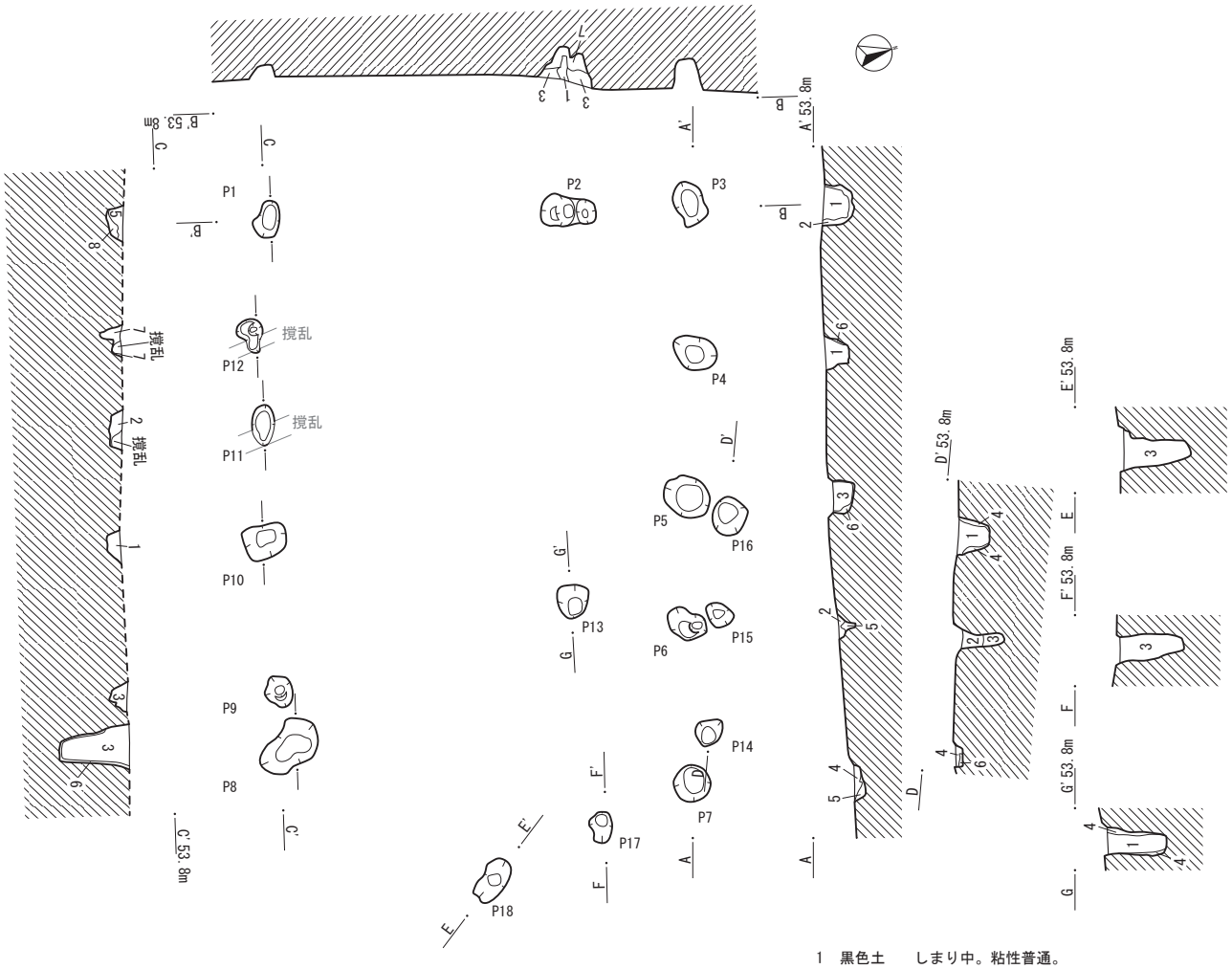
掘立柱建物跡７号（第 345 図）

Ｊ－ 35 区のⅢｂ層で検出された。

建物規模は現状２間×４間だが，梁行のほうは中間の柱がはっきりしない。柱間からすれば，３間になる可能性もある。桁行は 480cm，梁行が 350cmで，平面は東西に長い長方形を呈す。柱間は桁行が 120cmの等間隔である可能性がある。主軸方位はＮ 79° Ｗである。

柱穴の形状は不定形で，直径は 20～40cmである。深さは５～58cmと様々だが，全体的に浅いものが多い。Ｐ３やＰ８などには柱痕跡らしきものもある。埋土は黒褐色土や黒色土である。周辺にいくつかの柱穴があり，このうちのいくつかの柱穴は補強や建て替えの痕跡と推測されるが，機能が判断できないものもある。

建物としての性格も不明である。



柱穴（cm）													
番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離		方向	柱穴間距離	
P1	31	30	9	P9	45	22	26	桁行（cm）	P3-7	479	桁行（cm）	P9-10	128
P2	25	21	5	P10	31	18	39		P3-4	126		P10-11	94
P3	35	22	14	P11	28	20	19		P4-5	119		P11-12	79
P4	22	18	33	P12	34	19	11		P5-6	106		P12-1	94
P5	39	32	18	P13	36	27	11		P6-7	129	梁行（cm）	P1-3	349
P6	32	28	25	P14	28	23	15		P8-1	440		P1-2	248
P7	38	28	19	P15	55	30	58		P8-9	49		P2-3	100
P8	36	24	26										

1　黒色土　　しまり中。粘性普通。
2　黒色土　　しまり中。粘性中。
3　黒色土　　しまりやや弱い。粘性中。
4　黒褐色土　しまりやや弱い。粘性中。
5　黒褐色土　しまり中。粘性中。
6　黒褐色土　しまり弱。粘性中。
7　黒褐色土　しまりやや弱い。粘性中。
8　暗褐色土　しまり中。粘性中。

― 凡 例 ―
- - - 推定線

0　2m
〔1:60〕

第 345 図　掘立柱建物跡７号

掘立柱建物跡８号（第 346 図）

Ｇ－ 26・27 区のⅢｂ層で検出された。

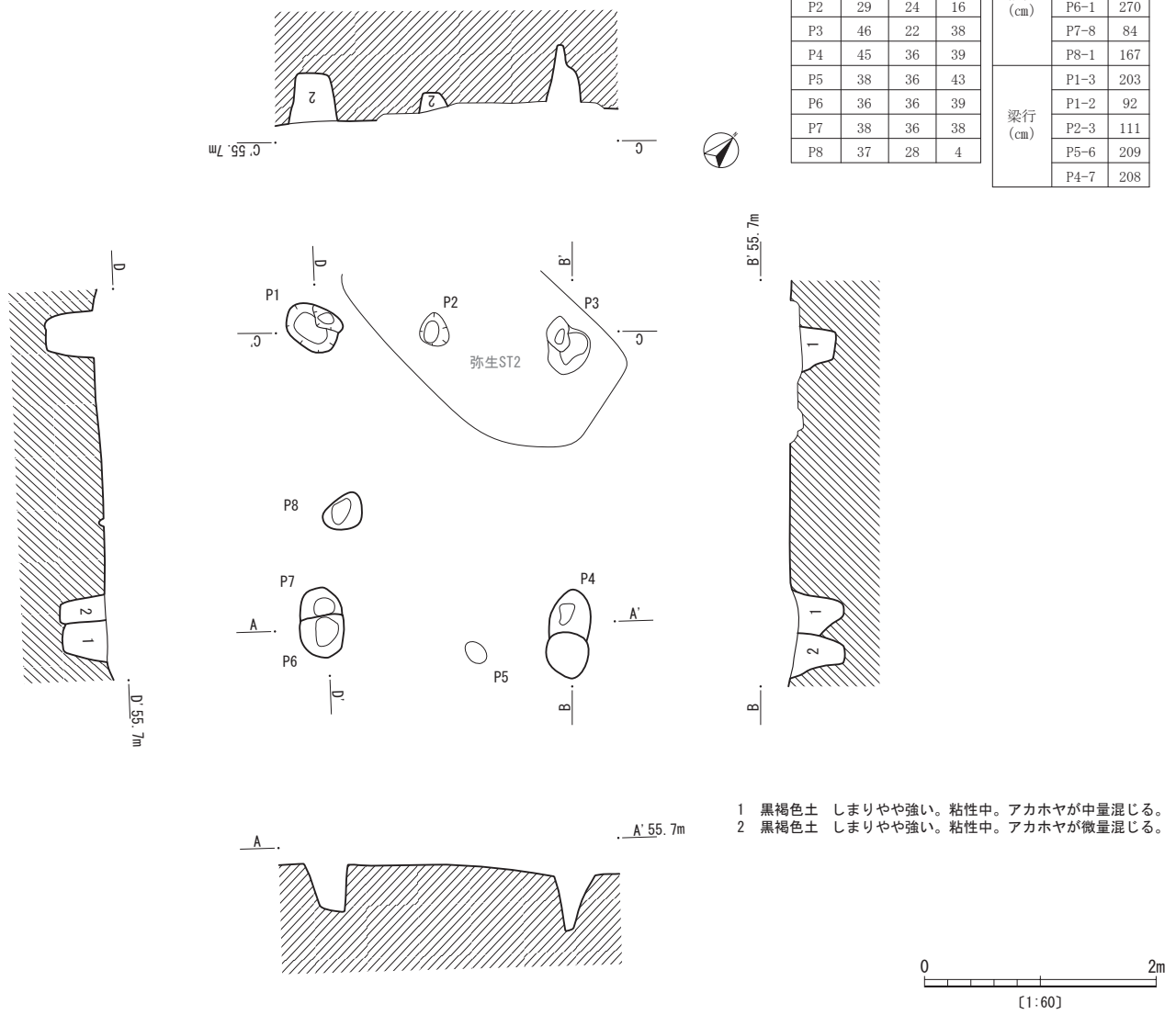
建物規模は１間×２間で，桁行が 270cm，梁行が 210cm である。平面は南北に長い長方形を呈す。主軸方位はＮ 45° Ｅである。Ｐ４・Ｐ５，Ｐ６・Ｐ７がそれぞれ切り合っており，新旧関係はＰ５とＰ６が新しい。軸が揃っており，北側列には中央にＰ２があることから，本来はＰ４・Ｐ５とＰ６・Ｐ７の間にも柱穴があった可能性もあるが，樹痕による撹乱のため検出できなかった。補強や建て替えの可能性があるが，機能としては不明である。Ｐ１とＰ３も切り合いの可能性があるが，埋土からは判断できなかった。

柱穴の形状は丸みを帯びているが，不定形気味である。直径は 25cmほどの小さいものから 40cmほどのものがある。深さはＰ１・Ｐ３～Ｐ７が 40cm前後で，Ｐ２が 16cm，Ｐ８が４cmである。埋土は黒褐色土である。

台地の頂上部にあることから，物見小屋のような建物だったことが推測される。

柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1	49	36	41
P2	29	24	16
P3	46	22	38
P4	45	36	39
P5	38	36	43
P6	36	36	39
P7	38	36	38
P8	37	28	4

方向	柱穴間距離	
桁行（cm）	P3-5	274
	P3-4	239
	P6-1	270
	P7-8	84
	P8-1	167
梁行（cm）	P1-3	203
	P1-2	92
	P2-3	111
	P5-6	209
	P4-7	208



1　黒褐色土　しまりやや強い。粘性中。アカホヤが中量混じる。
2　黒褐色土　しまりやや強い。粘性中。アカホヤが微量混じる。

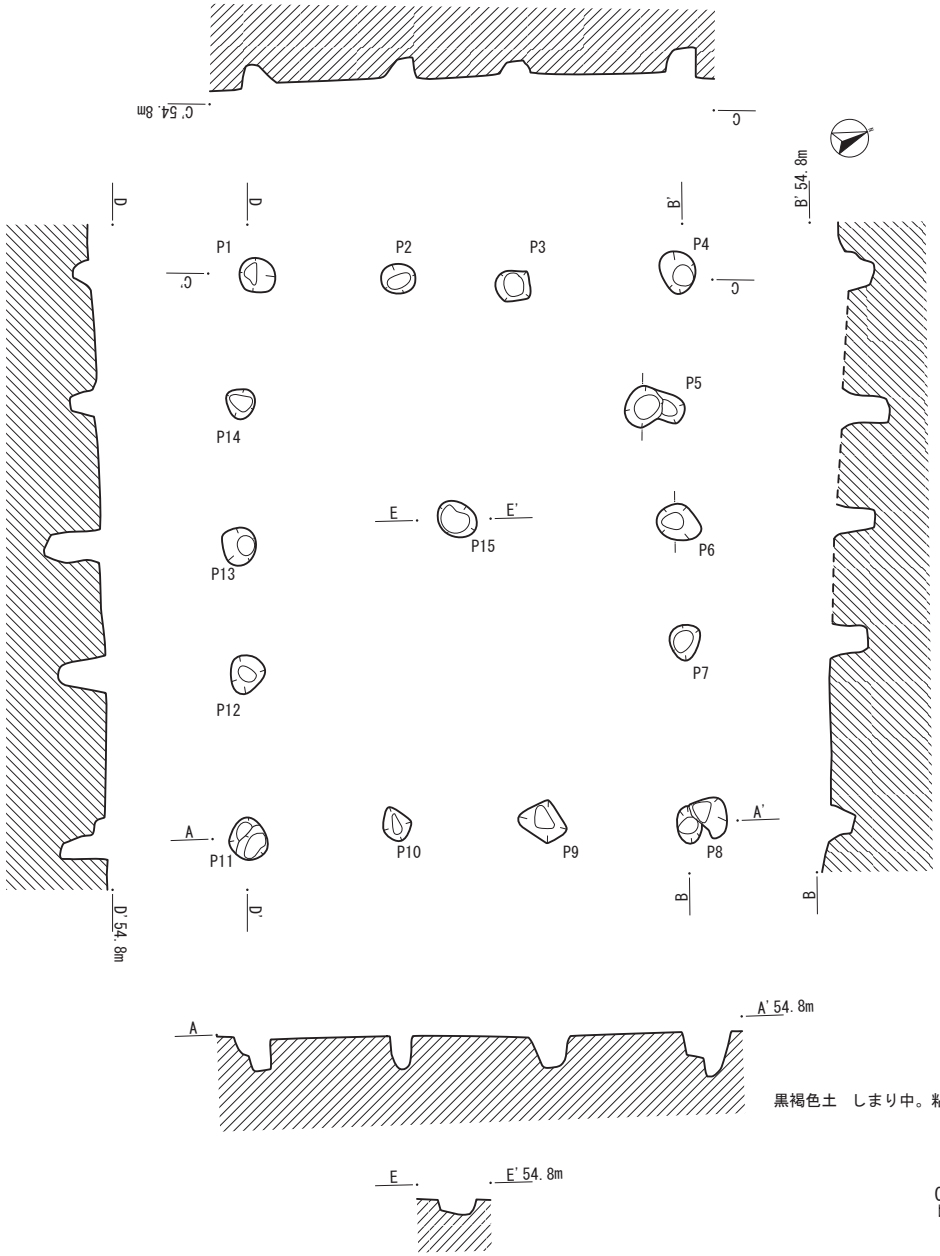
第 346 図　掘立柱建物跡８号

掘立柱建物跡９号（第 347 図）

Ｆ－ 25・26 区のⅢｂ層上面で検出された。

建物規模は３間×４間で，桁行は 450cm，梁行が 350cm である。平面は東西に長い長方形を呈す。中央には棟を支えると思われる柱穴（Ｐ 15）が見られる。主軸方位はＮ 71° Ｅである。

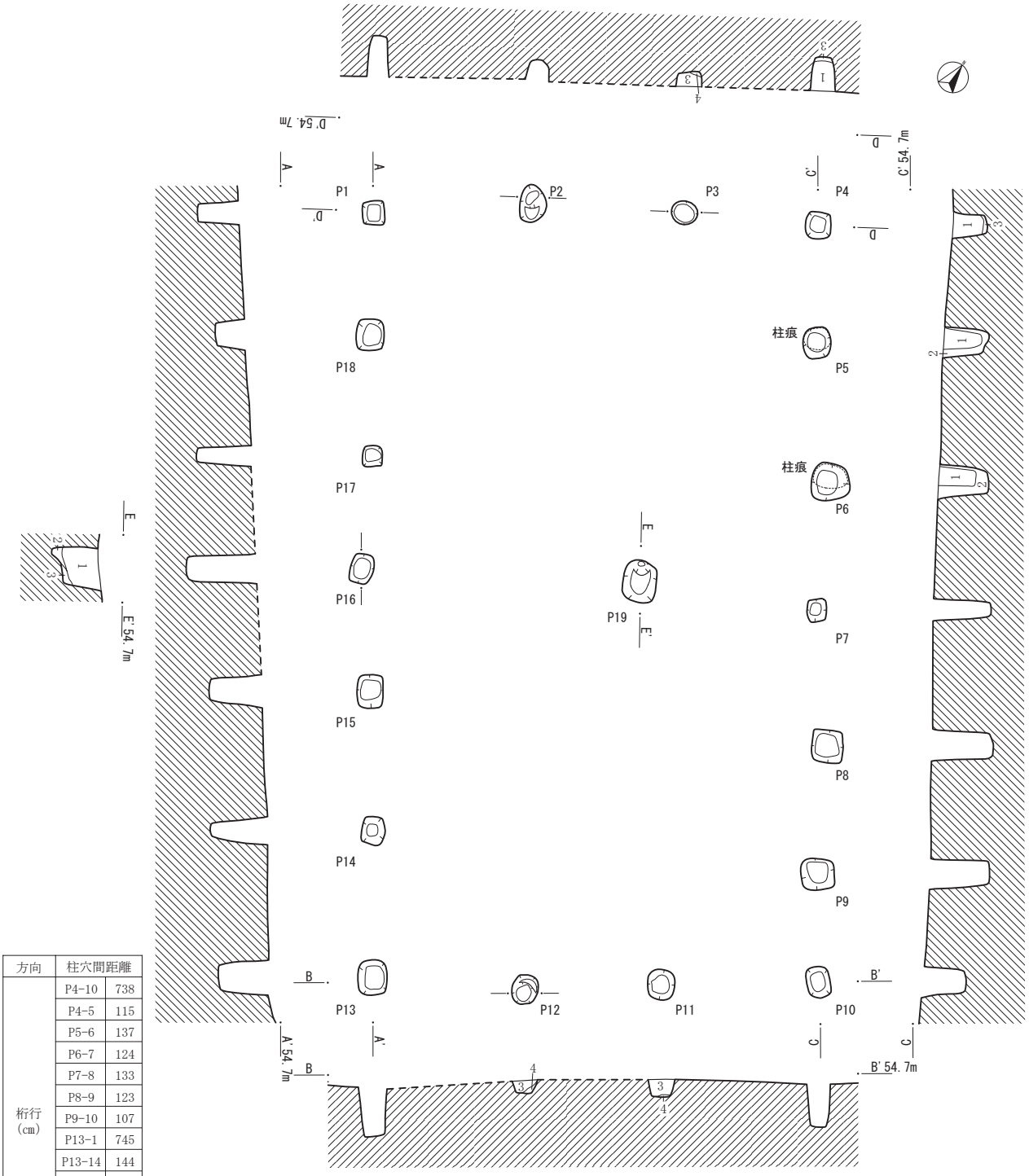
柱穴の形状はほとんどが径 25～30cmほどの丸みを帯びているが，不定形気味である。深さは桁側が20～44cm，梁側が９～26cm，中央のＰ 15 が 13cmである。どの柱穴からも明瞭な柱痕跡は確認できなかった。埋土は黒褐色土である。



柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1	30	27	13
P2	27	24	16
P3	29	27	9
P4	34	28	21
P5	47	27	38
P6	36	26	30
P7	28	25	28
P8	30	20	20
P9	39	32	25
P10	28	22	26
P11	32	30	25
P12	30	27	38
P13	29	28	44
P14	24	24	21
P15	33	26	13

方向	柱穴間距離	
桁行（cm）	P4-8	424
	P4-5	108
	P5-6	93
	P6-7	95
	P7-8	136
	P11-1	454
	P11-12	136
	P12-13	102
	P13-14	113
	P14-1	102
梁行（cm）	P1-4	342
	P1-2	117
	P2-3	91
	P3-4	135
	P8-11	424
	P8-9	126
	P9-10	116
	P10-11	114

第 347 図　掘立柱建物跡９号



方向	柱穴間距離	
桁行（cm）	P4-10	738
	P4-5	115
	P5-6	137
	P6-7	124
	P7-8	133
	P8-9	123
	P9-10	107
	P13-1	745
	P13-14	144
	P14-15	137
	P15-16	117
	P16-17	112
	P17-18	117
	P18-1	119
梁行（cm）	P1-4	433
	P1-2	154
	P2-3	149
	P3-4	131
	P10-13	433
	P10-11	154
	P11-12	133
	P12-13	146

柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1	23	22	40
P2	37	26	21
P3	26	23	15
P4	27	24	33
P5	31	27	44
P6	41	39	49
P7	22	19	57
P8	32	31	60
P9	38	35	58
P10	31	23	42

柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P11	29	26	17
P12	30	25	13
P13	35	28	47
P14	27	23	56
P15	33	25	52
P16	29	23	67
P17	24	21	53
P18	34	29	29
P19	40	33	45

1　黒褐色土　しまり弱い。粘性弱い。
2　黒褐色土　しまり弱い。粘性やや弱い。
3　黒色土　しまり強い。粘性弱い。
4　黒色土　しまり強い。粘性なし。

— 凡 例 —
柱痕
推定線

0　2m
〔1:60〕

第 348 図　掘立柱建物跡 10 号

掘立柱建物跡 10 号（第 348 図）

G・H－23・24 区のⅢｂ層上面で検出された。

建物規模は３間×６間で，桁行が 730cm，梁行が 440cm である。平面は南北に長い長方形を呈する。柱列は桁行・梁行ともに整然としており，柱間も桁行が 1.2 m，梁行が 1.5 m と等間隔である。中央部に深さ 45cm の柱穴（P 19）がある。主軸方位はＮ 36° Ｅである。

柱穴の形状はほとんどが隅丸方形で，一部円形や不定形のものが見られる。深さは桁側が 29～67cm，梁側が 13～21cm である。中央の棟を支える柱穴（P 19）は深さが 45cm で，建物跡プラン中央よりやや北側にずれて位置している。Ｐ５とＰ６で柱痕跡が検出されたが，柱穴を断ち割ってからの確認だったため，平面でのプランははっきりしない。埋土は黒褐色土である。

本遺構の東西には弥生時代の墓域が検出されており，時期が同じなら葬送儀礼等に関わる建物の可能性が考えられるが，埋土等からは炭化材を含め帰属時期を検討できる資料は検出されなかった。また，東側の尾根上に存在する並列している４条の中世溝状遺構と，この建物は長軸が直交している。

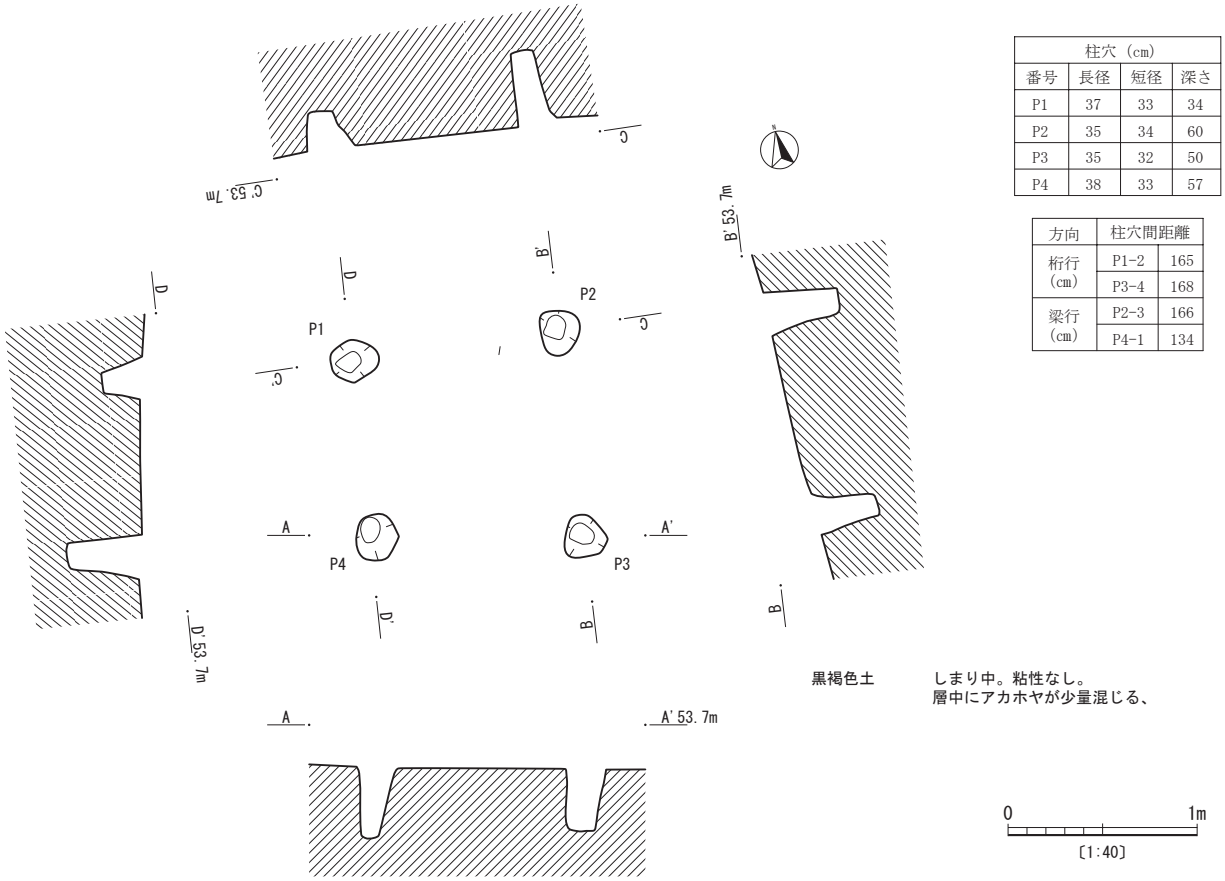
掘立柱建物跡 11 号（第 349 図）

D－20 区のⅢｂ層上面で検出された。台地の北部に位置し，谷を望む場所に立地している。

建物規模は１間×１間で，桁行が 170cm，梁行が 140cm と 170cm で，台形状を呈している。主軸方位はＮ６°Ｗである。

柱穴の形状はやや丸みを帯びているが，不定形である。径 30～40cm で，深さはＰ１のみ 34cm とやや浅いが，Ｐ２～４は 50～60cm である。埋土は黒褐色土である。

立地の状況等から，物見小屋が想定される。



柱穴（cm）			
番号	長径	短径	深さ
P1	37	33	34
P2	35	34	60
P3	35	32	50
P4	38	33	57

方向	柱穴間距離	
桁行（cm）	P1-2	165
	P3-4	168
梁行（cm）	P2-3	166
	P4-1	134

第 349 図　掘立柱建物跡 11 号

第５章　自然科学分析

第１節　自然科学分析の種類と目的

永吉天神段遺跡の２地点における自然科学分析は，平成 25 年度に「テフラ分析」,「放射性炭素年代測定（AMS 測定）」,「種実同定」,「植物珪酸体分析」を，平成 26 年度に「テフラ分析（火山ガラス屈折率測定，鉱物屈折率およびテフラ組成分析）」と「年代測定，樹種同定」を行った。また，平成 30 年度は「年代測定」を行った。

平成 25 年度の「テフラ分析」では，遺構の埋土中や土器付着埋土中に含まれる火山砕屑物を抽出し，その鉱物組成や砕屑物の特徴などを捉えることによって，付着物がテフラであることを確認した。さらに，遺跡周辺で採取されたテフラについても同様の分析を行い，その特性を把握した。それらのテフラの特徴と遺構の埋土中や土器付着埋土中の砕屑物の特徴を比較することにより，含有されるテフラを同定し，遺構および遺物に関わる年代試料を作成した。「種実同定」および「放射性炭素年代測定（AMS 測定）」では，竪穴住居跡・竪穴建物跡３軒から採取した４資料の種実同定により当時の植物利用に関する資料を得るとともに，種実同定作業を経て年代測定に適した試料を選定した上で試料の年代を測定することによって，遺構の年代を知る手がかりとした。

平成 26 年度の「テフラ分析（火山ガラス屈折率測定，鉱物屈折率およびテフラ組成分析）」では，遺構の埋土中の火山砕屑物を抽出し，その鉱物組成や砕屑物の特徴などを捉えることによってテフラであることを確認した。さらに，それらのテフラの特徴を把握し，標準試料との比較を行った。「年代測定，樹種同定」では，竪穴住居跡４軒，土坑１基，溝状遺構１条から検出した炭化物 10 点について放射性炭素年代測定を行い，遺構の年代を知る手がかりとするとともに，一部の試料は樹種同定を行い，当時の植物利用に関する試料を得た。

平成 30 年度の「年代測定」では，出土した土器付着炭化物と出土炭化材について放射性炭素年代測定を実施し，時代を検討する基礎資料とした。

注）本報告書では，調査時の遺構番号を整理し直し修正した。分析を依頼した時点では旧番号を示したため，報告では旧番号で記されていたが，ここでは本報告書で使用した修正番号に直して記載してある。

第２節　テフラ分析

１　テフラ分析（テフラ組成分析及び屈折率測定）

パリノ・サーヴェイ株式会社

⑴　試料

試料は，本遺跡第２地点で検出された遺構埋土３点である。それぞれ試料番号１～３までが付されている。

・試料番号１：周溝墓３号埋土

周溝墓３号は，第２地点の南端部付近で検出された遺構であり，遺構内からは周溝床面直上で開口部を上に向けた状態の小壺（1156）とされる弥生土器が出土している。小壺の型式は，弥生時代中期後半の山ノ口式土器と考えられる。

試料は，小壺内を充填する土壌の最上部より採取した。採取した土壌は灰色を呈し，やや固結した砂質シルトであり，径１～２㎜の白色粒が多く含まれ，同程度の粒径を呈する橙色粒も散在する。なお，同様の特徴を呈する土壌は，周溝墓３号の埋土中において底面から 20㎝ほど上位の層位中にも認められている。

・試料番号２：弥生時代竪穴住居跡 27 号埋土

弥生時代竪穴住居跡 27 号は，第２地点の東部で検出されており，弥生時代竪穴住居跡 26 号に切られている。

試料は，床面直上にベルト状に残された厚さ約９㎝の埋土より採取した。埋土全体は，黒色を呈するシルト質の黒ボク土であるが，試料を採取した部分は周囲の埋土よりも色調が褐色味を帯びてやや明るく，径 0.5㎜ほどの白色粒がやや多く認められる。試料採取部位と周囲との色調の境界は不明瞭である。

・試料番号３：縄文時代晩期土坑２号埋土

第２地点北部で検出された土坑である。平面部の径は約１m，上面から底面までの深さは約 1.2 mである。縄文時代晩期の遺構であると考えられる。

遺構の埋土は，全体的に黒色を呈する黒ボク土であり，径５～25㎜の黄色から橙色を呈する軽石と径 0.5～１㎜ほどの白色粒が散在する。その中で，遺構の底面より約 50㎝上位の厚さ 12㎝ほどの層位の埋土は，黒褐色を呈しやや粘土質であることから，他の層位の埋土とは区別される。試料は，この層位から採取されたものである。

⑵　分析方法

試料は，水を加え，超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し，250 メッシュの分析篩上で水洗して粒径が１/16㎜より小さい粒子を除去する。

水洗・乾燥後に篩別して得られた１/４㎜-１/８㎜の砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約 2.96 に調整）により重液分離し，得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで同定する。同定の際，不透明な粒については斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒及び変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

一方，重液分離により得られた軽鉱物分については，火山ガラスとそれ以外の粒子を偏光顕微鏡下にて 250 粒

に達するまで計数し，火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは，その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３つの型に分類する。各型の形態は，バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分である「Y」字状の高まりを持つもの，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの，軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状及び気泡の長く延びた繊維束状のものとする。ただし，本遺跡においては，火山ガラスを含まずにスコリアを多く含む特徴をもつ開聞岳から噴出したテフラが検出される可能性もあると考えられる。そのため，スコリアが認められた場合は，火山ガラスと同様に計数することにした。

屈折率の測定は，処理後に得られた軽鉱物分から摘出した火山ガラスと，重鉱物分から摘出した斜方輝石を対象とする。屈折率の測定は，古澤（1995）の MAIOT を使用した温度変化法を用いる。

⑶　結果

ア　テフラ組成分析

結果を第 28 表，第 350 図に示す。以下に，各試料の重鉱物組成および火山ガラス比を述べる。

・試料番号１：周溝墓３号埋土

重鉱物組成は，斜方輝石が非常に多く，他にカンラン石と単斜輝石及び不透明鉱物が少量ずつ含まれ，微量の角閃石も含まれる。火山ガラス比では，スコリアが少量含まれ，火山ガラスは軽石型が微量，バブル型も極めて微量含まれる。

なお，分析処理により得られた粒径１/４㎜以上の砂分について実体顕微鏡による観察を行ったところ，最大径約 1.0㎜のスコリアが少量混在していることが確認された。スコリアは，黒色を呈し発泡不良なものが多く，少量の黒色で発泡やや不良なものと赤色を呈し発泡不良のもの，極めて微量の灰褐色を呈し発泡やや不良なものも認められた。

・試料番号２：弥生時代竪穴住居跡 27 号埋土

重鉱物組成は，斜方輝石が非常に多く，他に単斜輝石と不透明鉱物が少量ずつ含まれ，微量の角閃石と極めて微量のカンラン石も含まれる。火山ガラス比では，バブル型火山ガラスが少量含まれ，軽石型火山ガラスが微量，さらに極めて微量の中間型火山ガラスとスコリアも含まれる。

粒径１/４㎜以上の砂分では，少量のバブル型火山ガラスと微量の軽石及びスコリアを認めることができた。バブル型火山ガラスは多くが無色透明であるが，淡褐色や褐色を帯びたものも少量認められた。軽石は，最大径約 1.0㎜であり，白色を呈し発泡は良好で斜方輝石の斑晶を包有する。スコリアは最大径約 0.5㎜，黒色を呈し発泡不良なものが多く，少量の黒色で発泡やや不良なものも認められた。

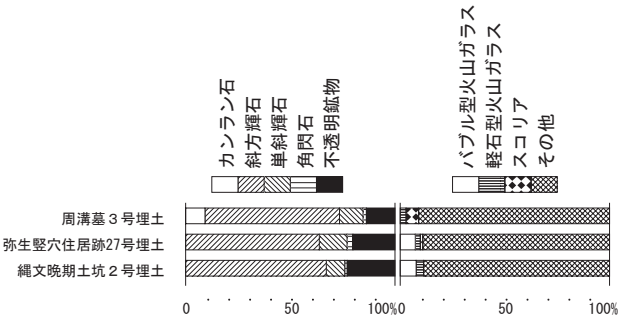
・試料番号３：縄文時代晩期土坑２号埋土

重鉱物組成は，斜方輝石が非常に多く，他に単斜輝石と不透明鉱物が少量ずつ含まれ，微量の角閃石が含まれる。火山ガラス比では，バブル型火山ガラスが少量含まれ，他に軽石型火山ガラスが微量含まれる。

粒径１/４㎜以上の砂分では，少量のバブル型火山ガラスと微量の軽石を認めることができた。スコリアは認められなかった。バブル型火山ガラスは多くが無色透明であるが，淡褐色や褐色を帯びたものも少量認められた。軽石は，最大径約 1.2㎜であり，白色を呈して発泡は良好，斜方輝石の斑晶を包有する。

第 28 表　テフラ組成分析結果

試料番号	試料の詳細	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	スコリア	その他	合計
1	周溝墓3号埋土	23	160	28	4	34	1	250	2	0	7	15	226	250
2	弥生竪穴住居跡27号埋土	1	159	33	7	50	0	250	18	2	6	3	221	250
3	縄文晩期土坑2号埋土	0	168	22	3	57	0	250	19	0	9	0	222	250



第 350 図　重鉱物組成および火山ガラス比

イ　屈折率測定

（ア）　火山ガラス（第 351 図）

試料番号１～３の３点は，ほぼ同様の測定結果を示す。いずれも n1.498 から n1.499 または n1.500 までの低屈折率のレンジと，n1.508 または n1.510 から n1.514 または n1.515 までの高屈折率のレンジとに明瞭に分かれる。

（イ）　斜方輝石（第 352 図）

試料番号１～３の３点は，低屈折率のレンジは γ 1.708 または γ 1.710 から γ 1.712 または γ 1.714 までであり，高屈折率のレンジは γ 1.727～1.729 から γ 1.733 または γ 1.736 までである。

⑷　考察

藤野・小林（1992；1997）などの記載に従えば，開聞岳の火山活動はスコリア噴出と溶岩の流出を繰り返したとされている。テフラ層については，約 4,000 年前の噴火による Km1 から平安時代の噴火による Km12 までを区分しており，噴出物の主体はスコリアと岩片および細

粒火山灰からなるとしている。また，各テフラ層の中で給源からやや離れた地域に降下堆積し，硬く固結した状態の火山灰を「コラ」であるとしており，Km1 には黄ゴラ，Km4 には灰コラ，Km9 には暗紫コラ，Km11 には青コラ，Km12 には紫コラと呼ばれる火山灰層がそれぞれ挟まれている。各コラの噴出年代については，奥野（2002）により暦年代が示されており，黄ゴラは 4,400 年前，灰コラは 3,400 年前，暗紫コラは 1,900 年前，青コラは 7 世紀，紫コラは AD874 年とされている。

今回の分析で明らかにされた各テフラの分析値による特徴として，重鉱物組成では，紫コラは青コラと暗紫コラおよび灰コラに比べてカンラン石の量比が低く，斜方輝石と単斜輝石および不透明鉱物の量比が高い。青コラについては，極めて微量ながらも角閃石を含むことが特徴となる。青コラに角閃石が含まれることについては，上述した藤野・小林（1997）にも記載されており，青コラと他のコラの重鉱物組成は角閃石の有無で区別される。現時点では，暗紫コラと灰コラの重鉱物組成による区別は難しい。斜方輝石の屈折率では，レンジの両端の値とモード付近の値とを比較すると，最も低い値を示すのは暗紫コラであり，最も高い値を示すのは青コラ，両者の中間的な値を示すのが紫コラである。灰コラの値は暗紫コラとほぼ重複するが，レンジの下限は暗紫コラよりもやや高い。

さらに今回の分析では，径 1／4 ㎜以上の砂粒観察により，各コラに含まれるスコリアの色調や発泡度に違いがあることがわかり，青コラについては斜長石の斑晶を多く含むという特徴も，他のコラと区別する際の指標となる。以上，述べた各コラの特徴から今回の試料番号 1～3 までの試料に含まれるテフラについて検討してみる。

試料番号 1 には，少量のスコリアが認められた。重鉱物組成でも少量のカンラン石が検出されたことから，開聞岳由来のテフラに由来するスコリアであると考えられる。山ノ口式土器を充填する土壌中に含まれていることから，年代からみれば暗紫コラか青コラのいずれかに対比される。ただし，本試料の重鉱物組成は火山ガラス比においても火山ガラスがスコリアと同量程度含まれるなど，開聞岳テフラ以外のテフラが混在しており，分析結果からの対比は難しい。火山ガラスの形態や色調および屈折率と斜方輝石の屈折率から，本試料に混在するテフラは鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah:町田・新井，1978）とシラスであると考えられる。火山ガラスの低屈折率レンジはシラスに，高屈折率のレンジは K-Ah に由来する火山ガラスである。また，斜方輝石の低屈折率レンジは K-Ah に，高屈折率レンジはシラスに由来する斜方輝石である。開聞岳テフラに由来する斜方輝石はおそらく割合としては非常に低いため，屈折率測定では認めることができなかったと考えられる。分析値からは開聞岳テフラの識別はできないが，検出されたスコリアの色調と発泡度からは，青コラに比較的多く含まれている灰褐色で発泡がやや不良のスコリアは極めて微量しか認められず，斜長石の斑晶を多く含むという特徴も認められないことから，暗紫コラに対比される可能性が高いと考えられる。本試料を採取した小壺内と周溝墓 3 号の埋土中においてスコリアが濃集し，固結した産状を呈することから，検出された暗紫コラは周溝墓 3 号の埋積中に降下堆積したものであり，その後若干の撹乱を受けたことにより K-Ah やシラスに由来する砕屑物が混在していると考えられる。したがって，出土した小壺および周溝墓 3 号の年代は，暗紫コラの噴出より以前であったことになる。

弥生時代竪穴住居跡 27 号の埋土からは，微量のスコリアが検出され，極めて微量のカンラン石も認められたことから，埋土中には開聞岳テフラに由来する砕屑物が含まれていると考えられる。しかし，その分析結果からは試料番号 1 と同様に K-Ah とシラスに由来する砕屑物が確認されるのみで，開聞岳テフラの識別はできない。また，スコリアも微量であるために，認められた色調と発泡度のスコリアが本来のテフラの特徴を示しているとは限らない。したがって，本試料に含まれるスコリアの由来する開聞岳テフラを特定することはできない。なお，本試料の 1／4 ㎜以上の砂の観察では，径 1.0㎜程度の微細な白色軽石も認められた。調査区内の土層では，池田湖カルデラ起源のテフラである池田湖テフラ（Ik:成尾・小林，1993）に由来する軽石が散在しているが，試料番号 2 の火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率からは Ik に由来する砕屑物は確認できない。したがって，本試料の微細な軽石は Ik 以外のテフラに由来する可能性もある。本遺跡周辺地域のテフラ分布と，K-Ah と混在している産状および屈折率測定した火山ガラスや斜方輝石にも含まれているということを考慮すると，微細な軽石は 5,000 年前に噴出した桜島テフラの Sz-7（小林・江崎，1997；奥野，2002；町田・新井，2003）に由来する可能性がある。いずれにしても，本試料に含まれる各テフラは，住居跡の埋積時に降下堆積したものではないと考えられるため，住居跡の構築や廃棄に関わる年代資料とはならない。

縄文時代晩期土坑 2 号埋土については，スコリアもカンラン石も検出されなかったことから，開聞岳テフラが含まれている可能性は低い。分析結果からは，試料番号 1 および 2 と同様に K-Ah とシラスに由来する砕屑物が混在している状況が推定される。また，1／4 ㎜以上の砂の観察では，試料番号 2 と同様の白色軽石が認められたことから，Sz-7 に由来する砕屑物も混在している可能性があると考えられる。ただし，これらのテフラは埋積時に降下堆積したとは考えられないため，構築や廃棄に関わる年代資料とはならない。

【引用文献】

藤野直樹・小林哲夫，1992，開聞岳起源のコラ層の噴火･堆積様式．鹿児島大学紀要(地学･生物学)，25，69-83.

藤野直樹・小林哲夫，1997，開聞岳火山の噴火史．火山，42，195-211.

古澤　明，1995，火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101，123-133.

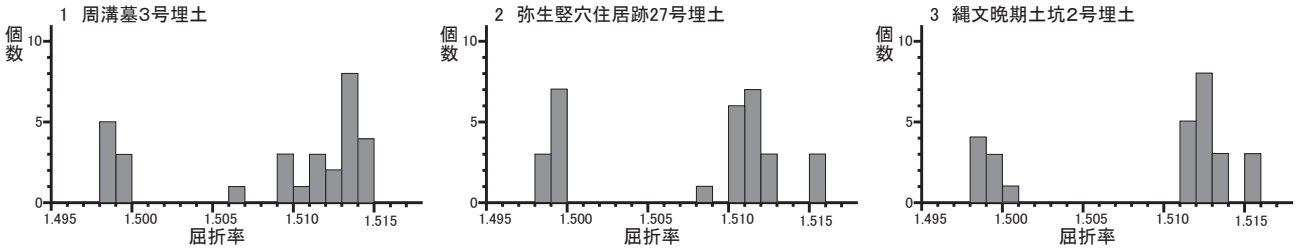
小林哲夫・江崎真美子，1997，桜島火山，噴火史の再検討．月刊地球 19，227-231.

町田　洋・新井房夫，1978，南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究，17，143-163.

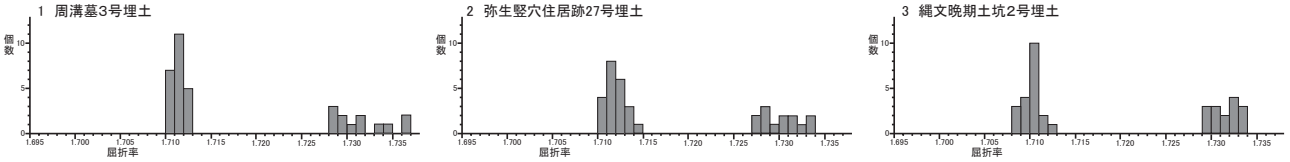
町田　洋・新井房夫，2003，新編　火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.

成尾英仁・小林哲夫．1983，鹿児島県指宿地域の火山活動史－阿多火砕流遺構について．地質学会第 90 年学術大会講演要旨集，309.

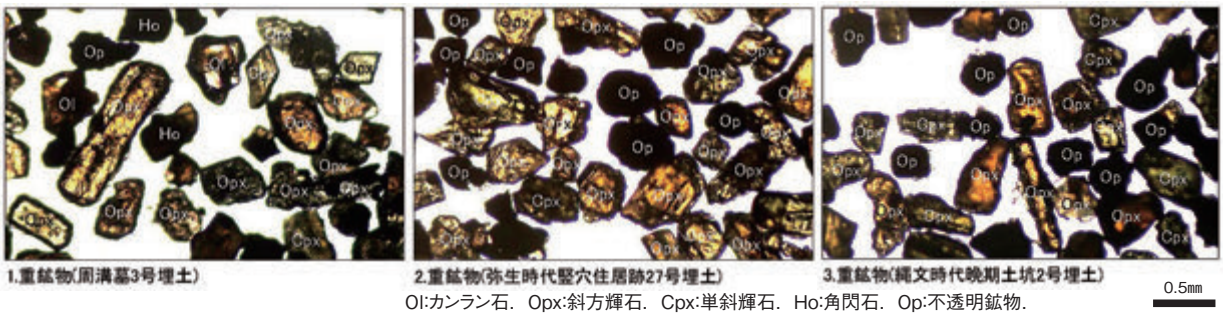
奥野　充，2002，南九州に分布する最近約３万年間のテフラの年代．第四紀研究，41，225-236.



第 351 図　火山ガラスの屈折率

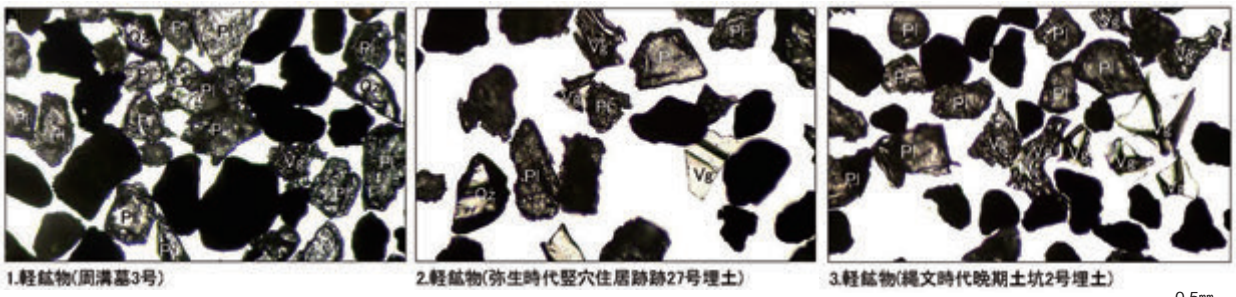


第 352 図　斜方輝石の屈折率



Ol:カンラン石．Opx:斜方輝石．Cpx:単斜輝石．Ho:角閃石．Op:不透明鉱物．

第 353 図　重鉱物



Vg:火山ガラス．Oz:石英．pl:斜長石．Sc:スコリア．

第 354 図　軽鉱物

２　テフラ分析（火山ガラス屈折率測定，鉱物屈折率およびテフラ組成分析）

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1)　試料

試料は，Ｆ－27 区及びＧ－25・26 区の２地点より採取した計８点である。

Ｆ－27区の円形周溝墓４号の周溝内のベルトサンプル土を東側及び西側から，それぞれ①・②層の２点ずつを採取した。Ｇ－25・26区からは，表②層からⅢａ層まで４点を採取し，試料番号１～８を付してある。

以下，各試料について述べる。

・試料番号１：円形周溝墓　周溝墓東側埋土①

円形周溝墓４号の周溝内，東側のベルトの①層から採取された。遺構における層位から，暗紫ゴラと推定されている。試料の外観は，黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は，約１㎜。

・試料番号２：円形周溝墓　周溝墓東側埋土②

円形周溝墓４号の周溝内，東側のベルトの②層から採取された。遺構における層位から，暗紫ゴラと推定されている。試料の外観は，黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は，約４㎜。

・試料番号３：円形周溝墓　周溝墓西側埋土①

円形周溝墓４号の周溝内，西側のベルトの①層から採取された。遺構における層位から，暗紫ゴラと推定されている。試料の外観は，黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は，約３㎜。まれに橙色を示す礫が散在する。

・試料番号４：円形周溝墓　周溝墓西側埋土②

円形周溝墓４号の周溝内，西側のベルトの②層から採取された。遺構における層位から，暗紫ゴラと推定されている。試料の外観は，黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は，約１㎜。まれに橙色を示す礫が散在する。

・試料番号５：Ｇ－25・26区ベルト　テフラサンプル①

Ｇ－25・26区ベルトの表土②層から採取されている。遺構における層位から，紫コラと推定されている。試料の外観は，黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は，約２㎜。

・試料番号６：Ｇ－25・26区ベルト　テフラサンプル②

Ｇ－25・26区ベルトのⅡａ層から採取されている。遺構における層位から，紫コラと推定されている。試料の外観は，黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は，約１㎜。

・試料番号７：Ｇ－25・26区ベルト　テフラサンプル③

Ｇ－25・26区ベルトのⅡｂ層から採取されている。遺構における層位から，暗紫コラと推定されている。試料の外観は，黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は，約４㎜。

・試料番号８：Ｇ－25・26区ベルト　テフラサンプル④

Ｇ－25・26区ベルトのⅢｂ層から採取されている。遺構における層位から，暗紫コラと推定されている。試料の外観は，黒褐色の砂礫混じりシルトである。礫の最大径は，約８㎜。

⑵　分析方法

試料約40ｇに水を加え超音波洗浄装置により分散，250メッシュの分析篩を用いて水洗し，粒径1/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥後に篩別し，得られた粒径１/４㎜－1/8㎜の砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離，重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際，不透明な粒については，斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は，重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え，その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は，その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は，バブル型は薄手平板状，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり，軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。ただし，本遺跡においては，火山ガラスを含まずにスコリアを多く含む特徴をもつ開聞岳から噴出したテフラが検出されると考えられる。そこでスコリアが認められた場合には，火山ガラスと同様に計数することとした。

屈折率の測定は，処理後に得られた軽鉱物分から摘出した火山ガラスと重鉱物分から摘出した斜方輝石とを対象とする。屈折率の測定は，古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

⑶　結果

ア　重鉱物・火山ガラス比分析

結果を第29表・第355図に記す。以下に各試料の重鉱物組成及び火山ガラス比を述べる。

・試料番号１：円形周溝墓　周溝墓東側埋土①

重鉱物組成は，斜方輝石が非常に多く，次いで不透明鉱物が多く，カンラン石が少量，単斜輝石が微量，角閃石が極めて微量含まれる。

火山ガラス比では，スコリアが少量含まれ，次いでバブル型火山ガラス，軽石型火山ガラスが微量，中間型火山ガラスが極めて微量含まれる。

なお，分析処理により得られた粒径１/４㎜以上の砂分について，実体顕微鏡による観察を行ったところ，バブル型火山ガラスと最大径約1.0㎜のスコリアが少量混在していることが確認された。バブル型火山ガラスは，多くが無色透明であるが，褐色や淡褐色を帯びるものが少量含まれる。スコリアは黒色を呈し発泡不良なものが多く，少量の黒色で発泡やや不良なものと，赤色を呈し発泡不良なもの，及び灰褐色を呈し発泡やや不良なものが微量混在している。

・試料番号２：円形周溝墓　周溝墓東側埋土②

重鉱物組成は，斜方輝石が非常に多く，中量の不透明

鉱物，微量のカンラン石，単斜輝石，極めて微量の角閃石が含まれる。

火山ガラス比では，軽石型火山ガラスが少量含まれ，次いでスコリアが多く，バブル型火山ガラス，中間型火山ガラスが微量含まれる。

粒径１/４㎜以上の砂分では，バブル型火山ガラス，最大径約 0.8㎜のスコリアが少量混在していることが確認された。バブル型火山ガラスは多くが無色透明であるが，褐色や淡褐色を帯びるものが少量含まれる。スコリアは，黒色を呈し発泡不良のものが多く，少量の黒色で発泡不良のものと，赤色を呈し発泡不良のものが微量混在している。

・試料番号３：円形周溝墓　周溝墓西側埋土①

重鉱物組成は，斜方輝石，カンラン石が多く，次いで中量の不透明鉱物，少量の単斜輝石，微量の角閃石が混在している。

火山ガラス比では，軽石型火山ガラスが多く，次いでスコリアが多く，バブル型火山ガラス，中間型火山ガラスが極めて微量含まれる。

粒径１/４㎜以上の砂分では，軽石型火山ガラスが微量，最大径約 2.0㎜のスコリアが中量混在していることが確認された。火山ガラスは，無色透明の軽石型火山ガラスが多く，極めて微量の無色透明のバブル型火山ガラス，褐色や淡褐色を帯びるバブル型火山ガラスが混在している。スコリアは,黒色を呈し発泡不良のものが多く，次いで黒色を呈し発泡やや不良のもの，他に灰褐色を呈し発泡やや不良のものが比較的多く，赤色を呈し発泡不良のものが少量混在している。

・試料番号４：円形周溝墓　周溝墓西側埋土②

重鉱物組成は，斜方輝石が非常に多く，中量の不透明鉱物，少量のカンラン石，単斜輝石，極めて微量の角閃石が混在している。

火山ガラス比では，少量の軽石型火山ガラスとバブル型火山ガラス，微量のスコリアが混在している。

粒径１/４㎜以上の砂分では，火山ガラスが少量，最大径約 1.0㎜のスコリアが少量混在していることが確認された。火山ガラスでは，無色透明のバブル型火山ガラスが多く，微量の褐色や淡褐色を帯びるバブル型火山ガラスが混在している。スコリアは，黒色を呈する発泡不良のものと，黒色を呈する発泡やや不良のものが多く，灰褐色を呈する発泡不良なものと，赤色を呈する発泡不良のものが少量混在している。

・試料番号５：Ｇ－25・26 区ベルト　テフラサンプル①

重鉱物組成は，斜方輝石が非常に多く，次いで不透明鉱物が中量，カンラン石と単斜輝石が少量，角閃石が微量混在している。

火山ガラス比では，軽石型火山ガラスが多く，スコリアが少量，バブル型火山ガラスが微量，中間型火山ガラスが極めて微量混在している。

粒径１/４㎜以上の砂分では，バブル型火山ガラスが微量，最大径約 2.0㎜のスコリアが中量混在していることが確認された。バブル型火山ガラスは，無色透明のものが多く，褐色や淡褐色を帯びるバブル型火山ガラスが混在している。スコリアは，黒色を呈し発泡不良のものと黒色を呈し発泡やや不良のものが多く，灰褐色を呈し発泡不良なものと，赤色を呈し発泡不良のものが少量混在している。本試料のスコリアには，粒度の大きい斜長石を包有されるものも微量認められる。

・試料番号６：Ｇ－25・26 区ベルト　テフラサンプル②

重鉱物組成は，斜方輝石が多く，不透明鉱物が中量，カンラン石と単斜輝石が少量，角閃石が微量混在している。

火山ガラス比では，スコリアが多く，軽石型火山ガラスが少量，バブル型火山ガラスと中間型火山ガラスが極めて微量混在している。

粒径１/４㎜以上の砂分では，バブル型火山ガラスと軽石型火山ガラスが微量，最大径約 2.0㎜のスコリアが中量混在している。火山ガラスは，無色透明のバブル型火山ガラスが多く，無色透明の軽石型火山ガラス，褐色や淡褐色を帯びるバブル型火山ガラスが微量混在している。スコリアは，黒色を呈し発泡不良のものと，黒色を呈し発泡やや不良のものが多く，次いで灰褐色を呈し発泡やや不良のものが比較的多く，赤色を呈し発泡不良のものが少量混在している。

・試料番号７：Ｇ－25・26 区ベルト　テフラサンプル③

重鉱物組成は，斜方輝石が非常に多く，不透明鉱物が中量，単斜輝石が少量，カンラン石が微量，角閃石が極めて微量混在している。

火山ガラス比では，軽石型火山ガラスが多く，バブル型火山ガラスとスコリアが微量，中間型火山ガラスが極めて微量混在している。

粒径１/４㎜以上の砂分では，火山ガラスが微量，最大径約 1.4㎜のスコリアが少量混在している。火山ガラスは，無色透明のバブル型火山ガラスが多く，褐色や淡褐色を帯びるバブル型火山ガラスが微量混在している。スコリアは，黒色を呈し発泡不良のものが多く，次いで黒色を呈し発泡やや不良，赤色を呈し発泡不良のものが極めて微量混在している。

・試料番号８：Ｇ－25・26 区ベルト　テフラサンプル④

重鉱物組成は，斜方輝石が非常に多く，不透明鉱物が中量，単斜輝石とカンラン石が微量，角閃石が極めて微量混在している。

火山ガラス比では，バブル型火山ガラスが多く，軽石型火山ガラスが微量，中間型火山ガラスとスコリアが極めて微量混在している。

粒径１/４㎜以上の砂分では，火山ガラスが微量，最大

径約1.0㎜のスコリアが微量混在している。火山ガラスは，無色透明のバブル型火山ガラスが多く，褐色や淡褐色を帯びるバブル型火山ガラスが混在している。スコリアは，黒色を呈し発泡不良のものが多く，黒色を呈し発泡やや不良，赤色を呈し発泡不良のものが極めて微量混在している。

イ　屈折率測定

火山ガラスおよび斜方輝石については，８点すべてについて測定を行った。以下に，火山ガラスと斜方輝石に分けて結果を述べる。

（ア）　火山ガラス（第356図）

試料番号１～８では，ほぼ同様の測定結果を示す。

n1.496またはn1.497からn1.500またはn1.501の低屈折率のレンジと，n1.508またはn1.509からn1.514またはn1.515までの高屈折率のレンジに明瞭に分かれる。

（イ）　斜方輝石（第357図）

試料番号１，３，７は，ほぼ同様の測定結果を示す。

試料番号１，３，７は，γ1.709からγ1.713またはγ1.714までの高いレンジを示す。モードは，γ1.710前後である。

試料番号２と４は，γ1.706またはγ1.707からγ1.712またはγ1.715の広いレンジとなったが，主要なレンジはおそらくγ1.709またはγ1.710からγ1.713またはγ1.715までのレンジとみられる。試料番号２はモードがγ1.713前後，試料番号４はモードがγ1.710前後にあるとみられる。

試料番号５と６は，ほぼ同様の測定結果を示す。γ1.698またはγ1.699からγ1.701の低屈折率のレンジと，γ1.707またはγ1.709からγ1.711の高屈折率のレンジに明瞭に分かれる。モードはγ1.698前後とγ1.701前後，γ1.710－1.711前後の３つにあると思われる。

試料番号８は，γ1.703からγ1.713までの広いレンジとなったが，主要なレンジはおそらくγ1.703からγ1.710付近までのレンジと，γ1.711からγ1.713までのレンジにあり，モードはγ1.707前後とγ1.712前後にあるとみられる。

⑷　考察

各試料から，開聞岳のテフラに由来すると考えられるカンラン石とスコリアが検出された。

藤野・小林（1992；1997）などの記載に従えば，開聞岳の火山活動はスコリアの噴出と溶岩の流出を繰り返したとされている。テフラ層については，約4,000年前の噴火によるKm1から平安時代の噴火によるKm12までを区分しており，噴出物の主体はスコリアと岩片および細粒火山灰からなるとしている。また，各テフラ層の中で給源からやや離れた地域に降下堆積し，硬く固結した状態の火山灰を「コラ」であるとしており，Km1には黄ゴラ，Km4には灰コラ，Km9には暗紫コラ，Km11には青コラ，Km12には紫コラと呼ばれる火山灰層がそれぞれ挟まれている。各コラの噴出年代については，奥野（2002）により暦年代が示されており，黄ゴラは4,400年前，灰コラは3,400年前，暗紫コラは1,900年前，青コラは７世紀，紫コラはＡＤ874年とされている。

当社では開聞岳テフラの標準試料を保有しており，各コラの重鉱物組成及び斜方輝石の屈折率，スコリアの形態や色調から対比が可能となっている。以下に特徴を簡単に記載する。

重鉱物組成では，紫コラは青コラと暗紫コラおよび灰コラに比べてカンラン石の量比が低く，斜方輝石と単斜輝石および不透明鉱物の量比の高いことが特徴となり，青コラについては極めて微量ながら角閃石を含むことが特徴となる。青コラに角閃石が含まれることについては，上述した藤野・小林（1997）にも記載されている。したがって，青コラと他のコラの重鉱物組成は，角閃石の有無で区別される。現時点では，暗紫コラと灰コラの重鉱物組成による区別は難しい。

斜方輝石の屈折率では，４者ともレンジの重なる範囲はあるが，レンジの両端の値とモード付近の値を比較すると，最も低い値を示すのは暗紫コラであり，最も高い値を示すのは青コラ，両者の中間的な値を示すのが紫コラである。灰コラの値は，暗紫コラとほぼ重複するが，レンジの下限は暗紫コラよりやや高い。

さらに，径１／４㎜以上の砂粒観察により，各コラに含まれるスコリアの色調や発泡度に違いがあり，青コラについては，斜長石の斑晶を多く含むという特徴も他のコラと区別する際の指標となる。

試料番号１には，少量のスコリアが認められた。カンラン石もわずかながら検出されていることから，開聞岳テフラに由来すると考えられる。ただし，火山ガラス比からみて，スコリアと火山ガラスが同程度の量比検出されていることから，開聞岳テフラ以外のテフラも混在しており，分析結果からの対比は難しい。

火山ガラスの形態や色調および屈折率と斜方輝石の屈折率から，試料番号１に混在するテフラは鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah：町田・新井，1978）とシラスであると考えられる。

開聞岳テフラに由来する斜方輝石は，おそらく割合として非常に低いため，屈折率測定では認めることができなかったと考えられる。分析値からの対比は難しいが，スコリアの色調や発泡度から対比を推定できる。試料番号１のスコリアからは青コラに特徴的な斜長石の斑晶が多く含まれるスコリアは検出されなかったこと，灰褐色を呈し発泡やや不良のスコリアが，黒色を呈し発泡不良のスコリアに次いで多く含まれることから，紫コラか暗紫コラのいずれかに対比できる。山ノ口式土器が確認さ

れている層であることを考慮すれば，暗紫コラに対比される可能性がある。

試料番号３も，試料番号１と同様の組成であり，開聞岳テフラに対比されると考えられる。重鉱物組成では，斜方輝石とカンラン石が多く，次いで不透明鉱物が多く含まれるという組成になっている。火山ガラス比では，火山ガラスが多く，スコリアが微量含まれるという組成になっている。

１/４㎜以上の砂分に含まれるスコリアは，中量のスコリアが認められ，灰褐色を呈し発泡やや不良のスコリアが比較的多く含まれる。斜方輝石の分析値からは，開聞岳テフラに対比される斜方輝石の分析値は認められないが，スコリアの色調や発泡度から，試料番号１と同様，暗紫コラに対比される可能性がある。

試料番号２と４は，スコリアが少量～微量認められた。カンラン石が少量検出されていることを考慮すると，開聞岳テフラに由来すると考えられる。ただし，火山ガラス比からみて，スコリアより多くの火山ガラスが検出されていることから，開聞岳テフラ以外のテフラも混在しており，分析結果からの対比は難しい。

重鉱物組成からみて，斜方輝石に次いで不透明鉱物がカンラン石よりも多く含まれている。カンラン石が少ないことについては，不透明鉱物が斜方輝石に次いで多いことを考慮すれば，堆積後の風化変質の影響によりカンラン石が溶失し，風化変質に強い不透明鉱物の量比が相対的に高くなった可能性もある。すなわち本来の重鉱物組成を示していない可能性がある。

火山ガラスの形態や色調，屈折率および斜方輝石の屈折率の値からは，K-Ah とシラスに該当するテフラの混在が確認されるものの，斜方輝石の分析値からは開聞岳のテフラに該当する値もわずかに認められる。斜方輝石の屈折率からは灰コラに対比される可能性があるが，スコリアの色調や形態を考慮すると，暗紫コラに由来するものである。試料番号２と４は，暗紫コラに灰コラが混入した可能性が指摘できる。

試料番号５と６は，スコリアが中量認められた。重鉱物組成では，試料番号５は斜方輝石が最も多く，次いで不透明鉱物が多く，カンラン石が少量含まれるという組成だが，試料番号６の重鉱物組成は，試料番号５とほぼ同様であるが，不透明鉱物が試料番号５より多い。

火山ガラス比からみて，試料番号５はスコリアが微量で火山ガラスが多いという組成で，試料番号６はスコリアが全試料中で多く火山ガラスは少量という組成である。火山ガラスの色調，形態および屈折率，斜方輝石の屈折率から，混在しているテフラは K-Ah とシラスである。

ただし，斜方輝石の分析値からは，開聞岳テフラに由来する斜方輝石の分析値も認められた。暗紫コラに特徴的な低屈折率の斜方輝石の分析値と紫コラの斜方輝石の屈折率の最低値にほぼ重なる。１/４㎜以上の砂分に含まれるスコリアは，灰褐色を呈し発泡やや不良のものが比較的多く含まれる。試料番号５と６は，紫コラと暗紫コラの混交した結果の層準である可能性が高い。

暗紫コラは，開聞岳テフラの中で最大規模であり（藤野・小林，1997），初生の降下堆積層の層厚は最も大きいとされることや，テフラの新旧関係を考慮するならば，試料採取層準に暗紫コラが混入した可能性が考えられる。

試料番号７は，スコリアが少量認められた。カンラン石が極めて微量検出されていることから，開聞岳テフラに由来すると考えられる。

火山ガラスの色調，形態および屈折率，斜方輝石の屈折率は K-Ah とシラスに由来すると考えられる。火山ガラスの低屈折率レンジはシラスに由来する火山ガラスであり，高屈折率のレンジは K-Ah に由来する火山ガラスである。斜方輝石の屈折率は，K-Ah に由来するレンジである。

１/４㎜以上の砂分に含まれるスコリアからは，灰褐色を呈し発泡やや不良のスコリア，もしくは斜長石斑晶を多く含むスコリアが認められないことから，紫コラ，暗紫コラおよび青コラといった開聞岳テフラの特徴に合致せず，対比が困難である。

試料番号８は，火山ガラスに含まれるスコリアやカンラン石が極めて微量検出されているが，１/４㎜以上の砂分からは少量のスコリアが検出されていることから，開聞岳テフラに由来する。

重鉱物組成は，斜方輝石が極めて多く，次いで不透明鉱物が多く含まれるという組成になっている。カンラン石はほとんど含まれないが，本来の重鉱物組成を反映していないと考えられる。

火山ガラスはバブル型火山ガラスが多く，次いで軽石型火山ガラスが含まれ，スコリアは極めて微量の検出となっている。火山ガラスの色調と形態および屈折率，斜方輝石の屈折率からは，K-Ah とシラスに由来する斜方輝石が混在している。火山ガラスの低屈折率レンジはシラスに由来する火山ガラスであり，高屈折率のレンジは K-Ah に由来する火山ガラスである。

１/４㎜以上の砂分に含まれるスコリアに，灰褐色を呈し発泡やや不良のスコリアが比較的多く含まれることと斜方輝石の屈折率の分析値からは暗紫コラと灰コラに対比されることから，テフラの新旧関係を考慮するならば，暗紫コラに灰コラが混入した可能性が指摘できる。

【引用文献】

藤野直樹・小林哲夫，1992，開聞岳起源のコラ層の噴火･堆積様式．鹿児島大学紀要（地学･生物学），25，69-83.

藤野直樹・小林哲夫，1997，開聞岳火山の噴火史．火山，42，195-211.

古澤　明，1995，火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101，123-133.

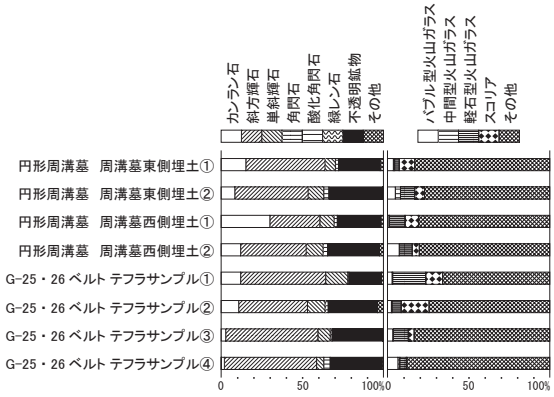
町田　洋・新井房夫，1978，南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究，17，143-163.

町田　洋・新井房夫，2003，新編　火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.

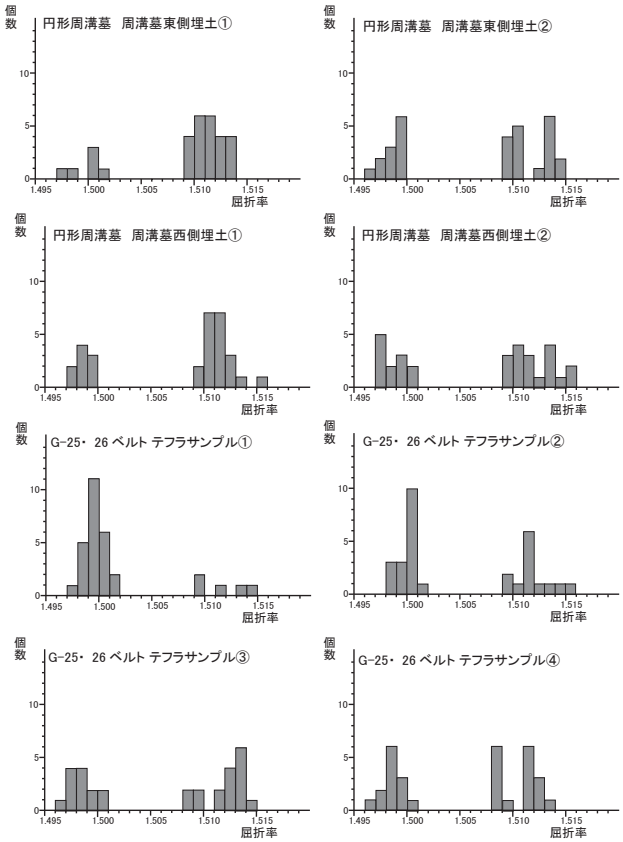
奥野　充，2002，南九州に分布する最近約３万年間のテフラの年代．第四紀研究，41，225-236.

第 29 表　重鉱物・火山ガラス比分析結果

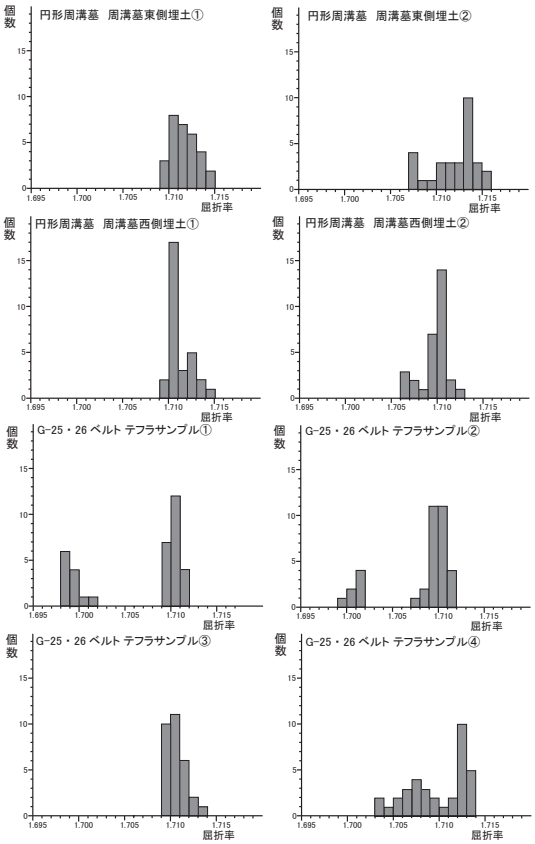
試料番号	試料の詳細	試料の層位	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レン石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	スコリア	その他	合計
1	円形周溝墓　周溝墓東側埋土①	①層	38	122	16	5	0	0	64	5	250	9	2	7	24	208	250
2	円形周溝墓　周溝墓東側埋土②	②層	21	113	24	8	0	0	83	1	250	12	8	22	15	193	250
3	円形周溝墓　周溝墓西側埋土①	①層	75	77	22	5	0	0	67	4	250	2	1	24	21	202	250
4	円形周溝墓　周溝墓西側埋土②	②層	30	101	26	7	0	0	80	6	250	18	0	20	11	201	250
5	G-25･26ベルト テフラサンプル①	表②層	30	131	34	2	0	0	50	3	250	7	1	51	26	165	250
6	G-25･26ベルト テフラサンプル②	Ⅱa層	27	106	27	5	0	0	76	9	250	6	1	14	43	186	250
7	G-25･26ベルト テフラサンプル③	Ⅱb層	7	142	19	3	0	0	78	1	250	8	1	23	9	209	250
8	G-25･26ベルト テフラサンプル④	Ⅲa層	5	142	11	10	0	0	80	2	250	16	3	10	1	220	250



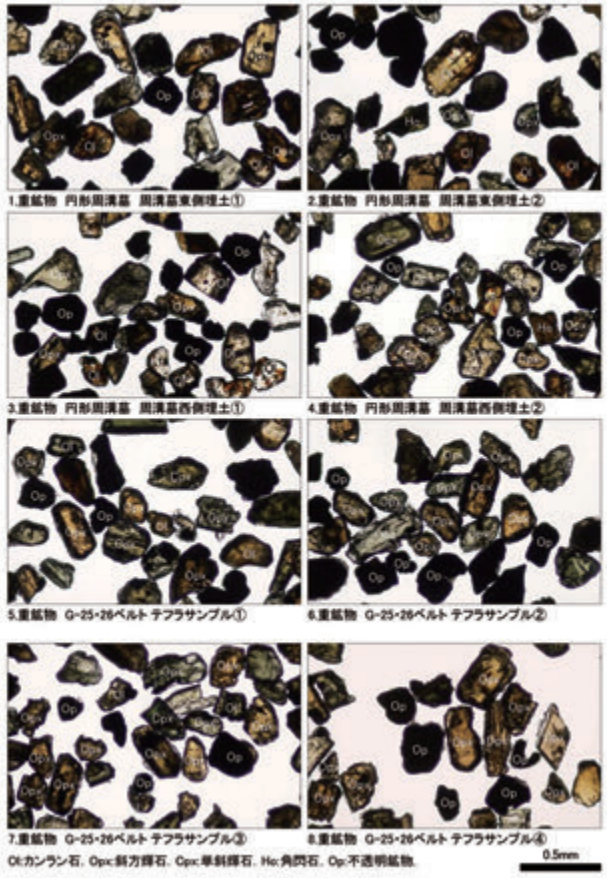
第 355 図　重鉱物組成および火山ガラス比



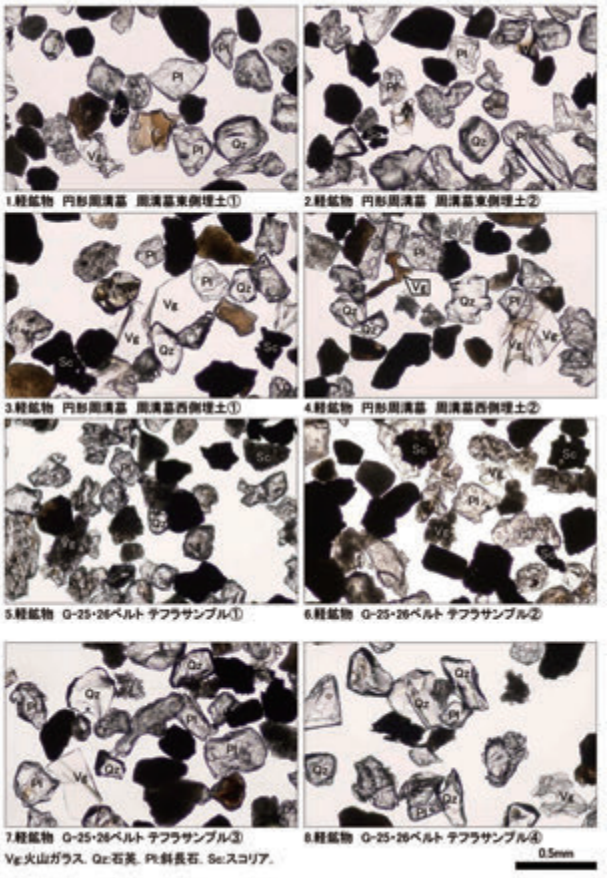
第 356 図　火山ガラス屈折率



第 357 図　斜方輝石の屈折率



第 358 図　重鉱物



第 359 図　軽鉱物

第３節　放射性炭素年代測定（ＡＭＳ測定）

１　放射性炭素年代測定

（株）加速器分析研究所

⑴　選定対象試料

選定対象試料は弥生時代竪穴住居跡８・11・17 号から出土した炭化物や炭化種実の合計４点である（第 30 表）。試料は，調査現場にて採取された土の中からフローテーションにより回収され，種実同定（別稿種実同定報告参照）を行った後，年代測定に適した試料を選定した。しかし，一部は測定に適した種実が検出されなかった，もしくは種実の保存を優先するために，炭化材など種実以外の炭化物を試料とした。

試料が出土した遺構はⅢ層で検出され，弥生時代と推定されている。Ⅱ層は弥生時代，Ⅴ層は縄文時代早期の遺物包含層と捉えられている。

⑵　化学処理工程

ア　メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

イ　酸－アルカリ－酸（AAA:Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA 処理における酸処理では，通常１ mol/ℓ（１ M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001M から１ M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１ M まで達した時には「AAA」，１ M 未満の場合は「AaA」と第 30 表に記載する。

ウ　試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

エ　真空ラインで二酸化炭素を精製する。

オ　精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

カ　グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

⑶　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し，^{14}C の計数，^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

⑷　算出方法

ア　δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第 30 表）。AMS 装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

イ　^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は$\delta^{13}C$によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 30 表に，補正していない値を参考値として第 31 表に示した。^{14}C 年代と誤差は，下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また，^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は，試料の^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

ウ　pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し，pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も$\delta^{13}C$によって補正する必要があるため，補正した値を第 30 表に，補正していない値を参考値として第 31 表に示した。

エ　暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C 濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1 標準偏差（1 σ = 68.2%）あるいは 2 標準偏差（2 σ = 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C 年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，$\delta^{13}C$ 補正を行い，下 1 桁を丸めない^{14}C 年代値である。なお，較正曲線及び較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に IntCal09 データベース（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正プログラムについては，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として第 31 表に示した。暦年較正年代は，^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「calBC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

(5)　測定結果

試料の測定結果を第 30・31 表に示す。

^{14}C 年代は，4 点のうち 3 と 4 の値が誤差（± 1 σ）の範囲で一致し，2 と 3 の値も近接しており，2 ～ 4 の 3 点がおおむね近い値と見なされる。これらに対して，試料 1 は明瞭に異なる年代値を示している。

暦年較正年代（1 σ）は，1 が縄文時代後期前葉頃，2 ～ 4 が弥生時代中期頃に相当する（小林編 2008，藤尾 2009）。

試料の炭素含有率はすべて 60%以上の十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

【引用文献】

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代，西本豊弘編，新弥生時代のはじまり　第 4 巻　弥生農耕のはじまりとその年代，雄山閣，9-54

小林達雄編 2008 総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション

Reimer, P. J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion: Peporting of 14C date, Radiocarbon 19(3), 355-363

第 30 表　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 補正値）

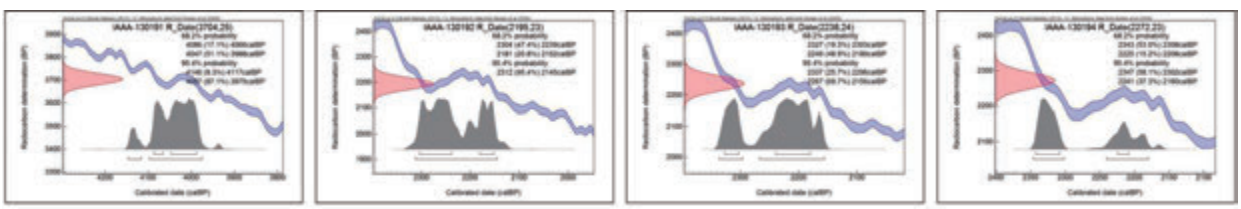
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}C$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-130191	1	弥生竪穴住居跡8号	炭化物	AAA	**-27.26 ± 0.35**	**3,700 ± 30**	**63.06 ± 0.20**
IAAA-130192	2	弥生竪穴住居跡11号 西ベルト床着①層	炭化物	AAA	**-23.73 ± 0.31**	**2,200 ± 20**	**76.09 ± 0.22**
IAAA-130193	3	弥生竪穴住居跡17号SK1 ②層	炭化物	AAA	**-25.46 ± 0.39**	**2,240 ± 20**	**75.68 ± 0.23**
IAAA-130194	4	弥生竪穴住居跡17号SK1 ⑥層	炭化物	AAA	**-27.47 ± 0.42**	**2,270 ± 20**	**75.36 ± 0.22**

[#5806]

第 31 表　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 未補正値，暦年較正用^{14}C 年代，較正年代）

測定番号	$\delta^{13}C$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-130191	3,740 ± 30	62.77 ± 0.20	3,704 ± 25	4086calBP - 4066calBP (17.1%) 4047calBP - 3988calBP (51.1%)	4146calBP - 4117calBP (8.3%) 4097calBP - 3975calBP (87.1%)
IAAA-130192	2,170 ± 20	76.28 ± 0.22	2,195 ± 23	2304calBP - 2239calBP (47.4%) 2181calBP - 2152calBP (20.8%)	2312calBP - 2145calBP (95.4%)
IAAA-130193	2,250 ± 20	75.61 ± 0.22	2,238 ± 24	2327calBP - 2303calBP (19.3%) 2240calBP - 2180calBP (48.9%)	2337calBP - 2296calBP (25.7%) 2267calBP - 2156calBP (69.7%)
IAAA-130194	2,310 ± 20	74.98 ± 0.21	2,272 ± 23	2343calBP - 2308calBP (53.0%) 2225calBP - 2208calBP (15.2%)	2347calBP - 2302calBP (58.1%) 2241calBP - 2180calBP (37.3%)

[参考値]



第 360 図　暦年較正年代

2　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・安昭　炫・佐藤正教
廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani
・小林克也

⑴　はじめに

鹿児島県大崎町に位置する永吉天神段遺跡より検出された試料について，加速器質量分析法（AMS 法）による放射性年代測定を行った。

⑵　試料と方法（放射性炭素年代測定）

試料は，弥生時代竪穴住居跡 45 号から炭化材２点（試料№１：PLD-27789，試料№２：PLD-27790），弥生時代竪穴住居跡 33 号の床面直上から炭化種実１点（試料№３：PLD-27791），弥生時代竪穴住居跡 33 号の SK1 から炭化材１点（試料№４：PLD-27792），弥生時代竪穴住居跡 31 号から炭化材１点（試料№５：PLD-27793），弥生時代竪穴住居跡 42 号から炭化材１点（試料№６：PLD-27794），古墳時代 SI5 から炭化材１点（試料№９：PKD-27797），Ｐ１から炭化材２点（試料№７：PLD-27795，試料№８：PLD-27796），SD25 から炭化材１点の計 10 点である。

樹種同定の結果，試料№１はツバキ属，試料№２はケンポナシ属であった。また，炭化材のうち試料№４，５，７，８は最終形成年輪が残っていたが，試料№１，２，６，９は最終形成年輪は残っていなかった。測定試料の情報，調製データは第 32 表のとおりである。試料は調整後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクト AMS：NEC 製　1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。

⑶　結果

第 33 表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C 年代を，第 362 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には，^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また，付記した^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C 年代がその^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された^{14}C 年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお，１σ暦年代範囲は，OxCal の確率法を使用して算出された^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり，同様に２σ暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C 年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

⑷　考察

測定結果をマルチプロット図に示した（第 361 図）。以下，２σ暦年代範囲（確率 95.4%）に着目して結果を整理する。なお，弥生土器編年と^{14}C 年代の対応関係については，藤尾（2009）を参照した。

SI45 の試料№１（PLD-27789）は 385-346cal BC（20.8%）および 321-206cal BC（74.6%）で，紀元前４世紀前半～紀元前３世紀末の暦年代を示した。また，同じく SI45 出土の試料№２（PLD-27790）は 353 － 295cal BC（24.4%），230 － 220cal BC（1.5%），213 － 94cal BC（69.5%）で，紀元前４世紀中頃～紀元前１世紀初頭の暦年代を示した。いずれも，弥生時代中期に相当する。なお，試料№１と２は最終形成年輪が残っていなかった。木材の場合，最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが，内側の年輪を測定すると，最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料はいずれも古木効果の影響を受けていると考えられ，実際に枯死もしくは伐採された年代は，測定結果よりも新しい年代と考えられる。

弥生時代竪穴住居跡 42 号から出土した試料№６（PLD-27794）は 361 － 201cal BC（95.4%）で，紀元前４世紀前半～紀元前３世紀末の暦年代を示した。これは，弥生時代中期に相当する。試料№６は最終形成年輪が残っておらず，実際に枯死もしくは伐採された年代は，測定結果よりも新しい年代と考えられる。

弥生時代竪穴住居跡 33 号の SK1 の試料№４（PLD-27792）は 203 － 55cal BC（95.4%）で，紀元前３世紀末～紀元前１世紀中頃の暦年代を示した。これは，おおむね弥生時代中期に相当する。また，同じく弥生時代竪穴住居跡 33 号出土の試料№３（PLD-27791）は 162 － 131cal BC（10.8%）および 119cal BC－３ cal AD（84.6%）で，紀元前２世紀前半～紀元後１世紀初頭の暦年代を示した。これは，弥生時代中期に相当する。なお，試料№３は炭化種実であり，測定結果は種実の結実年代を示す。試料№４の炭化材は最終形成年輪が残っており，測定結

果が枯死もしくは伐採された年代を示す。

弥生時代竪穴住居跡 31 号の試料№５は 172 － 46cal BC（95.4%）で，紀元前２世紀前半～紀元前１世紀中頃の暦年代を示す。これは，弥生時代中期に相当する。試料№５は最終形成年輪が残っており，測定結果は枯死もしくは伐採された年代を示す。

古墳時代竪穴住居跡５号の試料№９（PLD-27797）は 128 － 243cal AD（95.4%）で，２世紀前半～３世紀中頃の暦年代を示した。これは，弥生時代後期に相当する。試料№９は最終形成年輪が残っておらず，実際に枯死もしくは伐採された年代は，測定結果よりも新しい年代と考えられる。

古墳時代竪穴住居跡５号のＰ１の試料№７（PLD-27795）は 130 － 250cal AD（95.4%）で，２世紀前半～３世紀中頃の暦年代を示した。これは，弥生時代後期に相当する。同じくＰ２出土の試料№８（PLD-27796）は 131 － 255cal AD（91.1%）および 300 － 318cal AD（4.3%）で，２世紀前半～４世紀前半の暦年代を示した。これは，弥生時代後期～古墳時代前期に相当する。なお，試料№７と８はいずれも最終形成年輪が残っており，測定結果は枯死もしくは伐採された年代を示す。

なお，SD25 の炭化材については，「永吉天神段遺跡３第２地点－２」に記載済みのため省略する。

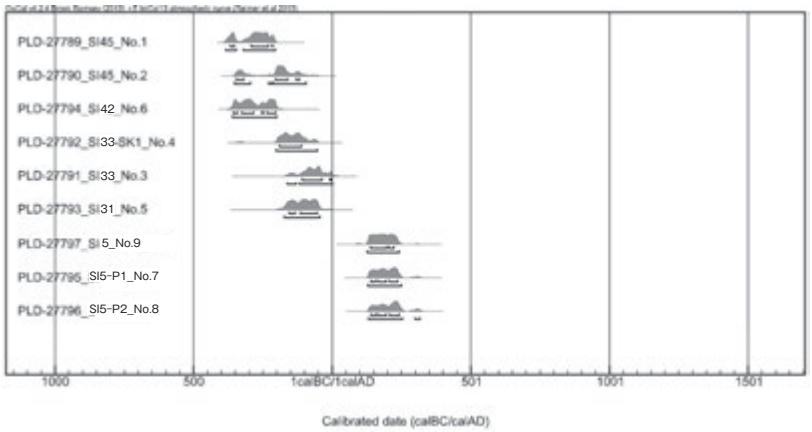
【引用文献】

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

藤尾慎一郎（2009）弥生時代の実年代．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり　第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代」：9-54，雄山閣．

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の 14 Ｃ年代編集委員会編「日本先史時代の 14 Ｃ年代」：3-20，日本第四紀学会．

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J.（2013）IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years calBP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.



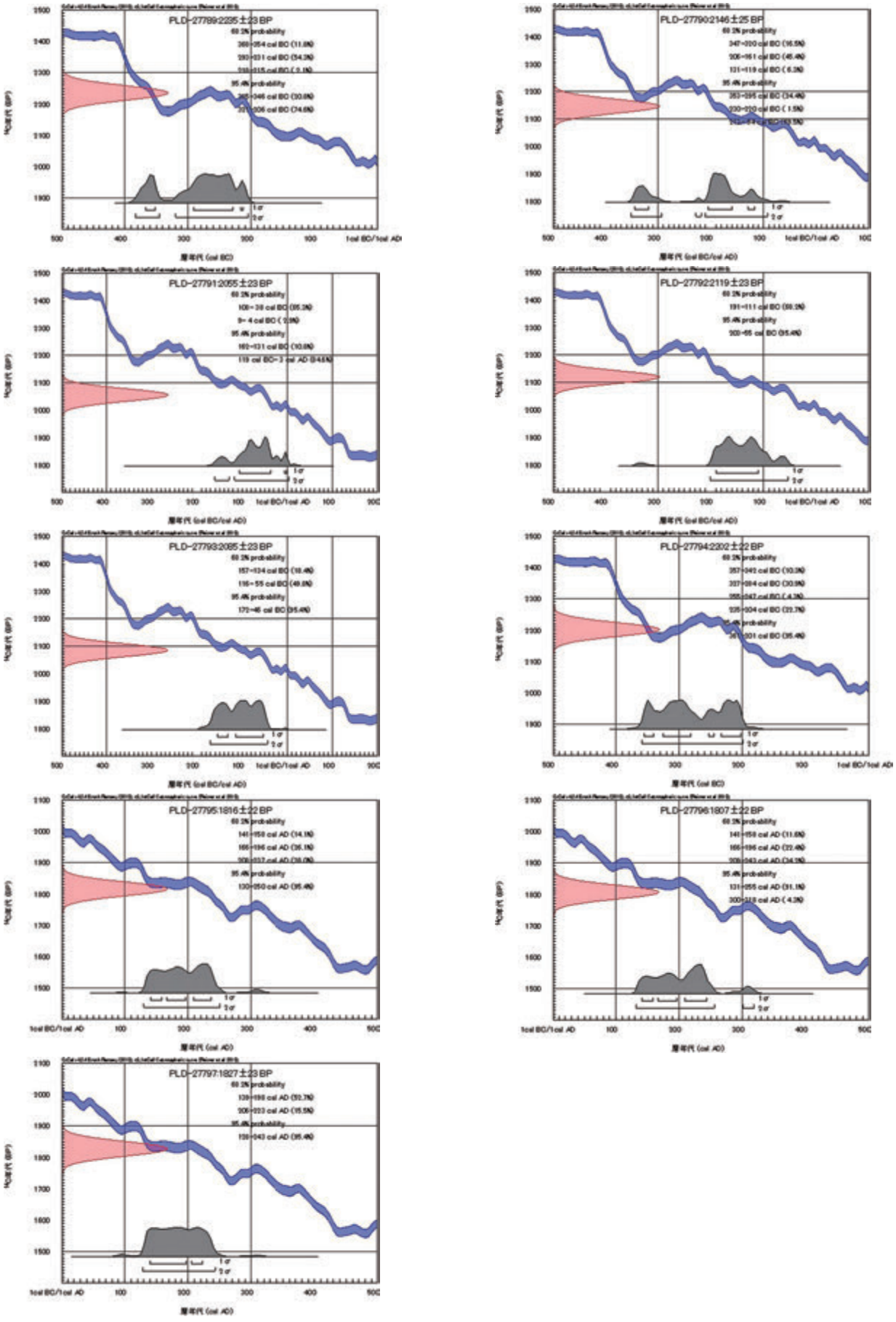
第 361 図　マルチプロット図

第 32 表　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-27789	遺構：弥SI45 試料No. 1 遺物No. 10	種類：炭化材（ツバキ属） 試料の性状：部位不明 部位：外側5年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-27790	遺構：弥SI45 試料No. 2 遺物No. 16	種類：炭化材（ケンポナシ属） 試料の性状：部位不明 部位：外側1年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-27791	遺構：弥SI33 位置：床直 試料No. 3 遺物No. 15397	種類：炭化種実 試料の性状：種実 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-27792	遺構：弥SI33-SK1 試料No. 4 遺物No. 16987	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 部位：外側3年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-27793	遺構：弥SI31 試料No. 5 遺物No. 15163	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 部位：外側5年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-27794	遺構：弥SI42 試料No. 6 遺物No. 22251	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 部位：外側2年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-27795	遺構：古SI5-P1 試料No. 7 遺物No. 1	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 部位：外側5年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-27796	遺構：古SI5-P2 試料No. 8 遺物No. 4	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 部位：外側3年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-27797	遺構：古SI5 試料No. 9 遺物No. 1	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 部位：外側3年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

第 33 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲 1σ暦年代範囲	 2σ暦年代範囲
PLD-27789 弥SI45 試料No. 1	-29.30±0.12	2235±23	2235±25	368-354 cal BC (11.8%) 293-231 cal BC (54.3%) 218-215 cal BC (2.1%)	385-346 cal BC (20.8%) 321-206 cal BC (74.6%)
PLD-27790 弥SI45 試料No. 2	-25.57±0.14	2146±25	2145±25	347-320 cal BC (16.5%) 206-161 cal BC (45.4%) 131-119 cal BC (6.3%)	353-295 cal BC (24.4%) 230-220 cal BC (1.5%) 213- 94 cal BC (69.5%)
PLD-27791 弥SI33 試料No. 3	-24.22±0.15	2055±23	2055±25	108- 38 cal BC (65.3%) 9- 4 cal BC (2.9%)	162-131 cal BC (10.8%) 119 cal BC- 3 cal AD (84.6%)
PLD-27792 弥SI33-SK1 試料No. 4	-27.00±0.12	2119±23	2120±25	191-111 cal BC (68.2%)	203-55 cal BC (95.4%)
PLD-27793 弥SI31 試料No. 5	-27.60±0.20	2085±23	2085±25	157-134 cal BC (18.4%) 116- 55 cal BC (49.8%)	172-46 cal BC (95.4%)
PLD-27794 弥SI42 試料No. 6	-27.61±0.16	2202±22	2200±20	357-342 cal BC (10.3%) 327-284 cal BC (30.9%) 255-247 cal BC (4.3%) 235-204 cal BC (22.7%)	361-201 cal BC (95.4%)
PLD-27795 古SI5-P1 試料No. 7	-28.69±0.14	1816±22	1815±20	141-158 cal AD (14.1%) 166-196 cal AD (26.1%) 208-237 cal AD (28.0%)	130-250 cal AD (95.4%)
PLD-27796 古SI5-P2 試料No. 8	-26.39±0.14	1807±22	1805±20	141-158 cal AD (11.6%) 166-196 cal AD (22.4%) 209-243 cal AD (34.2%)	131-255 cal AD (91.1%) 300-318 cal AD (4.3%)
PLD-27797 古SI5 試料No. 9	-26.89±0.14	1827±23	1825±25	139-198 cal AD (52.7%) 206-223 cal AD (15.5%)	128-243 cal AD (95.4%)



第 362 図　暦年較正年代

3　放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

⑴　試料

試料は，永吉天神段遺跡から出土した土器の付着炭化物が６点である。各試料の注記は，試料番号１が20159G27 Ⅱｂ（第 34 図 184），試料番号２が 18182（第 245 図 1323），試料番号３が 17426（第 257 図 1405），試料番号４が 32358（第 56 図 437），試料番号５が 32168（第 52 図 399），試料番号６が 21415（第 241 図 1289）とされている。

⑵　分析方法

試料の状況を観察後，塩酸（HCL）により炭酸塩等酸可溶成分を除去，水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去，塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理　AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸，水酸化ナトリウム共に１ mol/L であるが，試料が脆弱な場合や少ない場合は，アルカリの濃度を調整して試料の損耗を防ぐ（AaA と記載）。

試料の燃焼，二酸化炭素の精製，グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径１㎜の孔にプレスし，測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて，^{14}C の計数，^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS 測定時に，米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-Ⅱ），国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6 等），バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。

δ^{13}C は試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また，測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma；68％）に相当する年代である。測定年代の表示方法は，国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach, 1977）。また，暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは，Oxcal4. 3. 2（Bronk, 2009）を用いる。較正曲線は Intcal13（Reimer et al., 2013）を用いる。

⑶　結果

結果を第 34 表，第 363 図に示す。今回は分析試料が少なく脆弱なため，いずれも定法よりもアルカリ濃度を薄くして前処理を行っている（AaA）。このような処理によって，測定に必要な炭素量は十分回収できている。同位体補正を行った測定値は，試料番号１の 20159G27 Ⅱｂが 2475 ± 25BP，試料番号２の 18182 が 2425 ± 25BP，試料番号３の 17426 が 2255 ± 25BP，試料番号４の 32358 が 2360 ± 25BP，試料番号５の 32168 が 2445 ± 30BP，試料番号６の 21415 が 2260 ± 25BP である。

暦年較正は，大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動，その後訂正された半減期（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって，暦年代に近づける手法である。測定誤差２σの暦年代は，試料番号１の 20159G27 Ⅱｂが 2719～2433cal BP，試料番号２の 18182 が2696～2353cal BP，試料番号３の 17426 が 2345～2158cal BP，試料番号４の 32358 が 2461～2336cal BP，試料番号５の 32168 が 2700～2358cal BP，試料番号６の 21415 が2346～2159cal BP である。

試料番号１～６では，相対的に試料番号１，２，４，５が古く，試料番号３と６が新しいが，遺物からみた時代観では，試料番号２，３，６が弥生時代中期，試料番号１，４，５が縄文時代晩期とされるので，試料番号２の値が遺物からみた時代観より年代値の方が古い。年代値と遺物からみた時代観のずれは，堆積物の擾乱による炭化物の移動や土中に埋まっている時に古い炭素や新しい炭素の吸着等によって起こると思われる。今回のような脆弱な試料に関しては，アルカリの濃度を低くして分析しているため，土壌中で汚染された炭素を十分排除できなかった可能性があり，このことが年代値のずれに影響しているのかもしれない。

【引用文献】

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.

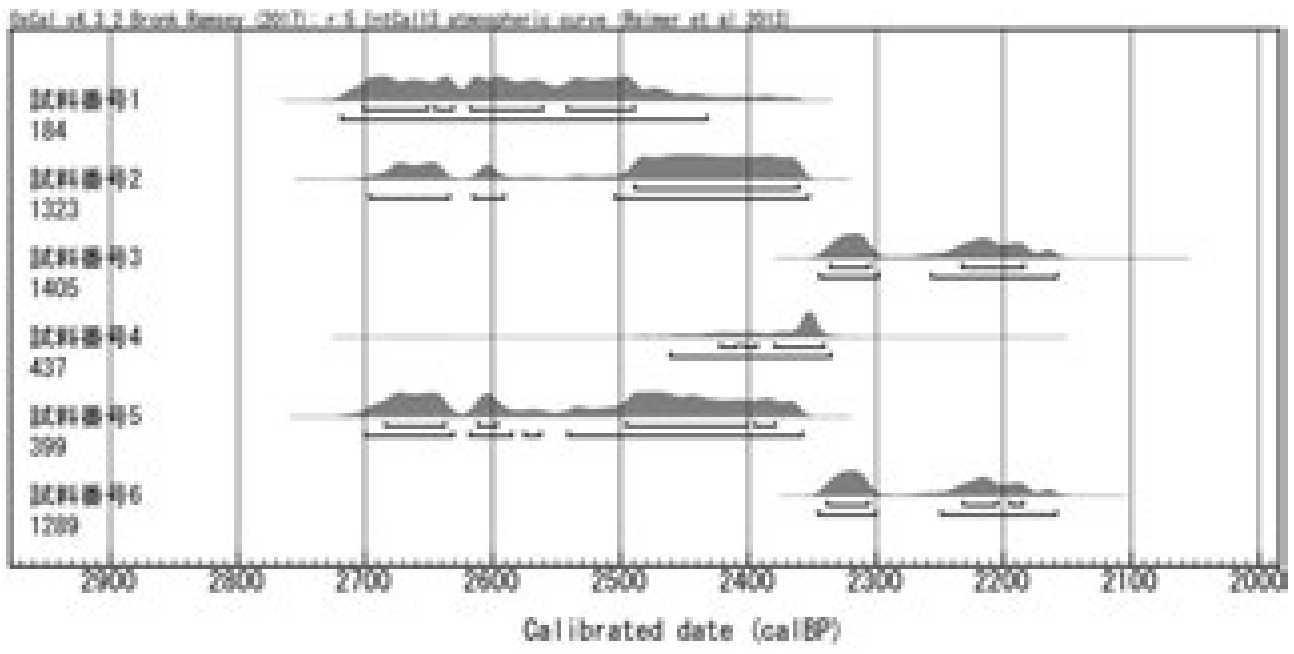
Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, Intcal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50, 000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Peporting of ^{14}C Date. Radiocarbon, 19, 355-363.

第 34 表　放射性炭素年代測定･暦年較正結果

試料名	種別/性状	方法	補正年代(暦年較正用)BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代				Code No.	
						年代値		確率		
20159 G27Ⅱb	土器付着炭化物	0.01M (AaA)	2475±25 (2474±26)	−26.3 ±0.5	σ	cal BC 752 − cal BC 702	2701 − 2651 cal BP	0.199	TKA-17976	pal-11082
						cal BC 696 − cal BC 682	2645 − 2631 cal BP	0.057		
						cal BC 669 − cal BC 612	2618 − 2561 cal BP	0.217		
						cal BC 593 − cal BC 541	2542 − 2490 cal BP	0.210		
					2σ	cal BC 770 − cal BC 484	2719 − 2433 cal BP	0.954		
18182	土器付着炭化物	0.01M (AaA)	2425±25 (2427±26)	−25.5 ±0.5	σ	cal BC 540 − cal BC 412	2489 − 2361 cal BP	0.682	TKA-17977	pal-11083
					2σ	cal BC 747 − cal BC 685	2696 − 2634 cal BP	0.171		
						cal BC 666 − cal BC 642	2615 − 2591 cal BP	0.050		
						cal BC 556 − cal BC 404	2505 − 2353 cal BP	0.732		
17426	土器付着炭化物	0.01M (AaA)	2255±25 (2257±27)	−26.2 ±0.6	σ	cal BC 387 − cal BC 357	2336 − 2306 cal BP	0.319	TKA-17978	pal-11084
						cal BC 284 − cal BC 235	2233 − 2184 cal BP	0.363		
					2σ	cal BC 396 − cal BC 350	2345 − 2299 cal BP	0.385		
						cal BC 308 − cal BC 209	2257 − 2158 cal BP	0.569		
32358	土器付着炭化物	0.01M (AaA)	2360±25 (2360±26)	−28.4 ±0.5	σ	cal BC 473 − cal BC 460	2422 − 2409 cal BP	0.072	TKA-17979	pal-11085
						cal BC 455 − cal BC 445	2404 − 2394 cal BP	0.054		
						cal BC 431 − cal BC 392	2380 − 2341 cal BP	0.556		
					2σ	cal BC 512 − cal BC 387	2461 − 2336 cal BP	0.954		
32168	土器付着炭化物	0.01M (AaA)	2445±30 (2444±28)	−26.4 ±0.6	σ	cal BC 735 − cal BC 689	2684 − 2638 cal BP	0.200	TKA-17980	pal-11086
						cal BC 663 − cal BC 648	2612 − 2597 cal BP	0.059		
						cal BC 547 − cal BC 452	2496 − 2401 cal BP	0.369		
						cal BC 446 − cal BC 430	2395 − 2379 cal BP	0.054		
					2σ	cal BC 751 − cal BC 682	2700 − 2631 cal BP	0.254		
						cal BC 669 − cal BC 636	2618 − 2585 cal BP	0.097		
						cal BC 626 − cal BC 614	2575 − 2563 cal BP	0.016		
						cal BC 592 − cal BC 409	2541 − 2358 cal BP	0.587		
21415	土器付着炭化物	0.01M (AaA)	2260±25 (2261±25)	−27.1 ±0.5	σ	cal BC 390 − cal BC 357	2339 − 2306 cal BP	0.382	TKA-17981	pal-11087
						cal BC 283 − cal BC 256	2232 − 2205 cal BP	0.231		
						cal BC 246 − cal BC 236	2195 − 2185 cal BP	0.069		
					2σ	cal BC 397 − cal BC 351	2346 − 2300 cal BP	0.445		
						cal BC 301 − cal BC 210	2250 − 2159 cal BP	0.509		

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)AAAは酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAはアルカリの濃度を薄めた場合の処理を示す。
5)暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用
6)暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
7)1桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
8)統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である。



第 363 図　暦年較正結果

第４節　種実同定

株式会社　加速器分析研究所

はじめに

本分析調査では，弥生時代と推定される遺構から出土した種実遺体の固定を実施し，当時の植物利用に関する試料を得る。

１　試料

試料は，弥生時代竪穴住居跡８号より１試料，弥生時代竪穴住居跡 11 号より１試料，弥生時代竪穴住居跡 17 号より２試料の合計４試料である（試料１～４）。土壌のフローテーションによって回収され，乾燥した状態でポリ袋やアルミホイルに収納されている。各試料の詳細は結果とともに第 35 表に示す。なお，これら４試料の中から各１点について放射線炭素年代測定が実施されている（年代測定報告書参照）。

２　分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し，ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。種実遺体の同定は，現生標本及び石川（1994），中山ほか（2000），吉崎（1992）等を参考に実施し，個数を数えて一覧表で示す。分析後は,種実遺体を分類群毎に容器に入れて保管する。

３　結果

全４試料を通じて，被子植物４分類群（草本のイネ，イネ科，カヤツリグサ属，エノキグサ）４個の種実が抽出・同定された（第 35 表）。以下に各試料の状況を述べる。

・弥生時代竪穴住居跡８号　床面北西部（試料１）

同定が可能な種実遺体は検出されなかった。種実以外では，炭化材（最大２㎜程度），植物片，砂礫，径２㎝程度の土器片などが確認された。

・弥生時代竪穴住居跡 11 号　西ベルト床着①層（試料２）

炭化した栽培種のイネの胚乳が１個検出され，保存状態は不良である。種実以外では,炭化材（最大４㎜程度），菌類の菌核，砂礫などが確認された。

・弥生時代竪穴住居跡 17 号　SK1 ②層（試料３）

炭化していない草本のイネ科の果実，カヤツリグサ属の果実，エノキグサの種子が各１個，計３個が検出された。種実以外では，炭化材（最大５㎜），砂礫などが確認された。

イネ科，カヤツリグサ属，エノキグサは，明るく開けた場所に生育する，いわゆる人里植物に属する分類群である。遺跡周辺の草地環境に由来すると考えられる。ただし，出土果実には炭化が認められず，保存状態が極めて良好であることから,後代の混入である可能性が高く，解析から除外している。

・弥生時代竪穴住居跡 17 号　SK1 ⑥層（試料４）

同定が可能な種実遺体は検出されなかった。種実以外では，炭化材（最大８㎜），植物片，砂礫などが確認され，軽石類が多く含まれる。

以上の結果を踏まえ，検出された種実の形態的特徴を以下に述べる。また，炭化種実の写真を示す。

・イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科イネ属

胚乳は炭化しており，黒色。胚乳は長さ 3.7～4.2㎜，幅 2.4㎜，厚さ 1.7㎜のやや扁平な楕円形体。基部の一端には，胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で，２～３本の縦隆条がある。

４　考察

種実同定の結果，弥生時代竪穴住居跡 11 号西ベルト床着①層から炭化した穀物のイネが確認された。これは，周辺で栽培されていたか，近辺より持ち込まれたかは不明であるが，当時の本遺跡周辺域で利用された植物質食料と考えられ，火を受けて炭化したとみなされる。

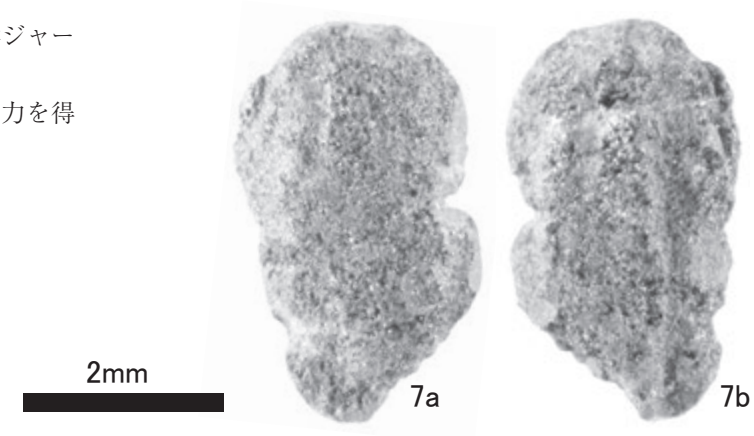
【引用文献】

石川茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志，2000，日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642p.

吉崎昌一，1992，古代雑穀の検出，月刊考古学ジャーナル，№355，2 － 14.

※　本分析は，パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。



イネ胚乳（弥 SI11 西ベルト床着①層）

第 364 図　種実実体

第 35 表　種実同定結果

試料名	出土位置	重量	同定結果					枝番	計測値(mm)						備考
			分類群	部位	状態		個数		高さ		幅		厚さ		
1	弥生竪穴住居跡8号 床面北西部	3.1kg	－	－	－	－	－	－	－		－		－		種実確認されず,炭化材(最大2mm),植物片,砂礫,土器片(径2cm)
2	弥生竪穴住居跡11号 西ベルト 床着 ①層	12.6kg	イネ	胚乳	完形	炭化	1	－	4.2		2.4		1.7		イネ:状態不良,炭化材(最大4mm),菌核,砂礫
3	弥生竪穴住居跡17号 SK1 ②層	1.57kg	イネ科	果実	完形	－	1	－	2.7		0.6		0.4		種実:混入の可能性,炭化材(最大5mm),砂礫
			カヤツリグサ属	果実	完形	－	1	－	1.2		0.5		0.6		
			エノキグサ	種子	破片	－	1	－	1.7	+	0.8	+	－		
4	弥生竪穴住居跡17号 SK1 ⑥層	2.17kg	－	－	－	－	－	－	－		－		－		種実確認されず,炭化材(最大8mm),植物片,砂礫(軽石類多い)

第５節　植物珪酸体分析

株式会社　古環境研究所

１　はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO2）が蓄積したもので，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

永吉天神段遺跡の発掘調査では，弥生時代の住居跡が多数検出され，竪穴住居跡 26 号の床面では大型の石包丁が出土している。ここでは，当時の周辺の植生や環境および農耕に関する情報を得る目的で，植物珪酸体分析を行った。

２　試料

分析試料は，弥生住居跡 22 号・26 号・27 号・28 号の床面や中央土坑などから採取された 11 点，Ｆ － 44 地点の土層断面から採取された８点および竪穴住居跡 26 号から出土した大型石包丁の計 20 点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

３　分析方法

⑴　土壌試料

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて，次の手順で行った。

１）試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）

２）試料約１ｇに対し，直径約 40 μｍのガラスビーズを約 0.02g 添加（0.1mg の精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散

５）沈底法による 20 μｍ以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は，400 倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算計数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重）をかけて，単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。これにより，各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。タケ亜科については，植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

⑵　大型石包丁

１）石包丁に付着した土壌を採取（別途分析）

２）石包丁を水洗洗浄

３）実体顕微鏡を用いて刃部全面について観察

４）超音波水中照射（300W・42KHz）により刃部を洗浄

5）残渣について土壌試料と同様の処理を行ってプレパラート作成
6）検鏡（定性分析）

4　分析結果

⑴　分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を第36表および第365・366図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ，ヨシ属，キビ族型，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ族A（チガヤ属など），ウシクサ族B（大型）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ節），ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），チマキザサ節型(ササ属チマキササ節･チシマザサ節など)，ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサなど)，マダケ属型(マダケ属，ホウライチク属)，未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），その他

⑵　植物珪酸体の検出状況

1）F－44地点（土層断面）

下位のⅤａ層（試料10）では，ススキ属型，ウシクサ族Aが比較的多く検出され，キビ族型，ウシクサ族B，メダケ節型，ネザサ節型，チマキザサ節型，ミヤコザサ節型なども認められた。また，樹木起源のクスノキ科，樹木（その他）なども検出された。K-Ah混のⅣａ層（試料８・９）では，イネ科は各分類群とも大幅に減少しているが，樹木起源のクスノキ科，樹木（その他）は大幅に増加し，ブナ科（シイ属）も出現している。Ik混層（試料７）ではススキ属型，ウシクサ族Aが増加し，Ⅲｂ層（試料４・５）ではメダケ節型，ネサザ節型も増加している。なお，Ⅲｂ層上部（試料４）では樹木起源のクスノキ科や樹木（その他）が減少している。Ⅲａ層（試料３）からⅡｂ層（試料１）にかけては，メダケ節型，ネザサ節型が増加し，イネ，マダケ属型が出現している。イネの密度は，Ⅲａ層（試料３）では1,400個/ｇと比較的低い値であるが，Ⅱｂ層（試料１）では3,500個/ｇと比較的高い値であり，稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/g（状況により3,000個/gとする場合もある）に近い値である。なお，畑稲作（陸稲栽培）の場合は，連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休閑期間をおく必要があるため，イネの密度は水田跡と比較してかなり低くなり，1,000～2,000個/g程度である場合が多い（杉山，2000）。おもな分類群の推定生産量によると，おおむねススキ属型が優勢であり，Ⅲａ層やⅡｂ層ではメダケ節型やネザサ節型も多くなっている。

2）弥生時代竪穴住居跡28号

中央土坑（試料２）では，ススキ属型，ウシクサ族A，メダケ節型，ネザサ節型が多く検出され，イネ，キビ族型，ウシクサ族B，チマキザサ節型なども認められた。また，樹木起源のブナ科（シイ属），クスノキ科なども検出された。土坑外（試料４）では，試料２と比較してススキ属型，メダケ節型，ネザサ節型が少なく，クスノキ科，樹木（その他）が多くなっている。イネの密度は，試料２では700個/g，試料４では600個/gといずれも低い値である。おもな分類群の推定生産量によると，試料２ではススキ属型，メダケ節型，ネザサ節型が優勢になっている。

3）弥生時代竪穴住居跡26号

住居跡南西部の石包丁下（試料１）と石包丁横（試料２），南部の床面（試料４），中央土坑の埋土（試料７～９）では，ススキ属型，ウシクサ族A，メダケ節型，ネザサ節型が多く検出され，キビ族型，ウシクサ族B，チマキザサ節型なども認められた。また，樹木起源のクスノキ科なども検出された。植物珪酸体組成や密度は，各採取箇所でとくに大きな差異は認められなかった。おもな分類群の推定生産量によるとススキ属型，メダケ節型，ネザサ節型が優勢となっている。

4）弥生時代竪穴住居跡27号

住居跡中央部の焼土（試料10）では，ススキ属型，ウシクサ族A，メダケ節型，ネザサ節型が多く検出され，キビ族型，ウシクサ族B，チマキザサ節型なども認められた。また，樹木起源のブナ科（シイ属），クスノキ科なども検出された。土坑外（試料５）では，試料２と比較してススキ属型，メダケ節型，ネザサ節型が少なく，樹木（その他）が多くなっている。おもな分類群の推定生産量によると，試料２ではススキ属型，メダケ節型，ネザサ節型が優勢となっている。

5）弥生時代竪穴住居跡22号

中央土坑（試料２）では，ススキ属型，ウシクサ族A，メダケ節型，ネザサ節型が多く検出され，キビ族型，ウシクサ族B，チマキザサ節型なども認められた。また，樹木起源のブナ科（シイ属），クスノキ科なども検出された。土坑外（試料５）では，試料２と比較してススキ属型，メダケ節型，ネザサ節型が少なく，樹木（その他）が多くなっている。おもな分類群の推定生産量によると，試料２ではススキ属型，メダケ節型，ネザサ節型が優勢となっている。

5　考察

⑴　F-44 地点（土層断面）

鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約 7,300 年前）直下のⅤa 層の堆積当時は，ススキ属やウシクサ族（チガヤ属など）を主体として，キビ族，メダケ属（メダケ節やネザサ節）なども生息する日当たりの良い草原的な環境であったと考えられ，遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木（照葉樹）が分布していたと推定される。

その後，鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約 7,300 年前）の堆積によって，当時の植生は一時的に大きな影響を受けたと考えられるが，K-Ah 混のⅣa 層の時期にはクスノキ科をはじめシイ属なども生育する森林植生（照葉樹林）が分布拡大したと推定される。鬼界アカホヤ噴火に伴う幸屋火砕流が及ばなかった鹿児島県中部以北では，鬼界アカホヤ火山灰の直上で照葉樹林が分布拡大する傾向が認められるが（杉山，2002），このことの原因として，テフラ降灰が生態系の秩序を撹乱することによって生態的順位の交代が誘発され（辻，1993），結果的に照葉樹林の分布拡大が促進された可能性が考えられる。また，照葉樹林の分布拡大には，年平均気温が現在よりも約 2℃前後高かったとされる当時の温暖湿潤な気候環境も影響したと考えられる。

池田湖テフラ（IK，約 6,400 年前）混のⅢb 層では，ススキ属やウシクサ族（チガヤ属など）を主体としてキビ族，メダケ属（メダケ節やネザサ節）なども生育する草原植生に移行したと考えられ，同層上部ではクスノキ科などの照葉樹林は減少したと推定される。また，Ⅲa 層ではメダケ属（メダケ節やネザサ節）が増加したと考えられる。これらのイネ科植物は日当たりの悪い林床では生育が困難であり，ススキ属やチガヤ属の草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れ（焼き払い）が必要である（堀田，1991，近藤，1995）。このことから，当時は火入れなど人間による植生干渉が行われていた可能性が考えられる。また，このような植生環境下で土壌中に多量の有機物が供給され，炭素含量の高い黒色土壌（黒ボク土）が形成されたと推定される（杉山ほか，2002）。

Ⅲa 層からⅡb 層（弥生時代）にかけては，イネが検出されることから，調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。遺跡の立地や周辺の植生から，ここで行われていた稲作は畑作の系統（陸稲）であったと推定される。なお，調査地点は集落域に近接していることから，何らかの形で利用された稲藁に由来する可能性も考えられる。稲藁の利用としては，建物の屋根材や壁材，敷物，履物，俵，縄など多様な用途が想定される。

また，Ⅲa 層からⅡb 層にかけては，周辺でマダケ属が見られるようになったと考えられる。タケ亜科のうちマダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く，建築材や生活用具，食用などとしての利用価値が高い。

⑵　弥生時代竪穴住居跡 22 号・26 号・27 号・28 号

弥生時代の住居跡における分析結果は，F-44 地点（土層断面）のⅢa 層やⅡb 層（弥生時代）の分析結果と類似しており，特に大きな特徴は認められなかった。当時の調査区周辺は，ススキ属やウシクサ族（チガヤ属など），メダケ属（メダケ節やネザサ節）を主体としてキビ族なども生育する日当たりの良い草原的な環境であったと考えられ，遺跡周辺にはクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。また，当時は周辺で稲作が行われていたと考えられ，そこから何らかの形で一部の住居内にイネの植物珪酸体が混入した（持ち込まれた）と推定される。稲藁の利用としては，建物の屋根材や壁材，敷物，履物，俵，縄など多様な用途が想定される。

⑶　竪穴住居跡 26 号出土の大型石包丁（第 147 図 904）

石包丁の刃部の実体顕微鏡観察では，石包丁の長軸に直行もしくは斜行する微細な傷跡（研磨痕や使用痕など）が認められた。このような傷跡には，対象となった植物に由来する植物珪酸体が捕らえられている（挟まっている）場合があることから，刃部全面について傷跡内の観察を行った。その結果，傷跡内に捕らえられていると明瞭に認識できる植物珪酸体は観察されなかった。なお，傷跡内に植物珪酸体が捕らえられている場合でも，露出部分が欠損したり摩擦で削れたりして植物珪酸体の確認に至らない可能性も考えられる。そこで，超音波水中照射により刃部を洗浄し，傷跡内などに捕らえられているとみられる植物珪酸体の抽出を試みた。また，比較資料として石包丁に付着した土壌についても検討を行った。

定性分析の結果，刃部の超音波洗浄後の残渣では，ススキ属型，ウシクサ族A，メダケ節型，ネザサ節型，キビ族型，および樹木クスノキ科などが検出された。このような植物珪酸体組成は，石包丁に付着した土壌および石包丁の直下や住居跡床面の分析結果とおおむね同様であり，刃部のみに特徴的な傾向は認められなかった。なお，刃部の超音波洗浄後の残渣で検出されたススキ属型の中には，一部が欠損もしくは削られたようにみえるものが認められた（第 368 図）。このような植物珪酸体は，石包丁に付着した土壌や住居跡の土壌などでは認められないことから，石包丁の刃部のみに特徴的に付着している可能性が考えられる。

ススキの刈り取りについては，茎部を石器で切断するのは困難なことから，ススキの根元の脇に丸太を添え，石器で叩き切る方法が想定されている（藤森，2012）。このような作業過程で，植物珪酸体の一部が欠損したり，石包丁の傷跡（研磨痕や使用痕など）に捕らえられた植物珪酸体の一部が削られた可能性が考えられる。今後，このような方法でススキの刈り取り実験を行い，今回の

ような植物珪酸体が石器に付着するかどうかを検証する必要があるが，大型石包丁の用途の一つとして，ススキの刈り取りに利用されていた可能性も想定される。

【引用文献】

近藤錬三（1995）　日本における植物珪酸体研究とその応用．近堂祐弘教授退官記念論文集刊行会：p. 31–56.

杉山真二・藤原宏志（1986）　機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p. 69–84.

杉山真二（1999）　植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究，38(2)，p. 109–123.

杉山真二（2000）　植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p. 189–213.

杉山真二（2001）　テフラと植物珪酸体分析．月刊地球，23，p. 645–650.

杉山真二・渡邊眞紀子・山元希里（2002）　最終氷期以降の九州南部における黒ボク土発達史．第四紀研究．41(5)，p. 361–373.

杉山真二（2010）　更新世の植生と環境．旧石器時代．講座日本の考古学第１巻．青木書店，p. 156–177.

藤原宏志（1976）　プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，９，p. 15–29.

藤原宏志・杉山真二（1984）　プラント・オパール分析法の基礎研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p. 73–85.

藤森照信（2012）　茅，その一．第４回建築の素．小雑誌「熱風」2012 年 10 号．スタジオジブリ，p. 91–95.

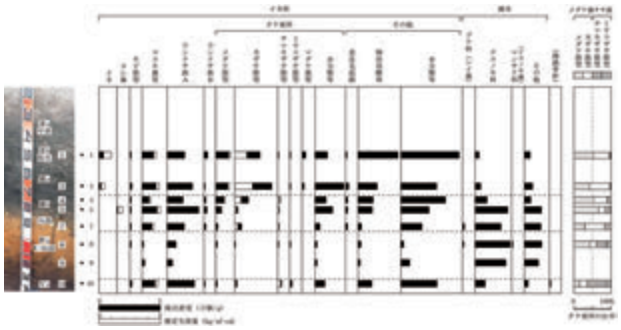
堀田満（1991）　日本列島の植物．カラー自然ガイドⅡ，保育社：p. 68–69．1

町田洋・新井房夫（2003）　新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－．東京大学出版会，p. 336.

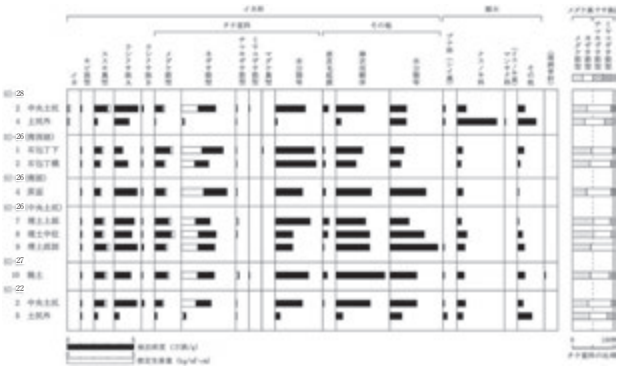
第 36 表　永吉天神段遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

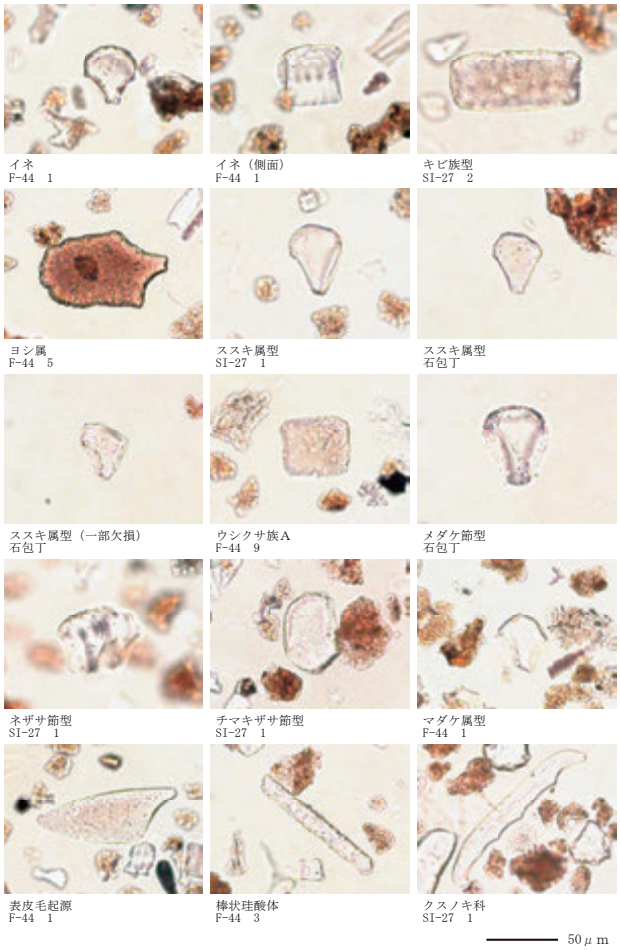
	地点・試料	SI-26南西部		SI-26南	SI-26中央土坑			SI-27中央	SI-28中央土坑		SI-22中央土坑		F-44土層断面							
分類群	学名	1	2	4	7	8	9	10	2	4	2	5	1	3	4	5	7	8	9	10
イネ科	Gramineae																			
イネ	*Oryza sativa*								7	6			35	14						
ヨシ属	*Phragmites*															7				
キビ族型	Paniceae type	6	6	6	6	7	7	7	7		7	7	7	14	7	7	7	7		13
ススキ属型	*Miscanthus* type	55	39	43	65	58	94	78	99	19	74	21	92	113	54	121	78	7	14	104
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	61	99	172	149	130	173	124	178	111	168	35	142	204	128	256	137	69	41	221
ウシクサ族B	Andropogoneae B type	6	6	6	6	7	14	7	13		20		28	7	13	21	13			7
タケ亜科	Bambusoideae																			
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	122	72	80	110	130	86	98	66	6	61	14	106	99	67	43	13	7		7
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	322	210	350	221	267	259	254	263	25	229	35	213	310	115	28	59	7		20
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	6	11	12	19	14		26	13	6	7	7	7		20	14	13	7		33
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi							7	7				7	7				7		20
マダケ属型	*Phyllostachys*	6											28	14						
未分類等	Others	294	304	203	260	130	129	248	224	12	202	35	99	232	88	142	39	14	14	78
その他のイネ科	Others																			
表皮毛起源	Husk hair origin	11	17	18	45	36	7	33	40		7		7	21	13	14	13			
棒状珪酸体	Rod-shaped	200	149	264	221	252	252	365	211	37	256	49	326	155	121	114	26	21	14	111
未分類等	Others	105	83	270	143	259	360	202	125	124	202	90	475	289	364	228	170	21	69	293
樹木起源	Arboreal																			
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*						7	7	13	12	7	28					13	7		
クスノキ科	Lauraceae	39	28	43	32	72	58	52	66	297	61	42	28	42	94	263	209	282	248	78
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*									6								7		
その他	Others	44	17	6	6	36	50	52	53	136	40	104	43	63	47	135	131	138	110	26
(海綿骨針)	Sponge spicules							7												7
植物珪酸体総数	Total	1276	1038	1473	1286	1398	1496	1558	1383	798	1340	464	1645	1583	1133	1395	922	599	510	1008
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出																				
イネ	*Oryza sativa*								0.19	0.18			1.04	0.41						
ヨシ属	*Phragmites*															0.45				
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.69	0.48	0.53	0.81	0.71	1.16	0.97	1.22	0.23	0.92	0.26	1.14	1.40	0.67	1.50	0.97	0.09	0.17	1.29
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	1.42	0.83	0.93	1.28	1.50	1.00	1.13	0.76	0.07	0.70	0.16	1.23	1.14	0.78	0.50	0.15	0.08		0.08
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	1.54	1.01	1.68	1.06	1.28	1.24	1.22	1.26	0.12	1.10	0.17	1.02	1.49	0.55	0.14	0.28	0.03		0.09
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.04	0.08	0.09	0.15	0.11		0.20	0.10	0.05	0.05	0.05	0.05		0.15	0.11	0.10	0.05		0.24
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi							0.02	0.02				0.02	0.02				0.02		0.06
タケ亜科の比率（%）																				
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	47	43	34	52	52	45	44	36	30	38	42	53	43	53	67	29	43		16
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	51	52	62	43	44	55	47	59	50	59	44	44	56	37	18	53	18		20
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	1	4	3	6	4		8	5	20	3	14	2		10	14	18	28		52
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi							1	1				1	1				11		12
メダケ率	Medake ratio	99	96	97	94	96	100	92	94	80	97	86	97	99	90	86	82	61		36



第 365 図　F -44 地点における植物珪酸体分析結果



第 366 図　SI-22・SI-26・SI-27・SI-28 における植物珪酸体分析結果



第 367 図　永吉天神段遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）



第 368 図　石包丁（拡大写真）

第６節　樹種同定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・安昭　炫・佐藤正教
廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani
・小林克也

１　はじめに

放射性年代測定を行った一部の試料について，樹種同定を行った。

２　試料と方法（樹種同定）

焼失住居跡である弥生時代竪穴住居跡 45 号から出土した炭化材５点について，樹種同定を行った。試料はい

ずれも劣化が激しく，形状の確認はできなかった。

炭化材の樹種同定では，まず試料を乾燥させ，材の横断面（木口），接線断面（板目），放射断面（柾目）について，カミソリと手で割断面を作製し，整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し，走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製JSM-5900LV）にて検鏡及び写真撮影を行った。

3　結果

樹種同定の結果，広葉樹のスダジイとクスノキ科，ツバキ属，ケンポナシ属の４分類群がみられた。ツバキ属が２点で，スダジイとクスノキ科，ケンポナシ属は各１点であった。同定の結果を第 37 表に示す。

次に，同定された材の特徴を記載し，第 369 図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

⑴　スダジイ　Castanopsis sieboldii（Makino）Hatus.ex T. Yamaz. et Mashiba　ブナ科　第 369 図 1a-1c（No. 1）

年輪のはじめに大型の道管が断続的に配列し，晩材部では徐々に径を減じた道管が，火炎状に配列する半環孔材である。軸方向柔組織は歪な線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で，やや耐朽性があるが，切削加工は困難でない。

⑵　クスノキ科　Lauraceae　第 369 図　2a-2c（No. 5）

中型の道管が単独ないし２～３個複合し，やや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端１列が直立する異性で，幅１～２列となる。

クスノキ科にはニッケイ属やタブノキ属，クロモジ属などがあり，暖帯を中心に分布する，主に常緑性の高木または低木である。

⑶　ツバキ属　Camellia　ツバキ科　第 369 図　3a-3c（No.2），4a-4c（No.3）

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は 10～20 段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端１～３列が直立する異性で，幅１～４列となる。

ツバキ属にはヤブツバキやサザンカなどがあり，ヤブツバキは本州，四国，九州の温帯に，サザンカは山口県以南の温帯南部から亜熱帯に分布する常緑小高木の広葉樹である。材は重硬で切削加工は困難である。

⑷　ケンポナシ属　Hovenia　クロウメモドキ科　第 369 図　5a-5c（No.4）

年輪のはじめにやや小型の道管が配列し，晩材部では径を減じた道管が単独ないし２～３個複合して配列する半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で，幅１～４列となる。

ケンポナシ属にはケンポナシとケケンポナシがあり，ケンポナシは北海道から九州の温帯から暖帯に，ケケンポナシは栃木・静岡・石川県以西の暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。材の性質は類似し，重さや硬さは中庸で切削加工は容易である。

4　考察

弥生時代竪穴住居跡 45 号ではツバキ属が２点，スダジイとケンポナシ属，クスノキ科が各１点みられた。SI45 は焼失住居跡と考えられており，出土した炭化材はいずれも建築材と考えられている。ツバキ属は堅硬な樹種で，スダジイとクスノキ科は耐朽性が高い（伊東ほか，2011）。また，いずれの樹種も永吉天神段遺跡周辺で生育可能な樹種であり（伊東ほか，2011），遺跡周辺の森林に生育していた樹種が利用されていた可能性が考えられる。

九州地方の弥生時代中期の建築材では，スダジイを含めたシイ属や，クスノキ科の一部であるクスノキが多くみられている（山口，2012）。また，霧島市の上野原遺跡で出土した弥生時代中期の炭化した建築材は，いずれもクスノキ科であった（伊東・山田，2012）。分析事例が少ないものの，周辺遺跡の用材傾向と概ね一致すると考えられる。

【引用文献】

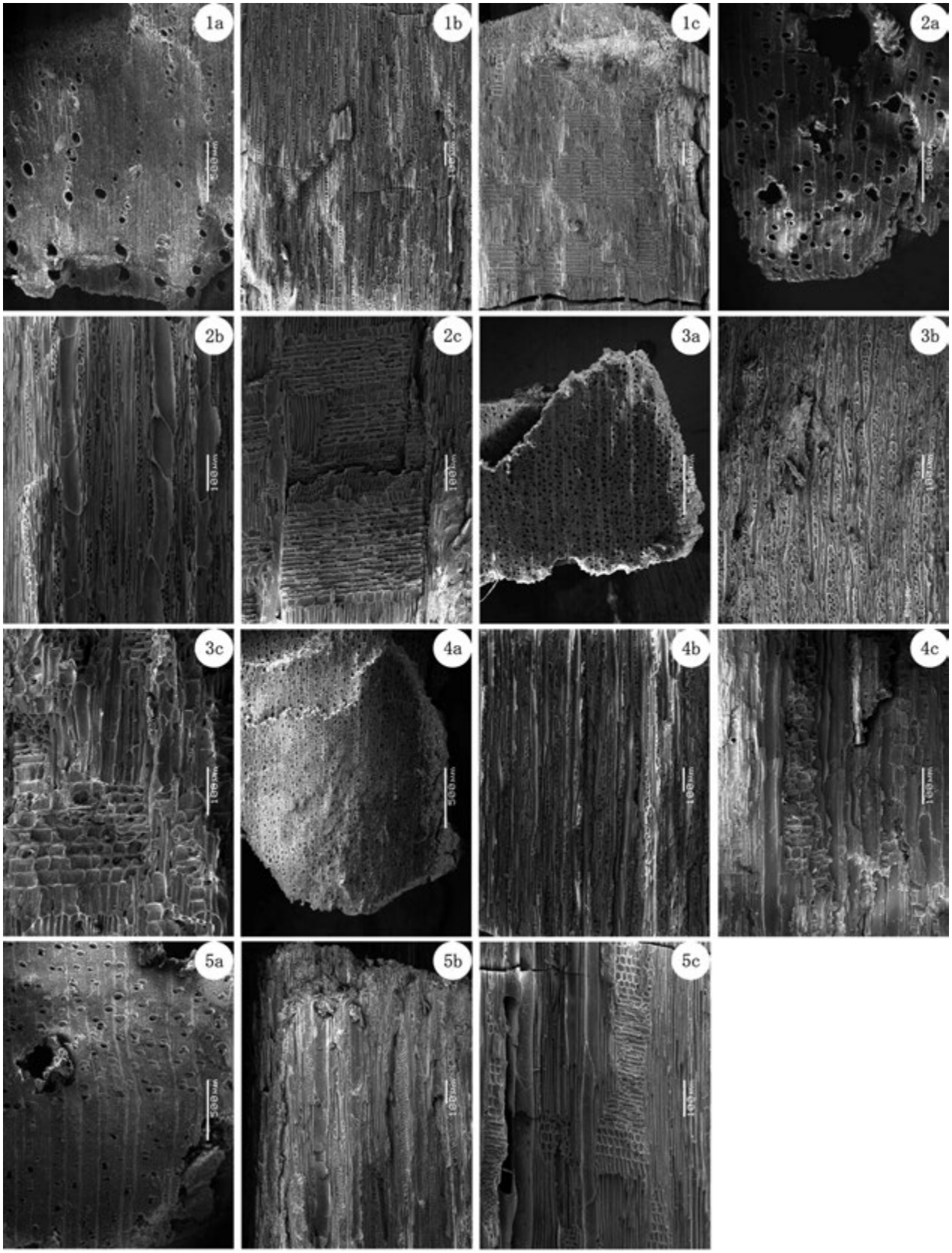
伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社.

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学．449p，海青社.

山口譲治（2012）九州・沖縄（１）－古代以前－．伊東隆夫・山田昌久編「木の考古学」: 300 － 311，海青社.

第 37 表　永吉天神段遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料番号	遺物番号	出土遺構	樹種	備考	年代測定番号
1	炭化木No. 1	SI45	スダジイ	焼失住居跡出土	
2	炭化木No. 5	SI45	ツバキ属	焼失住居跡出土	
3	炭化木No. 10	SI45	ツバキ属	焼失住居跡出土	PLD-27789
4	炭化木No. 16	SI45	ケンポナシ属	焼失住居跡出土	PLD-27790
5	炭化木No. 28	SI45	クスノキ科	焼失住居跡出土	



1a-1c. スダジイ(No. 1)、2a-2c. クスノキ科(No. 5)、3a-3c. ツバキ属(No. 2)、4a-4c. ツバキ属(No. 3)、5a-5c. ケンポナシ属(No. 4)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第 369 図　永吉天神段遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

第７節　土器圧痕調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　試料

試料は，Ⅳ層より出土した縄文時代早期の土器（前平式，石坂式，桑ノ丸式など）270 点，縄文時代晩期の土器 49 点，Ⅱｂ層～Ⅳｂ層より出土した弥生時代早期の突帯文土器 157 点，竪穴住居跡より出土した弥生時代中期の土器（山ノ口Ⅰ式）712 点の計 1,188 点である。

縄文時代早期と弥生時代早期の土器は報告書掲載済であり，図番号毎に収納ケースにまとめられ，個別に袋に入った状態である。石膏で隙間を充填した土器や復元された土器も多数含まれている。第 39 表で示す重量および考察での圧痕検出率は，上記の石膏や試料袋，試料札，緩衝材等を含む点を留意されたい。

２　分析方法

⑴　圧痕検出作業

圧痕検出作業は，平成 29 年 12 月に当社社員２名で７日間実施し，調査センター職員の指導を受けた。計測記録は，調査センターの協力を得た。

１）重量記録

土器の計量は，１点毎と複数点をパンケース毎の２方法で実施する。パンケース毎計量は，パンケースの重量を差し引いて記録する。報告書未掲載の土器は番号が付されており，基本的には１点毎計量する。１点毎に計量した土器は，表の個数の欄に１と記している。報告書記載済土器は，報告書の図番号と遺物番号を記す。

２）圧痕概査

ルーペを用いて，土器の表裏および断面の全面を観察し，圧痕を探す。圧痕は，穴の形状に着目し，内部で広がる（袋状，フラスコ状を呈す）凹みは種実圧痕の可能性が高いため，シール等を貼り目印とする。

３）圧痕精査・クリーニング

概査で検出した圧痕を双眼実体顕微鏡下で確認する。圧痕を充填する砂泥は，水と面相筆，ブロワーを用いて，土器を壊さないように慎重に除去する。圧痕が確認されなかった土器や種実以外の圧痕と判断した土器はパンケースに戻す。種実等の圧痕の可能性がある土器は，レプリカ採取対象とする。

⑵　圧痕レプリカ採取・電子顕微鏡観察

圧痕検出作業で確認された 28 点 32 か所を対象に実施する。

１）写真記録

土器概観を写真記録後，双眼実体顕微鏡およびマイクロスコープ（株式会社キーエンス製；VHX － 1000）を用いて，圧痕部の観察・写真撮影を実施する。

２）レプリカ採取

レプリカ採取は，丑野・田川（1991）の方法に従い，離型剤は水を使用する。土器を水に十分に含浸させた後，ブロワーを用いて圧痕内に充填した余分な水分を除去する。印象材は，シリコン樹脂（株式会社ニッシン製；JM シリコンレギュラータイプまたはインジェクションタイプ）を使用し，圧痕部に注入する。硬化後の印象材を，土器を破壊しないように細心の注意を払いながら取り出す。袋状圧痕の場合は，特に注意する。

胎土が剥落する等，土器破損の懸念が生じた場合や植物の残存が確認された場合は，調査センターと協議の上，作業を中止する。また，レプリカ採取後の圧痕周辺にシミ（シリコン樹脂の油分）が残る場合は，クロロホルム：メタノール（２：１））溶液を用いて除去する。

３）電子顕微鏡観察・同定

圧痕シリコンレプリカを双眼実体顕微鏡やマイクロスコープで観察する。表面のゴミやホコリを可能な限り除去し，電子顕微鏡観察用に整形する。シリコンレプリカは，イオンスパッターを使用した金蒸着，またはカーボンコーターを使用したカーボン蒸着処理を施す。蒸着後のレプリカを走査型電子顕微鏡（SEM）（日本電子株式会社製；JCM5700）で観察・写真撮影，同定を実施する。

３　結果

⑴　種実圧痕検出状況

圧痕検出作業結果を第 39 表，圧痕レプリカ採取・電子顕微鏡観察・同定結果を第 38 表，圧痕写真を第 370 図～第 373 図に示す。

圧痕検出作業の結果，土器 1,188 点 245.12kg（石膏等含む）より ,28 点 32 か所（第 38 表１～27）9.16kgの圧痕レプリカ採取候補が得られた。

レプリカ採取・観察の結果，11 点（第 38 表７・９・13・14・15・18・19・24・25・27）7.49kgに種実圧痕の可能性が確認され，栽培種のイネ，アワ，落葉広葉樹のカラスザンショウ，イヌザンショウに同定された。また，６点（第 38 表５・６・８・17・23・26）0.50kgに種実圧痕の可能性が確認されたが，確実な同定には至らなかった。

種実の可能性が低い圧痕は，１点が昆虫類の幼虫（第 38 表７），１点（第 38 表２）が有機物か？，４点（第 38 表４・10・11・16）が岩片か？，５点６か所（第 38 表１・３・12・21・22）が不明と判断された。

以下，種実圧痕検出状況を時期別に述べる。

○縄文時代早期

土器 270 点 33.21kgより，レプリカ採取候補が２点 0.25kg得られたが，レプリカ採取・観察の結果，確実な種実圧痕は確認されなかった。なお，第 38 表１は不明（第 370 図），第 38 表２は有機物か？（第 370 図）と判断された。

○縄文時代晩期

土器 49 点 2.37kgより，レプリカ採取候補は確認されなかった。

○弥生時代早期

土器 157 点 47.28kgより，レプリカ採取候補が 10 点 12 か所 0.70kg得られた。レプリカ採取・観察の結果，2 点（第 38 表７・９）に種実圧痕が確認され，カラスザンショウの種子（第 38 表７；第 371 図(7)）とイヌザンショウの種子（第 38 表９；第 371 図（10））に同定された。

また，３点（第 38 表５・６・８）0.16kgに種実圧痕の可能性が確認され，カラスザンショウの種子（第 38 表８；第 371 図（9））やサンショウの種子（第 38 表６；第 370 図（6）），モチノキ属の核（第 38 表５；第 370 図（5））に似るが，確実な同定に至らなかった。

種実の可能性が低い圧痕は，１点（第 38 表７）が昆虫類の幼虫（第 371 図（7）（8）），３点（第 38 表４・10・11）が岩片か？（第 370 図（4），第 371 図（11）（12）），２点３か所（第 38 表３・12）が不明（第 370 図（3），第 371 図（13））と判断された。昆虫圧痕は，上記カラスザンショウ種子圧痕に近接して確認され（第 371 図（7）－3），６節と頭部が確認された。昆虫圧痕レプリカは，長さが 3.5㎜，幅 1.5㎜，厚さ 1.3㎜を測る。未同定のため，今後の課題である。

○弥生時代中期

土器 712 点 162.26kgより，レプリカ採取候補が 15 点 18 か所 8.20kg得られた。レプリカ採取・観察の結果，８点 11 か所 7.42kgに種実圧痕が確認され，６点７か所（第 38 表 14・15・18・19・20・25）が栽培種のイネの穎（籾）（第 371 図（15），第 372 図（16）（17）（20）（21）（22），第 373 図（27）），１点（第 38 表 13）が胚乳（米）（第 371 図（14）），２点（第 38 表 24・27）がアワの穎（第 373 図（26）（29）），１点（第 38 表 13）が栽培の可能性があるアズキ亜属の種子（図版 41）に同定された。　また，４点（第 38 表 13・17・23・26）1.02kgに種実圧痕の可能性が確認され，ダイズ属の種子（第 38 表 13；第 371 図（14）－5）やイネの種実（穎か胚乳の判別不可）（第 38 表 17・23・26；第 372 図（19），第 373 図（25）（28））に似るが，確実な同定には至らなかった。

なお，第 38 表 13 は土器底部の外面よりイネ胚乳圧痕とアズキ亜属種子圧痕，内面より種実（ダイズ属か？）圧痕の可能性のある計３か所の圧痕が確認され（第 371 図（14））特筆される。

種実の可能性が低い圧痕は，１点（第 38 表 16）が岩片か？（第 372 図（18）），２点（第 38 表 21・22）が不明（第 372 図（23）（24））と判断された。

⑵　種実圧痕の記載

本分析で同定された種実圧痕各分類群の形態的特徴等を記す。

○カラスザンショウ（Zanthoxylum ailanthoides Sieb. et Zucc.）ミカン科サンショウ属

種子圧痕は土器底部断面に確認され，圧痕レプリカは長さ 3.3㎜，幅 2.8㎜，厚さ 2.4㎜を測る。腹面正中線上の広線形の臍が確認されないが，側面観の非対称広倒卵体の形状と種皮表面の粗く深い網目模様が確認される点を同定根拠とした（第 371 図（7））。

○イヌザンショウ（Zannthoxylum schinifolium Sieb. et Zucc.）ミカン科サンショウ属

種子圧痕は土器底部外～断面に確認され，圧痕レプリカは残存長 1.7㎜，残存幅 2.5㎜，残存厚 1.9㎜を測る。非対称広倒卵体の種子長の約 1/2 を欠損する状態である。

広線形の臍は確認されないが，種皮表面の網目模様がカラスザンショウよりも細かく浅く，サンショウよりも粗い点を同定根拠とした（第 371 図（10））。

○イネ（Oryza sativa L）イネ科イネ属

穎（籾）の圧痕レプリカは，長さ 6.1～7.8㎜，幅 2.5～3.9㎜，厚さ 0.6～2.6㎜を測る。第 38 表 14（第 371 図(15)），第 38 表 15 の２か所（第 372 図(16)(17)），第 38 表 18（第 372 図(20)），第 38 表 25（第 373 図(27)）は，特に状態が良好で，果皮表面の穎粒状突起の縦列が明瞭に残る。

一方，第 38 表 20 の土器底部に確認された圧痕は押しつぶされており，状態不良である（第 372 図（22））。

胚乳（米）の圧痕レプリカは，残存長 3.5㎜，幅 3.1㎜，厚さ 1.7㎜を測り，下半部を欠損する状態にあった。表面がやや平滑で，縦隆条が確認される点を同定根拠とした（第 371 図（14）－4。）

○アワ（Setaria italica（L）P. Beauv.）イネ科エノコログサ属

穎（有ふ果）の圧痕レプリカは，長さ 1.6～1.7㎜，幅 1.4～1.5㎜，厚さ 1.3㎜の半広倒卵状楕円形を呈し，ヒエよりも小型で丸い。腹面（内穎）はやや平らで，背面（外穎）は丸みがあり，腹面長辺の両端をわずかに包む。果皮表面にはアワ特有の微細な乳頭突起の横列（Nasu.et.al.,2007）が確認され，特に第 38 表 27 で顕著である（第 373 図（29））。

○アズキ亜属（Vigna subgen. Ceratotropics（Piper）Verdc.）マメ科ササゲ属

種子の圧痕レプリカは，残存長 3.2㎜，幅 3.4㎜，半分厚 2.0㎜を測る。直方体状楕円形の種子の２子葉の合わせ目から半割し，さらに縦半分に割れた端部（約１/４個体）とみなされる。臍や幼根，初生葉は確認されない。種皮表面は平滑で，半割面および腹面側がややくぼむ（第 371 図（14）－6）。

４　考察

永吉天神段遺跡の土器 1,188 点 245.12kg（石膏等含む）の圧痕調査の結果，縄文時代早期の土器（前平式，石坂式，桑ノ丸式など）270 点 33.21kgと縄文時代晩期の土器 49 点 2.37kgからは，確実な種実圧痕が確認されな

かった。植物利用に関しては今後の課題である。

弥生時代早期の突帯文土器 157 点 47.28kgからは，２点 0.07kgに種実圧痕が確認され，カラスザンショウの種子とイヌザンショウの種子に同定された。種実圧痕検出率は，数量が 1.27%，重量が 0.15%である。縄文時代早期や晩期と比べて，種実圧痕検出率が上昇する。

また，３点 0.16kgに種実圧痕の可能性が確認されたが，確実な同定には至らなかった。圧痕検出率は，数量が 1.91%，重量が 0.34%である。

落葉高木のカラスザンショウ，低木のイヌザンショウは，遺跡周辺の森林の林縁などの明るく開けた場所に生息していた点と，これらの種子が土器製作時に偶発的または意図的に混入した可能性が考えられる。第 38 表９の土器底部外～断面より種子圧痕が確認されたイヌザンショウは，薬用や油料としての利用の可能性がある。

特筆すべき事項として，第 38 表７の土器底部断面より種子圧痕が確認されたカラスザンショウは，さらに同断面の近接箇所より昆虫類の幼虫圧痕も確認された。真邉・小畑（2017）は，カラスザンショウの種実の遺跡出土・土器圧痕調査事例集成および成分分析により，貯蔵食物を保護する防駆虫剤としての利用の可能性を指摘している。今回のカラスザンショウ種子圧痕と昆虫圧痕の供伴は，カラスザンショウの防駆虫剤としての利用の可能性を支持する検出状況と言え，今後昆虫同定が望まれる。

弥生時代中期の土器（山ノ口Ⅰ式）712 点 162.26kgからは，８点 11 か所 7.42kgに種実圧痕が確認され，６点７か所が栽培種のイネの穎，１点が胚乳，２点がアワの穎に，１点が栽培の可能性があるアズキ亜属の種子に同定された。種実圧痕検出率は，数量（箇所を適用）が 1.54%，重量が 4.57%である。弥生時代早期よりも検出率は下がるが，栽培種主体となる点で大きな変化が見られる。

また，４点 1.02%に種実圧痕の可能性が確認されたが，確実な同定には至らなかった。圧痕検出率は，数量が 0.56%，重量が 0.63%である。

栽培種のイネ・アワや栽培の可能性があるアズキ亜属は，当時利用された植物質食料と示唆され，これらの穀粒や豆粒が土器製作時に偶発的または意図的に混入した可能性が考えられる。

特に，第 38 表 13 では土器底部の外面にイネ胚乳圧痕とアズキ亜属種子圧痕，内面に種実（ダイズ属か？）の圧痕の可能性のある計３か所の圧痕が確認され，土器製作時に複数種の穀粒や豆粒が存在したことが特筆される。

永吉天神段遺跡では，第１地点の土坑７号からイネの炭化果実（50 ± 30BP）とササゲ属の炭化種子が同定されている（株式会社古環境研究所，2016）。また，時代は新しいが，第２地点の中世竪穴建物１号からイネの炭化穎・胚乳（390 ± 20BP）とマメ科（アズキ類か？）の炭化種子が同定されている（鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター，2018）。

【引用文献】

株式会社古環境研究所，2016，遺構埋土の出土炭化物における放射性炭素年代測定と種実同定．永吉天神段遺跡第１地点－東九州自動車道（志布志 IC～鹿屋串良 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書８，鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター，108-110.

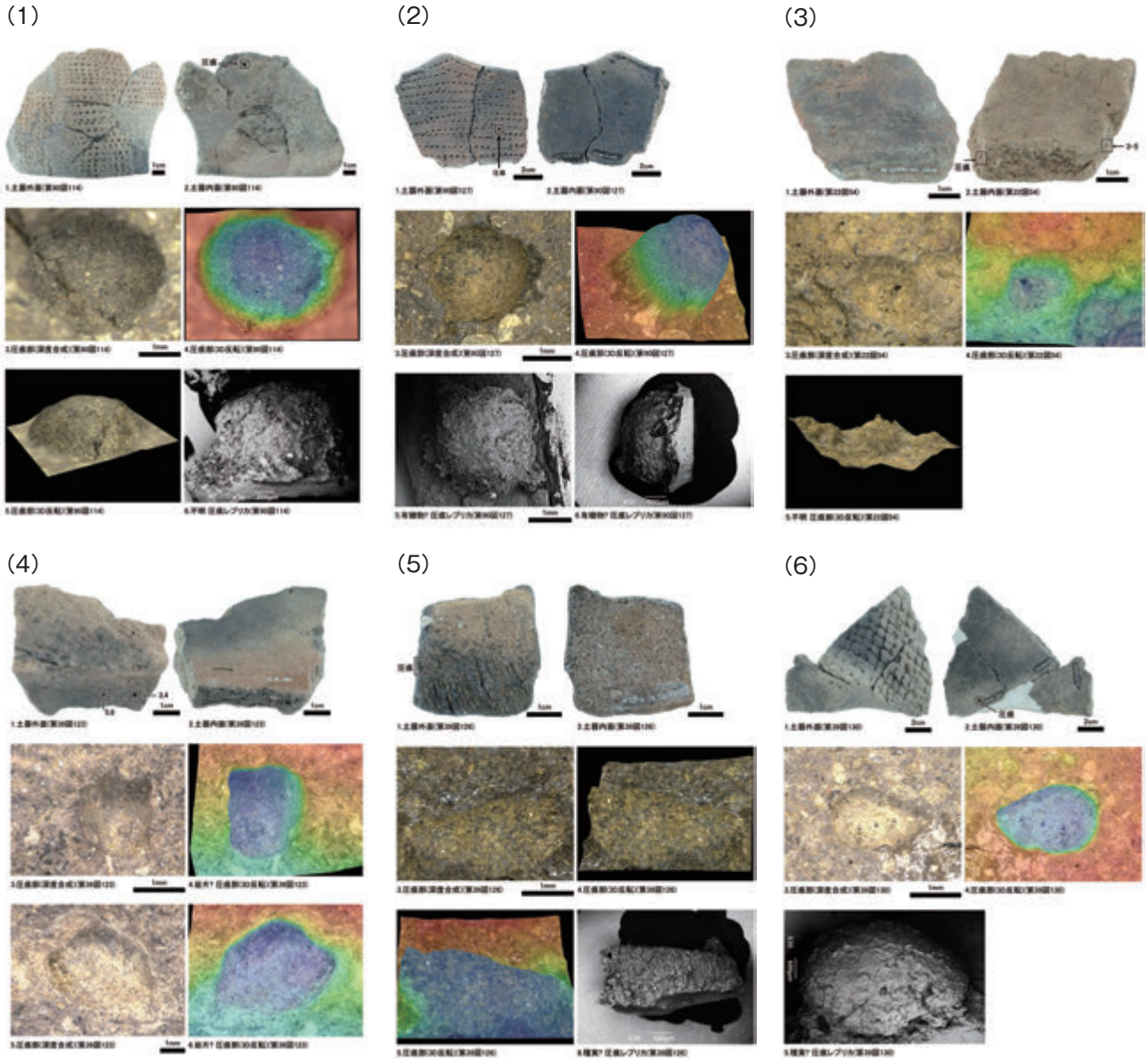
鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター，2018，永吉天神段遺跡３第２地点－２　古代・中世・近世編－東九州自動車道（志布志 IC～鹿屋串良 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 17，218

眞邉　彩・小畑弘己，2017，産状と成分からみたカラスザンショウ果実の利用法．植生史研究　第 26 巻第１号，27-40.

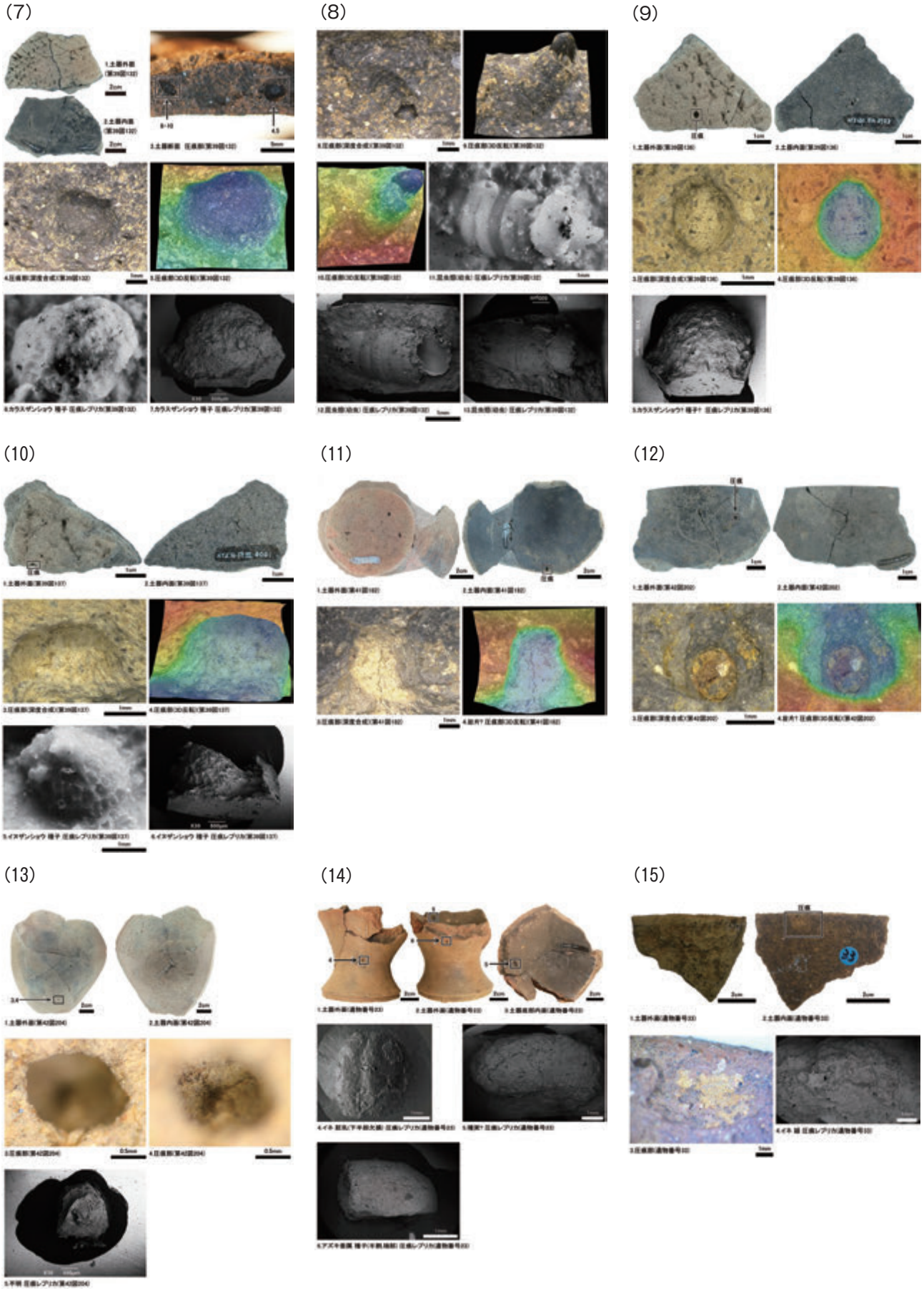
丑野　毅・田川裕美，1991，レプリカ法による土器圧痕の観察．考古学と自然科学，24，13-36.

第 38 表　土器圧痕同定結果

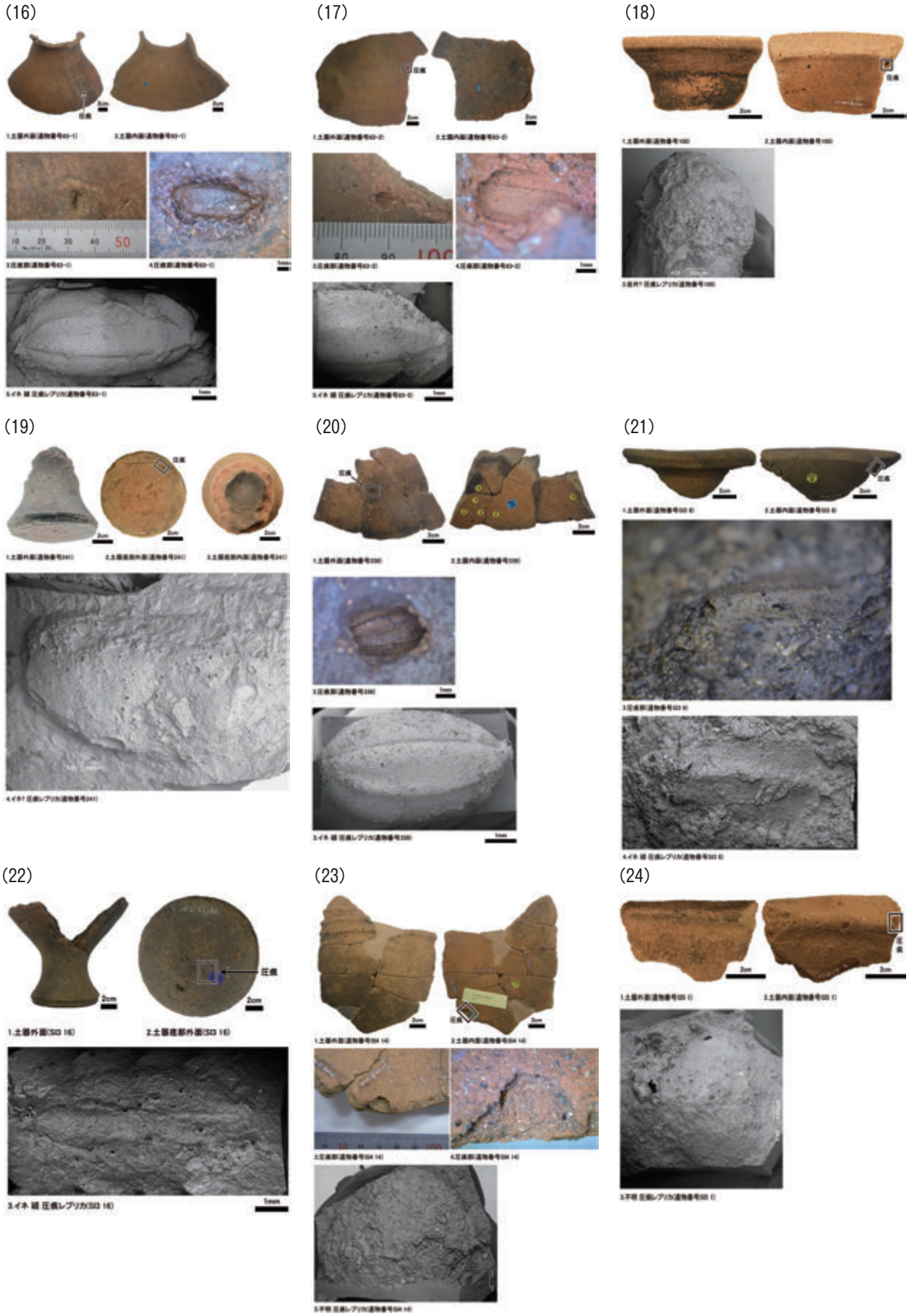
番号	時期	報告書 掲載番号	重量 (kg)	部位	枝番	検出面	分類群	部位	図版 番号	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考
1	縄文早期	埋調セ(8)第90図114	0.15	口縁～胴上	－	内面	不明		28	3.4	3.2	2.6	カラスザンショウ種子に似るが根拠なし,胎土剥落(レプリカ採取1回で中止)
2	縄文早期	埋調セ(8)第90図127	0.10	口縁	－	外面	有機物?		29	2.4	2.0	1.9	圧痕部黒色,有機物由来の可能性
3	弥生早期	埋調セ(8)第22図54	0.03	底部	1	断面(内面右)	不明		30	2.6	2.5	1.4	不定形,種実の可能性低いためSEM観察対象外
					2	断面(内面左)	不明		30	2.3	2.2	1.7	不定形,種実の可能性低いためSEM観察対象外
4	弥生早期	埋調セ(8)第39図123	0.03	口縁	－	外面	岩片?		31	2.4	1.4	2.3	2箇所とも不定形,鋭角・稜状,種実の可能性低いためSEM観察対象外
5	弥生早期	埋調セ(8)第39図126	0.01	胴部	－	外～断面	不明	種実?	32	3.2	1.3	1.7	正中線稜状,モチノキ属核に似るが根拠なし
6	弥生早期	埋調セ(8)第39図130	0.13	胴部	－	内面	不明	種実?	33	3.8	2.8	2.6	腹面臍位置がサンショウ種子に似るが網目模様不明瞭
7	弥生早期	埋調セ(8)第39図132	0.06	底部	1	断面	カラスザンショウ	種子	34	3.3	2.8	2.4	網目模様:粗く深い
					2	断面	昆虫類(幼虫)		34,35	3.5	1.5	1.3	6節+頭部で最大径,頭部先端中央尖る
8	弥生早期	埋調セ(8)第39図136	0.02	底部	－	外面	カラスザンショウ?	種子?	36	2.9	2.5	1.8	カラスザンショウ種子に似るが根拠なし
9	弥生早期	埋調セ(8)第39図137	0.01	底部	－	外～断面	イヌザンショウ	種子	37	1.7 +	2.5 +	1.9 +	種子長の約1/2欠損,カラスザンショウよりもやや細かく浅い網目模様
10	弥生早期	埋調セ(8)第41図182	0.10	胴～底	－	内～断面	岩片?		38	3.7	3.1	3.9	軽石等の可能性,種実の可能性低いためSEM観察対象外
11	弥生早期	埋調セ(8)第42図202	0.13	胴下部	－	外面	岩片?		39	2.3	－	－	種実の可能性低い,レプリカ採取せず
12	弥生早期	埋調セ(8)第42図204	0.17	胴～底	－	外面	不明		40	1.5 +	1.7 +	1.3 +	袋状,全長の約2/3欠損,表面不明瞭,種実の根拠なし
13	弥生中期	試料番号23	0.54	底部	1	外面	イネ	胚乳	41	3.5 +	3.1	1.7	下半部欠損,状態良好
					2	内面	不明	種実?	41	6.3	3.6	2.2	偏平な長楕円体で腹面方向に湾曲,ダイズ属種子に似るが根拠なし
					3	外面	アズキ亜属	種子	41	3.2 +	3.4	2.0 +	半割した端部,約1/4個体,厚さ:半分厚,半割面:腹面側やや窪む
14	弥生中期	試料番号33	1.46	－	－	内面?	イネ	頴	42	6.1	3.3	1.8	完形,状態不良,頴表面模様確認
15	弥生中期	試料番号83	1.78	－	1	外面	イネ	頴	43	7.8	3.2	2.0	完形,状態極めて良好
					2	外面	イネ	頴	44	4.4 +	3.0	2.2	一端欠損(断面鋭利;刃物等による切断の可能性),頴表面模様極めて明瞭
16	弥生中期	試料番号100	0.08	－	－	断面	岩片?		45	3.9	3.1	4.1	
17	弥生中期	試料番号241	0.32	底部	－	外面	イネ?	種実?	46	6.3	3.3	1.0	イネに似る縦隆条あるが根拠なし
18	弥生中期	試料番号339	0.72	－	－	外面	イネ	頴	47	6.2	3.5	2.6	完形,状態極めて良好
19	弥生中期	本報告書第68図527	0.06	－	－	断面	イネ	頴	48	4.1 +	2.5	1.2 +	状態不良だが網目模様確認
20	弥生中期	本報告書第69図535	0.42	底部	－	外面	イネ	頴	49	6.7	3.9	0.6	完形厚みが薄く状態不良(押しつぶれた可能性)
21	弥生中期	本報告書第74図561	0.18	－	－	断面	不明		50	9.0	4.0	－	楕円体,コナラ属子葉に似るが根拠なし
22	弥生中期	本報告書第77図576	0.04	－	－	断面	不明		51	4.3	3.4	1.8	
23	弥生中期	本報告書第124図780	0.10	－	－	断面	イネ?	種実?	52	3.8 +	2.9	2.3 +	イネに似る縦隆条あるが根拠なし
24	弥生中期	本報告書第125図798	0.40	底部	－	外面	アワ	頴	53	1.6	1.4	1.3	完形,背面,状態不良
25	弥生中期	本報告書第125図794	1.96	－	－	外面	イネ	頴	54	6.8	3.1	2.0	完形,状態極めて良好
26	弥生中期	本報告書第195図	0.06	－	－	外面	イネ?	種実?	55	5.6	2.8	0.9	イネに似る縦隆条あるが根拠なし
27	弥生中期	本報告書第261図	0.08	底部	－	外面	アワ	頴	56	1.7 +	1.5	1.3	完形,背腹両面頴に覆われている,背面:乳頭突起の横列(Nasu.et.al.,2007)



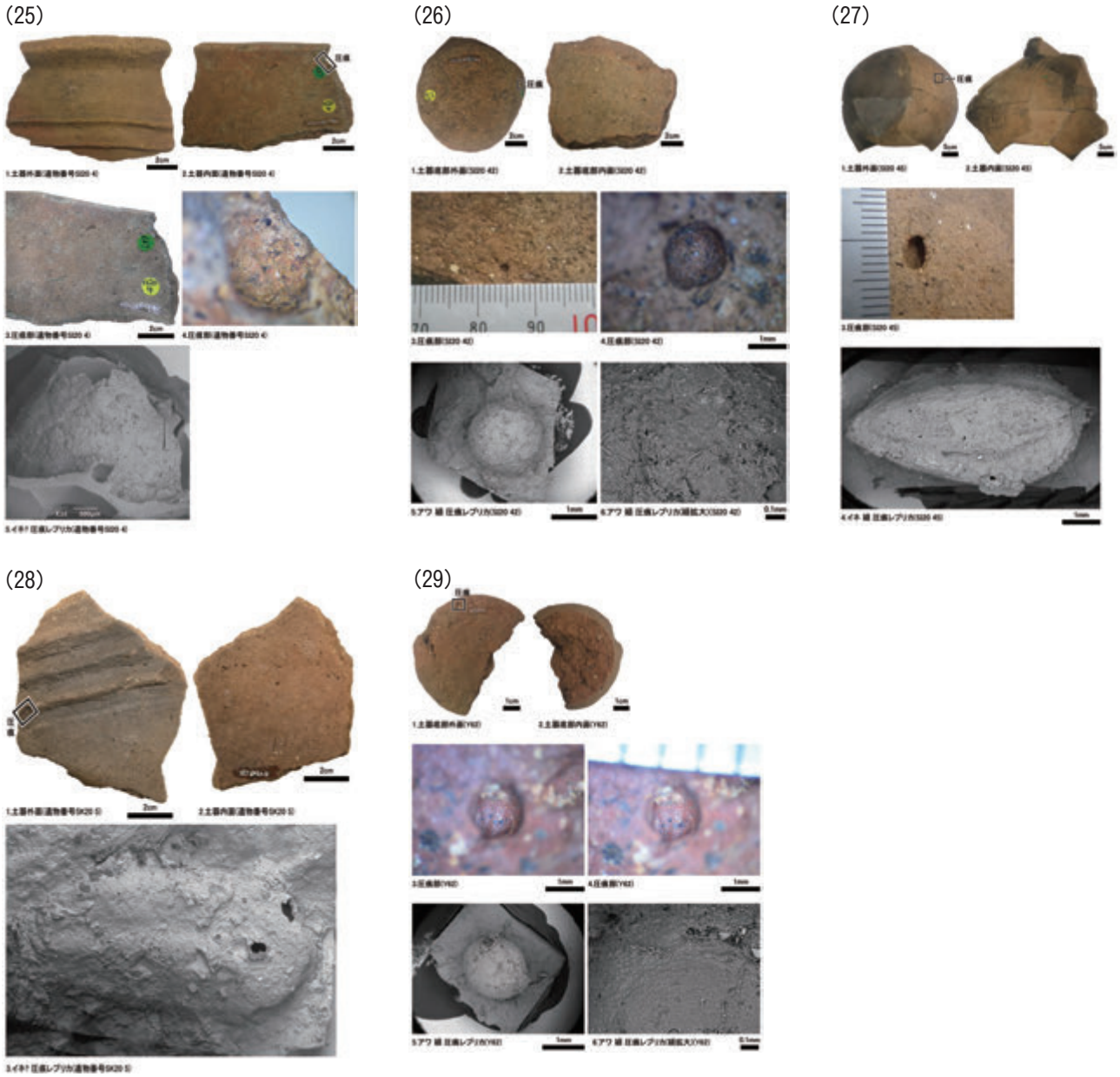
第 370 図　永吉天神段遺跡の土器圧痕（1）～（6）



第 371 図　永吉天神段遺跡の土器圧痕（7）～（15）



第 372 図　永吉天神段遺跡の土器圧痕（16）～（24）



第 373 図　永吉天神段遺跡の土器圧痕（25）～（29）

第 39 表　土器圧痕調査結果

時　期	収納容器No.	報告済（報告書掲載番号）		非掲載	重　量		数	備　考
		図番号	遺物番号	試料番号	パンケース有	パンケース無		
縄文早期	2	埋調セ(8) 第88～92図	101～167		10.50	7.30	65	114:カラスザンショウ種子に似るが根拠なし,胎土剥落(レプリカ採取1回で中止)　127:圧痕部黒色,有機物由来の可能性
縄文晩期	6	埋調セ(8) 第41、42図	173～209		1.52	3.32	37	182:軽石等の可能性,種実の可能性低いためSEM観察対象外　202:種実の可能性低い,レプリカ採取せず　204:袋状,全長の約2/3欠損,表面不明瞭,種実の根拠なし
弥生中期	28	第68図	527			0.06	1	イネ:状態不良だが網目模様確認
弥生中期	28	第69図	535			0.42	1	イネ:完形厚みが薄く状態不良(押しつぶれた可能性)
弥生中期	31	第74図	561			0.18	1	楕円体,コナラ属子葉に似るが根拠なし
弥生中期	32	第77図	576			0.04	1	
弥生中期	44	第124図	780			0.10	1	イネに似る縦隆条あるが根拠なし
弥生中期	45	第125図	794			1.96	1	イネ:完形,状態極めて良好
弥生中期	46	第125図	798			0.40	1	アワ:完形,背面,状態不良
弥生中期	69	第195図	1136			0.06	1	イネに似る縦隆条あるが根拠なし
弥生中期	90	第261図	1450			0.08	1	アワ:完形,背腹両面穎に覆われている,背面:乳頭突起の横列(Nasu.et.al.,2007)
弥生中期				23		0.54	1	23-1:イネ 下半部欠損,状態良好　23-2:偏平な長楕円体で腹面方向に湾曲,ダイズ属種子に似るが根拠なし　23-3:アズキ亜属 半割した端部,約1/4個体,厚さ:半分厚,半割面:腹面側やや窪む
弥生中期				33		1.46	1	イネ::完形,状態不良,穎表面模様確認
弥生中期				83		1.78	1	83-1:イネ 完形,状態極めて良好　83-2:イネ 一端欠損(断面鋭利;刃物等による切断の可能性),穎表面模様極めて明瞭
弥生中期				241		0.32	1	イネに似る縦隆条あるが根拠なし
弥生中期				339		0.72	1	イネ:完形,状態極めて良好
縄文晩期	5	埋調セ(8) 第35、37～40図	117～172		9.52	5.52	54	123:2箇所とも不定形,鋭角・稜状,種実の可能性低いためSEM観察対象外　126:正中線稜状,モチノキ属核に似るが根拠なし　130:腹面臍位置がサンショウに似るが網目模様不明瞭　132-1:カラスザンショウ 網目模様:粗く深い　132-2:昆虫類(幼虫) 6節+頭部で最大径,頭部先端中央尖る　136:カラスザンショウ種子に似るが根拠なし　137:イヌザンショウ 種子長の約1/2欠損,カラスザンショウよりもやや細かく浅い網目模様
縄文後期(22図) 縄文晩期	3	埋調セ(8) 第22、26、28、29図	49～95		10.24	7.04	43	54-1:不定形,種実の可能性低いためSEM観察対象外　54-2:不定形,種実の可能性低いためSEM観察対象外

第６章　総括

第１節　縄文時代晩期の調査

１　遺構について

入佐式土器を伴う住居跡１軒と落とし穴の可能性がある土坑２基，用途不明の土坑４基が発見された。

入佐式土器期の竪穴住居跡は，直上のⅢａ層が20㎝程度の層厚であることを踏まえると，本来の深さは25㎝以上はあったと考えられる。柱穴については，周辺に多数検出された中世の柱穴群の中から，調査中に埋土の特徴や形状，竪穴との相対的位置関係などの詳細な検討を重ねた上で抽出した。竪穴外の添柱と想定した４本の柱穴は，住居が南東に下る緩斜面上に建てられていることから，荷重等のバランスから斜面下側の２本（Ｐ６，７）がより遠い位置に配されたと想定している。また，この場合，基本設計に竪穴外～添柱の空間を生業活動等に利用する計画はないことになる。

なお，残念ながら，床面の色調等の変化を含めて炉の存在を明らかにできなかった。

住居に伴う入佐式土器の中には，２，７や８のようにやや新しい要素が見受けられる資料もある。竪穴内での出土状況は既に述べたが，深鉢では１が散在しているのに対し，２，６，７はそうではない。小型の深鉢も竪穴の南東部に比較的まとまる。また，浅鉢は破片を含め竪穴の東側から出土した。

石器では，石鏃，横刃形石器，磨製石斧，打製石斧が出土した。このうち，石鏃以外の石器が大小１点ずつあるようにも見受けられる。

土坑６基のうち２基については，傾斜面に位置すること，周辺の遺物出土状況が希薄であることと遺構の全体的な形状（円筒形）並びに規模などの状況から落とし穴と想定した。ただし，「逆茂木痕」と想定した床面中央の小ピットについては，縦断面が蛇行することなど，検討の余地がある。

２　遺物について

土器は，入佐式土器，黒川式土器が出土している。分布状況についてみると，微視的には本文中で触れたような違いがあるものの，おおむね入佐式土器と黒川式土器ともに重複するが，黒川式土器と突帯文土器でより重複が顕著である。このことから，入佐式期と黒川式・突帯文期の間に多少の画期があるようにみえる。他方，遺物量でみると入佐式期と突帯文期が多い。遺構の分布状況も遺物量に基づく想定と相関しており，第１地点の調査成果を踏まえても，３期の変遷に関する解釈が難しい。

入佐式土器として，深鉢，浅鉢，鍋に分類した。住居内出土の小型深鉢については，包含層出土深鉢における分類・抽出はできなかった。３器種の存在及び比率は，従来の傾向に合致するといえる。そのうち，52に施文された綾杉文と円形突起は，後期末の三万田式や御領式との関係も想定できるが，胎土や焼成などの特徴から本報告では型式特定は控えた。このほか，63や66も器形の類例が少なく帰属時期等に苦慮した。鍋（67，68）は，断面形状は深鉢に類似するが，口縁部の開き具合と内面の丁寧な調整，外面下端に残る組織痕から深鉢に分類しなかった。黒川式期の組織痕土器の祖型的なものと考える。

黒川式土器として，深鉢，浅鉢，まり，小型鉢，鍋，土製品に分類した。本文中でも記したとおり，分類した器種のなかでは浅鉢の点数が最も多く，深鉢を凌駕する。また，今回は，91，94，102や103の口縁部装飾や113をもとに黒川式期の浅鉢に分類しているが，近年突帯文期の浅鉢とする見解のある器形を多く含んでいる。特に，底部資料の一部（157，158）は脚台であり，突帯文期に帰属する可能性が高い。他方，132，133，136～138は，沈線で幾何学的な文様を施文しており，干河原段階と称される一群の資料との関係を想起させる資料である。他に小型鉢（167）についても，「三角形刳込文」こそないものの，薄い器壁と丁寧な器面調整に加え，口縁端部の１条の沈線文は，干河原段階資料を想起させる。

第２節　弥生時代の調査

第２地点で最も内容に富む時代である。本文に従い，時期毎に総括することとしたい。

１　早期～前期について

本報告では，突帯文土器を弥生時代早期に位置づけた。第１地点での整理と異なる分類になったが，層位的に分別できず型式学的にしか分類できない状況において，特に一定数出土している壺形土器に対し明確な型式差を設定できなかったため，本報告ではやむを得ず弥生時代早期に一括して報告することとした。

刻目突帯文土器の深鉢形土器については，従来の南部九州における編年観に沿う器形・施文の遺物が出土している。ただし，464は器形，調整，文様や胎土・焼成いずれも大変特徴的で既知の南部九州当該期資料に見当たらない。器形や調整から朝鮮系無文土器との関係を調査したが，九州内では探求できなかった。

この他，孔列文土器は，第１地点よりも出土数や器形のバリエーションが多い。

また，底部に網代や植物の葉の圧痕を残す資料が複数みられた。植物の葉の圧痕については比較的状態のよい資料を鹿児島県立博物館に鑑定して頂いたところ，植物学的には断片試料とのことで種の特定まではできなかったものの，390はイラクサ科もしくはクワ科，397はキク科もしくはミズキ科との結果を得ることができた。ミズキ科を除けばいずれも森縁部のある程度開けた環境を好

む植物であることから，当時の植生は現在と大きな差異がなかったことが想定され，土器製作のために集落から離れた場所に採取に行くような状況ではなかったことも想定される。なお，上記の植物は多年生植物であるため，土器の製作時季を推定する参考には適さない。

壺形土器については，第59図に例示した一群が下原遺跡（南さつま市）との関連を伺わせる。また，外面のミガキ調整が縦位に施されている資料もわずかにみられることや，頸部に深鉢形土器と同じ技法の刻目突帯文が施されている485，胴部に三角突帯で台形モチーフを描き円形浮文を施す495～498の小形丹塗り壺など，縄文から弥生への転換期における南部九州の資料として有効と考えられる。

前期の資料は，前後の時期に比べて少ないが如意形口縁の甕形土器や重弧文や鋸歯文を施された壺形土器などが出土していることは，この地域が，早期から引き続き広域的な交流を継続させていることをうかがわせる。

2　中期について

一般的に遺構から述べるところであるが，遺物からまとめたい。

(1) 遺物について

ア　土器

第2地点から出土している土器のうち，甕形土器の中に入来Ⅱ式や山ノ口Ⅱ式とともに，口縁部が水平またはやや上方に整形するが短くおさめる形状を呈し，脚台は山ノ口Ⅱ式ほどには高く末広がりにならない一群がまとまって出土している（例えば住居跡では10号633～644（637除く），17号740～744，26号869～876，31号934～944（938除く），36号1033～1035，42号1078～1083，43号1084～1092，45号1111～1123など）。

この一群は，上記の特徴から，従来山ノ口Ⅰ式土器あるいは吉ヶ崎式土器とされてきた土器型式に該当すると考えられる。伴う他器種については，上記遺構からの出土量が少なかったことから，残念ながら甕形土器ほどには特徴を抽出できない。ただ，壺形土器については，口縁端部の下垂は入来Ⅱ式のそれよりも長くのびるが山ノ口Ⅱ式ほどには立体的に作られず，頸部は山ノ口Ⅱ式より径がわずかに太く長さも長く整形され，胴～底部はやや山ノ口Ⅱ式に近い器形となるかと想定される（17号747と758，19号769と770等）（附図3）。

この他の土器に関しては，まず，住居内から出土した黒髪式土器があげられる。大隅半島では2例目で，甕形土器口縁部の小片である。2号住居では山ノ口Ⅱ式と同一埋土から出土しているほか，3号住居や5号住居では入来Ⅱ式および山ノ口Ⅱ式を含む埋土から出土している。口縁部の形状は，本文中の図のとおり短く，黒髪式古段階の様相が伺われる。こうした状況から，これらは山ノ口Ⅰ式に並行する可能性が想定される。

次に，二叉状口縁の鉢形土器（1050，1154，1155）である。山ノ口Ⅱ式の二叉状口縁壺の頸部から口縁部と形状が酷似しているが，平底を呈し，胴部の器壁は下半部にかけて厚みを増す。住居跡や周溝墓での出土状況から山ノ口Ⅱ式に伴うもので，当該期の新たな器種に設定できると考えられる。なお，上記したとおり二叉状口縁壺と酷似するため，基本的には完形復元等でなければ壺との判別は困難と考えられるが，底部付近の器壁の厚さは判別の指標にできる可能性があり，また法量が小さいものも胴部の弯曲具合などから判別できる可能性がある。

本文で「中世の土師質鍋形土器を彷彿とさせる」と記した土器（1334～1340）は，包含層出土のため本報告では帰属時期の詳細な解明には至らなかった。だが，中ノ丸遺跡（鹿屋市）例などを踏まえると，少なくとも笠之原台地では煮沸具の一器種として脚台付の甕形土器とは別に一定数が製作・使用されていたと想定できる。ただし，本遺跡では住居内や集落域からは出土していない。この点は，大甕に匹敵する口径とともに系譜や用途の解釈等に関する議論の起点になると考えられる。

さらに，朝鮮系無文土器に類似した甕形土器も出土している。北部九州から有明海北部沿岸一帯にかけて確認されているものと同等ではないが，在地の甕形土器に比べ特異な口縁部形状を呈することや，法量が一回り小さいことなど，朝鮮系無文土器との関連をうかがわせる特徴を備えている。分布域も西部側に偏っていて住居跡などの集中域から離れていることも，北部九州などの事例と類似した出土状況を呈している。本県では，わずかに下原遺跡（南さつま市）や鹿児島大学構内遺跡（鹿児島市）の事例が指摘されている（片岡 1999）のみであり，県内や周辺地域の様相解明が待たれる。なお，朝鮮系無文土器分布の背景として想定されている製鉄技術については，墓坑から出土した鉄鏃を除き，明確に指摘できる遺構や遺物は発見されなかった。

この他，本文中で「黒塗り壺」として紹介した，外面が黒褐色の色調を呈しミガキ調整で仕上げられた壺形土器がある。入来Ⅱ式期の住居4軒（5，6，10，25号）から1点ずつ出土しているが，どれも意図的なものとは考えにくい。土器単体では，想定される器形は入来Ⅱ式の壺形土器に類似する肩部に細沈線文を施文する例が2点あり（6号590，25号589），他の入来Ⅱ式の壺形土器にない特徴を備えている。なお，4点とも頸部から上位の破片は住居内及び周辺に見当たらなかった。

「黒塗り壺」は，北部九州において前期後半から甕棺墓にしばしば使用されていることで知られる土器である。本遺跡では，棺には用いられていないが土器の属性や出土状況には他の壺形土器と異なる点もあり，評価には慎重を期すべきと考える。

イ　石器

第２地点出土の当該時期の石器については，遺構出土のものを除き詳細な帰属時期の推定ができなかった。

遺構出土のものでは，入来Ⅱ式～山ノ口Ⅱ式土器期を通じて刃部のある利器よりも工具が多種にわたり出土する傾向にある。出土量については，住居検出数の差を反映して入来Ⅱ式段階が多いが，磨製石鏃（入来Ⅱ式８，山ノ口Ⅰ式１，山ノ口Ⅱ式２）と軽石加工品（入来Ⅱ式８，山ノ口Ⅰ式０，山ノ口Ⅱ式３）については，住居数の差以外の要因を反映している可能性がある。

なお，磨製石鏃については，側縁部を鋭利に研いでいない資料も製品とした。先端にのみ衝撃剥離がある資料から，鎧貫通力に特化させたものと想定したためである。

包含層からは，細分類で 20 種にわたる石器が出土した。東西で点数に差がみられるが，主な理由は調査面積の都合等による影響であろう。前段の住居出土石器を参考にすると，磨・敲石類については，棒状で端部のみ又は１か所程度の稜上のごく狭い範囲に敲打痕が集中するもの，砥石についても，同じく棒状で端部や稜上にのみ敲打痕が集中するものや鋭く直線的な研ぎ痕が残るものは弥生時代に帰属する可能性がある。そしてこれらは，鉄関連技術の存在をうかがわせる資料かもしれない。

また，軽石加工品については，多面体状の形態をしているものや凹みが複数面にあるものなどは，例えば粗砥石や穿孔作業の受石など，実用工具としての用途を担っていた可能性を想定できるように思われる。

ウ　その他の遺物

土坑墓から出土した鉄鏃は，すべて無茎鏃で薄く，中には研ぎ直されている可能性があるものもある。このような特徴は，北部九州～近畿地方以外で発見される弥生中期の鉄鏃にみられる特徴と合致する。いずれにせよ，弥生時代に帰属する例として県内初見であり，今後検討には慎重を期すべきと考える。

丁字頭の土製勾玉は，山ノ口Ⅱ式段階の住居からのみ出土している。先例を追証できたが，入来Ⅱ式や山ノ口Ⅰ式段階の住居にないことが課題のまま残った。

(2) 遺構について

遺構の分布は，本文にもあるとおり，生活関連遺構と墓域が，それぞれ地形を利用して隔てられている。

ア　竪穴住居跡（附図２及び附表参照）

竪穴住居跡について，構造と出土遺物から整理する。

全体的には，調査区内東側に偏って発見されているほか，重複例が少ない（同一住居における建替想定例を除く）。重複例は，円形住居が方形住居を切る例（10 号と 13 号，21 号と 22 号，26 号と 27 号），方形住居同士の例（７号と８号，37 号と 38 号）の５例のみである。

また，屋内炉については，可能性のある痕跡を残す住居もあったが，明確に推定できる例は確認されなかった。

円形住居については，調査区内から 12 軒発見されており，その内訳は，西部２軒に対し東部 10 軒と東部に集中する。基本的な構造はほぼ同じとみられ，竪穴中央に小土坑を設け，７～９本の柱を竪穴中心と壁間の中間地点付近に環状に配している。ただ，28 号は４本柱，33 号は２本柱に加え東端に用途不明の多数の小柱を伴っており，特異である。

主柱は建て替えを行った例が多い。張り出しは３軒（２，６，12 号）で確認できたが，ベッド状遺構は 33 号にしか構築されていなかった。包含層の残存状況を踏まえると，張り出しは住居の基本構造に含まれていた可能性がある。中央土坑については，土坑壁際に小柱を設ける例と設けない例が６例ずつあり，前者の土坑を伴う住居は，44～45 区列の谷を囲む区域に集中しているように見える。

円形住居からは，入来Ⅱ式～山ノ口Ⅱ式が出土しているが，床面直上から出土しているのは入来Ⅱ式～山ノ口Ⅰ式であった。33 号は山ノ口Ⅱ式のみが出土した。また，33 号を含む 10 軒が東部（うち７軒は 44 区列より東側）に集中しているなかで，43，45 号のみが，調査区中央の小丘陵と谷を越えたＤ－ 23 区とＦ･Ｇ－ 24･25 区に建っている。なお，２号は埋土上層に山ノ口Ⅱ式を含む。４軒の住居（２，10，12，33 号）では大甕も出土している。

石器では，磨製石鏃を出土した住居が８軒（２，６，12，21，26，33，43，45 号），軽石製品を出土した住居が４軒（15，21，26，28 号）確認されたが，砥石を出土した住居は３軒（12，33，45）である。他には，石皿が 21 号，石庖丁が 26 号で出土している。

この他の遺物では，33 号で土製勾玉が，44 号で円盤形土製品が出土している。

方形住居については，調査区内から 32 軒発見されており，その内訳は西部４軒に対し東部 28 軒と，円形住居よりさらに東部に偏っている。基本構造は円形住居よりもパターンが多く，平面形には長方形，方形及び凹形があり，主柱は２本柱が最も多く床面に建つ例と壁際に建つ例がある。ただし 27 号と 34 号については，壁に沿って等間隔に柱が建てられており，基本構造自体が異なっていた可能性が高い。

また，東部の住居については，長軸をおおむね東西方向に設定しているが，14 号から東側の住居は，特にＧ～Ｌ－ 43～55 区（調査区外）にある谷を意識して長軸を設定しているように見受けられる。

住居内土坑は，９軒（不明含む）で確認されなかったが，確認できた例ではほとんどが南側に位置する壁に接して設けられていた。また，円形住居にもあった土坑長軸両端に小柱を伴う例が９軒あるが，円形住居と異なり区域が集中する傾向などは見いだせなかった。張り出し並びにベッド状遺構は，方形住居の多くで構築されてい

ることから，基本構造に含まれていたものと考えられる。

土器型式は，方形住居でも円形住居同様各時期出土しているが，床面直上から出土しているのは入来Ⅱ～山ノ口Ⅰ式が７軒に対し，山ノ口Ⅱ式が１軒あり，円形住居と傾向は類似するが同一とは言えない。また，入来Ⅱ式～山ノ口Ⅰ式を出土した住居は上記を含め 21 軒あるが，42，43，45 号を除き東部に偏っている。これに対し，山ノ口Ⅱ式を出土した住居は上記を含め 11 軒あり，４号を除いて 32～34 区列付近にある小丘陵の東斜面に集中している。さらには，山ノ口Ⅱ式を埋土上位に含む住居が，２号，17 号や 19 号など東部東端域で確認されるなど，円形住居と比較して分布の広がりがみられる。

石器については，13 号で磨製石剣が出土しているが，磨製石鏃は３軒（9，19，31 号）にとどまる。軽石製品も６軒（３，13，18，30，31，44 号）と少ない。だが，砥石を伴う住居は９軒，敲石についても２軒あり，円形住居の傾向と異なる。

この他，41 号で土製勾玉が出土している。

以上をまとめると，入来Ⅱ式土器のみが出土する住居跡は 20 軒，山ノ口Ⅰ式土器のみが出土する住居跡は４軒（７，９，20，31 号），山ノ口Ⅱ式土器のみが出土する住居跡は 11 軒のほか，入来式土器と山ノ口Ⅰ式土器が出土する住居跡５軒（３，10，11，16，19 号），山ノ口Ⅰ式土器と山ノ口Ⅱ式土器は 17 号の１軒，山ノ口Ⅱ式土器と入来Ⅱ式土器が出土する住居跡は３軒（２，30，44 号）となる。線を引いたようにはいかないが，Ｇ～Ｌ－43～55 区（調査区外）にある谷を囲みつつも，40～43 区列の地形変化域を境に東側に入来Ⅱ式を出土する住居が集中し，西側は山ノ口Ⅱ式を出土する住居群がまとまるようである。そして，入来Ⅱ式段階の３軒（42，43，45 号）と山ノ口Ⅱ式段階の１軒（44 号）は，30～32 区列の谷を隔てた西側に建っているという共通点も確認される。

イ　土坑

調査区全体で 50 基発見された。内訳は，東部に 11 基，西部に 39 基と偏りがみられるが，西部の谷部周辺を除き，東西どちらも住居跡など他の遺構の分布域内で検出される傾向にあった。

東部では，Ｄ～Ｆ－ 48～50 区（６基）とＪ～Ｋ－ 37，38 区（５基）の２区域にわかれる。形状については，１号や５号が他と異なる程度で，どちらの区域も特筆すべき点は見当たらなかったが，底面長軸で規模を比較すると，平均値は前者が 0.95 m（部分検出の４号を除く）に対し後者は 1.18 mとなり，規模にはやや違いが認められる。土器は，埋土中の混在例のみだが，前者が入来Ⅱ式，後者が山ノ口Ⅱ式であった。

西部では，帰属についての解釈が難しい 12 および 13 号の他には，谷部（５基）とＧ～Ｊ－ 25，26 区（９基）及びＤ～Ｆ－ 23～25 区（23 基）の３区域にわかれる。形状については，平面が楕円形を呈するものがほとんどで，さらに底面の片隅にピットを伴う例が 27 基／ 32 基と顕著な特徴を示している。特に西端の集中区域は 21 基／ 23 基に及ぶ。東部と同様に底面長軸の平均値で規模を比較すると，谷部は 0.6 m，Ｇ～Ｊ－ 25，26 区は 0.89 m，Ｄ～Ｆ－ 23～25 区は 0.97 mとなり，谷部が東西合わせて最も規模が小さいこと，西部の集中域２か所に若干ながら差異があることがわかる。なお，こちらは 13 号および 36 号の埋土から山ノ口Ⅱ式と考えられる小片が出土した他は遺物がなかった。

ウ　周溝墓

東部に３基，西部に２基発見された。周溝の底面外端および底面幅の平均値で規模を比較してみると，１号は 4.2（推定）× 3.8 m（平均底幅 13㎝），２号は平均底幅 12㎝，３号は 6.1 × 5.7 m（平均底幅 52㎝），４号は 8.6 × 8.2 m（平均底幅 104㎝），５号は 4.15 × 3.9 m（平均底幅 20㎝）となり，４号が最も大きい。主体部は４号でしか確認できなかったが北部九州の箱式石棺墓にも類似しており，これまでに県内で発見された弥生土坑墓の代表例に匹敵する規模である。

他方，遺構内で供献行為の痕跡と想定できるような遺物出土状況を示したのは３号（山ノ口Ⅱ式）並びに４号（入来Ⅱ式）の２基のみと少なく，他の３基は土器片が埋土中から出土しているにすぎない。この出土状況の相違については，周溝の規模の違いと相関している可能性が考えられる。

分布状況については，入来Ⅱ式を出土する西部の４，５号は住居の分布中心域と地形を隔てているが，１号では同じ尾根の違う斜面，２，３号については，住居の近隣と，時期が下るにつれてより住居の分布中心域近くで構築されるようになっている。

なお，３号や５号は方形を呈しているようにも見えるが，残存状況の問題や角部の状況が不明瞭であることなどから，本報告では平面形による詳細な分別は控えた。

エ　土坑墓

本文でも記したとおり，西部丘陵の稜線上に 15 基，丘陵北西緩斜面上に５基と，２か所にわかれて発見された。なかでも横口式土坑墓は，どちらのグループでも検出されているが（前者５基：５，６，10，14，15 号　後者１基：18 号），県内では京ノ峯遺跡（志布志市），高吉Ｂ遺跡での発見以来の事例となった。

稜線に沿ってまとまる前者の 15 基は，その北端（傾斜上側）に周溝墓４号が併存する。特に１，２号は，主体部の構造が周溝墓４号と類似すること，大甕や壺などが集中する箇所が近辺に一定の間隔をおいて４か所存在することから，どちらかが周溝を伴っていたことも想定される（この場合，土器集中箇所は供献と仮定）。また，個々の土坑墓は，長軸を稜線の方位（分布域の長軸）と異な

る略東西方向に向けており，一定の計画性がうかがえる（周溝墓４号主体部の長軸方位も同じ）。

個々の土坑墓は，形状が段掘り構造となるものや上記した横口式をとるものなど，平面形・断面形ともにさほど統一性がみられない。長軸の平均値で比較してみると，段掘り構造の墓（１～３号）は2.3ｍ，横口式の墓は1.3ｍ，それ以外は1.7ｍで，横口式が最も小さい。

一方，北西緩斜面上の５基は，稜線から1.5ｍほど下った辺りにまとまり，その南西端（傾斜下側）に周溝墓５号が併存する。こちらのグループは，分布域の長軸と個々の土坑墓の長軸の方向がほぼ北東―南西方向に揃っている（土坑墓の長軸が周溝墓５号に向いている）点が，稜線上のグループと異なる計画性の存在を覗わせる。なお，19号と20号は非常に近接して掘られており，２基に固有の規制等が存在したかのようである。

個々の土坑墓の形状は，18号が横口式であるほか，平面形はほぼ同じである。規模は，19，20号が2.24ｍ，18号が1.28ｍ，16，17号が1.5ｍの平均値を示し，やはり横口式が最も小さい。

副葬品は，どちらのグループでも明確に想定できる出土状況を示した墓坑はなく，わずかに稜線上の７，９号並びに斜面上の19，20号から鏃や管玉が散在した状態で発見されたのみであった。特に，鉄鏃並びに石鏃については，本遺跡の出土状況では，副葬品以外に戦闘（戦争？）又は別の宗教的行為など，用途に関して想定できる複数の可能性を絞り込むことができなかった。これら以外では埋土中に入来Ⅱ式土器の小片が出土した例のみだが，この状況は，周溝墓４，５号と共通する点であり，墓域全体の帰属時期を想定する上でわずかながら参考になろう。また，上記した１，２号近辺の土器集中には山ノ口Ⅱ式の甕形土器と二重口縁の壺形土器が含まれていること，さらにその直近で須玖式系の広口壺（1200）がまとまって出土していることは，頻度はさておきこの墓域が入来Ⅱ式から山ノ口Ⅱ式段階まで継続していた可能性を示すと考えられる。

なお，土坑墓のうち床面に小穴を設ける７号と，上記した横口式および底面片隅にピットを設ける土坑については，福岡平野から筑後平野にかけて類似例があるようだ。

オ　まとめ

○山ノ口Ⅰ式と考えられる土器が，器種組成等未解明の部分もあるが遺構を伴って一定数出土した。

○入来Ⅱ式から山ノ口Ⅱ式の時期にかけて営まれた集落の変遷を確認できた。

○当該期の住居について，前例を追認するとともに，これらが入来Ⅱ式段階まで遡ることを新たに確認できた。

○円形住居と方形住居の１時期の組み合わせや円形住居の機能の詳細については，今後の検討課題である。

○周溝墓並びに土坑墓は，各土器型式段階を通して構築されたと考えられる。周溝墓については，段階を経るにつれて，集落近くにも構築される。

○弥生時代中期の大隅半島に複数形態の墓坑が存在し，さらに，それらが一定の規制等に基づき墓域まで構成している可能性を確認できた。

○集落と墓域は，各土器型式段階を通して，地形を利用して隔てられていたと考えられる。

○既知の遺跡でも，尾根や谷を隔てた近隣に当該集落の墓域が存在していることが想定される。

○そうした景観の中での，大隅半島と薩摩半島，さらに九州他地域との交流の詳細解明が今後の課題である。

※調査中に注目された，墓域で発見された住居や掘立柱建物跡の性格については，追認しようとしたが，一時的な使用と考えられる葬送儀礼関係施設が他の通常の住居と同様の遺存状況を示すことに対する解釈ができなかったこと等から，追認せず慎重に扱うこととした。

第３節　古墳時代の調査

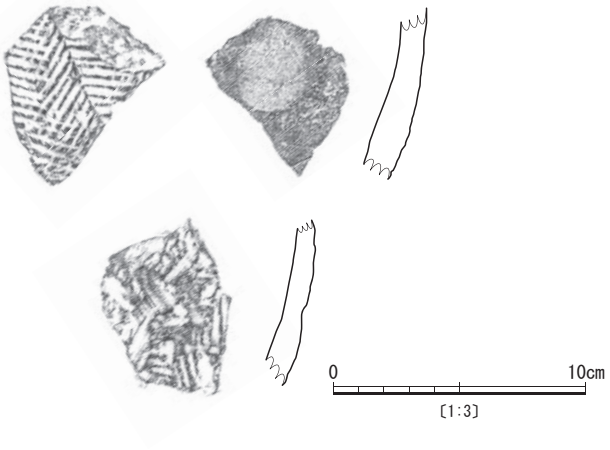
１　遺構について

竪穴住居跡が５軒，土坑が10基発見された。各住居は，土坑を伴うものを含め全体として散在した状態である。また，１号以外，張り出しを伴う構造の住居だけ出土している。県内で発見された花弁形住居の多くは集落の一部として存在する場合が多く，本遺跡のような状況を呈する例は少ない。花弁型住居については，周辺の住居との相対的な関係において検討される場合が多いが，本遺跡の場合，同構造のみが出土している点を除けば，各住居が併存もしくは地点を大きく変えながら短期間（１型式期間）で建て替えと廃棄を繰り返していたこととなる。これは，成川式土器前半期の集落形態に通じる特徴である。また，わずかながら砥石や敲石などの工具類が出土している点も従来の例を追認するものと言える。

２　遺物について

甕形土器を見る限りでは，成川式土器前半期に位置づけられる型式が出土しているが，布留系の高坏（1887），小形精製壺（1930）に加え，異形丸底壺（1977～1981）や鉢（2046）など成川式土器の器種構成にない土器も出土している。なかには宮崎平野部との関連をうかがわせるものもあり，類例の増加が期待される。

最後に，異例を承知でタタキを有する硬質の土師器２点を紹介したい。いずれも甕と考えられるが小片のため詳細は不明である（次頁掲載）。上はＧ－25区②から，下はＥ－20区Ⅱ層から出土した。色調は，上が鈍い黄橙色（外面）と褐灰色（内面）で，下が淡黄色（外面）と黄灰色（内面）で断面内部が浅黄色である。最大の特徴は外面のタタキ痕で，近畿地方で庄内式期にのみ見られるという「矢羽根状タタキ」と類似している。内面には略円形の当て具痕があり，ナデられている。



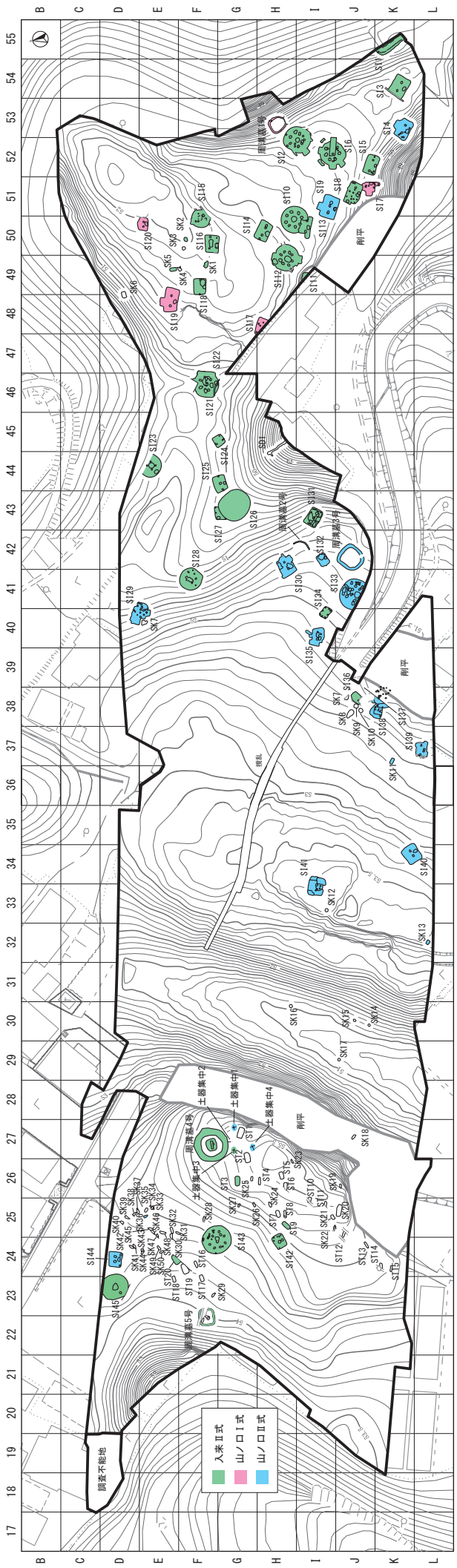
〈附図１〉

〈参考文献〉

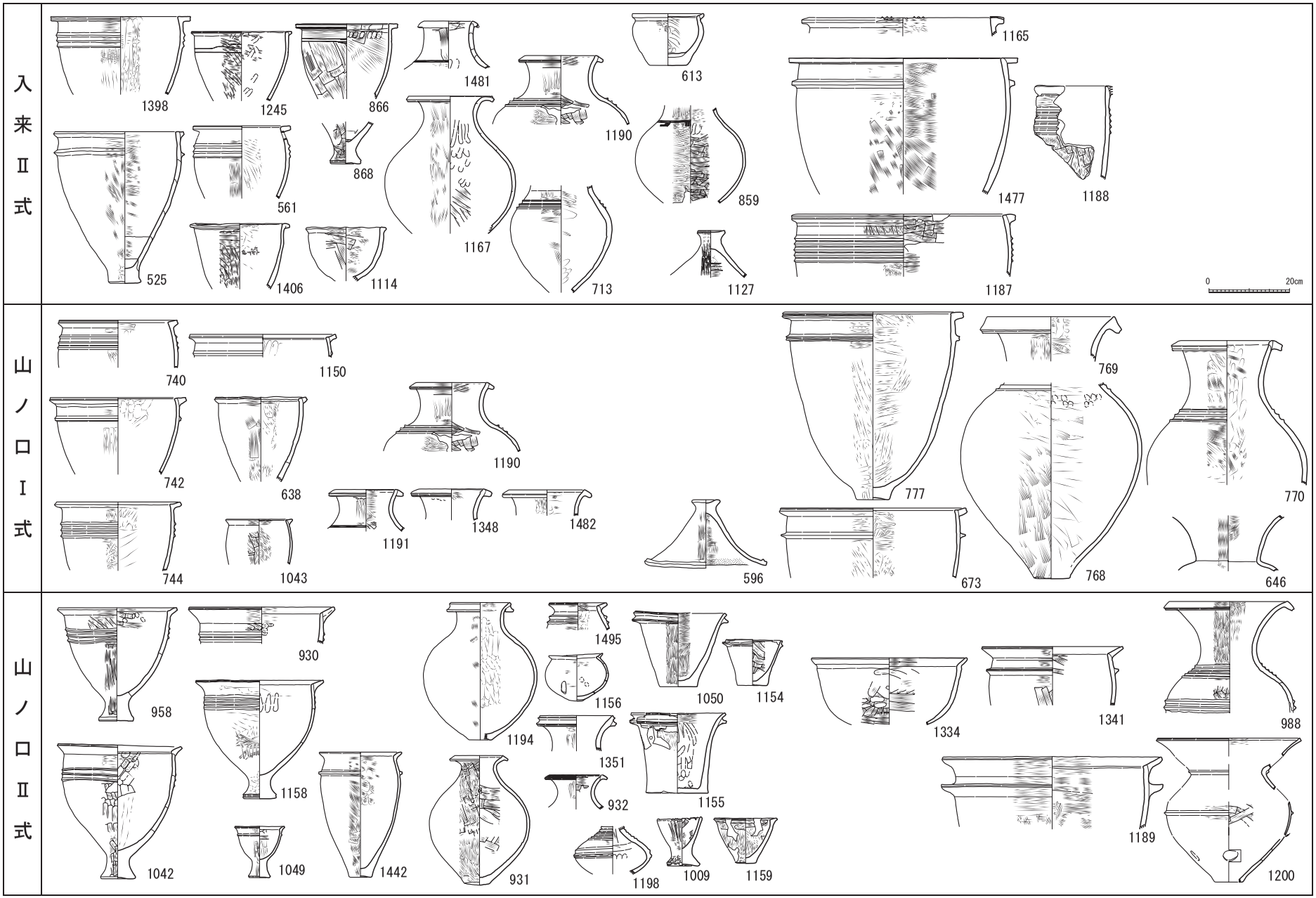
1992『鹿児島県下の弥生土器』鹿児島県考古学会
1993 藤尾慎一郎「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』第 27 号　鹿児島県考古学会
1996 藤田等「９墓地３. 土壙墓」『弥生文化の研究』８　雄山閣
1997 堂込秀人「南九州縄文晩期土器の再検討」『鹿児島考古』第 31 号　鹿児島県考古学会
1997 中園聡「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』９　人類史研究会
1998 中摩浩太郎「南部九州弥生時代竪穴住居の分類」『人類史研究』10　人類史研究会
1999 片岡宏二『弥生時代　渡来人と土器・青銅器』雄山閣出版
1999 本田道輝「松木薗０式土器，その後」『鹿児島考古』第 33 号　鹿児島県考古学会
2001 松永幸寿「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第 17 号　宮崎考古学会
2004a 宮地聡一郎「刻目突帯文土器圏の成立(上)」『考古学雑誌』88-1　日本考古学会
2004b 宮地聡一郎「刻目突帯文土器圏の成立(下)」『考古学雑誌』88-2　日本考古学会
2015 西谷彰「鹿児島県における弥生時代住居跡研究の現状と課題」『鹿児島考古』第 45 号　鹿児島県考古学会

〈報告書〉

1989「井手間遺跡」『松山町埋蔵文化財発掘調査報告書』（３）
1989「中ノ丸遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（48）
1993「京ノ峯遺跡」『松山町埋蔵文化財発掘調査』（7）
1985「王子遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（34）
1996「北麓遺跡」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』（21）
2007「堂園遺跡Ａ地点」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（108）
2011「下鶴遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（163）
2009「領家西遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（141）
2014「高吉Ｂ遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（180）
2016「田原迫ノ上遺跡」１『公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書』（5）



〈附図２〉


入来Ⅱ式
山ノ口Ⅰ式
山ノ口Ⅱ式
1398
1245
866
1481
613
1165
525
561
868
1190
1477
1188
1406
1114
1167
713
859
1127
1187
0
20cm
740
1150
742
638
1190
744
1043
1191
1348
1482
596
777
769
770
673
768
646
958
930
1158
1042
1049
1442
1194
1495
1156
1351
932
931
1198
1009
1159
1050
1154
1155
1334
1341
988
1189
1200

〈附図３〉

〈附表〉住居特徴一覧表

No.	平面形	床面積（㎡）	張出	ベッド	主柱	土坑	貼床	壁帯溝	建　替	土　　器	他　遺　物
1	長方形	(12.39)	—	—	有	不明	有	有	不明	入来Ⅱ	砥石
2	円形	34.19	1	無	環状	中央	有	不明	有	入来Ⅱ　小形大甕 山ノ口Ⅱ　黒髪(上)	磨鏃　磨斧　打斧　棒敲石 磨石
3	長方形	(17.33)	—	—	二本柱	南端	無	無	無	入来Ⅱ　山ノ口Ⅰ？　黒髪(上)	軽石
4	長方形	11.7	1	2	二本柱	南端	有	有	無	山ノ口Ⅱ	砥石　凹石　石皿
5	長方形	11.79	不明	1	二・多柱	南端	1	有	無	入来Ⅱ　黒髪　黒塗壺	敲石
6	円形	34.19	5	無	環状	中央	不明	(有)	有	入来Ⅱ	磨鏃　敲石
7	長方形(不整)	7.0	2	無	二・多柱	南端	有	有	無	山ノ口Ⅰ　蓋	棒敲石
8	長方形	13.12	1	無	二本柱	南端２基	有	不明	無	入来Ⅱ　鉢　蓋	砥石
9	長方形	19.44	1	1	二本柱	南端	有	不明	有	山ノ口Ⅰ　蓋	磨鏃　打斧　棒敲石
10	円形	29.79	不明	無	環状	中央(小柱)	有	不明	無	入来Ⅱ　山ノ口Ⅰ　小形大甕　蓋	打斧　敲石
11	長方形？	(2.49)	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	入来Ⅱ　山ノ口Ⅰ	
12	円形	28.26	2	無	環状	中央　北端	有	不明	有	入来Ⅱ　小形大甕	打鏃　磨鏃　砥石
13	方形(不整) ４号削平？	13.25	1？	2？	二本柱	南端(小柱)	有	不明	不明	入来Ⅱ	磨製石剣　敲砥石　軽石
14	長方形	14.41	不明	無	二本柱	南端	有	不明	有	入来Ⅰ　入来Ⅱ	敲砥石　台石
15	円形	16.97	不明	無	環状	中央	有	有	不明	入来Ⅱ　黒塗り壺	軽石
16	長方形	13.53	不明	無	二本柱	南端	有	不明	無	入来Ⅱ　山ノ口Ⅰ　蓋	磨斧　敲砥石
17	長方形？	(11.2)	不明	不明	二本柱？	不明	有	不明	無	山ノ口Ⅰ　山ノ口Ⅱ	磨・敲石　磨斧
18	長方形ｂ	10.5	不明	無	二本柱	南端(小柱)	有	有	無	入来Ⅱ	打鏃　砥石　軽石　磨斧
19	長方形	17.38	1	3	二本柱	南端(小柱)	有	無	無	山ノ口Ⅰ大壺・大甕　山ノ口Ⅱ 蘭鉢　広口壺	磨鏃　敲石　敲砥石
20	長方形	7.22	不明	無	二本柱	南端(小柱)	有	無	無	山ノ口Ⅰ	
21	円形	28.26	不明	無	環状	中央(小柱)	有	有	22号を切る	入来Ⅱ	石皿　磨鏃　軽石　敲石　砥石
22	長方形	25.44	1	2？	二本柱	南端(小柱)	有	不明	21号に切られる	蓋	棒敲石
23	円形	22.55	不明	不明	四本柱	中央　西端	有	有	無	入来Ⅱ？	
24	方形	5.52	不明	3	二本柱	西端	無	無	無	入来Ⅱ	
25	長方形ｂ	10.17	不明	2	二本柱	中央　南端	有	無	無	入来Ⅱ	異形石器　砥石
26	円形	38.9	不明	無	環状	中央(小柱)	有	有	有	入来Ⅱ　鉢	磨鏃　石庖丁　軽石　棒敲石 打斧
27	方形ｃ	(6.78)	不明	不明	六本柱？	西北端	無	無	無	入来Ⅱ　粗鉢	
28	円形	21.22	不明	無	二本柱・多柱	中央	無	無	不明	入来Ⅱ	打鏃　軽石　砥石
29	長方形(不整)	15.75	2	無	不特定	無	無	無	無	山ノ口Ⅱ	石皿
30	長方形	13.53	2	2	二本柱	無	有	無	無	山ノ口Ⅱ　入来Ⅱ　平行沈線文 壺	軽石
31	長方形	12.18	不明	無	二本柱・壁柱	西南端(小柱)	有	無横穴	有	入来Ⅱ	磨鏃　軽石
32	長方形ｂ	5.80	不明	無	二本柱	南端(小柱)	有	無	無	山ノ口Ⅱ？　高坏	
33	円形	40.24	不明	3	環状・多柱	中央(小柱)	有	有	有	山ノ口Ⅱ　小壺　大甕　異形鉢	土製勾玉　磨鏃　打斧 棒敲石砥石石皿軽石
34	長方形ｃ	4.5	不明	無	八本柱	無	無	無	無人為埋	入来Ⅱ	
35	長方形	7.8	1	2	二本柱	無	一部	無	有	山ノ口Ⅱ？	
36	長方形	(5.16)	不明	不明	二本柱	不明	有	不明	無	入来Ⅱ	
37	不明	(2.52)	2？	不明	不特定	不明	不明	不明	不明	山ノ口Ⅱ	砥石
38	長方形	2.72	2	無	不特定	西端	有	無	不明	山ノ口Ⅱ　小型甕	
39	長方形	9.85	3？	1？	二本柱？	南端(小柱)?	不明	無	有	山ノ口Ⅱ	
40	長方形	14.31	不明	無	二本柱	南端	部分	有	無	山ノ口Ⅱ　異形鉢	砥石　横刃型石器
41	凹形	15.84	不明	2	二本柱	無	有	無	有	山ノ口Ⅱ	土製勾玉　敲砥石　磨石
42	方形	8.61	不明	無	一本柱・多柱	南端	無(硬化面)	有	無	入来Ⅱ	
43	円形	33.78	不明	無	環状	中央(小柱)	有	無	有	入来Ⅱ	磨鏃　円盤形土製品
44	長方形	11.2	不明	無	二本柱	南端(小柱)	有	有	無	山ノ口Ⅱ　入来Ⅱ	打鏃　軽石　敲石
45	円形	32.15	不明	無	環状	中央(小柱)	有	有	有	入来Ⅱ　蓋	炭化木材 磨鏃　砥石　石皿

※長方形ｂ：二本柱が壁に接している。

※方形ｃ：柱が壁沿いに建てられている。

※遺物の強調は，床面から出土したものを指す。

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（27）
東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良 ＪＣＴ）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

永吉天神段遺跡５
第２地点-３
第　２　分　冊

発 行 年 月　　２０２０年２月
編集・発行　　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-70-0574　　FAX　0995-70-0576
印　刷　所　　株式会社トライ社
〒892-0834　鹿児島市南林寺町12-6
TEL　099-226-0815　　FAX　099-225-7933



鹿児島県